静岡県埋蔵文化財センター調査報告　第 43 集

寺家前遺跡 Ⅲ

第二東名 No. 81 地点

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

藤枝市－7

古墳時代後期編

２０１４

中日本高速道路株式会社東京支社

静岡県埋蔵文化財センター

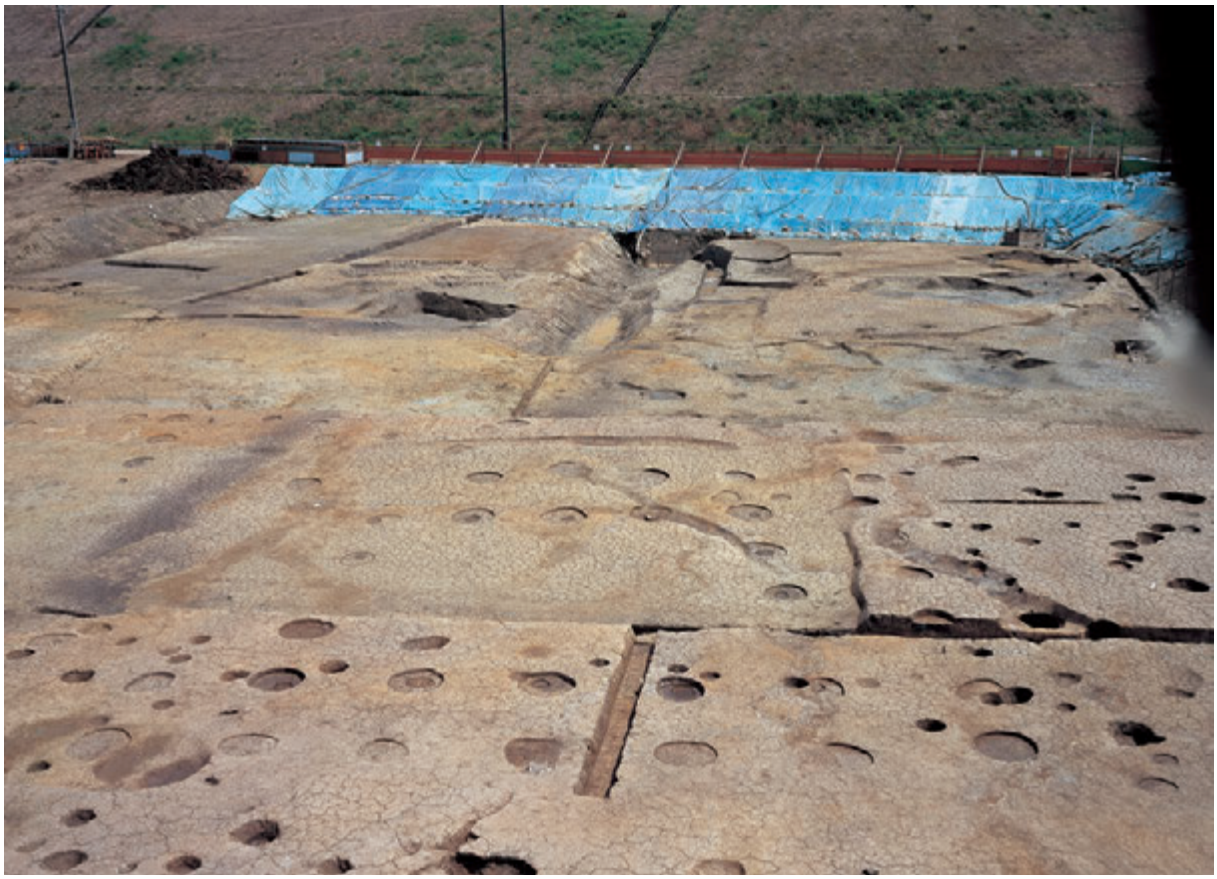
1. 寺家前遺跡遠景 1（北西から）

2. 寺家前遺跡遠景 2（西から）

巻頭図版２

1. E-3区竪穴住居群・掘立柱建物群（北西から）

2. E-3区竪穴住居 SB303・SB308（南東から）



1. E-2区掘立柱建物群（西から）

2. E-3区掘立柱建物群（北東から）

巻頭図版４

1. E-3区流路 SR9526全景（北西から）

2. E-3区流路 SR9526遺物出土状況１（北西から）

E-3区流路 SR9526遺物出土状況２（北西から）

巻頭図版６

SR9526 出土土器集合

焼き歪み・熔着須恵器集合

巻頭図版 8

包含層出土須恵器集合

静岡県埋蔵文化財センター調査報告　第 43 集

寺家前遺跡 Ⅲ

第二東名 No. 81 地点

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

藤枝市－7

古墳時代後期編

２０１４

中日本高速道路株式会社東京支社

静岡県埋蔵文化財センター

序

静岡県内の第二東名高速道路建設工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査は18年を経過しました。藤枝市域では助宗古窯群・寺島大谷遺跡・寺島大谷古墳や、衣原古墳群・衣原遺跡・衣原古窯群、寺家前遺跡、中ノ合イセ山遺跡・中ノ合イセ山古墳群・中ノ合遺跡、入野東古墳群・入野高岸古窯群などの調査が実施され、発掘調査報告書も順次刊行されてきました。寺家前遺跡の本報告は『寺家前遺跡Ⅰ』、『寺家前遺跡Ⅱ』に続く３冊目の報告書となります。

既に刊行した報告書で検討されているとおり、11世紀末から13世紀代にかけて当地に築かれた屋敷地は葉梨荘領主層のものであった可能性が高いことがわかりました。「花押」の書かれた土器は屋敷地の主を表すものとして注目されました。また奈良・平安時代には条里制水田が当地にまで及んでいたことがわかりました。これまで詳しい実態が明らかではなかった藤枝市北東部の葉梨地区の歴史に、あらたな一石を投じる成果があったといえるでしょう。

今回はさらに時代を遡り、この地に初めて人の手による開発が入った弥生時代から古墳時代初頭の後、再び築かれた古墳時代後期の集落に係わる調査成果の報告です。古墳時代に入ると一旦途絶えた集落も、古墳時代後期に、またこの地へ戻り、山裾に竪穴住居や掘立柱建物、丘陵地には窯を築き、須恵器の生産を行っていました。そして近くの丘陵上には墓である古墳も築かれました。当時の人々が使っていた土器や石器、木製品、金属製品等の道具も数多く発見されました。

本書が、研究者のみならず、県民の皆様に広く活用され、地域の歴史を理解する一助となることを願います。

最後になりましたが、本発掘調査にあたり、中日本高速道路株式会社東京支社ほか、各関係機関の御援助、御理解をいただきました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

2014年3月

静岡県埋蔵文化財センター所長
勝　田　順　也

例言

1　本書は静岡県藤枝市中ノ合字寺家前に所在する寺家前遺跡（第二東名№.81 地点）の発掘調査報告書である。

2　調査は第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務として、中日本高速道路株式会社東京支社の委託を受け、静岡県教育委員会文化財保護課（旧静岡県教育委員会文化課）の指導のもと、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施し、平成 23 年度以降は、静岡県埋蔵文化財センターが同研究所の業務を引き継いで実施した。

3　寺家前遺跡（第二東名№.81 地点）の確認調査・本調査及び資料整理の期間は以下のとおりである。

確認調査その１　平成 12 年６～９月　調査対象面積 37,616 ㎡　実掘面積 1,006 ㎡

確認調査その２　平成 15 年９月～平成 16 年３月　調査対象面積 35,750 ㎡　実掘面積 1,665 ㎡

本調査Ⅰ期　平成 12 年 11 月～平成 13 年３月　調査対象面積 16,340 ㎡

本調査Ⅱ・Ⅲ期　平成 15 年９月～平成 19 年３月　調査対象面積 16,920 ㎡

資料整理　平成 19 年４月～平成 26 年３月

4　調査体制は『寺家前遺跡Ⅰ』の第１章第１節－２及び『寺家前遺跡Ⅱ』の例言に記したとおりである。

平成 25 年度

所長　勝田順也　　次長兼総務課長　南谷高久　　調査課長　中鉢賢治

主幹兼事業係長　前田雅人　　総務係長　大坪淳子

調査第一係長　及川　司　　第二係長　溝口彰啓　　主幹　富樫孝志　　主査　中川律子

5　本書の執筆は中川律子、平野吾郎、福島志野、鈴木三男他が行った。

6　本書の編集は静岡県埋蔵文化財センターが行った。

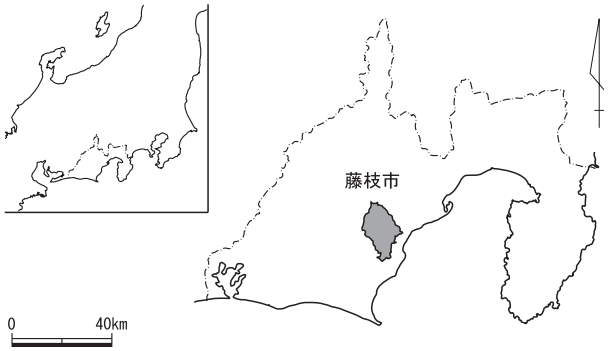
7　地形・基準点・空中写真測量業務委託　株式会社フジヤマ、基準点測量業務委託　大鐘測量、掘削・発掘作業・注記業務委託　三愛工業、トイレ遺構分析業務委託　古環境研究所、プラント・オパール分析・井戸遺構花粉・珪藻化石分析業務委託　パレオ・ラボ、放射性炭素年代測定業委託　㈱加速器分析研究所、自然科学分析・出土土器の胎土分析　パリノ・サーヴェイ株式会社、出土銅釧・銅環・耳環成分分析　㈱日鐵テクノリサーチ、出土鉄滓の分析・調査　JEF テクノリサーチ株式会社、木製品樹種同定業務委託　国立大学法人東北大学学術資源研究公開センター（鈴木三男）、整理作業・保存処理業務委託　株式会社パソナ、報告書印刷製本・発送業務委託　松本印刷株式会社

8　発掘調査では以下の方々に御指導、御助言を賜った。厚く御礼申し上げる。

伊藤延男　伊藤通玄　岩木智絵　黒坂貴裕　菊池吉修　篠原和大　柴田　稔　渋谷昌彦　鈴木三男　西尾太加二　長谷川　睦　早瀬　賢　向坂鋼二　八木勝行　山田昌久　山中敏史

（五十音順・敬称略）

9　発掘調査の資料は、すべて静岡県埋蔵文化財センターが保管している。



藤枝市の位置

凡例

本書の記載については、以下の基準に従い統一を図った。

1　本書で用いた遺構・遺物などの位置を表す座標は、すべて平面直角座標第Ⅷ系を用いた国土座標、日本測地系（改正前）を基準とした。

2　調査区の方眼設定は、上記の国土座標を基準に設定した。
№81 地点（Ｘ＝－ 121980，Ｙ＝－ 23160）＝（89I-5）

3　出土遺物は４桁の通し番号(＝遺物番号)を付して取り上げた。報告書中の挿図番号とは同一でない。

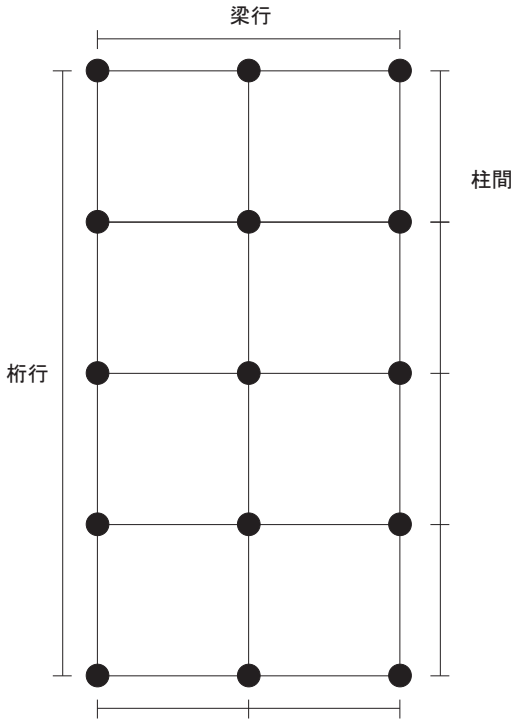
4　遺構図の縮尺は、遺構 1/50・1/80・1/1,000・1/2,000 を原則とし、それぞれにスケールを付した。

5　色彩に関する用語･記号は、新版『標準土色帳』（農林水産省技術会議事務局監修 1992）を使用した。

6　土層名は『寺家前遺跡Ⅰ』第１章第４節の基本土層柱状図（図８）に表示した名称を用いる。

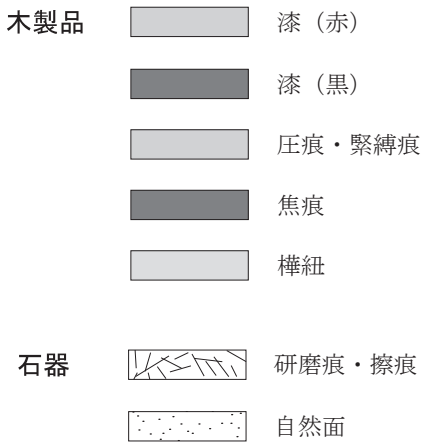
7　第１章第２節の周辺遺跡地図（図３・４）は国土地理院発行１:25,000 地形図「向谷」、「焼津」、「伊久美」、「静岡西部」を複写し加工・加筆した。

〈掘立柱建物〉



※柱根が残存している場合には●で表した

〈遺物〉



出土遺物の挿図番号は文中にゴシック体で示した。
（　）内の数字は同一遺物の別図上での挿図番号である。

目　次

巻頭図版
序
例言
凡例
目次
挿図目次・挿表目次・挿写真目次・図版目次

第１章　調査の概要
第１節　古墳時代遺構の調査概要 …… 1
第２節　検出された遺構 …… 4
第３節　微地形と遺構の広がり …… 6

第２章　調査の成果
第１節　遺構群の抽出と遺構の組合せ …… 13
　１　分類 …… 13
　２　建物群の組合せ …… 13
第２節　遺構各節 …… 18
　１　竪穴住居跡 …… 18
　２　掘立柱建物跡 …… 31
　３　柵 …… 55
　４　溝・流路 …… 55
　５　土坑・その他 …… 68
　６　水田跡 …… 74

第３章　出土遺物
第１節　遺物の概要と出土状況 …… 83
第２節　土師器 …… 84
　１　土師器の器種分類 …… 86
　２　遺構出土の土師器 …… 110
　３　包含層出土の土師器 …… 112
第３節　須恵器 …… 116
　１　須恵器の器種分類 …… 116
　２　遺構出土の須恵器 …… 124
　３　包含層出土の須恵器 …… 128
　４　出土土器の年代 …… 135
第４節　土製品その他 …… 138
　１　土製品 …… 138
　２　その他 …… 140

第４章　調査のまとめ
第１節　遺構群の年代的な継続と断絶 …… 141
第２節　出土須恵器と周辺の須恵器窯 …… 143
　１　出土須恵器の特徴 …… 143
　２　周辺の須恵器窯と寺家前遺跡 …… 143
第３節　遺構の年代と性格 …… 146
　１　寺家前遺跡集落の構造 …… 146
　２　建物群の構成 …… 146
　３　古墳時代豪族の居館 …… 146
　４　SH210　四面庇の建物について …… 149
　５　出土した遺物 …… 149
　６　焼け損じ、変形した須恵器の出土 …… 151
第４節　「駿東型の甕」の出現と終焉 …… 152
　１　駿東型の甕の資料 …… 152
　２　起源と終焉 …… 161
　３　まとめ …… 164

第５章　理化学分析
第１節　寺家前遺跡出土の弥生時代～古墳時代の木製品の樹種 …… 167
　１　寺家前遺跡で同定された全樹種 …… 167
　２　寺家前遺跡出土木材の樹種組成 …… 181
　３　スギ材の利用とその資源 …… 185
附編 …… 201

参考文献 …… 203
遺物観察表・遺構観察表 …… 205

写真図版

抄録

挿図目次

第１図　周辺遺跡分布図 …… 1
第２図　グリッド配置図 …… 5
第３図　遺跡全体図 …… 7
第４図　古墳時代後期地形図 …… 8
第５図　遺構配置図 …… 9
第６図　E-2 区全体図 (1) …… 10
第７図　E-2 区全体図 (2) …… 11
第８図　E-3 区全体図 …… 12
第９図　Ⅰ群配置図 …… 14
第 10 図　Ⅱ -1 群配置図 …… 15
第 11 図　Ⅱ -2 群配置図 …… 16
第 12 図　SB204 実測図 …… 19
第 13 図　SB217 実測図 …… 19
第 14 図　SB204・SB217 出土土器実測図 …… 20

第 15 図　SB301 実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 21
第 16 図　SB302 実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 23
第 17 図　SB303 実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 25
第 18 図　SB301・SB302・SB303 出土土器実測図・・・ 26
第 19 図　SB304 実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 27
第 20 図　SB305 実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 28
第 21 図　SB307 実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 29
第 22 図　SB308 実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 30
第 23 図　SB304・SB305・SB307・SB308 出土土器実測図
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 31
第 24 図　SH203 実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 32
第 25 図　SH210 実測図１ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 33
第 26 図　SH210 実測図２ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 34
第 27 図　SH210 実測図３ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 35
第 28 図　SH209・SH211 実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 36
第 29 図　SH217 実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 37
第 30 図　SH311 実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 38
第 31 図　SH312 実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 39
第 32 図　SH313・SH314 実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 40
第 33 図　SH315 実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 41
第 34 図　SH316・SH317 実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 42
第 35 図　SH318・SH319 実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 43
第 36 図　SH320・SH322 実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 44
第 37 図　SH323 実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 45
第 38 図　SH324 実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 46
第 39 図　SH325・SH327 実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 47
第 40 図　SH328 実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 48
第 41 図　SH329 実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 49
第 42 図　SH330・SH331 実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 50
第 43 図　SH332 実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 51
第 44 図　SH333 実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 52
第 45 図　SH337・SH338 実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 53
第 46 図　SH339 実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 54
第 47 図　掘立柱建物出土土器実測図 ・・・・・・・・・・・ 55
第 48 図　SA201・SA202・SA301 実測図・・・・・・・・・・・ 56
第 49 図　SD9500 実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 57
第 50 図　SD9500 出土土器実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 58
第 51 図　SD6290 実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 58
第 52 図　SA203・SD6289 実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 59
第 53 図　SD6289・SD6290 出土土器実測図 ・・・・・・・ 60
第 54 図　SR9526 実測図１ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 62
第 55 図　SR9526 実測図２ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 63
第 56 図　SR9526 実測図３ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 64
第 57 図　SR9526 出土土器実測図１ ・・・・・・・・・・・・・ 65
第 58 図　SR9526 出土土器実測図２ ・・・・・・・・・・・・・ 66
第 59 図　SR9526 出土土器実測図３ ・・・・・・・・・・・・・ 67
第 60 図　SR9526 出土土器実測図４ ・・・・・・・・・・・・・ 68
第 61 図　SR9526 出土土器実測図５ ・・・・・・・・・・・・・ 69
第 62 図　SR9526 出土土器実測図６ ・・・・・・・・・・・・・ 70
第 63 図　SF240・SF2595・SF9305・SF9607・SF9634・
SF9848 実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 71
第 64 図　SX541・SX605 実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 72
第 65 図　SX541・SX605・SF240 出土土器実測図・・・ 73
第 66 図　水田遺構配置図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 74
第 67 図　E-1 区土層堆積状況図 ・・・・・・・・・・・・・・ 75
第 68 図　E-3 区土層堆積状況図１ ・・・・・・・・・・・・・・ 75
第 69 図　E-3 区土層堆積状況図２ ・・・・・・・・・・・・・・ 76
第 70 図　SK419・SD420・SD421・SK5010 実測図・・・ 77
第 71 図　SK419・SD420・SD421 出土土器実測図・・・ 78
第 72 図　SK6662 実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 79
第 73 図　E-4 区土層堆積状況図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 80
第 74 図　水田域出土土器実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 81
第 75 図　住居・建物新旧関係図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 82
第 76 図　グリッド別土器出土分布図 ・・・・・・・・・・・・ 83
第 77 図　土師器分類図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 85
第 78 図　出土土師器実測図１（坏 A1 類） ・・・・・・・・ 86
第 79 図　出土土師器実測図２（坏 A2 類） ・・・・・・・・ 87
第 80 図　出土土師器実測図３（坏Ｂ類） ・・・・・・・・ 88
第 81 図　出土土師器実測図４（坏Ｂ類） ・・・・・・・・ 89
第 82 図　出土土師器実測図５（坏 C1 類） ・・・・・・・・ 90
第 83 図　出土土師器実測図６（坏 C2 類） ・・・・・・・・ 91
第 84 図　出土土師器実測図７（坏Ｄ類） ・・・・・・・・・ 91
第 85 図　出土土師器実測図８（高坏） ・・・・・・・・・・ 92
第 86 図　出土土師器実測図９（鉢Ａ・Ｂ類） ・・・・・ 94
第 87 図　出土土師器実測図 10（鉢Ｃ・Ｄ類）・・・・・ 95
第 88 図　出土土師器実測図 11（壷・鍋） ・・・・・・・・ 96
第 89 図　出土土師器実測図 12（甕Ａ類） ・・・・・・・・ 96
第 90 図　出土土師器実測図 13（甕Ｂ類） ・・・・・・・・ 97
第 91 図　出土土師器実測図 14（甕 C1 類） ・・・・・・・・ 98
第 92 図　出土土師器実測図 15（甕 C2 類） ・・・・・・・・ 99
第 93 図　出土土師器実測図 16（甕 D1 類） ・・・・・・・・ 100
第 94 図　出土土師器実測図 17（甕 D1 類） ・・・・・・・・ 101
第 95 図　出土土師器実測図 18（甕 D2 類） ・・・・・・・・ 102
第 96 図　出土土師器実測図 19（甕 D2 類） ・・・・・・・・ 103
第 97 図　出土土師器実測図 20（甕 D2 類） ・・・・・・・・ 104
第 98 図　出土土師器実測図 21（甕 D3 類） ・・・・・・・・ 105

第 99 図　出土土師器実測図 22（甑 A1 類）…… 106
第 100 図　出土土師器実測図 23（甑 A2 類）…… 107
第 101 図　出土土師器実測図 24（甑 A2・B1・B2 類）
…… 108
第 102 図　出土土師器実測図 25
（ミニチュア土器・赤彩土器）…… 109
第 103 図　SR9526 出土土師器器種組成図 …… 110
第 104 図　出土須恵器実測図１（坏蓋Ａ・Ｂ類）… 117
第 105 図　出土須恵器実測図２（坏蓋Ｃ類）…… 118
第 106 図　出土須恵器実測図３（坏身Ａ類）…… 119
第 107 図　出土須恵器実測図４（坏身Ａ・Ｂ類）… 120
第 108 図　出土須恵器実測図５（坏身Ｂ類）…… 121
第 109 図　出土須恵器実測図６（高坏）…… 122
第 110 図　出土須恵器実測図７（高坏）…… 123
第 111 図　出土須恵器実測図８（碗・盌・陶臼）… 124
第 112 図　出土須恵器実測図９（壷・甕）…… 125
第 113 図　出土須恵器実測図 10（提瓶）…… 126
第 114 図　出土須恵器実測図 11（平瓶）…… 127
第 115 図　出土須恵器実測図 12（横瓶）…… 128
第 116 図　出土須恵器実測図 13（横瓶）…… 129
第 117 図　出土須恵器実測図 14（甕）…… 130
第 118 図　出土須恵器実測図 15（甕）…… 131
第 119 図　出土須恵器実測図 16（甑・熔着資料）… 132
第 120 図　SR9526 出土須恵器器種組成図 …… 133
第 121 図　須恵器編年対比図 …… 136
第 122 図　出土土器編年図 …… 137
第 123 図　出土土製品実測図 …… 139
第 124 図　寺家前遺跡・衣原遺跡群古墳時代後期全体図
…… 142
第 125 図　静岡県内須恵器窯跡分布図 …… 143
第 126 図　入野高岸古窯群・衣原１号窯出土須恵器
実測図 …… 145
第 127 図　掘立柱建物規模一覧図 …… 148
第 128 図　横山遺跡集落中央部掘立柱建物配置概念図
…… 149
第 129 図　坂尻遺跡古墳時代集落構成概念図 …… 150
第 130 図　SR9526 上層・下層出土土器実測図 …… 153
第 131 図　神明原・元宮川遺跡宮川３区
SX481 出土土器実測図…… 154
第 132 図　中島下舞台遺跡 17 号住居出土土器実測図
…… 155
第 133 図　藤守遺跡 SB03・SB06 出土土器実測図 … 156
第 134 図　横山遺跡 SB104 出土土器実測図 …… 157
第 135 図　伊豆逓信病院敷地内遺跡４・23 号住居出土
土器実測図 …… 159
第 136 図　三新田遺跡 A01・A03・A22 住居出土土器
実測図 …… 160
第 137 図　天間代山遺跡７号住居出土土器実測図
…… 162
第 138 図　出土碁石実測図 …… 201
第 139 図　出土鉄鏃訂正図 …… 201

挿表目次

第１表　周辺遺跡消長表 …… 2
第２表　出土土師器器種組成表 …… 84
第３表　出土須恵器器種組成表 …… 116
第４表　葉梨川流域の集落継続変遷表 …… 141
第５表　静岡県内窯跡消長表 …… 144
第６表　出土木製品の樹種組成 …… 182
第７表　出土木製品の用途別樹種組成 …… 183
第８表　寺家前遺跡におけるスギ材の時期別用途
…… 185
第９表　『寺家前遺跡Ⅰ』・『寺家前遺跡Ⅱ』正誤表
…… 202
第 10 表　出土土器観察表 …… 205
第 11 表　出土鞴（羽口）観察表 …… 223
第 12 表　出土土錘観察表 …… 223
第 13 表　出土用途不明土製品観察表 …… 223
第 14 表　出土紡錘車観察表 …… 223
第 15 表　出土自然遺物一覧表 …… 224
第 16 表　出土木製品観察表 …… 225
第 17 表　竪穴住居計測表 …… 238
第 18 表　掘立柱建物計測表 …… 238
第 19 表　遺構観察表 …… 239

挿写真目次

写真１　地元自治会説明１ …… 3
写真２　地元自治会説明２ …… 3
写真３　現地説明会１ …… 3
写真４　現地指導１ …… 3
写真５　焼津市立豊田小学校見学１ …… 3
写真６　焼津市立豊田小学校見学２ …… 3
写真７　現地指導２ …… 3
写真８　現地指導３ …… 3
写真９　現地指導４ …… 3
写真 10　現地指導５ …… 3
写真 11　藤枝市立葉梨中学校見学１ …… 3
写真 12　藤枝市立葉梨中学校見学２ …… 3
写真 13　現地説明会２ …… 4
写真 14　現地説明会３ …… 4
写真 15　藤枝地区小学校社会科研修１ …… 4
写真 16　藤枝市立中央小学校見学 …… 4
写真 17　藤枝市立葉梨中学校見学 …… 4
写真 18　現地説明会４ …… 4
写真 19　出土木材顕微鏡写真１ …… 187
写真 20　出土木材顕微鏡写真２ …… 188
写真 21　出土木材顕微鏡写真３ …… 189
写真 22　出土木材顕微鏡写真４ …… 190
写真 23　出土木材顕微鏡写真５ …… 191
写真 24　出土木材顕微鏡写真６ …… 192
写真 25　出土木材顕微鏡写真７ …… 193
写真 26　出土木材顕微鏡写真８ …… 194
写真 27　出土木材顕微鏡写真９ …… 195
写真 28　出土木材顕微鏡写真 10 …… 196
写真 29　出土木材顕微鏡写真 11 …… 197
写真 30　出土木材顕微鏡写真 12 …… 198
写真 31　出土木材顕微鏡写真 13 …… 199
写真 32　出土木材顕微鏡写真 14 …… 200

写真図版目次

巻頭図版

巻頭図版１　１．寺家前遺跡遠景１（北西から）
　　２．寺家前遺跡遠景２（西から）
巻頭図版２　１．E-3 区竪穴住居群・掘立柱建物群（北西から）
　　２．E-3 区竪穴住居 SB303・SB308（南東から）
巻頭図版３　１．E-2 区掘立柱建物群（西から）
　　２．E-3 区掘立柱建物群（北東から）
巻頭図版４　１．E-3 区流路 SR9526 全景（北西から）
　　２．E-3 区流路 SR9526 遺物出土状況１（北西から）
巻頭図版５　E-3 区流路 SR9526 遺物出土状況２（北西から）
巻頭図版６　SR9526 出土土器集合
巻頭図版７　焼き歪み・熔着須恵器集合
巻頭図版８　包含層出土須恵器集合

図版

図版１　古墳時代後期調査面全景
図版２　１．E-2 区古墳時代後期面遠景（北から）
　　２．E-2 区古墳時代後期面全景
図版３　１．E-3 区古墳時代後期面遠景（南東から）
　　２．E-3 区古墳時代後期面全景（北から）
図版４　１．E-4 区古墳時代後期面遠景
　　２．E-4 区古墳時代後期面全景（北西から）
図版５　１．E-5 区古墳時代後期面遠景（南東から）
　　２．E-5 区古墳時代後期面全景
図版６　１．E-2 区竪穴住居 SB204 完掘状況（北から）
　　２．E-2 区竪穴住居 SB204 床面検出状況（東から）
　　３．E-2 区竪穴住居 SB204 壁溝完掘状況（南から）
　　４．E-2 区竪穴住居 SB204 竈内土層堆積状況（北東から）
　　５．E-2 区竪穴住居 SB204 遺物出土状況（南西から）
図版７　１．E-2 区竪穴住居 SB217 完掘状況（南西から）
　　２．E-2 区竪穴住居 SB217 床面検出状況（北東から）
　　３．E-2 区竪穴住居 SB217 床面土層堆積状況（南から）

４．E-2 区竪穴住居 SB217 遺物出土状況
５.E-2 区竪穴住居SB217 竈完掘状況(南西から)
図版８　１．E-3 区竪穴住居 SB301 検出状況（東から）
２．E-3 区竪穴住居 SB301 床面検出状況
（東から）
３．E-3 区竪穴住居 SB301 完掘状況（東から）
４．E-3 区竪穴住居 SB301 竈検出状況 (東から)
５．E-3 区竪穴住居 SB301 竈完掘状況 (東から)
図版９　１．E-3 区竪穴住居 SB302 完掘状況（東から）
２．E-3 区竪穴住居 SB302 竈完掘状況 (東から)
３．E-3 区竪穴住居 SB302 遺物出土状況
（南東から）
４．E-3 区竪穴住居 SB302 柱穴 SP9830 礎板
５．E-3 区竪穴住居 SB302 柱穴 SP9830
図版10　１．E-3 区竪穴住居 SB303 床面検出状況
（南東から）
２.E-3 区竪穴住居SB303 竈完掘状況(南東から)
３.E-3 区竪穴住居SB303 竈完掘状況(北東から)
４．E-3 区竪穴住居 SB303 竈内土層堆積状況
（南から）
５．E-3 区竪穴住居 SB303 柱穴 SP9726
遺物出土状況
図版11　１．E-3 区竪穴住居 SB304 検出状況 (南西から)
２．E-3 区竪穴住居 SB304 完掘状況 (南西から)
３．E-3 区竪穴住居 SB304 竈残存部分 (南から)
４．E-3 区竪穴住居 SB304 柱穴 SP9771
５．E-3 区竪穴住居 SB304 柱穴 SP9773
図版12　１．E-3 区竪穴住居 SB305 完掘状況（東から）
２．E-3 区竪穴住居 SB305 竈検出状況 (東から)
３．E-3 区竪穴住居 SB305 竈内土層堆積状況
（北から）
４．E-3 区竪穴住居 SB305 竈完掘状況 (東から)
５．E-3 区竪穴住居 SB305 柱穴 SP9410
図版 13　１．E-3 区竪穴住居 SB307 完掘状況 (南東から)
２．E-3 区竪穴住居 SB307 竈完掘状況 (東から)
３．E-3 区竪穴住居 SB307 柱穴 SP9837
４．E-3 区竪穴住居 SB307 柱穴 SP9836
５．E-3 区竪穴住居 SB307 柱穴 SP9838
図版14　１．E-3 区竪穴住居 SB308 検出状況 (南東から)
２.E-3 区竪穴住居SB308 竈完掘状況(南東から)
３．E-3 区竪穴住居 SB308 竈内土層堆積状況
（南東から）
４.E-3 区竪穴住居SB308 竈検出状況(南東から)
５．E-3 区竪穴住居 SB308 竈煙道部 (北西から)
図版15　１．E-2 区掘立柱建物 SH203 全景１
２．E-2 区掘立柱建物 SH203 全景２（北から）
３．E-2 区掘立柱建物 SH203 柱穴 SP6065
４．E-2 区掘立柱建物 SH203 柱穴 SP6058
５．E-2 区掘立柱建物 SH203 柱穴 SP6064
図版16　１．E-2 区掘立柱建物 SH209 全景１
２．E-2 区掘立柱建物 SH209 全景２（南東から）
３．E-2 区掘立柱建物 SH209 柱穴 SP6370
４．E-2 区掘立柱建物 SH209 柱穴 SP6371
５．E-2 区掘立柱建物 SH209 柱穴 SP6088
図版17　１．E-2 区掘立柱建物 SH210 全景
２．E-2 区掘立柱建物 SH210 柱穴 SP6105 礎板
３．E-2 区掘立柱建物 SH210 柱穴 SP6105
４．E-2 区掘立柱建物 SH210 柱穴 SP6110
５．E-2 区掘立柱建物 SH210 柱穴 SP6109
図版18　１．E-2 区掘立柱建物 SH211 全景１
２．E-2 区掘立柱建物 SH211 全景２（東から）
３．E-2 区掘立柱建物 SH211 柱穴 SP6114
半截状況
４．E-2 区掘立柱建物 SH211 柱穴 SP6114
５．E-2 区掘立柱建物 SH211 柱穴 SP6115
図版19　１．E-3 区掘立柱建物 SH311 全景（北東から）
２．E-3 区掘立柱建物 SH311 柱穴 SP9509
３．E-3 区掘立柱建物 SH311 柱穴 SP9507
４．E-3 区掘立柱建物 SH311 柱穴 SP9491
５．E-3 区掘立柱建物 SH311 柱穴 SP9721
図版20　１．E-3 区掘立柱建物 SH312 全景（北東から）
２．E-3 区掘立柱建物 SH312 柱穴 SP9713
３．E-3 区掘立柱建物 SH312 柱穴 SP9711
４．E-3 区掘立柱建物 SH312 柱穴 SP9516
５．E-3 区掘立柱建物 SH312 柱穴 SP9559
図版21　１．E-3 区掘立柱建物 SH313 全景（北東から）
２．E-3 区掘立柱建物 SH313 柱穴 SP9392
３．E-3 区掘立柱建物 SH313 柱穴 SP9389
４．E-3 区掘立柱建物 SH313 柱穴 SP9393
５．E-3 区掘立柱建物 SH313 柱穴 SP9390
図版22　１．E-3 区掘立柱建物 SH314 全景（南から）
２．E-3 区掘立柱建物 SH314 柱穴 SP9518
・9519
３．E-3 区掘立柱建物 SH314 柱穴 SP9383
・9713
４．E-3 区掘立柱建物 SH314 柱穴 SP9382

５．E-3 区掘立柱建物 SH314 柱穴 SP9712
図版23　１．E-3 区掘立柱建物 SH315・316・318 全景（南東から）
２．E-3 区掘立柱建物 SH315 柱穴 SP9350
３．E-3 区掘立柱建物 SH315 柱穴 SP9249
４．E-3 区掘立柱建物 SH315 柱穴 SP9246
５．E-3 区掘立柱建物 SH315 柱穴 SP9223
図版24　１．E-3 区掘立柱建物 SH316 柱穴 SP9624
２．E-3 区掘立柱建物 SH316 柱穴 SP9242
３．E-3 区掘立柱建物 SH316 柱穴 SP9251
４．E-3 区掘立柱建物 SH316 柱穴 SP9245
５．E-3 区掘立柱建物 SH318 柱穴 SP9226
６．E-3 区掘立柱建物 SH318 柱穴 SP9626
７．E-3 区掘立柱建物 SH318 柱穴 SP9672
８．E-3 区掘立柱建物 SH318 柱穴 SP9352
図版25　１．E-3 区掘立柱建物 SH317 全景（南東から）
２．E-3 区掘立柱建物 SH317 柱穴 SP9355
３．E-3 区掘立柱建物 SH317 柱穴 SP9252
４．E-3 区掘立柱建物 SH317 柱穴 SP9238
５．E-3 区掘立柱建物 SH317 柱穴 SP9253
図版26　１．E-3 区掘立柱建物 SH319・320 全景
２．E-3 区掘立柱建物 SH319 柱穴 SP9497
３．E-3 区掘立柱建物 SH319 柱穴 SP9629
４．E-3 区掘立柱建物 SH320 柱穴 SP9231
５．E-3 区掘立柱建物 SH320 柱穴 SP9227
図版27　１．E-3 区掘立柱建物 SH322 全景（北東から）
２．E-3 区掘立柱建物 SH322 柱穴 SP9211
３．E-3 区掘立柱建物 SH322 柱穴 SP9208
４．E-3 区掘立柱建物 SH322 柱穴 SP9213
５．E-3 区掘立柱建物 SH322 柱穴 SP9218
図版28　１．E-3 区掘立柱建物 SH323 全景（北西から）
２．E-3 区掘立柱建物 SH323 柱穴 SP9462
３．E-3 区掘立柱建物 SH323 柱穴 SP9464
４．E-3 区掘立柱建物 SH323 柱穴 SP9436
５．E-3 区掘立柱建物 SH323 柱穴 SP9468
図版29　１．E-3 区掘立柱建物 SH324 全景（東から）
２．E-3 区掘立柱建物 SH324 柱穴 SP9457
３．E-3 区掘立柱建物 SH324 柱穴 SP9463
４．E-3 区掘立柱建物 SH324 柱穴 SP9796
５．E-3 区掘立柱建物 SH324 柱穴 SP9474
図版30　１．E-3 区掘立柱建物 SH325 全景（南から）
２．E-3 区掘立柱建物 SH325 柱穴 SP9410
３．E-3 区掘立柱建物 SH325 柱穴 SP9843
４．E-3 区掘立柱建物 SH325 柱穴 SP9807
５．E-3 区掘立柱建物 SH325 柱穴 SP9565
図版31　１．E-3 区掘立柱建物 SH327 全景（西から）
２．E-3 区掘立柱建物 SH327 柱穴 SP9705
３．E-3 区掘立柱建物 SH327 柱穴 SP9689
４．E-3 区掘立柱建物 SH327 柱穴 SP9706
５．E-3 区掘立柱建物 SH327 柱穴 SP9709
図版32　１．E-3 区掘立柱建物 SH328 全景（東から）
２．E-3 区掘立柱建物 SH328 柱穴 SP9659 柱根
３．E-3 区掘立柱建物 SH328 柱穴 SP9659
４．E-3 区掘立柱建物 SH328 柱穴 SP9664
５．E-3 区掘立柱建物 SH328 柱穴 SP9379
図版33　１．E-3 区掘立柱建物 SH329 全景（東から）
２．E-3 区掘立柱建物 SH329 東側柱穴群（南から）
３．E-3 区掘立柱建物 SH329 柱穴 SP9301
４．E-3 区掘立柱建物 SH329 柱穴 SP9319
５．E-3 区掘立柱建物 SH329 柱穴 SP9293
図版34　１．E-3 区掘立柱建物 SH330 全景（南から）
２．E-3 区掘立柱建物 SH330 柱穴 SP9311 柱根
３．E-3 区掘立柱建物 SH330 柱穴 SP9311
４．E-3 区掘立柱建物 SH330 柱穴 SP9308
５．E-3 区掘立柱建物 SH330 柱穴 SP9734
図版35　１．E-3 区掘立柱建物 SH331 全景（南から）
２．E-3 区掘立柱建物 SH331 柱穴 SP9748
３．E-3 区掘立柱建物 SH331 柱穴 SP10480
４．E-3 区掘立柱建物 SH331 柱穴 SP10478
５．E-3 区掘立柱建物 SH331 柱穴 SP9317
図版36　１．E-3 区掘立柱建物 SH332 全景（東から）
２．E-3 区掘立柱建物 SH332 柱穴 SP9760
３．E-3 区掘立柱建物 SH332 柱穴 SP9295
４．E-3 区掘立柱建物 SH332 柱穴 SP9316
５．E-3 区掘立柱建物 SH332 柱穴 SP9321
図版37　１．E-3 区掘立柱建物 SH333 全景（南から）
２．E-3 区掘立柱建物 SH333 柱穴 SP9816
３．E-3 区掘立柱建物 SH333 柱穴 SP9788
４．E-3 区掘立柱建物 SH333 柱穴 SP9262
５．E-3 区掘立柱建物 SH333 柱穴 SP9260
図版38　１．E-3 区掘立柱建物 SH338 全景（東から）
２．E-3 区掘立柱建物 SH337 全景（南東から）
３．E-3 区掘立柱建物 SH338 柱穴 SP10023
４．E-3 区掘立柱建物 SH338 柱穴 SP10012
５．E-3 区掘立柱建物 SH338 柱穴 SP10016
図版39　１．E-3 区掘立柱建物 SH339 全景（南東から）

２．E-3 区掘立柱建物 SH339 柱穴 SP10055
３．E-3 区掘立柱建物 SH339 柱穴 SP10061
４．E-3 区掘立柱建物 SH339 柱穴 SP10057
５．E-3 区掘立柱建物 SH339 柱穴 SP10059
図版40　１．E-2 区柵列 SA201 全景
２．E-2 区柵列 SA201 柱穴 SP6077
３．E-2 区柵列 SA201 柱穴 SP6238
４．E-2 区柵列 SA201 柱穴 SP6465
５．E-2 区柵列 SA201 柱穴 SP6083
図版41　１．E-2・3 区柵列 SA202 全景
２．E-2・3 区柵列 SA202 柱穴 SP9600
３．E-2・3 区柵列 SA202 柱穴 SP9588
４．E-2・3 区柵列 SA202 柱穴 SP9592
５．E-3 区柵列 SA301 全景（北西から）
図版42　１．E-2・3 区溝 SD9500 全景
２．E-2・3 区溝 SD9500 遺物出土状況（東から）
３．E-2・3 区溝 SD9500 土層堆積状況 1(南から)
４．E-2・3 区溝 SD9500 土層堆積状況 2
（北東から）
図版43　１．E-3 区自然流路 SR9526 土層堆積状況 1
（東から）
２．E-3 区自然流路 SR9526 土層堆積状況 2
（北西から）
３．E-3 区自然流路 SR9526 遺物出土状況 1
（南東から）
４．E-3 区自然流路 SR9526 遺物出土状況 2
（北西から）
５．E-3 区自然流路 SR9526 遺物出土状況 3
（北西から）
６．E-3 区自然流路 SR9526 完掘状況(北西から)
図版44　１．E-2 区溝 SD6290 遺物出土状況 1（東から）
２．E-2 区溝 SD6290 完掘状況（東から）
３．E-2 区溝 SD6290 遺物出土状況 2（北から）
４．E-2 区溝 SD6405 土層堆積状況（南から）
５．E-2 区溝 SD6289 土層堆積状況（南東から）
６．E-2 区溝 SD6405 完掘状況（北から）
図版45　１．E-1 区畔 SK419・SD420 全景（北から）
２．E-1 区溝 SD421 検出状況（北東から）
３．E-1 区溝 SD421 遺物出土状況
４．E-5 区畔 SK5010・SK422 検出状況(南西から)
５．E-5 区溝 SD10457 検出状況（南から）
図版46　１．E-3 区畔 SK9653 全景（南東から）
２．E-3 区畔 SK9653 検出状況（南西から）
３．E-2 区畔 SK6754 全景（北から）
４．E-2 区畔 SK6753 全景（南東から）
５．E-2 区畔 SK6754 完掘状況（南東から）
図版47　１．E-2 区畔 SK6773・SK6774・SK6662 全景
（西から）
２．E-2 区畔 SK6662 検出状況（東から）
３．E-2 区畔 SK6662 検出状況（東から）
４．E-2 区畔 SK6773 断面状況（南東から）
５．E-2 区畔 SK6774 検出状況（南東から）
図版48　１．E-3 区土坑 SF9607 土層堆積状況(南東から)
２．E-3 区土坑 SF9607 完掘状況（南東から）
３．E-3 区土坑 SF9305 完掘状況（東から）
４．E-2 区土坑 SF2595 遺物出土状況
５．A-2 区不明遺構 SX605 土層堆積状況
（北から）
６．A-2 区不明遺構 SX605 土層堆積状況
（北から）
７．A-1 区不明遺構 SX240 遺物出土状況
（東から）
８．A-1 区不明遺構 SX541 遺物出土状況
（東から）
図版49　SB204・SB217・SB302・SH324・SD9790
・SD6171 出土土器
図版50　SD9500・SD6290・SR8680・SR9526 出土土器
図版51　SR9526 出土土器 1
図版52　SR9526 出土土器 2
図版53　SR9526 出土土器 3
図版54　SP6213・SP6530・SK419・SD421・SX541
・SX605 出土土器
図版55　包含層出土土師器 1
図版56　包含層出土土師器 2
図版57　包含層出土土師器 3
図版58　包含層出土土師器 4
図版59　包含層出土土師器 5
図版60　包含層出土土師器 6
図版61　包含層出土土師器 7
図版62　包含層出土土師器 8
図版63　包含層出土土師器 9
図版64　包含層出土土師器 10
図版65　１．出土駿東甕集合
２．包含層出土土師器 11
図版66　包含層出土須恵器 1
図版67　包含層出土須恵器 2

図版68　包含層出土須恵器 3
図版69　包含層出土須恵器 4
図版70　包含層出土須恵器 5
図版71　包含層出土須恵器 6
図版72　包含層出土須恵器 7
図版73　包含層出土須恵器 8
図版74　包含層出土須恵器 9
図版75　包含層出土須恵器 10
図版76　包含層出土須恵器 11
図版77　包含層出土須恵器 12
図版78　包含層出土須恵器 13
図版79　包含層出土須恵器 14
図版80　包含層出土須恵器 15
図版81　出土羽口・土錘・紡錘車・板状土製品・碁石
図版82　１．出土ミニチュア土器集合
　　２．出土土製品集合

第１章　調査の概要

第１節　古墳時代遺構の調査概要

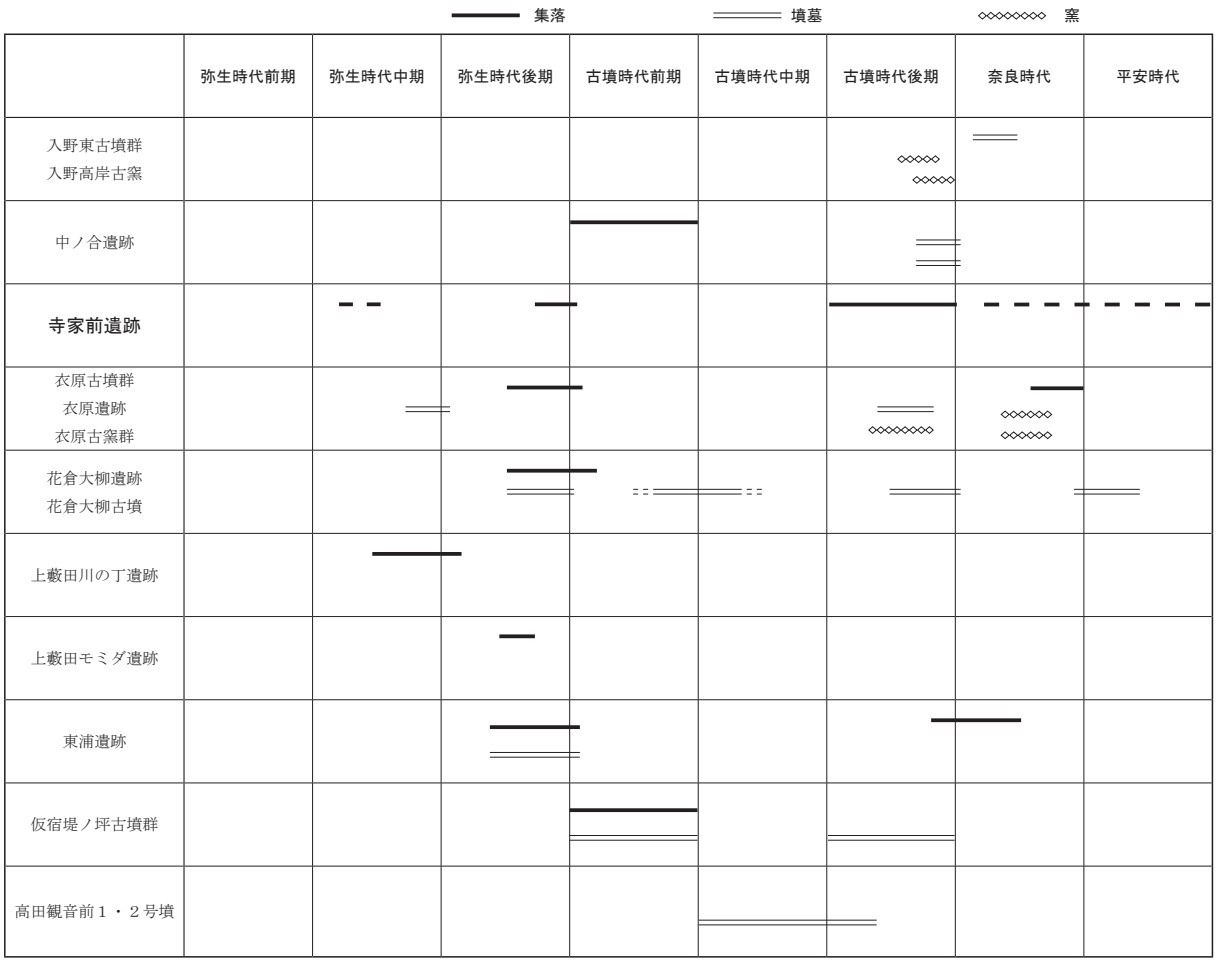
寺家前遺跡の本発掘調査に至る経緯は『寺家前遺跡Ⅰ（古代・中～近世編）』の第１章総論の第１節に詳しく記載している。また遺跡の所在する当地の地理的環境や周辺の歴史的環境についても同書の第１章第２節ですでに述べている。遺跡全体に係わる調査経過は同じく第１章第４節に経緯を記した。

本節では古墳時代遺構の調査概要を年度毎に解説する。平成 12 年度から平成 18 年度（途中、平成 14 年度中断）に渡る第二東名建設工事に伴う本発掘で得られた調査成果は大きく、藤枝市北東部地域に所在する周辺遺跡の年代や時期差などが明らかとなった（第１図）。その関連性を総観できるよう第１表に示した。また６年間の現地調査で開催した現地説明会や近隣学校等からの見学、有識者による調査指導を紹介する。

まず古墳時代遺構の調査は、本調査Ⅰ期として平成 12 年度に調査対象地の南半部にあたるＣ区、Ｂ

第１図　周辺遺跡分布図

第１表　周辺遺跡消長表



区北から始まり、続けてA-2南区とＢ区南をほぼ同時併行で調査した（『寺家前遺跡Ⅰ（古代・中～近世編）』図６）。Ｃ区では古墳時代に相当する遺構面は検出されなかった。Ｂ区北でも同時代の遺構は見られなかった。Ｂ区南では水田跡で２時期に分かれる大畔が見つかっている。水田覆土から小型の丸底坩等の古式土師器が出土している（『寺家前遺跡Ⅳ』第133図563）。しかし遺構に共伴する土器はきわめて少なく明確に古墳時代と判断はできなかった。平成13年度に入ると前年度に水田遺構の広がりを見せたA-1区とA-2区、A-2南区（№82地点Ｅ区を含む）を全面調査している。平成14年度は西側に隣接する衣原遺跡等の発掘調査のため、寺家前遺跡の本発掘調査は一時中断した。

本調査Ⅱ期として平成15年度から調査対象地の北側微高地での確認調査と併行しながらE-1区の本調査を開始した。微高地は狭い範囲であるが寺家山の丘陵裾に広がり、西から東にかけて緩く傾斜している。E-1区は微高地から外れた低湿地にあたり、平成16年度に下層で水田遺構が確認された。水田では杭列を伴う大畔と溝跡が検出され（第３図）、遺構覆土からは７世紀初頭の須恵器や土師器の坏が出土した（第74図192～202）。

本調査Ⅲ期は平成16～18年度にかけて、確認調査を行いながら、一部、本調査Ⅱ期と併行して行われたE-2区の調査とE-3区、E-4区、E-5区、Ｆ区の全工期終了まで実施した。E-2区とE-3区は丘陵裾の微高地上にあたり、古墳時代後期の集落遺構面が確認された（第４図）。E-2区の東側はE-1区に続く低湿地になっており杭列を伴う畔を検出している。E-3区でも東側は集落から一段下がった低湿地となっている。E-4区はE-1区の東隣に位置する。小畔などの水田遺構が検出されているが、年代を特定できるような出土遺物が少なく、古墳時代の面をとらえるのは困難であった。E-5区は現道部分の調

査で、E-5 区①と E-5 区②がある。前者は E-1 区と E-4 区の南側、後者は E-2 区の南側に繋がる調査区である。E-5 区①では E-1 区で検出した大畔と溝跡の延長部分が見つかっている。E-5 区②でも同じく E-1 区の溝跡の続きを検出した。集落域から北側の丘陵上に設定したＦ区では古墳時代の遺構面は確認されなかった。

６年間の全工期間中、本発掘調査の成果を広く周知するために当センター（旧：財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所）主催の現地説明会や見学会を実施している（写真１～ 18)。現地説明会は平成 16 年度に１回、平成 17 年度に１回、平成 18 年度には２回行われ、各回 150 人以上が寺家前遺跡を訪れた。

平成 13・16 年度

写真１　地元自治会説明１

写真２　地元自治会説明２

写真３　現地説明会１

平成 17 年度

写真４　現地指導１

写真５　焼津市立豊田小学校見学１

写真６　焼津市立豊田小学校見学２

写真７　現地指導２

写真８　現地指導３

写真９　現地指導４

写真 10　現地指導５

写真 11　藤枝市立葉梨中学校見学１

写真 12　藤枝市立葉梨中学校見学２

平成 18 年度

写真 13　現地説明会２

写真 14　現地説明会３

写真 15　藤枝地区小学校社会科研修１

写真 16　藤枝市立中央小学校見学

写真 17　藤枝市立葉梨中学校見学

写真 18　現地説明会４

特に地元である葉梨地区での関心は高く、現地説明会以外にも地元自治会を始めとして、近隣の葉梨小学校・葉梨中学校からの見学や発掘体験学習、藤枝市郷土博物館主催の社会科研修、中日本高速道路株式会社（旧：日本道路公団静岡建設局静岡工事事務所）主催の親子見学会など数多く行われ、検出した遺構や出土した遺物等の成果を実見してもらう機会を得た。

調査では発掘された遺構について、学識経験者からの所見を聞くなど調査指導を得た。調査指導はその後の調査の進行や発掘調査報告書の考察などに生かされている。

寺家前遺跡の本発掘調査にあたり、調査区のグリッド配置は第２図のように設定した。座標は平面直角座標第Ⅷ系を用いた国土座標、日本測地系（改正前）基準として方眼設定している。

第２節　検出された遺構

発掘調査で検出されたのは竪穴住居跡９棟・掘立柱建物跡 27 棟・柵あるいは塀・土坑・溝跡・水田跡など、古墳時代の集落を構成する遺構群である（第４図）。これらには西側の丘陵を水源とする小さな自然の流路も含まれている。流路内からは多量な土師器・須恵器が出土している。

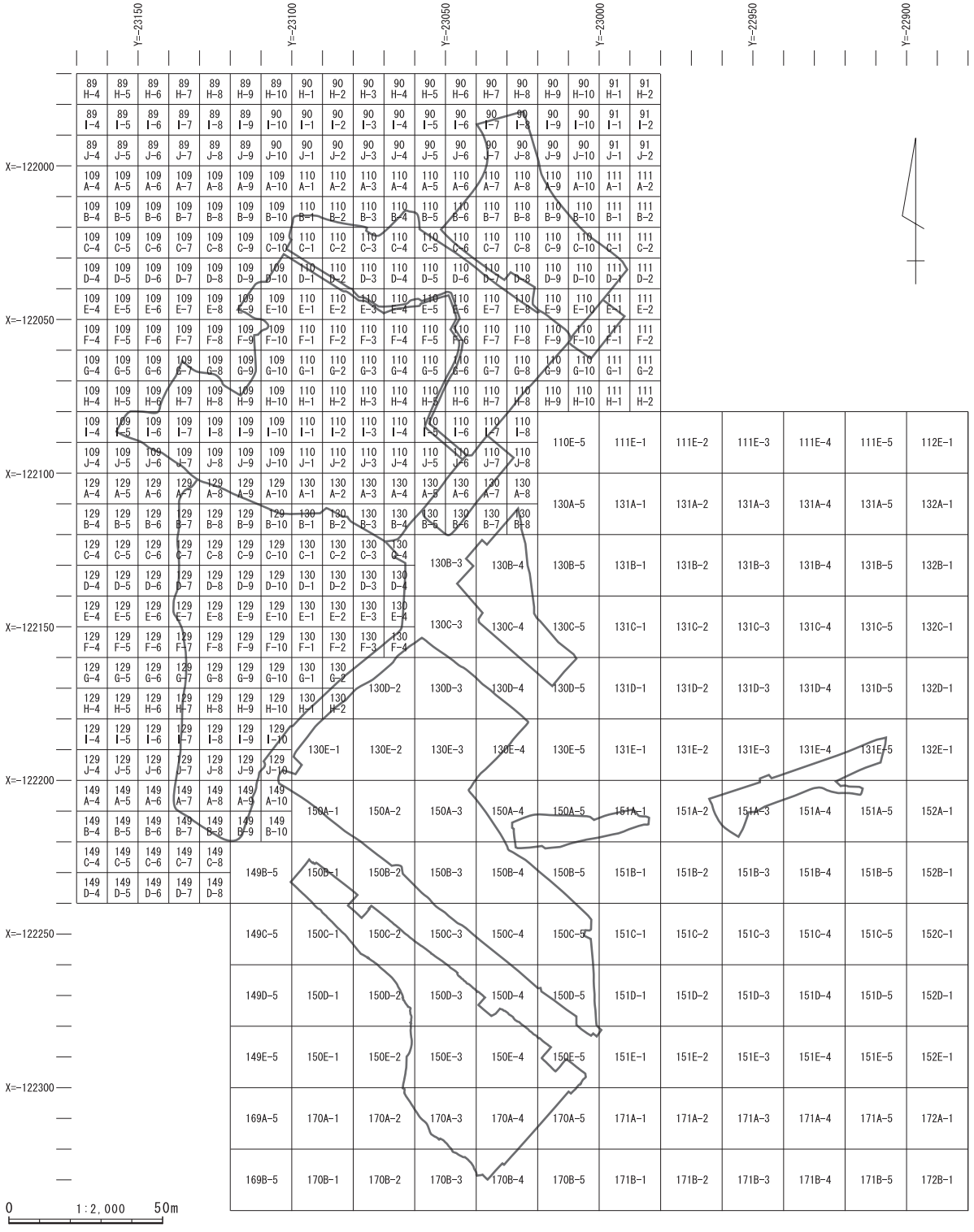
竪穴住居跡は平面方形を呈するもので、４本の主柱穴をもち、いずれも北西辺に竈を設けている。10 ㎡前後の大きさのものが多いが中には SB305 のように 45 ㎡ほどもある大型の住居跡も含まれている。

掘立柱建物は４間×４間の身舎に四面に庇を付けた大きな建物（SH210）の他に３間×３間と平面が正方形をした建物跡、３間×５間の長方形の建物、２間×２間の倉庫風の建物跡など様々な建物が含まれている。柵はⅡ -1 群とよんだ SH210 を中心とする建物群に含まれ、建物の棟方向と良く似た方向に直線的に延びており、何らかの区画をなしたものであろう。このほかに古墳時代の遺構面で検出した建物に伴う柱穴は E-3 区の柱穴 SP9544 がある。

集落の中央を北西～南東方向に流れる SR9526 は西側の丘陵からの水を東側の低地に流すもので、似たような水路が弥生時代以来続いてきている（第 54 図）。内部からは土師器・須恵器の坏類を中心に多量な土器・木製品等が出土している。流路 SR9526 は上層の SR8280　も含む。流路 SR6345 は E-2 区の南

半部で検出した自然流路である。覆土に含まれる土器は弥生土器から山茶碗までと幅広いが土師器や須恵器が中心である。流路 SR6398 は E-2 区で検出した。他の流路と同様に北西から南東に蛇行して流れる。覆土内からは土師器の甑（第 101 図 **479**）や軽石を含む黒曜石製の小玉（『寺家前遺跡Ⅱ』第 120 図 786・787）が２点出土している。

Ⅱ -1 群とした建物群の東から南側にかけて設けられた SD9500 と SD6289 は等高線に沿って掘られたものであり、おそらくⅡ -1 群の東側を区画する溝であろう。２段になっているが、全長 110m ほどの長



第２図　グリッド配置図

さが確認されている。中心的な建物と考えられるSH210の正面に当たる部分は途切れており、出入り口の存在を示すものであろう。溝SD9500はSD6135・6271・10064を含む。竪穴住居跡SB217のある微高地から東側へ進んだ低地との境に、ほぼ南北方向の溝SD6289（SD6405を含む）がある（第59図）。比較的古い須恵器と土師器が伴う。SD6290はE-2区の北端のグリッドで検出した東西方向の短い溝である（第58図）。溝内からは土師器の甕が数多く出土した。

集落域内では比較的小規模な土坑がいくつか検出されている。土坑SF240はA-1区北端で検出した浅い楕円形状の土坑で、内部からは長胴甕１個体分が出ている（第63図）。E-2区の土坑SF2595は20㎝ほどの小穴で内部から土師器の甕が出土した（第63図）。E-3区で検出した土坑SF9305、土坑SF9607、土坑SF9634、土坑SF9848は焼土坑である。不明遺構SX541はA-1区の北端で見つかった土器集中箇所である。掘形を伴わず、緩やかな傾斜地にほぼ完形の須恵器と土師器の坏などが近接した位置でまとまっていた（第72図）。不明遺構SX605はA-2区の南端に位置する。水田の南辺部にあたり、ここから南へ地形が下がっていく。土師器や杭、板状の木製品などが出土している。集落が形成された微高地の東側から南側にかけては低湿地が広がっている。低湿地は寺家山の東側には流れている葉梨川が形成した後背湿地である。この湿地に古墳時代の水田が見つかっている。SX419は杭列を伴う大畔、SD420・421は溝跡である（第70図）。SX419は当初、堰や土留め施設と考えていたが、SD420がE-5区②で検出した溝SD10457と繋がり、南側に広がる水田へ向かっていることがわかったことから大畔と判断した。溝SD421はE-5区①の畔SK5010へと繋がる。前節でも述べたとおり、畔の覆土より須恵器や土師器、種子等が出土している。このほかにE-2区では畔6753・6754、E-3区中央付近で杭列を伴う畔SK9653（図版46）や、南東側の低地で東西南北に交差する畔SK10463と畔SK10464を検出している。

第３節　微地形と遺構の広がり

遺構は遺跡の西側に広がる丘陵の裾を中心に営まれており、山裾から東側に広がる水田地帯にかけての微高地上に広がっている。遺構の立地する地域は、南北に延びた細長い微高地であるが、全体として西から東にかけて緩く傾斜している。微高地上には丘陵末端部あるいは谷筋からの自然流路などが作った小さな凹凸をもち、なかにはSR9526に見られるように谷部分の延長が水路となって遺跡の中を流れているものもあり、こうした凹凸が遺構全体の大枠の区画をなしていたものと考えられる。

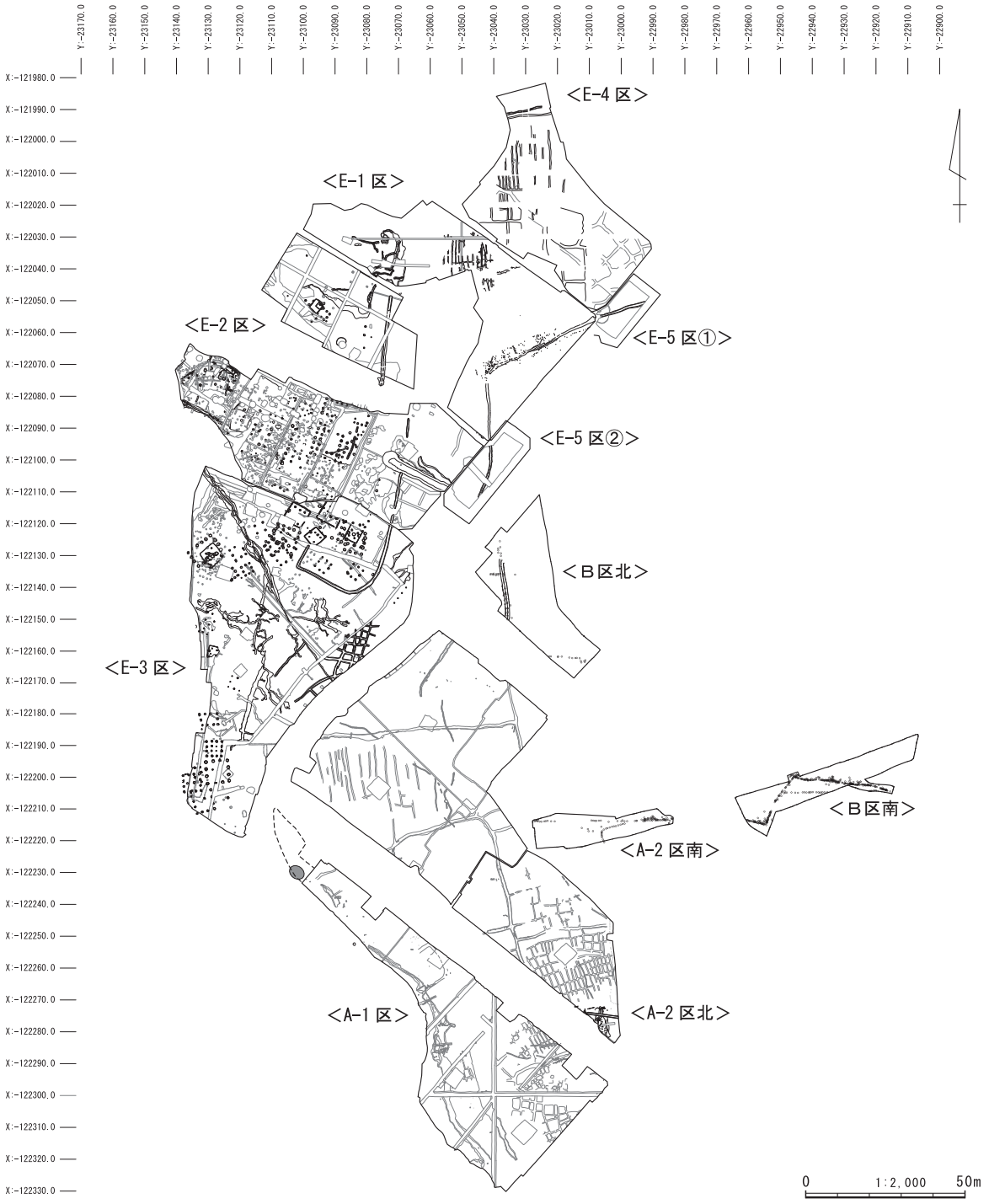
遺構は南北に長く広がっており、位置関係を軸にして、いくつかの群に分けられている。遺構の大半は調査区の中に収まっているが、なかには一部が調査区外に及んでいるものも認められ、調査区外に未検出の遺構が存在する可能性もないわけではない。特に調査区の北端近くでは検出された遺構が全体に少なくなっているが、竪穴住居・掘立柱建物が単独あるいは少数のまとまりをもって営まれており、検出されたこれらが遺構のすべてなのか、あるいは未調査区になお未検出の遺構があるのかは定かではない。しかし、調査区の範囲あるいは微地形の高まりなどを考慮すると、さほど多くの未検出遺構が存在するとは思えない。調査区の南端と東側は低くなり、水田域が広がっていることから、この地域に、確認された以上の建物群が検出される可能性は低い。したがって、今回の調査で検出された遺構がこの遺跡で営まれた建物跡などのほぼ大半であろう。

第４図の地形詳細図および第５図の遺構配置図をみると、竪穴住居跡の広がりは比較的散漫であるが、SR9526を挟んだE-3区の北側に集まっている。特にSR9526の北側の平坦部分に何棟かが集まっている。

Ⅰ群と呼んだSH311を中心とする掘立柱建物と竪穴住居跡群は微地形でみると、西側の丘陵からの水を集めたSR9526あるいはSR9275に挟まれており、一見すると必ずしも最も恵まれた地形を占めているものではなさそうであるが、しかし、その占地は必ずしも不利な地形の上に集まっているわけではな

い。例えば中心的な建物である SH311 は両水路に挟まれた微高地上に建てられており、竪穴住居跡群・掘立柱建物群の多くは SR9526 の北側の微高地上に建てられていることが理解できる。したがって、これらの建物群は SR9526 の周辺に集まっているとすることが理解できる。これは SR9526 の存在が集落の占地の上で大きな意味をもったことにもよるのであろう。後述するが、この水路からは祭祀に伴う廃棄と考えられる土器群が数多く出土している。

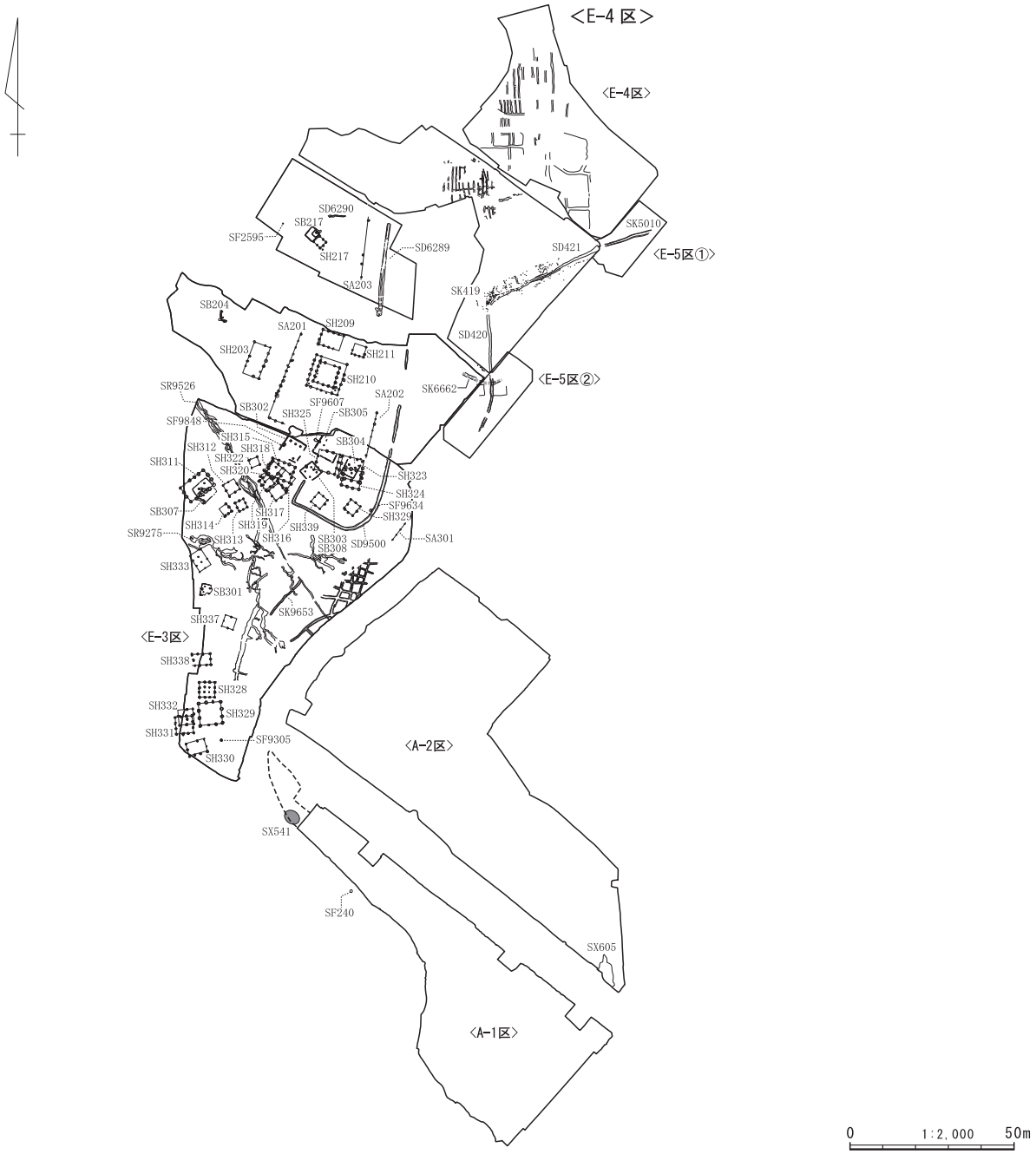
Ⅱ -1 群とした掘立柱建物は E-2 区の中央部分から E-3 区の北側に集中しているが、微地形との関係を観察すると、遺跡の中央をほぼ斜めに横切っている SR9526 の北側には微高地が東側に張り出しており（ここに先述のⅠ群の竪穴住居跡と掘立柱建物が建てられている）、この張り出した微高地の肩の部



第３図　遺跡全体図

第４図　古墳時代後期地形図

分に SD9500 が設定されている。E-2 区は全体に西から東に向けて傾斜しているが、等高線を見ると、２箇所に集中している部分がみられる。したがって、全体に西から東にかけての緩い傾斜の中でも、３段の平坦面があることを認めることができる。この平坦面が人為的に造成されたものか自然の地形そのものなのかは明らかではないが、この平坦面に掘立柱建物が建てられていることがみてとれる。上段の平坦面には SH203 とその東側に SA201 が作られ、中段には SH210・SH209・SH211 がある。さらに下段の南側には SH323・SH324・SH325 さらには SA202 などが作られている。SA202 とした柵の方向は、先に触れた SD9500 の方向にほぼ一致している。したがって、これらの建物は溝・あるいは柵によって区画された一群の建物群をなしているものと考えられる。E-2 区南側の住居群からやや北側に外れたところに SB217 と SH217 がある。ここは東側を SD6289、北側を SD6290 で区画された範囲に位置する。東側の SD6289 の内側には柵 SA203 が併行している。

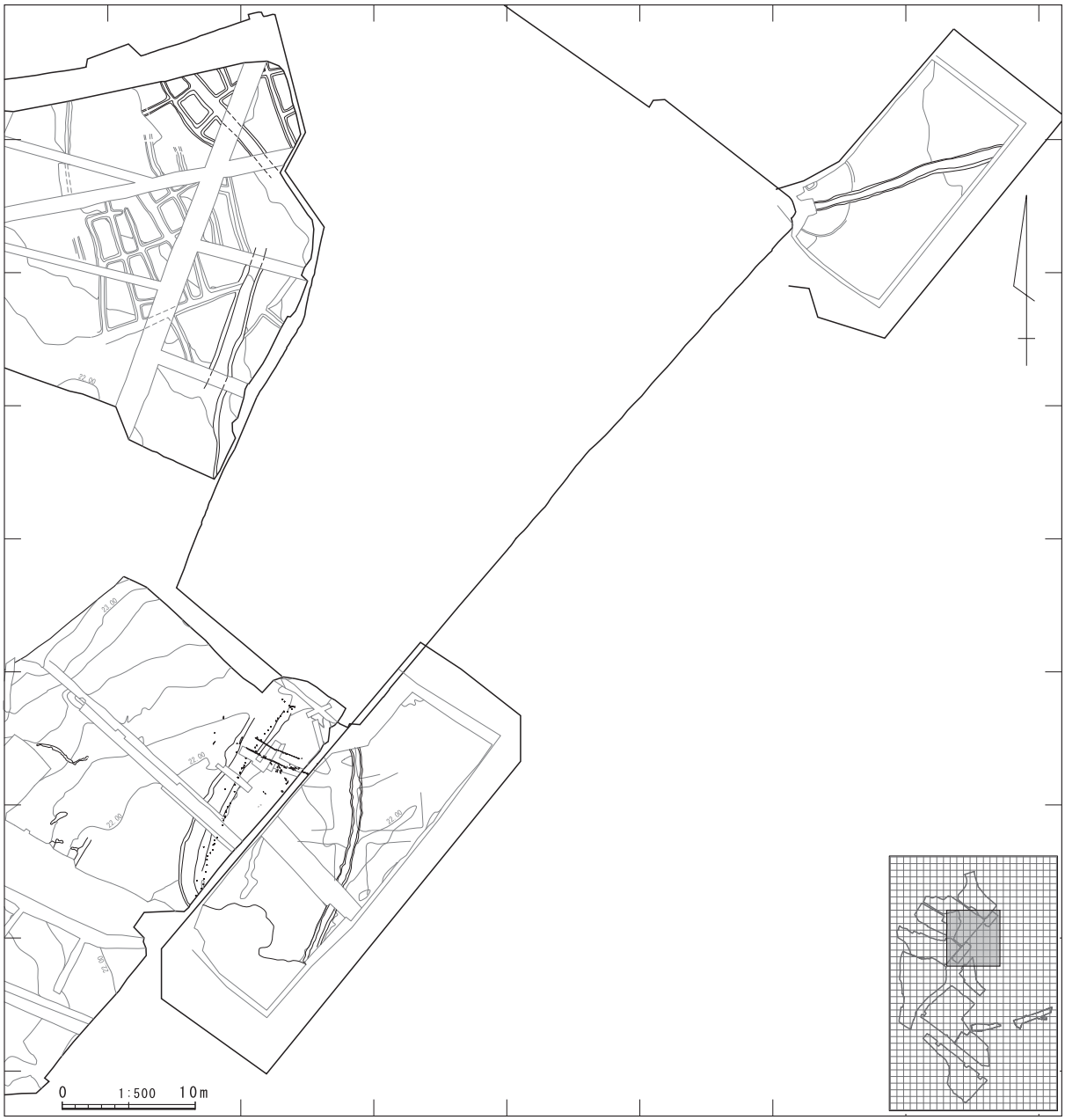


第５図　遺構配置図

第６図　　E-2 区全体図 (1)

調査区の南端（E-3 区南端）にⅡ -1 群とした掘立柱建物が集中しているが、この部分は南側で丘陵がやや張り出した区域で、ちょうど丘陵の懐に当たる部分に位置している。この丘陵の南西側は衣原遺跡に続いている。

古墳時代の水田は部分的に畔や溝跡を確認できたに過ぎない。というのも時期判別の手掛かりとなる土器の出土例も極めて少なく、下層で検出した弥生時代後期の水田面との切り分けが難しいことが原因である。弥生時代後期に開田された水田は断続的に継続して使われていたと考えられるが、古墳時代後期に属する農耕土木具の出土例も非常に少なく、大掛かりな水田経営をしていたとは想像し難い。『寺家前遺跡Ⅰ』第１章第４節本調査の項、４．基本土層で示したとおり、７～８層に古墳時代後期の土器を含み、９層上面で古墳時代後期の遺構を検出した。７層では古代と古墳時代後期の土器を含むが量は少ない。８層では弥生時代と古墳時代の包含層だが遺物は弥生土器よりも古墳時代の土師器の方が多い。よって、８層から９層上面で検出した水田の畔は古墳時代後期の時期と判断した。



第７図　　E-2 区全体図 (2)

第８図　　E-3 区全体図

第２章　調査の成果

第１節　遺構群の抽出と遺構の組合せ

１　分類

先に触れたように発掘調査によってE-2区～E-3区を中心に竪穴住居跡と掘立柱建物が検出されている。

竪穴住居跡は平面形が方形で、全体で９棟が発見されているが、その分布は非常に散漫である。各住居跡には竈が設置されているが、竈の位置が明瞭なものは全て北西向き、あるいは西向きに設置されたものである。また竪穴住居の壁の示す方向にも比較的近いものが多いが、方向によって、これらが一つのまとまりを示すものではないらしい。

掘立柱建物群は全体で27棟が検出されているが、これらは、その平面形・規模などから、

①　柱間が３間×３間あるいはそれ以上の建物で、平面形が正方形を呈しており、これには平面積の広さから、40㎡を超す大型のものと20㎡大の比較的小振りのものとがある。最も規模の大きかったSH210は身舎が４間×４間と間数が多く、加えて４面に庇をもった特異な形状の建物であるが、やはり桁行と梁間の長さがほぼ等しく、他の平面正方形に近い建物群と良く似た外観を呈していたと考えられる。これらのうち、平面積の大きなものは、おそらく住居であったろう。

②　３間×４間（SH315・SH209）、３間×５間（SH311・SH203）と、基本的には梁間３間を基本とした建物で、桁行の長い建物である。規模も平面積が40㎡前後のものと20㎡ほどのものとの２者がある。やはり規模の大きなものは住居であったと考えてよいだろう。

③　２間×２間（SH312・SH327）あるいは２間×３間（SH338）の建物で、基本的には梁間２間で、15㎡前後の比較的小規模な建物が多い。この２間×２間の小型の建物は梁行と桁行の長さが等しいか、それに近いもの、いってみれば正方形の平面をもった建物が多く、これらは多くの場合、おそらく倉庫としての機能をもったものであろう（註１）。

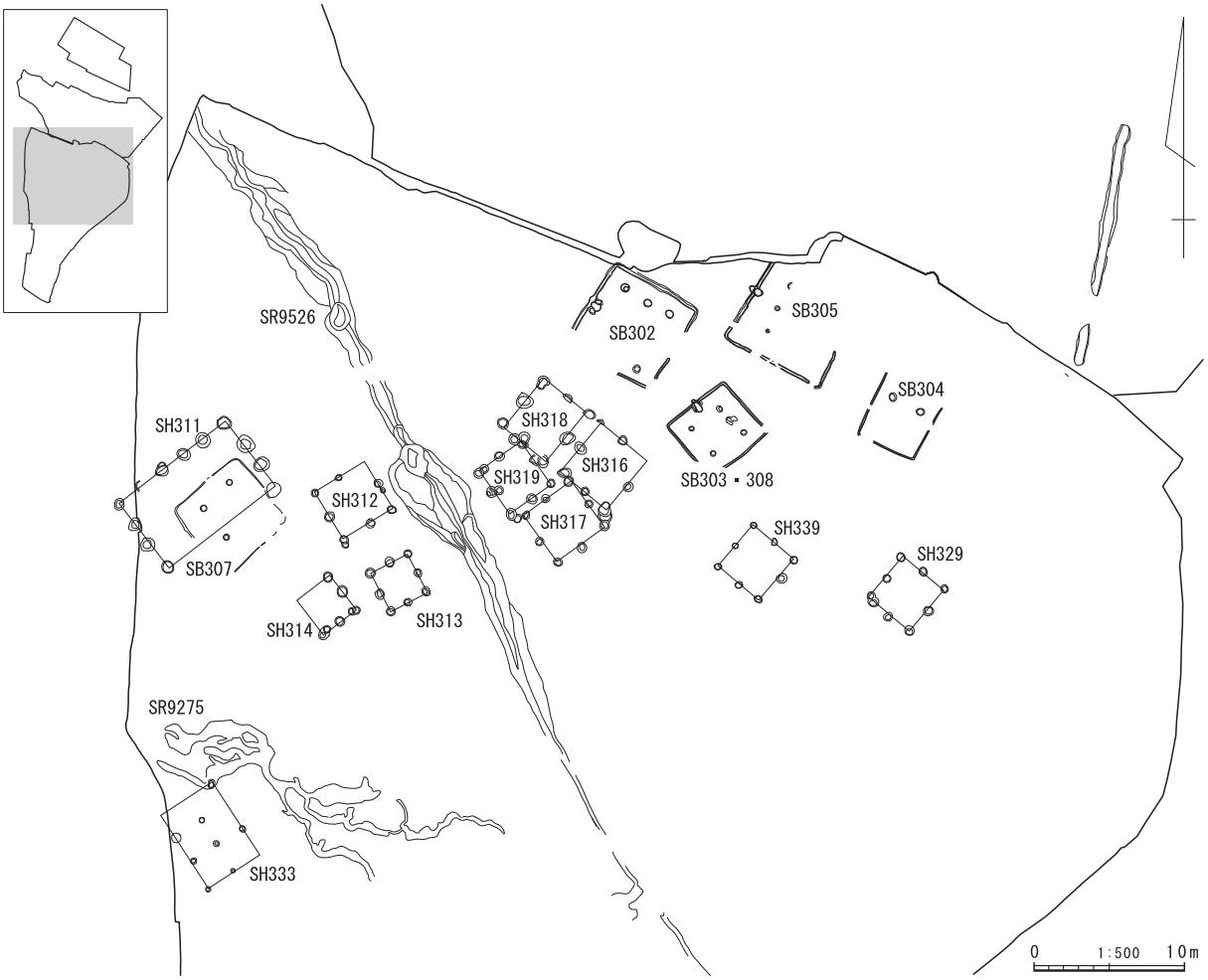
２　建物群の組合せ

建物の形態と規模の差はそれぞれがもつ機能を反映しているもので、それらの建物がいくつか組み合わせになって、全体で一つの建物群として機能を果たしたことが推定できる。床面積が40㎡を超す大型の掘立柱建物が各群の中心をなしており、これらは住居であろう。③とした、２間×２間あるいは２間×３間程度の規模をもった建物は倉庫または作業場だと考えられる。

掘立柱建物群はそれぞれの位置あるいは屋根棟の方向などによって全体で３つの組み合わせを推定することが可能であろう。それぞれⅠ群、Ⅱ-1群、Ⅱ-2群と分けることにした。各群はいずれも掘立柱建物と竪穴住居跡が組み合わせになっている。おそらく竪穴住居跡と掘立柱建物はその規模の違いから、それぞれ機能を異にしていたものであろう。詳細は後述する。

（１）竪穴住居跡と掘立柱建物の重複

SH325とSB308・SB305、SH324とSB304、あるいはSH311とSB307にみられるようにいくつかの掘立柱建物と竪穴住居跡が重複している。当然、これらは同時に存在していたとは考えられない。個々の観察は遺構各節で記述するが、その重複関係を検討すると、SH311とSB307とでは、掘立柱建物が竪穴住居跡の床面を切っており、明らかにSB307が先行することが理解できた。同様にSH325とSB308でも



第９図　Ⅰ群配置図

竪穴住居跡が先行することが知られており、SH324 と SB304 の場合も同様である。したがって、この区域で竪穴住居跡と掘立柱建物では基本的には前者が先行し、掘立柱建物が後続するものと考えられる(註２)。

集落内での掘立柱建物と竪穴住居跡のあり方は、袋井市坂尻遺跡、焼津市藤守遺跡などでは両者が共存しており、こうしたあり方は古墳時代後期における、この地域の集落の一般的な様子を示している。しかし、坂尻遺跡でも集落の中心部分では掘立柱建物群だけで構成される区域が見つかっている（松井1994)。さらに、駿河東部の小山町横山遺跡では中心部分の大型建物を取り巻く区画では掘立柱建物だけから成り立っており、周辺部分では竪穴住居跡と掘立柱建物が組み合わせになっている（平野1985)。したがって、寺家前遺跡でも掘立柱建物と竪穴住居跡の切り合い関係を軸に、竪穴住居跡が掘立柱建物に先行するものが多いとしているが、基本的には両者が組合せになっているものと考えている。Ⅰ群とⅡ群とも、掘立柱建物と竪穴住居跡の数はともかく、両者が組合せになっている。Ⅱ群はその位置からⅡ-1 群とⅡ-2 群に分けられる。Ⅰ群とⅡ群の間には、その重複関係から見るように多少の時間差があり、Ⅰ群が早く、Ⅱ群がこれにやや遅れるらしい。

（２）建物群の構成

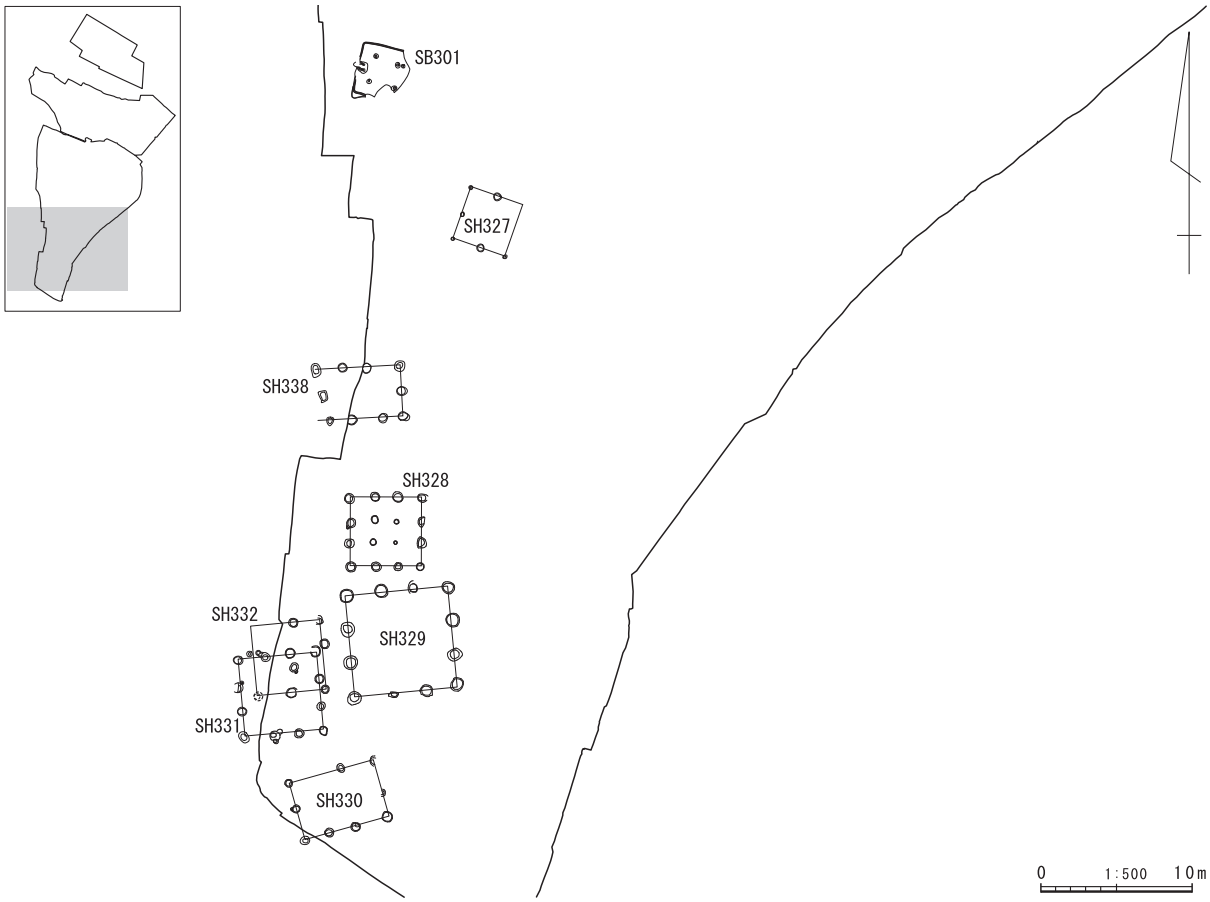
検出された竪穴住居跡は９棟で、遺跡全体に散漫に広がっており、竪穴住居跡自体が重複しているものは基本的には認められていない（註３)。

掘立柱建物は 27 棟であるが、遺跡全体に広がっており、建物群の位置・規模さらには建物の棟方向

第 10 図　Ⅱ -1 群配置図

などから３グループに分けることが可能である。

Ⅰ群　SH311 を中心に SR9526 とその周辺に広がる建物群で、側柱の方向が SH311 と良く似た小型の掘立柱建物と竪穴住居跡の大半がこれに含まれる。一部で竪穴住居跡群は掘立柱建物と重複しているが、先にも触れたように、その前後関係は竪穴住居跡が先行している。竪穴住居跡と重複している掘立柱建物はいずれもⅡ -1 群に伴うものであり、Ⅰ群の掘立柱建物と重なっているものは認められない（註４）。これはⅠ群とⅡ -1 群の時間関係をも示していよう。



第 11 図　Ⅱ -2 群配置図

したがってⅠ群の掘立柱建物は周辺に広がる竪穴住居跡を組み込んで一つの建物群をなしていたもので、この群は、先に触れたように SR9526 の周辺に集中している。

Ⅱ -1 群　調査区の北側に当たる、E-2 区から E-3 区にかけて広がる建物群で、SH210 を中心にしている。掘立柱建物と竪穴住居跡からなるが、外側に溝・柵列あるいは建物の存在によって明確な区画を持っている。寺家前遺跡では唯一区画をもつ建物群である。

東から南にかけて SD9500 とその延長に SD6289 が設けられている。等高線にほぼ平行に、直線的に掘られた溝であり、Ⅱ -1 群の東面を区画するために掘られた溝であろう。先にも触れたように SD9500 の中央部分（SH210 の南側に当たる）には溝が途切れている部分があり、ここが出入り口になっていたものであろう。未調査部分の北側にある SD6289 の西側にはこれに直交するように、東西方向に SD6290 が設けられており、この溝の北側には古墳時代の建物遺構は認められていない。したがって、これが北側の区画をなしたものであろう。また、これらの溝に平行して部分的ではあるが柵 SA202 あるいは SA203 が設けられており、これらも東面の区画をなしたものであろう。

南面は SD9500 の延長の他に、西側の SA201 の延長、さらには SH323・SH325・SH315 などが、建物の側柱を直線的に並べるようにして建てられており、これらによって区画をなしていたと考えられる。西側は丘陵の急な斜面になっており、区画は設けられていない。したがって、Ⅱ -1 群は南・北と東に区画の施設を持った建物群だと考えることができる。地形の傾斜あるいは建物の配置などから見て、Ⅱ -1 群は東面して建てられたものであろう。

この建物群は寺家前遺跡で最大の規模を持った掘立柱建物 SH210 を中心に、多くの掘立柱建物から構成されている。西側と北の端に竪穴住居跡が２棟確認されている。

この群は、SH210と棟方向（正方形の建物があり棟方向は明らかではない。しかし周辺の地形からみて、おそらく南北棟の東面する建物であろうが、ここでは側柱の方向を示す）がほぼ一致しているもの、あるいは棟方向がこれと直交している建物からなる。調査区の北端で検出された建物（SH217）は棟方向が異なり、位置的にも他の掘立柱建物とは離れているが、周辺に未調査区域を持っていることから、もこれに含めておくことにする。この群にはSB204とSB217の２軒の竪穴住居跡が含まれている。

Ⅱ-2群　規模の大きなSH329を中心に、調査区の南端で検出された掘立柱建物群で、側柱の方向はほぼ南北に揃っている。３×３間の建物が目立っているが、SH331とSH332は重複しており、同一時期のものではない。SB301はこの群に属すものであろう。

（３）建物群の状況

建物群の位置・建物の配置などを見ながら、各群の状況をもう少し細かく観察すると、Ⅰ群はSH311・SH312・SH313・SH314・SH316・SH317・SH318・SH319・SH329・SH333・SH339などの掘立柱建物と竪穴住居跡からなっている（第９図）。竪穴住居跡（SB307）と掘立柱建物（SH311）は重複しているが、先に触れたようにSH311が新しい。他にⅡ-1群の掘立柱建物と重なっている竪穴住居跡があるが、いずれも掘立柱建物が新しいことが知られている。

この群の中心的な建物はその位置あるいは規模から見てSH311であろう。桁行５間×梁行３間で、平面積48.6㎡ほどの建物である。これに伴ってその南側に、棟方向がSH311とほぼ直交するSH333があり、３間×２間で平面積は22.8㎡ほどである。他は２間×２間の比較的小さな建物で、側柱の方向はSH311と比較的良く似ている。

SH317とSH319あるいはSH316とSH318はそれぞれ建物の規模・方向などは良く似ているが、互いに近接しすぎており、同時に存在したものではなく、建て替えによるものであろう。

また、SH315（Ⅱ-1群に属す）とSH318・SH319は重複している。現地調査段階で柱穴の切り合いを確認しており、SH315が最も新しい（第33図）。

先にも触れたように、SB305・SB308はSH325（Ⅱ-1群）と重複しているし、SB304はSH323・SH324と重なっているがいずれも竪穴住居跡が先行する（註５）。したがって、Ⅰ群は東南に面した大型の掘立柱建物（SH311）を中心の２間×３間のSH333を加え、これに側柱方向の良く似た小型の掘立柱建物と竪穴住居跡からなる一群であり、Ⅱ-1群に先行する建物群である。

Ⅱ-1群はSH210・SH209・SH211・SH323・SH324・SH325・SH315・SH203およびSH217の９棟の掘立柱建物からなっている（第10図）。SH210の西側にこれとほぼ平行してSA201が、さら東側にSA202が設けられている。SA202の延長上とSH324の東面側柱の方向が一致しており、この柵が建物群の東面を区画しており、さらにSA202もその位置からSH210の西側を区画していることが明らかである。SH324はSH323と重複しているが、３間×３間と規模も良く似ており、建物の側柱の方向も一致しているので、これらはどちらかが建て替えによるものと考えられる。また、SH325とSH323とは規模・側柱の方向も一致しており、２棟が並列して建てられていた可能性が大きい。したがって、これらの建物はⅡ-1群の南面を区画する役割をも併せてもっていたものであろう。また、SA201は柵の方向がSH210の側柱と同じ方向にあり、この南側にあるSH315の棟方向と直角に交わっている。したがって、SH210の南面には柵と建物によって囲まれた、広さ500㎡ほどの空間が作られることになる。また、SH210の北側にはやはりこれに平行するような形でSH209とSH211が設けられており、さらに、SA201の西側に、この柵に平行してSH203が建てられている。したがって、これらの柵・掘立柱建物はSB210を中心に良く似た棟方向の建物あるいはこれと直角になる建物とによって、ほぼ長方形の区画をなしていると考えることができる。外側にあるSB204・SB217がこれに含まれる。間に未調査区域があることから、その数はもう少し多いのかもしれない。

Ⅱ-1群の中心的な建物は、その位置・規模からもSH210と考えられるが、この建物は４間×４間の身舎の外側に１間ずつ４面に庇を設けたもので、建物の棟方向が特定できないが、周辺の地形あるいは建物の配置から、東面するか南面する建物のいずれかであろうが、地形的には東面する建物であろう。ちなみに、この建物群の東側を区画するSD9526はSH210の正面（東側）で途切れており、あるいはこの部分に入口が設けられていた可能性がある。

Ⅱ-2群はSH327・328・SH329・SH330・SH331・SH332・SH337・SH338などE-3区の南端で集中して検出された７棟の建物群（第11図）で、集中している部分にあるものが３間×３間のほぼ正方形の平面形をもった建物が多い。SH331とSH332は重複しており、当然同時に存在したものではない。

建物の規模からSH329がこの群の中心的な建物であり、周辺の地形から、やはり東面するものであろう。したがって、その裏側に位置するSH332はこれに付属する建物と考えてよい。SH331（側柱）の方向がSH329と多少ずれることからみてもSH331はSH332を建て替えたものである可能性が強い。SH328は束柱の痕跡をもっており、明らかに床張りの建物である。北端にあるSB301をこの群に加えている。

Ⅰ群の中心的な建物はSH311で、５間×３間の桁行方向が長い建物である。また、比較的小規模な倉庫風の建物を多く含んでいるが、最も特徴的な風景は竪穴住居跡を多く伴うことである。Ⅱ-1群とⅡ-2群は数多くの掘立柱建物と少数の竪穴住居で構成されており、中心的な建物を含め４間×４間あるいは３間×３間とした平面正方形を呈する建物が多く、また床面積の比較的大きな建物が多い。Ⅱ-1群とⅡ-2群は時間的にはほぼ平行すると考えている。Ⅱ-1群は最も規模の大きなSH210を中心に、その周囲に柵と建物で長方形の区画を造っており、その周辺にもさらに建物が配置された構造と考えることができよう。Ⅱ-1群とⅡ-2群との関係は明確にはならなかったが、建物群を営んだ地形、位置あるいは周辺に柵・堀などで区画をしていることを考慮すると、Ⅱ-1群がⅡ-2群に対して、より優位な情況にあったことは推定できる。

第２節　遺構各節

１　竪穴住居跡

竪穴住居跡は全体で９軒分が検出されている。先にも述べたように、SB305・SB307・SB304は、それぞれ掘立柱建物SH325・SH311・SH323と重複している。また、SB217・SH217もほぼ重なっている。これらの重複部分の観察では、全体的には掘立柱建物群よりも竪穴住居跡群が先行すると考えられた。

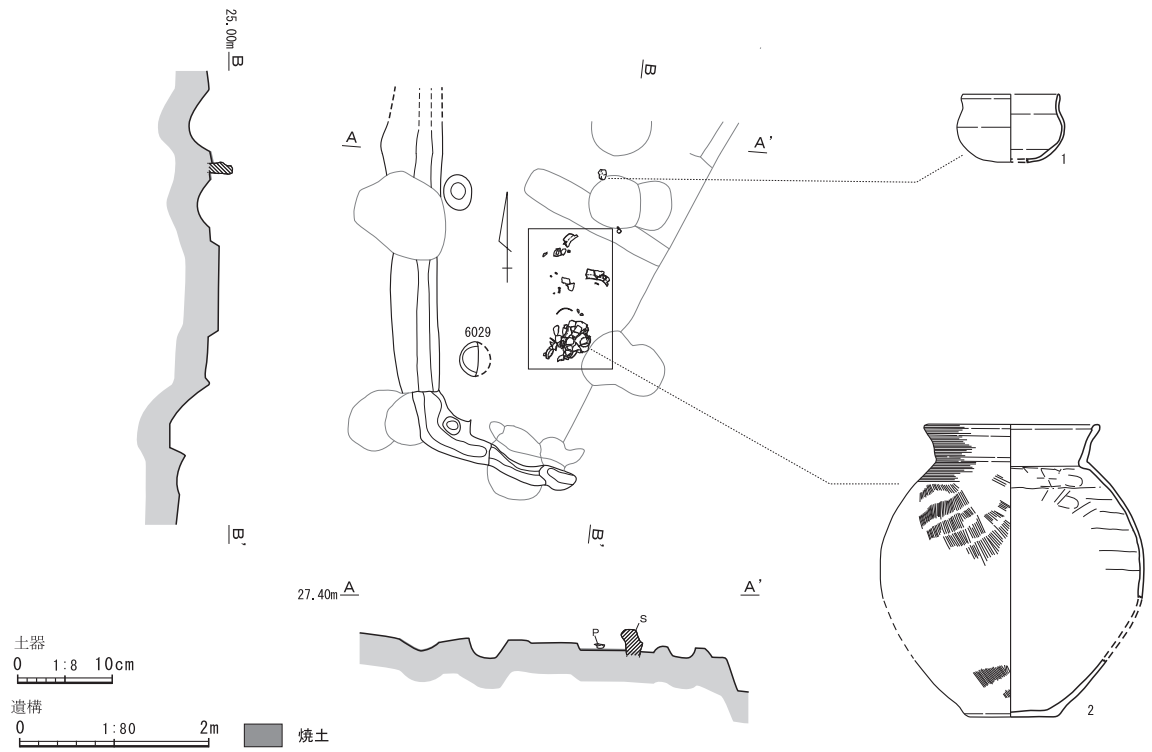
以下個々の建物の説明を行う。

SB204（第12図）　E-2区の西端で検出された。攪乱が激しく、竪穴住居跡の平面形は明確にならなかったが、西辺の落ち込みと壁溝が確認されたこと、これに平行する柱穴が２箇所で確認されたことによって、平面形の概略を推定している。規模は南北3.9×東西3.5ｍ程度で、面積が13㎡前後と考えられる。

床面は住居跡の中央部分を中心に残っていたが、南・北の端を中心に攪乱が多い。住居跡からは２本の柱穴が検出されているが、東側の柱穴は攪乱によって失われている。柱穴の径は40㎝ほどであり、柱の間隔は1.7ｍほどである。竈の位置は明らかではないが、比較的残りが良かった西辺に竈の存在が確認できないので、おそらく北面寄りに設けられていたものであろう。しかし、すでに攪乱によって失われているらしく、明らかにならなかった。

南辺近くの床面からD1類に分類される駿東甕（第14図**２**）がつぶれた状態で発見されており、他にB2類の鉢（**１**）が検出されている。

SB217（第13図）　E-2区の北端で発掘された。住居跡全体が後世の流路によって削られており、床

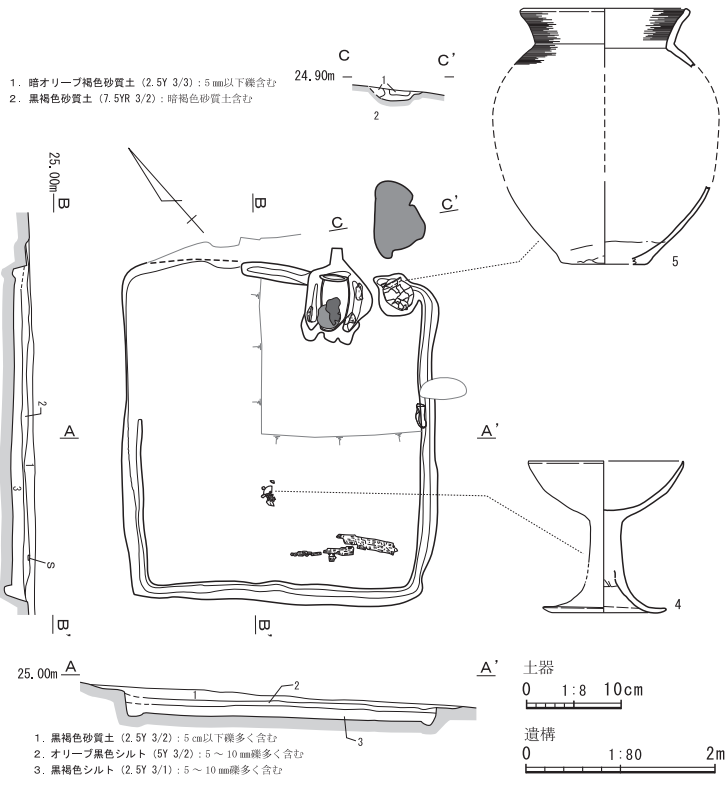


第 12 図　SB204 実測図

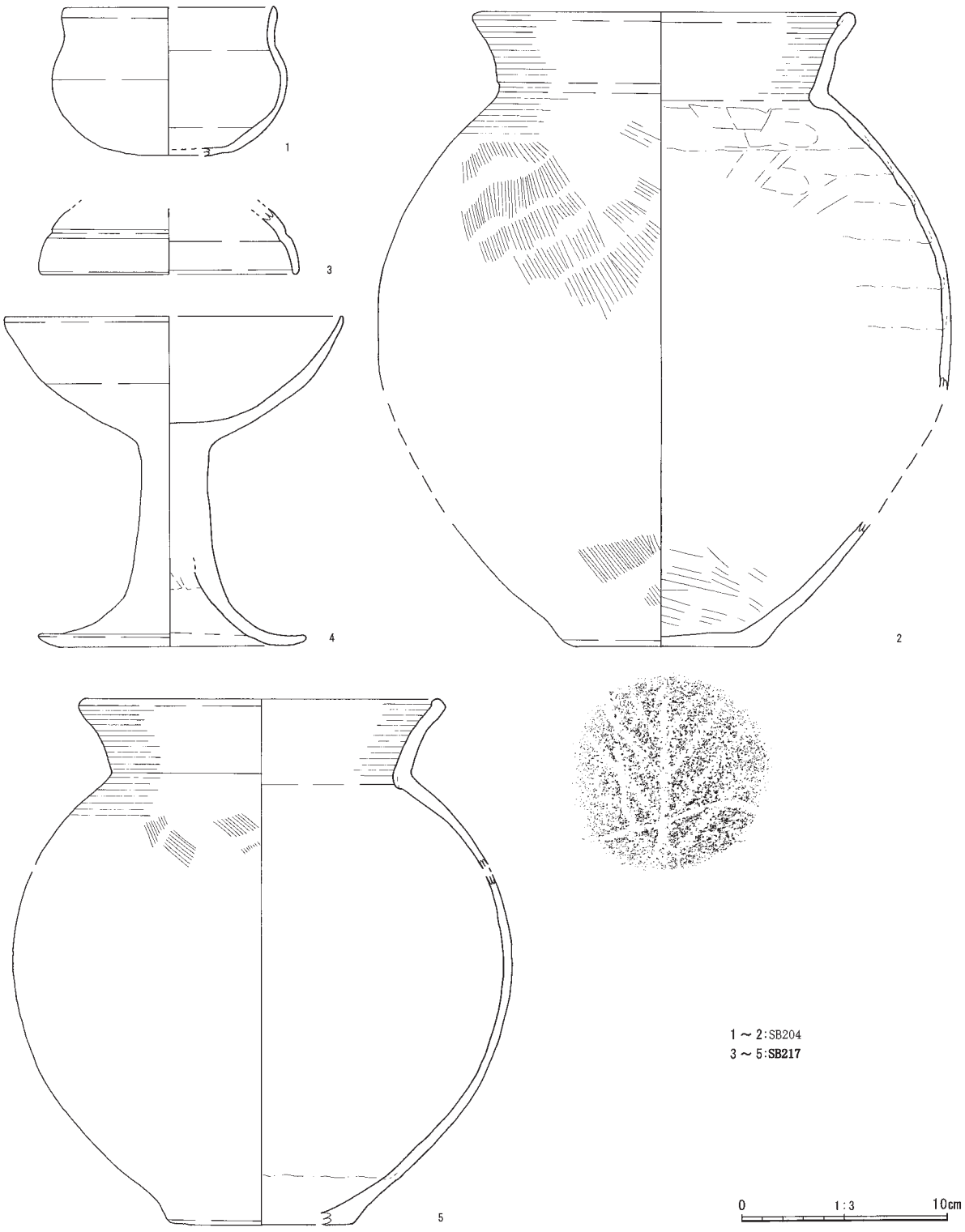
面は北東部分の 1/4 ほどが確認できたに過ぎない。壁溝を追うことで全体の平面形を捉えることができた。それによれば南北 3.9 ×東西 3.3 ｍの規模をもった、ほぼ方形の竪穴住居跡である。床面積は 13 ㎡ほどの小型の住居跡である。

床面は流路によって削られていたが、竈の近くは残っていた。流路の影響で床全体が細かな砂質粘土で覆われており、柱穴の検出は難しかった。

北辺の東寄りで竈が検出された。袖は芯に大型の礫を配し、それに粘土を積んだもので、一部分に煙道も観察された。竈の右隣に楕円形の小穴が掘られており、中から D1 類の駿東甕（第 14 図**５**）が出土している。この小穴は、おそらく貯蔵穴であろう。床面付近から、D類とした土師器高坏（**４**）が出土している。坏部は全体に丸くなった碗形をしており、脚は棒状の脚で、須恵器の無蓋高坏を模倣したものである。あわせて、Ⅳ期前半段階の須恵器坏蓋の破片が出土している。したがって、



第 13 図　SB217 実測図



第 14 図　SB204・SB217 出土土器実測図

この竪穴住居跡からは土師器高坏Ｄ類、駿東型の甕 D1 類とⅣ期前半の須恵器が伴出していることになる。

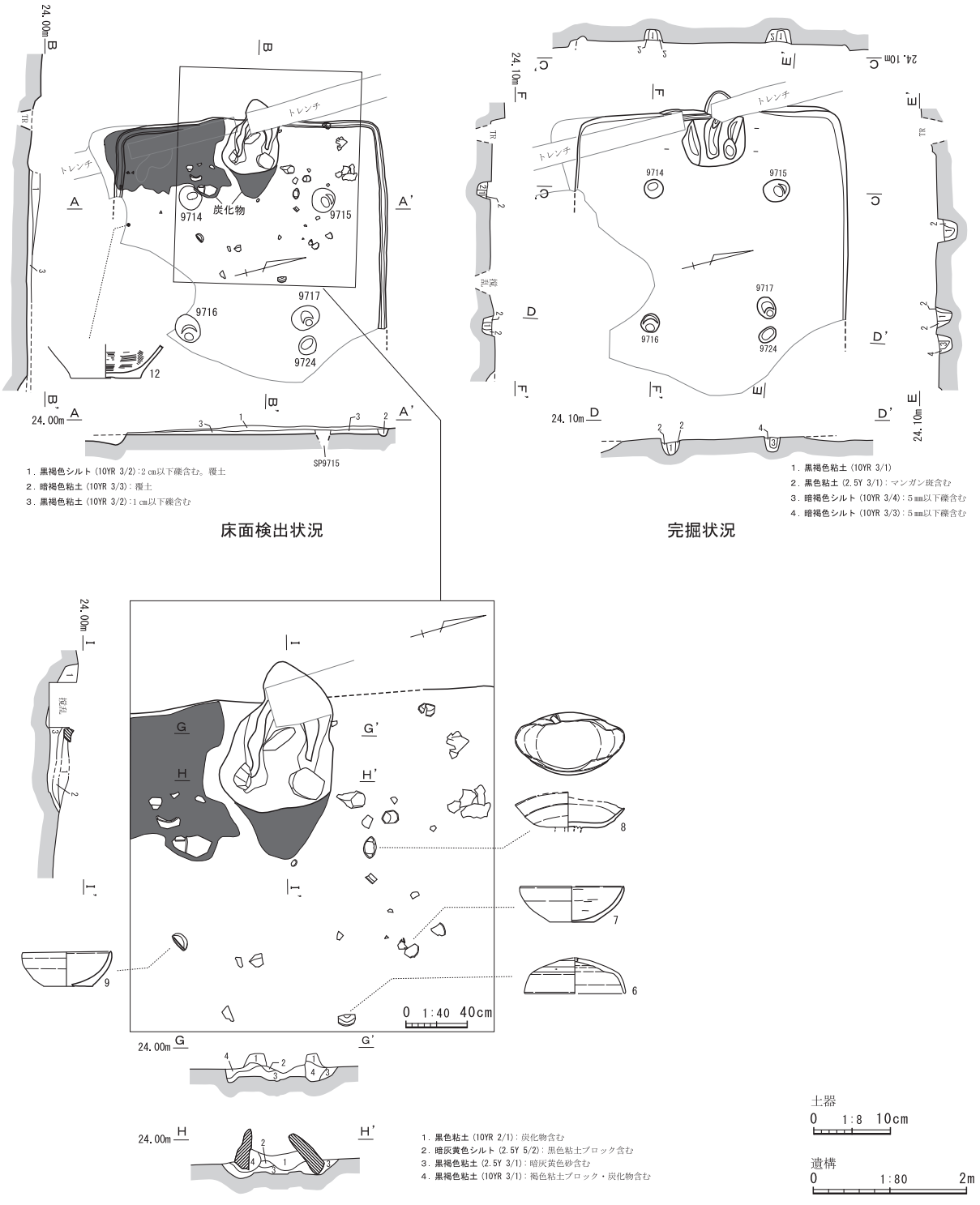
SB301（第 15 図）　竪穴住居跡群の中では最も南で検出されたもので、SH333 に隣接している。住居跡の東辺と南辺の一部が攪乱によって壊されているが、東辺の長さは 3.3 ｍであることから、ほぼ正方形であったとすれば、南北 3.3 ×東西 3.3 ｍほど、平面積 10 ㎡ほどの規模をもったものであろう。西

辺のほぼ中央に竈を設けている。

床面は東・北の部分は残っていたが、南・東側は攪乱などの影響で、必ずしも明瞭には把握できていない。柱穴は４本が確認できている。壁は、残りの良いところでは高さ 20 ㎝ほどが残っている。壁溝も北面・東面では、幅 10 ㎝ほどが確認されている。

竈は大きく壊れているが、袖の基礎部分に据えられた大型の礫が確認された。

住居跡内から須恵器坏（第 18 図６）・無蓋高坏（８）、土師器坏Ｂ類２点（７・９）と駿東甕が出土している。駿東甕は胴部以上の接合ができず、底部のみが図示してある（12）。他にＢ類の鉢が１点出



第 15 図　SB301 実測図

土している。須恵器無蓋の高坏は杯部のみであるが、大きく変形しており、実用に耐えたとは思えない。土師器坏は住居跡床面からの出土である。この他に北東隅の柱穴（SP9171）から鉄釘（『寺家前Ⅱ』第128図842）が１点出土している。

SB302（第16図）　E-2区の北側、中央部で検出されたもので、SB305・SB303に近接しているが、他の建物とは重なってはいない。住居跡の北東隅が大きく試掘孔で壊されているが、北辺がおよそ６ｍ、東辺が６ｍの長さがあることから、平面積が36㎡ほどの比較的規模の大きな建物でろう。北辺の中央に竈をもっている。

住居跡は焼失したものらしく、住居跡内に焼土・木炭が広範囲に広がっており、床面も多くの部分が確認できた。柱穴は西北隅を除く４箇所が確認できた。東面には３本の柱穴が検出されており、これらは柱の通りも良く、間隔も1.8ｍほどと良く揃っている。柱の痕跡も確認されており、柱径は20㎝ほどである。したがって、この３本の柱をSB302の東辺の柱列とすると、反対側の西辺にも３本の柱があったことが想定されるが、この部分は試掘孔で掘削されており、明確にはならなかった。北面の中央部に竈が設けられており、この正面に当たる南側には出入り口の存在が推定されることから、東西方向の柱間は１間であったと考えられる。したがってこの建物は東西１間×南北２間の柱間をもった竪穴住居跡ということになる。屋根の構造などについて資料はないが、こうした形態の掘立柱建物は非常に珍しいということになろう。

今のところ、静岡県内では類例を知らないが、関東地方の八王子市中田遺跡あるいは船橋市夏見台遺跡などでは鬼高期の集落で２間×２間の竪穴住居跡の存在が知られている。さらに先の中田遺跡では３間×３間の竪穴住居跡の存在が知られており、宮本氏によれば比較的規模の大きな竪穴住居跡であるらしい（宮本　1996）。東北の柱穴（SP9830）の底には礎板が設置されており、床面からの深さは30㎝ほどである。竪穴住居跡の深さは検出面から30㎝ほどが確認され、壁溝も西辺の中央部分を除いては明瞭に観察できた。壁溝の幅は30㎝、深さは10㎝ほどである。南辺の中央部分で壁溝が乱れている部分があり、竈の正面に当たるこの部分に入口が設けられていたことが推定できる。

床面に接して２期としたⅣ期前半の須恵器坏身（第18図**13**）が出土しており、やはり床面から土師器坏Ｂ・Ｃ・Ｄ類が出土している（**14**～**16**）。坏Ｄ類とした16は口縁部の形態から、須恵器坏身を模倣したものであろう。須恵器坏身を模倣した土師器の出土例は比較的少ない。また、把手をもった甑の胴部が出土している。

この住居跡からは耳環（『寺家前Ⅱ』第128図848）・鉄釘４本の他に桃の種（？）などが出土している。１間×２間（２間×２間）とした竪穴住居跡の特徴的な形態と合わせ、耳環あるいは鉄製品を出土するなど、遺物からも他の竪穴住居跡とはかなり異なった様子を示しているといえる。

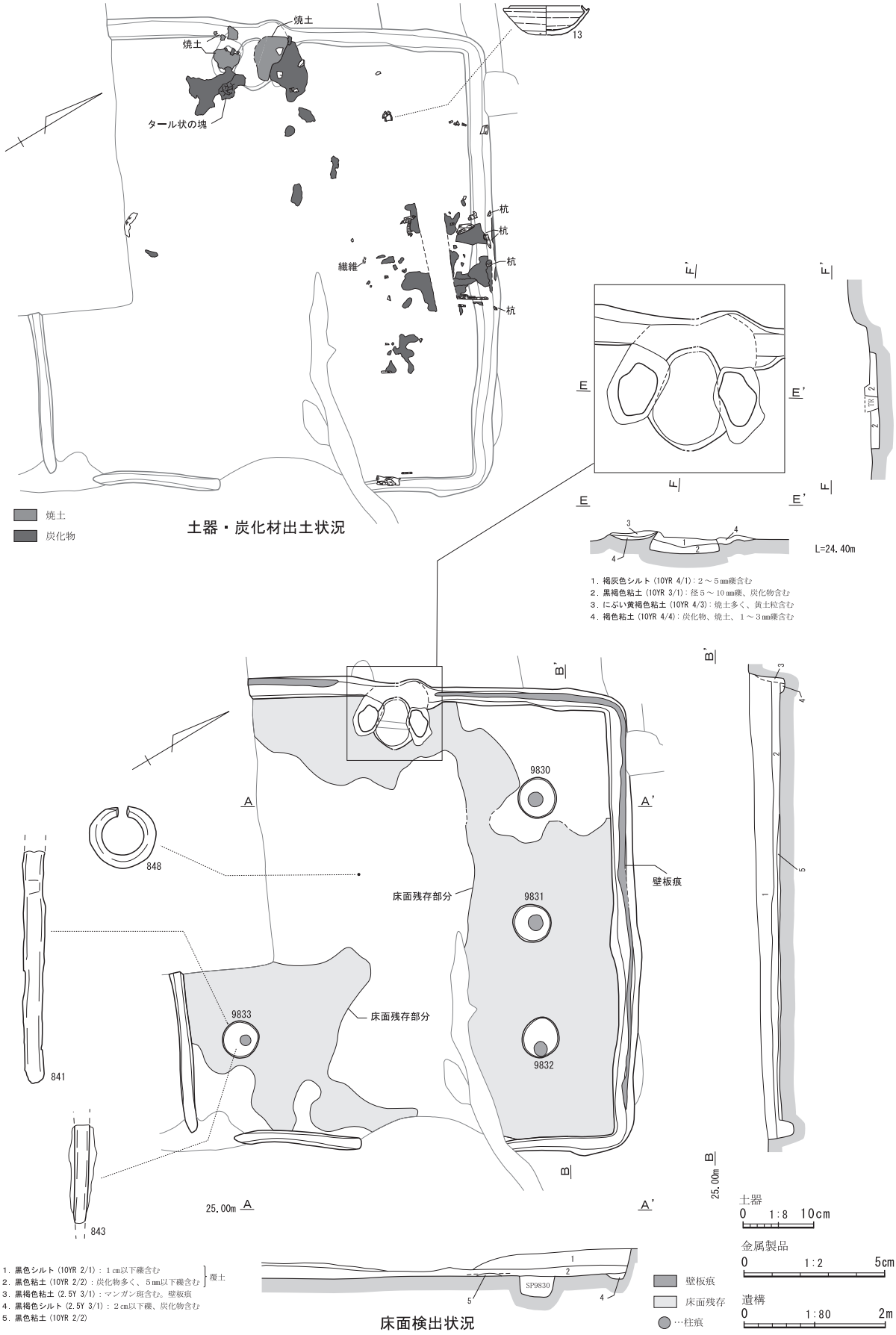
SB303（第17図）　SB302の南側に位置しているが、両住居跡の壁間が２ｍほどしか空いていないことを考えると、これらは同時に存在したものではないだろう。

床面検出時に、北側が黒色になっていることが確認され、下層に他の住居跡（SB308）が重複していることが知られた。南の隅が一部欠けていることを除けば、住居跡のほぼ全体を検出できた。ほぼ正方形で一辺4.8ｍほどを数える。したがって平面積は23㎡ということになろう。

北西面のほぼ中央部に竈が設けられている。竈の内側は良く焼けており、袖部分の粘土の積み土も残っていた。竈の周辺には炭化物が広がっている。

柱穴は４本が検出され、内側に径20㎝ほどの柱痕が確認できた。南隅の柱位置が多少ずれており、各柱を結んだ線は方形が多少崩れている。西南辺の壁溝は一部が床面の覆土に覆われていた関係で、完掘時には床面検出時よりもかなり幅が広がっている。

SB303からは土師器坏Ａ類（第18図**18**）と駿東甕（**19**～**21**）が出土している。21は東南隅の柱穴か



第 16 図　SB302 実測図

らの出土であり、19 は口縁の形態から D3 類に含めることができる。

SB304（第 19 図）　SB305 の東側に隣接して造られている。壁の方向は SB305 と良く似ているが、両者の間隔は３ｍほどとごく近いので、両者が同時に存在していたのかは判断が難しい。竈の位置などからみて、SB305 とは同時に存在したものではない可能性がある。東・西・南の３辺は検出されているが、北辺が攪乱されており、全容はつかめない。北東の隅が、わずかにとらえられていることから推定すると、東西 4.3 ×南北 4.5 ｍほどの大きさで、平面形は、ほぼ正方形を呈している。床面積は 20 ㎡ほどであろう。柱穴は４本が確認されている、いずれも径 40 ～ 50 ㎝ほどの太さで、中から径 20 ㎝ほどの柱痕が検出されている。柱の間隔はほぼ２ｍと揃っている。南西隅の柱穴（SP9771）から材の一部が検出されている。この柱穴は床面から 40 ㎝ほどの深さが確認できた。

北辺の中央部分に焼土および粘土のブロックが検出されており、竈の残欠であろう。したがって竈は北面に設けられていたと考えてよい。隣接する SB302・SB305 とは竈の方向が 90 度ずれることになる。

SH324 と重複しているが、竪穴住居跡の床面および周辺から SH324 の柱穴の位置が早くから観察できる。したがって、掘立柱建物（SH324）が竪穴住居跡を切り込んでいるものであろう。

住居跡からの出土遺物は少ないが、住居跡覆土から須恵器坏身の破片（第 23 図 **22**）が出土している。１期としたⅢ期末葉に比定できるもので、この竪穴住居跡の時間を示すものであろう。

SB305（第 20 図）　SH325 と重複し、SB304・SB303 に隣接している。北東側が後世の攪乱によって、大きく削り取られており、床面は全体の半分程度しか確認できないが、全長が確認できた南辺の長さが約７ｍであるので、平面形をほぼ正方形とすれば、この住居の床面積は 50 ㎡前後ということになろう。

床面を検出するときに SH325 の柱穴を確認しているので、その前後関係を知ることができる。竪穴住居跡の柱は２本が確認されただけで、北東は攪乱の範囲に入り確認できなかった。また、南隅も床面に攪乱が多く、柱の位置は明らかにならなかった。北および東の柱は径 20 ㎝ほどのものが確認できたが、これは柱痕であり、柱掘形は検出できていない。

西辺に竈が設けられている。粘土を積んだ袖部分が確認されている。床面近くから須恵器坏身（第 23 図 **23** ～ **25**）と長頸壷の蓋（**26**）、土師器鉢Ｃ類（**27**）、駿東甕の底部（**28**）等が出土しているが、須恵器には多少の時間差がある。

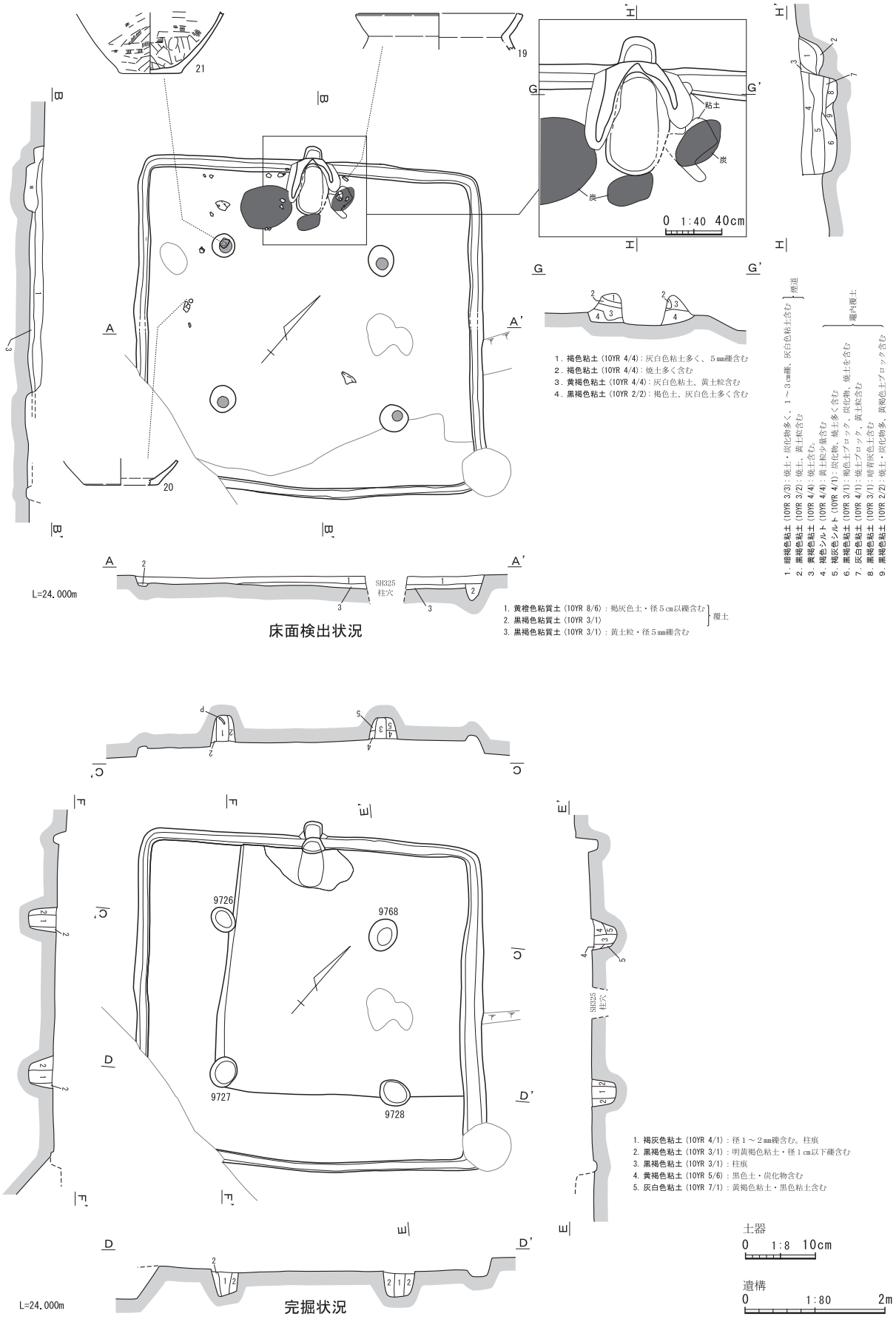
SB307（第 21 図）　調査区の西端で検出されており、SH311 と重複している。中央部分を後世の流路によって大きく削り取られている。また、南隅と東隅も攪乱によって壊されている。全長が確認できた東辺の長さは 5.5 ｍで、同じく東西も 5.5 ｍほどと考えられることから、この住居跡の床面積は約 30 ㎡前後ということになろう。床面の検出時に SH311 の側柱列が発見されていることから、掘立柱建物が新しいことを示している。SB307 に伴う柱穴は４本が確認されており、いずれも径 40 ㎝ほどである。柱痕は検出されていない。東隅の柱（SP9837）は大部分が SH311 の柱穴によって削り取られている。

竈の位置は確認できなかったが、比較的残りが良かった北東辺で、その存在を確認できていないので、北西辺に付いていた可能性が高い。

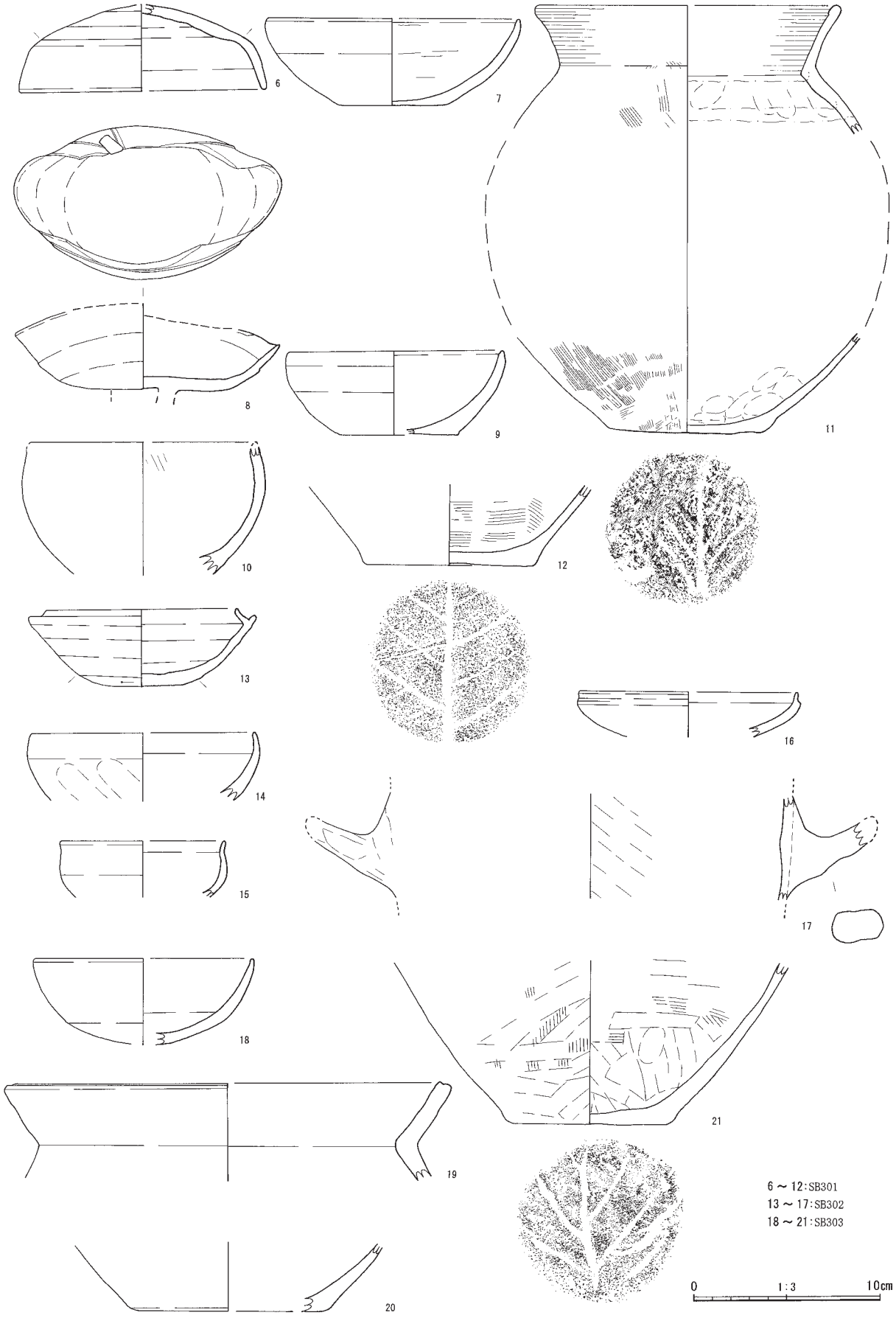
住居跡覆土から須恵器坏蓋・身（第 23 図 **29**・**30**）が出土している。坏蓋（**30**）は大きく変形し、熔着しているので、実用に耐えるものではなかった。

SB308（第 22 図）　SB303 の下層から検出されたもので、SB303 よりも一回り小さく、北角と東辺と西辺の一部を一致させている。一辺 3.5 ｍ× 3.7 ｍほどで、床面積 13 ㎡前後の小さな竪穴住居跡である。柱穴は竪穴住居跡の中央部寄りに４本が確認されているが、これが竪穴住居跡に伴う４柱穴だとすると、柱の間隔は 80 ㎝と 90 ㎝ほどで、柱全体が中央部にまとまりすぎているきらいがある。

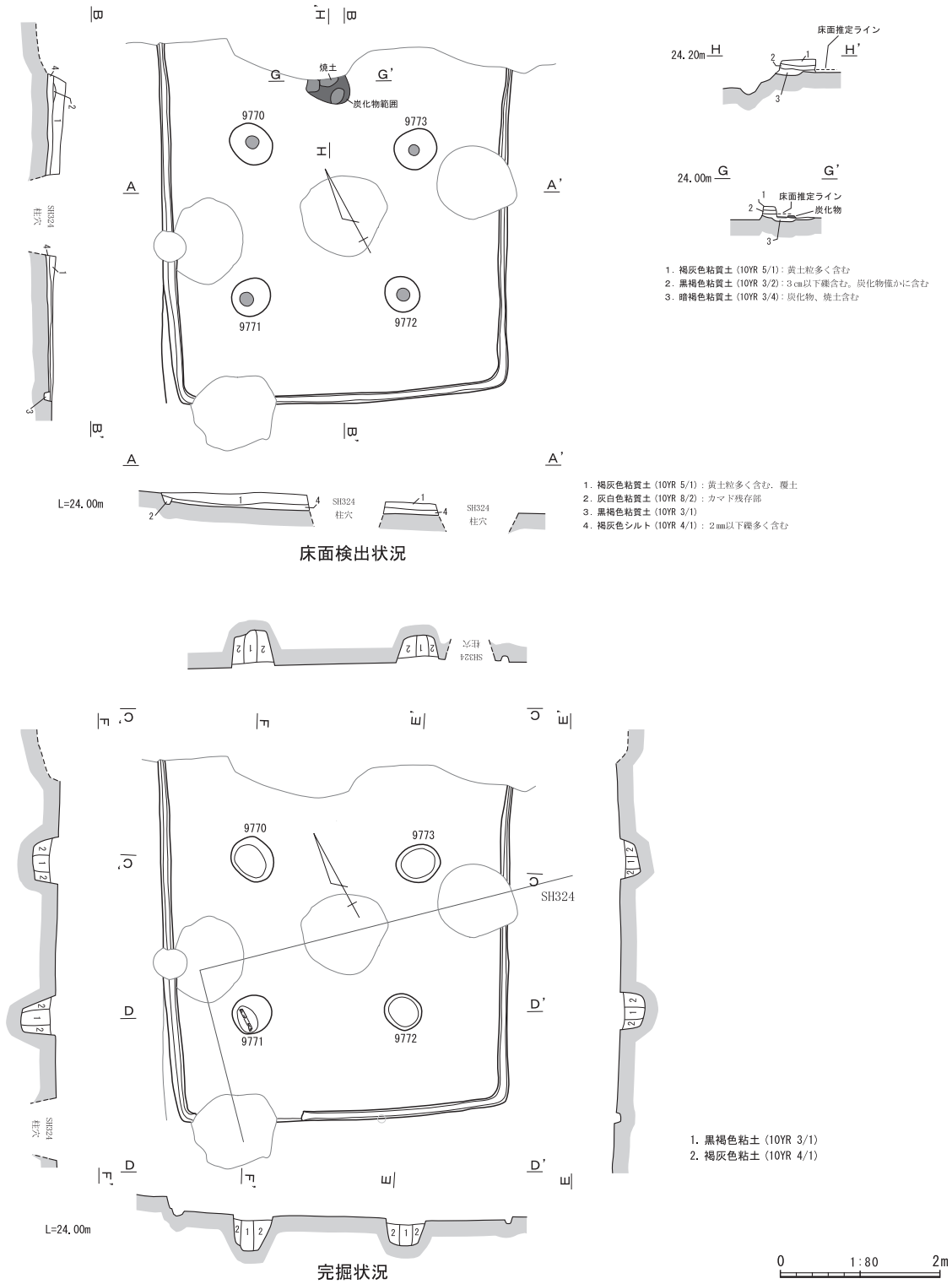
竈は北西辺のほぼ中央に設けられている。両袖の部分が確認されているが、加えて、住居跡の外側に煙出し部分が長く延びており、１ｍほどの長さが確認できた。このレベルで煙出しが確認できたことを



第 17 図　SB303 実測図

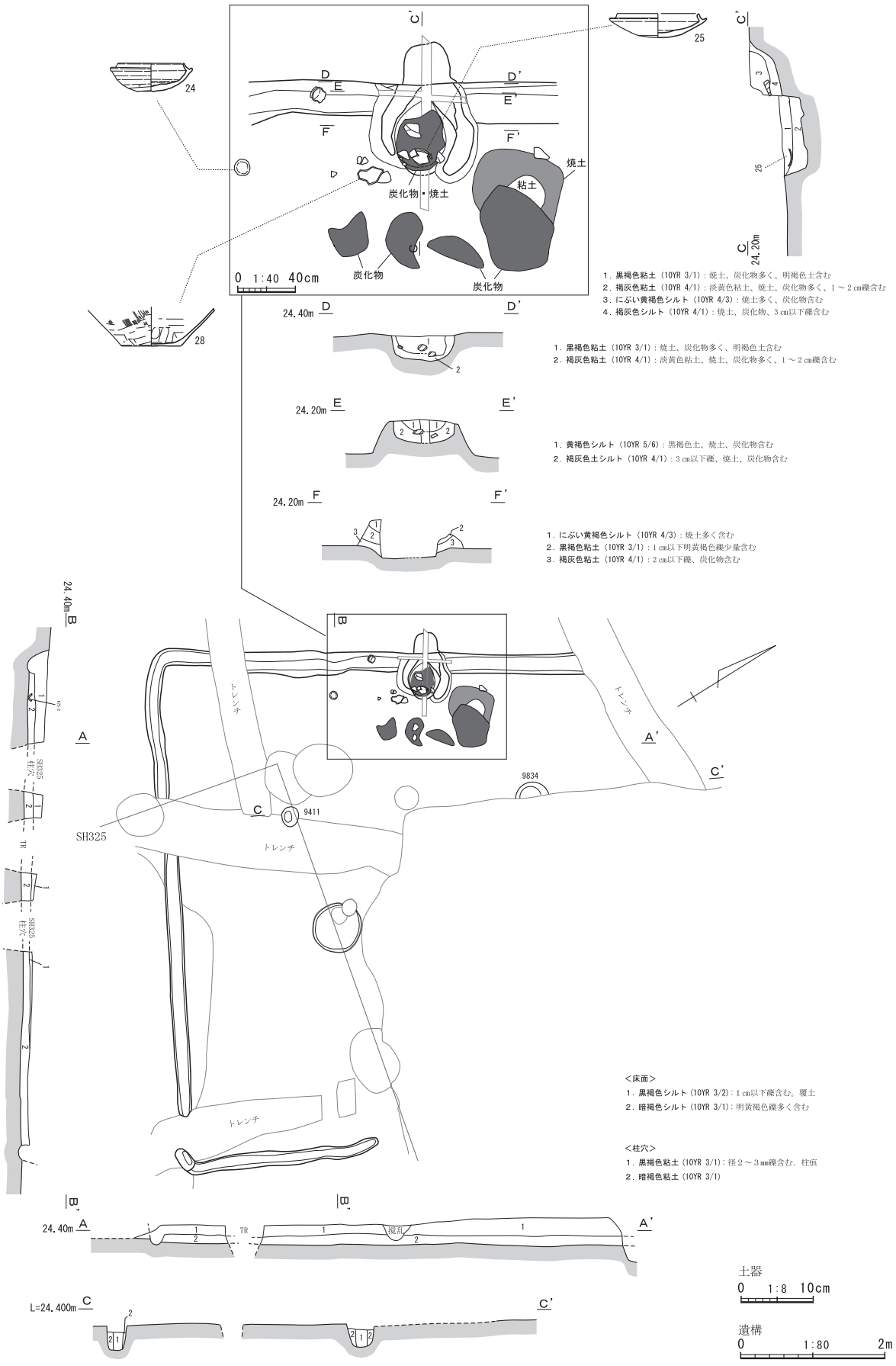


第 18 図　SB301・SB302・SB303 出土土器実測図

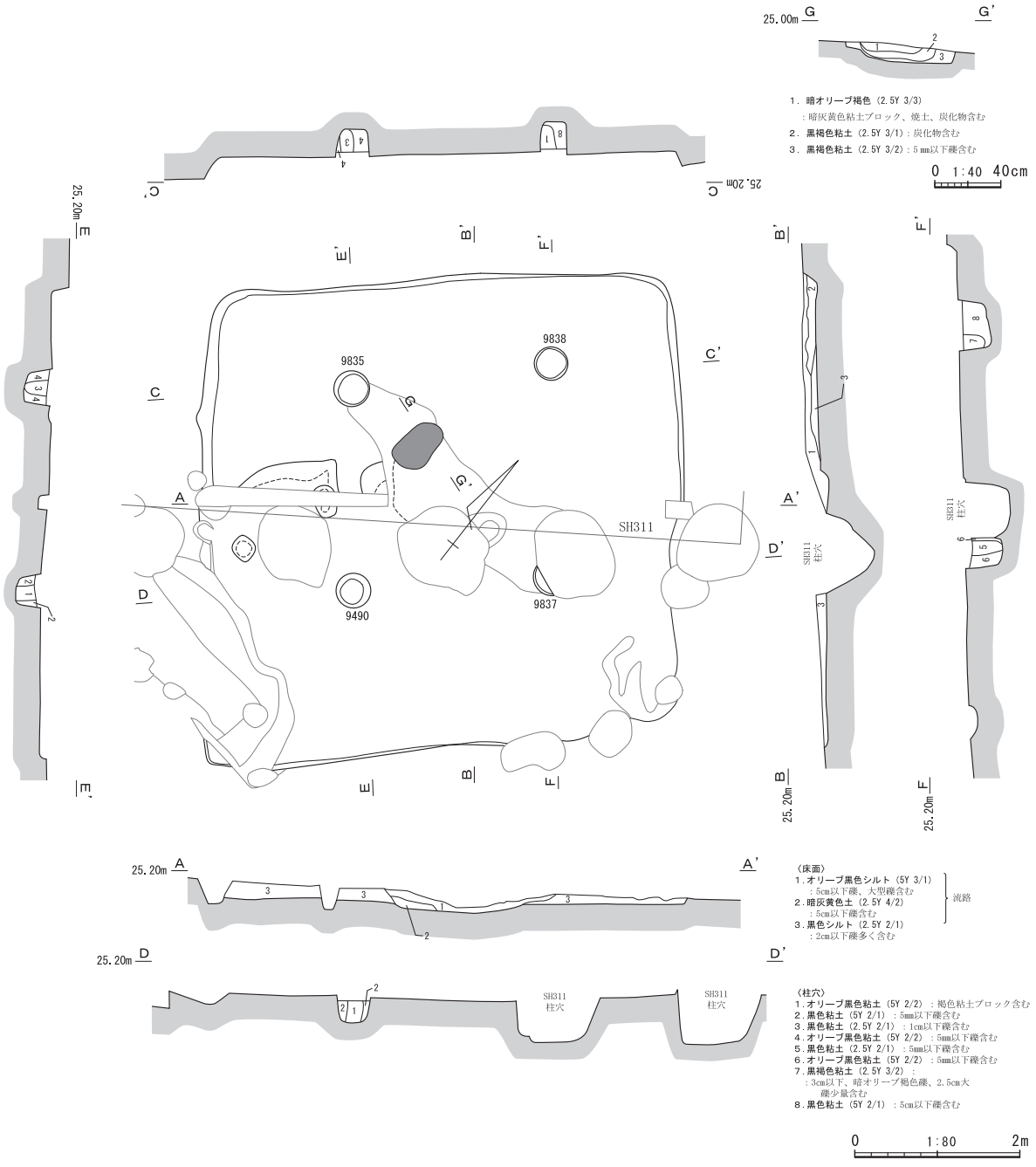


第 19 図　SB304 実測図

考慮すると、この竪穴住居跡の掘り込みはさほど深くはなかった。煙出しの赤化している部分の厚さが 10 ㎝ほどあったとしても壁の深さは 20 ㎝程度であったと考えられる。この地域で竪穴住居跡の掘り込みが比較的浅いことは早く浜松市伊場遺跡の調査で気が付かれており（浜松市教育委員会　1978)、ここでは竈に接した部分に粘土が配されていた。また、焼津市宮之腰遺跡では焼失した住居跡から背の高い草壁が検出されている（焼津市教育委員会　1982)。SB308 の場合も竪穴住居跡の掘り込みが比較的



第 20 図　SB305 実測図

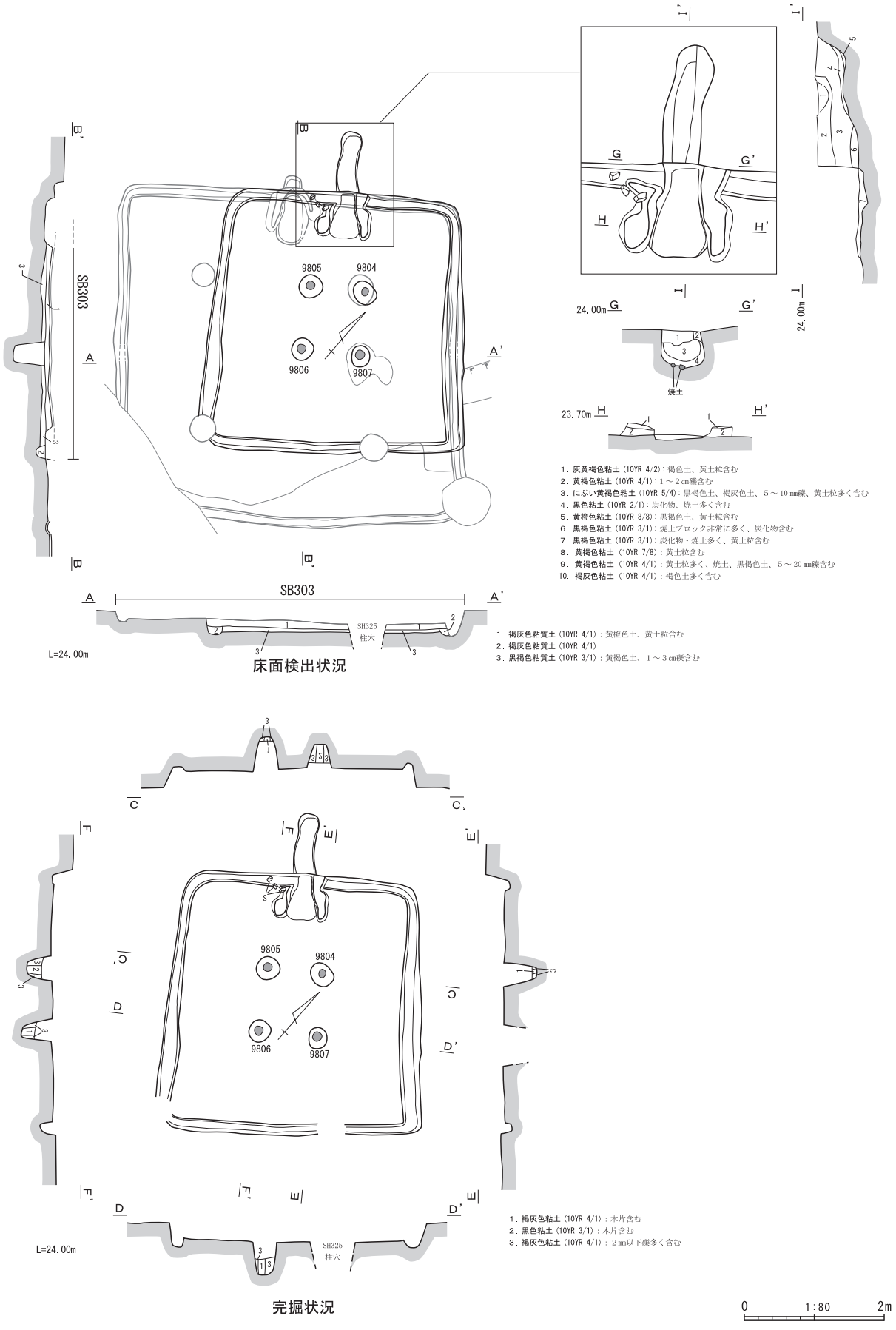


第 21 図　SB307 実測図

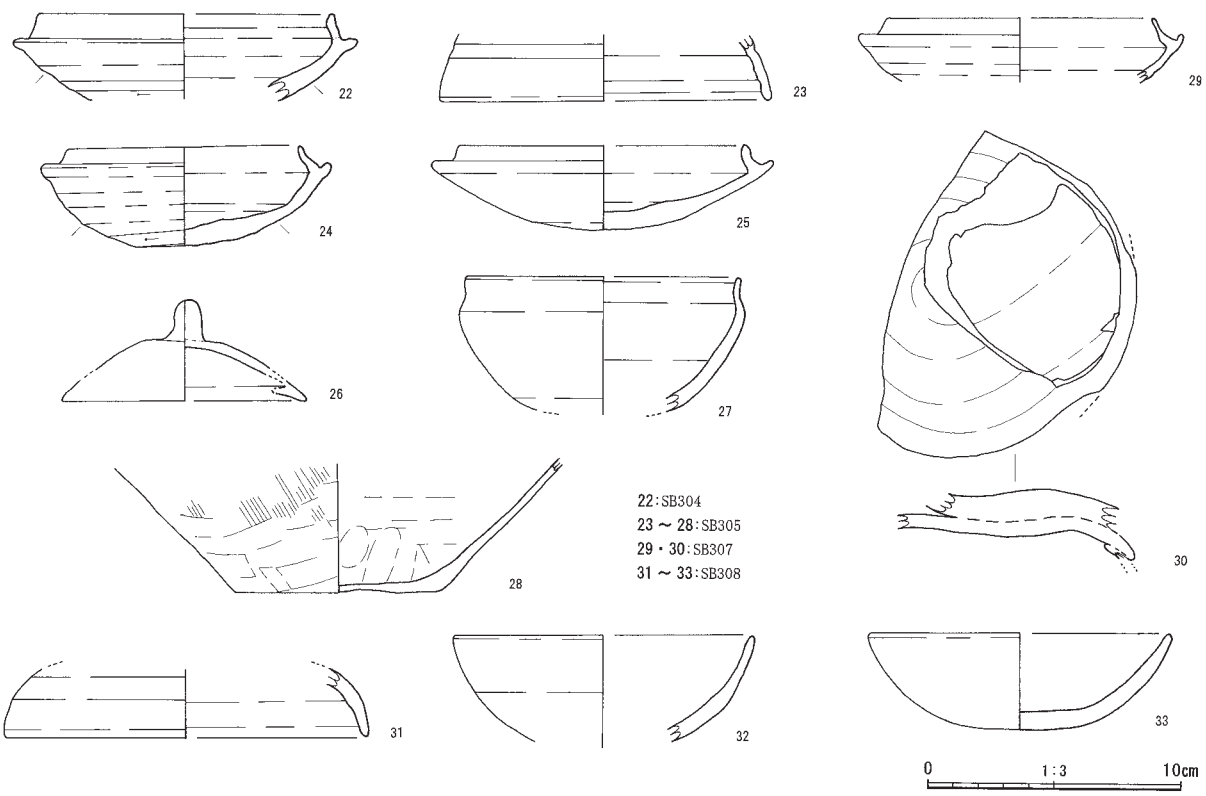
浅く､壁が比較的高く立ち上がっていたものであろう。住居跡覆土あるいは床面から土師器坏 A1 類（第 23 図 **32**）・A2 類（**33**）および須恵器坏蓋（**31**）の小破片が出土している。また、土製の紡錘車が 1 点出土している。底径 3.5 ㎝・径 2.2 ㎝と、ほぼ台形をしており、重量は 18g である。出土している土器から見るかぎり、SB303 と SB308 との間には大きな時間差はない。

両者の関係は、検出された順序と同じく、SB308 を埋めて新たに SB303 が造られているか、あるいは現地調査時に推定したように、SB303 は SB308 を拡張した竪穴住居跡であろう。

柱穴 SP9544　竪穴住居跡 SB304 の約２ｍ北側の 130B-2 グリッドで検出した直径 30 ㎝ほどの柱穴である。覆土内部には柱根(『寺家前遺跡Ⅱ』第５図 18)が出土している。柱根はイヌマキ属の芯持ち材を使っている。周辺で検出した掘立柱建物の柱も一部にイヌマキ属が使われている。



第 22 図　SB308 実測図



第 23 図　SB304・SB305・SB307・SB308 出土土器実測図

２　掘立柱建物跡

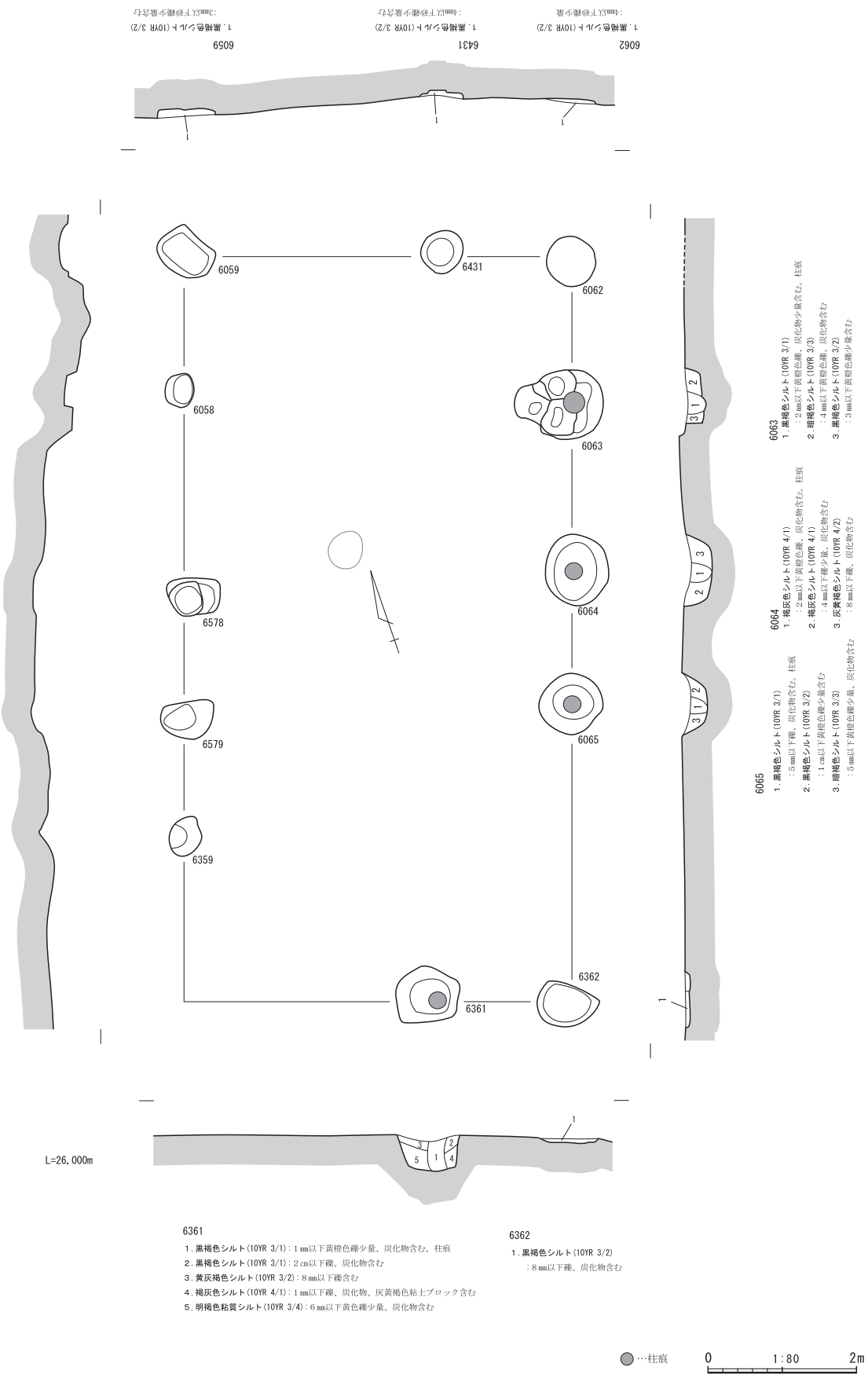
SH203（第 24 図）　SH210 と柵（SA201）を挟んだ反対側（西側）に位置する建物で、一部の柱穴が検出されておらず、柱穴の大きさにも多少の差があることから、あるいは建物の形態・規模に問題があるかもしれない。ここでは、５間×３間の南北棟の建物を推定している。桁行 10 ×梁行 5.1 ｍで、平面 51 ㎡と規模の大きな建物である。柱間は東側柱では、桁行が２ｍ前後と比較的良く揃っているが、西側では中間の柱の位置が２本とも少し乱れている。あるいは、この場所に入口などの造作が行われていたのかもしれない。梁行は柱穴の欠けている部分を含めて、1.7m 間隔と良く揃っている。柱の痕跡が確認された部分が４本認められた。束柱の存否はやはりわからない。

SH209（第 28 図）　Ⅱ -1 群の中心的な建物である SH210 の北側にあり、棟方向はほぼ東西方向で、SB210 の側柱の方向と一致し、西端（妻側柱）の柱列も SH210 の西端の柱列と並んでいる。一部に検出されなかった柱穴があるが、４間×３間の東西棟の建物と推定している。あるいは桁行は５間であったのかもしれない。現況で桁行 6.7 ×梁行 4.6 ｍで、平面積は 30.8 ㎡ほどと規模の比較的大きな建物である。

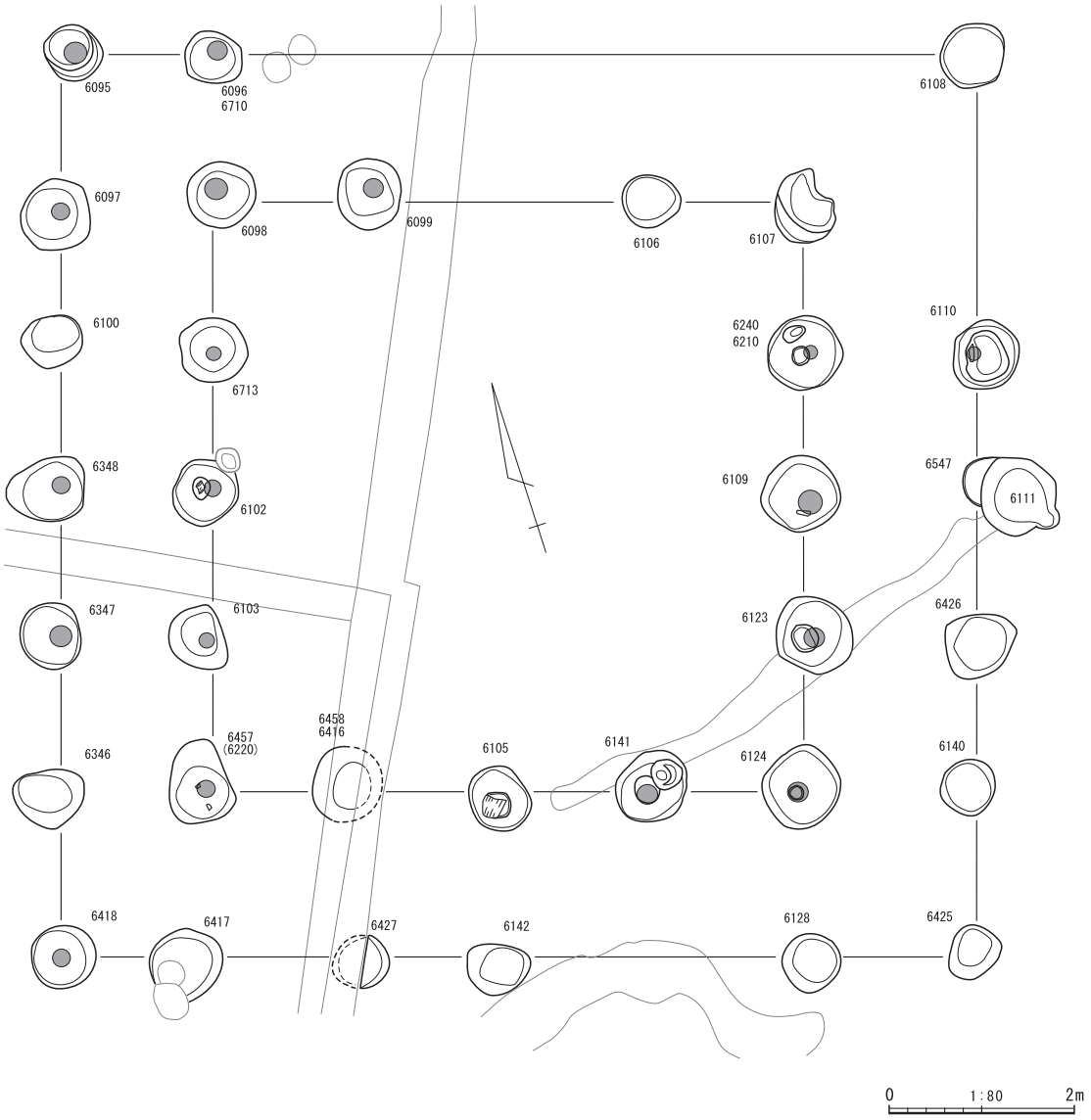
柱間は桁行が西から 1.8 ＋ 1.6 ＋ 1.6 ＋ 1.6 ｍ、南北方向（梁間）は 1.5 ＋ 1.6 ＋ 1.5 ｍ　と比較的良く揃っており、隣接する SH210 の柱列ともほぼ一致している。したがって、その位置からもわかるように、SH210 と密接な関係をもった建物であろう。束柱の存否はやはり良くわからない。

SH210（第 25 ～ 27 図）　４間×４間のほぼ正方形をした身舎の４面に庇を付けた規模の大きな建物である。身舎の部分は東西 9.8m ×南北 9.8m で、平面積は 40.9 ㎡を数える。庇の部分を含めると一辺 9.8 ｍで、平面積はおよそ 96 ㎡になり、寺家前遺跡で検出された建物では突出した大きさになる。

庇の北面の部分に柱が検出されていない箇所があるが、後世の攪乱あるいは削平によって失われたものであろう。柱間は良く揃っており、南北方向は南から 1.8 ＋ 1.6 ＋ 1.6 ＋ 1.6 ＋ 1.6 ＋ 1.6 ｍ（前



第 24 図　SH203 実測図



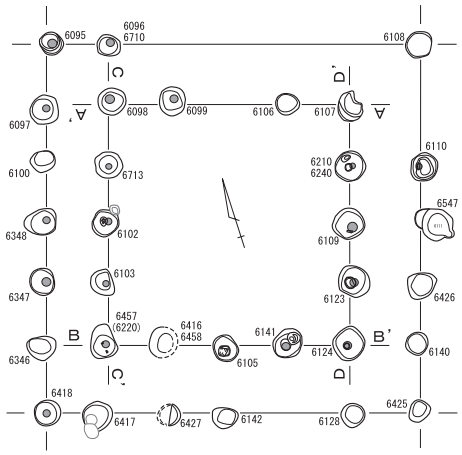
第 25 図　SH210 実測図 1

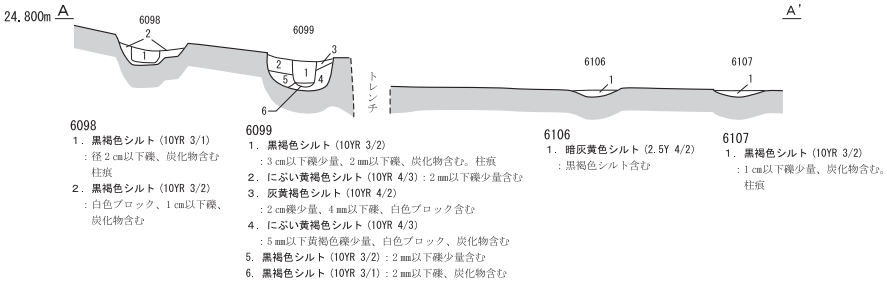
後の１間分が庇になる）となり、東西方向も東から 1.8 ＋ 1.6 ＋ 1.6 ＋ 1.6 ＋ 1.6 ＋ 1.6m と同じである。南面と東面の庇の柱間がやや広い。地形や建物の配置から、やはり東面する建物であったと考えている。東面は柱の通りも良いが、南面する庇の西１間（身舎の西面する側柱列）あるいは北面する庇の西１間（身舎の北面する柱列）の柱が身舎の柱列とか多少のずれがある。

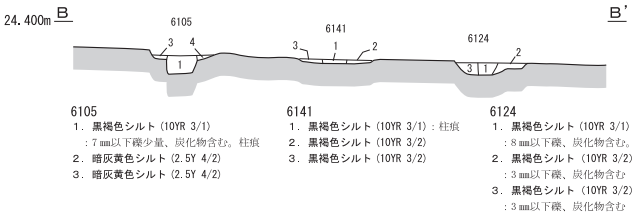
柱掘形は径 70 ～ 80 ㎝ほどで、良く揃っているが、総じて規模が大きい。柱痕が残っているものから推定すると、柱の径は 25 ㎝ほどで、他の建物に比較すると、かなり太いことがわかる。一部の側柱列には礎板が残っているものが認められ、一部はスギ材（SP6105）であった。

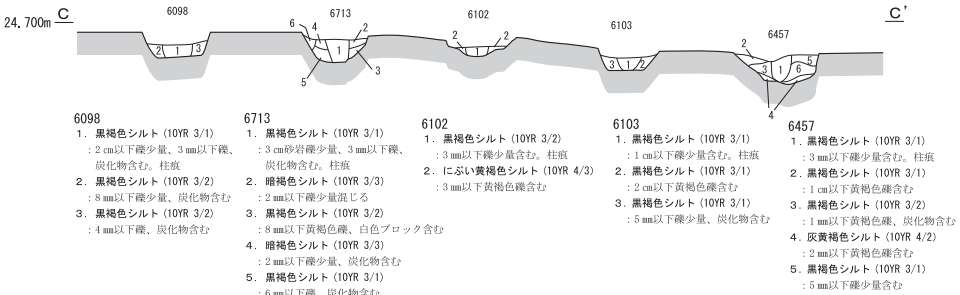
柱掘形の深さは身舎の部分が深く、庇部分では浅くなっており、確認できた部分では 20 ㎝以上の差がある。浅かった廂の柱跡は削られて、確認できなかったものであろう。

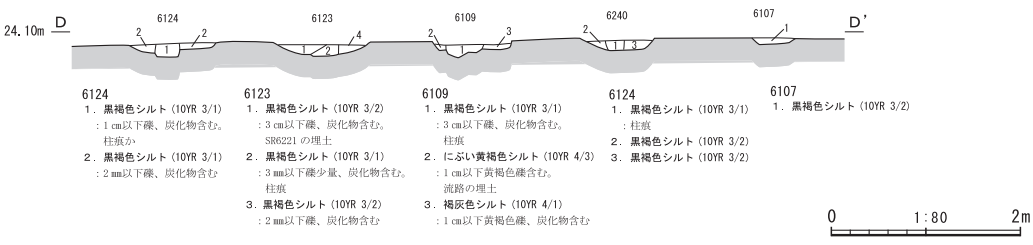
建物の内部には束柱の痕跡は確認できなかったが、検出できた柱掘形がかなり浅いように、後世、上層部分がかなり削り取られていることを考慮すると、束柱のあった可能性は強いが、その存否は不明でとしておく。



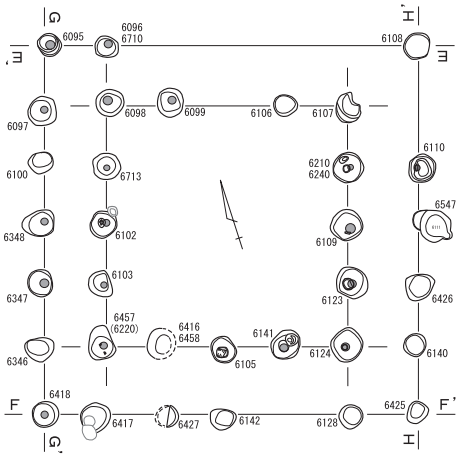


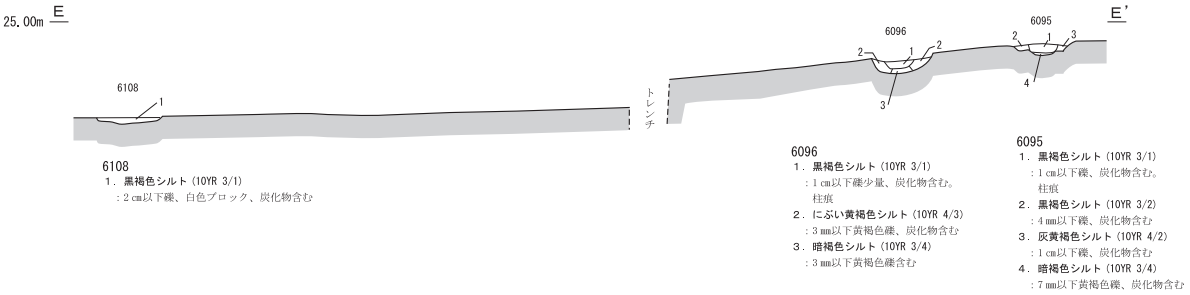


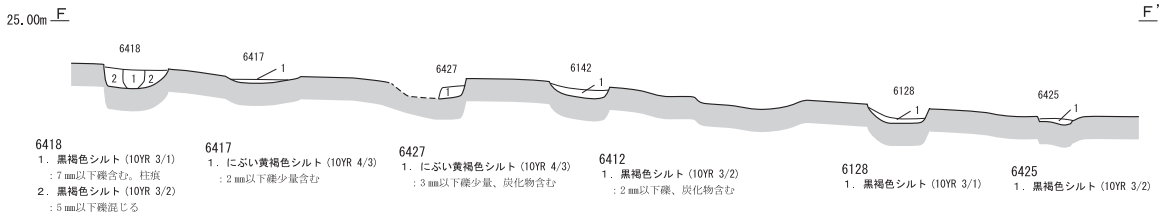


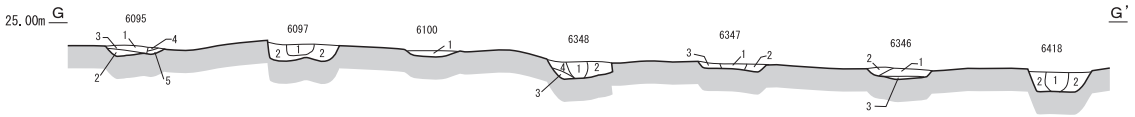


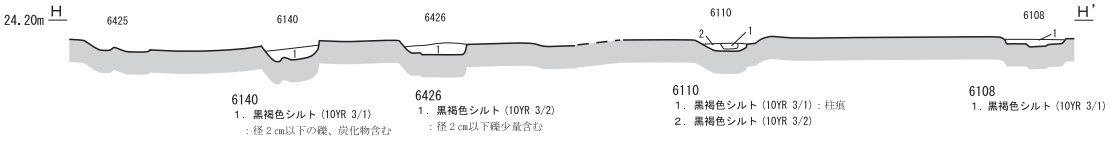
第 26 図　SH210 実測図２

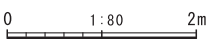




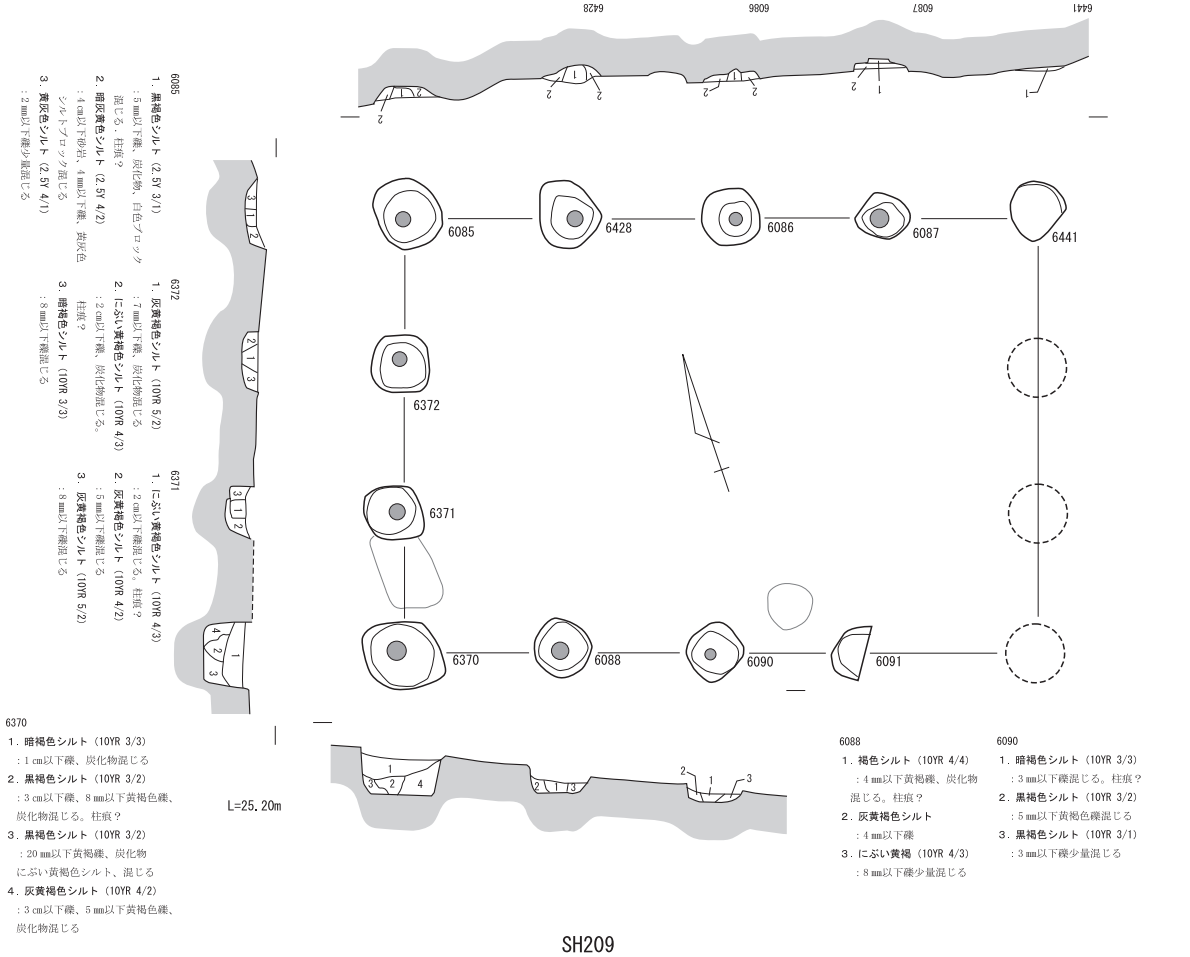




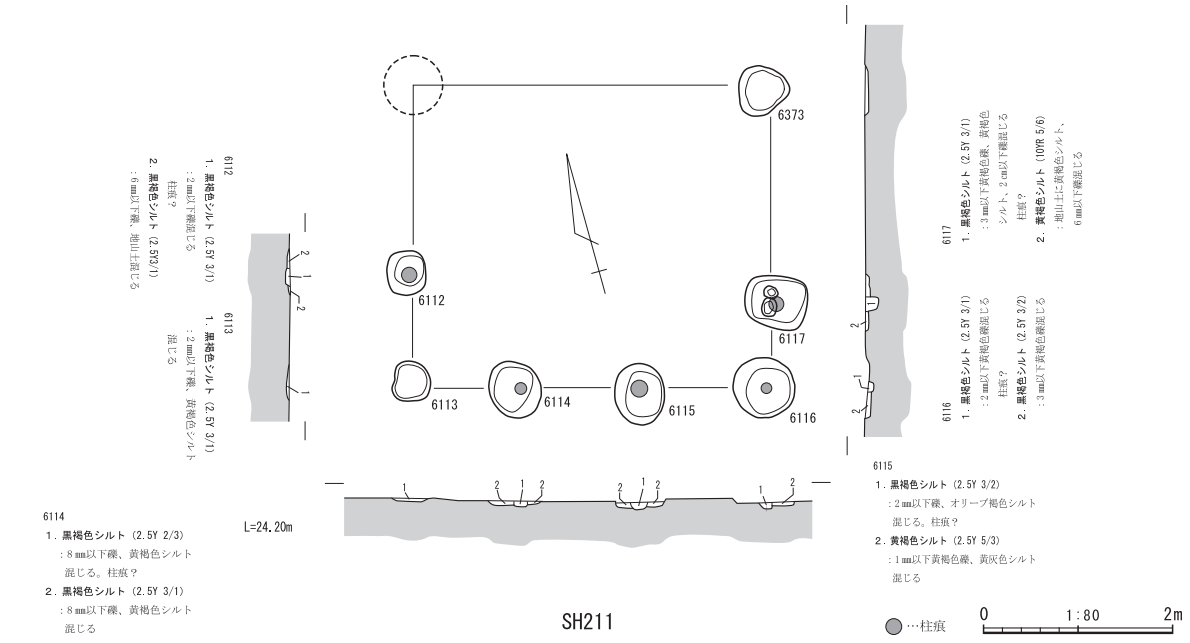




第 27 図　SH210 実測図３

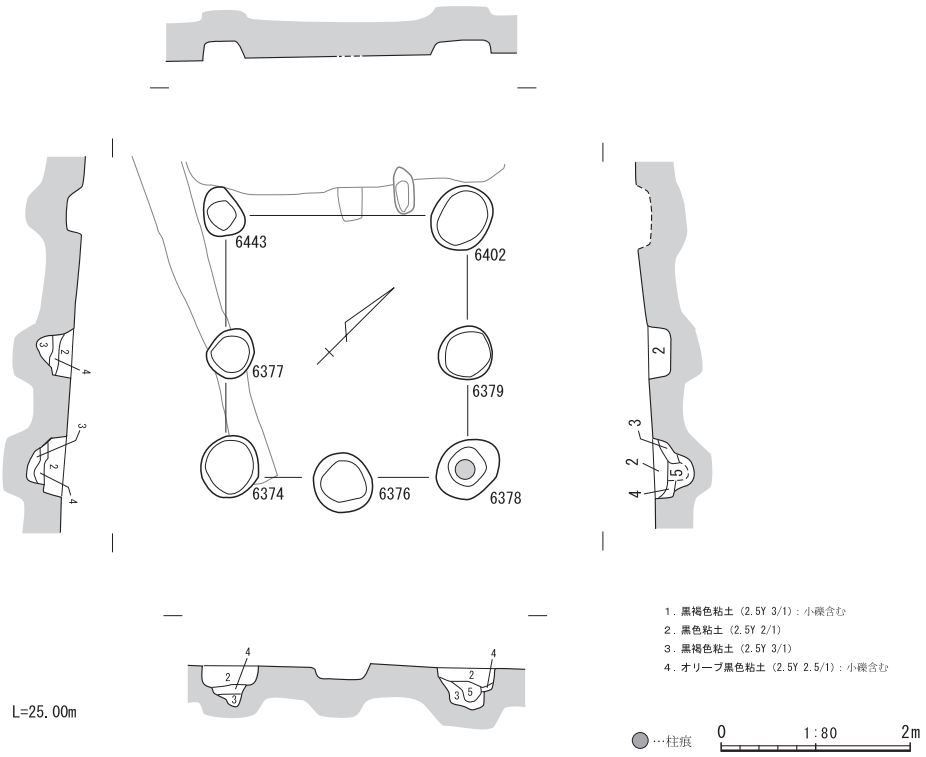


SH209



SH211

第 28 図　SH209・SH211 実測図



第 29 図　SH217 実測図

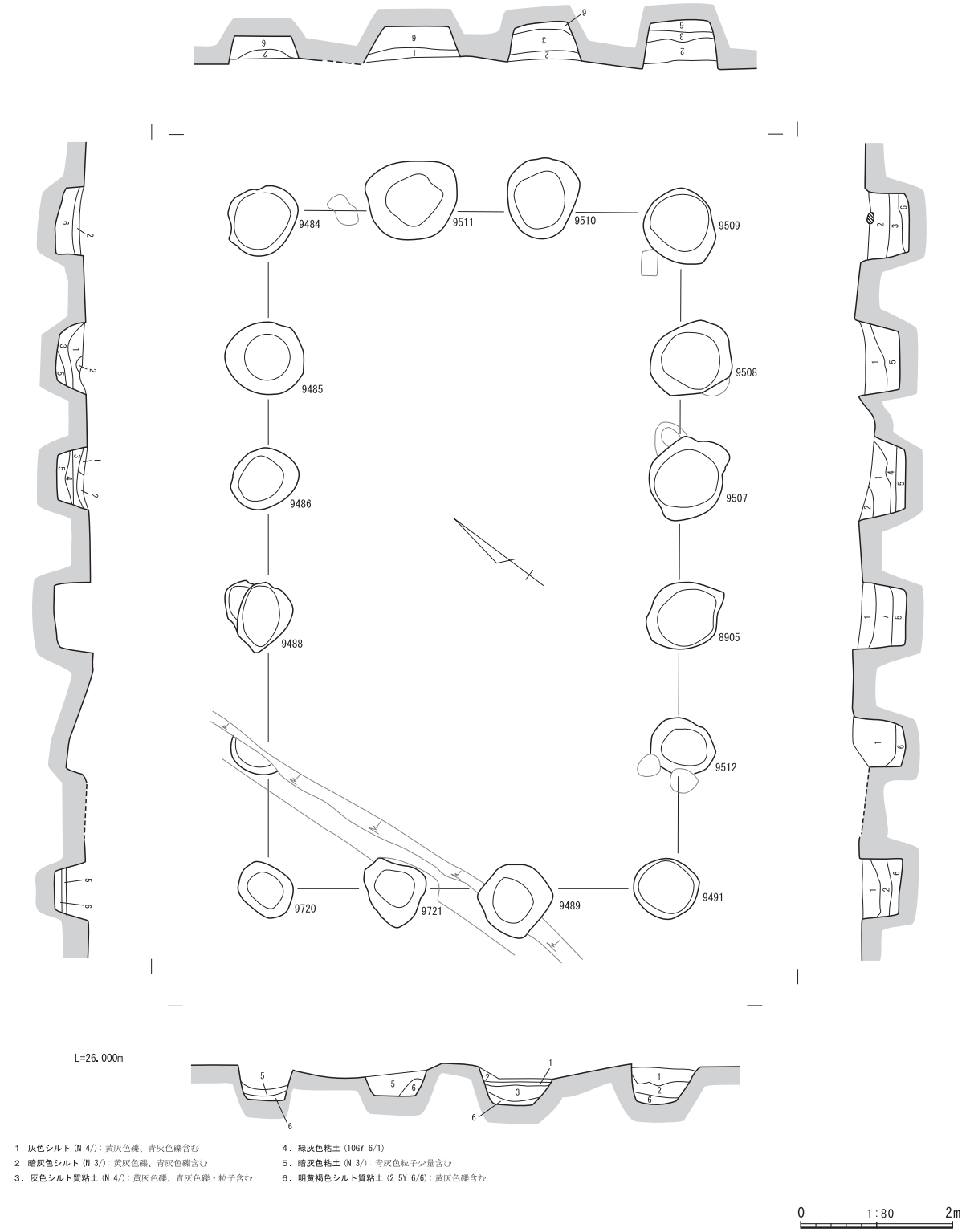
SH211（第 28 図）　SH209 の並びで、その東側に位置する建物である。柱穴の一部が検出されていないが、おそらく、３間×３間の東西棟の建物であろう。桁行 3.8 ×梁行 3.3 ｍで、平面積は 12.5 ㎡ほどの小型の建物である。SH210 に近接した南側の柱列は SH209 の側柱列と良く似た方向をしているが、多少のずれをもっている。柱間は桁行 1.2 ＋ 1.2 ＋ 1.4 ｍで、梁行は東西で柱位置が多少異なっているが、その間隔は基本的には 1.1 ｍほどであろう。平面が正方形に近いことから、倉庫風の建物であろう。

SH217（第 29 図）　調査区の北端で検出された２間×２間の建物で、北面の側柱は SB217 と重複している。2.7 × 2.5 ｍとほぼ正方形に近い平面形をもった建物で、面積は７㎡と小さい。倉庫風の建物である。東北隅の柱穴に柱痕が残っていた。

SH311（第 30 図）　E-3 区西端で検出された桁行５間×梁行３間の大きな建物で、桁行は 9.0 ｍ、梁行は 5.4 ｍで平面積 48.6 ㎡の規模をもっている。柱間は桁行が 1.8m、梁間がやはり 1.8m と全体に良く揃っている。側柱穴の底に礫を詰め、根固めとしている部分（SP9507）と柱痕が観察できた。また、柱穴 SP9721 では根固め石を確認している（図版 19）。束柱の痕跡は確認できなかったので、この建物が床張りの建物であったのか否かはわからない。

SB307 と重複しており、掘立柱建物（SH311）の柱穴が竪穴住居跡の壁面を壊しており、他の柱穴も床面を切り込んでいるので、掘立柱建物がより新しいことが確認できる。周囲の地形から東南方向を正面とする建物であろう。規模からみて、Ⅰ群の中心になる建物であろう。

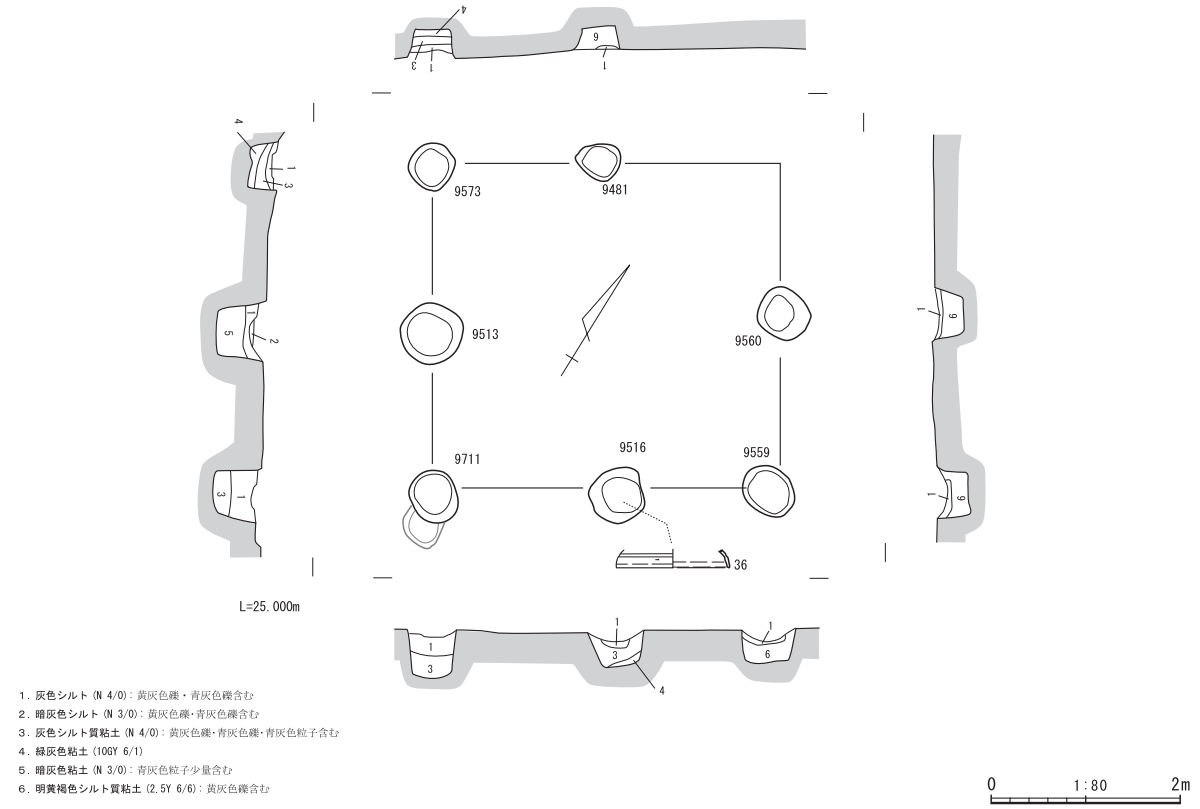
SH312（第 31 図）　SH311 の東南側にある２間×２間の建物で、側面の長さ 3.6 × 3.6 ｍで平面積 13 ㎡ほどの広さをもった建物である。北隅の柱は確認できていない。柱間は東・西の両面は 1.8m と良く揃っているが、南面はややばらつきがある。側柱のみで、束柱は確認されていないが、上部がかなり削られていることや、建物の平面形などから、束柱があった可能性は残っている。高床の倉庫であった可能性が強い。側柱の方向は SH311 と良く似ているが、ややずれがある。南辺中央の柱穴（SP9516）の覆土か



第 30 図　SH311 実測図

ら１期としたⅢ期後葉段階の須恵器坏蓋の小片が出土している（第 47 図 35）。

SH313（第 32 図）　SH312 に隣接した掘立柱建物で、やはり２間×２間で、一辺 2.7 × 2.9 ｍとほぼ正方形を呈し、床面積は 7.8 ㎡ほどである。柱間は 1.3m ほどと短い。中央に束柱は検出されていないが、側柱の深さが 50 ㎝ほどあることから、束柱跡が削られてしまったとは思えない(註５)。したがって、

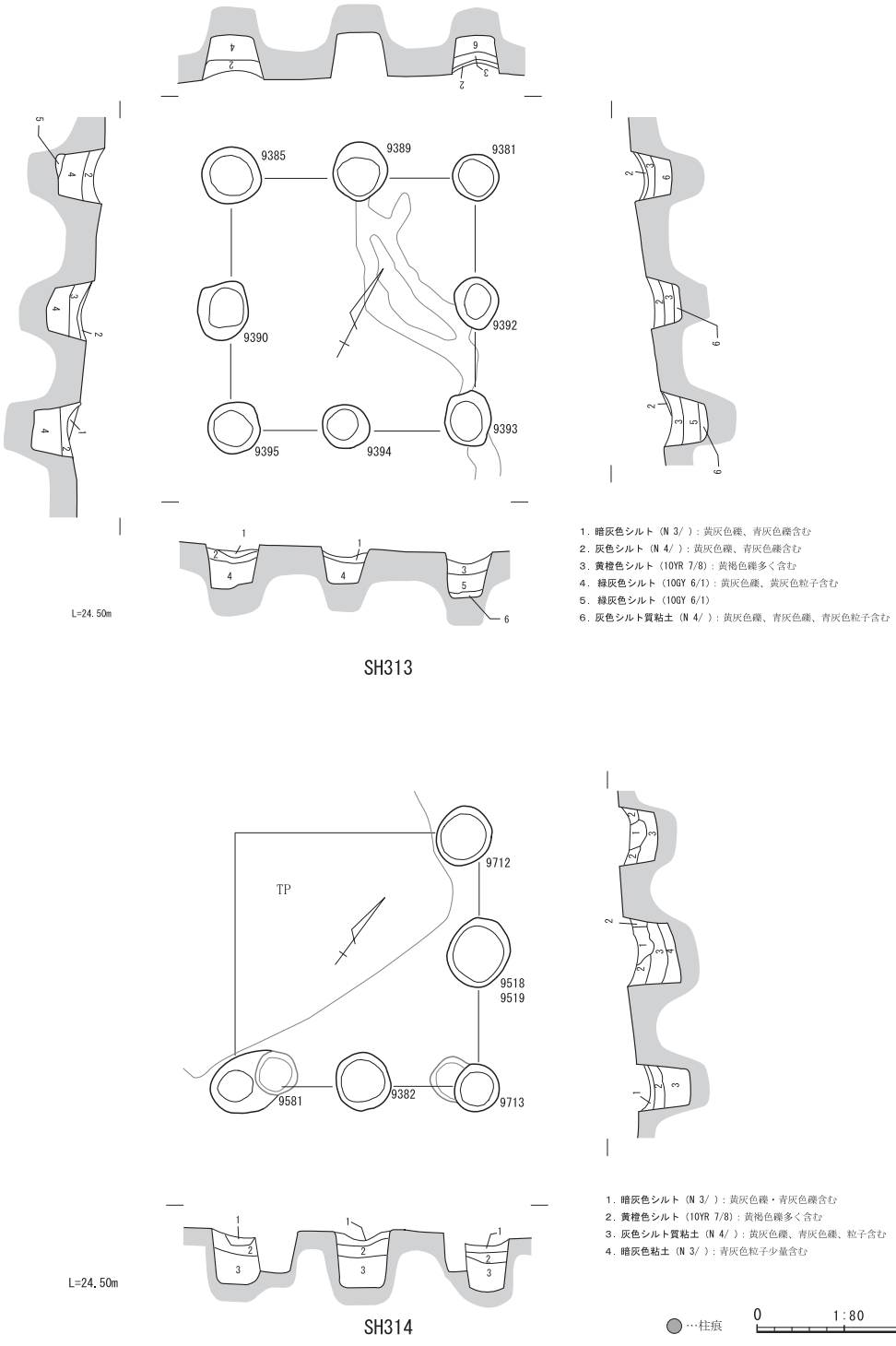


第 31 図　SH312 実測図

本来この建物は床張りの建物ではなかった可能性がある。側柱の方向は隣接する SH312 と良く似ている。これらは建物の位置とその規模から、SH311 に付属する倉庫だと考えられよう。

SH314（第 32 図）　SH313 に隣接する２間×２間の建物であろうが、東側半分は試掘孔によって削り取られている。2.8×2.9ｍと平面はほぼ正方形で、床面積は８㎡ほどと推定できる。やはり、柱間は 1.4m ほどと狭い。中央部分は削り取られており、束柱の存在は明らかではない。側柱の方向は SH311 の棟方向と一致しており、その位置から見ても、それと密接に関係する建物であろう。SH313 と近接しており、軒の出の長さを考慮すると、両者が同時に存在していたと考えることは難しい。建物の形態・規模から、やはり倉庫であったと思われる。

SH315（第 33 図）　SR9526 の近くにある建物で、梁行３間×桁行４間のほぼ東西棟の建物である。棟方向は北側に広がる建物群のうち SH209・SH210 の側柱列あるいは棟方向と一致し、また、SA201 ともほぼ直角に交わっている。SH210 を中心とするⅡ-1 群の西端に位置する建物である。桁行 7.6 ×梁行 5.2 ｍで、平面積 39.5 ㎡と比較的大きな規模をもっている。柱間は、桁行方向は 1.8 ｍと揃っているが、梁行は北から 1.8 ＋ 1.6 ＋ 1.8 ｍと中央の柱間がやや狭い。いくつかの側柱に柱根あるいは柱痕が残っているものが認められ、それによれば柱の太さは 20 ㎝程度である。また、南東隅の柱（SP9249）と南側柱（SP9350）では柱穴の底に礫を詰めた状態が検出されている（図版 23）。この建物は SH316・SH318 および SH320 と重複しており、各柱穴の切り合いは第 33 図に示したとおりである。SH319 の北西隅の柱穴（SP9230）を SH315 の南西隅の柱穴（SP9228）が切っており、同じく SH315 の南側柱（SP9350）が SH319 の北側柱（SP9349）を切っている。SH318 の東南隅の柱穴（SP9352）を SH315 の側柱（SP9350）が切っており、したがって SH315 は SH318・SH319・SH320 よりは新しい。SH316 とは直接柱の切り合いがないので、検証できないが、SH318 と SH316 が同一の方向をもち、隣接した建物であることを考慮す



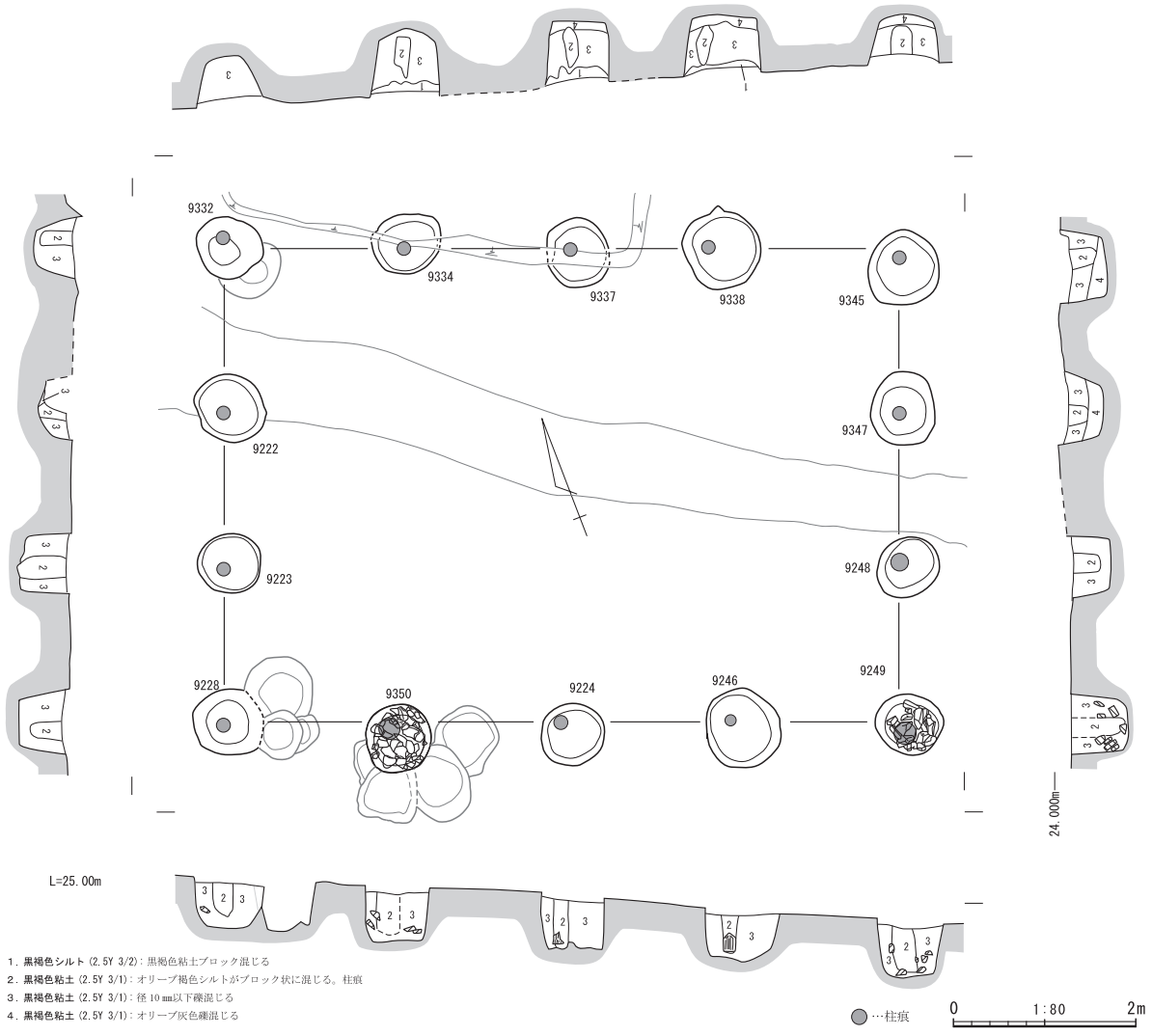
SH313

SH314

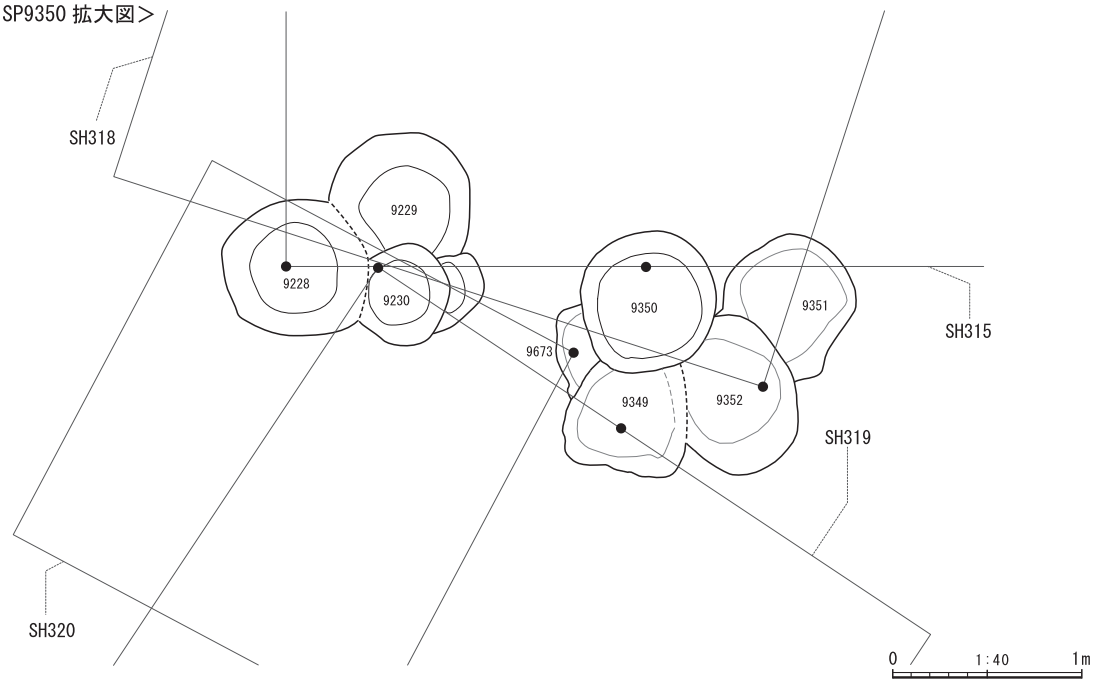
第 32 図　SH313・SH314 実測図

ると、SH315 は SH316 よりも新しいものだと考えてよいだろう。

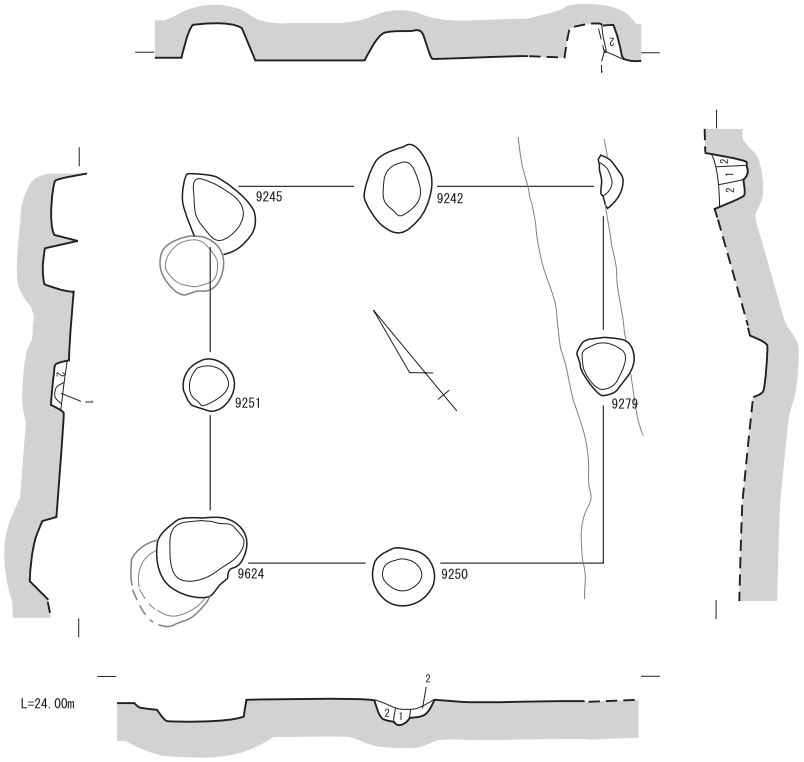
SH316（第 34 図）　SH318 の東側に隣接し、これとほぼ同じ棟方向と同じ規模をもった建物が検出されている。先に触れたように、SH315 と重複して検出された（柱穴の直接の切り合いはない）もので、２間×２間の建物である。南隅の柱が欠けている。東西 4.0 ×南北 4.2 ｍとほぼ正方形で、床面積は 16.8 ㎡ほどである。柱間は一辺が 2.1 ｍ、他が 2.0 ｍとよく揃っている。この建物も中央に束柱の痕跡は見つからなかった。この建物は SH318 あるいはより東側にある SH339・SH327 とも側柱の方向が一



＜SP9228・SP9350 拡大図＞

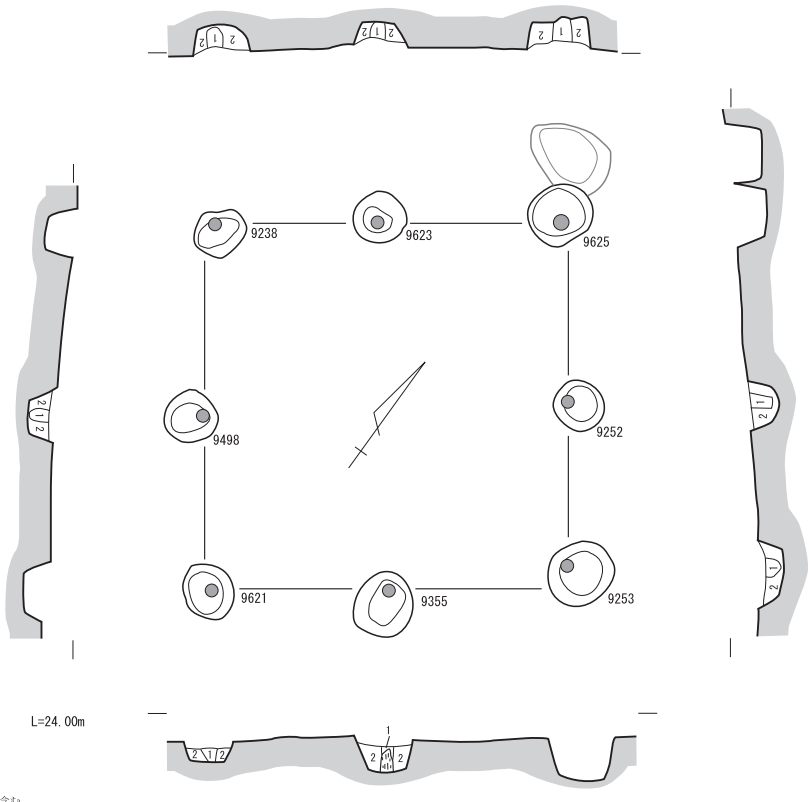


第 33 図　SH315 実測図



1．黒褐色粘土（2.5Y 1/3）：径１mm以下礫・炭化物混じる
2．黒色粘土（2.5Y 1/2）：径５mm以下礫混じる

SH316



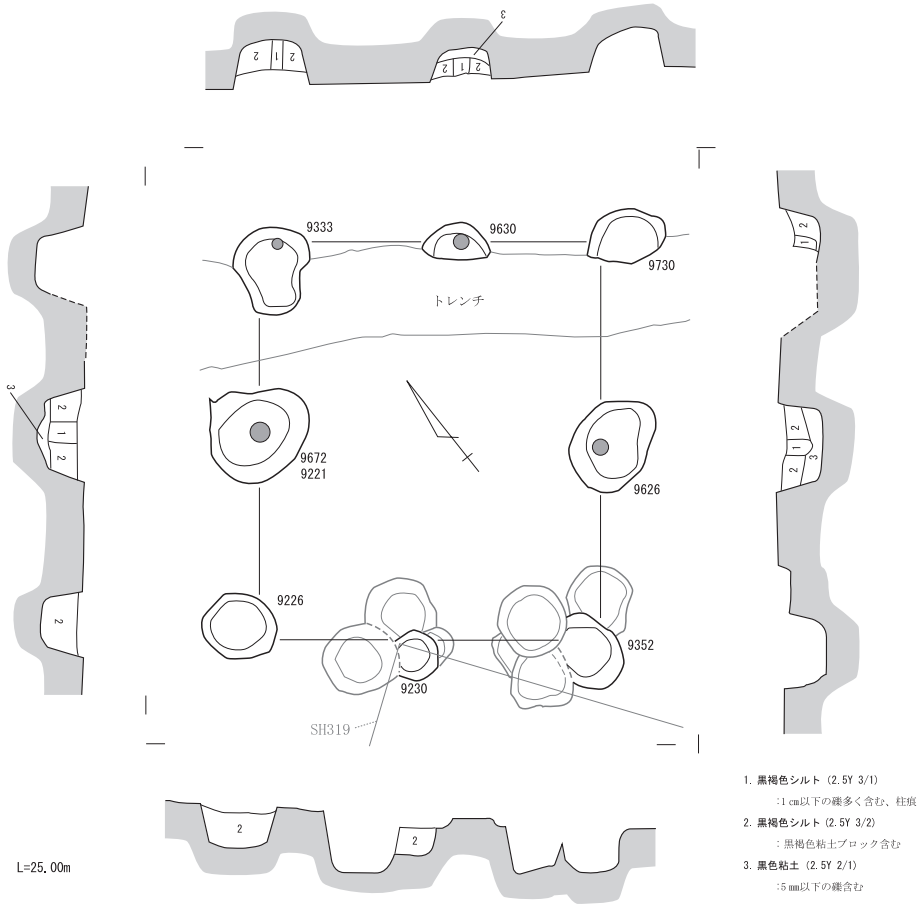
1．黒褐色粘土（2.5Y 3/1）：径５mm以下礫含む
2．オリーブ黒色粘土（2.5Y 2/2）：径１cm以下礫含む

SH317

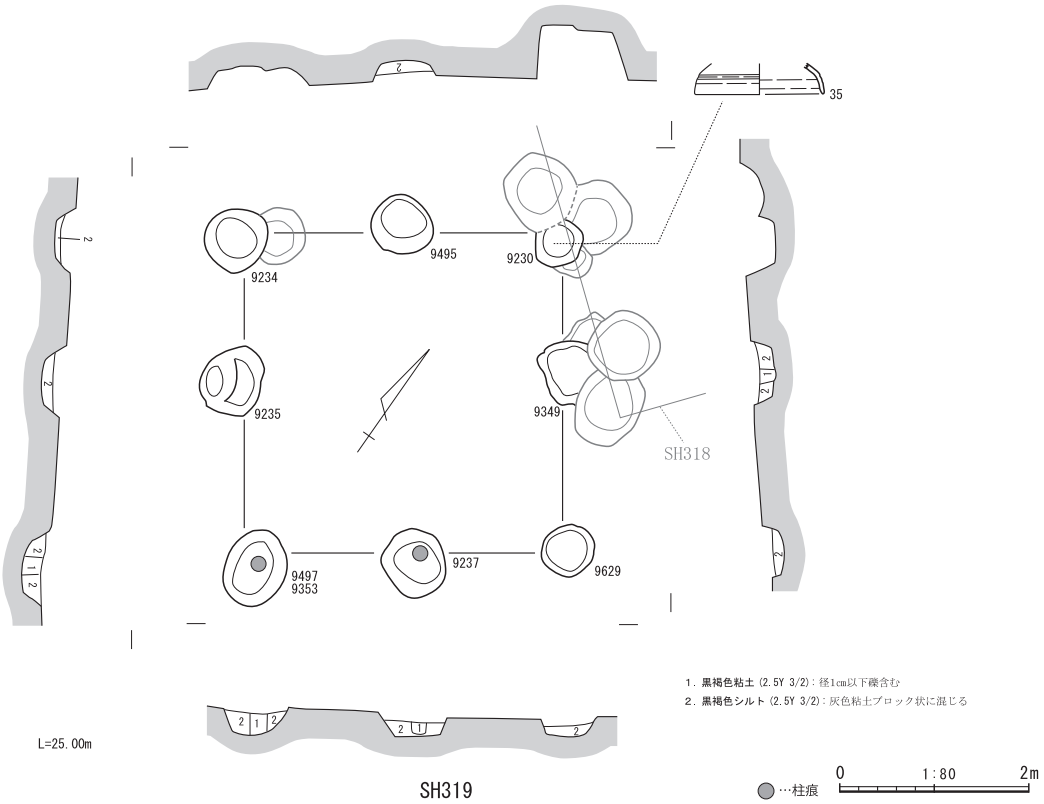
●…柱痕

0　1:80　2m

第 34 図　SH316・SH317 実測図

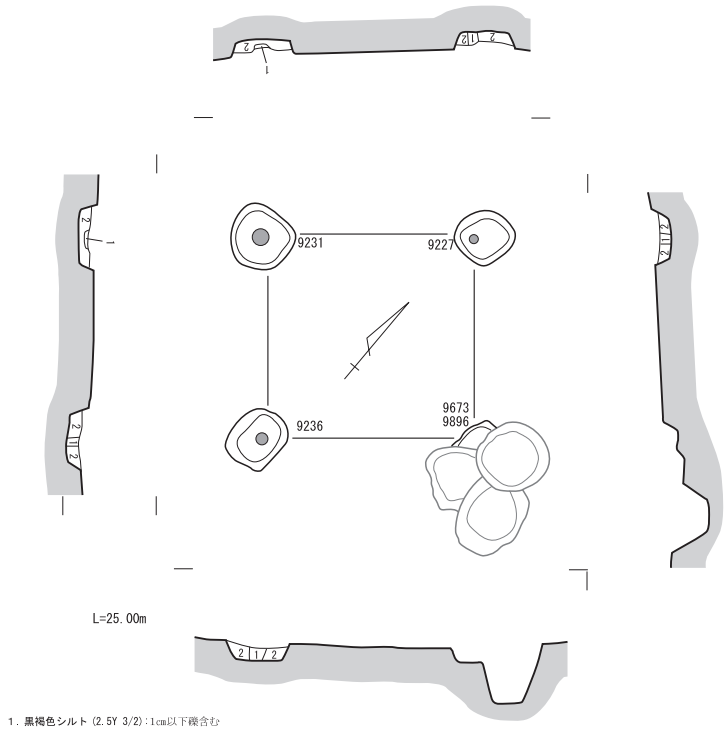


SH318



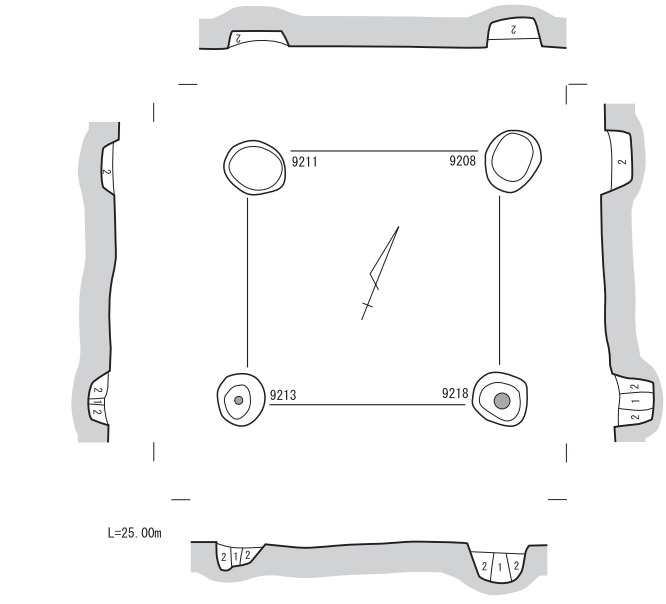
SH319

第 35 図　SH318・SH319 実測図



1．黒褐色シルト（2.5Y 3/2）：1cm以下礫含む
2．暗灰黄色シルト（2.5Y 4/2）：2 cm以下礫多く含む

SH320



1．黒褐色シルト（2.5Y 2/3）：1㎜以下礫混じる
2．オリーブ黒色粘土（5Y 3/1）：灰オリーブ色粘土ブロック状に混じる

SH322

●…柱痕　0　1:80　2m

第 36 図　SH320・SH322 実測図

致しており、一連のものであろう。

SH317（第 34 図）　SR9526 に近接してその流れに沿って建てられ、SH319 の南側に隣接しており、側柱の方向もこれと良く似ている。一部が先の SH316 と重複しており、これと同時に存在した建物ではない。２間×２間の倉庫風の建物で、一辺 3.8 ｍほどのほぼ正方形を呈し、床面積は 14.5 ㎡の規模をもっている。柱間は 1.9 ｍと良く揃っている。建物の規模・棟方向の良く似た SH317 と SH319 およびこれに隣接する SH316 と SH318 は二組の倉庫群で、一部が重複していることからおそらく２棟ずつが組み合わせになり、建て替えられたものと考えてよいだろう。

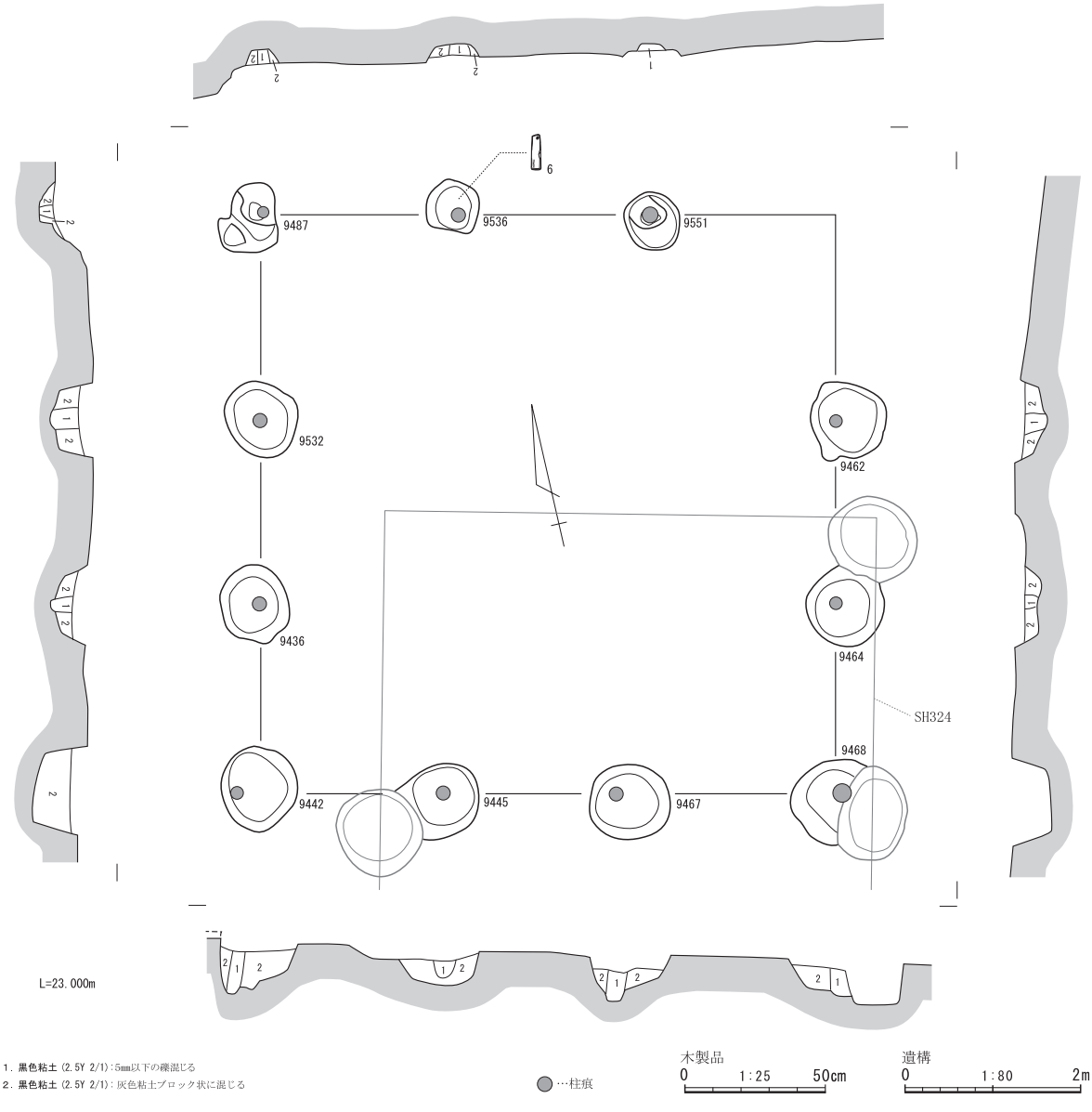
SH318（第 35 図）　SH316 の北東側に並んで建てられている。やはり２間×２間の良く似た建物で、側柱の方向も比較的揃っている。SH316 に近接して建てられ、規模も良く似ていることから、一連のものと考えてよいだろう。一辺 4.2 × 3.8 ｍで、面積は 16 ㎡ほどである。柱間は一辺が 2.1 ｍと他の辺の 1.9 ｍと良く揃っているところも似ており、南北方向がわずかに長いことから、南北棟の建物であったのかもしれない。図に示したように、南側の柱穴は重複が激しい。重複関係については SH315 で説明したとおりで、SH318 は SH315 に先行しており、また同様な倉庫風の建物である SH319 よりも古い。北側の柱穴には柱痕が残っている。柱間は東西・南北ともに２ｍほどである。

SH319（第 35 図）　SH317 に並んでいるが、一部で SH318・SH320 とは重複している。この区域に建てられている建物は相互に重複しているだけではなく、柱穴自体も重なっている。先

にも触れたように、これは他の建物と重複している部分もあるが、建物自体も建て替えられたものもあったと考えられる。SH319 はやはり２間×２間の建物で、一辺 3.4 ｍでほぼ正方形を呈し、床面積は 11.5 ㎡ほどの小型の建物である。柱痕が残っている南面の側柱では柱間は 1.7m ほどであり、他の柱間も 1.7m とほぼ揃っている。先にも触れたように SH316･SH318 と SH319 の４棟は良く似た規模の建物で、形も柱の方向もそれぞれ一致している。したがって、２棟ずつの倉庫が建て替えられたものであろう。

SH318 と SH319 の柱穴の切り合いから、SH318 が SH319 に先行するものであることがわかる。また SH317・SH319 の側柱はこの群の中心的な建物である SH311 の棟方向に一致しており、これと密接な関係をもっていたことが知られる。

SH320（第 36 図）　SB308 の南東側、７ｍほどの所に位置している。１間×１間の建物である。当初竪穴住居跡の４本柱だけが検出されたのではないかとも考えたが、床面あるいは焼土等が検出されていないこともあってここに含めている。柱間は 2.2 ｍほどである。SH322 と同じようにやはり掘立柱建物とするより、竪穴住居跡の主柱穴だけが検出されたものと考えるべきかもしれない。SH320 の北東の隅柱は SH320・SH315 に切られている。

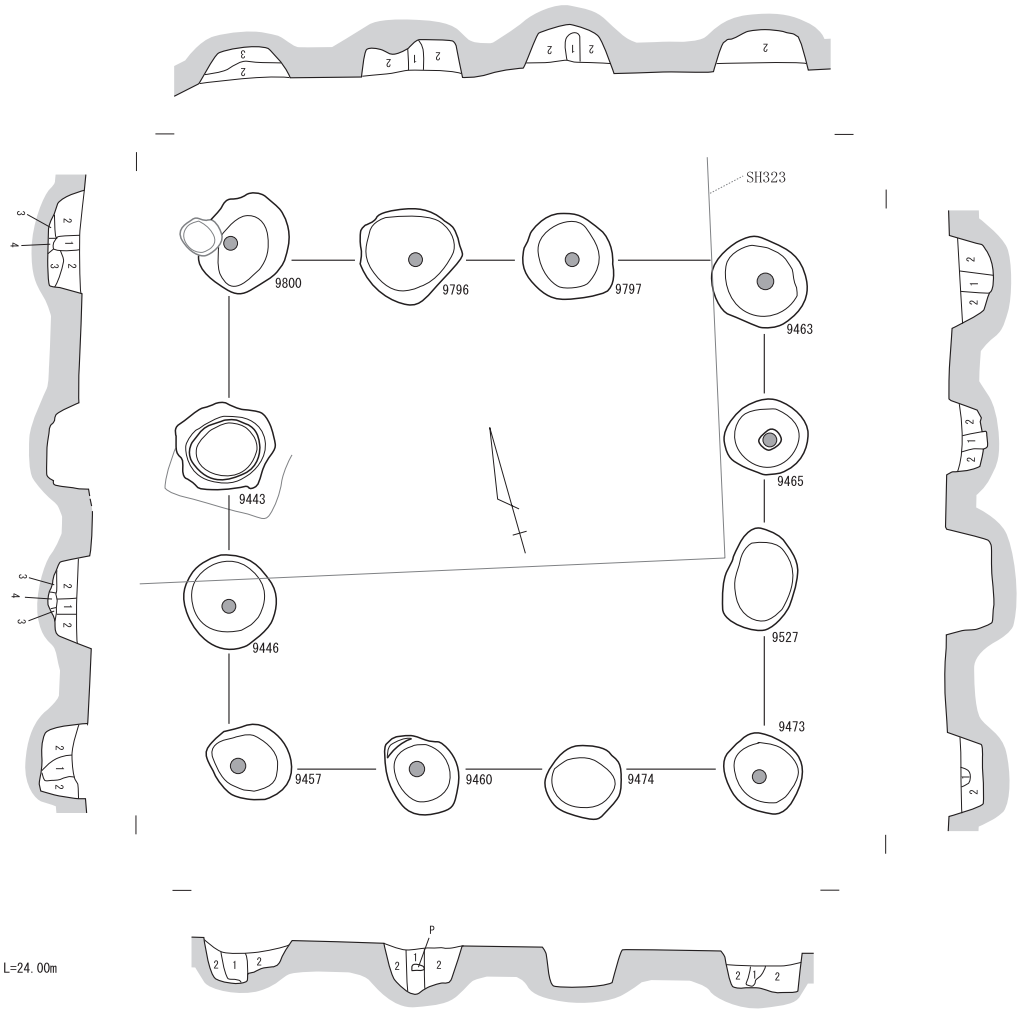


第 37 図　SH323 実測図

SH322（第 36 図）　SH320 の３ｍほど東側で検出された建物で、やはり１間×１間の掘立柱建物である。柱間は 2.5 × 2.8 ｍで東西方向がやや長い。床面積は 7.0 ㎡ほどである。SH320 と同じように竪穴住居跡の主柱穴だけが確認できたのかもしれない。他の掘立柱建物との切り合いはない。

SH323（第 37 図）　E-2 区の北側に建てられた３間×３間でほぼ正方形を呈した建物である。隣接する SH325 とともに、Ⅱ -1 群とした建物群の南端を区画する位置にある。SH325 とは側柱の方向も一致するとともに、柱間、建物の規模なども良く似ている。一辺 6.6 ｍで、平面積は 43.5 ㎡ほどである。残っている柱痕から柱間をみると、基本的には 2.2m ほどで、比較的揃っているが、西側柱列では北から 2.3 ＋ 2.1 ＋ 2.2 ｍであり、南側柱列は東から 2.6 ＋ 2.0 ＋ 2.4 ｍで東西ともに中央の柱間が若干狭い。また、西南隅の柱が外側に出ている。柱痕からみて、柱の太さは 20 ㎝ほどであった。建物の内側に SB304 が重なって検出されていることから、小さな柱穴がいくつか検出されているが、側柱の並びと柱位置が揃うものがなく、これらの小穴の多くは竪穴住居跡にともなうもので、SH323 に伴うものではなかった。したがって、この建物が床張りであったか否かは明確ではない。重複している SB304 との関係は明解にはならなかったが、他の遺構のあり方から、竪穴住居跡が先行するものだと考えている。

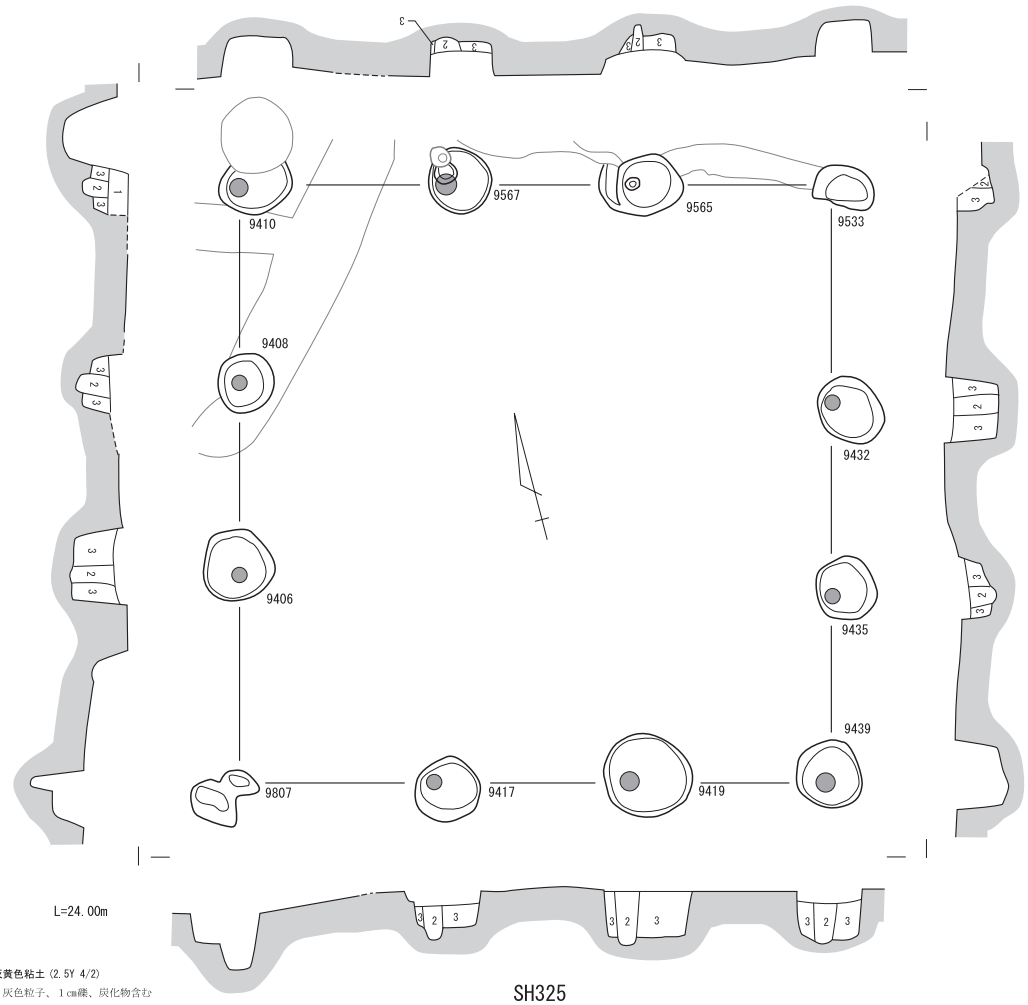
SH323 の東面の側柱に接して、この方向と一致して、北側に 15 ｍほどの長さに柱列（SA202）が延び



1．黒色粘土（2.5Y 2/1）：5mm以下礫、5mm炭化物粒子（?）含む
2．黒色粘土（2.5Y 2/1）：暗オリーブ灰色粘土ブロック含む
3．黒色粘土（2.5Y 3/1）：灰色粘土ブロック含む
4．黒褐色粘土（10YR 3/1）：礎板の痕？

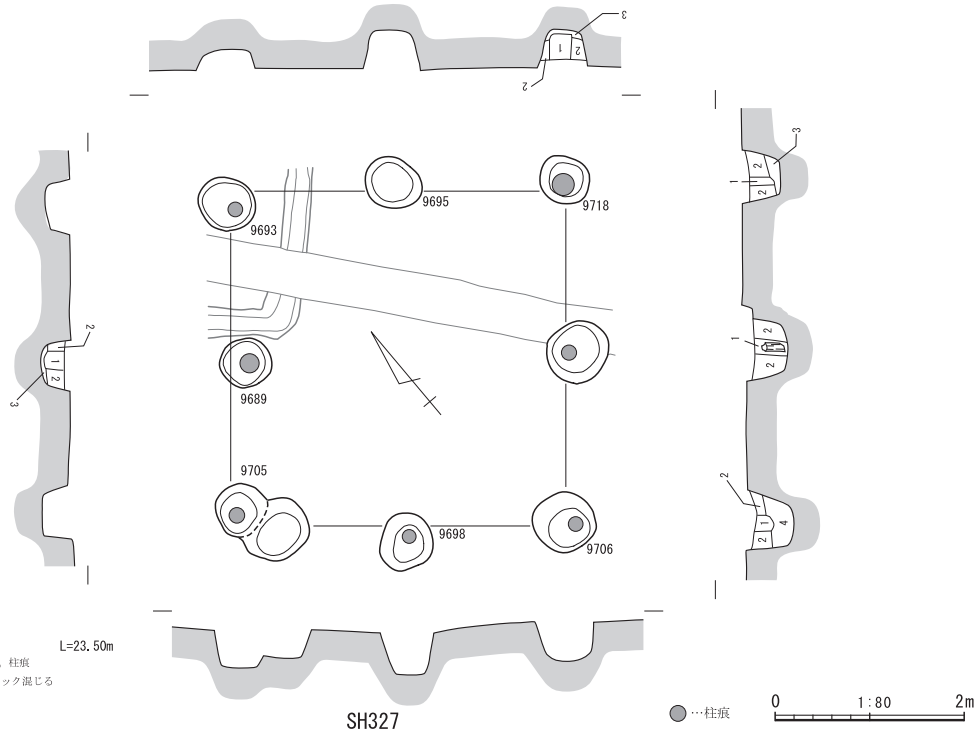
…柱痕　　0　1:80　2m

第 38 図　SH324 実測図



1．暗灰黄色粘土（2.5Y 4/2）
　：灰色粒子、１cm礫、炭化物含む
2．黒色粘土（2.5Y 2/1）：１cm以下礫含む
3．黒褐色粘土（2.5Y 3/1）：１cm以下礫含む

SH325



1．黒褐色粘土（2.5Y 3/1）：５mm以下礫含む。柱痕
2．黒褐色粘土（2.5Y 3/1）：暗灰色粘土ブロック混じる
3．灰色粘土（N 4/1）
4．黒色粘土（2.5Y 2/1）

SH327

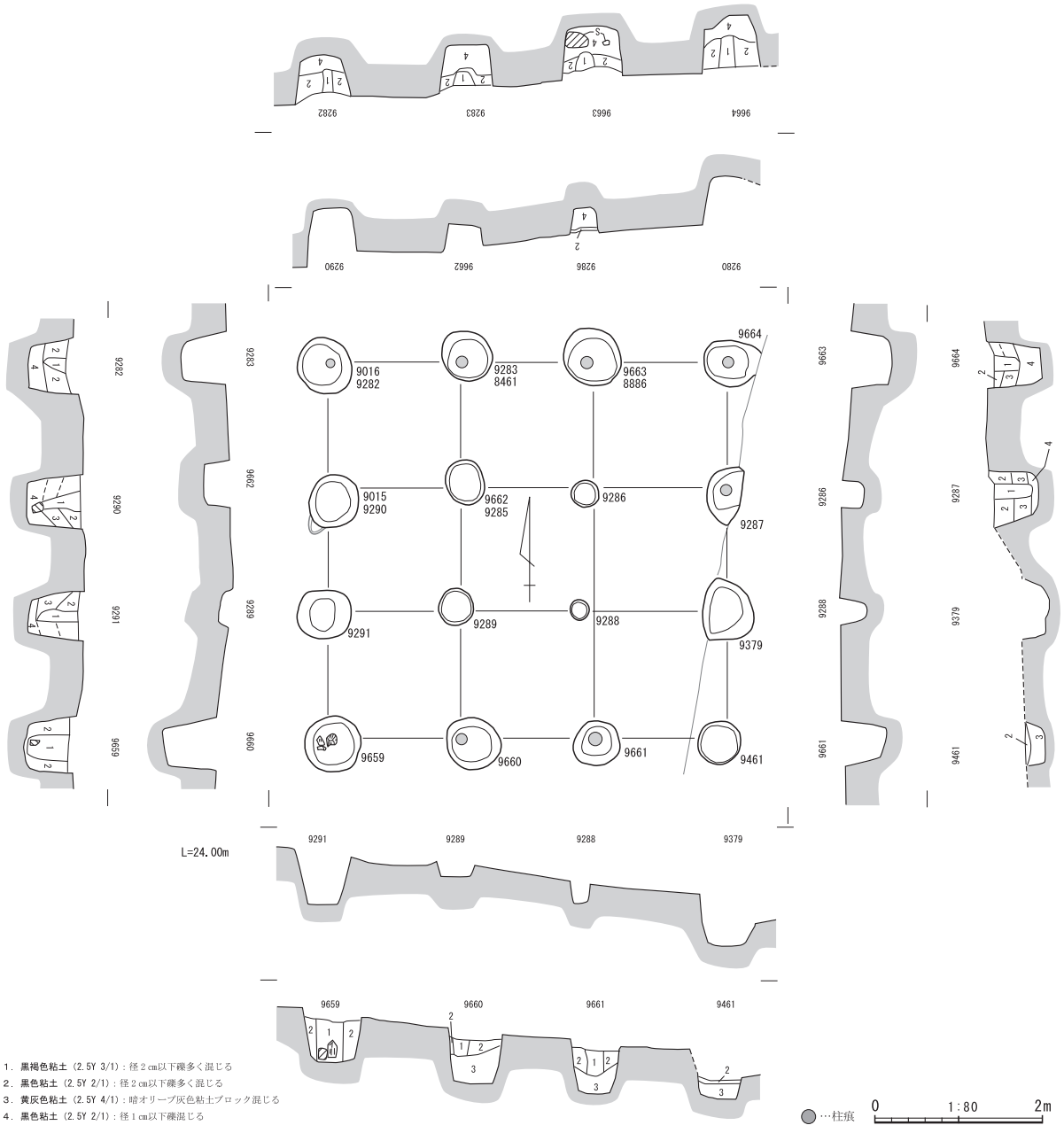
…柱痕　0　1:80　2m

第 39 図　SH325・SH327 実測図

ている。これはこの建物に伴う柵あるいは塀と考えるより、Ⅱ-1群の東面を区画する柵と考えた方がよさそうである。

SH324（第38図）　SH323・SB304と重複して検出された、やはり３間×３間で、平面が、ほぼ正方形を呈した建物である。南北5.6×東西5.6ｍで平面積は30.24㎡ほどである。柱間は柱痕が観察されていることから、南北方向は北から2.2＋1.7＋1.7ｍ、東西2.0＋1.8＋1.8ｍと考えられる。SH323とは柱穴が重複しているが、切り合いからSH324がより新しいと考えられる。SB304との重複は床面・壁面での重なりが観察できたが、前後関係は明確になっていない（註６）。南西隅の柱穴から土師器C類の小型鉢（第47図38）が出土している。

SH325（第39図）　SH323の東側に隣接して検出された。やはり３間×３間の建物である。一辺6.4ｍで、平面積41㎡ほどで、隣接するSH323と良く似た建物である。柱の痕跡から、柱径は20㎝ほどであることが理解できる。柱間も２ｍ前後で良く揃っている。SH323とは近接しすぎることから、同時に建て

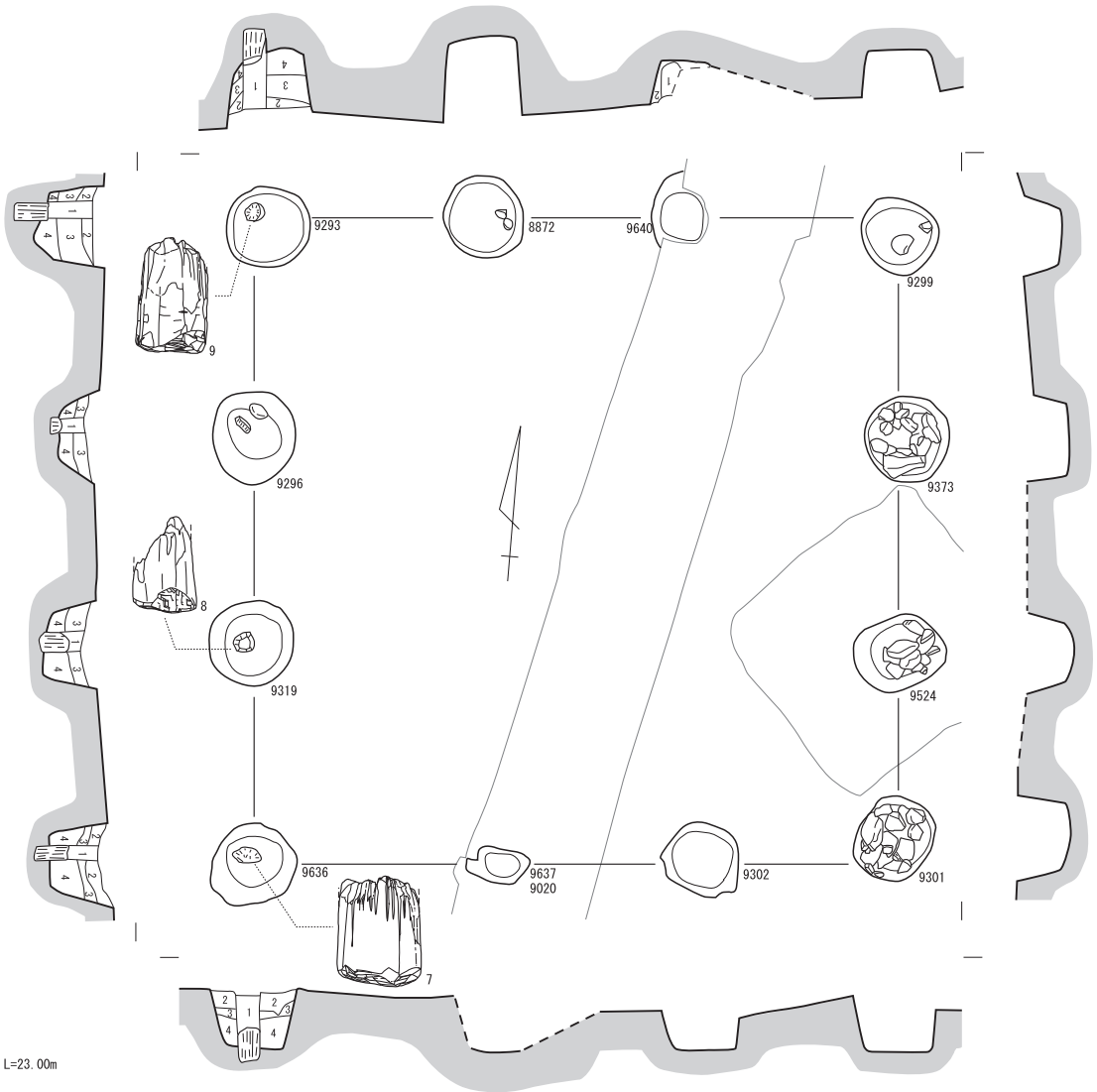


第40図　SH328実測図

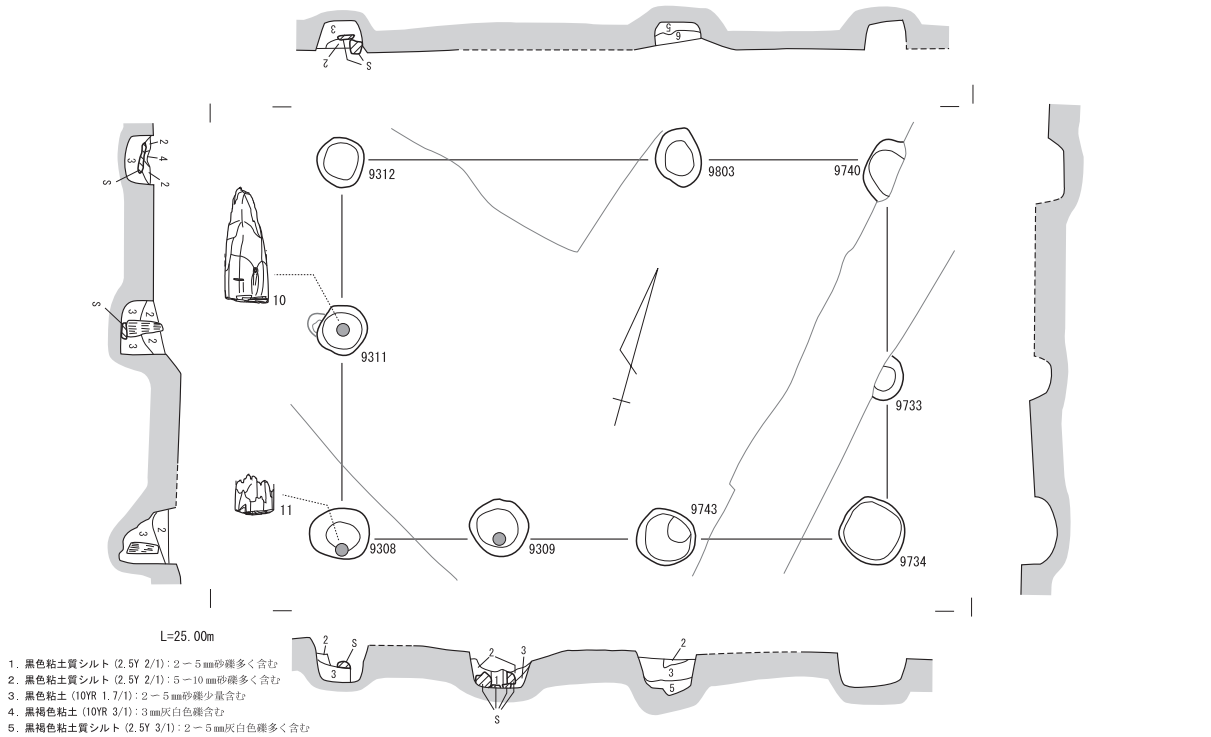
られていたものではない可能性もあり、どちらかが建て替えによるものかもしれない。両者の前後関係は不明である。SB308・SB303 と重複している。SB303 の壁面を掘立柱建物の柱穴が崩していること、あるいは、SB308 の床面に掘立柱建物の柱穴の痕跡が明瞭に観察できたことなどから SH325 が SB308・SB303 より新しいものであることが知られる。

SH327（第 39 図）　SD9500 に沿って建てられており、建物群の東の端に位置している。２間×２間で、床面積 15.5 ㎡ほどの建物で、平面形はほぼ正方形を呈しており、おそらく倉庫であろう。柱の痕跡が観察できたことから、柱の径は 10cm 前後と比較的細いものであることが推定できる。柱間は 1.7 m前後であるが、間柱の位置に多少のずれがあろう。束柱の痕跡が確認できなかったので、この建物が床張りか否かは明らかでない。

SH328（第 40 図）　Ⅱ -2 群の中心的な建物と推定されている SH329 の北側隣接して建てられたもので、やはり３間×３間の建物であるが、SH329 とは側柱の距離が２m足らずであり、両者が同時に存在していたか否かは確定できない。

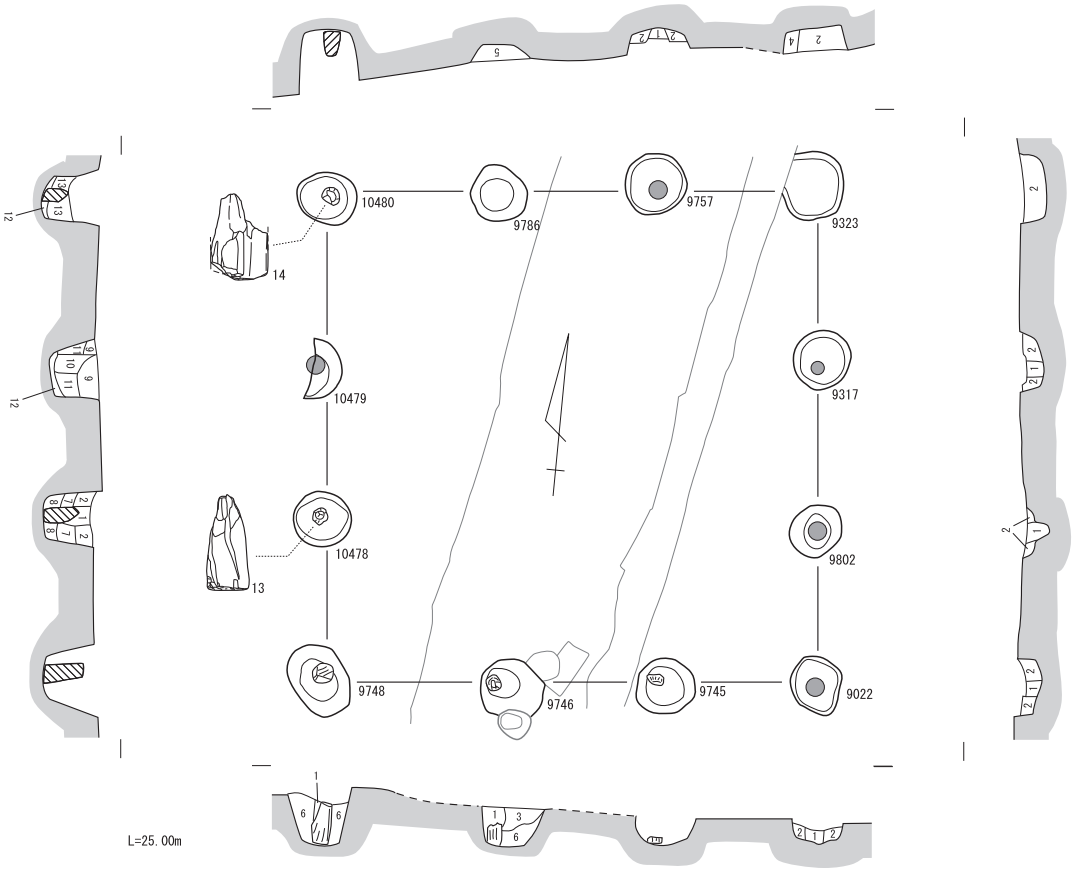


第 41 図　SH329 実測図



1．黒色粘土質シルト（2.5Y 2/1）：２－５㎜砂礫多く含む
2．黒色粘土質シルト（2.5Y 2/1）：５－10㎜砂礫多く含む
3．黒色粘土（10YR 1.7/1）：２－５㎜砂礫少量含む
4．黒褐色粘土（10YR 3/1）：３㎜灰白色礫含む
5．黒褐色粘土質シルト（2.5Y 3/1）：２－５㎜灰白色礫多く含む
6．明オリーブ灰色粘土質シルト（5GY 4/1）

SH330



1．黒褐色シルト（2.5Y 3/2）：1㎝以下礫多く含む
2．黒褐色シルト（2.5Y 3/1）：1㎝以下礫多く含む
3．暗黄褐色シルト（2.5Y 5/2）：5㎜礫含む
4．黒褐色粘土（10YR 3/2）：1㎝以下礫多く含む
5．黒褐色シルト（2.5Y 3/1）：褐色シルトブロック含む
6．黒色粘土（2.5Y 2/1）
7．褐灰色シルト質粘土（10YR 5/1）：3㎜以下オリーブ灰色礫含む
8．褐灰色粘土（10YR 6/1）：3㎜以下オリーブ灰色礫、砂質土含む
9．褐灰色シルト質粘土（10YR 4/1）：明黄褐色礫、炭化物多く含む
10．褐灰色粘土（10YR 4/1）：3㎜以下礫僅かに含む
11．黒褐色シルト質粘土（10YR 3/1）：1㎝以下礫、灰色粘土ブロック含む
12．オリーブ黒色粘土（5YR 2/2）：砂質土含む
13．褐灰色粘土（10YR 3/1）：1㎜礫、砂質土含む

SH331

木製品
0　1：25　50cm

遺構
●…柱痕
0　1：80　2m

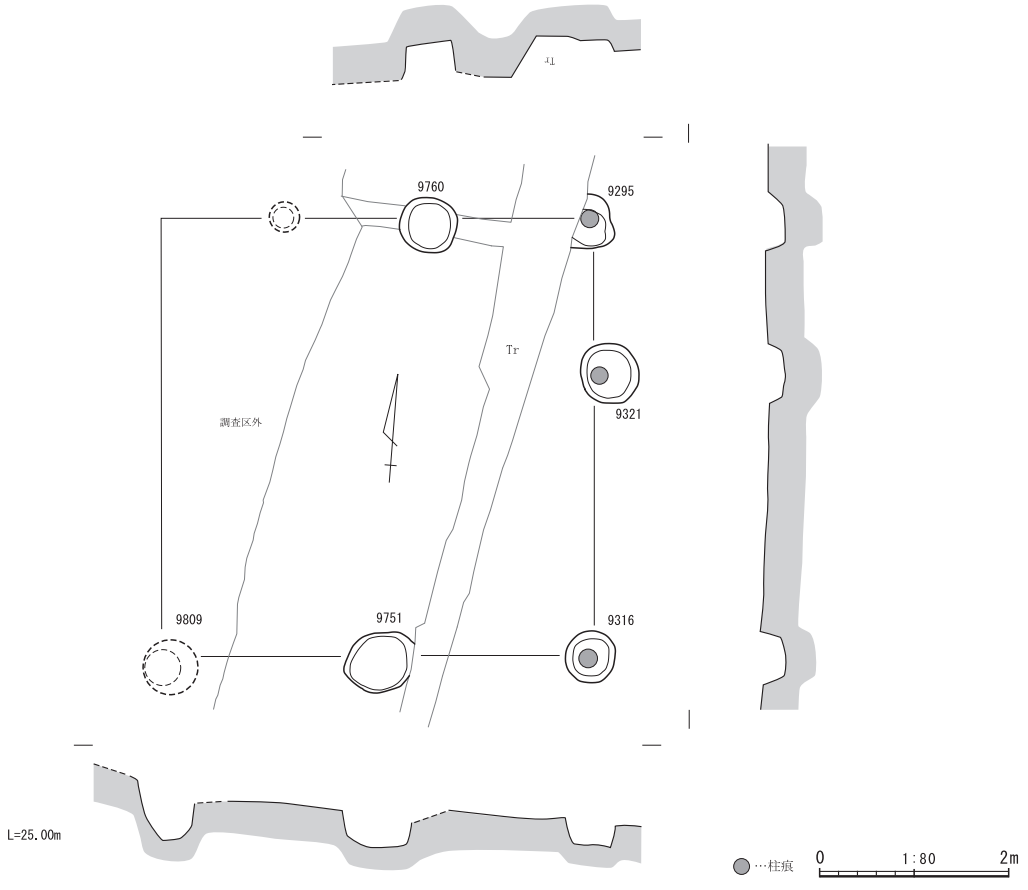
第 42 図　SH330・SH331 実測図

側柱の方向はSH329とはやや異なっているが、一辺が4.6ｍと正方形で、面積は21㎡ほどである。柱間は1.6＋1.4＋1.6ｍとほぼ等しい。束柱の痕が検出されており、床張りの建物であろう。断面（第40図）でみるとおり、側柱と束柱の間には太さも明確な差があり、当然側柱が太くなっている。また束柱が明確に把握できたのは寺家前遺跡ではこのSH328とSH333の２棟のみである。側柱には径10cmほどの太さの柱痕が残っている。

SH329（第41図）　調査区の南端で検出された建物群（Ⅱ-2群）の中心的な建物で、３間×３間の正方形の平面をもった建物である。側柱の方向は、ほぼ東西×南北であるが、地形や他の建物との位置関係からみて、東面する建物であろう。東西6.8×南北6.8ｍと平面積は46.2㎡ほどで、ほぼ正方形を呈している。屋根の形状はよくわからない。

柱間は、東西方向は東から2.2＋2.0＋2.6ｍ、南北方向は北から2.3＋2.3＋2.2ｍと比較的良く揃っている。西面の側柱に柱根が残っていたが、いずれも太い広葉樹材（シイ）を用い、北西隅の柱を除いては芯を除いた割材であった。また、東面の側柱は３本ともに柱の下に根固めの石を埋め込んでいた。おそらく地形の傾斜によって、東側の柱下部を補強する必要があったことによるものであろう。西側に隣接するSH331・SH332とは側柱の方向が一致している。建物の位置あるいは規模からもⅡ-2群の中心的な建物である。

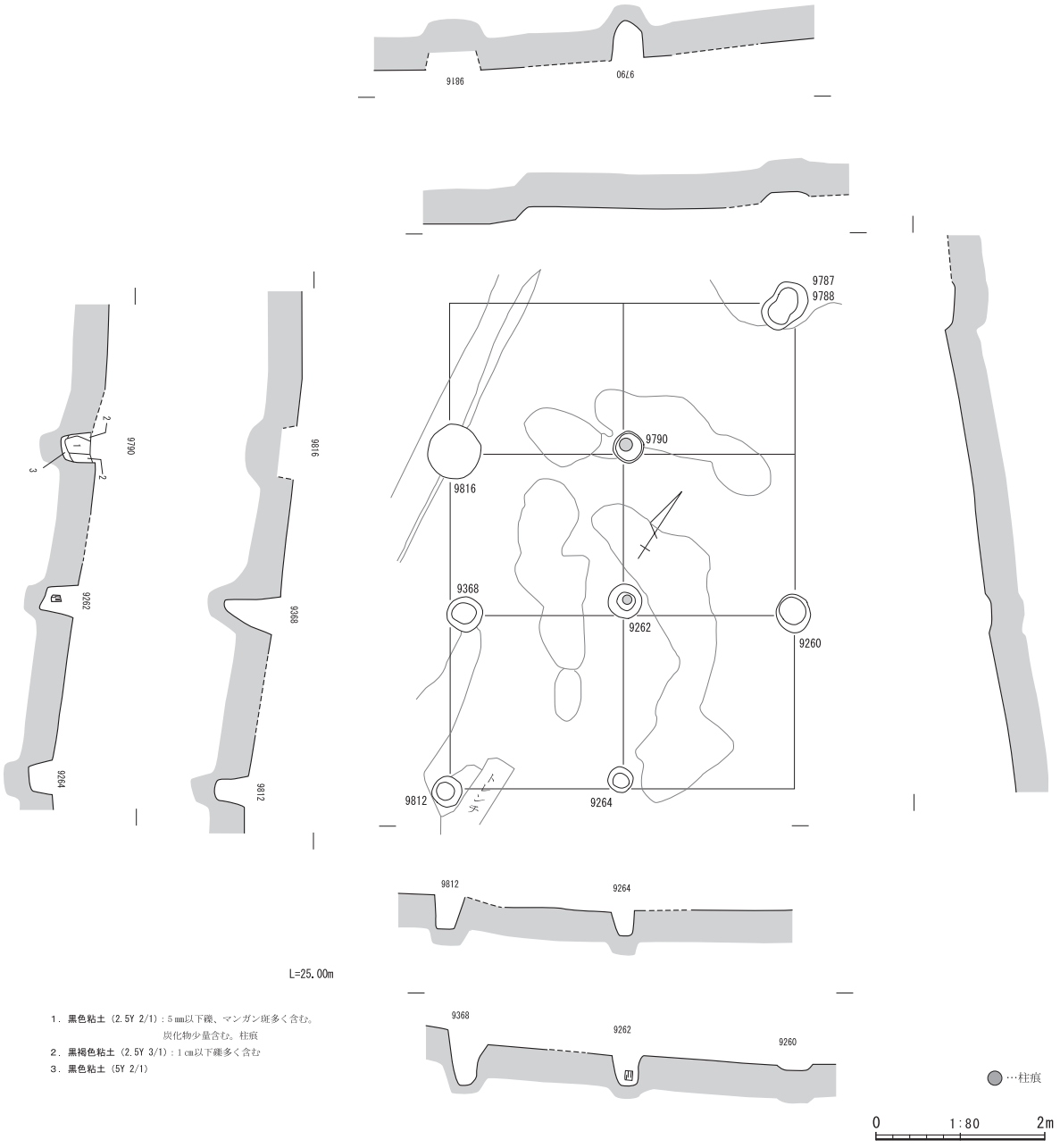
SH330（第42図）　調査区の南端で検出された建物で、２間×３間の建物である。桁行5.8×梁間は4.0ｍで、面積は23.2㎡ほどである。柱間は、桁行は1.8＋1.8＋2.2ｍで、東側１間分がやや大きい。梁行は2.0＋2.0ｍであるが、北面の側柱が１本検出できていない。梁行の西面に柱根が２本残っていた。いずれも針葉樹（イヌマキ）の芯持ち材で、太さは13～14㎝ほどであった。SH329の柱材と比較するとかなり細い。



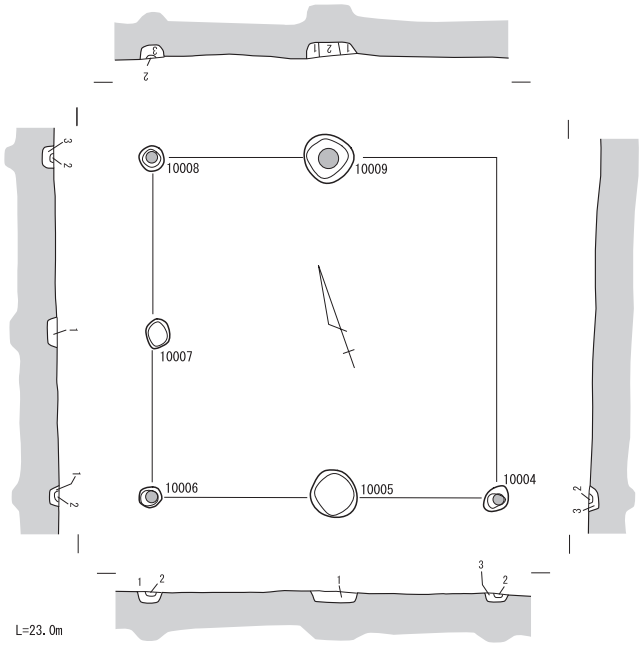
第43図　SH332実測図

SH331（第 42 図）　SH329 の西側に位置しており、SH332 と重複している。やはり３間×３間のほぼ正方形の建物で、側柱の方向も SH329 と一致している。したがって SH329 の西側に隣接する建物ということになろう。東西方向､南北方向ともに 5.1 ｍほどで､柱間もともに 1.7 ＋ 1.7 ＋ 1.7 ｍとほぼ揃っている。面積は 26 ㎡ほどである。束柱が確認されていないので、床張りの建物か土間造りのものかは不明である。西の側柱に３本で柱根が残っていたが、１本は針葉樹の芯持ち材（イヌマキ）で他は広葉樹（クス・スダジイ）であった。太さは 21 ㎝・19 ㎝・13 ㎝とまちまちである。

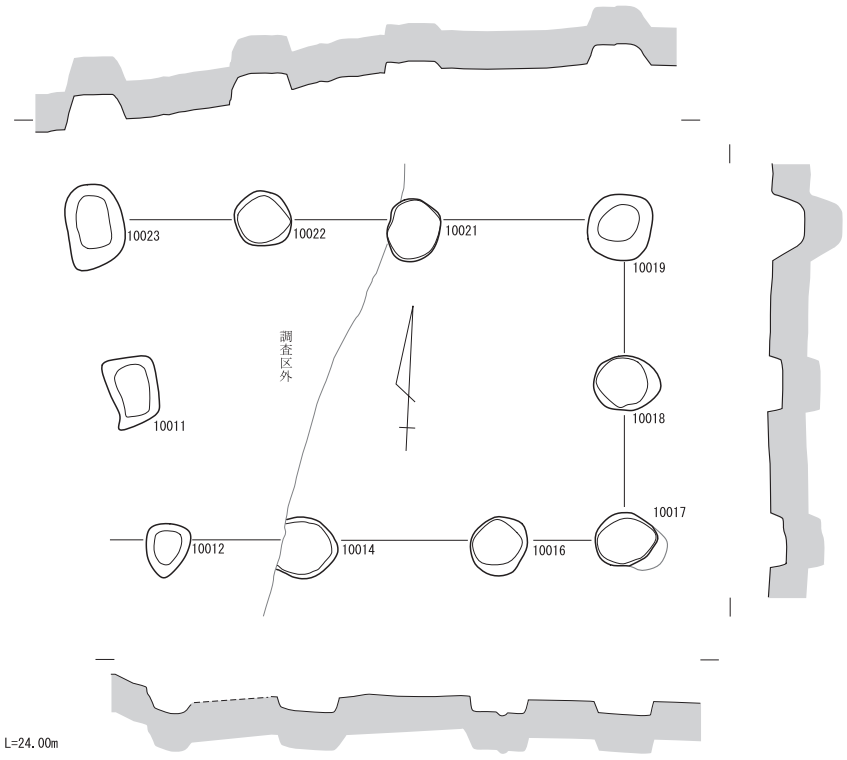
SH332（第 43 図）　SH329 の西側に近接しており、SH331 と重複している。南北３間×東西２間分が検出されているが、西端は調査区外に当たっており確認できていない。東面の側柱は３本検出されているが、間柱が１本分欠けている。柱間は 1.5m ほどで、良く揃っている。東西方向は柱間に多少の差がある。東面の側柱からは３本とも柱痕が確認されている。



第 44 図　SH333 実測図



SH337



SH338

第 45 図　SH337・SH338 実測図

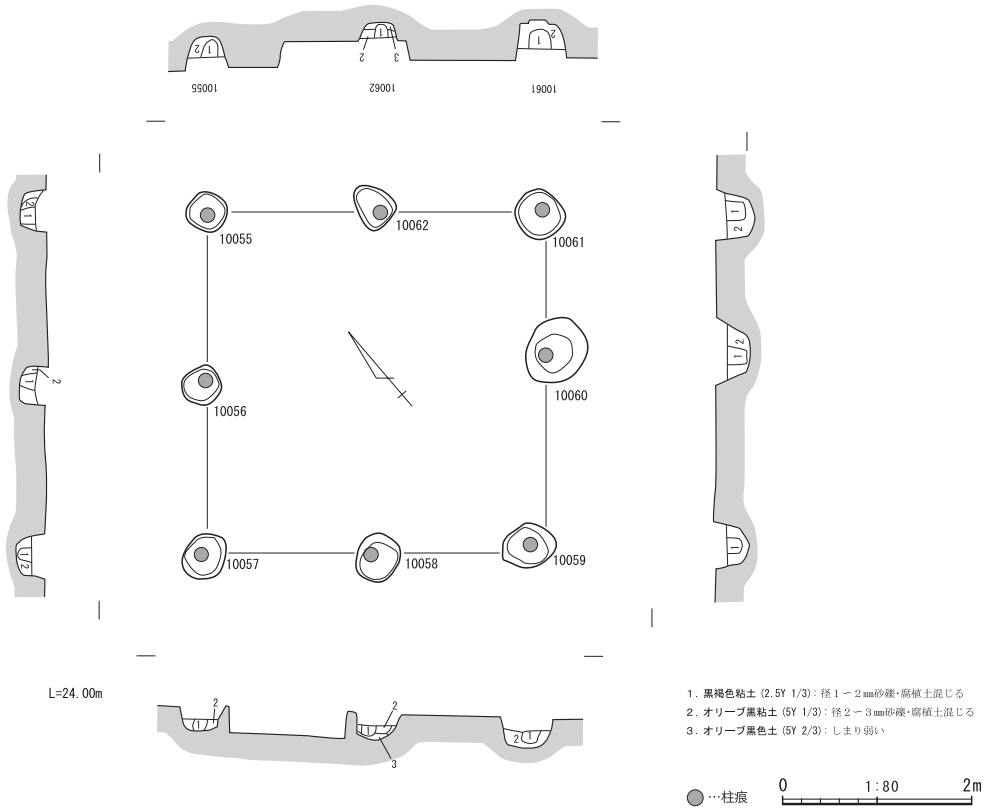
SH333（第 44 図）　SH311 の南側で検出された２間×３間の建物で、棟の方向は SH311 とほぼ直交しており、SH312 の側柱とも平行している。側柱が一部検出できていない部分があるが、棟通りに柱穴が検出されているので、束柱をもった床張りの建物だと推定している。

桁行 5.7 ｍ×梁行 4.0 ｍで平面積 22.8 ㎡ほどである。柱間は２ｍほどと揃っているが、桁行は北側の１間がやや狭くなっている。柱穴（SP9790）から土師器Ａ類の坏身破片（第 47 図 **39**）が出土している。

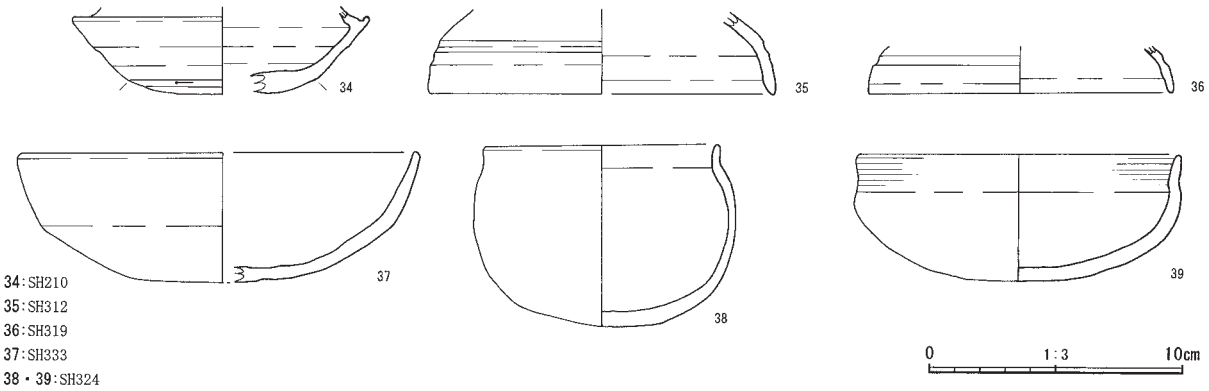
SH337（第 45 図）　２間×２間の建物である。北東隅の柱と東面の間柱が検出できていないが、地形が西から東に向かって傾斜していることから、おそらく東側が削り取られてしまったものであろう。一辺 3.6 ｍほどで、平面積は 13 ㎡程度である。柱穴からは柱根が検出されており、柱の太さは 20 ㎝ほどである。東面の側柱は掘形が小さく、柱の太さとさほど変わらないが、南北辺の間柱は柱掘形も 70 ㎝前後と大きい。おそらくこれが棟を支える柱であったものであろう。したがって、この建物は南北棟であろうし、SH329 が東面する建物であることを推定すれば、これも東向きの建物であったと考えて良い。

SH338（第 45 図）　SH328 の北側にある２間×３間の東西棟の建物であるが、西端は柱列の位置は乱れており、中央の棟柱が内側に入りこんでいる。北面と南面では桁行 5.6 ×梁行 3.4 ｍで、19 ㎡ほどの平面積をもった建物であろう。また、桁行の柱位置がずれており、北側と南側の柱位置が整合をしていない。北側で見る限り柱間は 2.0 ＋ 1.8 ＋ 1.8m ほどである。南西隅の柱穴は検出されていない。東面の側柱穴（SP10018）の底に径 20 ㎝弱の礫が埋め込まれていた。柱の沈下を防ぐための礎石であろう。

SH339（第 46 図）　SH327 の西側に位置している。やはり２間×２間の建物で、柱間も 1.8 ｍほどで、一辺およそ 3.6 ｍのほぼ正方形を呈した建物である。床面積は 13 ㎡弱と小さく、SH327 と良く似ている。各柱穴に柱の痕跡が残っており、やはり柱の太さは径 10 ㎝ほどと比較的細い。束柱は検出できていない。側柱の方向も SH327 と良く似ており、同様な性格をもった建物であろう。



第 46 図　SH339 実測図



第 47 図　掘立柱建物出土土器実測図

３　柵

柵あるいは塀の跡が４本確認されている。SA201・SA202 はⅡ -1 群とした大型の建物を区画する位置に設けられ、SA201 は大型の建物 SH210 の西側を、SA202 は東側を区画している。柵の方向は SH210 の側柱の方向と良く似ている。SA303 は区画溝 SD9500 の西側に、それと併行に設けられている。SA301 は SD9500 の東側に位置しており、いわば低地に設けられたものであるが、Ｉ群の東側にある建物群のうちでも SH329・SH339 など、Ｉ群とした建物の側柱の方向と一致した方向を示している。これらに関わる柵であろうが、性格はよくわかっていない。

SA201（第 48 図）　SH210 と SH203 を隔てている柵列で、両者のほぼ中間で、SH210 からはおよそ７ｍ離れている。建物の側柱の方向とは良く似ているが、多少のずれがあり、必ずしも一致はしていない。柱間は南から 1.7 ＋ 1.7 ＋ 1.7 ＋ 1.6 ＋ 1.6 ＋ 1.6 ＋ 1.6 ＋ 1.6 ＋ 2.3 ｍで、最後が 2.3 ｍとやや長くなっているが、全体的には 1.6 ～ 1.7 ｍとほぼ揃っている。全長は 15.4 ｍほどである。柱掘形も径 40 ～ 50 ㎝ほどで、これも良く揃っている。建て替えの痕跡は観察されなかった。南端で、ほぼ直角に折れ、南側に２間分、約 4.5 ｍの柵が続いている。

SA202（第 48 図）　SH210 の東側に設けられたもので７間分 13 ｍほどが検出されている。SH325・SH323 の北側の柱列とほぼ直交しており、先に触れたようにⅡ -1 群の東面を区画したものであろう。

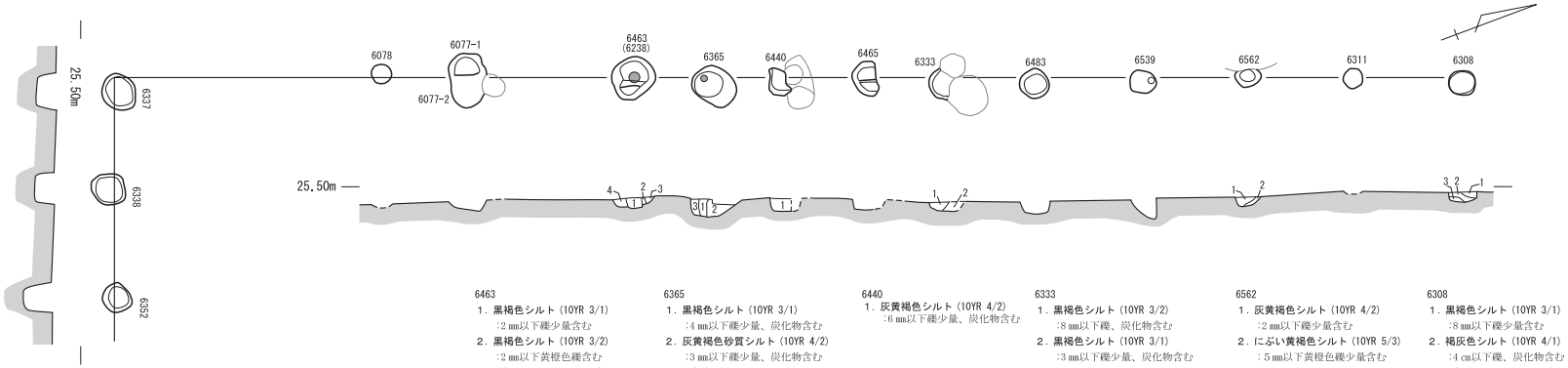
SA203（第 52 図）　溝 SD6289 の西側に併行した柵列で、柱間は 2.7 ～ 3.9 ｍ、おそらく 20 ｍ以上の延長があると思われる。SB217 と SH217 の東面を区画する。同じⅡ－１群に属する柵列 SA202 が溝 SD9500 と併行しているのと同じ構造をもっている。

SA301（第 48 図）　SD9500 東側の傾斜を下った低地で検出された柵で、柱穴が４本直線に伸びている。柱間はほぼ２ｍ間隔と良く揃っている。 SH329・SH339 などの側柱と良く似た方向をもっている。

４　溝・流路

（１）溝

SD9500（SD10064 を含む）（第 49 図）　Ⅱ－１群の掘立柱建物群の東から南にかけて広がる、幅１ｍ前後の濠である。東面で全長 60 ｍ、南面は延長 25 ｍほどが確認されている。集落が築かれた微高地の縁辺部に沿った位置に掘り込まれている。掘形は逆台形状を呈し、明らかに人為的に掘削された溝と判断できる。出土土器は土師器の高坏脚部、須恵器の壷口縁部、瓶の底部がある。SD6170 は SD9500 の北側へ延長する溝である。SD6171 でも須恵器坏、土師器坏が３個体、駿東甕の口縁部や大型の田舟が出ている。途中、10 ｍほど途切れているがさらに北側の SD6135 へと続いている。この途切れている部分は SH210 の真正面にあたり、Ⅱ－１群中心部への出入り口であった可能性もある。したがって SD9500



6463
1．黒褐色シルト（10YR 3/1）
　：2㎜以下礫少量含む
2．黒褐色シルト（10YR 3/2）
　：2㎜以下黄橙色礫含む
3．暗褐色シルト（10YR 3/3）
　：10㎜以下礫、炭化物含む
4．暗褐色シルト（10YR 3/3）
　：6㎜以下黄橙色礫少量含む

6365
1．黒褐色シルト（10YR 3/1）
　：4㎜以下礫少量、炭化物含む
2．灰黄褐色砂質シルト（10YR 4/2）
　：3㎜以下礫少量、炭化物含む
3．黒褐色シルト（10YR 3/2）
　：2㎜以下黄橙色礫少量、炭化物含む

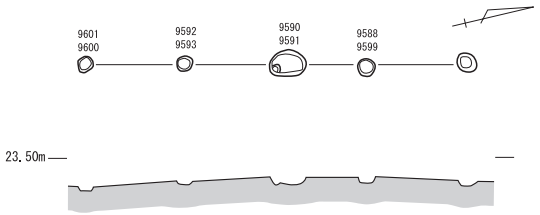
6440
1．灰黄褐色シルト（10YR 4/2）
　：6㎜以下礫少量、炭化物含む

6333
1．黒褐色シルト（10YR 3/2）
　：8㎜以下礫、炭化物含む
2．黒褐色シルト（10YR 3/1）
　：3㎜以下礫少量、炭化物含む

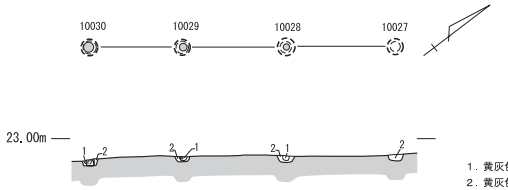
6562
1．灰黄褐色シルト（10YR 4/2）
　：2㎜以下礫少量含む
2．にぶい黄褐色シルト（10YR 5/3）
　：5㎜以下黄橙色礫少量含む

6308
1．黒褐色シルト（10YR 3/1）
　：8㎜以下礫少量含む
2．褐灰色シルト（10YR 4/1）
　：4㎝以下礫、炭化物含む
3．黒褐色シルト（10YR 3/2）
　：6㎜以下礫、炭化物含む

SA201



SA202



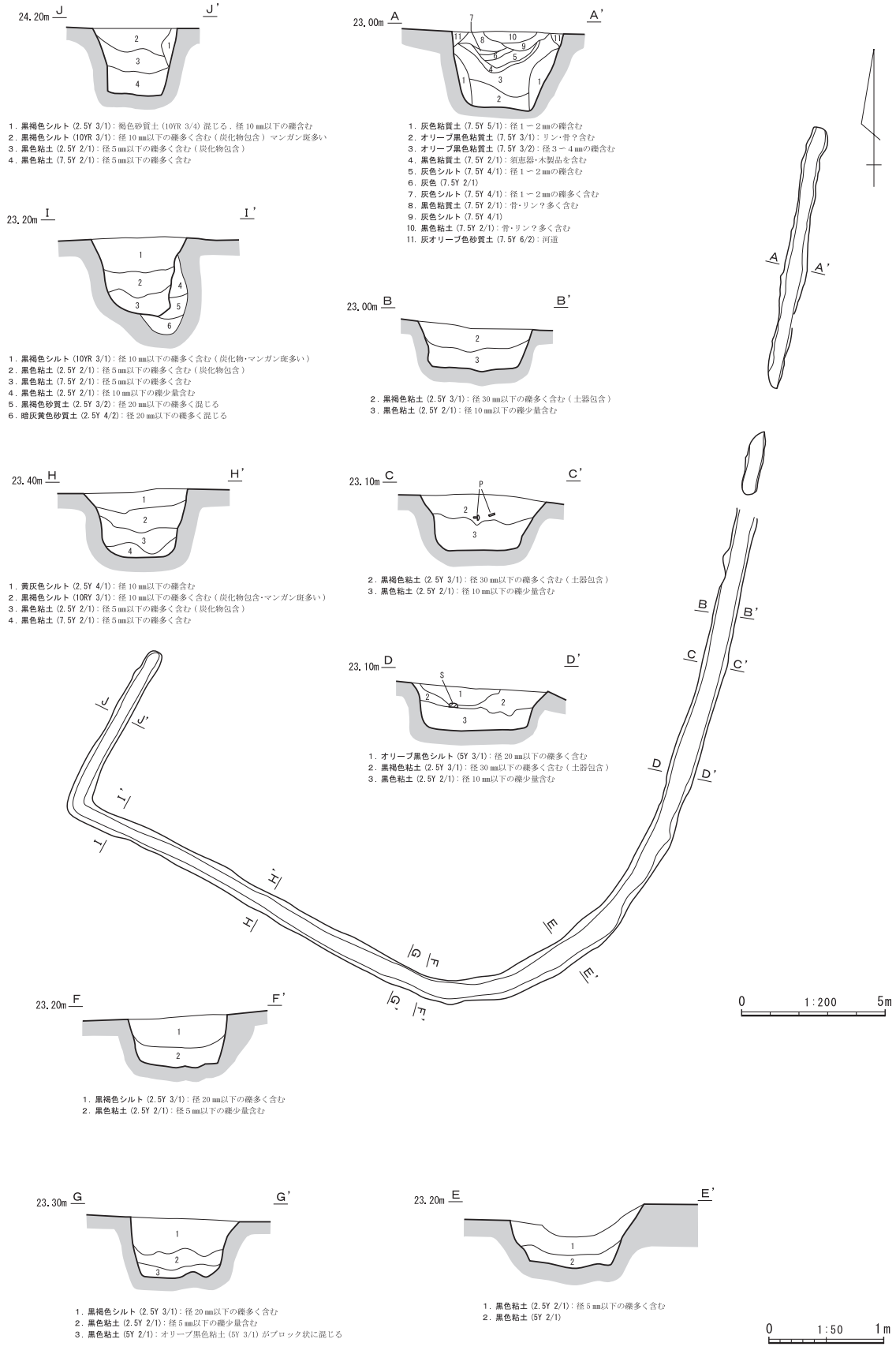
1．黄灰色粘土（Hue2.5Y 4/1）
2．黄灰色シルト（Hue2.5Y 5/1）：5㎜以下礫少量含む

SA301

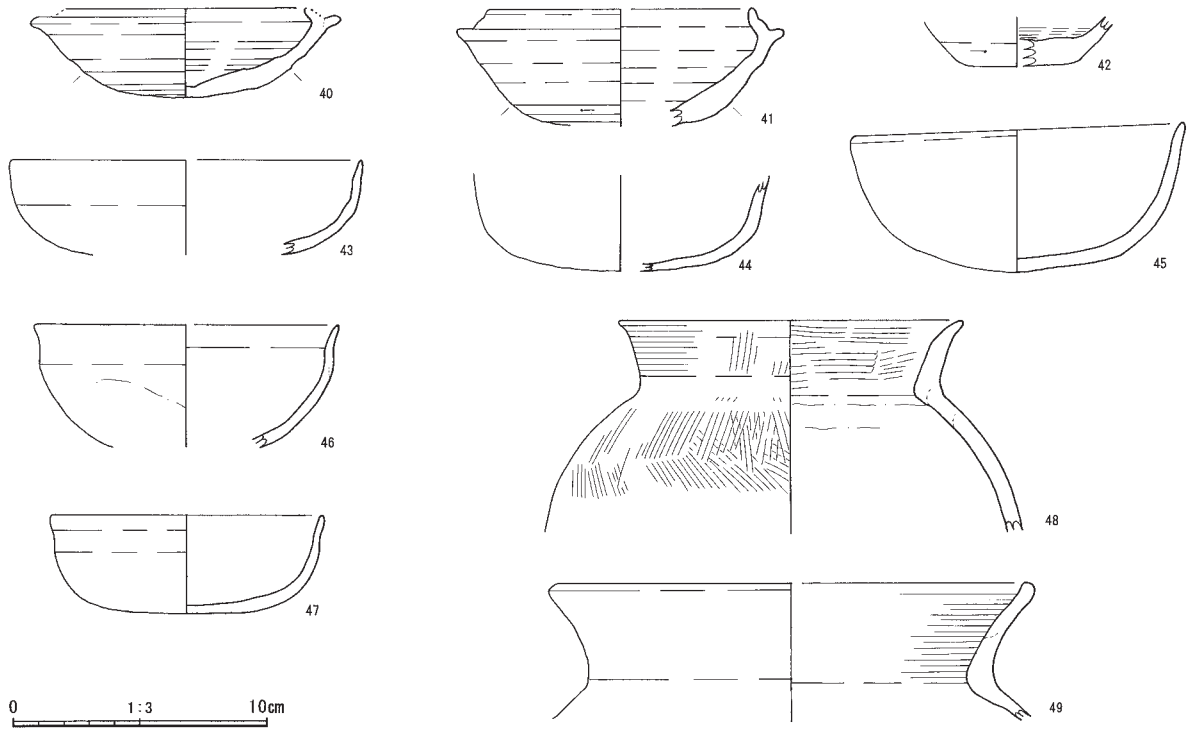
●…柱痕

0　1:150　5m

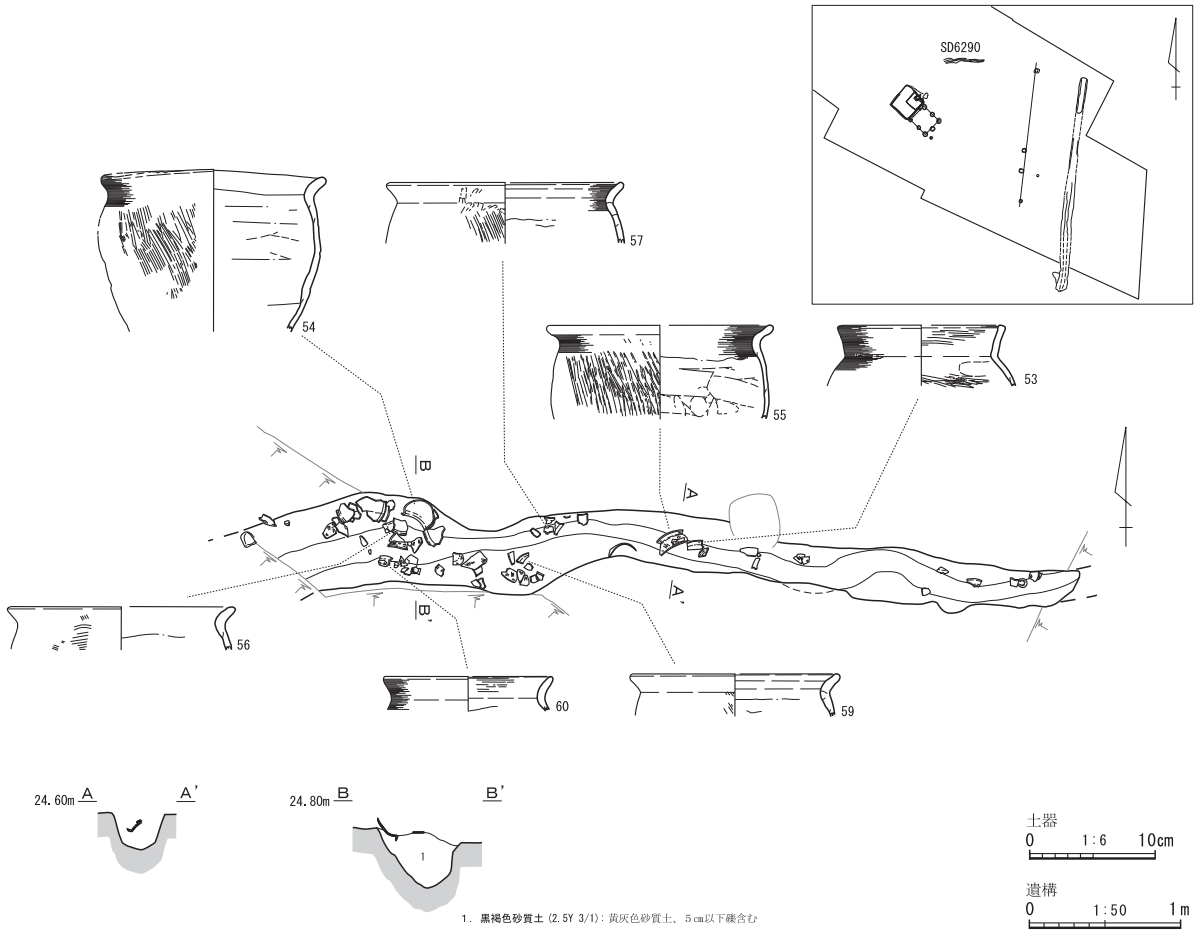
第48図　SA201・SA202・SA301実測図



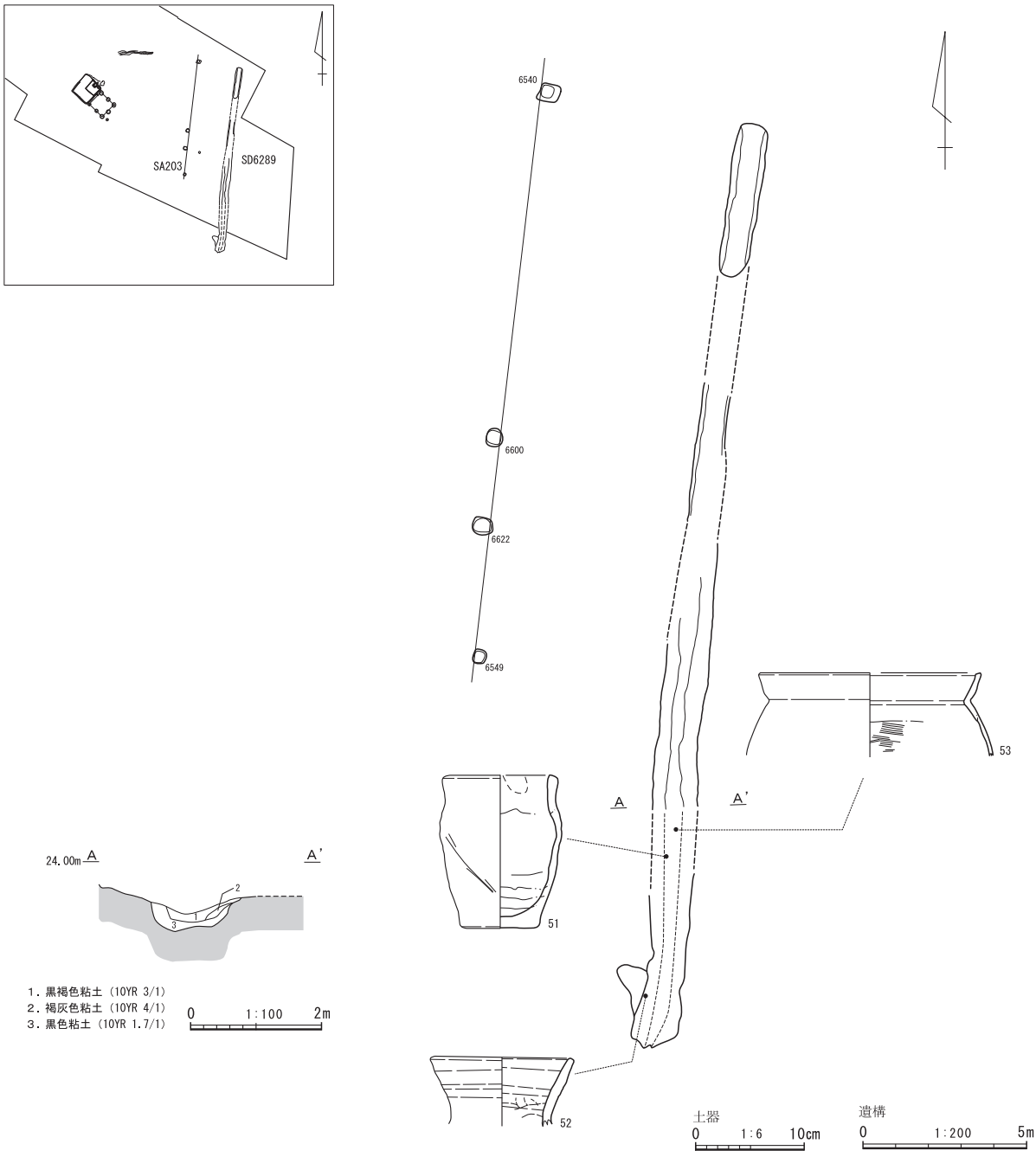
第 49 図　SD9500 実測図



第 50 図　SD9500 出土土器実測図



第 51 図　SD6290 実測図



第 52 図　SA203・SD6289 実測図

はⅡ -1 群の掘立柱建物群の外郭をなす溝であることがいえる。溝覆土内の須恵器はⅢ期後葉で、竪穴住居跡のⅢ期末葉よりも多少古くなる可能性がある。

SD6289（第 52 図）　E-2 区の中央に張り出した丘陵端部を超えた北側の集落範囲で検出した。さらに北側で見つかった SD6405 と繋がり、総延長は 28 ｍほどある。SB217 や SH217 の建物の東面を区画する溝であり、微高地の縁辺部に位置する。溝の西側に併行した柵 SA203 が設けられている。

SD6290（第 51 図）　同じく北側の集落範囲で見つかった溝である。位置は SB217 や SH217 の５ｍ北側で、幅 30 ～ 50 ㎝、延長は東西方向に 50 ｍほど検出した。溝の深さは 20 ～ 30 ㎝で、覆土内より土師器の甕が複数個体見つかっている。坏類の出土量が多い SD9500 とは違い、SD6290 では煮炊きに使われる甕の量が圧倒的に多い（第 53 図）。

第 53 図　SD6289・SD6290 出土土器実測図

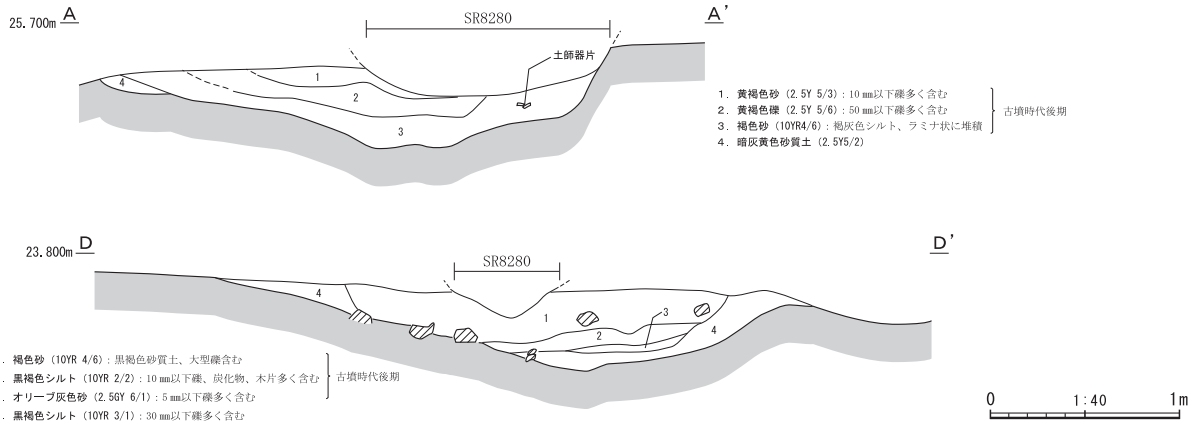
（２）流路

SR9526（9125、9133、9127、8280）（第 54 ～ 56 図）　E-3 区のほぼ中央を北西から南東方向に斜めに横切って検出されたのが自然流路 SR9526 である。流れは集落の東側（標高の低い部分）でいくつかに分岐しており、そのうち SR9190・SR9125 などからも土器が出土している。したがって、ここではこの部分も同一の流路に属するものとして扱った。

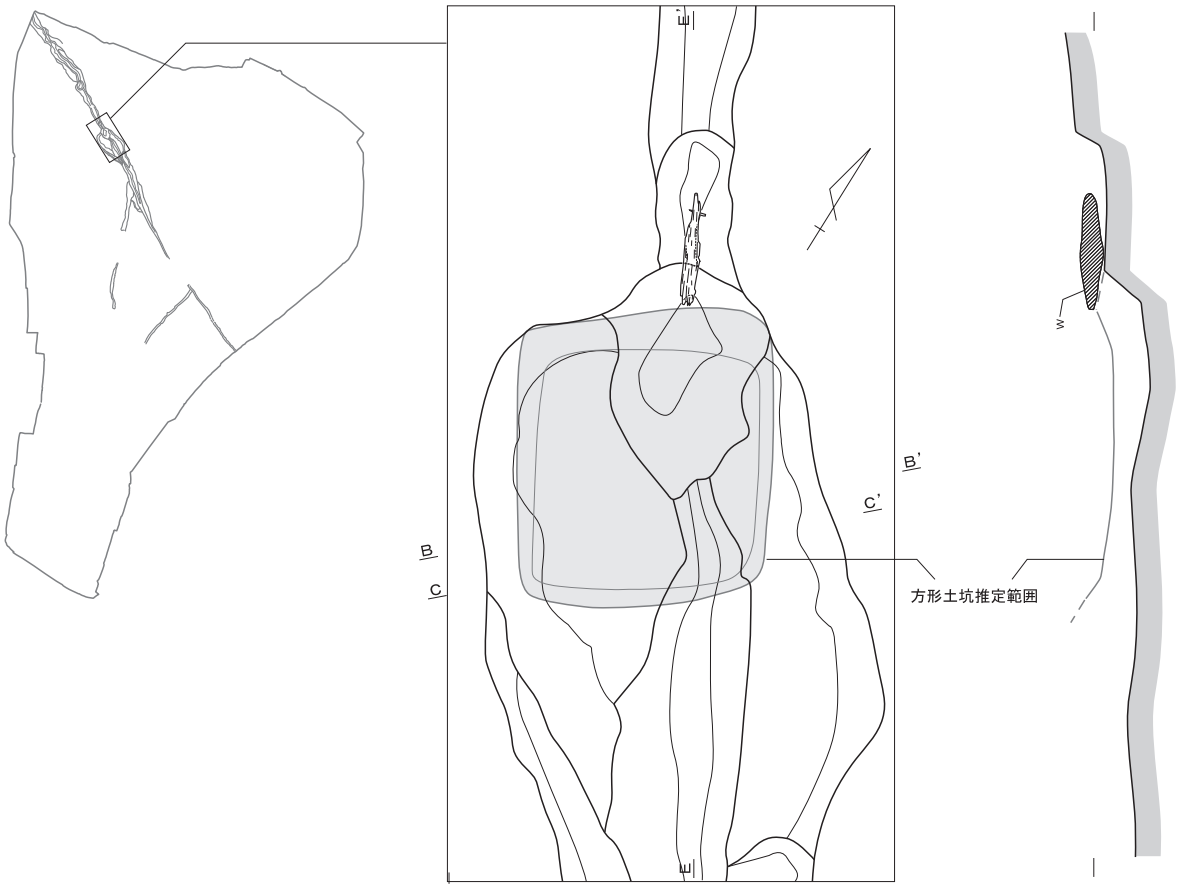
自然流路は集落が位置する微高地の背後にある寺家山丘陵裾に端を発し、竪穴住居や掘立柱建物が建ち並ぶ集落の間を北西から南東方向の低地部へと流れている。弥生時代後期の面ではほぼ似たような場所に自然流路 SR10050 や SR10204 がある。もともと丘陵裾から雨水が流れ出る水の道となっており、時代によって少しずつ位置を変えながら集落の重要な水場として機能したり埋没したりを繰り返している。こうした自然地形のなかに集落が築かれているのである。流路の総延長は約 75 ｍある。形状は 129A-7 グリッドから 130G-1 グリッドまでほぼ真っ直ぐな流れである。流路幅は上流では２～３ｍほどで、下流の低地部へ降りた 129E-10 グリッド辺りからは極端に細くなり、所々、掘形がはっきりしないところもある。掘形は深いところで 40 ㎝ほどある。竪穴住居や掘立柱建物の合間を流れているが、途中、竪穴住居群のある辺りには河幅が広がっているところがある。もともと自然の流れだったであろうが、ある時期になって人為的に手が加えられ、流路幅を拡張して整形されたと考えられる。そこに設けられた導水施設の南側に集水箇所がある。掘り込みの幅は３ｍ60 ㎝、長さは約６ｍ、深さは 60 ㎝ほどである。掘り込みの手前には 40 ㎝幅の流路内に導水施設を設置している（第 55 図）。浅く内面を削り込まれた 104 ㎝ほどの木樋を流路底の流れに沿った方向に置き、木樋の上流側端の下には枕木を咬ませていた。明らかに南側の掘り込みのほうへ導水し、水を溜めた形跡がある。この部分の正確な測量図はないが、第 55 図の網掛け部分のような集水施設があったと想定される。この集水枡からは改修後の 12 層より土器や礫、木製品がまとまって出土した。出土状況は第 56 図に示した。集水枡から下流は、また幅１ｍほどになり、その流路途中に竪杵の未製品が折り重なるように４点出土した（第 56 図下）。遺構の年代は竪穴住居と同じ古墳時代後期である。

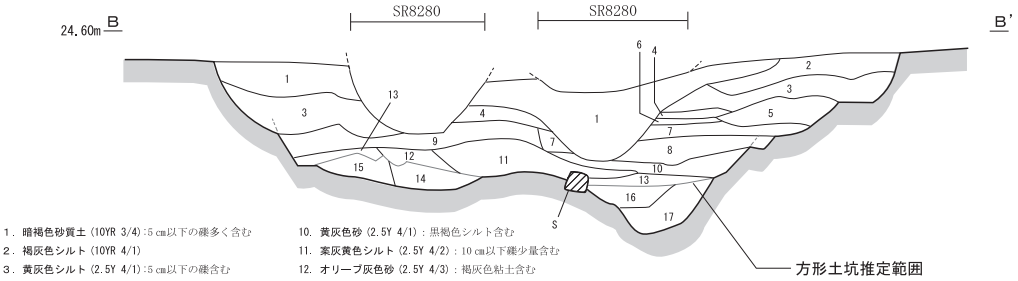
SR8280 は上層の中近世面調査時に検出している。蛇行した流路の上層には山茶碗が出土しているが、下層で出土した土器はいずれも古墳時代後期のものであり、古墳時代後期の遺構と捉えている。SR9526 はその下層で検出しており、ほぼ同じ位置であることから、SR8280 と SR9526 は同じ流路であると考えて間違いないだろう。SR9526 が埋没してきた頃に SR8280 の下流域でやや流れが変わっている。出土土器は土師器、須恵器、山茶碗等がある（第 57 ～ 62 図）。SR9526 と SR8280 では須恵器の時期差はほとんど見えないが、SR9526 がⅢ期後葉～末葉、SR8280 の土器はⅣ期前半に属するものが多い。出土した木製品は約 20 点のうち７点を図化した（『寺家前遺跡Ⅱ』第７図 29 ～ 35）。木製品は直柄横鍬身１点、曲柄鍬の柄１点、刳り物（方形容器）１点、竪杵未製品４点、そのほかは側板状木製品や自然木片が多数ある。集水枡から出土した直柄鋸歯横鍬の鍬身は通称「えぶり」ともいわれ、耕起具で土を起こした後に地均しする道具である。古墳時代後期の農耕土木具の出土例が極端に少ないなかで当遺跡では唯一の鍬身である。同遺構の砂礫層よりナスビ型鍬身を装着する反柄（『寺家前遺跡Ⅱ』第７図 31）も出土している。下流域では竪杵の未製品（同図 32 ～ 35）も出土し、製品加工するまでの間に貯木していた様子を伺わせる。こうした農耕具の出土は水田耕作を行っていた根拠になるであろうか。石器は黒曜石製の打製石鏃、土製品は紡錘車１点と土錘１点、鞴の羽口が１点出土している。この他に自然遺物として、貝、ひょうたん、種子等がある。

このほかの流路として E-2 区では SR6345、SR6398、SR6401 がある（第５図）。これらの流路は竪穴住居や掘立柱建物の間を蛇行している。おそらく弥生時代の自然流路 SR6400 が埋没した後、微高地上に古墳時代の集落が築かれ、その後も山裾から小規模な流れがあったのであろう。E-2 区で検出した自

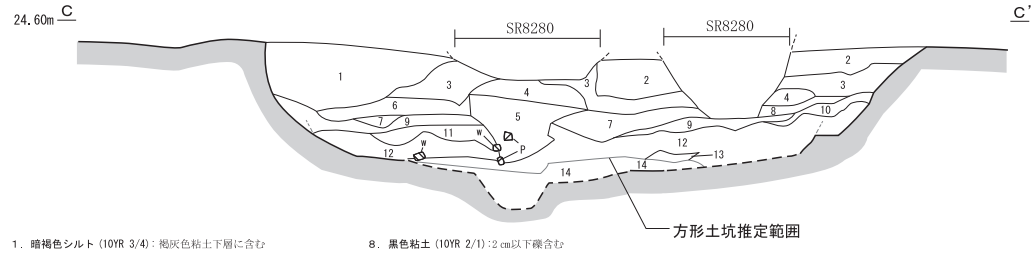


第 54 図　SR9526 実測図 1





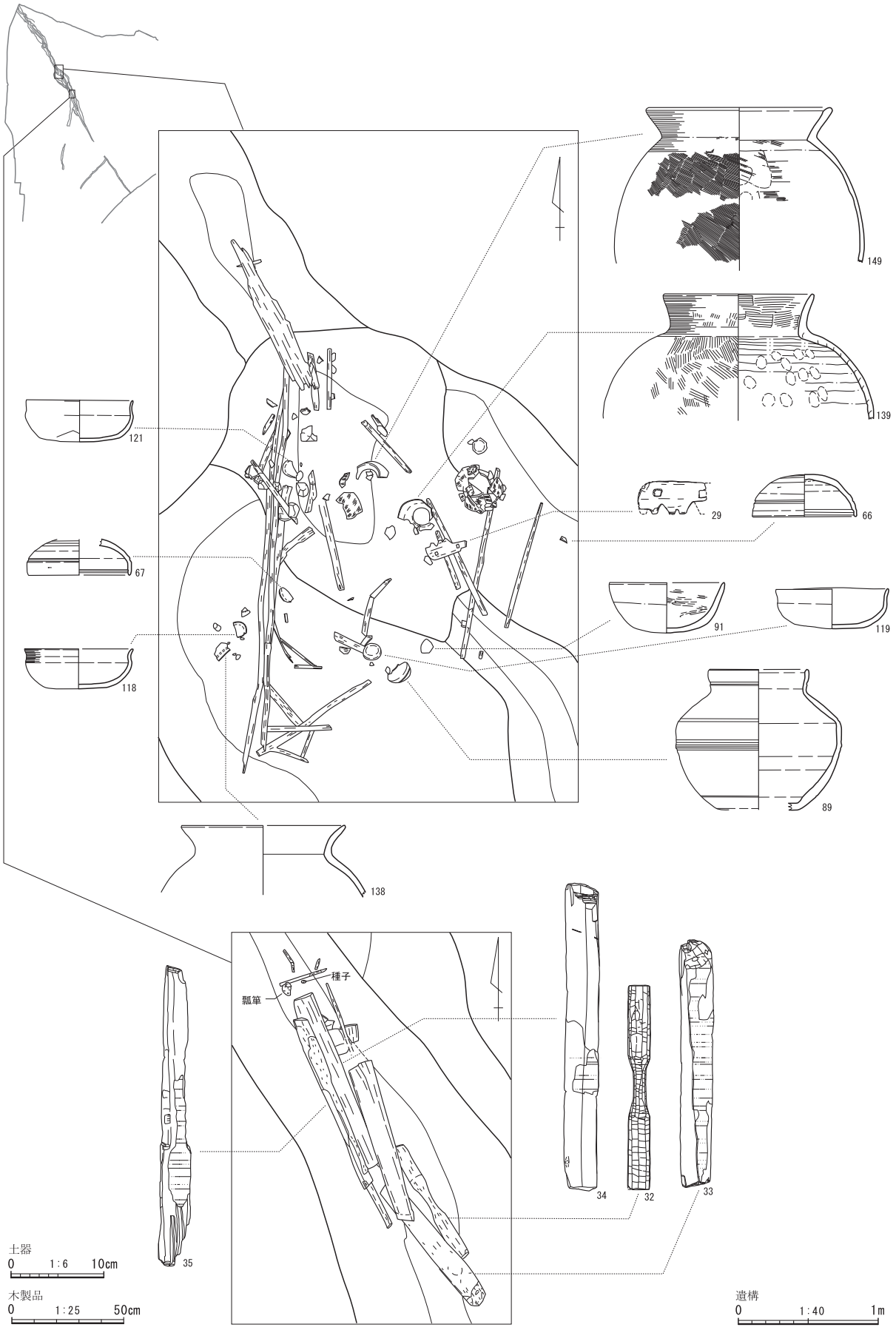
1．暗褐色砂質土（10YR 3/4）：5㎝以下の礫多く含む
2．褐灰色シルト（10YR 4/1）
3．黄灰色シルト（2.5Y 4/1）：5㎝以下の礫含む
4．黒褐色シルト（2.5Y 3/1）
5．オリーブ褐色シルト（2.5Y 4/3）：黄褐色礫含む
6．黒褐色シルト（2.5Y 3/1）：黄灰色砂含む
7．黄灰色砂質土（2.5Y 4/1）：炭化物含む
8．褐灰色粘土（10YR 5/1）：褐灰色粘土、炭化物含む
9．褐灰色粘土（10YR 4/1）：褐灰色粘土ブロック含む
10．黄灰色砂（2.5Y 4/1）：黒褐色シルト含む
11．案灰黄色シルト（2.5Y 4/2）：10㎝以下礫少量含む
12．オリーブ灰色砂（2.5Y 4/3）：褐灰色粘土含む
13．黒褐色砂（2.5Y 3/1）
14．黒色粘土（2.5Y 2/1）：褐灰色粘土ブロック含む
15．灰色粘土（7.5Y 6/1）：黒色粘土少量含む
16．オリーブ灰色砂（2.5GY 6/1）：3㎝以下礫多く含む
17．オリーブ灰色粘土（2.5GY 5/1）



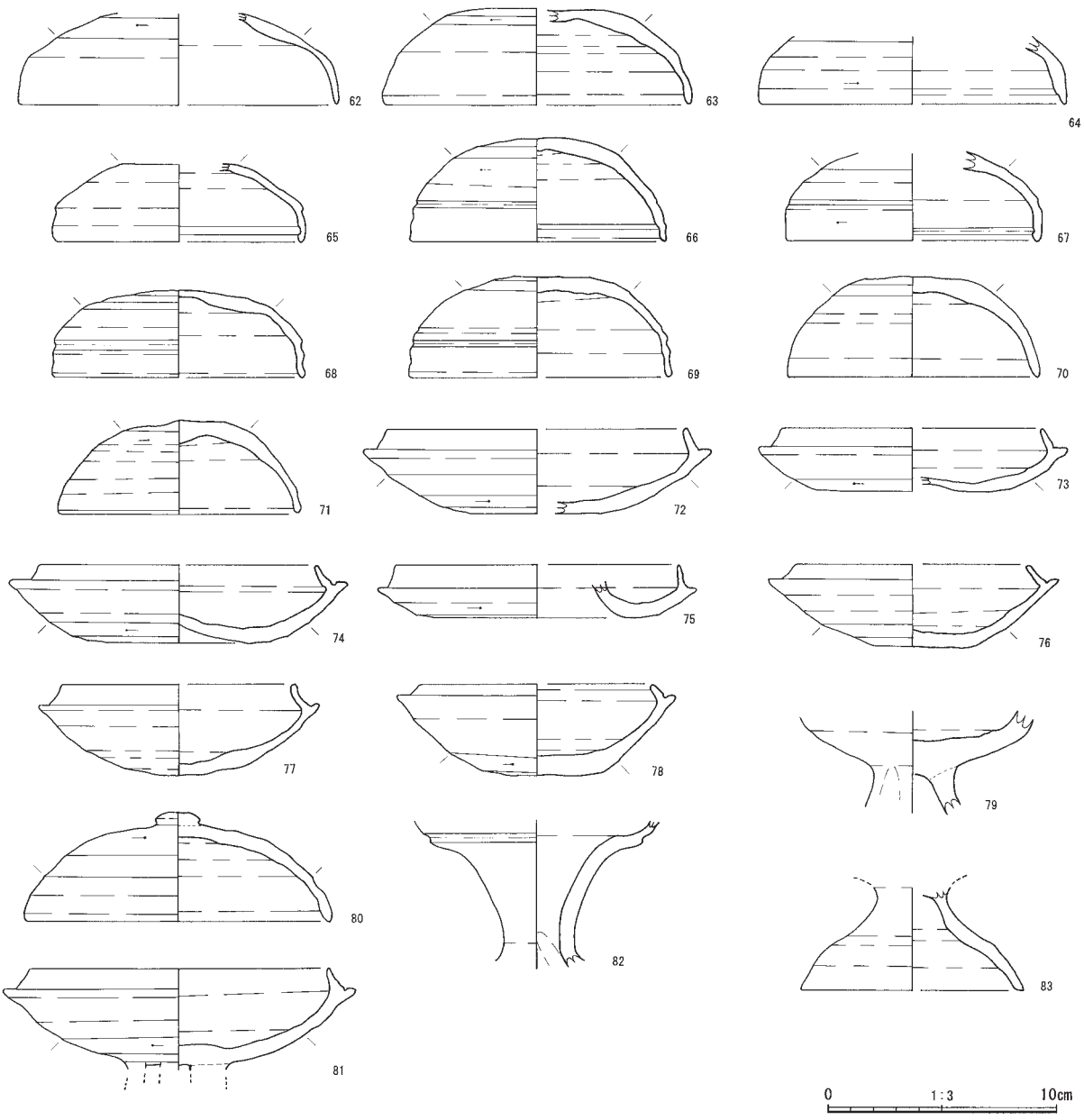
1．暗褐色シルト（10YR 3/4）：褐灰色粘土下層に含む
2．明黄褐色砂質土（10YR 6/6）：2㎝以下の礫多く含む
3．黒褐色粘土（2.5Y 3/1）：5㎜以下の礫多く含む
4．灰黄色礫（2.5Y 6/2）：黒褐色粘土含む
5．オリーブ褐色砂（2.5Y 4/3）：大型角礫、2㎝以下の礫多く含む
6．黒褐色粘土（2.5Y 3/2）：木片・炭化物がラミナ状に含む
7．黒褐色粘質土（2.5Y 3/1）：明オリーブ砂質土含む
8．黒色粘土（10YR 2/1）：2㎝以下礫含む
9．黄灰色粘土（2.5Y 4/1）
10．褐灰色粘土（10YR 4/1）：1㎝以下礫含む
11．褐灰色粘土（10YR 4/1）：黄灰色粘土ブロック含む
12．黄灰色粘土（2.5Y 6/1）：褐灰色粘土含む
13．黒褐色粘土（2.5Y　3/1）：オリーブ褐色砂質土含む
14．黒色粘土（2.5Y 2/1）：20㎝大角礫含む

0　1：40　1m

第 55 図　SR9526 実測図２

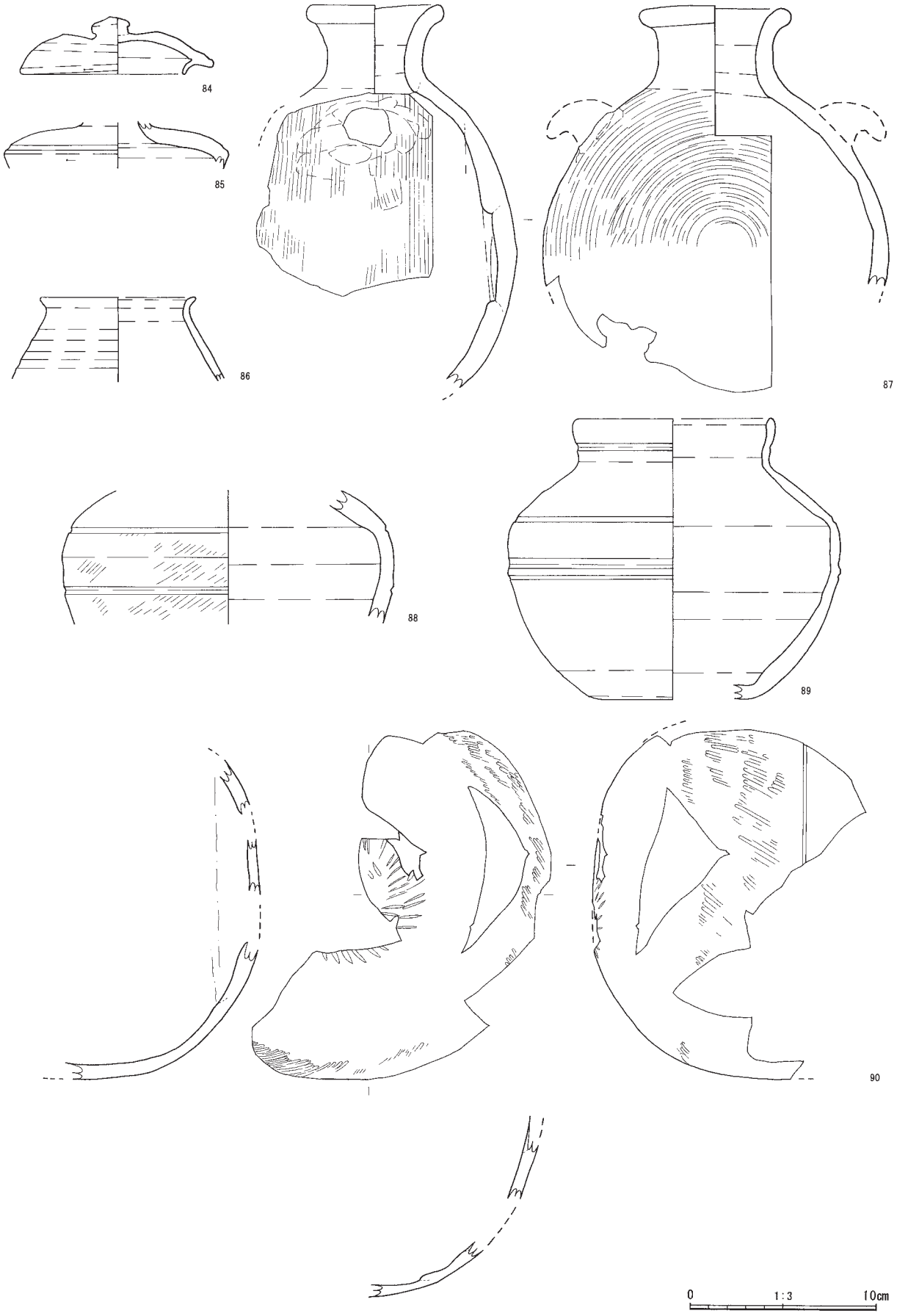


第 56 図　SR9526 実測図３

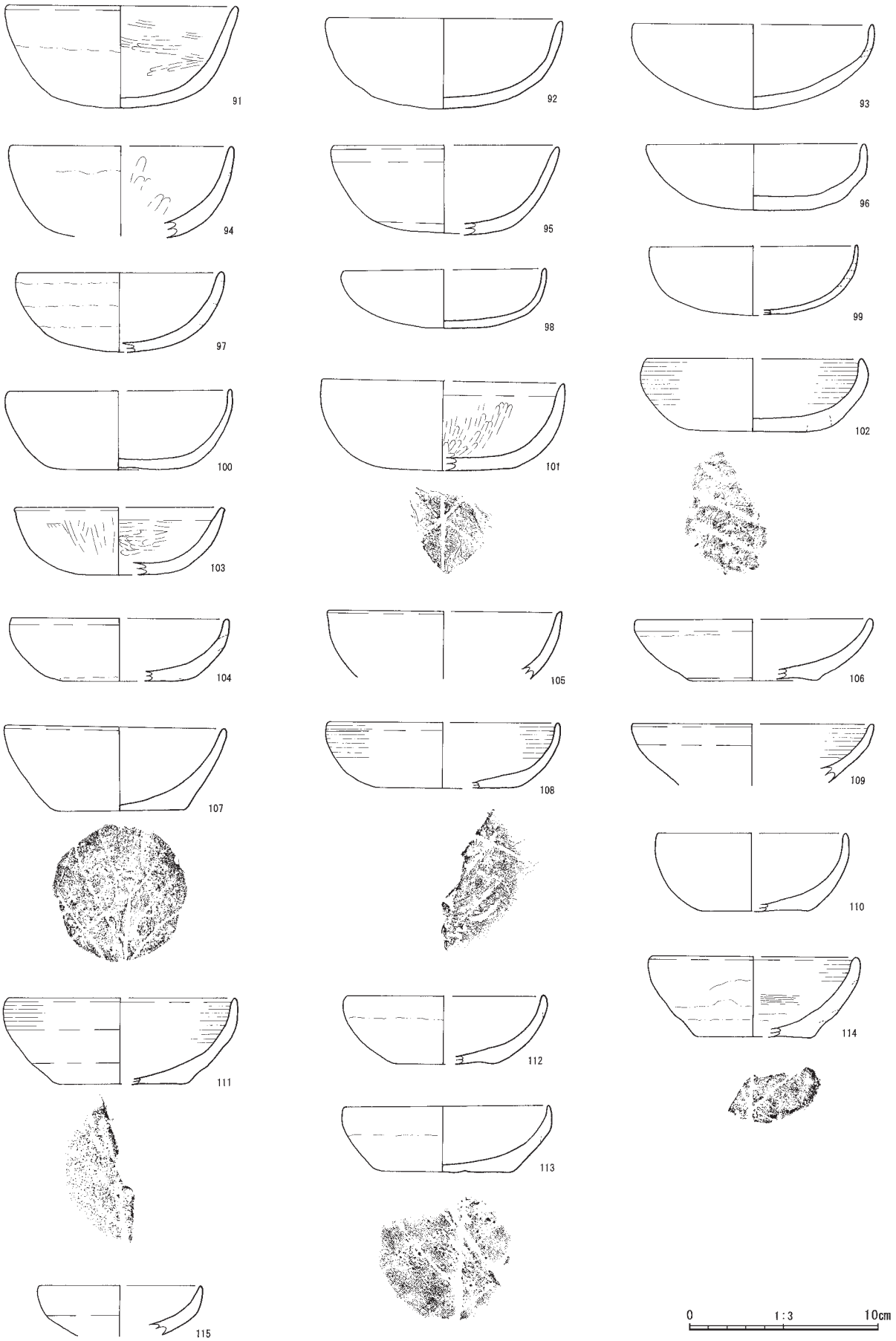


第 57 図　SR9526 出土土器実測図 1

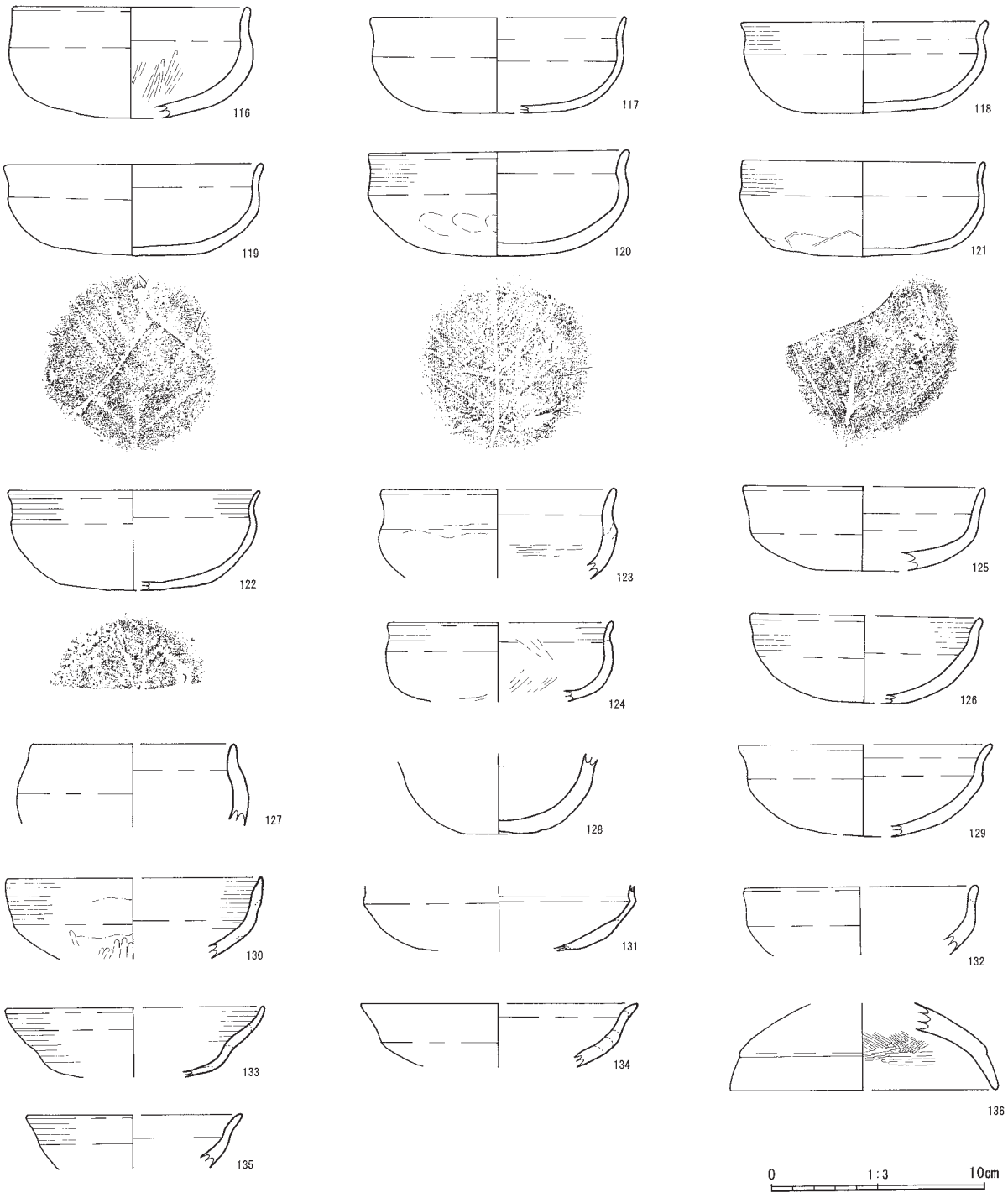
然流路に関しては、集落内に位置することから覆土内の出土品は包含層と同じ扱いとした。E-3 区では SR8767、SR9125、SR9126、SR9128、SR9136、SR9137 がある。いずれも自然流路 SR9526 が埋没していく課程で周辺部に分岐した流れや、山裾からの小規模な流れであろう。SR8767 は SR9126 より分岐した SR9125 に続く流路と考えられる。微高地の縁辺部に位置し、覆土より須恵器の横瓶（第 58 図 90）が出土している。SR9126 も SR9526 から分岐した流路である。SR9125 よりも南側の縁辺部を等高線に沿って南西方向に流れをもつ。覆土内より須恵器の坏身、坏蓋、高坏（第 57 図）や種子が出土した。SR9128 は西側の微高地から低地へ向かって東流する。覆土内には須恵器の高坏や種子含まれていた。SR9136 はⅡ -1 群側の微高地から南西へ流れている。須恵器の小型壷や坏身がある。SR9137 も同様の小規模流路で須恵器の坏身が出土している。E-3 区にある流路内の須恵器はいずれもⅢ期末葉からⅣ期前半に属するもので、集落の継続する時期に当てはまる。



第 58 図　SR9526 出土土器実測図２



第 59 図　SR9526 出土土器実測図３



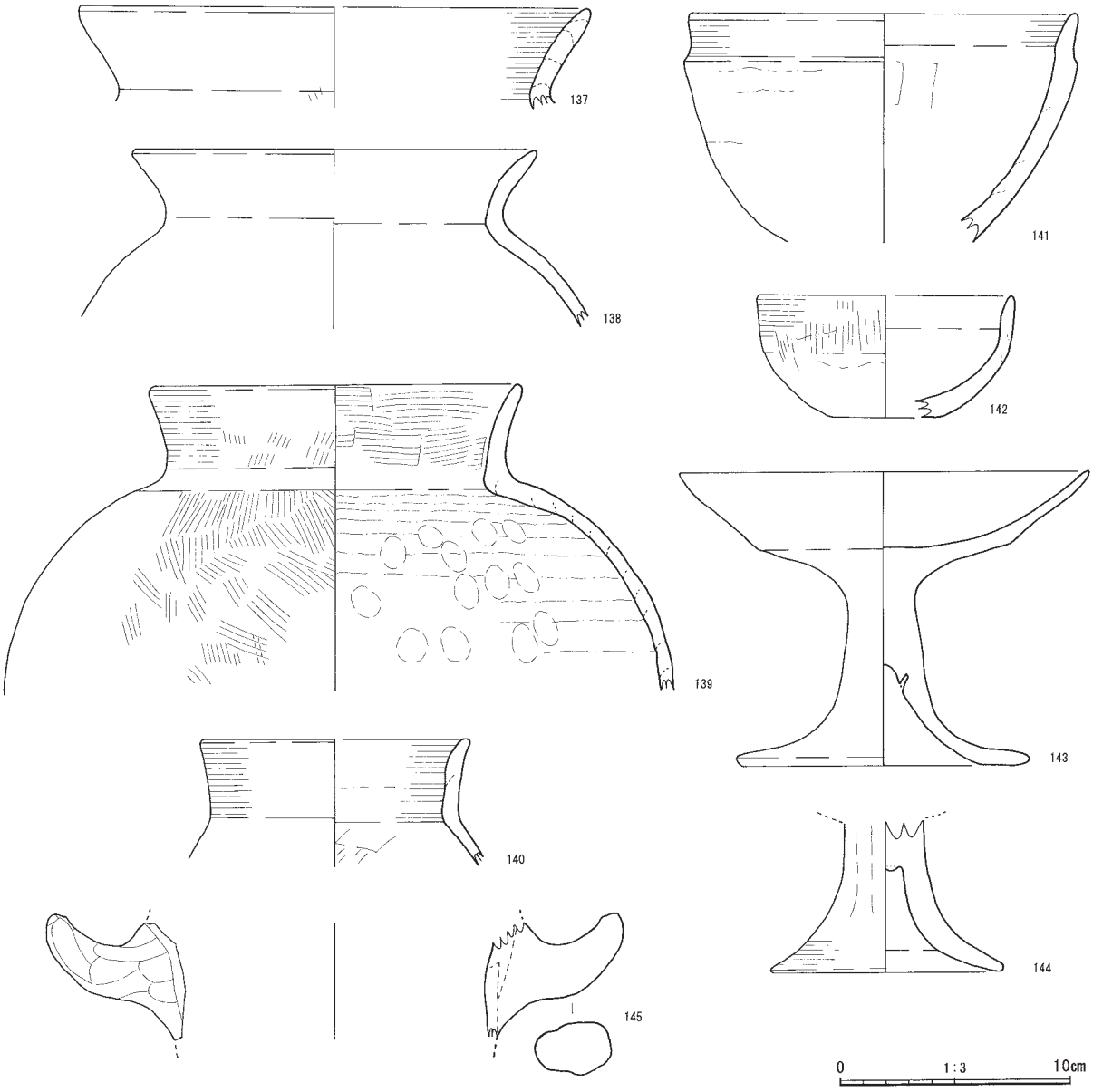
第 60 図　SR9526 出土土器実測図４

５　土坑・その他

SF240（第 63 図）　A-1 区で検出した古墳時代の土坑である。SF240 の位置は西側に隣接する丘陵の緩斜面上である。長軸が 105 ㎝、短軸が 86 ㎝の浅い楕円形をしている。覆土からは長胴甕が１個体分出土している（第 65 図 164）。他に出土品がなく手掛かりはないが、土坑墓の可能性がある。

SF2595（第 63 図）　E-2 区の北側、集落域のなかで検出した土坑である。径 46 ㎝、深さ 24 ㎝程度の穴からは土師器の小型甕が１個体出土した（第 92 図 412）。遺構の性格は不明である。

その他に検出した土坑はいずれも E-3 区で検出した。



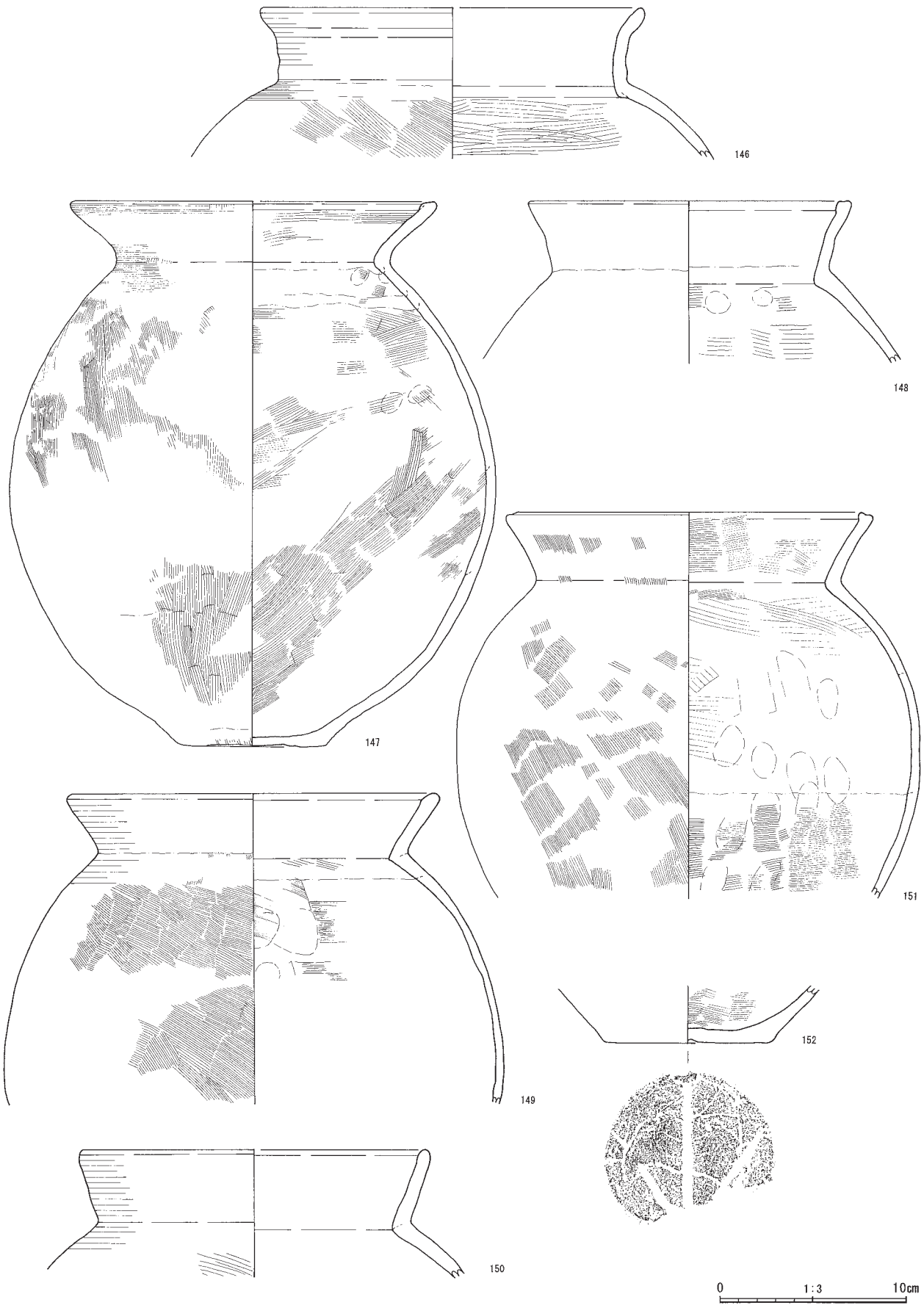
第 61 図　SR9526 出土土器実測図５

SF9305（第 63 図）　E-3 区の南端、掘立柱建物 SH330 の東側にある。直径が 68 × 63 ㎝、深さは 27 ㎝で、覆土上層は炭化物を多く含む。遺構の性格は不明だが焼土坑のひとつである。

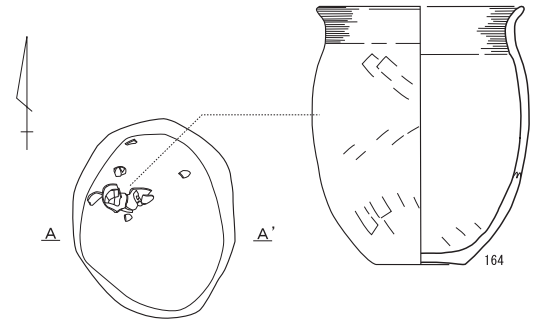
SF9607（第 63 図）　E-2 区との境界付近に位置する焼土坑である。竪穴住居 SB305 の西壁にある竈と周溝よりも、更に西側で検出している（図版 48）。土坑として調査しているが、竪穴住居の煙道の位置としてもおかしくない。長軸 98 ㎝、短軸は 76 ㎝、深さ５㎝と浅い隅丸方形を呈する。壁は全体に被熱で赤褐色や白色化し、かなり強く被熱していた様相がうかがえる。南側には灰や炭化物が溜まっていた。覆土内には被熱した壁の一部や小礫、土器片が出土している。土器は甑の底部である（第 101 図 484）。甑片が出ていることからも遺構は煮炊きをする竈の用途に近い施設であろう。

SF9634（第 63 図）　SH327 の東側に位置する焼土抗で、溝 SD9500 で西側を切られている。E-3 区南で検出した SF9305 と同様に焼土と炭化物のみで土器は出土しなかった。隅丸の方形で壁は被熱しており覆土に炭化物を多く含む。SF9607 と同じような構造をもつ土坑と考えられる。

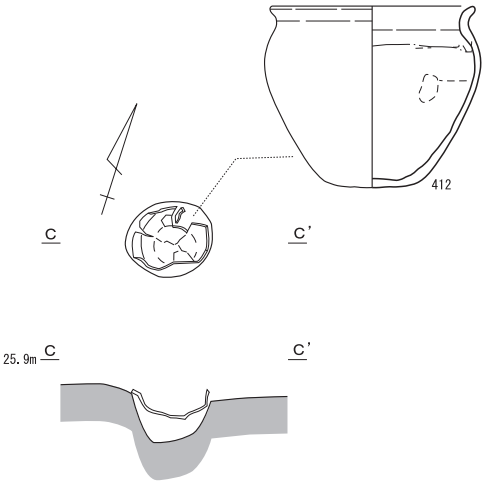
SF9848（第 63 図）　竪穴住居 SB302 の西側周溝に切られている。また SB302 の竈に近い位置にあたる。



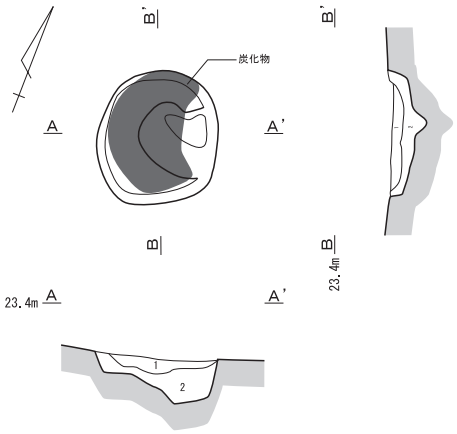
第 62 図　SR9526 出土土器実測図６



SF240

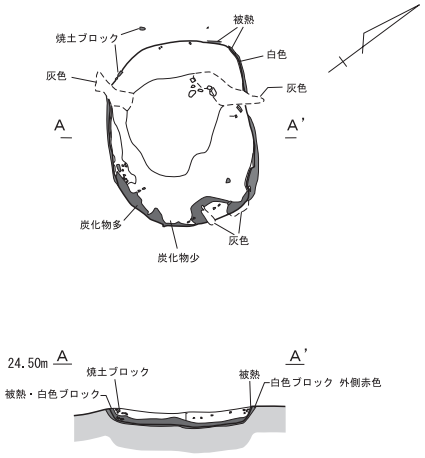


SF2595



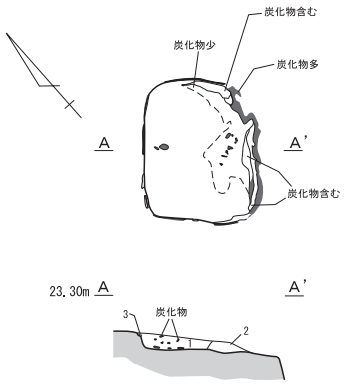
1．黒褐色シルト（10YR 3/1）：２㎜灰白色礫・炭化物多く混じる
2．オリーブ褐色シルト（2.5Y 4/3）：２㎜青灰色礫多く含む

SF9305



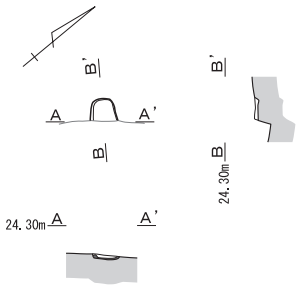
1．褐色シルト（10YR 4/4）：炭化物多く、焼土・灰色シルト・１～３㎜礫含む

SF9607



1．暗灰黄色砂質土（2.5Y 4/2）：炭化物多く、にぶい褐色シルトブロック含む
2．黒褐色シルト（2.5Y 3/2）：２㎝以下炭化物非常に多く含む
3．明褐色シルト（7.5EYR 5/6）

SF9634

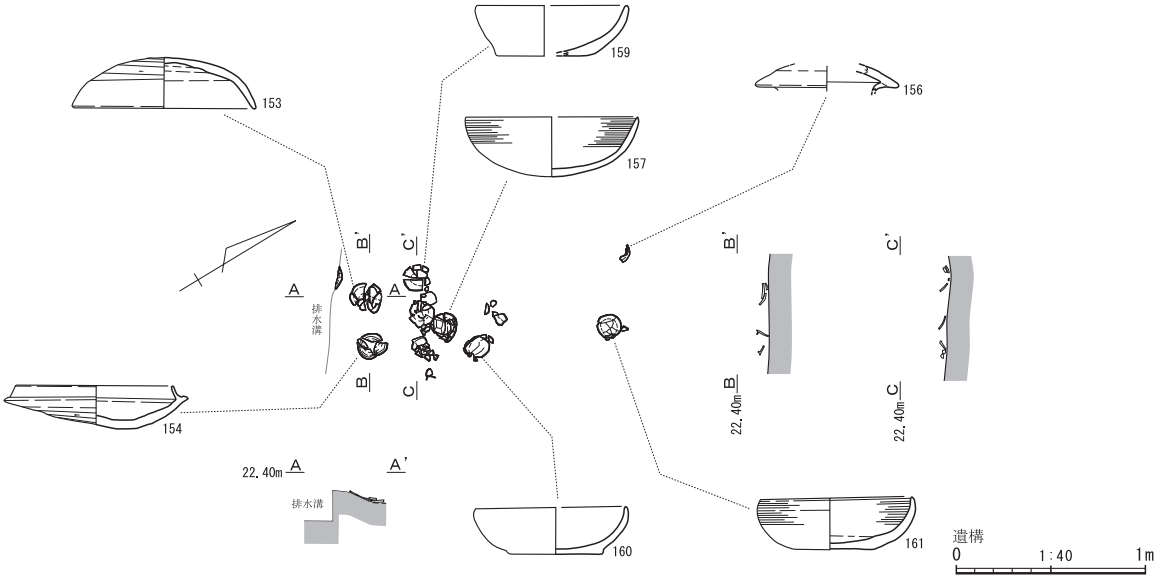


SF9848

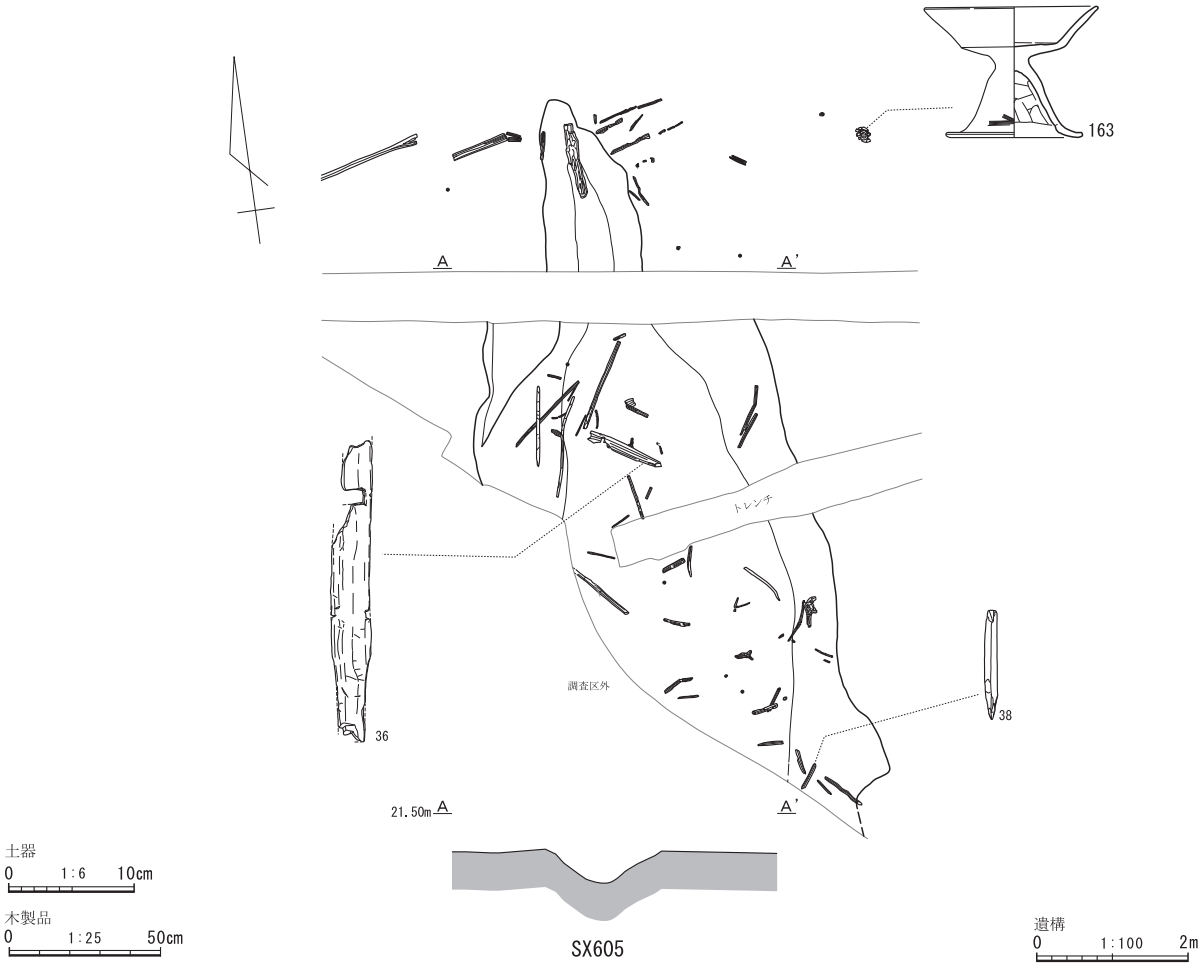
土器
0　1：6　10cm

遺構
0　1：40　1m

第 63 図　SF240・SF2595・SF9305・SF9607・SF9634・SF9848 実測図

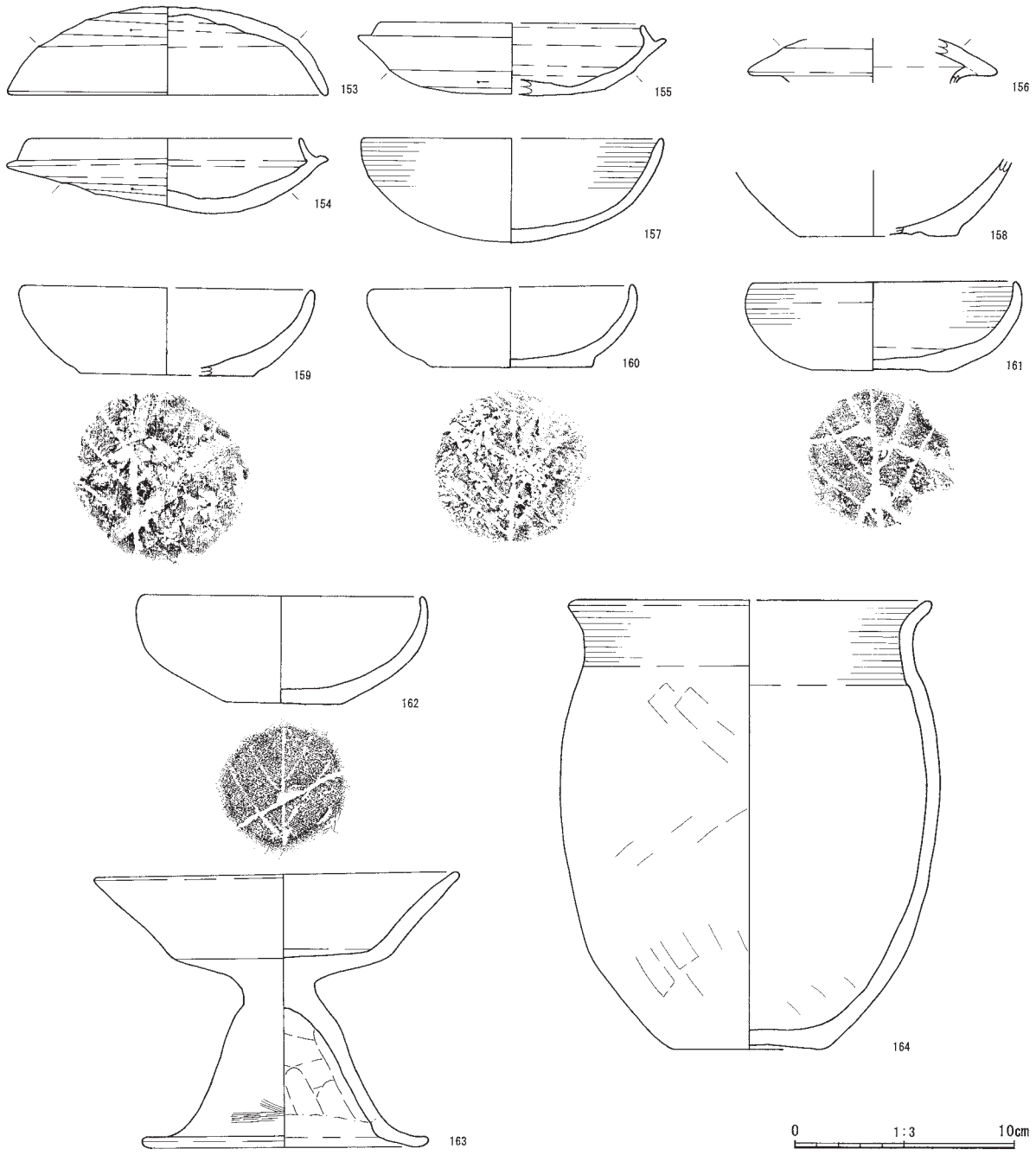


SX541



SX605

第 64 図　SX541・SX605 実測図



第 65 図　SX541・SX605・SF240 出土土器実測図

出土遺物はなく覆土は焼土が溜まっていた。

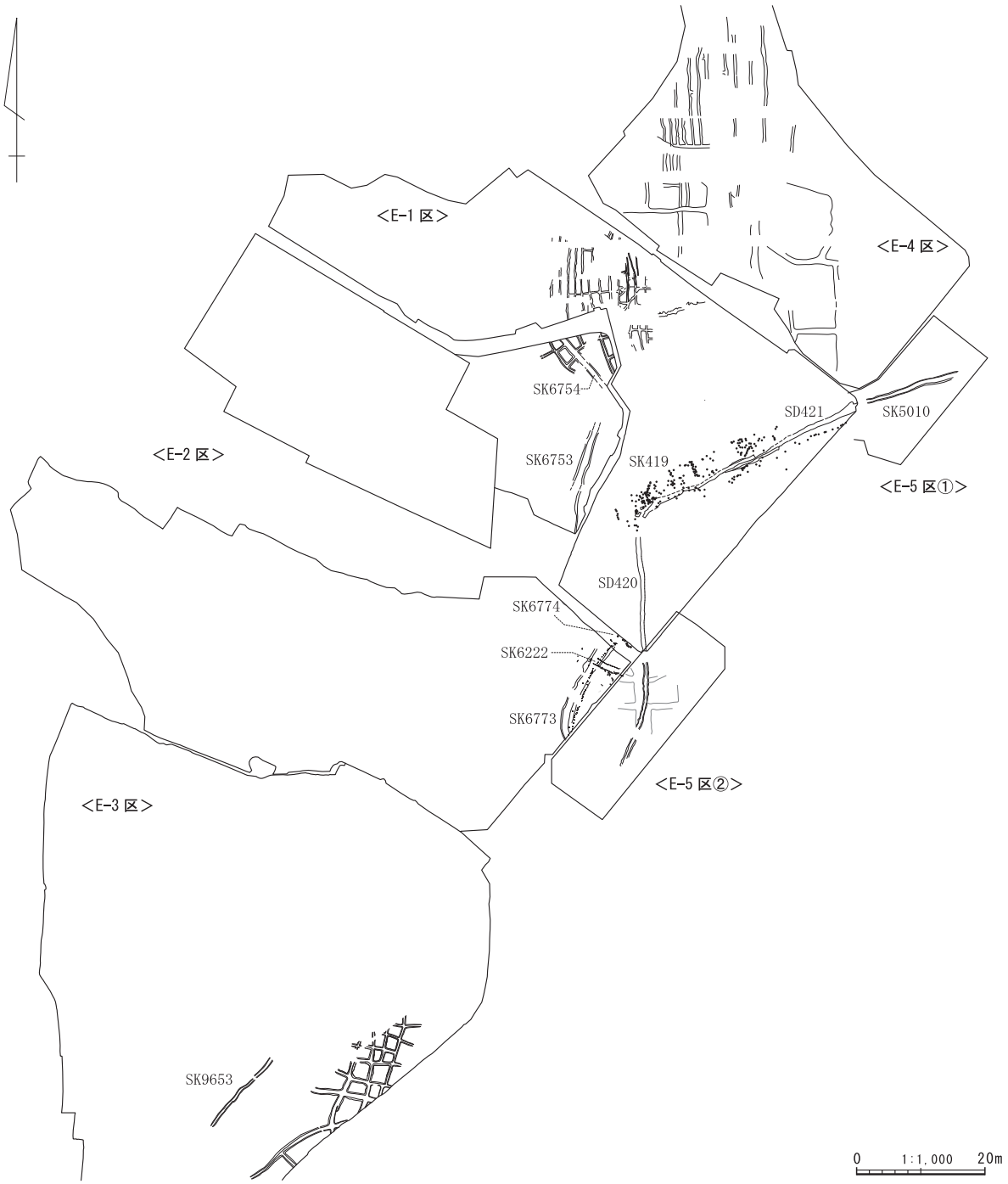
SX541（第 64 図）　A-1 区の北西端で土器が複数個体集中して出土した場所である。丘陵裾の緩斜面にあたり、掘形も確認されなかった。土器は須恵器の坏蓋、坏身、壷蓋、土師器の坏身で６世紀後半期のものである。出土状況は廃棄、散在しているというよりも並べ置いたような状態である。坏類が主体であることからみても祭祀的な行為を行った痕跡と考えることもできる。

SX605（第 64 図）　A-2 区の南端で検出した。調査時は土坑状の遺構と考えたが、周辺の地形から勘案すると、この位置は低地がさらに南へ大きく下がっていく自然地形であろう。つまり、ここが水田の南縁部と言える。出土遺物は杭、板などの木製品が散在していたほか、覆土からは土師器の坏が出ている。また東寄りの場所で土師器の高坏（第 65 図 163）が１個体出土している。

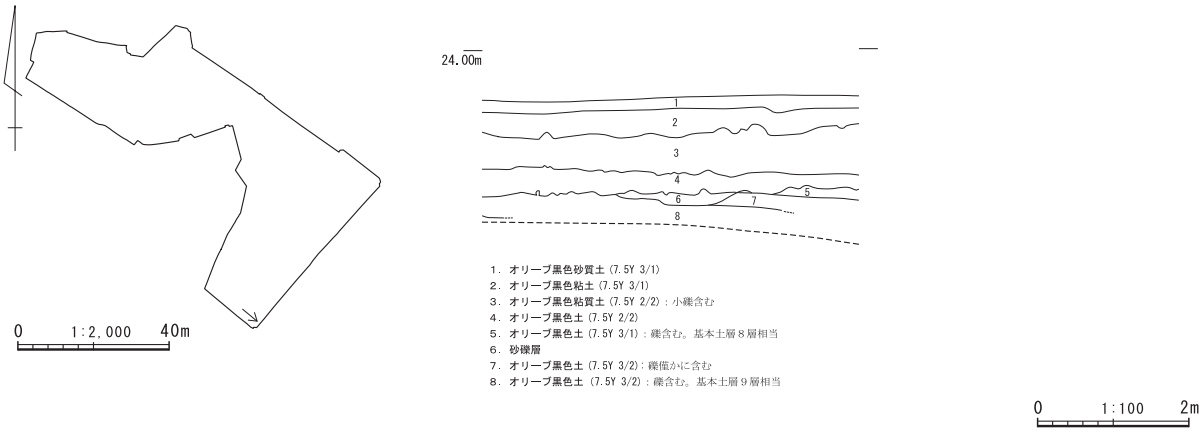
６　水田跡

古墳時代後期の集落遺構面より北東側から南側にかけての低湿地では水田遺構が検出された。遺構の種類は大畔と小畔、水路などである。寺家前遺跡の水田は弥生時代後期に開田されたものであり、畔は杭列を伴う大畔が調査区の南側のほぼ全域に見つかっている。しかし集落が古墳時代初頭に一旦途絶えると、それとともに水田も使われなくなったようである。古墳時代後期に入り再び当地に集落が築かれてから、低地部では水田の一部を改変して耕作をしている形跡がみられる。

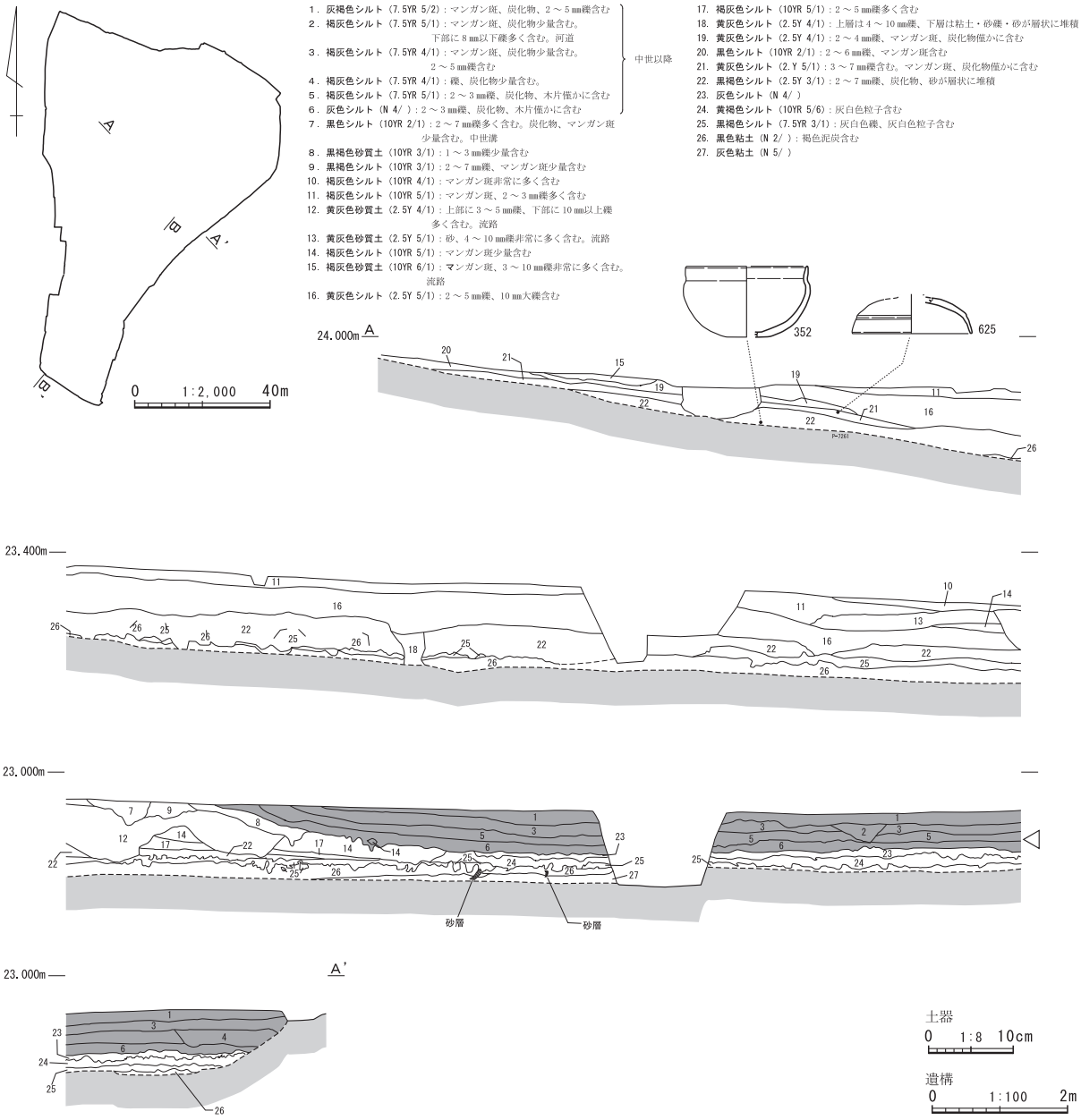
ただし、水田遺構の発掘調査では、必ずしも各時代の水田遺構面がとらえられてるわけではない。低湿地部分の堆積は洪水や大きな土砂崩れなどの影響を受けていた形跡は少なく、比較的安定した堆積層である。したがって弥生時代後期と古墳時代後期との間に水田面の大きなレベル差はない。場所によっ



第 66 図　水田遺構配置図



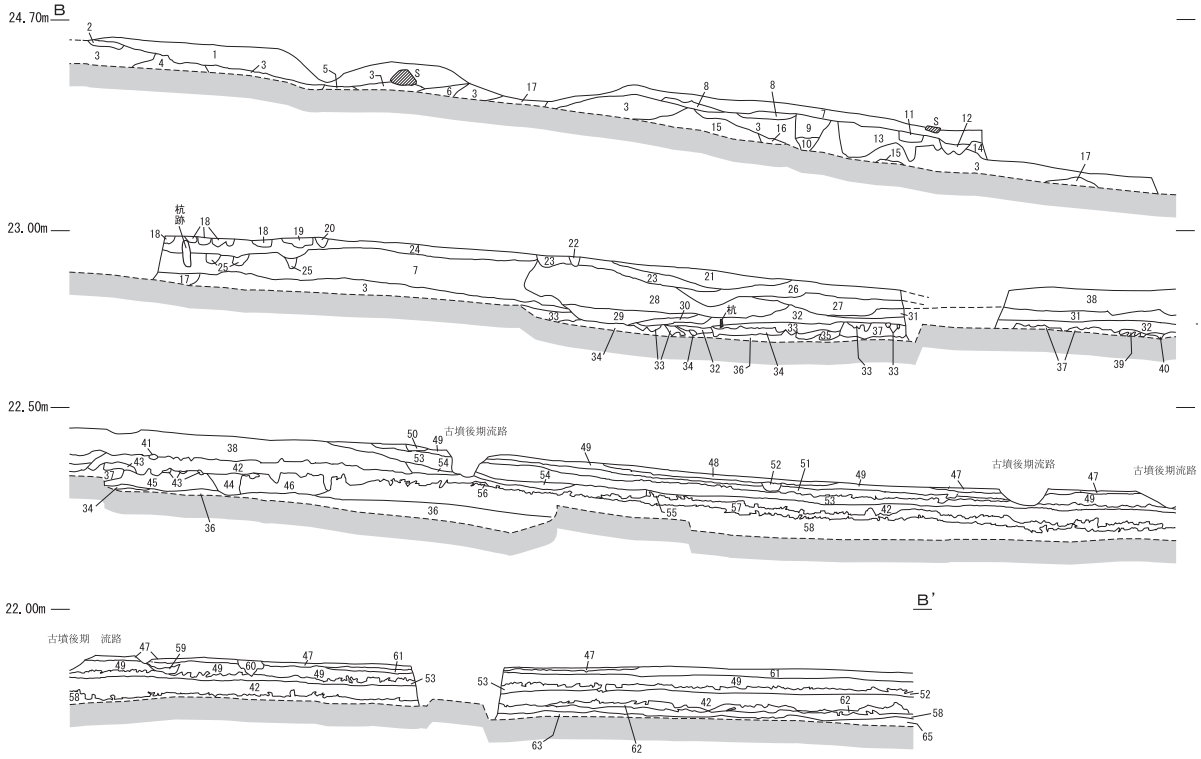
第 67 図　E-1 区土層堆積状況図



第 68 図　E-3 区土層堆積状況図１

ては同一面で検出した調査区もあるため、弥生時代の水田と古墳時代の水田とを切り分けることは困難であった。層位の目安としては『寺家前遺跡Ⅰ』第１章第４節の４．基本土層で述べているとおり、E-3区、E-1区、E-4区では８層上面、A-1区、A-2区、E-5区②、E-5区①では９層上面が古墳時代後期の水田面となる。出土遺物を検証した結果、本編では確実に古墳時代の畔や水路と捉えられる遺構だけを抽出して掲載した。以下、古墳時代の水田遺構とした畔や水路について個別に記述する。

SK419・SD420・SD421・SK5010（第70図）　資料整理での検討の結果、E-1区で検出したSK419、SD420、SD421は一連の遺構とみている。つまり、この３つの遺構の繋がりが１本の大畔か区画であろうと考えている。これらの遺構はE-5区②で検出したSD10457と繋がり、E-5区①で検出したSK5010と繋がる（第70図）。E-1区のSK419、SD420、SD421は正確な遺構測量図がなく概略図のみである。測量した遺構図はE-1区では鋤先痕の部分図と南壁土層断面図(第70図)、E-5区①②の遺構全体図のみである。

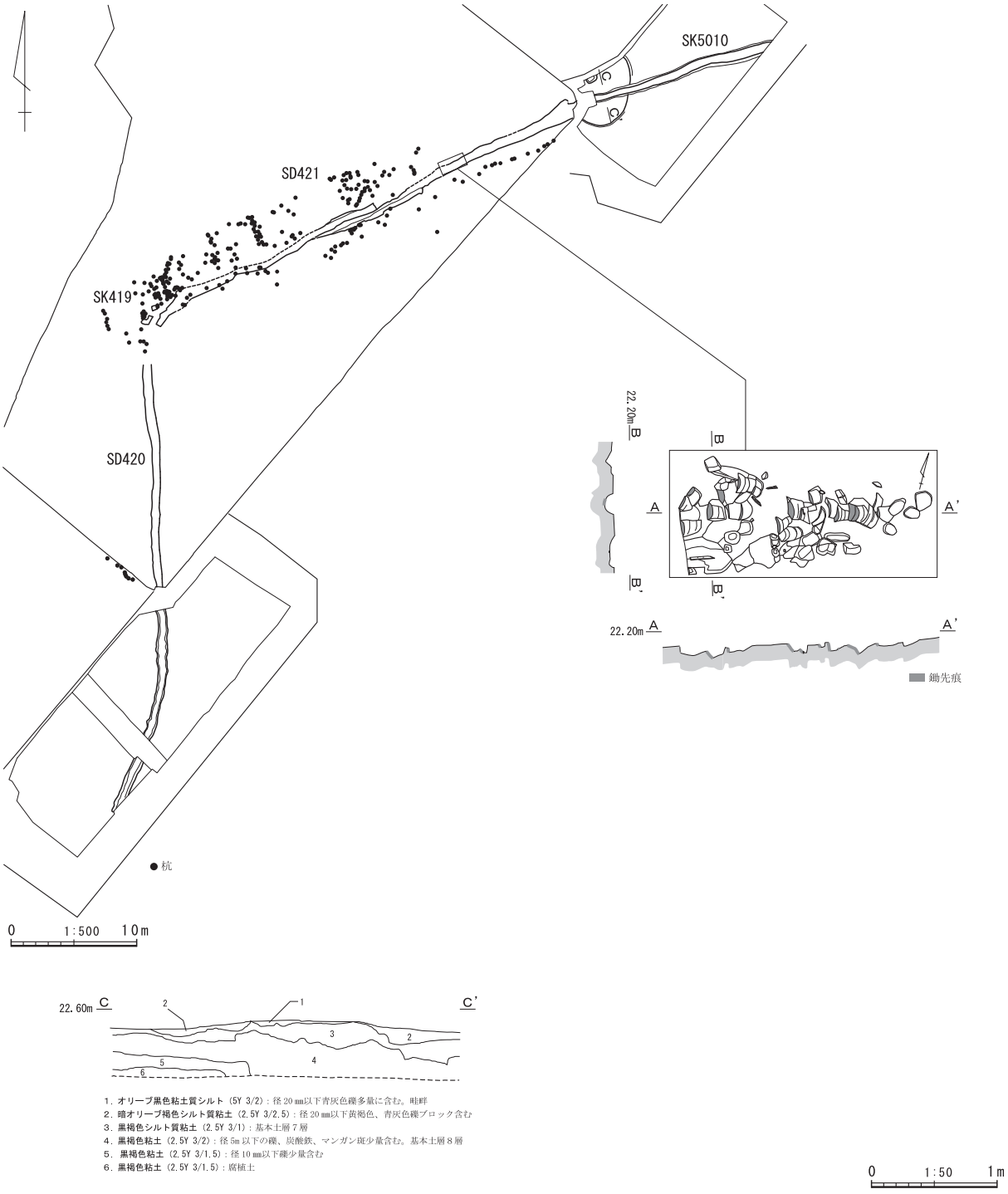


1．灰色シルト（5Y 5/1）：3㎝以下礫多量、マンガン斑・大型礫含む
2．黒褐色土粘土（2.5Y 3/1）：2㎝以下礫・マンガン斑含む
3．緑灰色粘土（10GY 6/1）：5㎝以下礫・マンガン斑少量含む
4．オリーブ黒色粘土（7.5Y 3/1）：2㎜以下礫多量、緑灰色シルト含む
5．黒色粘土（5Y 2/1）：2㎜以下礫多く含む
6．黒褐色粘土（2.5Y 3/1）：マンガン斑少量、2㎝以下礫含む
7．黄灰色シルト（2.5Y 4/1）：5㎜以下礫多量、マンガン斑含む
8．灰色粘土（7.5Y 4/1）：5㎜以下礫多量、マンガン斑含む
9．オリーブ灰粘土（10Y 4/2）：明灰色粘土、1㎝以下礫僅かに含む
10．オリーブ褐色粘土（2.5Y 4/3）：1㎜以下礫多量、大型礫僅かに含む
11．黒褐色粘土（2.5Y 3/1）：2㎜以下礫多量、マンガン斑含む
12．灰色粘土（10Y 4/1）：1㎜以下礫多量、2㎝以下礫・マンガン斑含む
13．緑灰色シルト（10GY 5/1）：2㎜以下礫多量、マンガン斑・5㎜以下礫含む
14．暗オリーブ褐色粘土（2.5Y 3/3）：3㎜以下礫含む
15．灰色粘土（7.5Y 5/1）：5㎜以下礫多量、明緑灰色粘土含む
16．明青灰色粘土（10BG 7/1）
17．オリーブ黒粘土（5Y 3/1）：灰白色粘土・2㎜以下礫含む
18．黄灰色粘土（2.5Y 4/1）：黒褐色粘土・灰白色粘土・酸化鉄・2㎜以下礫含む
19．オリーブ黒色粘土（5Y 3/1）：5㎜以下礫多量、炭化物僅かに含む
20．オリーブ褐色粘土（2.5Y 4/4）：酸化鉄含む
21．暗オリーブ褐色粘土（2.5Y 3/3）：4㎝以下黄褐色礫非常に多く含む
22．オリーブ黒色粘土（5Y 3/1）：2㎝以下礫・酸化鉄含む
23．暗褐色シルト（7.5YR 4/6）：2.5㎝以下礫非常に多く、酸化鉄・炭化物含む
24．オリーブ黒粘土（5Y 3/1）：酸化鉄多量、1㎝以下礫・暗褐色シルト含む
25．黒褐色粘土（2.5Y 3/1）：暗灰黄色砂質土含む。流路
26．黄灰色粘土（2.5Y 4/1）：2㎜以下礫多量、20㎜以下礫少量、炭化物・酸化鉄含む
27．黄灰砂質土（2.5Y5/1）：炭化鉄少量、酸化鉄・暗灰黄色粘土含む
28．オリーブ褐色砂質土（2.5Y 4/3）：炭化物・酸化鉄・4㎜以下礫・黄灰色粘土含む
29．オリーブ黒色粘土（5Y 3/1）：黄褐色砂質土多量、炭化物含む
30．黄灰色粘土（2.5Y 4/1）：5㎜以下礫を非常に多く含む
31．黄灰色シルト（2.5Y 5/1）：5㎜以下礫多量、炭化物・酸化鉄含む
32．オリーブ黒色粘土（5Y 3/1）：炭化物・黒色粘土・オリーブ色砂質土・径5㎜以下礫含む
33．黒色粘土（5Y 2/1）：青灰色礫非常多量、5㎝以下礫・暗オリーブ灰色粘土含む
34．明青灰色礫（10BG 7/1）
35．黒褐色粘土（2.5Y 3/1）
36．黒色粘土（2.5Y 2/1）
37．緑灰色礫（7.5GY 6/1）：流路
38．黒色粘土（5Y 2/1）：5㎜以下礫多量、酸化鉄・炭化物・明緑灰色砂礫・灰色粘土含む
39．オリーブ黒粘土（5Y 3/1）：酸化鉄・1㎜以下礫・炭化物含む
40．オリーブ黒粘土（5Y 3/1）：明緑灰色土含む
41．淡黄砂（7.5Y 7/3）
42．灰色粘土（5Y 4/1）：オリーブ色粒子多量、炭化物・3㎜以下礫含む
43．オリーブ黒粘土（5Y 2/2）：灰色粘土・酸化鉄含む
44．オリーブ黒色粘土（5Y 3/1）：酸化鉄・緑灰砂礫含む
45．黒褐色粘土（2.5Y 3/1）：酸化鉄・黄灰砂礫・2㎜以下礫含む
46．黒褐色粘土（2.5Y 3/1）：オリーブ褐色粒子含む
47．黒褐色粘土（2.5Y 3/1）：灰色粘土・植物遺体含む
48．黄灰色粘土（2.5Y 4/1）：植物遺体僅かに含む
49．オリーブ黒粘土（5Y 3/1）：炭化物・オリーブ色粒子含む
50．灰色シルト（5Y 5/1）：3㎝以下礫・明黄褐色シルト含む。流路
51．黒色粘土（5Y 2/1）：オリーブ色粒子・炭化物含む
52．黒色粘土（5Y 2/1）：砂質土多量、炭化物・植物遺体含む
53．オリーブ黒色粘土（5Y 3/1）：砂質土・1㎝以下砂多量、炭化物・灰色粘土・酸化鉄含む
54．黒褐色粘土（2.5Y 3/1）：2㎜以下礫・酸化鉄含む
55．オリーブ黒色粘土（5Y 3/1）
56．オリーブ黒色粘土（5Y 3/1）：酸化鉄含む
57．黒色粘土（5Y 2/1）：酸化鉄・灰色粘土含む
58．黒色粘土（5Y 2/1）：植物遺体多量、酸化鉄・腐植土含む
59．オリーブ黄色砂質土（5Y 6/4）：オリーブ黒色粘土・1㎜以下礫・炭化物含む。流路
60．オリーブ砂質土（5Y 6/3）：オリーブ黒色粘土・1㎜以下礫・炭化物含む。流路
61．黒色粘土（5Y 2/1）：オリーブ褐色粘土・炭化物含む
62．黒褐色粘土（2.5Y 3/1）：黄灰色粘土・植物遺体含む
63．灰色粘土（N 5/0）：植物遺体多く含む

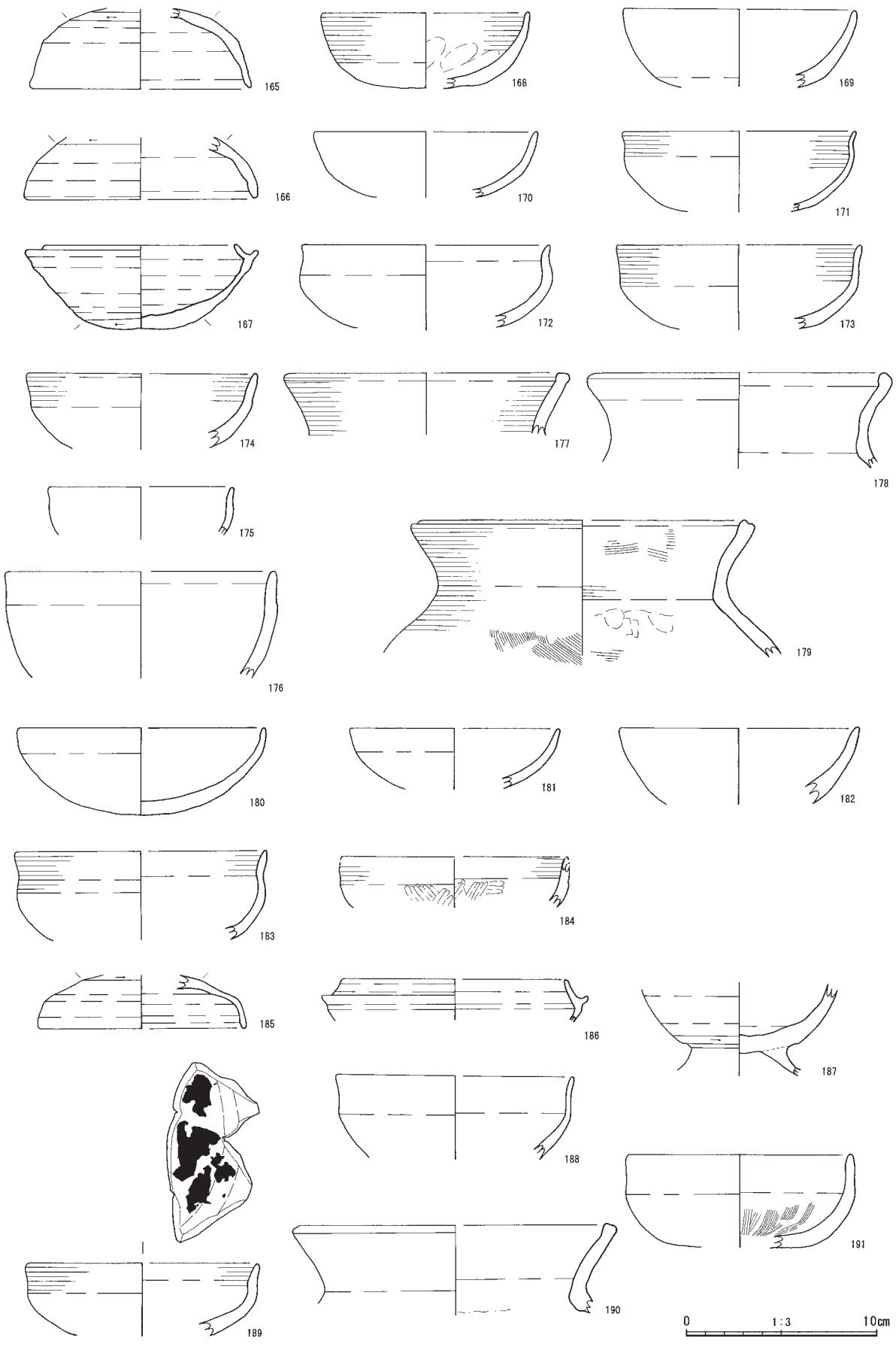
0　1:100　2m

第69図　E-3区土層堆積状況図２

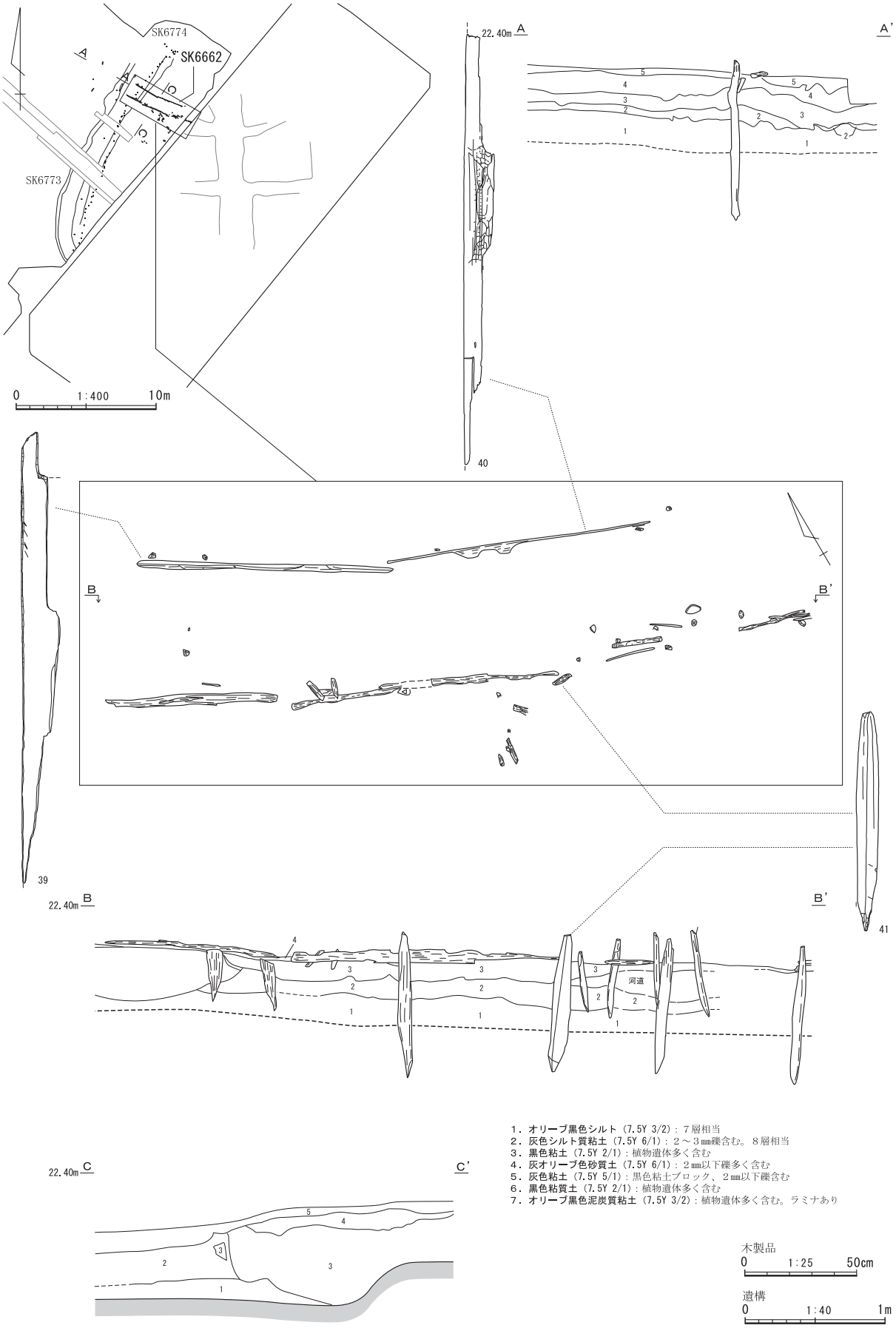
畔 SK419 は E-1 区南半部で検出した。畔 SK419 では木製の杭が数多く打ち込まれ、周囲にはU字型鋤痕のようなくぼみが一帯に広がっている状況であった。その一部には「水口」と思われるところが見つかっている（図版 45-1）。遺構は明確な境界を引いてあるわけではなく杭列のある範囲を指している。杭列には規則性が見られないが SK419 にほぼ沿った位置にある。前後には SD420 や SD421 があり、SK419 はこの二つの溝に挟まれた位置にあたる。調査所見には、大畔がくの字形に屈曲したところに「水口」が存在するとある。ここには自然礫を集めたような集石箇所があり「水口」と呼んでいる。この水口付近から黒色粘板岩製の臼玉（『寺家前遺跡Ⅱ』第 120 図 789・790）が出土している。二個体であるが、元々は一個体だったものが剥離欠損した可能性が高い。木製の杭は丸木であったが、著しく風化し



第 70 図　SK419・SD420・SD421・SK5010 実測図



第 71 図　SK419・SD420・SD421 出土土器実測図



第 72 図　SK6662 実測図

ており図化したものはない。丸木杭の樹種同定を行った４点のうち３点はイヌマキ属の芯持材、１点はスギ材であった。その他に台石が１点（『寺家前遺跡Ⅱ』第 126 図 839）、種子（同書図版 77・78）が数多く出土している。出土した土器は須恵器の坏蓋や土師器坏身、甕破片で坏類の割合が高い（第 71 図）。須恵器の年代は７世紀前半代である。

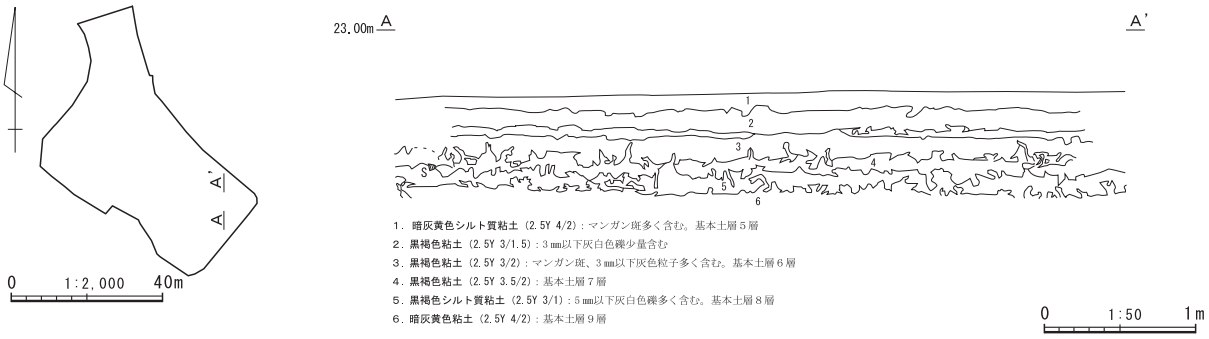
SD420 は SK419 の南側に繋がる浅い溝である。北東方向の SK419 とは異なり、SD420 は南北方向に伸びている。E-5 区②でも、これに続く SD10457 が見つかっているが、南端は南西寄りに蛇行している。覆土は砂礫を多く含んでいる（第 70 図）。覆土内からは土師器の甕破片と坏身（第 71 図）、種子が複数種類（『寺家前遺跡Ⅱ』図版 78・79）出土した。SD420 は E-3 区から E-2 区の集落域で検出した SD9500 や、E-2 区の SD6289（SD6405）とほぼ併行している（第５図）。集落域と水田域との境目に溝を掘り込んで境界としている可能性も考えられる。

SD421 は SK419 の杭列に併行した溝である。E-1 区の南西から北東方向へ延び、E-5 区①で検出した SK5010 と繋がる。E-1 区では溝の両脇に木杭が不規則に打ち込まれている状態だが、E-5 区①では木杭はなく、わずかに畔の高まりがみえる。杭や溝の周りには無数の鋤先痕がある。覆土内より出土した土器は須恵器の坏蓋・坏身・脚付盤、土師器の坏身・甕などがある（第 71 図）。木製品は角枠型田下駄の枠や用途不明木製品が出土した（『寺家前遺跡Ⅱ』第６図 22 ～ 28）。用途不明木製品のなかにはアカガシ亜属製の板状木製品や軸部のような製品があり、これらは樹種からして鍬・鋤などの農耕土木具である可能性が高い。種子の出土量も非常に多い（『寺家前遺跡Ⅱ』図版 76 ～ 78）。

SK6662（第 72 図）　SK6662 は E-2 区と E-5 区②にまたがって検出した畔である（第 72 図）。畔 SK6662 は同じく E-2 区で検出した畔 SK6773・6774 の南東側に直行する方向で見つかっている。調査区境や調査区外のため畔の前後左右の繋がりが不明である。８層内で出土した横木は割材の杭を使っていることから畔 SK6773・6774 の木杭とは様相が異なる。SK6773・6774 の木杭は、むしろ弥生時代後期の畔 SK422 の矢板や杭の状況と似ている。調査時の所見としては SK6773・6774 よりも一時期後の畔または護岸施設と考えている。ただし遺構に伴う土器がほとんどなく年代の決め手を欠く。そのため畔 SK6662 の年代は弥生時代後期～古墳時代のものと時期幅をもたせている。杭や横木は 18 点出土し、このうち３点を図化している（『寺家前遺跡Ⅱ』第８図 39 ～ 41）。

SK6753・6754（第 66 図）　E-2 区８層上面で検出した畔である。E-2 区の北東隅で検出した畔で同時期と思われるが畔の方向は異なる。畔 SK6754 には、一部、小区画水田が繋がっている。また畔の西脇にはスギ材の木杭が数本打ち込まれていた。やはり遺構に伴う遺物が少ないことから年代が不明確である。ただ、この直下で検出した SK422 よりも上層の８層上面で検出していることから少なくとも古墳時代以降の畔と推定している。

SK9653（第 66 図）　E-3 区 129F・G-10 グリッドで検出した杭列を伴う畔である。129F・G-10 グリッドは集落域の微高地から一段下がった低地部で、畔 SK9653 は自然流路 SR9526 の西側でみつかってい



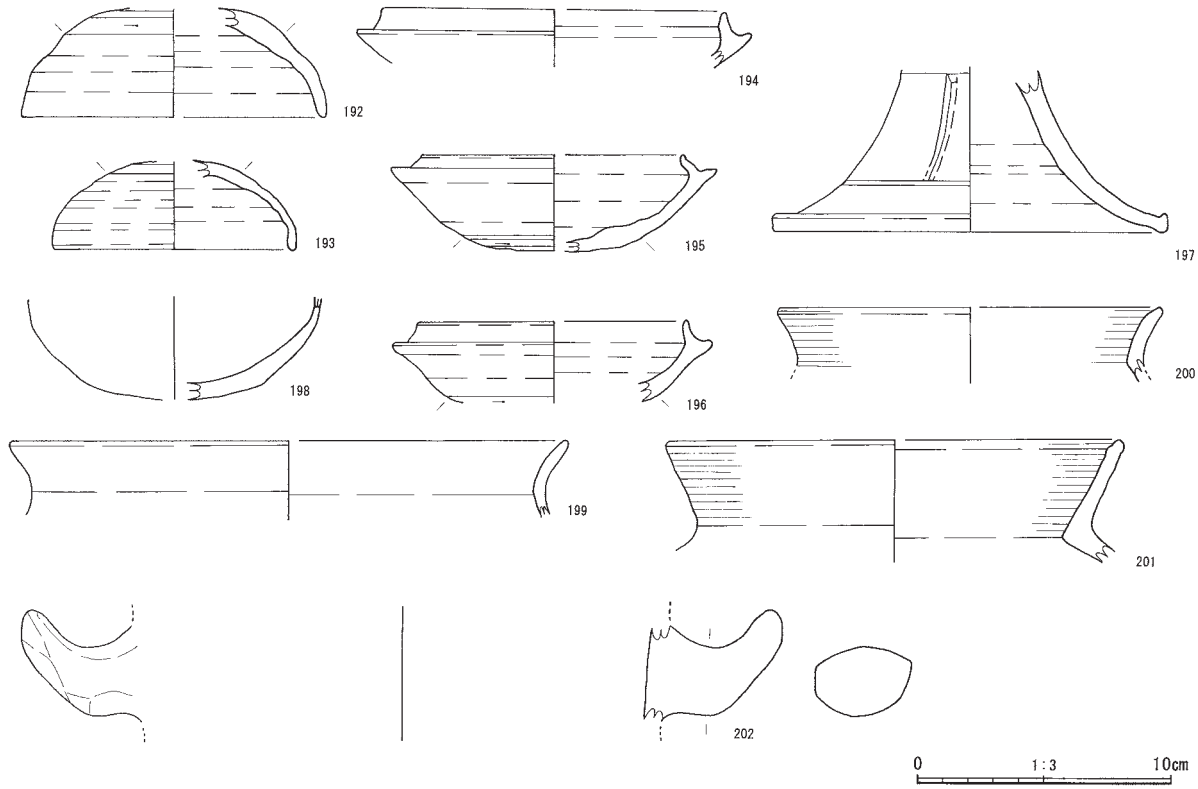
第 73 図　E-4 区土層堆積状況図

る。畔は北側の一部が自然流路 SR9526 に沿っており、129F-10 グリッドと 130F-1 グリッドの境界付近で南西方向に 90 度屈曲し、さらに南西方向へ延びている。南西端は杭列が途絶え消滅している。現地調査では杭の種類は広葉樹材の丸杭で、畔および杭列は護岸用ではないかとの所見がある。微高地と低地の境には自然流路 SR9126 が等高線に沿って走っているが、畔 SK9653 はこれの南側にほぼ平行した位置にある。さらに南東壁近くには８層で小区画の水田が検出されている。これらの小畔の一部とも方向が一致している。８層の小区画水田は面積が約 2.28 ㎡～ 8.58 ㎡と大きさに違いがあり、平均は 4.529 ㎡である（註７）。小畔も東西南北の畔方向が一定ではなく、地形に沿った位置に畔が作られているものと思われる。

SK10463　E-3 区で検出した東西方向の畔で、A-2 区北で検出した畔 SK596 に繋がる大畔である。杭列や矢板を伴う。畔の周辺で古墳時代中期の土器が出土している。遺構の記述は畔 SK10464 とともに『寺家前遺跡Ⅳ（弥生時代後期編）』で詳しく記載する。

E-4 区の現地調査では８層で検出した水田を古墳時代後期とする所見がある。E-4 区では７層で古墳時代後期の土器が出土している。その直下の８層で小区画水田の畔を検出した（第 66 図）。８層には弥生時代後期の土器が混じり、９層は風化礫状の小礫を含む泥炭質土、10 層では弥生時代後期の建築材等の木製品が多量に出土している。以上のことから、８層で検出した小区画水田は古墳時代以降と考えられ、資料整理での検討の結果、古墳時代後期の水田とした。同じ方向性をもつ小区画は E-1 区の北側でも確認している（第 66 図）。小区画はほぼ南北方向の小畔と東西方向の小畔で、南北に細長い長方形の区画が見える。

古墳時代の水田について調査結果から検討してきたが、前述したとおり、弥生時代後期の水田との切り分けがはっきりしなかったこともあり、水田の区画が明確には見えてこなかった。ただ検討の結果、古墳時代の水田は弥生時代後期に開田されたときの大畔を踏襲し、改修を加えながら水田耕作を行っている様子がうかがえる。SK419、SD420、SD421 についても本稿では大畔としたが、いわゆる杭を打ち込



第 74 図　水田域出土土器実測図

んだ木杭列の上に盛土をした一般的な畔の様相ではない。これらの遺構に見られるのは、方向性をもった浅い溝と複数期に渡って打ち込まれた大量の木杭、自然礫が集められた集石箇所や水口、鋤先痕である。角枠型田下駄の枠や農耕土木具の可能性がある木製品が出土していることからも水田域と考えられるが、集落と水田を隔てる位置に作られた区画あるいは境界線、水田域へ導水するための水路等の用途で使われていた可能性もある。

註

１　この他に、SH320 あるいは SH322 のように１間×１間の掘立柱建物と考えられるものが検出されている。他の多くの掘立柱建物とは規模も外観もかなり異なるもので、あるいは竪穴住居跡が削られて四主柱穴だけが検出されたものである可能性もある。ちなみに柱穴の間隔は５ｍ前後で、竪穴住居跡の主柱穴の間隔と大きな差はない。検討の資料も十分ではないので、ここではこうした形態の建物があるとだけしておきたい。

２　調査区の北端で、SB217 と SH212 が重複している。現地調査時の観察あるいは図面の点検などから、SB217 の竈の袖付近の下層から SH212 の柱穴が検出されていることが確認されており、また、SH212 の柱穴には礎板が残されていた。これが SB217 よりも新しいものであるとすれば、当然、竈の袖は壊されていたと思われるので、ここでは SB217 が SH217 よりも新しいものである可能性が大きい。

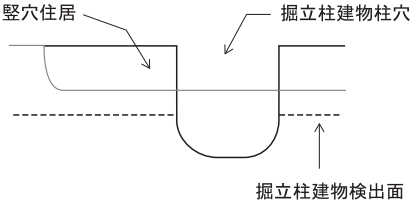
現地調査の段階では、SH212 は古墳時代の掘立柱建物跡と認識し、報告書『寺家前遺跡Ⅱ』でも、柱穴から出土した礎板を古墳時代のものと報告しているが、SH212 を細かく検討すると、側柱跡には全て礎板（いずれもスギ材）が残っているが、棟の位置に当たる柱跡が確認できていない。礎板に使われていたものは扉材の転用であることが示され、各柱の礎板には良く似た材が用いられていることが理解できる。したがって、この建物は当初推定されたように２間×２間の建物ではなく、１間×２間の建物であった可能性が大きい。梁行が１間の建物は基本的には弥生時代の掘立柱建物であり、寺家前遺跡でもそうした建物は全て弥生時代の高床倉庫と考えられているもので、古墳時代のものには含まれていない。したがって、ここでは SH212 を弥生時代の遺構としておく。

３　SB303 と SB308 は完全に重なっているが、現地調査段階からこれは竪穴住居跡の拡張に伴うものだと推定されている。したがって、これは重複した住居だとはしなかった。

４　Ⅰ群の建物で重複しているものは SH311 と SB307 が唯一の例である。両者には時間差があるが、竪穴住居跡の方向も SH311 と良く似ていること。SH311 の棟方向が他の掘立柱建物群とは異なっていることから、両者を同一群内の重複と考え、ともにⅠ群に含めた。

５　掘立柱建物の柱穴間のエレベーションを表示しているが、現地調査時の図面に柱穴と柱穴の切り口の位置に大きく整合性を欠くものがいくつか認められた。その原因はおそらく現地調査で遺構を検出した時と、柱穴のエレベーションを測量した時に時間差があったことによって起きた現象であろう。遺構を保ったまま調査を進める必要があり、地層に沿って削り込んでいくうちにできた不整合であると推定し、当初の推定できるレベルに復原している。SH311 の他、SH329・SH330・SH331・SH332・SH333・SH337・SH338 がこれに当たる。

６　SH324 は４本の柱穴が SB304 と重なっている。調査日誌によれば、SB304 の床面が明確に捉えきれなかったので、床面（と考えられる層）を多少削り込んだ段階で SH324 の柱掘形を検出したとしている。また、SB304 の断面図では床面下で SH324 の柱掘形が確認されているがこの柱穴は SB304 の掘形を切り込んでおり、図面上に矛盾がある。また、調査時の写真では SB304 の発掘時に SH324 の柱掘形が現れているように見える。したがって、残された資料では両者の関係はどちらにとっても矛盾があり、決定できなかった。したがって本文では「不明」としている。しかし、建物群の並びを考慮すると、SH324 が新しかった可能性が多いと考えている。



第 75 図　住居・建物新旧関係図

７　E-2 区の小区画水田は 3.41 ㎡～ 11.27 ㎡、平均 6.063 ㎡である。

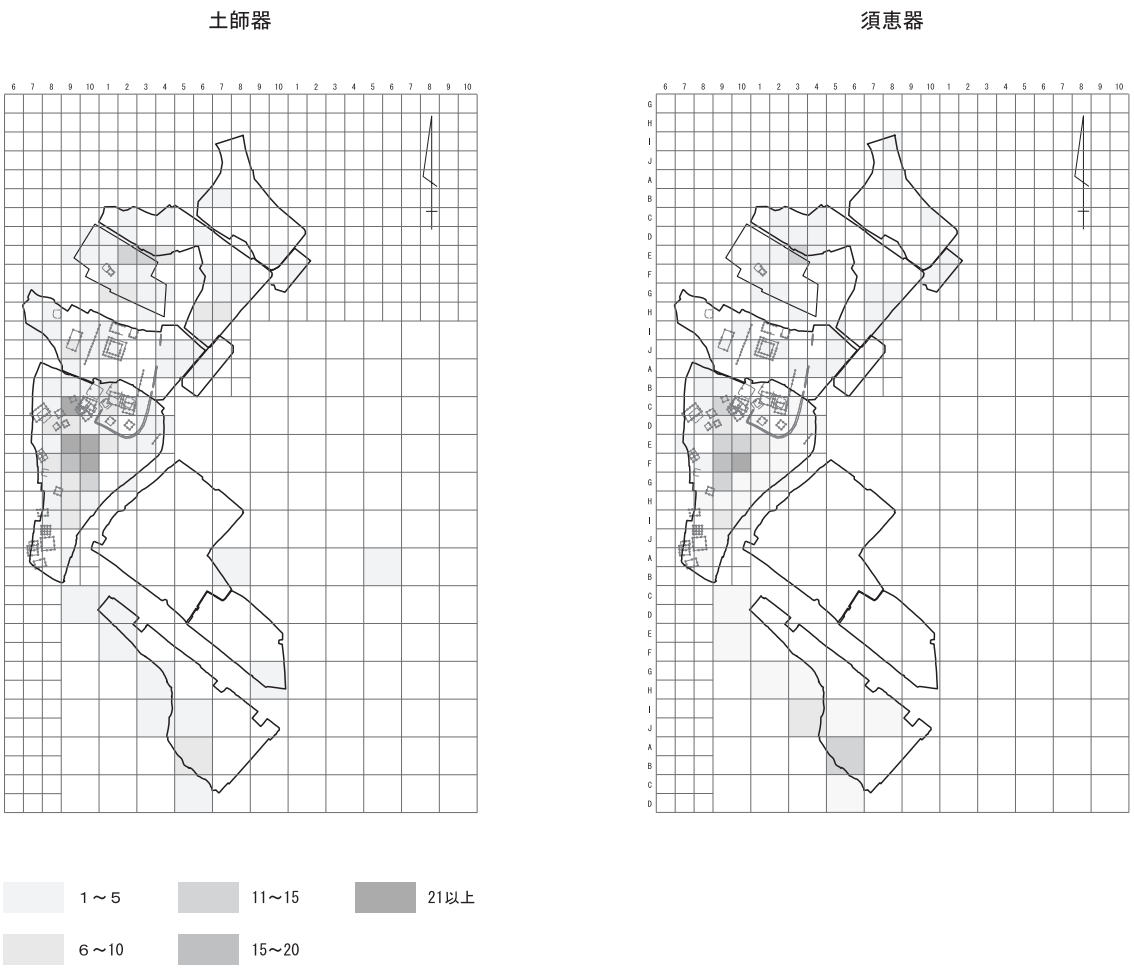
第３章　出土遺物

第１節　遺物の概要と出土状況

発掘調査によって、集落域から須恵器、土師器、砥石などの石器、金属製品などが出土しており、水田域からは畔の補強に用いられた木製品が出土している。

第 76 図に各調査区からの土器の出土量の多寡を示した。スクリーントーンの濃い部分が出土量の多い所である。当然遺物は各調査区から万遍なく出土しているわけではなく、部分的に集中している箇所がある。最も集中しているのは E-3 区を斜めに横切った地域である。この区域は SR9526 とそれから枝分かれした流路が検出されている区域である。したがって「SR ○出土」と表記されていなくても、本来は SR9526 あるいはその他の流路に含まれた可能性が大きい。おそらく流路の上層に当たる区域がそれとは認識されない段階で取り上げられた可能性がかなり高いことを示していよう。この他にも、E-2 区の北端近くにも出土量が比較的まとまった区域が東西に延びている。これもⅡ -1 群の北端を区画する SD6289 に重なる区域であり、やはり、それに伴う可能性が大きい。

そのほかに遺物が比較的まとまって出土しているのは、集落の乗る平坦な区域から低地にかけての区域（言い換えれば集落の端から水田域にかかる部分）であることを認めることができよう。土師器と須



第 76 図　グリッド別土器出土分布図

恵器の出土区域はほぼ同様で目立った差はない。

なお、集落の中心を流れた流路 SR9526 から須恵器と土師器が比較的まとまって出土しているので、この部分は遺構出土の土器として別に取り上げることにした。

住居跡などの遺構から出土した遺物は比較的少なく、多くは包含層からの出土であり、まとまった出土状態を示すものは少なかった。したがって一括資料として扱うことのできるものはない。

第２節　土師器

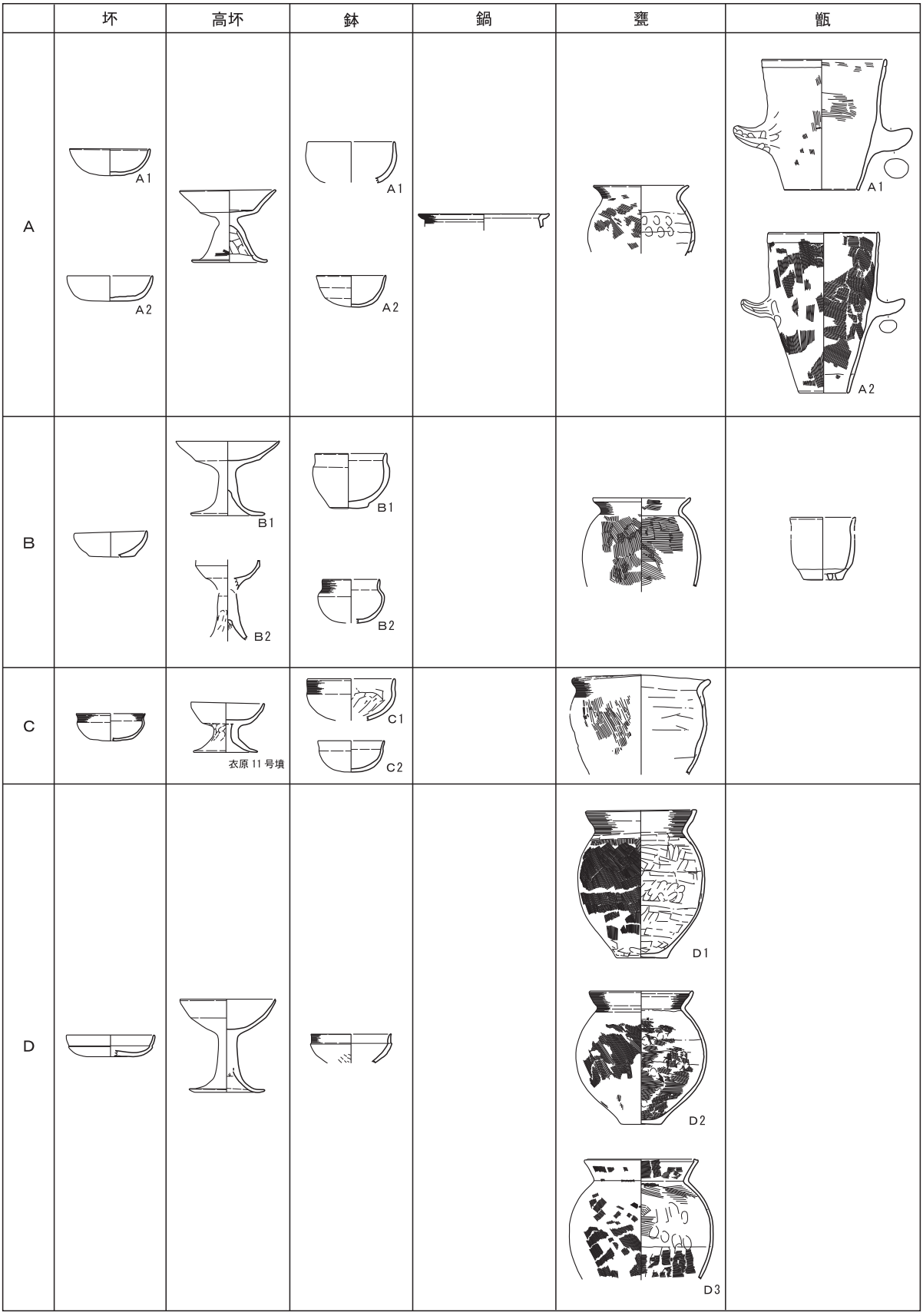
土師器は全体でポリコンテナ 80 箱分ほどが出土している。先にも述べたように、遺構からまとまって出土した遺物は少ないので、器種構成などに触れうるものは少なかった。

駿河西部に当たる志太平野での古墳時代土師器は、早い段階に焼津市宮之腰遺跡・道場田遺跡などで確認されているが、多くは５世紀代から６世紀代前半の資料で、寺家前遺跡に近接する６世紀後半から７世紀代の資料は焼津市の藤守遺跡で確認されているほか、古墳出土の土師器を除いてはまとまった資料は少なく、実態はよく知られていない。したがって、ここでは隣接する遠江の坂尻遺跡あるいは静岡平野の神明原・元宮川遺跡等の資料と対比しながら、検討を進めることにする。

表 2 表　出土土師器器種組成表

		全体		合計	
		個体数	破片数	個体数	破片数
坏	A1	32	131	219	426
	A2	45	99		
	B	59	123		
	C	51	35		
	D	17	38		
	赤彩	8			
	黒色	7			
	ミニチュア	12			
高坏	A	13	7	65	79
	B1	17			
	B2	17	3		
	C	9			
	D	5	65		
	不明	4	4		
鉢	A1	5	1	37	5
	A2	4	1		
	B1	7	3		
	B2	4			
	C1	4			
	C2	8			
	D	1			
	E	3			
	不明	1			
鍋		5		5	
甕	A	8	10	117	158
	B	15	11		
	C1	15			
	C2	9			
	D1	32	54		
	D2	19	28		
	D3	13	55		
	底部	5			
	頸部	1			
壷		11	20	11	20
甑	A1	5	23	24	49
	A2	11	26		
	B1	1			
	B2	5			
	不明	2			
				478	737

※坏は口径の 2/3 以上、甕は底径 2/3 もしくは口径の 1/8 以上の残存で１個体とする



第 77 図　土師器分類図

１　土師器の器種分類

出土した土師器の説明を行う前に、器種毎に分類を行い、これを簡単に説明しておこう。須恵器に比べて、土師器は小地域での器種構成、器形に差のあることが認められることから、寺家前遺跡から出土した土師器の器種構成を整理しておくことが必要であろう。第 77 図に分類図を示した。

（１）坏

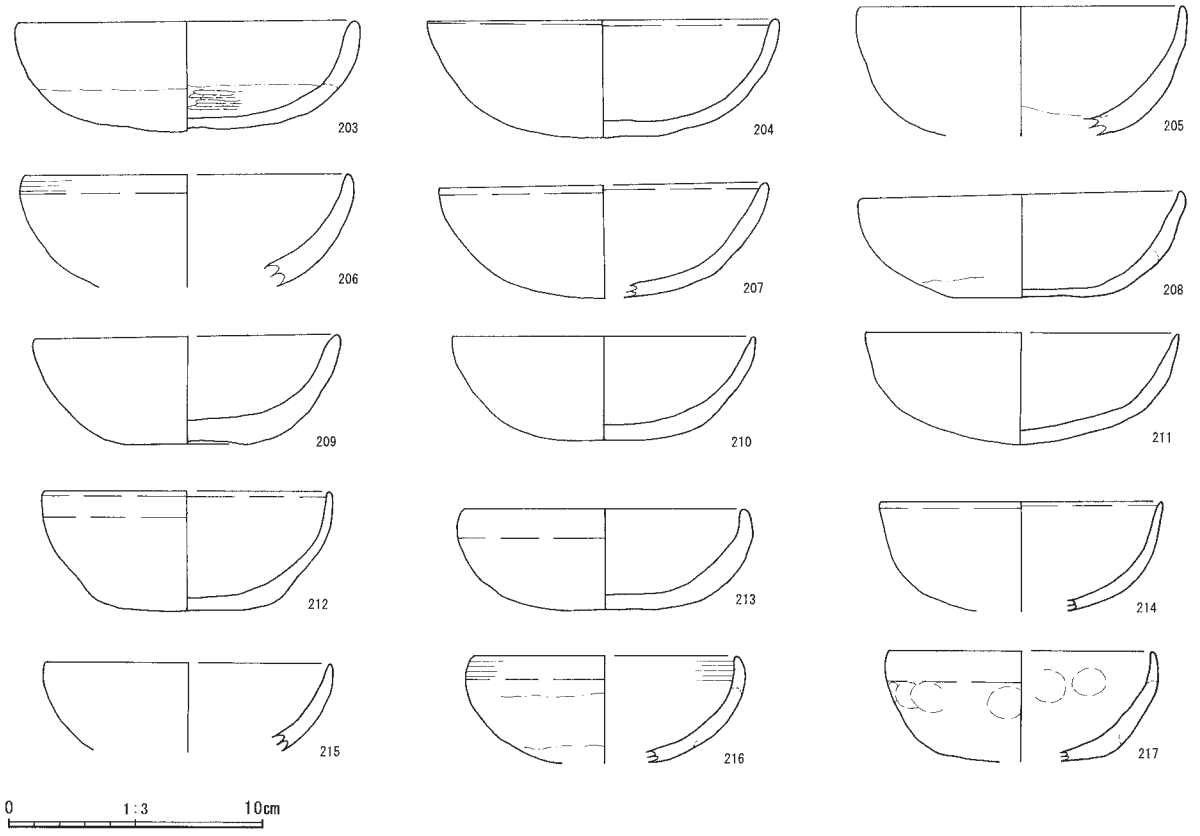
伝統的な土師器坏（Ａ～Ｃ類）と須恵器坏を模倣した「模倣坏」（Ｄ類）あるいは器壁を黒色に研磨した「黒色土器」（Ｆ類）がある。出土量は前者が圧倒的に多く、模倣坏・黒色土器の量は極少ない。

器形から大きく４つに分けているが、量的にはＡ類とＢ類が多く、両者を合わせると、全体のほぼ85％を占めている。この地域の土師器の中心的な位置を占める土器であろう。

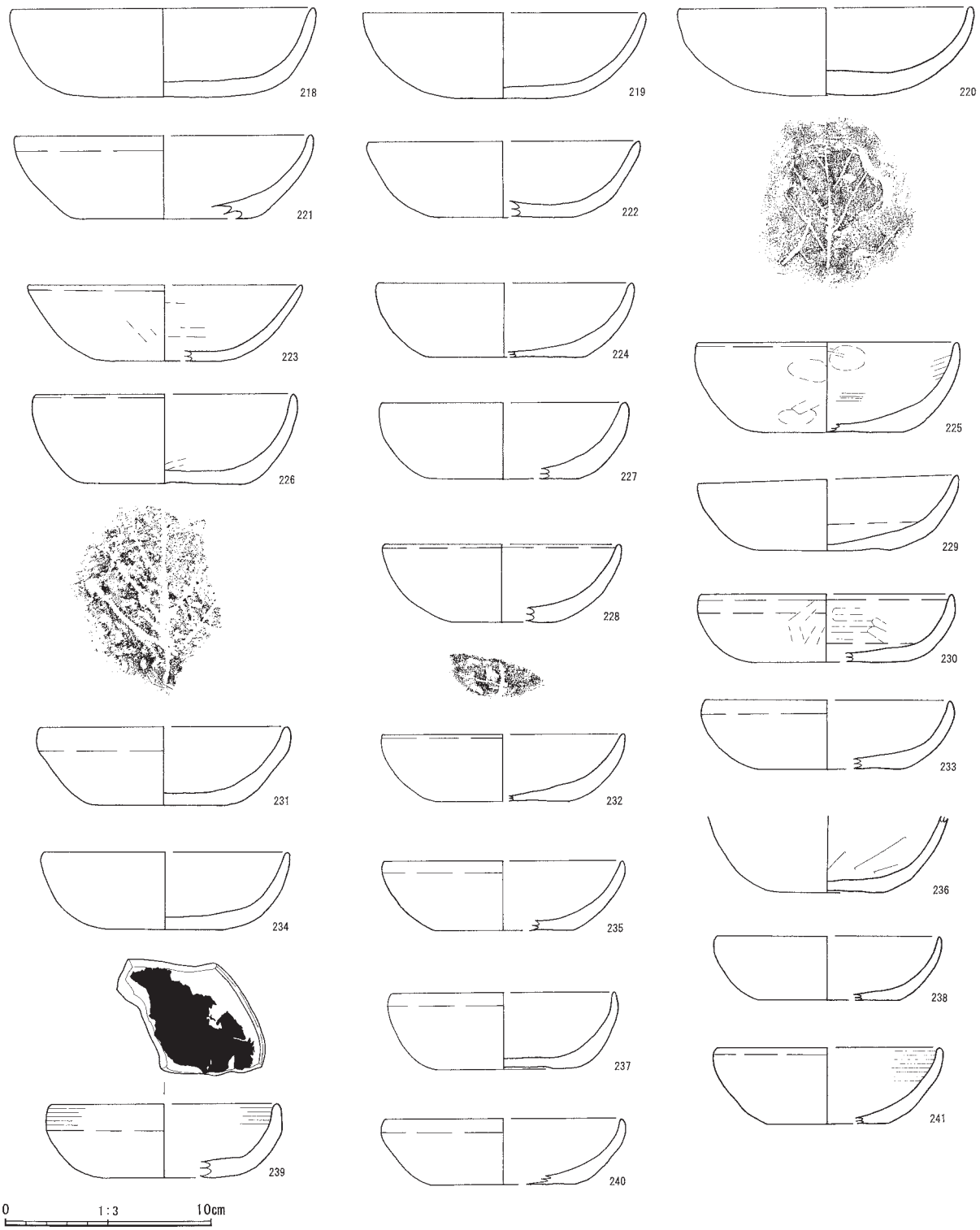
A1 類（第 78 図）　体部が丸く、底部も丸みをもった坏で、器壁は比較的薄いものが多い。口径は 12 ～ 14 ㎝と多少の幅がある。土師器坏の口径は時間の経過とともに、須恵器と同様に次第に縮小していくことが知られており、坏Ａも前代に比較するとかなり小さくなっており、出土量でも口径の比較的小さなものが多い。

A2 類（第 79 図）　体部は丸く仕上げているが、底部が平坦で径も比較的大きくなり、口径と底径の差が少なくなることから、器形全体がいわば箱形を示すようになる。底部の木葉痕をナデ・ヘラ整形などで消したもの（A2a 類）と、木葉痕をそのまま残したままのもの（A2b 類）とがあるが、量的には前者が多い。底部の整形を省略してゆく過程を示すもので、木葉痕を消している A2a 類がより先行するものであろう。口径は 12 ～ 14 ㎝ほどと多少の幅があるが、口径の小さなものが目に付く。先に述べたように坏の中では出土量は多い。

Ｂ類（第 80・81 図）　体部は丸く仕上げているが、底部は平坦で、中には、先端がわずかに体部より張り出しているものもある。底部外面には全て木葉痕がある。やはり、口径に大小があるらしい。出土



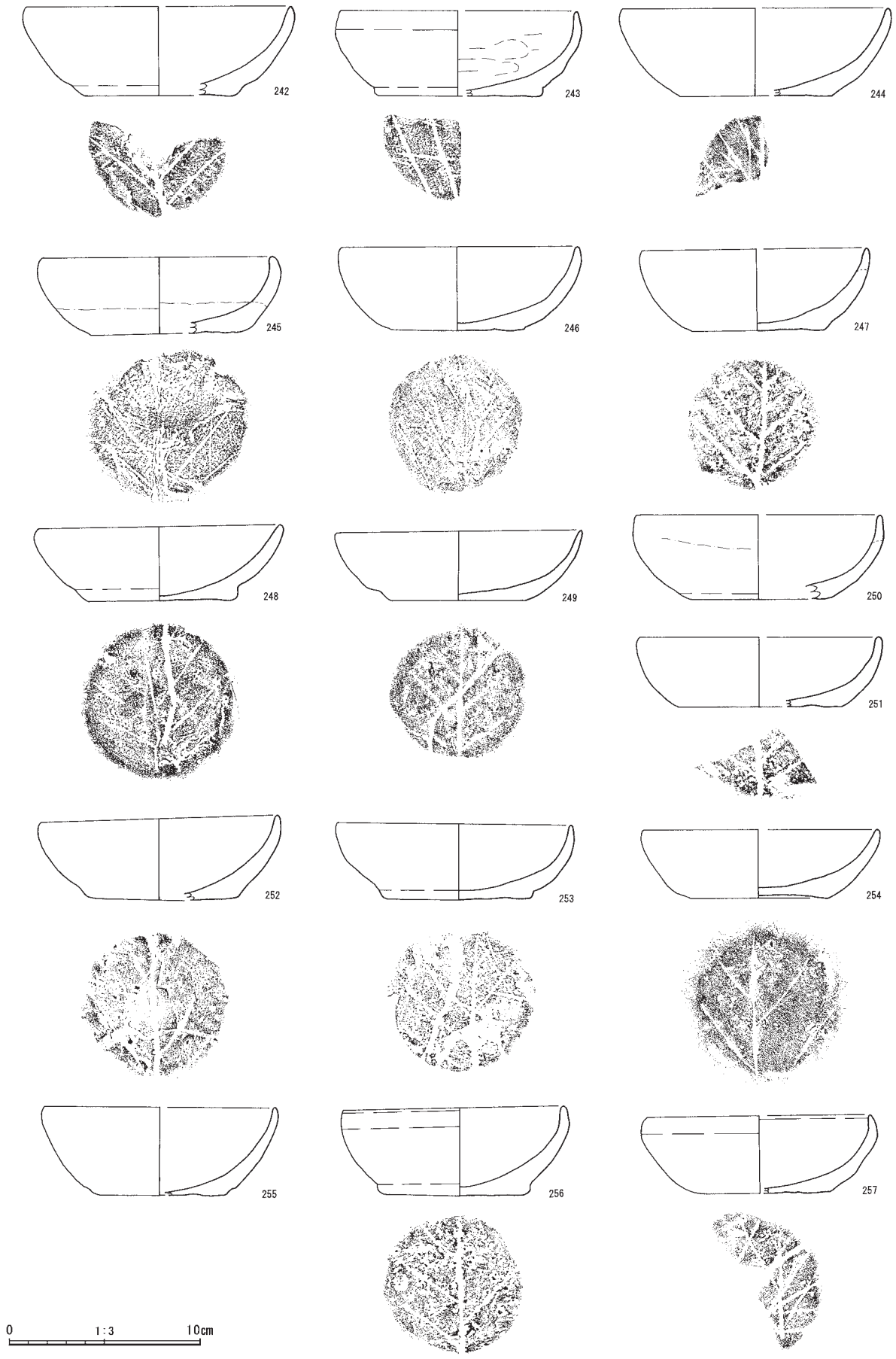
第 78 図　出土土師器実測図１（坏 A1 類）



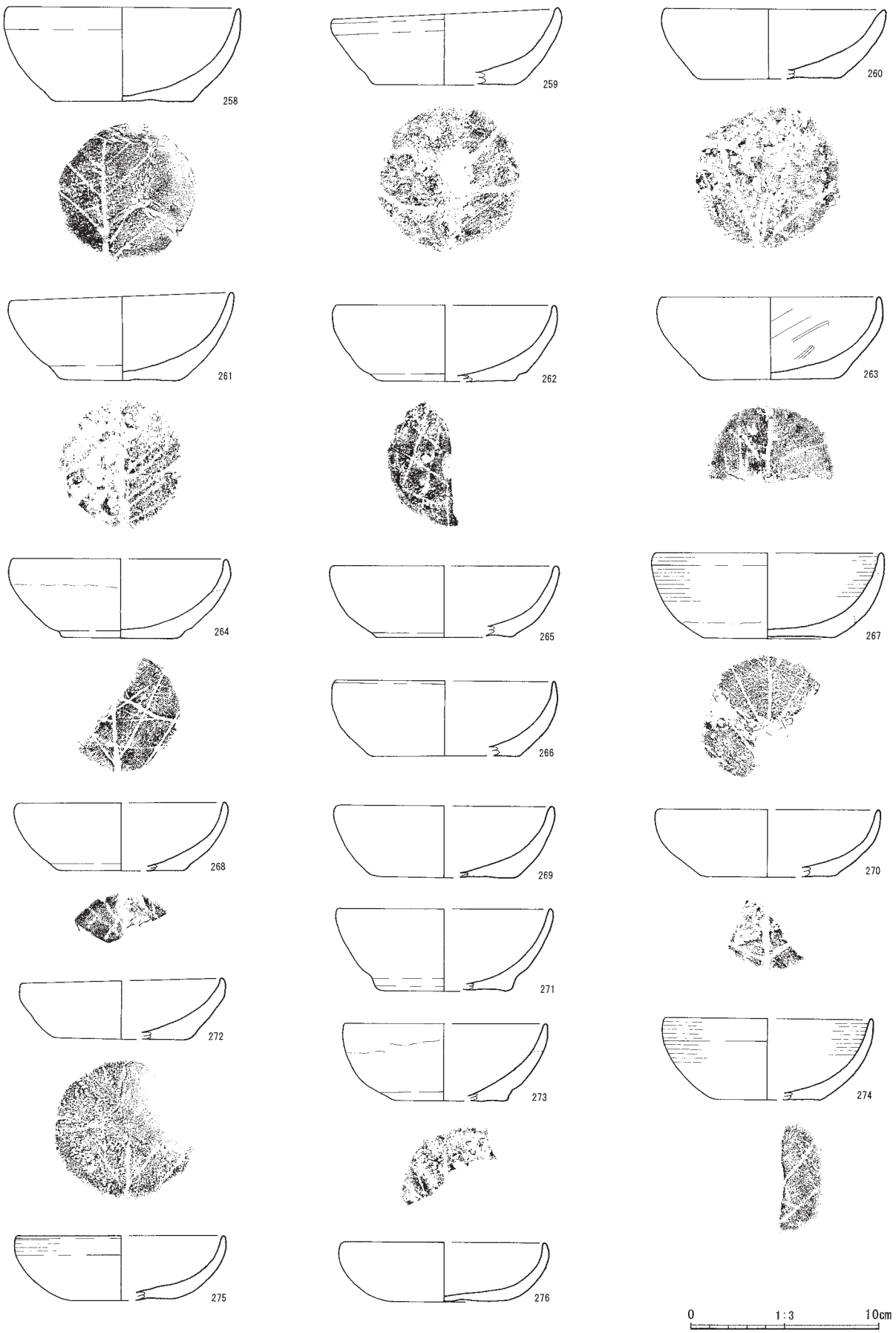
第 79 図　出土土師器実測図２（坏 A2 類）

量は多く、中心的な位置を占めるが、志太平野以外の地域ではあまり目に付かない坏である。

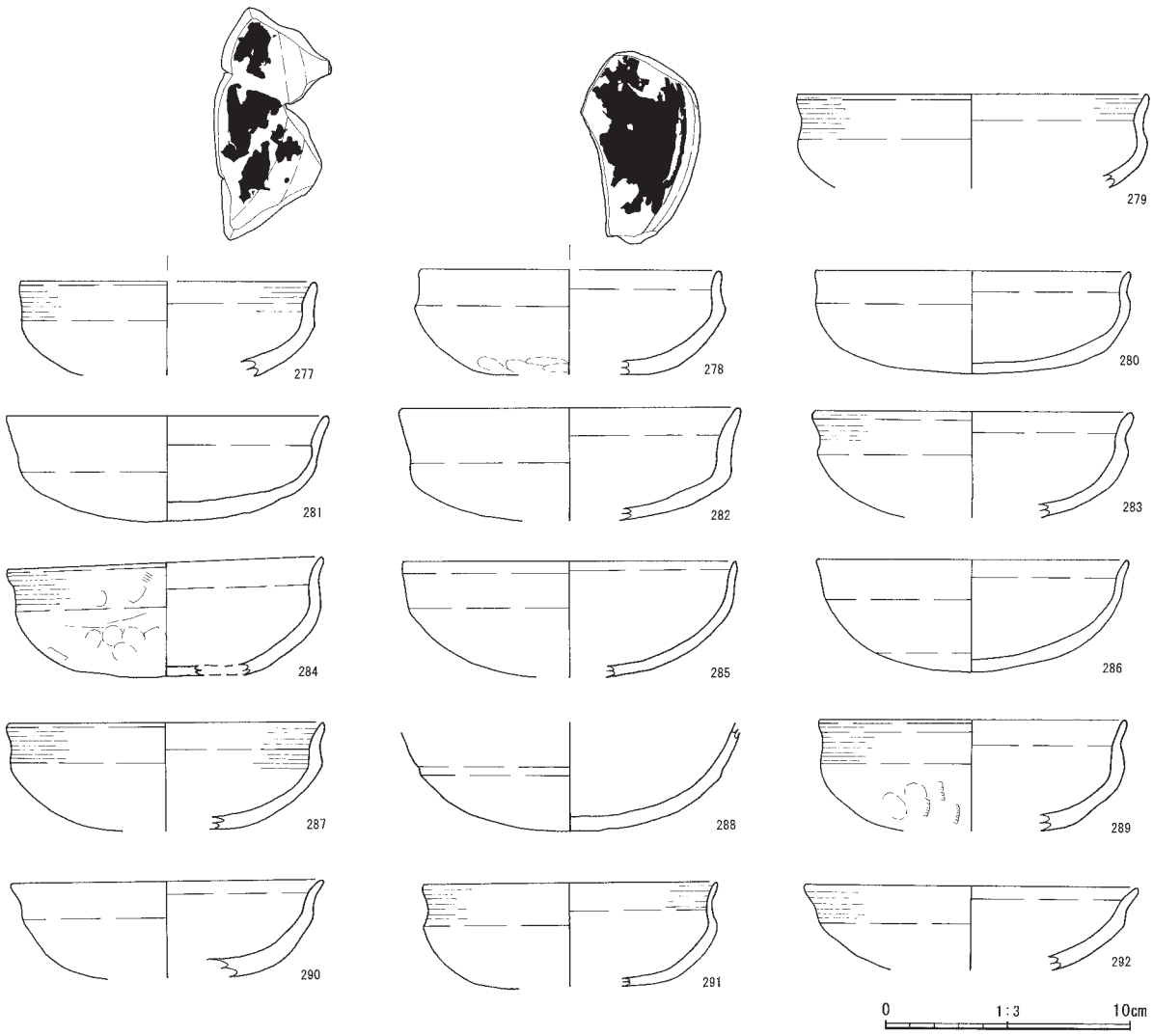
C類（第 82 図）　口縁から体部上部にかけて、ヨコナデを施し、やや「くびれ」ができている。底部は比較的丸く仕上げられている。神明原・元宮川遺跡など静岡平野の各遺跡でA類とともに目に付くタイプである。やはり、口径に大小の差がある。坏に比較して、身の深いものを「鉢C類」としているが、その差ははっきりしない。底部にヘラケズリ・ナデなどを加えているもの（Ca 類）と木葉痕が残るもの（Cb



第 80 図　出土土師器実測図３（坏Ｂ類）



第 81 図　出土土師器実測図４（坏Ｂ類）



第 82 図　出土土師器実測図５（坏 C1 類）

類）とがある。Ca 類がより先行する形態であろう。

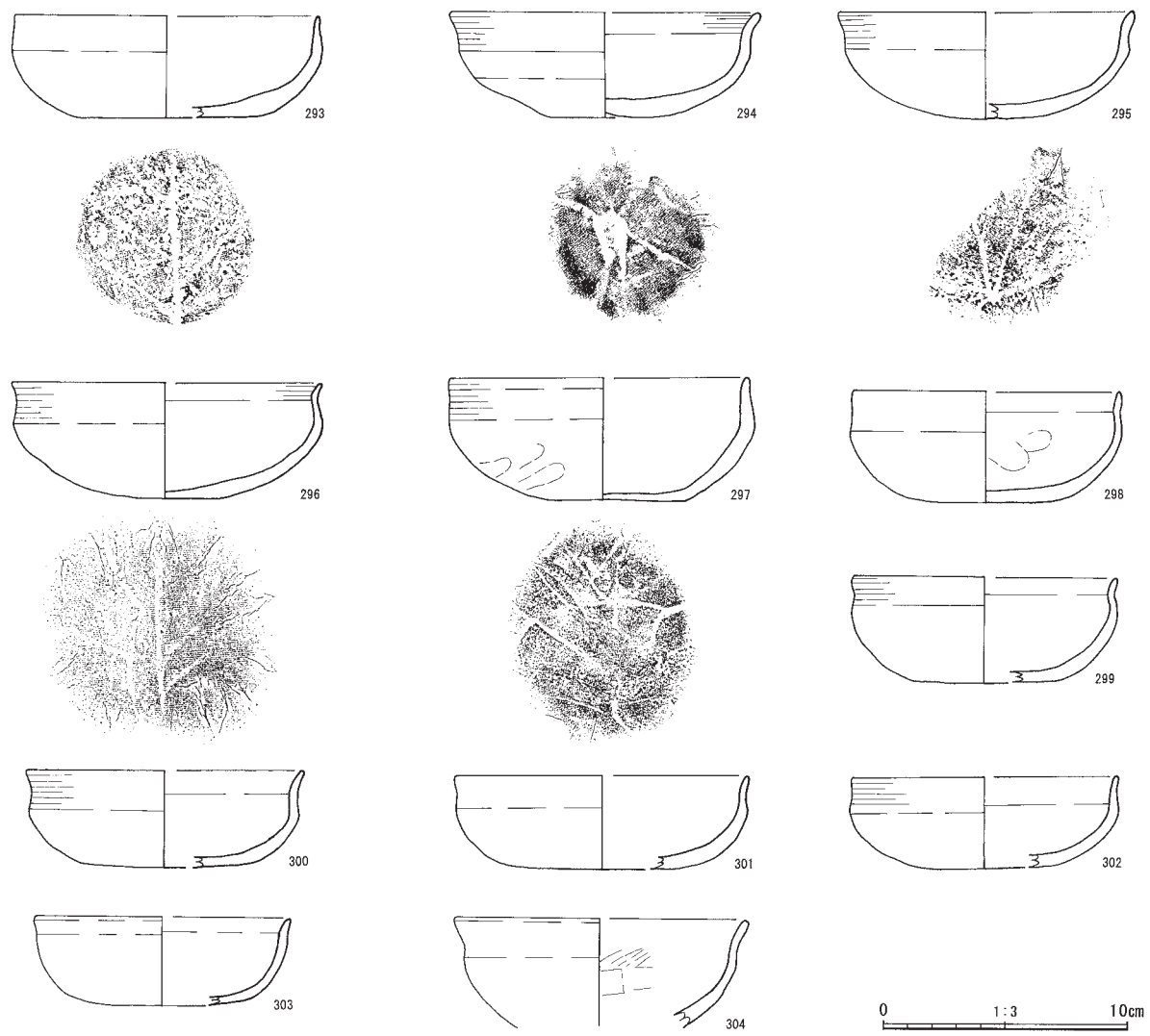
Ｄ類　須恵器坏を模倣した坏をＤ類とした。坏身を模倣したもの（D1 類）と坏蓋を模倣したもの（D2 類）とがあるが、坏身を模倣したものは非常に少なく、多くは坏蓋を模倣したものである。模倣坏の出土量は多くはない（註１）。

Ｅ類　器面をヘラで横方向に丁寧に研磨して、黒色に仕上げた「黒色土器」である。量は非常に少ない。器形は他の「赤焼の土師器」と同様で、今回の調査では坏Ｂ類・Ｃ類およびＤ類とした須恵器模倣坏等が認められている（註２）。

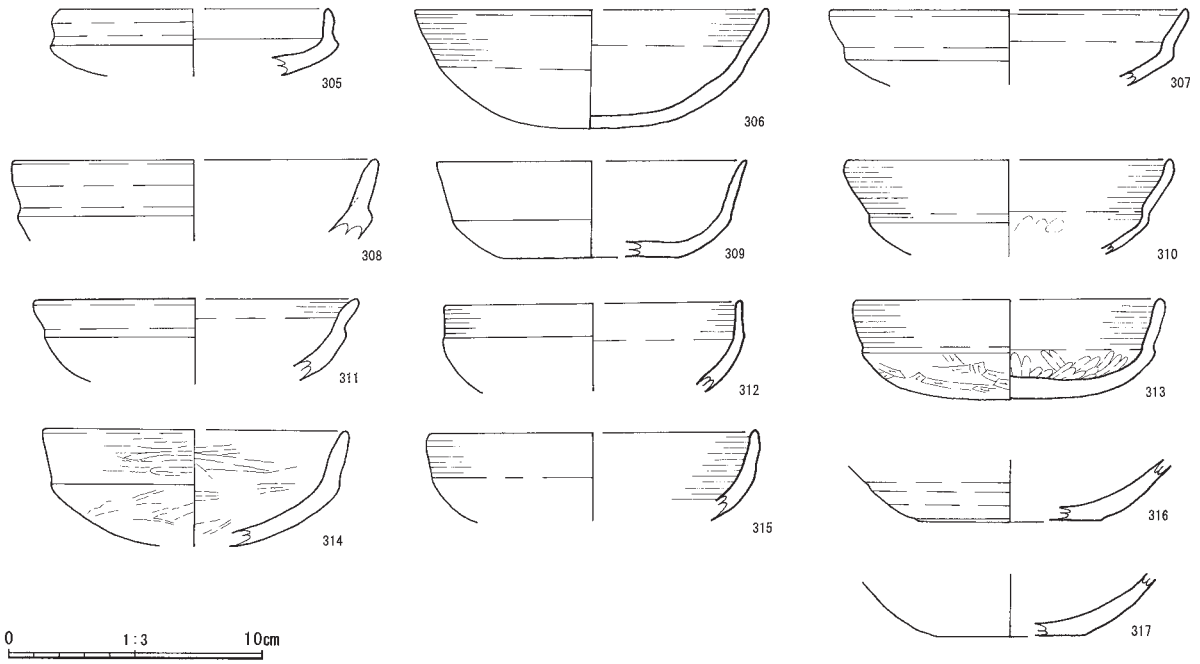
他に体部から口縁部にかけて丸く仕上げ、小さな底部が上向きに凹んだ形態の坏が極少量出土している。いずれも小破片であるので、図示はしなかったが、口径の大・小のものが各１点ある。この手の土師器坏は静岡市川合遺跡などで多くが確認されているもので、５世紀から６世紀前半に盛行する坏であり、口径の比較的大きなものが多い。寺家前遺跡出土のものは口径も小さくなっており、一部がこの段階にまで残るのかもしれない。

（２）高坏

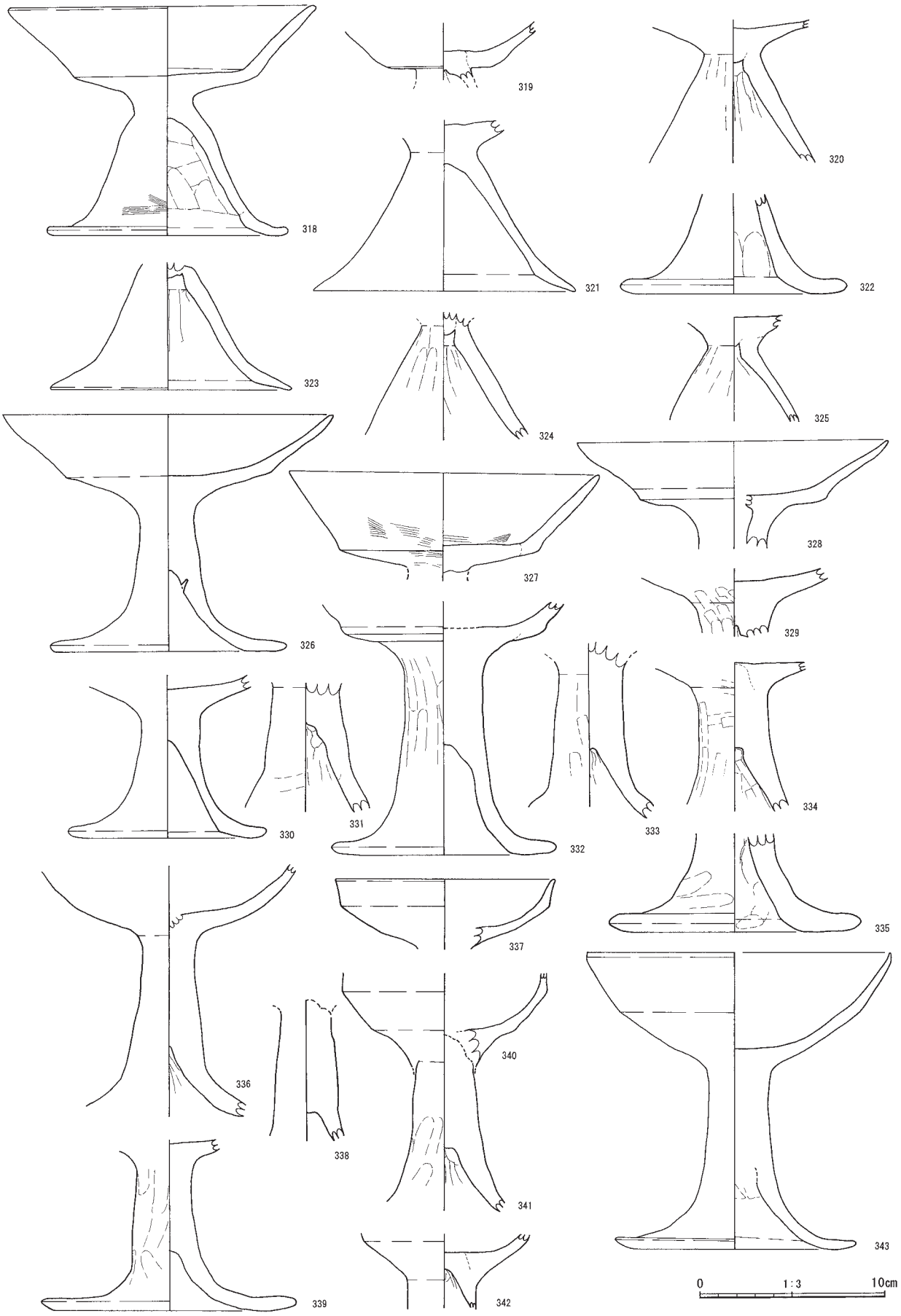
高坏には、脚部が空洞になったもの（Ａ類）と、脚部が柱状に近く、内部に粘土の詰まった中実のもの（Ｂ類）とがある。後者は脚下部分に空洞が残り、坏部の比較的大きなもの（B1 類）と、坏部が小さくな



第 83 図　出土土師器実測図６（坏 C2 類）



第 84 図　出土土師器実測図７（坏Ｄ類）



第 85 図　出土土師器実測図８（高坏）

るもの（B2 類）に分けられる。また、短い脚をもち、坏部は模倣坏をもったもの（Ｃ類）とＢ類と良く似た柱状の脚をもっているが、坏部が丸く、比較的大きな碗状になるもの（Ｄ類）とがある。これはおそらく須恵器無蓋高坏を模倣したものであろう。全体に出土量は多くはない。

Ａ類（第 85 図 318 ～ 325）　坏部が底で明瞭な角度を持ったもので、脚は全体に丸みをもち、裾は大きく開いている。脚は中空である。前代からの形態の延長にあるものであるが、坏の径、高坏全体の高さは小さくなっている。

B1 類（第 85 図 326 ～ 335）　脚は比較的太いが、脚の上半は中実で、下半部が中空になっている。坏はＡ類と良く似ている。坏と脚の接合はＡ類と同じように単純に両者を接合している場合が多い。

B2 類（第 85 図 336 ～ 342）　脚が棒に近い形態で、ほぼ中実になっている。坏部は比較的浅く径は小さい。脚と坏部との接合は特徴的で、脚の先端が凸になって、坏部を突き抜けているものが多い。量的にはＢ類が多いが、B1 類と B2 類の出土量はほぼ等しい。高坏Ａ・B1・B2 類の形態差はそのまま時間差を示すものかもしれない。

Ｃ類　脚は短く、坏部は模倣坏になっている。本来は古式の須恵器高坏を模倣したものであろう。小破片が多く、図化できるものは出土していない。

Ｄ類（第 85 図 343）　脚はＢ類との間に差はないが、坏部は丸く碗状になっている。棒状の脚と丸い碗状の坏部は須恵器無蓋坏に良く似たタイプであり、おそらく須恵器を模倣した土師器であろう。出土量は非常に少ない。

（３）鉢

出土量は多くはないが、全体に明褐色を呈し、胎土が精製されたものが多い。

Ａ類（第 86 図 344 ～ 350）　体部がやや内湾しながら、ほぼ直線的に立ち上がっており、口縁部近くにはヨコナデを施す。底部はやや丸みをもっている。口径によって大(A1 類)と小(A2 類)の２者がある。

Ｂ類（第 86 図 351 ～ 358）　体部に比較して口・頸部がややすぼんでいる。口・頸部にはヨコナデを施す。底部は平坦なものとやや丸みをもったものの両者がある。やはり口径によって大（B1 類)、小（B2 類）の２者がある。

Ｃ類（第 87 図 359 ～ 368）　坏Ｃ類と形態は良く似ているが、器高は遙かに大きい。器高と半径の比が１：１前後のものを鉢とし、１：1.5 前後のものを坏とした。

口・頸部にはヨコナデを施す。鉢Ｂ類ほど口径が縮まらず、器高も高くはない。やはり口径によって大（C1 類）と小（C2 類）の２者がある。

Ｄ類（第 87 図 369・370）　肩に小さな段を付けて、上半部をヨコナデしている。おそらく須恵器広口短頸壷を模倣したものであろう。壷を模倣した土師器を鉢とするのは奇異な感がするが、土師器の器形からはやはり鉢と考えておきたい。点数は非常に少ない。

Ｅ類（第 87 図 371 ～ 373）　器面を丁寧に磨き黒色に仕上げた黒色土器である。器形はＣ類の鉢であろうが、やはり量は少ない。

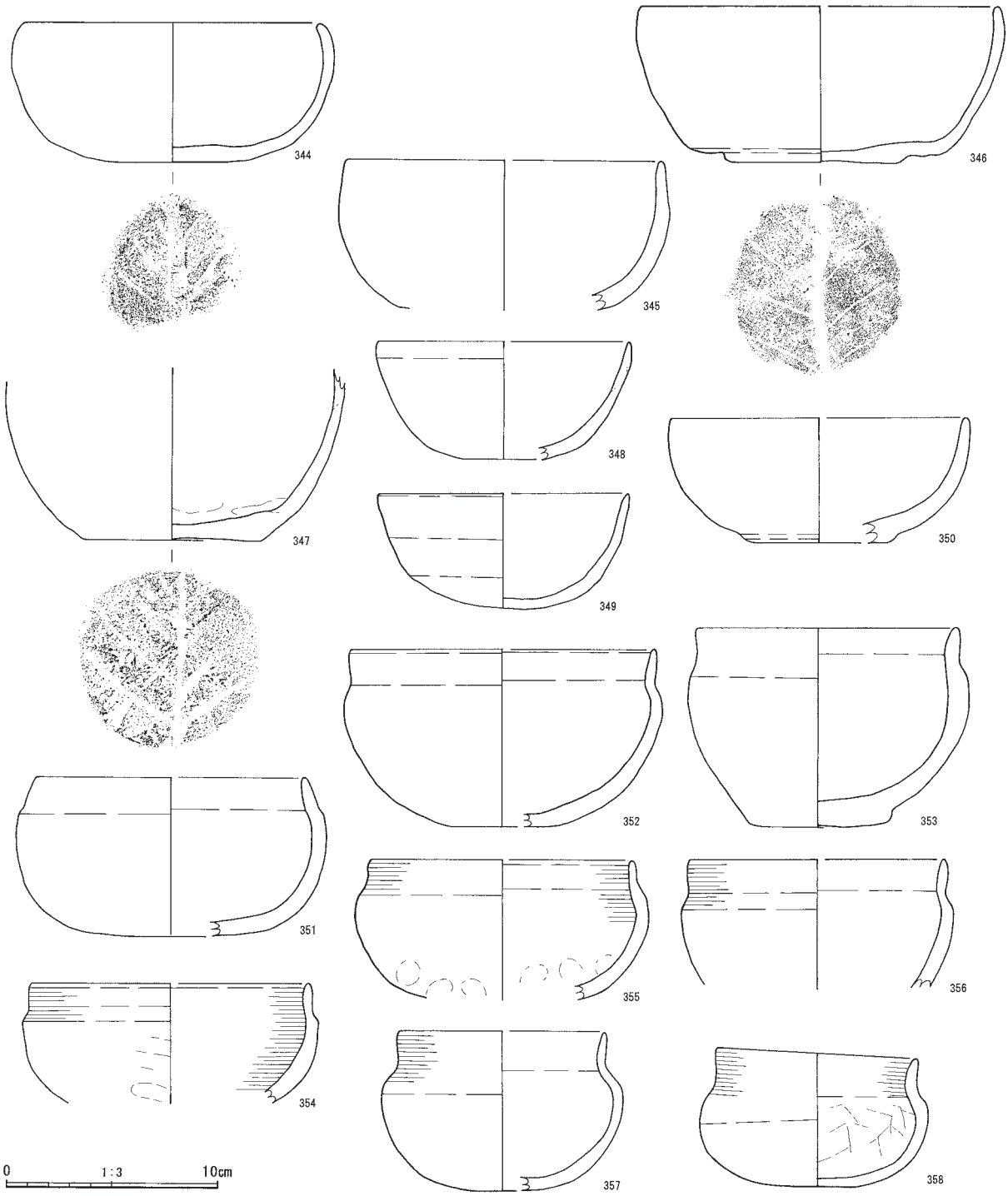
この他に、小さな底部から口縁部にかけて、体部がほぼ直線的に広がった鉢がある。平坦な底部に木葉痕がのこる。口縁に弱いヨコナデをもつものが含まれている（第 87 図 370)。

（４）壷（第 88 図 374 ～ 376）

出土量は多くはない。頸部がほぼ直立し、胴部が張った比較的大型の壷、器壁は比較的薄い。口縁部にヨコナデ、体部はハケ目調整の上にヨコナデをしている。内面に頸部と胴部の接合痕が残る。口径・器高によって大・小の２者がある。

（５）鍋（第 88 図 377 ～ 379）

量は多くはないが鍋が出土している。口縁部の破片のみで、器形全体を知りうる資料はないが、口縁



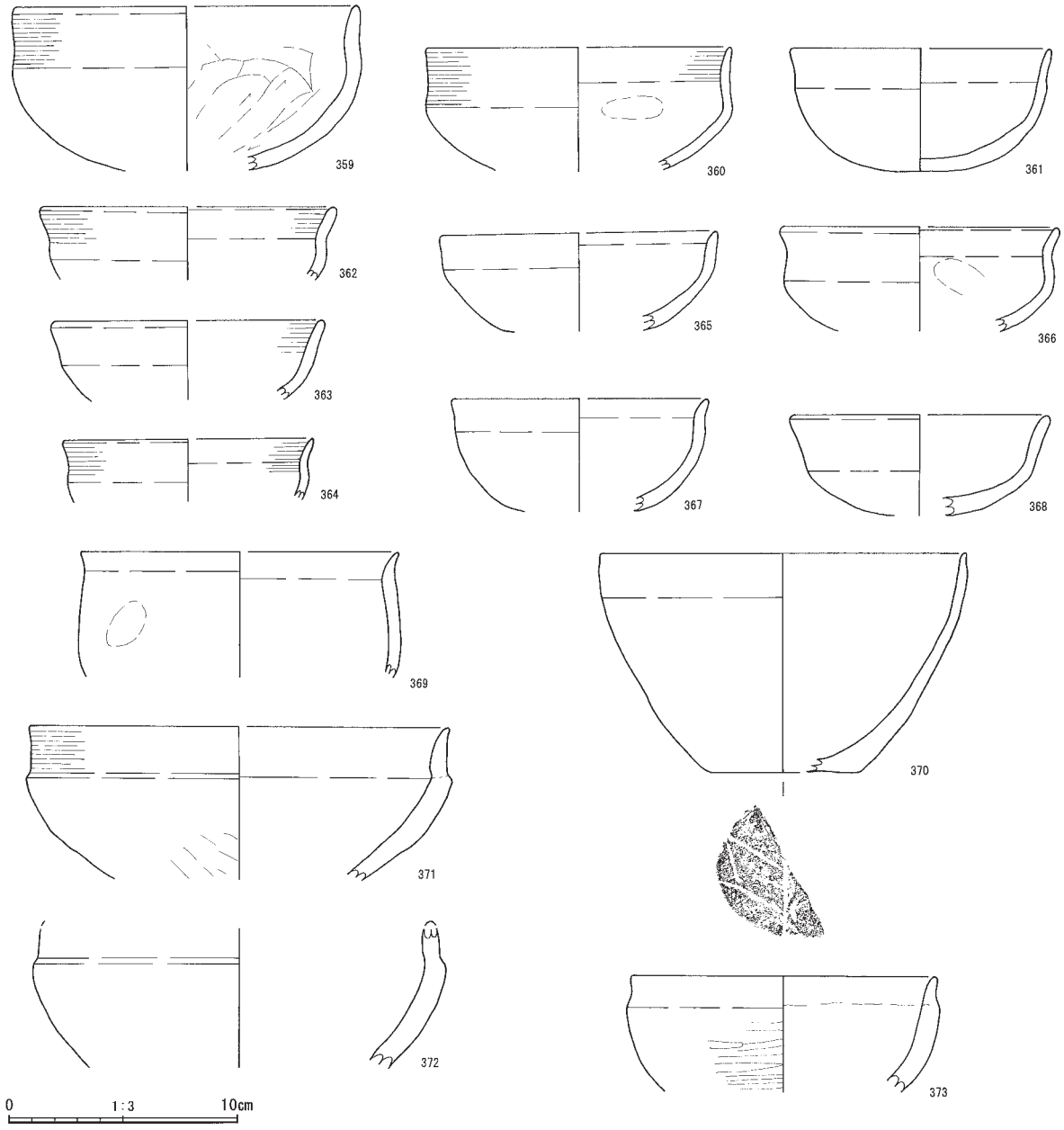
第 86 図　出土土師器実測図９（鉢Ａ・Ｂ類）

部が強く肥厚し、外側に張り出している。

（６）甕

甕には胴の丸い甕と長胴の甕とがある。丸胴の甕が２つに、長胴甕も２つに分けられるので、甕は全体で４つに分けられることになる。５世紀代に主体であった胴部の張った丸胴の甕（Ａ類）は小型の品を中心に、この期にまで少量残るらしく、胴部のヨコナデの下に縦方向のハケ整形の痕跡を施している。中には、器面全面に煤が付着したものがある。

長胴甕は口縁が外の強く張り出し、胴部にタテ方向のハケ調整を施したものをＢ・Ｃとした。頸部の



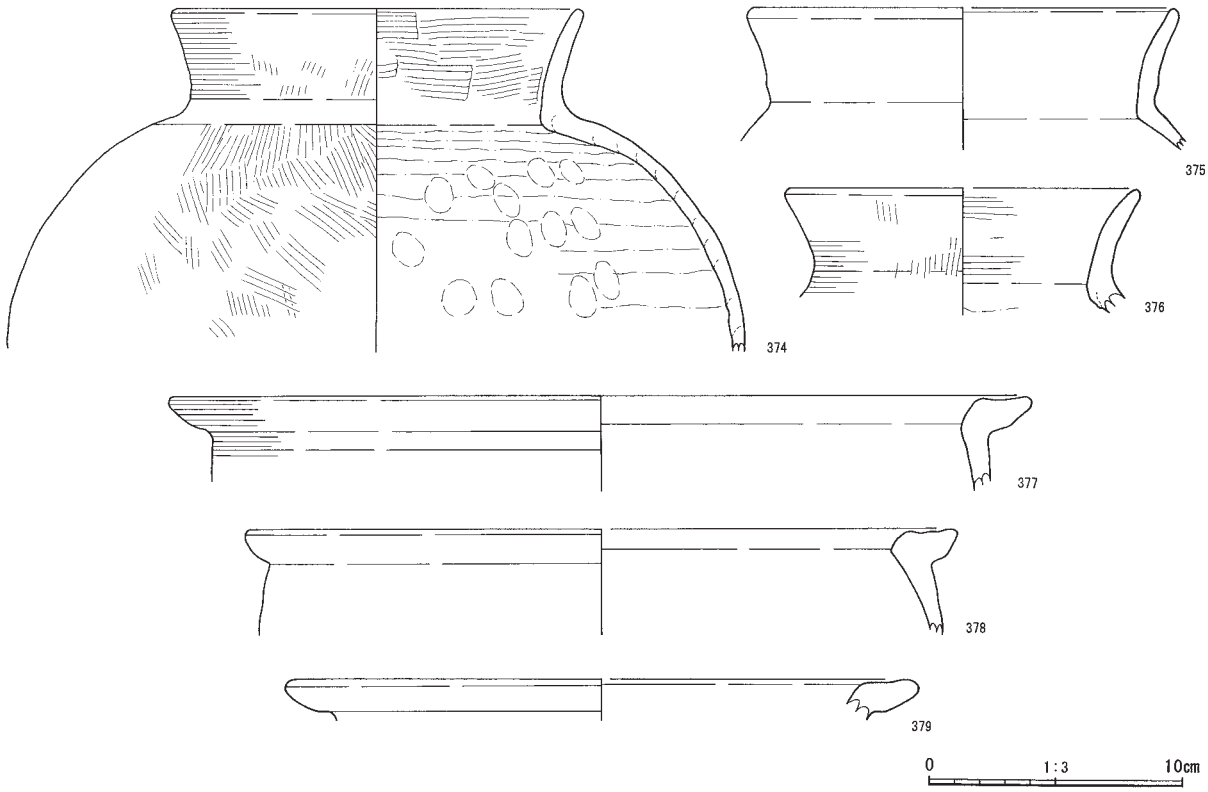
第 87 図　出土土師器実測図 10（鉢Ｃ・Ｄ類）

屈曲の差を中心に分けた。Ｂ類は頸部の屈曲に多少の平坦部分があるもので、遠江に多く見られるもので、駿河で、後に「コの字甕」と呼ばれるものである。Ｃ類は口縁部が「くの字」に強く張り出した「くの字甕」である。駿東型の甕をＤ類としている。

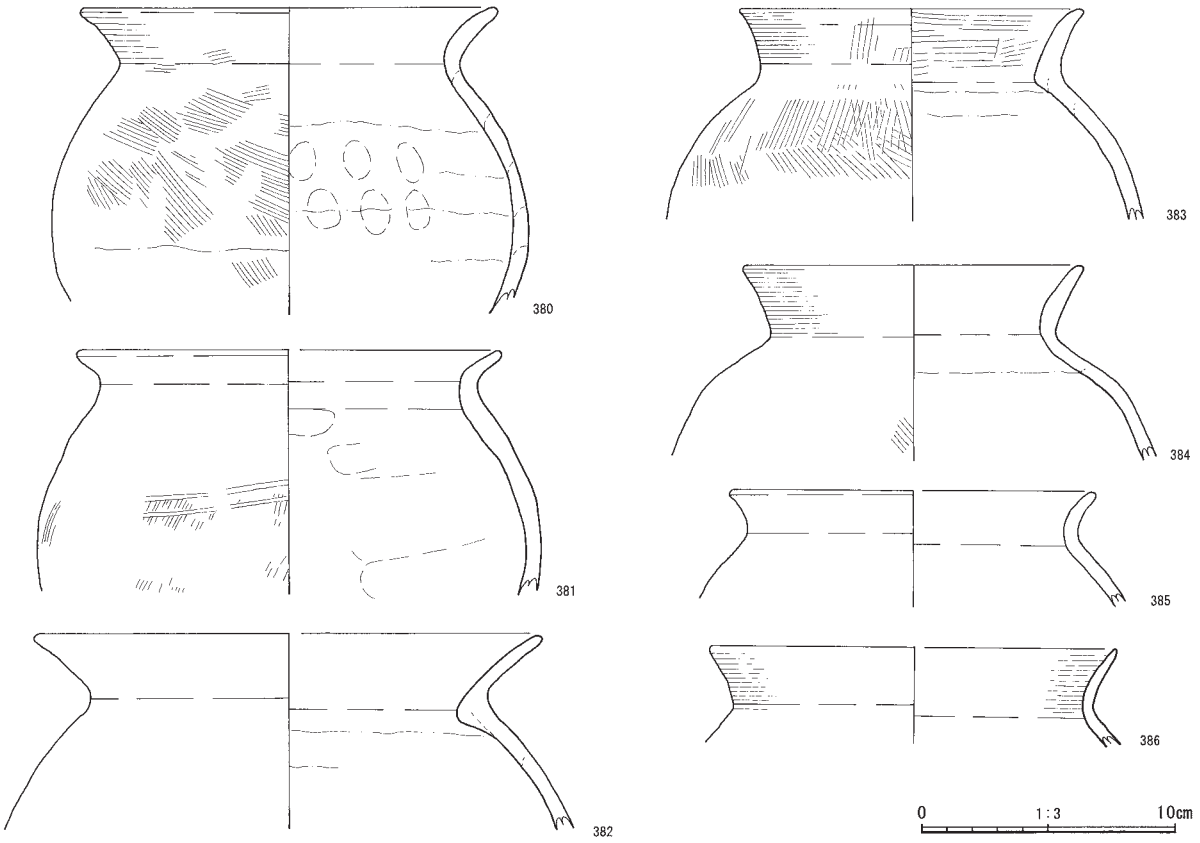
Ａ類（第 89 図）　口縁部が外反し、胴部が丸く張った甕である。体部最大径は 20 ～ 25cm ほどである。口縁部は丁寧にヨコナデをするが、胴部にはハケ目整形の痕跡を残す。量的には多くはない。

Ｂ類（第 90 図）　遠江に広がる土師器甕の系譜に列なるもので、口縁部は強く外反しているものが多い。胴部は肩の部分がやや張った長胴甕である。口唇部は比較的薄く、胴部には縦方向のハケ目を残している。底部はやや丸味を帯びたものと平底のものがある。口径の大小によって２つに分けられ、口径の大きなものを B1 類とし、口径の小さなものを B2 類としたが、両者ともに出土量は多くはない。

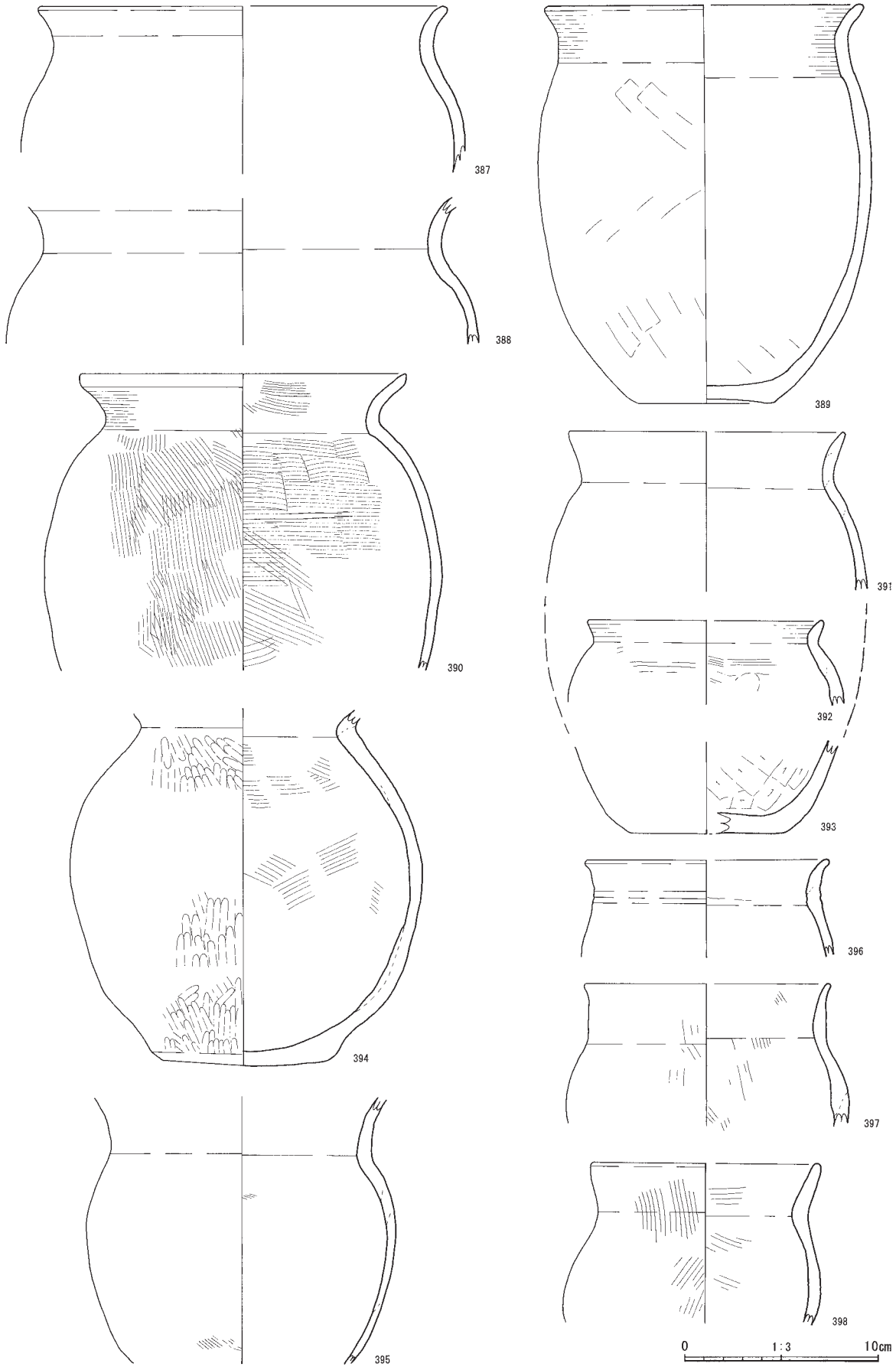
Ｃ類（第 91 図）　比較的短い口縁部が、肥厚し、強く外反し、頸部で「くの字」に屈曲した長胴の甕で、胴部には縦方向の粗いハケ目をもっているが、内面には輪積みの痕を明瞭に残しているものと、ヨコナ



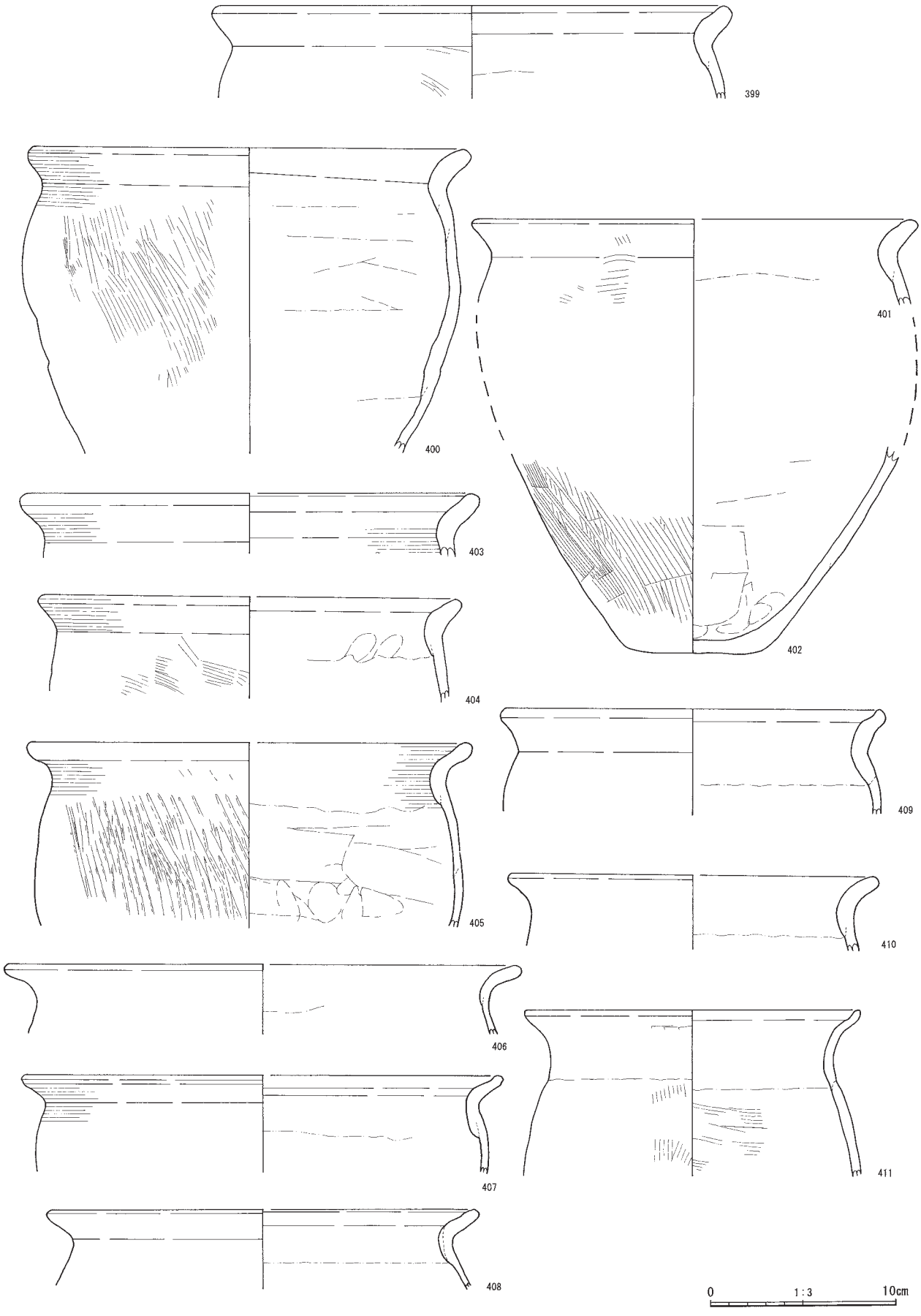
第 88 図　出土土師器実測図 11（壷・鍋）



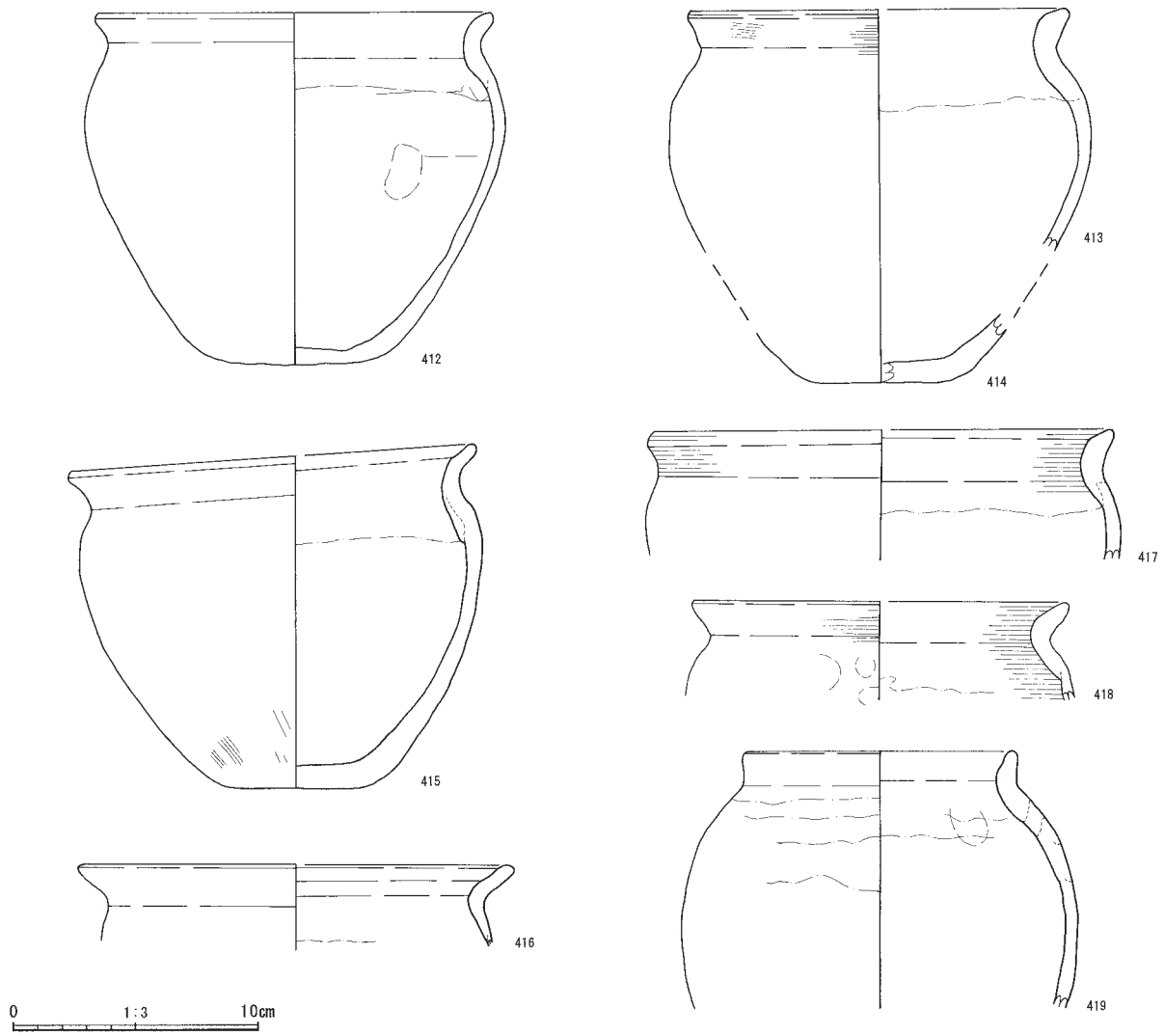
第 89 図　出土土師器実測図 12（甕Ａ類）



第 90 図　出土土師器実測図 13（甕Ｂ類）



第 91 図　出土土師器実測図 14（甕 C1 類）



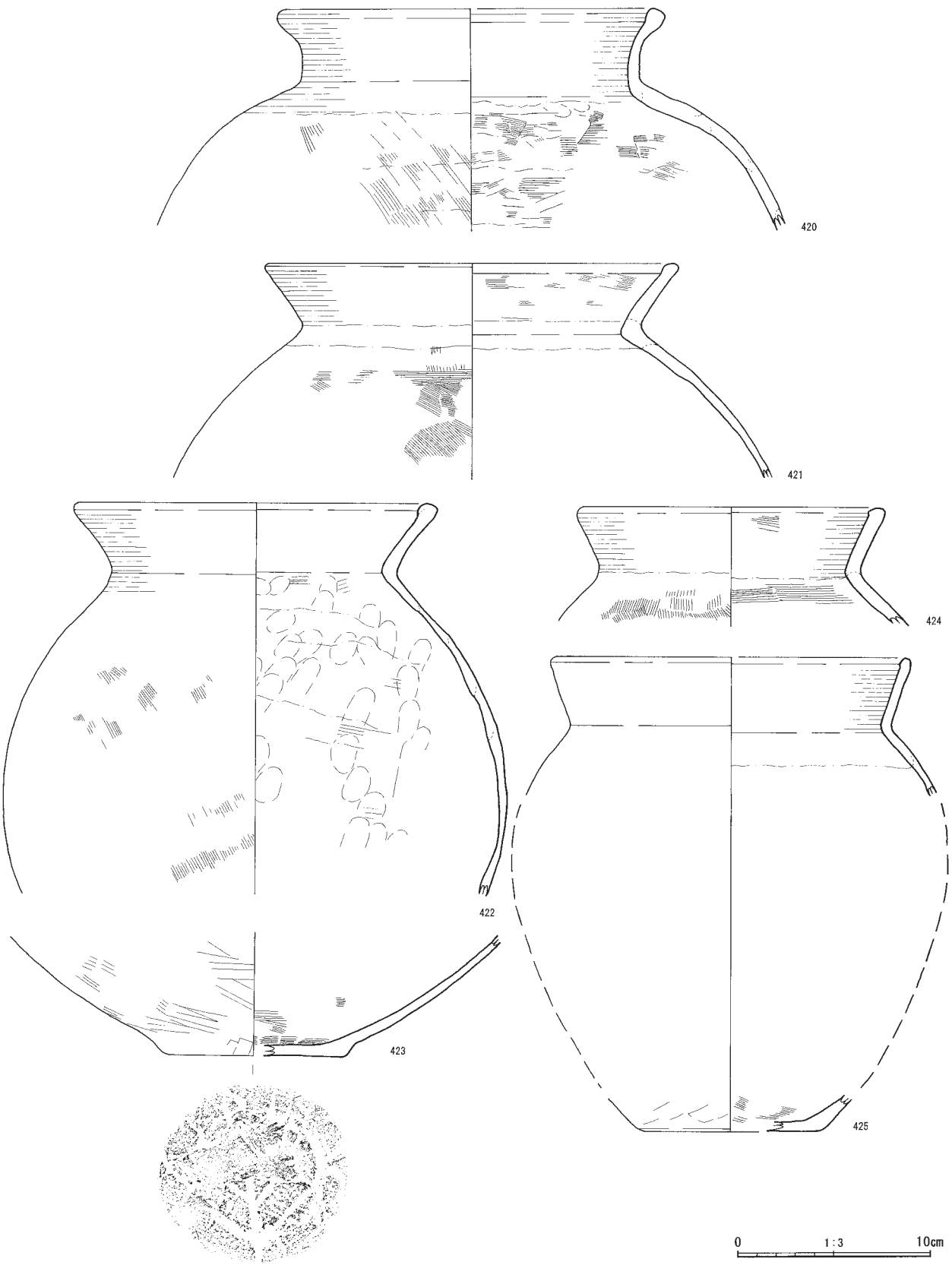
第 92 図　出土土師器実測図 15（甕 C2 類）

デを施し、丁寧に仕上げているものとがある。底は平底である。駿河東部で「コの字甕」と呼ばれているものの祖形であろう。

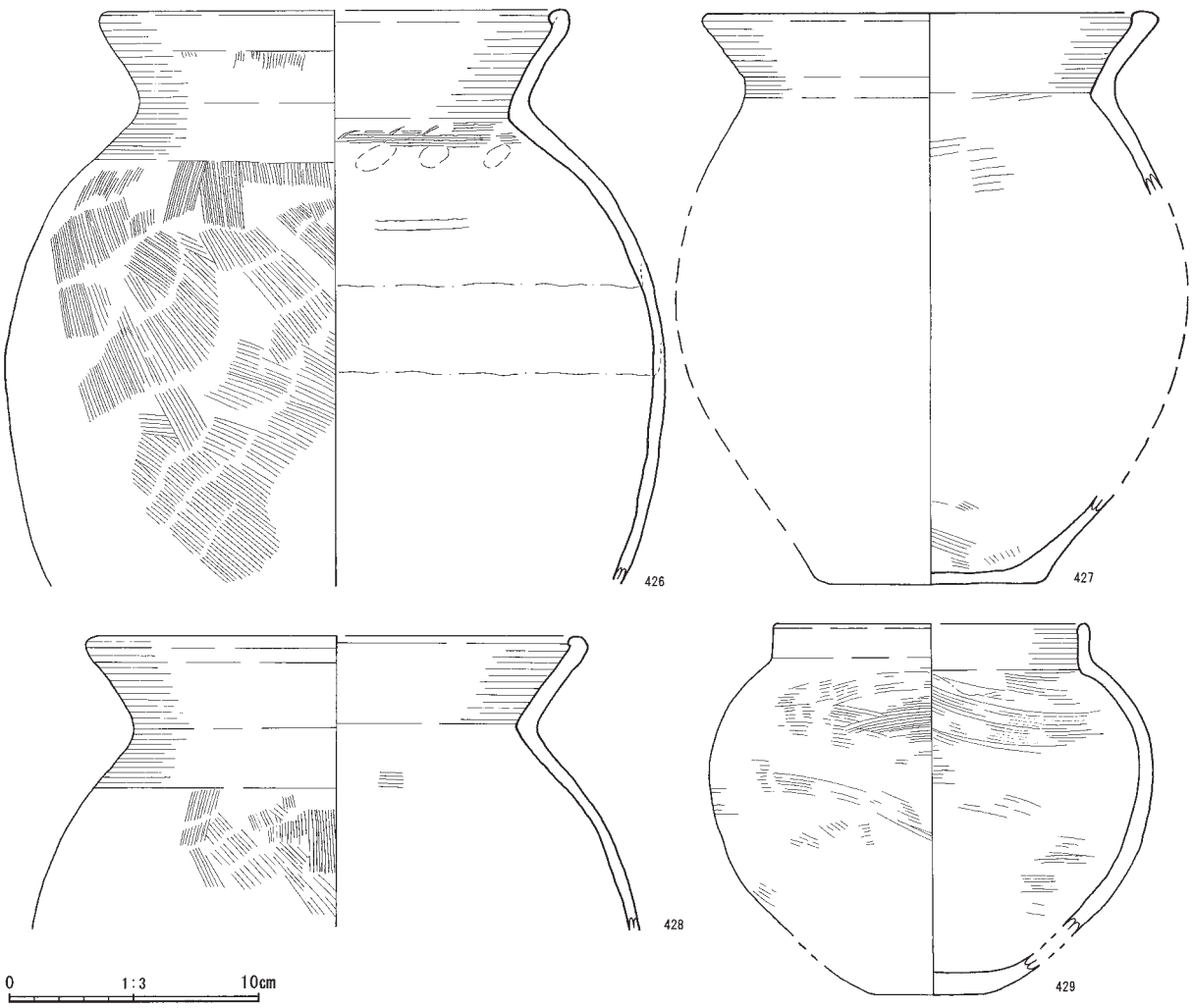
口径・器高から２つに分けられる。大振りの長胴甕を C1 類、小さなものを C2 類とした。C2 類は小型の甕で、器高は小さく、丸胴で、胴部は良く磨いているものが多く、あるいは鉢とした方がよいかもしれないが、器形は C1 類と良く似ている。いずれにせよ鉢と同一の機能をもったものであろう。口縁部の形態が C1 類と一致していることから、ここに含めているが、遠江でＢ類に伴っているものと同じである。

Ｄ類　口縁部が肥厚し、胴部が丸味をもった甕で胎土・色調などに特徴をもつ、いわゆる駿東型の甕である（註３）。

この甕は駿河東部あるいは・北伊豆を中心に分布すると考えられてきたが（羽鳥　1984）その分布は近年多少西方に広がり、静岡平野さらには大井川の左岸地域にまで及んでいることが知られている。少量ではあるが遠江中部の太田川流域にまで確認されている。この甕の初現については後で触れるが、いずれにせよ、須恵器編年Ⅲ期後葉の段階に、駿河の各地域ほぼ一斉に出現してきている。球形の胴部をもち、口唇部を複雑に肥厚（加工）させた甕は、長胴化の傾向が強くなる前代からの土師器甕の変化の中から生まれたものと考えるのは難しく、おそらく普及を始めた須恵器甕を模倣したもので、いわば模



第 93 図　出土土師器実測図 16（甕 D1 類）



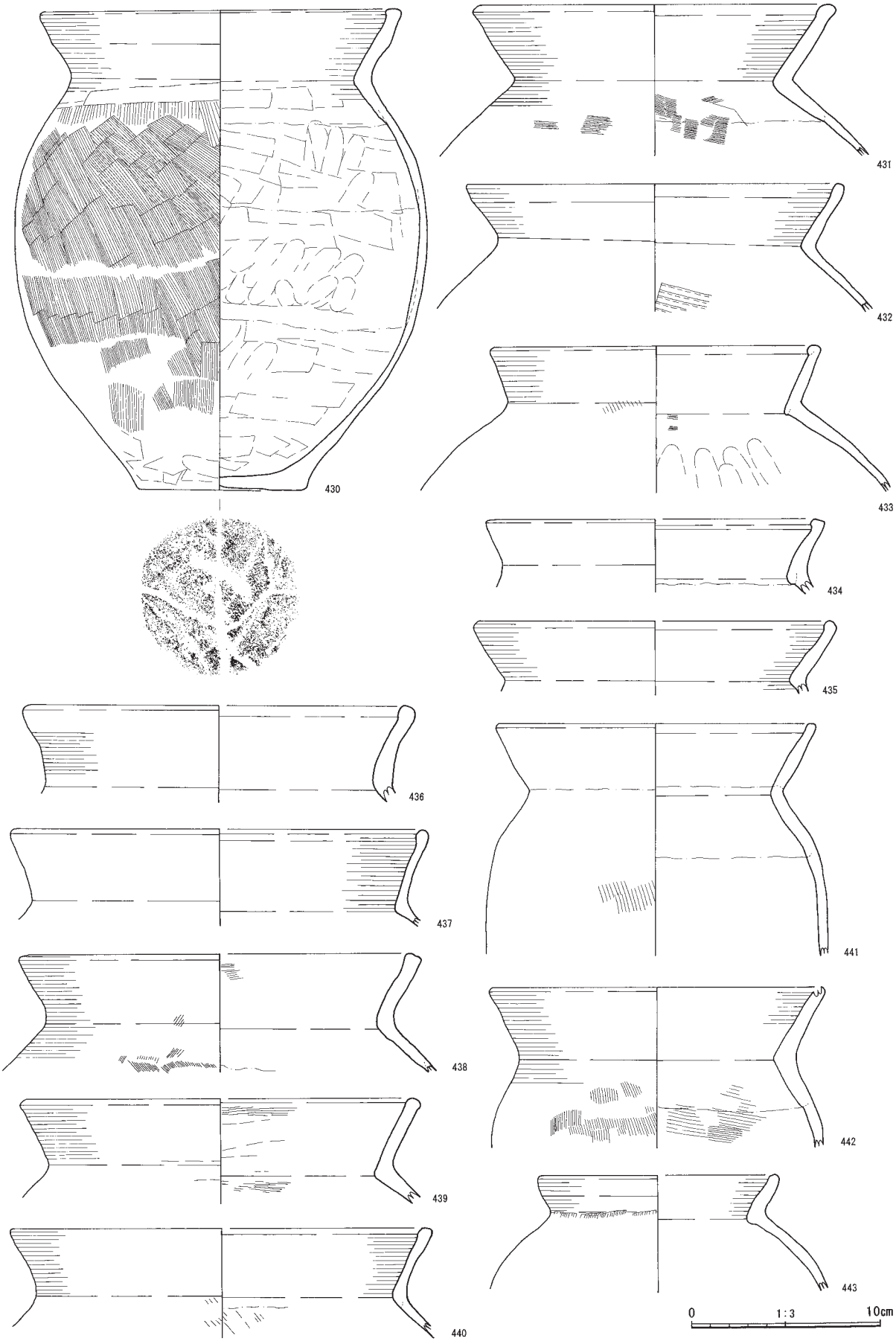
第 94 図　出土土師器実測図 17（甕 D1 類）

倣甕と考えてよいだろう。それは甕の特徴を、従来多く考えられてきたように胴部最大径の位置を軸としたプロポーションにあるのではなく、一見無意味に複雑化した口唇部の形態にあると考えることで明らかになろう。

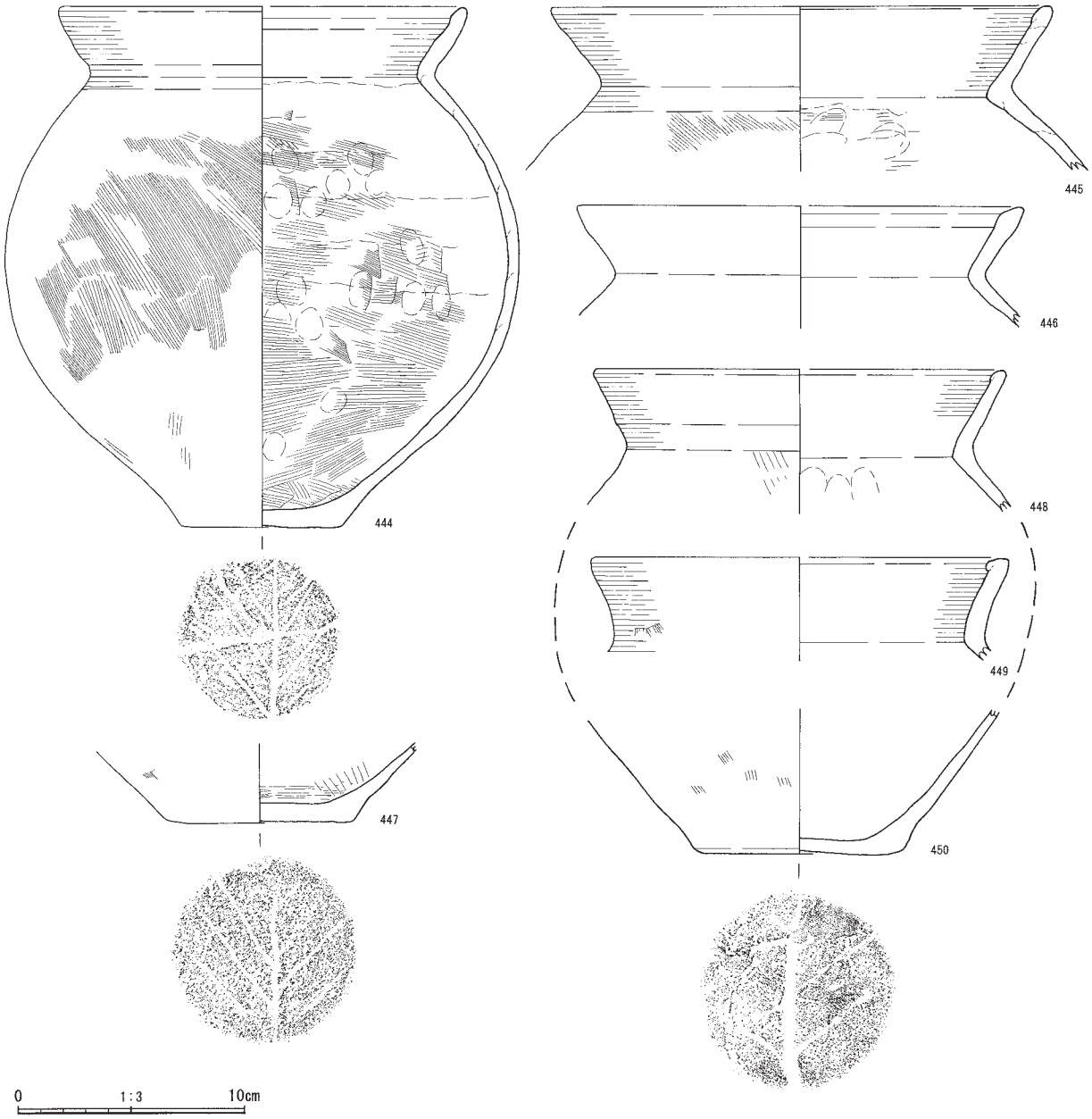
駿東型の甕は大井川以西では極端に少なくなり、箱根を超えた相模、さらには甲斐でも多くはないらしい。古墳時代後期になっても、須恵器甕の供給体制が十分でなかった大井川の東側の地域で、須恵器甕を模倣して、出現したものと考えてよいだろう。したがって、胴部に煤が付着していることから、この甕が煮炊きに使われたことは早く指摘されているが、この甕の用途は本来貯蔵用の甕であり、煮炊きに使うことはその本来的なあり方ではなかった。甕の胴部にヘラ磨きを施すことは、本来この甕が煮炊きの道具ではなかったことを示しているもので、寺家前遺跡や藤守遺跡では煮炊き用の長甕と供伴していることもそうした考えを裏付けることになろう。

寺家前遺跡の駿東甕は胎土が特徴的で、全体に砂粒・白色粒子を多く含み、器壁が全体にザラついた印象を与えるものが多い。資料整理作業の当初、焼成・色調などからいくつかに分かれることが考えられたが、詳細に観察すると、胎土には砂・雲母・白色粒子等の混和材が多いことが共通であり、色調の差は焼成時の位置・火の当たり加減の差などによるものと考えられた。したがって胎土には共通するものが多く、器面に現れた差は器壁の保存状態の差によるものであることが理解できた。

ここでは口縁部の形態から大きく３つに分けた。



第 95 図　出土土師器実測図 18（甕 D2 類）



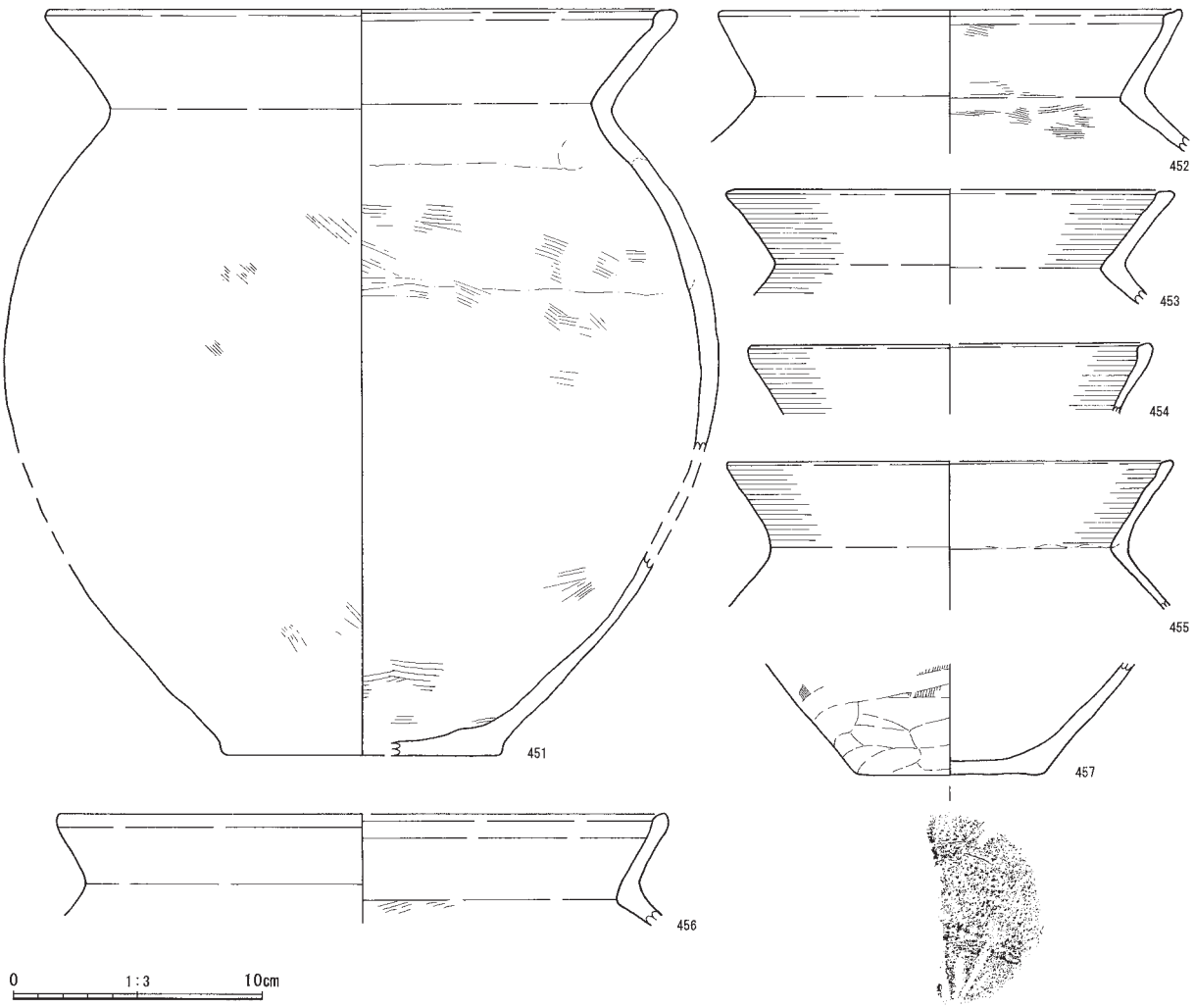
第 96 図　出土土師器実測図 19（甕 D2 類）

D1 類（第 93・94 図）　口唇部が内面に突出している。この突出部分は口縁を内面に折り返すことによるものがあるが、中には内面に粘土帯を添付しているものもある。出土量は D1 類が最も多い。

D2 類（第 95 ～ 97 図）　口唇部に平坦面をつくることを意識したようで、口縁直下を内側に大きく削っていること、口縁部が外側に「く」の字に状に強く張り出していることから、口縁端部は平坦に近くなっている。口唇部は内側にも突出している。

D3 類（第 98 図）　口縁の形態はＢ類と良く似ているが、幅の広い平坦面をもった口唇部に太い沈線を施す。これによって、口縁内側の突出・口唇端部の凹凸と重なり、複雑な様子を示している。

口縁部の形態は以上の３者が中心であるが、他にも口縁全体が厚くなり、口唇部に凹線を施すもの・口縁全体が内・外面に肥厚するが、口唇部の凹線を欠いているもの、あるいは口縁部外面にヨコナデによる凹凸が明瞭に残るもの、さらには短頸で、口縁を肥厚させ、口唇部に凹線を施す等のものがある。これらは多く D3 類のバリエーションであり、D2 類と D3 類も本来差の多くないものであろう。



第 97 図　出土土師器実測図 20（甕 D2 類）

口縁部の形態は D3 類から D1 類の方向に変化するものと考えられるが、その変化が時間軸と一致するか否かはよくわからない。

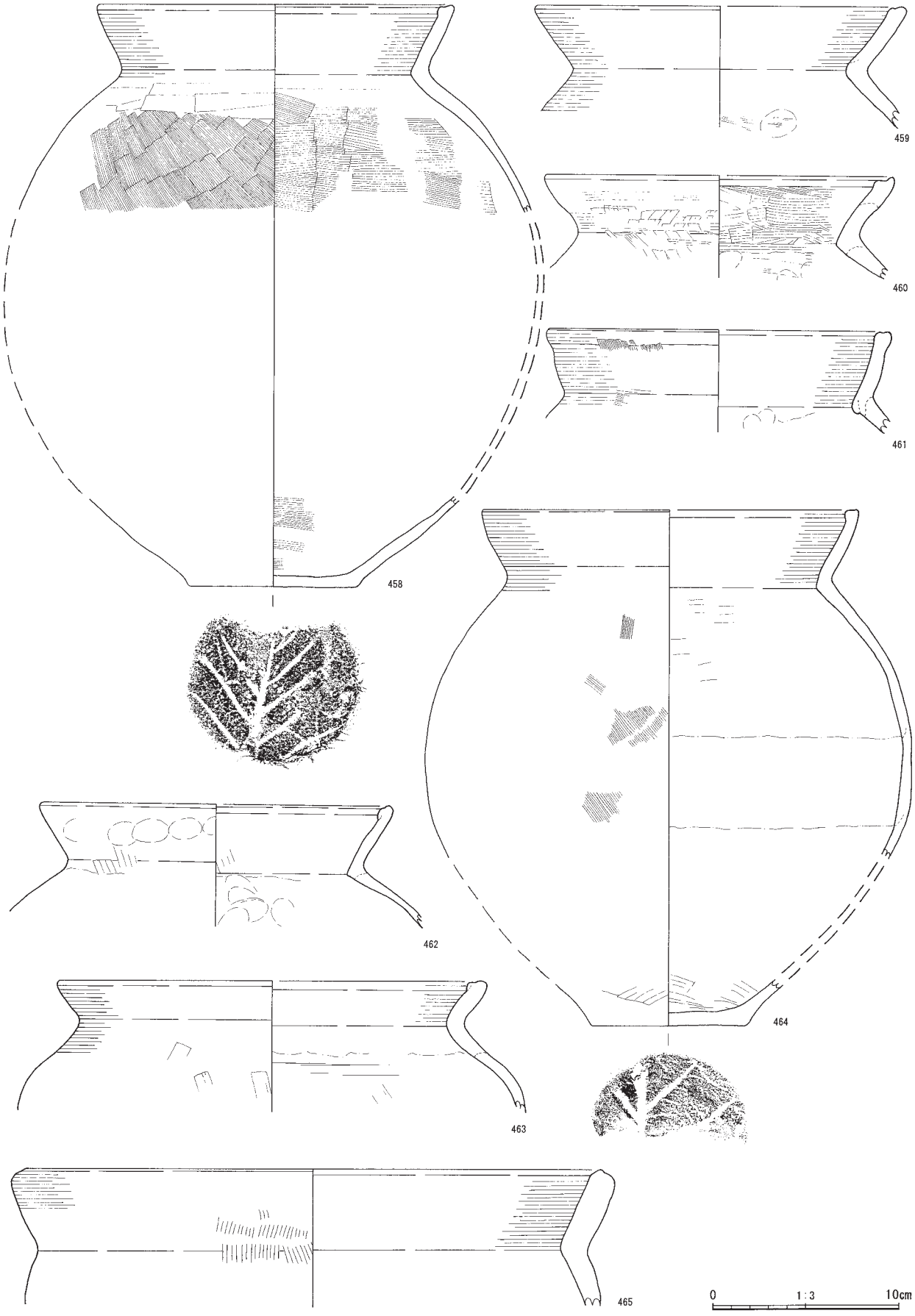
（７）甑

出土量はかなり多い。把手のみが確認された例も多い。大型で、把手をもち、１孔式(底抜け)のもの（Ａ類）と把手をもたない小型のもの（Ｂ類）とがある。後者には１孔式のもの（B1 類）と多孔式のもの（B2 類）とがある。

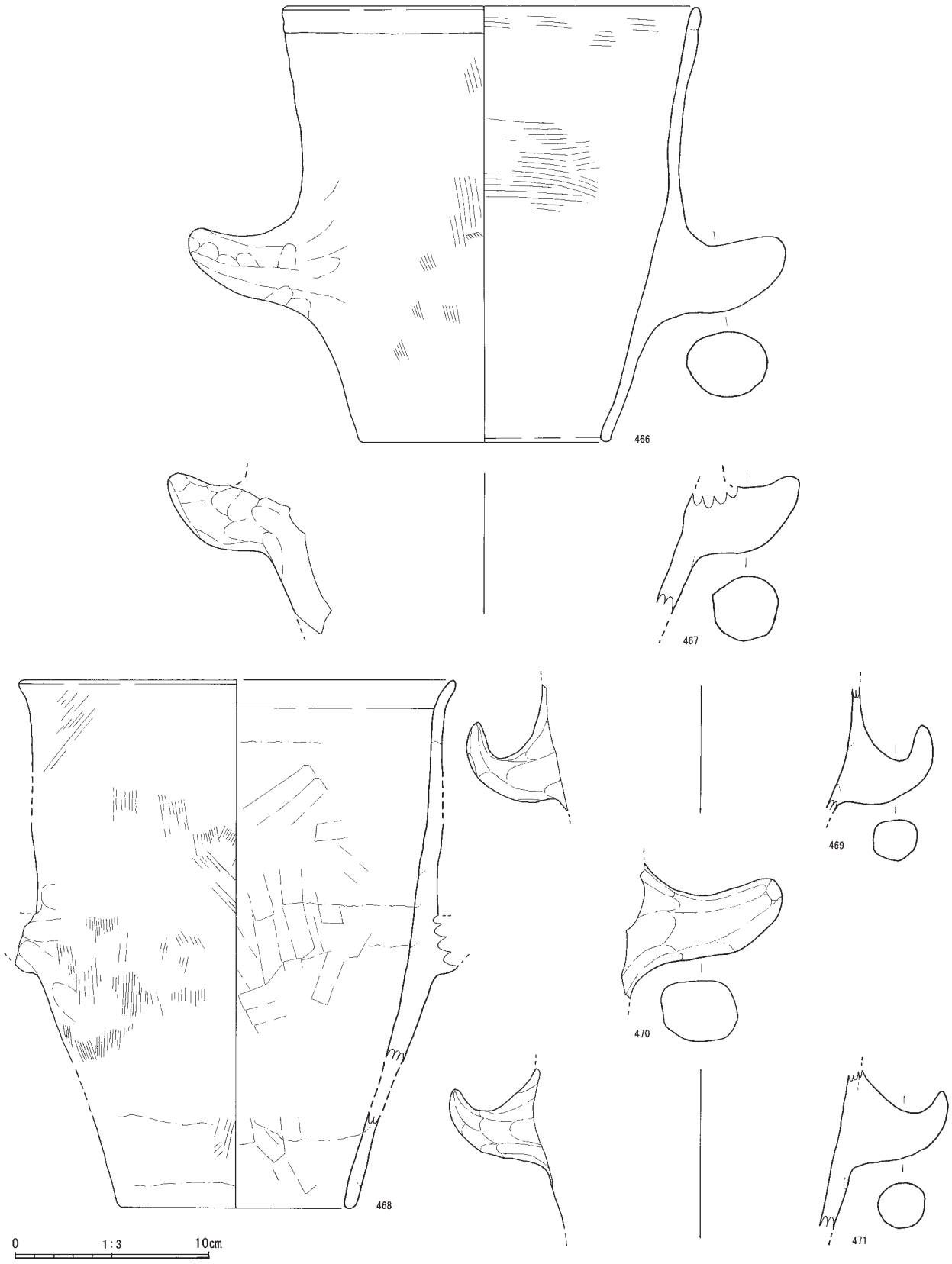
Ａ類　１孔式のもので、把手を付けている。内外面にハケ目の調整を行っている。口径、器高など（甑の容量）にも差がある。把手の形態からいくつかに分類が可能であるが、その差が意味をもったものかはよくわからない。

A1 類(第 99 図)　ずんぐりした大きな把手をもつもの、甑そのものも口径が大きく、背丈は高くはない。量的のこの手のものが中心を占めている。全体の大きさがわかるもので計測してみると５～６ℓほどのものが多い。

A2 類（第 100 図・第 101 図 **477 ～ 480**）　扁平な把手をもったのである。甑自体も比較的器高が高い。量的には両者が中心であるが、その他に細長い把手をもつもの（A3 類）、把手の端を面取りした角状のもの（A4 類）等が少量含まれている。Ａ類の甑には容量５～６ℓの大型のものと、３ℓ程度の小型のものがある。把手が細く、小さな A4 類には比較的小振りのものが多いようである。

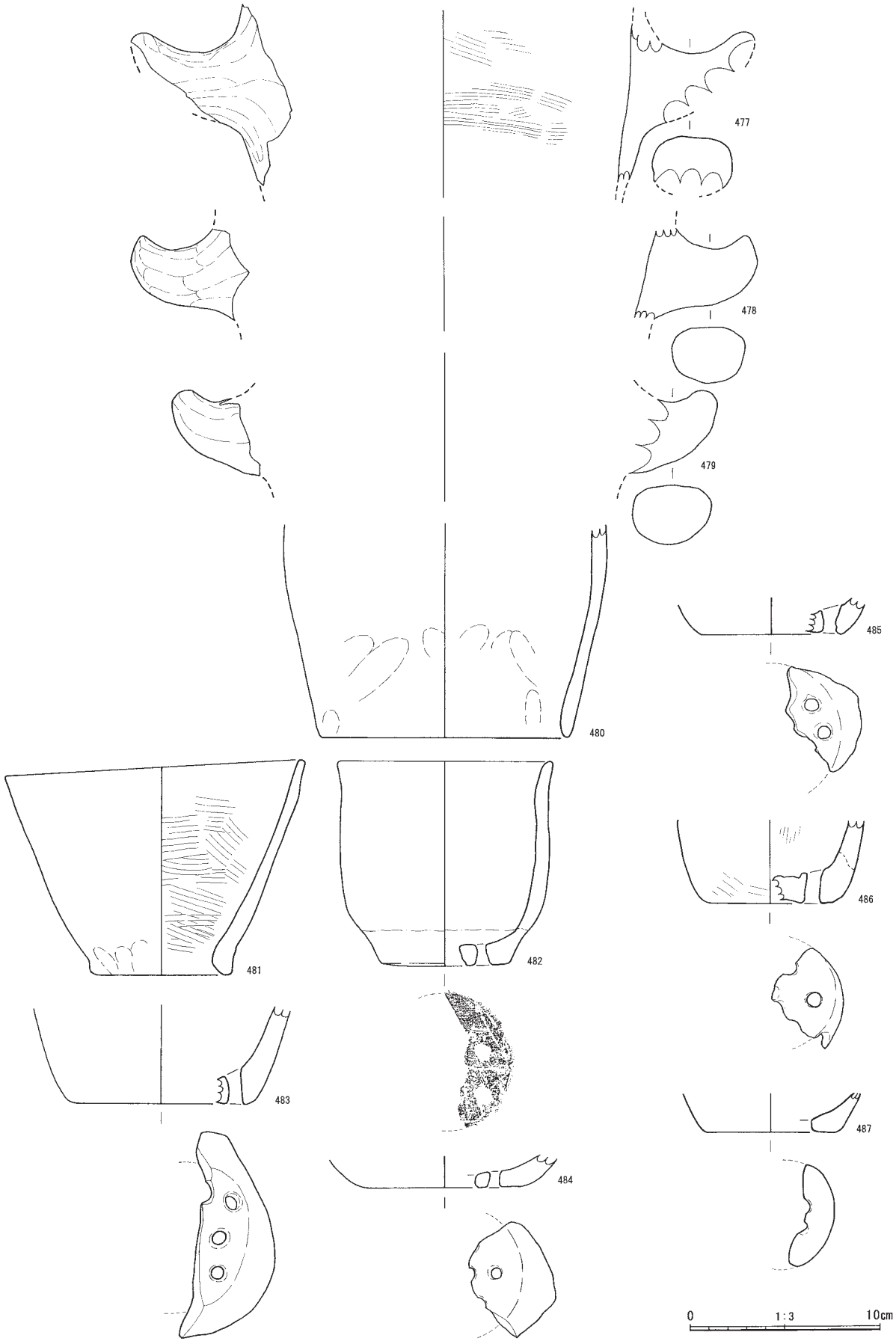


第 98 図　出土土師器実測図 21（甕 D3 類）



第 99 図　出土土師器実測図 22（甑 A1 類）

第 100 図　出土土師器実測図 23（甑 A2 類）



第101図　出土土師器実測図24(甑A2･B1･B2類)

Ｂ類　把手をもたない小型の甑である。容量は１ℓ以下で、おそらく実用品ではないだろう。

B1 類（第 101 図 **481**）　小型の甑で１孔式のもので、把手をもっていない。

B2 類（第 101 図 **482 ～ 487**）　小型の甑であるがやはり把手をもっていない。底部に焼成前に開けた小さな孔がいくつか空いている多孔式の甑である。Ｂ類はいずれも出土量は多くはない。

この他に、把手だけであるが、須恵器の甑が出土している。

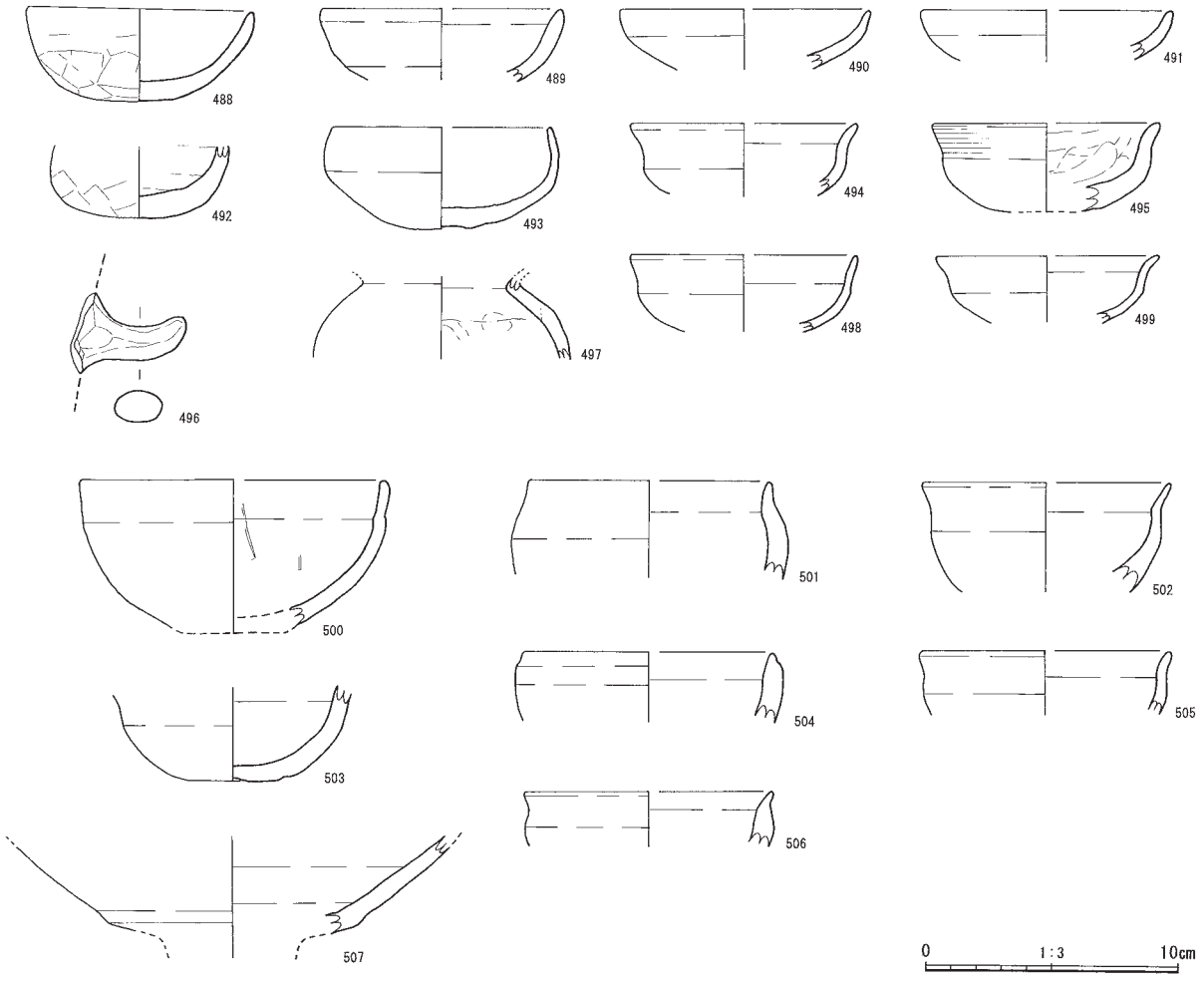
（８）祭祀用の土器

この他に、器形・大きさなどから非実用的な土師器をここに含めた。小形のいわゆるミニチュア土器と赤塗の土器とがある。非日常的な道具ではないとすると、先の B2 類とした甑もこれに含めてもよいかもしれない。

ミニチュア土器（第 102 図 **488 ～ 499**）　出土量は多くはないが、小形のミニチュア土師器がある。器形は全体に整っており、本来の器形を推定することができる。大半は坏であるが、壷・甑の把手が各１点含まれている。坏には底部を含め器形全体が丸味を持った坏Ａと体部でくびれる坏Ｃとがある。

488 はほぼ完形品で、口径 8.8 ㎝、器高 4.7 ㎝とミニチュア土器としては比較的大振りである。底部を含め、体部下半部に手持ちのヘラケズリを施し、口縁周辺にはヨコナデをしている。内面は全体にヨコナデを施し、丁寧に整形している。**490・491** も小破片ではあるが、488 と良く似た土器である。同様な器形をした **489** も内・外面ともに赤褐色を呈しており、焼成前の塗彩であろう。

494・495・498・499 は坏Ｃを模したミニチュアである。Ｃ類の坏を多く出土した神明原・元宮川遺跡の SX481 には少量ながら、この手のミニチュア土器が含まれている。**493** は口径 8.8 ㎝、器高 4.0 ㎝



第 102 図　出土土師器実測図 25（ミニチュア土器・赤彩土器）

と小振りな坏であるが、体部は全体に丸く、内湾しており、底部が上がっている。器形からは５世紀段階によく見られる坏の形態と良く似ているが胎土も赤褐色を示し、口径も小さなことから、ここに含めておいた。

496 は甑の把手であるが、細身で先端の尖った把手であり、全体に面取がしてある。把手の大きさと、器壁の厚さ・胴部のカーブからミニチュア品としたが、先の分類では A4 類に含まれるのだろう。甑Ｂ類は器高・口径ともに小さく、実用品と考えるのは難しいことからこれらを含めておく必要があるかもしれない。

赤塗土器（第 102 図 **500** ～ **507**）　内外面とも厚く赤塗した土器で、胎土は気泡が多く、全体に軽い。器壁は全体に厚く、さわるとボテッとした感があるが、胎土がもろいのか細かく割れているものが多い。砕片が多く、全体をつかめないが、個体数はかなりの数が認められる。体部がくびれたＣ類に近い器形を呈した坏が多い。

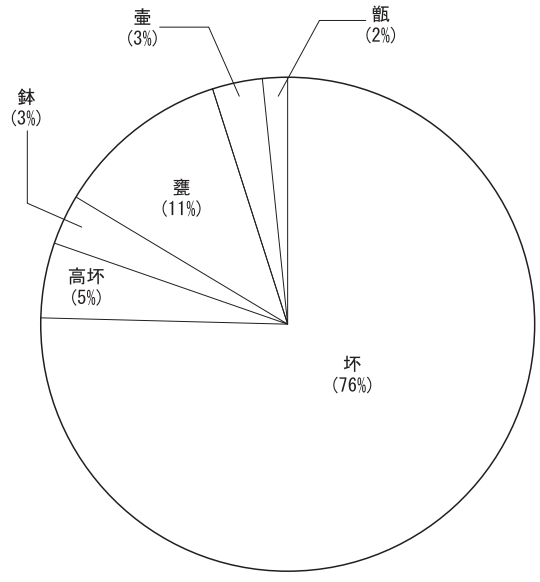
503 は比較的大きな破片に接合できたものであるが器高は比較的高い。**501** とともに SD9536 から出土したものである。**504**・**502**・**506** もこれらに含まれる。**507** は高坏の坏部である。内・外面に厚く赤塗をしていること、胎土が通常の土師器とは全く異なることなどから、これらは日常使われるものではなく、祭祀用の器であろうと考えている。

２　遺構出土の土師器

（１）SD9526（SR9526）出土の土師器（第 57 ～ 59 図）

集落の中央部を斜めに横切るように流れていた流路跡から土師器がまとまって出土しており、小さな破片を除外して、個体が識別できた点数は 121 点ほどである。遺構の観察でも述べたように、この流路は上下に分層できる部分があり、また、平面的にも上・下層で異なる流れを示す部分がある（部分的には SR9125・SR9133 と呼んでいる）ことから、現地調査の段階では上層を SR8280、下層を SR9526 としていたが、大部分が重複しているので、ここでは SR9526 として一括して扱うことにした。しかし、SR8280 出土の土器には第 130 図の図上で○印をつけて識別できるようにしている。また、各器種の割合は第 103 図に示したとおりである。

SR9526 出土の土師器は坏類が多く、坏全体で 89 点が数えられているので、全体の 79％が坏類ということになる。ついで多いものは甕Ｃ類とした駿東甕であり、両者を合わせると全体の85％近くを占めていることになる。寺家前遺跡の包含層から出土した土器を数えると、坏類の占める割合は40％強であり、SR9526 では坏類の占める割合が非常に高いことになる。祭祀に伴う廃棄跡だと考えられている神明原・元宮川遺跡の各遺構、なかでも SX481 ではやはり坏類の出土量が卓越し、全体の 70％に及んでおり、SR9526 と良く似た状況を示している。したがって、SR9526 出土の土器群は一般的な集落遺構出土の土師器の器種構成としてはかなり異質なもので、おそらく、その周辺で行われた祭祀に伴う土器群の廃棄の結果であろう。



第 103 図　SR9526 出土土師器器種組成図

坏 A1 類は全体に丸味をもった坏で第 59 図 **91** ～ **97** に示した。A2 類は A1 類に比較して、底部

が平坦になり、全体の器形も低くなり、「箱形」に近くなった坏で、底部に木葉痕を残すもの（第 59 図 101・102）とナデあるいはヘラ削りなどで木葉痕を消しているもの（95 ～ 103）とがある。後者を A2-a 類、前者を A2-b 類と分けているが、A2-a 類の出土量が多い。坏Ｂ類は底部が平坦になり、器壁も比較的厚いものが多い（104・105）。底部には木葉痕を残している。

Ｂ類の坏は今のところ志太平野以外では神明原・元宮川遺跡に少量認められるだけで、その存在は希薄である。

坏Ｃ類は体部上半にくびれをもっているもので、底は丸く仕上げられている。底部にナデを加え木葉痕を消したもの（116・117）と木葉痕を残したままのもの（119 ～ 121）がある。前者を Ca 類、後者を Cb 類としている。Ｃ類の坏は先にも触れたように、神明原・元宮川遺跡の各遺構から多量に出土している。

坏Ｄ類は須恵器模倣坏である。身の深さが減少し、蓋受けの部分が長くなった新しいタイプの坏が多い。136 は坏蓋の形態を比較的良く残しているので、坏蓋と表示してある。127 はあるいは鉢なのかもしれない。Ｄ類の坏は駿河東部の遺跡では量的にも中心的な位置を占めているが、静岡平野では大きく減少し、志太平野ではその数は非常に少なくなっている。こうした傾向は遠江ではさらに著しく、その存在すら明らかでない遺跡が多くなる。

坏類では坏Ａ類が最も多く、A1・A2 類を合わせると坏全体の 45％を占めている。坏Ｂ類が 20％、Ｃ類が 22％を占めている。Ｄ類とした須恵器模倣の坏は 10％弱と多くはない。こうしてみると坏はＤ類を除いては各類ほぼ 20％前後を占めており、強いて言えば B2 類が多少多い程度である。注目されるのは坏Ｂが一定量含まれていることであるが、これについては後ほど触れることにしよう。

高坏は３点と多くはないが、143 はＢ類で、明らかにＡ類とされるものは含まれていない。これはＡ類の高坏がＢ類に先行するもので、SR9526 が埋没する段階にはＡ類はその姿をほとんど消していたことを示すものであろう。

甕は駿東甕が中心で、口縁部の変化が複雑な D3 類（148・151）あるいは D2 類（147・149）が多い。一部にＡ類とした丸胴の甕（137・138）が含まれている。甕Ｂ・Ｃ類の存在は顕著ではない。

甑は A2 類とした背の高い甑が１点含まれている。

上層とした SR8280 には坏Ａ類･Ｃ類が少なく､Ｂ類が多い。上層出土の坏類のうち半数を占めており、坏Ｄ類も口縁部が外側に長く伸びた模倣坏としても新しい様相を示したものである。

神明原・元宮川遺跡の SX481 は一部に古手の須恵器を出土しているが、多くはⅢ期後葉の須恵器に伴うもので､多量に出土した土師器坏はＡ類およびＣ類としたもので､少量の A2 類の坏は含まれているが、Ｂ類は全く含まれていない。また、同じ神明原・元宮川遺跡 SX478 は須恵器Ⅲ期末葉からⅣ期前半の須恵器を伴出しているが、土師器坏は A1・A2 類・Ｃ類とともに、少量ではあるが、Ｂ類を含んでいる。

大井川下流域の藤守遺跡で SB ６とした住居跡は、Ⅲ期末葉・Ⅳ期前半の須恵器を伴出しているが、坏Ａ・Ｃ類とともにＢ類を伴っている。また、この住居跡ではＢ類とした長胴甕をも伴っている。SB ９も同様にⅢ期末葉・Ⅳ期前半の須恵器に伴ってＣ類の坏が認められる。また、住居跡周辺から駿東甕に伴って、やはり、Ｂ類とした長胴甕が出土している。

したがって、先に触れたように、坏Ｂ類は静岡平野あるいは遠江ではほとんど検出されておらず、志太平野を中心とした狭い地域に分布の中心をもった坏だと考えられるし、静岡平野で中心的な位置を占めている坏Ｃ類は志太平野ではその存在は希薄になっている。

SR9526 出土の土器を整理してみれば、出土した須恵器からみて、寺家前遺跡の後半段階のもので、Ⅲ期末葉からⅣ期前半の須恵器を伴っている。土師器坏Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ類と全てを含んでいるが、Ａ類とした高坏は含んでおらず、Ｂ類の高坏が主体である。さらには甕Ａ・Ｂ・Ｃ類が主体となり、これら

に少量の鉢・壷・甑が伴うということになる。坏類に限ってみれば、上層としたSR8280では坏Ｂ類が中心であり、これに坏A2・Ｃ・Ｄ類が伴っているが、坏Ａ類は含まれていない。また、SR9526の本体では坏Ａ類が中心となっており、坏Ｂ類は少ない。したがって坏Ａ類は坏A2類に先行することが知られよう。

（２）SD6289・SD6290出土の土師器（第48図）

Ⅱ-1群の北面あるいは東面を区画すると考えられているSD6289・SD6290から土師器甕を中心に多くの土器が出土している。特に後者からの出土が多い。出土状態には特別な意味を見いだせず、溝が埋没してゆく過程で投げ込まれたものが多いようである。出土土師器を簡単に説明する。

SD6290　**55・57**は甕Ｂ類である。前者は胴部に粗いハケを残している。**54・56・59・60**はC1類、**58**はC2類である。**61**も短頸で、器形も少し異なるが、この類に含めておこう。

SD6289　**50・53**は駿東型の甕であるが、口縁内側に張り出しをもったD1類である。**51・52**は口頚部をくびれさせた小型の甕である。平坦な底部に木葉痕を残している。器壁はかなり厚く、胎土もＤ類の甕と良く似ている。類例は多くはない。

３　包含層出土の土師器

（１）坏

坏類をＡ～Ｄ類の４つに分けた。先に述べたように量的に多いものはA2類とＢ類である。

A1類　口縁部から底部にかけて全体に丸味をもっている。坏底部はヘラ削りのあとナデを加えて整えているものが多いが、中には多少凹凸が残るものがある。口径・器高ともに良く似たものが多く、口径は14～12㎝ほどで、器高は５～４㎝間に集中している。

A2類　底部の径が大きくなり、全体が平坦になる。底部に軽くナデ調整を加えているが、多少の凹凸が残るものがある。**227**には底部に木葉痕が残り、A2b類であろう。**232**は底部に木葉痕をもち、器形もＡ類とは多少異なっており、Ｂ類に含めるべきかもしれない。ヘラケズリ・ナデなどの調整を行わず、木葉痕を残したままのA2b類は底部の調整が簡略化していると考えられることから、A2a類に後続するものであろう。

口径はやはり14・15～12㎝ほどに分かれ、器高も５～３㎝に広がっているが、口径の小さなものは器高も低い。寺家前遺跡に後続する時期の遺物を出土している藤守遺跡のSR７とした溝からこのタイプの坏が出土しているし、寺家前遺跡に近接する三ツ池２号墳や谷稲葉高森18号墳からもこのタイプの坏がＢ類の坏と供伴している。

Ｂ類　底部から口縁にかけてやや内湾し、底部が平坦になっている。全てが底部に木葉痕をもっている。出土量も多く、A2類とともに寺家前遺跡出土坏類の中心を占めている。

口径はやはり14～12㎝、器高は５～４㎝ほどの幅がある。底部に木葉痕を残すことから、坏Ｂ類は坏A1類に後続し、坏A2b類と供伴する可能性が強い。SR9526ではＡ類・Ｃ類などと伴出しているが、静岡平野の神明原・元宮川遺跡などではほとんど出土が確認できない。藤守遺跡のSX６とした土坑はⅣ期後半からⅤ期の須恵器が出土しているので７世紀後半から８世紀にかけてのものであるが、ここではＢ類の坏が出土している。したがって、坏Ｂ類は少なくともA1類より後続するものであろう。

Ca類　口頸部を屈曲させ、ヨコナデを施している。底部に軽く、ヘラケズリ・ナデなどを加えるが、多少の凹凸が残っているものがある。底部が残っている**280・281**などでは木葉痕はない。したがってCa類には木葉痕はない。

Cb類　口縁から体部にかけてはC1類と同じであるが、底部は未調整で、**293**～**297**は明瞭に木葉痕が残る。

神明原・元宮川遺跡の各遺構から多量に出土しているが、底部の木葉痕の有無は明らかではない。

Ｄ類　須恵器を模倣した坏をＤ類とした。模倣坏には坏身を模倣したものと坏蓋を模倣したものとがある。前者をD-1類、後者をD-2類とした。D1類は極少なく、模倣坏の大半がD2類である。

坏蓋は比較的早い段階で坏身に転化していると考えられている。第84図305・314はD1類であろう。309・310は坏蓋を模倣したD2類であるが、すでに、口縁部の立ち上がりが大きくなっており、須恵器蓋の変化からずれて、模倣坏として、独自の変化を示している。口径は14㎝台と比較的大きなもの(306・307）が多い。

Ｅ類　黒色土器をＥ類としたが、坏Ｂ・Ｃ・Ｄ類が含まれている。316は胴部以下の破片であるが、坏Ｂ類、314・315は上胴部から口縁部にヨコナデをもっていることから坏Ｃ類、313は模倣坏（Ｄ類）で口径が12㎝と比較的大きい。駿河東部の遺跡に比較すると、出土量は多くはない。

（２）高坏

高坏の出土量は特に多いわけではないが、この量は近隣の当該時期の遺跡に比較して、特別に少ないというわけではない（註４）。

高坏は器形が伝統的な土師器高坏に列なるＡ・Ｂ類と須恵器模倣の高坏Ｃ・Ｄ類と４つに分けている。

Ａ類　坏部は比較的大きく、脚は中空で、脚中央部がやや張っているもの（318）がある。前代からの土師器高坏の器形を引き継ぐものである。次第に脚の湾曲が少なくなり、全体にスリム化してくる(320・324)。脚と坏部の接合は特別な手法はなく、脚を坏部の底に貼り付けている。

Ｂ類　脚が中空から次第に中実になり、脚下半分だけが中空になるもの（326・332）と、ほとんど粘土の棒状になるものとがある（333･340)。前者は坏部の形態も、その径もＡ類の坏部と良く似ているが、中には脚部に比べて、坏の径が小さくなるものがある。坏部の大・小によって坏B1類・B2類に分けているが、図示できる良好な資料は少ない。328は小破片からの復元であり、多少疑問もあるが、坏部が大きく、あるいは時間的に多少古いものかもしれない。

Ｃ類　脚が短く、坏部が模倣坏の形を取るものをＣ類としたが、小破片が多く、図示できるものはなかった。出土量も多くはない。

Ｄ類　ほぼ中実な円柱状の脚をもち、比較的大振りな丸味をもった坏部を有する（343)。336は坏の上部がかけているが、この類に含まれるものだろう。本来は須恵器無蓋の高坏を模倣したものであろう。脚の形から340・339はこの類に属すものであろう。

（３）鉢

Ａ類　体部がやや内湾しながら立ち上がり、平坦な底部をもった鉢で、一見サラダボールのような器形をしている。口径の大小によってA1類とA2類に分けている。

A1類　344～347を口径の大きなものにした。底部は平坦で、木葉痕を残している。出土量は多くはない。神明原・元宮川遺跡でSR55とした遺構からＣ類の坏などとともに１点出土しているが底部の木葉痕の有無は不明である。

A2類　口径が12cm～14cm（350）と小振りな鉢であり、内・外面ともにヨコナデを施している。底部は丸くなっており、木葉痕は残っていない。350は底部が多少外にはみ出したようになっており、346と良く似ているが、底部が欠落しており、木葉痕はよくわからない。いずれも出土量は多くはない。

Ｂ類　頸部でややくびれた部分をもった鉢で、やや丸味をもった底部（351）には木葉痕はない。平坦な底を持った353にも木葉痕は認められない。やはり口径の大・小でB1・B2類に分けている。

B1類　口径13㎝程度、器高10～８㎝ほどの大きさのものである。

B2類　口径10㎝程度で、器高は15～14㎝ほどと比較的深くなっているが、胴部が張っているせいか深さを感じさせない。底部はやや丸味をもっており、木葉痕は認められない。

C類　器形は坏Cと良く似ているが、口径に対して器高が大きく、器高が 10 ～ 15 cmほどのものがある。口径の大小によって、C1・C2 類に分けている。神明原・元宮川遺跡の各遺構から数多く出土しているが、坏C類との区別が難しいものも含まれている。

C1 類　胴上半部にヨコナデを施しており、**359** は口径 15 cm、器高８cmほどである。**360** は口径 13 cm、器高 6 cmほどである。

C2 類　口径 10 ～ 12 cmほどのもので、出土量はC1 類よりは多い。

D類　分類の項でも触れたが、須恵器広口の短頸壷を模倣したものである。口縁部あるいは胴部に最大径があり、頸部が凹んでいる。明らかに須恵器小型広口壷を模したものを含めて、神明原・元宮川遺跡 SR55・SR56 などに認められるが、量的には多いものではない。**371**・**372** などは外面を黒色処理しており、E類に含められるものかもしれない。

E類　黒色土器であるが、**373** に示したものは鉢C類に良く似たものである。図示したものの他小破片が何片か認められる。**373** は内・外面ともに黒色処理した小型の鉢で、外面には横方向のヘラ磨きが顕著である。

（４）壷

少量ではあるが壷が検出されている。**374**（**139**）は直立に近い口縁にヨコナデ整形を施し、丸く張った胴部にもハケ整形の後ヘラ磨きを施している。坂尻遺跡に良く似た器形の壷がある。**376** は口径がやや小さな壷である。いずれにせよ、出土量は極少ない。

（５）鍋

いずれも小破片で、全体の形はうかがえないが、平坦な口縁と丸い胴部をもったものらしい。口縁が外に張り出しているが、上面をわずかにくぼめている。口唇部にはヨコナデを施しており、胴部は器壁が荒れていてよく観察ができないが、無文らしい。小破片からの復元推定であるが、口径は、**377** は 34cm、**378** は 28cm、**379** は 25cm を数える。

（６）甕

出土量は最も多いが、全体の形態から４類に分けた。

A類　口縁部を外反させた従来からの土師器甕の系統を引くものである。丸く胴部が張った甕をA類とした。出土量は多くはなく、寺家前遺跡では全体に小型のものが多い。**348** と **380** では器形に多少の差がある。また **381** は口縁部が短い。神明原・元宮川遺跡の各遺構では駿東甕は目に付くが、丸胴の甕は極少ない。藤守遺跡でも同様である。

B類　口縁部が外側に張り出した長胴甕の甕をB類としたが、出土量は多くはない。口径・器高に多少の差があり、大型のものをB1 類の小型のものをB2 類としている。**389** は口径 15 cm、器高 20 cmほどと比較的小型であるが、**387** は口径が 20 cm超と大きくなる。全体に小振りのものが多い。坂尻遺跡ではこの類の長胴甕が圧倒的に多く、藤守遺跡でもかなり目に付くが、寺家前遺跡では、その量は多くはない。静岡平野の神明原・元宮川遺跡ではさらに少ない。遠江に広がる甕は天竜川流域では長胴甕のほぼ全てはこのタイプのものによって占められる。

C類　口縁が外に強く張り出した長胴甕をC類とした。大・小によってC1・C2 類に分けている。

C1 類　肥厚した口縁を強く外反させた甕であるが、口縁部にはヨコナデを施し、胴部にタテあるいは斜方向の粗いハケを施している。底部は **402** に見るように、やや丸味を帯びた平底である。**399**・**406** は口径 30 cm弱と大振りであるが、**411** は 18 cmほどとかなりの幅がある。口縁部を詳細に観察すると、口唇部に太く、浅い沈線を施すものと、丸く肥厚させただけのものがある。前者は器面に粗い縦ハケを残すものが多く、また、内面に粘土の輪積み痕を残しており、後者は器面内面をなでているものが多い。

C2 類　C1 類と同様に肥厚した口縁をもった甕であるが、胴部は丸く長胴化していない。口径 15cm

ほど器高も 15 ㎝前後である。胴部には前面にヨコナデを施している。412・415 はほぼ完形で、口径と器高の大きさを知りうる。

Ｄ類　駿東甕である。胴部が丸く張った甕で、口唇部を内外に張り出させている。口縁の変化で、D1 ～ D3 類に分けている。駿東甕が須恵器甕の模倣だとすれば、口縁部の形態は複雑なもの（D3 類）から単純なもの（D1 類）へと変化していると考えているが、富士市東平遺跡など奈良時代の集落跡から出土する駿東甕に D1 類が多いことも、こうした観測を許容するだろう。また、口径・器高にもかなりの幅があり、420 は胴部最大幅が 32cm を超しているのに対して、430 は 20 ㎝ほどである。底部には全て木葉痕がある。

D1 類　口縁部を内側に張り出し、口唇部の幅を広げている。430 は完形で、口径・器高ともに 20 ㎝ほどである。胴部に粗い斜行したハケを施し、内面には指頭あるいはヘラによるナデを施している。底部は平坦で木葉痕を残している。420・421 は口径 20 ～ 22 ㎝と大型であるが、443 は 14 ㎝ほどと小型である。また、胴部の張り出しも大きく、ほぼ球形をなすものから 441 のように胴部の張りの少ないものまでが認められる。

429 は短い口頸部が直立しており、小型で変形した印象を与える。443 もこれと良く似ている。このタイプの小型のものを D1b 類としている。

D2 類　口縁部直下に沈線を配し、口唇部を広く見せている。口唇部は外側にも張り出しているものがある。出土量は D1 類ほど多くはない。やはり口径・器高により大きさにかなりの差がある。451 は口径 25 ㎝・器高 30 ㎝と大型であり、444 は口径 18 ㎝・器高 23 ㎝ほどである。ちなみに容量を測ると前者は 11 ℓ・後者は 5.4 ℓ である。底部はやはり平坦で、木葉痕を残している。D1-b 類とした小型の甕は認められていない。

D3 類　口唇部を内外に肥厚させ・平坦な部分に沈線を配して、口唇部全体を複雑に変化させた甕で、胴部が張る器形、口径・器高による容量の差など D1 類・D2 類との間に差はない。458・464 等は底部には木葉痕を残しており、他の底部破片でも全てに木葉痕が残る。465 は口縁部の大型破片であるが、口径も大きく、他の駿東甕とはかなり様子が異なっているが、口縁部が肥厚していること、口唇部に沈線をもっていること、さらには胎土・整形など駿東甕と共通していることからここに含めた。

（７）甑

把手をもつもの（Ａ類）と把手をもたないもの（Ｂ類）とに分けたが、出土量は圧倒的に把手をもったＡ類である。

Ａ類　出土量も多く、個々の容量も大きくて、実用品だと考えられる。Ａ類の容量は５～６ ℓ のものが多いが、中には３ ℓ 以下の小型のものも含まれている。把手の形態からいくつかに分けている。

A1 類　ずんぐりした大きな把手をもつもので、口径は大きく、甑そのものの器高は高くはない。466 はほぼ完形品で容量は５ ℓ ほどである。把手は残っていなかったが、468 もやはり A1 類に属すものであろう。容量は６ ℓ ほどである。

A2 類　把手が細長く、棒状を為すもので、甑自体も背丈の高いものが多い。472 は全容を知りうる資料で、器面に縦のハケを施し、内面にもヨコハケを施している。容量は 4.7 ℓ ほどである。

A3 類　把手が幅広く、扁平なもので、把手だけが採集されており、全体を図示できるものはなかった。

A4 類　先端の尖った角状の把手をもつもので、把手も全体に小型で、甑自体も小さいらしい。474 は全体を知りうるもので外面は縦方向のハケが残り、内面にも横方向のハケが残っている。下半部の器面が剥離している。容量は 2.7 ℓ ほどである。

Ｂ類　小型で、出土量も確認されているものでは B1 類が１点、B2 類では２点が知られている。容量も小さく、実用に耐えたとは考えられない。

B1 類　481 は口径８㎝、器高 16cm ほどの大きさで、容量が 0.８ℓ程度の小型製品である。底部は全体が空いた１孔式である。器面は全体にナデ整形が行われており、器面内面は横ハケ整形の後ナデを加えている。下端部にヘラケズリがされている。小型の甑の出土は極少ない。

B2 類　やはり小型の甑で、482 は口径 12 ㎝、器高 11 ㎝ほどである。底部に焼成前に小孔を開けている。孔の位置から推定すると、底部の周辺近くに円形に開けられているが、おそらく底部全面に開けられていたものであろう。容量は 0.44ℓほどで、容量からみて、日常使いの実用品ではないだろう。良く似た底部の破片 483 ～ 485・487 が採集されている。袋井市坂尻遺跡の SD80 とした遺構から良く似た甑の底部破片が発掘されている（松井他　1995）。

第３節　須恵器

須恵器は全体でポリコンテナおよそ 45 箱が出土した。土師器と同様、その大半が包含層からの出土で、遺構からまとまって出土したものは少ない。

１　須恵器の器種分類

寺家前遺跡で出土した須恵器は蓋坏・高坏・瑞・盌・提瓶・平瓶・横瓶・壺類・陶臼・甕・甑である。全体の形状を復元しうるものは少ないが、可能な限り器種分類を行い、それぞれの器種について形態・技法などの特徴を記す。第３表に示したように、蓋坏が圧倒的に多く、全体の 56%を占めるほどである。また、窯跡から出土するような熔着した個体や焼き歪みの著しい個体が多数確認できた。

第３表　出土須恵器器種組成表

器種		個体数
坏蓋		121
坏身		171
蓋坏		12
高坏蓋		8
高坏		66
壷蓋		18
壷	短頸壷	15
	長頸壷	2
	広口壷	2
	小型壷	3
	脚付壷	11
	その他	13
瑞		8
盌		3
脚付盌		1
陶臼		3
瓶類	提瓶	18
	平瓶	2
	横瓶	8
	不明	7
鉢？		2
甑		3
甕		21
合計		516

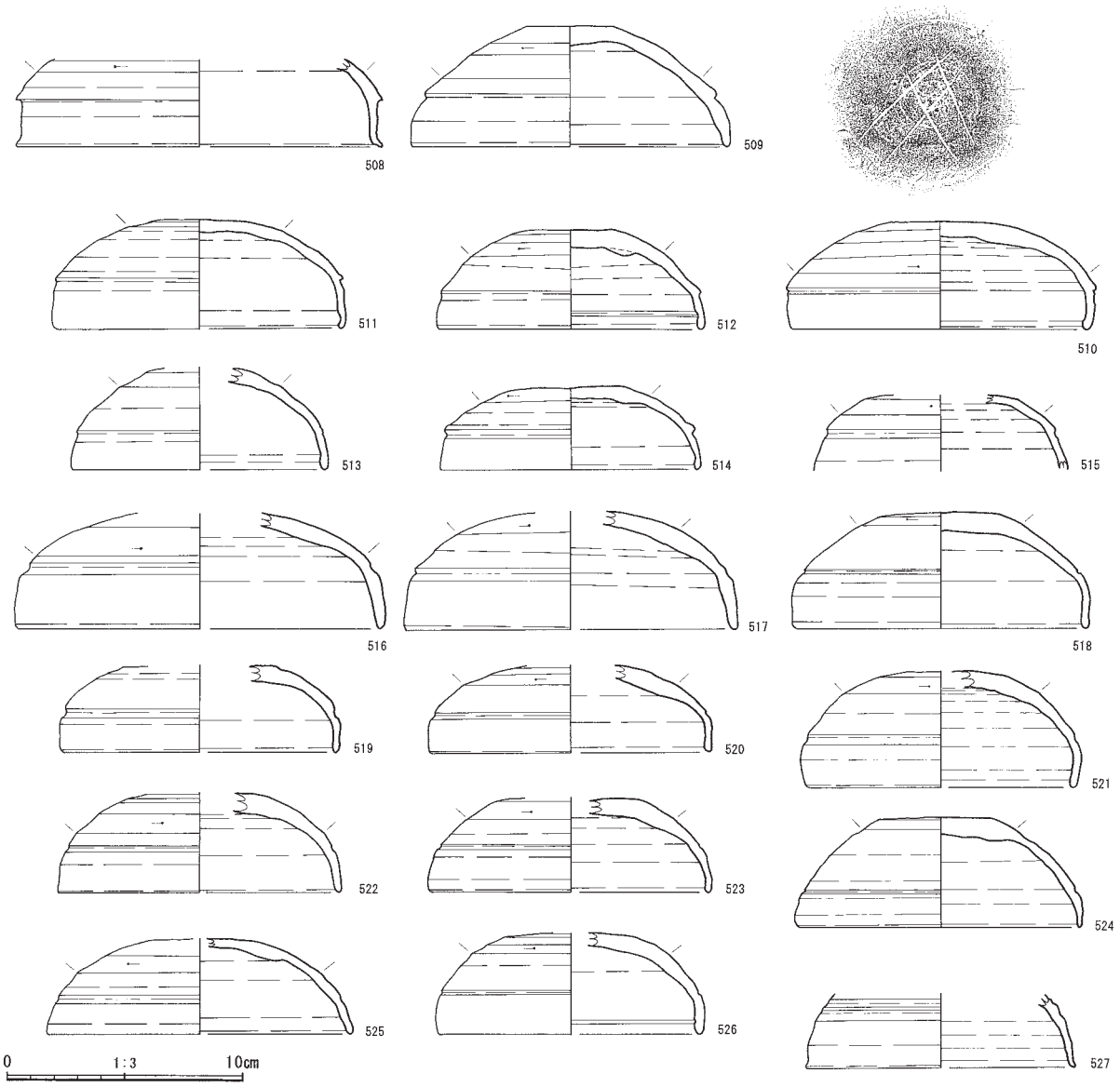
（１）坏蓋

口縁部に立ち上がりをもつ身とセットになる、いわゆる「坏Ｈ」である。天井部と口縁部の境の形状から３つに分類できる。突帯状の稜で区画するもの（Ａ類）、沈線をめぐらせるもの（Ｂ類）、特に明確な区画を設けないもの（Ｃ類）である。量としてはＡ類が少なく、Ｃ類が半数以上を占める。

A1 類（第 104 図 508・509）　工具を口縁部側から当てて突出させ、鋭い稜を作り出す。口縁端部は面をもつものと、丸く仕上げるものがある。A2 類と比べると口径が大きい。天井部の境近くまでの広い範囲に回転ヘラケズリを行っている。

A2 類（第 104 図 510 ～ 515）　A1 類と同様に稜を突出させるが、A1 類ほどの鋭さはない。沈線を施した後、口縁部側の上端をナデて角を抑えることで、突帯状の稜を強調させる。口径は 10 ㎝台のものと 12 ㎝以上のものがある。前者は天井部の 1/3 ほど、後者は口縁部との境目付近までを回転ヘラケズリで調整する。

B1 類（第 104 図 516 ～ 523）　天井部と口縁部の境付近で屈曲し、その部分に下方から、あるいは水平に工具を当てて沈線を施す。口径の分布範囲は 11.4 ～ 15.2 ㎝と広



第 104 図　出土須恵器実測図１（坏蓋Ａ・Ｂ類）

いが、大きくは 11.5 ㎝前後と 13.0 ㎝前後の２グループに分かれるようである。

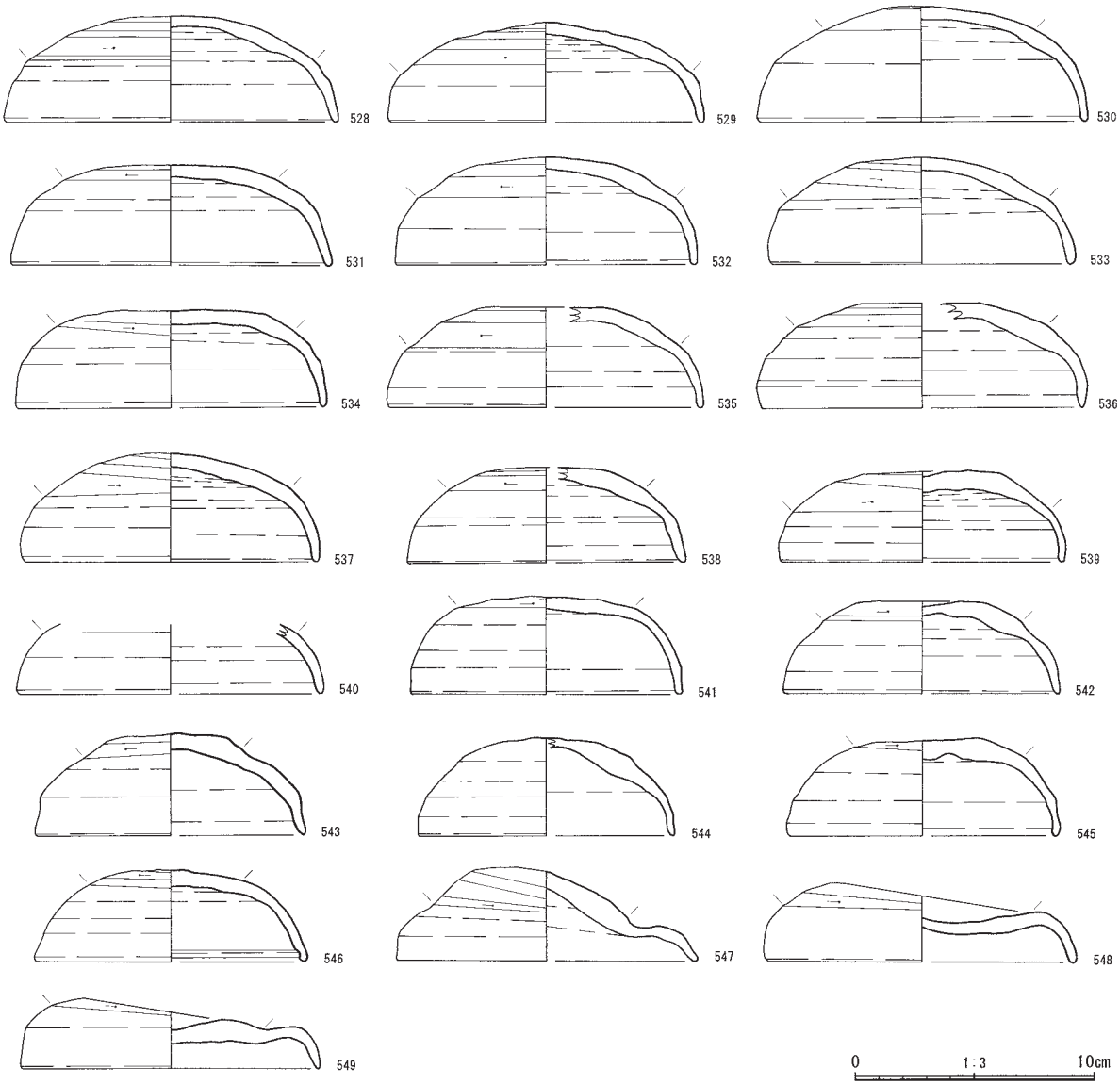
B2 類（第 104 図 **524 ～ 527**）　天井部と口縁部を沈線で区画するが、屈曲しないか、あるいはしてもわずかに角度を変える程度である。口縁端部は丸く仕上げるが、内面に沈線をもつものともたないものがある。口径は 10.8 ～ 12.4 ㎝に分布し、12 ㎝台と 11 ㎝前後に分かれる。

C1 類（第 105 図 **528 ～ 543･547 ～ 549**）　沈線などによる明瞭な区画はないものの、境付近で屈曲する。口径と比べて器高は低めで、扁平な印象を受ける。口縁部は先細り、もしくは丸く仕上げる。外面は天井部の 2/3 ほどに回転ヘラケズリを施す。口径は 10.6 ～ 13.75 ㎝に分布する。

C2 類（第 105 図 **544 ～ 546**）　器高が高く、全体に丸みを帯びる。天井部と口縁部の区画はない。口縁端部は先細りするものと、丸く仕上げて内面に１条の沈線をめぐらせるものがある。天井部外面は 1/3 程度の範囲に回転ヘラケズリを行うが、ヘラキリ後不調整のものも認められる。口径は 9.4 ～ 11.1 ㎝にまとまる。

（２）坏身

口縁部の立ち上がりの高さと形状から２つに分類できる。



第 105 図　出土須恵器実測図２（坏蓋Ｃ類）

Ａ類（第 106 図・第 107 図 578 ～ 585）　立ち上がり高が１cm前後で、垂直気味に立ち上がる。最大径と器高の関係を見ると、最大径は 12.0 ～ 15.9 cmで、13 cm後半台が最も多い。また、13 cm後半～ 14 cm前半台のものと 12 cm前後のものとに分かれる。

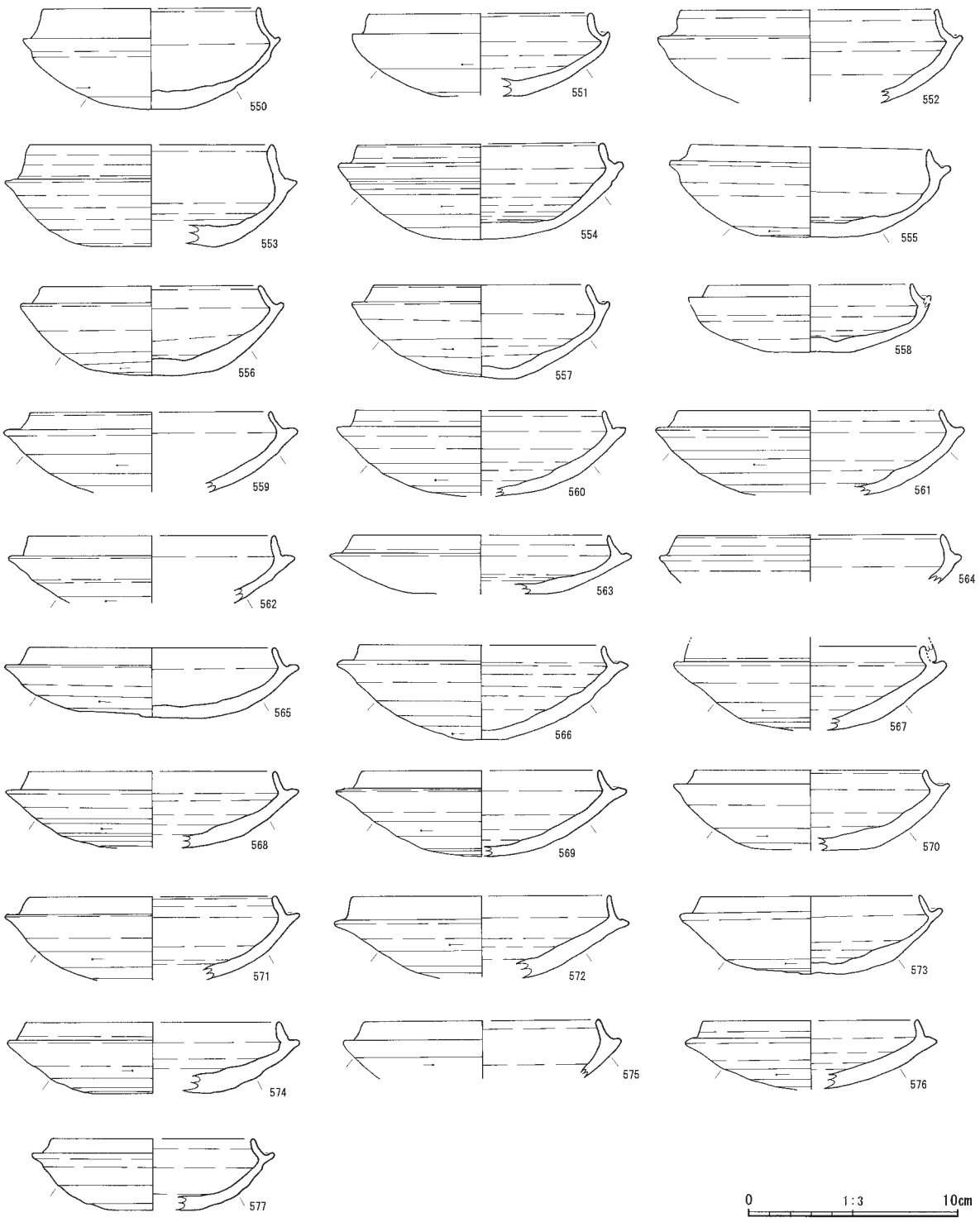
Ｂ類（第 107 図 586 ～ 594）　立ち上がりが 0.5 cm前後で、短く内傾する。底部は深さのあるものが多い。最大径は 10.0 ～ 14.9 cmと分布範囲が広いが、大きくは 12 cmを境に 12 cm以下と、12 cm以上のものとに分かれるようである。

（３）高坏

坏部は有蓋（Ａ類）と無蓋（Ｂ類）がある。

Ａ類（第 109 図 628 ～ 630・632）　蓋はいずれもボタン状あるいは宝珠状の摘みをもつ。蓋の形状は坏蓋Ｂ類と同じで、天井部と口縁部の境を沈線で区画する。口径は 13.2 ～ 14.7 cmで、14.5 cm前後に集中している。坏部は坏身Ａ類と同様の形状を呈する。最大径は 14.6 cm～ 16.2 cmに分布する。

Ｂ類（第 109 図 631・633）　受部をもたず、底部からほぼ垂直に口縁部が立ち上がる。外面に施文するものとしないものとがある。他に、いわゆる半球形と呼ばれる底部から体部にかけて丸みを帯びた個



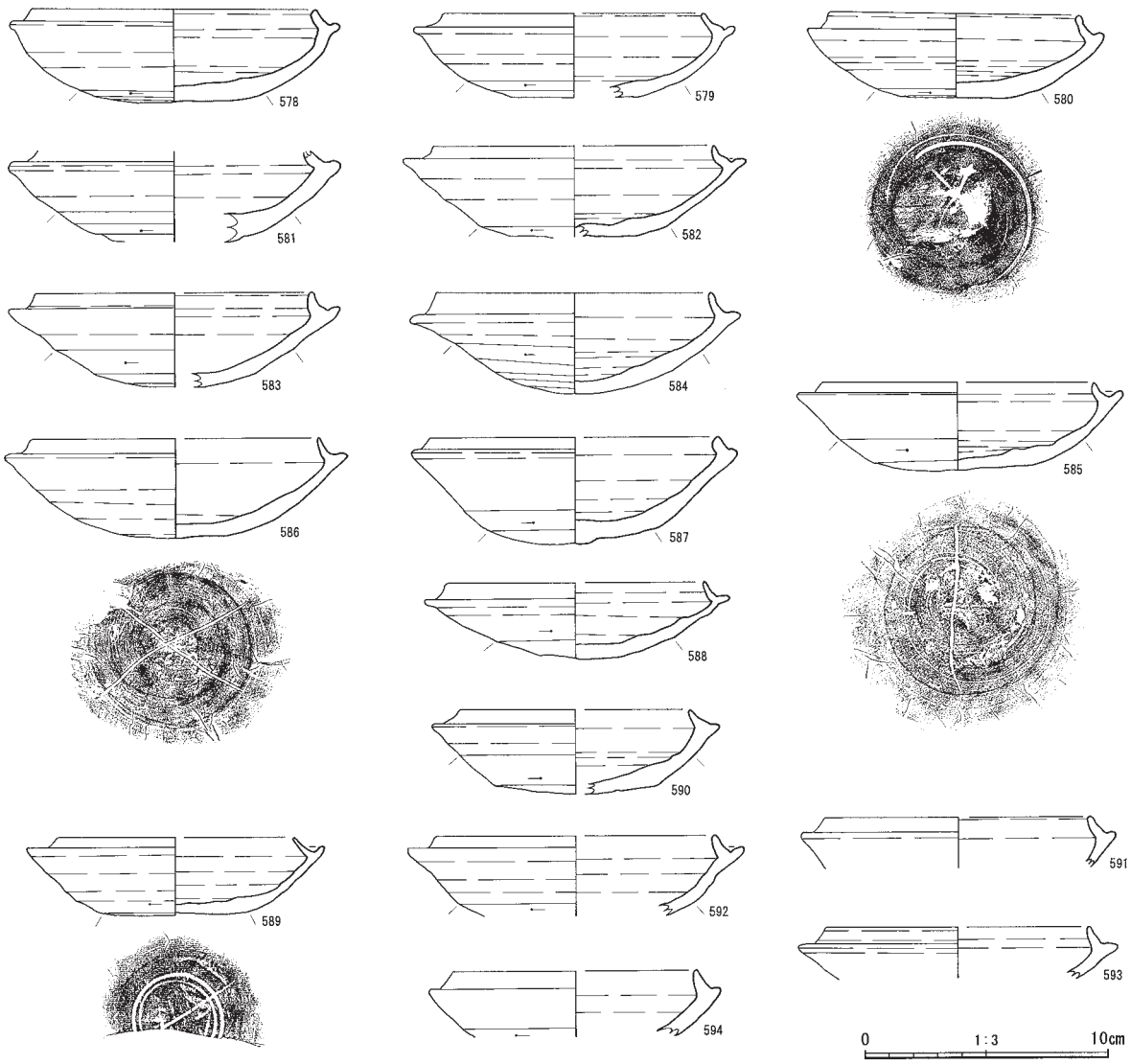
第 106 図　出土須恵器実測図３（坏身Ａ類）

体が１点ある（第 71 図 187）。

残念ながら坏部から脚部まで全体が残存する個体がないため、坏部と脚部の関係は不明である。よって脚部は別に分類を行う。

脚部は長脚（Ｃ類）、短脚（Ｄ類）がある。

C1 類（第 110 図 634 ～ 646）　脚部高の中央に２条の沈線を巡らせて上・下２段に区画する。それぞれに長方形の透かしを開けるものと、透かしをもたないものがある。



第 107 図　出土須恵器実測図４（坏身Ａ・Ｂ類）

C2 類（第 110 図 **647・648**）　脚部に沈線を施さず、１段となる。透かしはもたない。

Ｃ類はいずれも脚端部は外面が直立し、内面をナデでくぼませている。

Ｄ類（第 110 図 **646 ～ 650**）　脚部高は６㎝弱である。Ｃ類と同様に中位に沈線を巡らせるものと、沈線をもたないものがある。透かしをもつ個体は認められない。頸部の太さはＣ類とほぼ同じで、脚端部に向かってハの字状に大きく広がる。

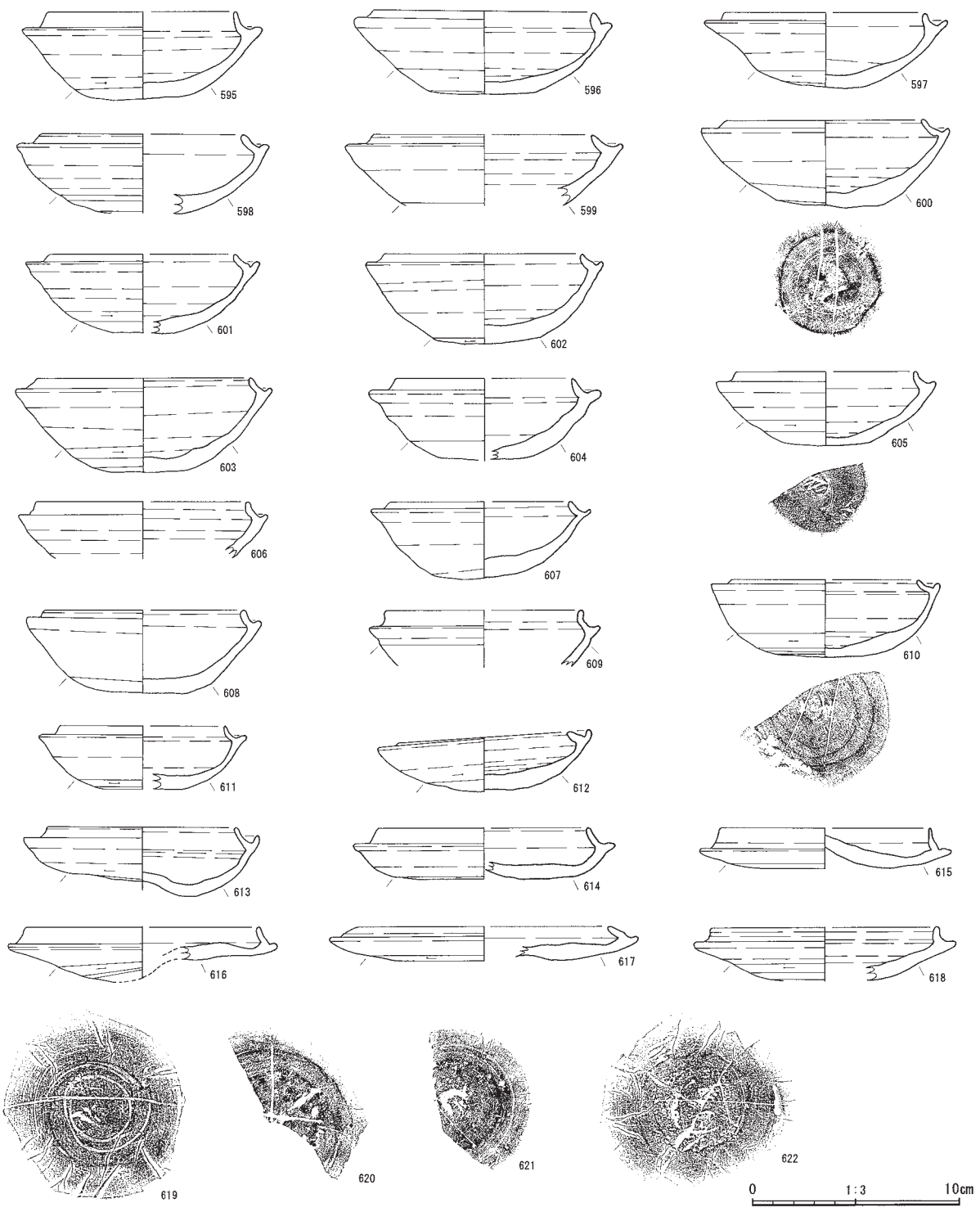
（４）瓶（第 111 図 **651・652**）

頸部は細く、口縁部との境に明瞭な段を設ける。段の上部は沈線あるいは強くくぼませる。肩部と体部の境も２条の沈線で区画するものもある。底部は回転ヘラケズリを施す。最大径は肩部にあり、細長い頸部をもつようである。体部を１方向から穿孔し、注口部を作り出している。

（５）盌

坏身のような立ち上がりをもたず、底部が丸底のものが一定量出土した。形状も様々であるが、椀に近い形状を呈する小型製品を一括して盌として分類した。

Ａ類（第 111 図 **653 ～ 654**）　体部から口縁部にかけて垂直あるいはやや内傾して立ち上がる。底部は回転ヘラケズリによって平坦気味となる。



第 108 図　出土須恵器実測図５（坏身Ｂ類）

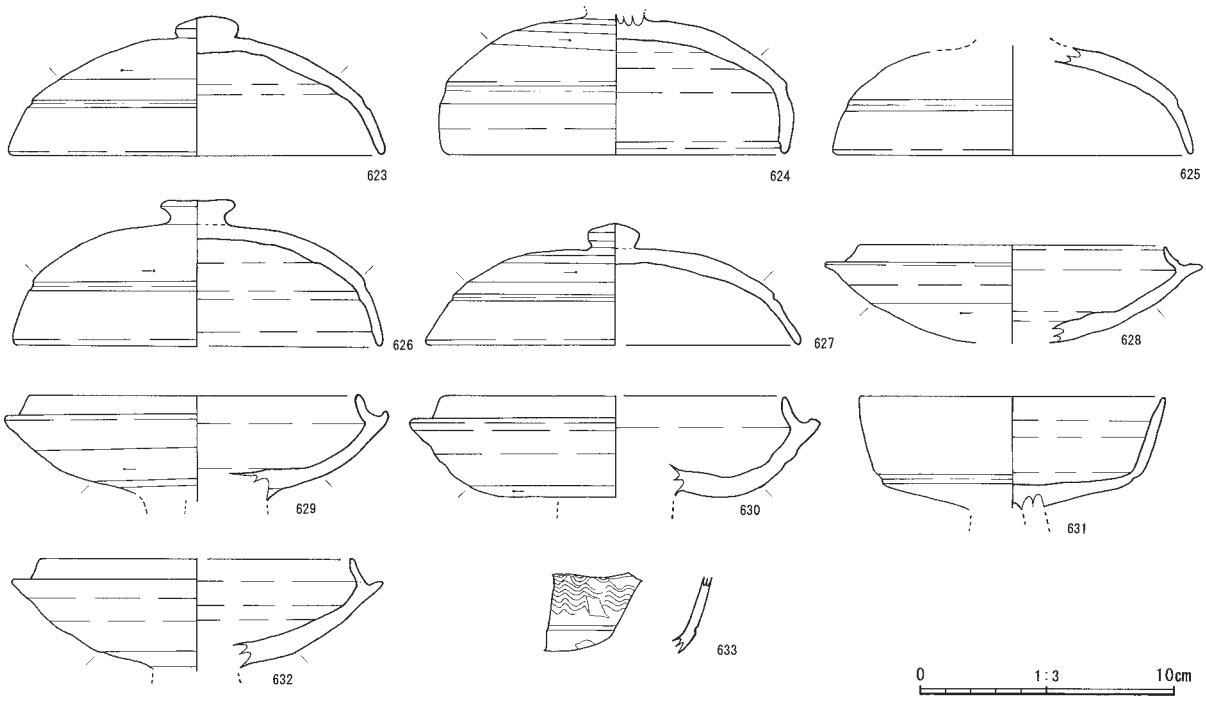
Ｂ類（第 111 図 655 ～ 656）　体部上半から口縁部にかけて強めのナデによってくぼむ。内面も外面の形状に沿って屈曲部分をもつ。全体的には丸みを帯びた形状を呈する。

Ｃ類（第 111 図 657 ～ 658）　口縁部が直線的に開く。

他に、盌に伴うと思われる脚部がある。

（６）陶臼（第 111 図 661・662）

底部はやや丸みを帯びた平底で、円盤状に突出する。全体的に器壁は厚く、体部から口縁部はハの字



第 109 図　出土須恵器実測図６（高坏）

状に立ち上がる。器高の 2/3 ほど口縁部寄りの位置に沈線を施す。

（７）壺蓋

壺蓋は返りをもつA類と、もたないB類がある。

Ａ類（第 112 図 **663** ～ **667**）　短く、内傾した返りをもつ。受け部は長く、ほぼ水平に引き出す。天井部に摘みをもつもの（**664** ～ **666**）と、もたないもの（**663**）がある。

Ｂ類（第 112 図 **668**）　器高がおよそ５㎝以上と高く、全体として筒型に近い形状を呈する。

（８）壺類

短頸壺（A類）・長頸壺（B類）があり、さらに脚の有無で分けられる。

Ａ類（第 112 図 **669** ～ **675**）　短く直立する頸部をもつ。口縁端部は丸く仕上げ、口頸部の中位に沈線をもつものもある。肩部で最大径をとる。

Ｂ類（第 112 図 **673**）　口頸部が長く、やや外反しながら立ち上がる。ただし、寺家前遺跡では全体が残存する個体が出土していないため、口頸部の高さや形態は不明である。

（９）提瓶

口縁部の形態から３類に分類できる。

Ａ類（第 113 図 **680・681**）　口縁部が外反して開く。口縁端部に弱い面をもち、さらに外側にわずかに作り出した肥厚面の下端に２条の沈線を施す。

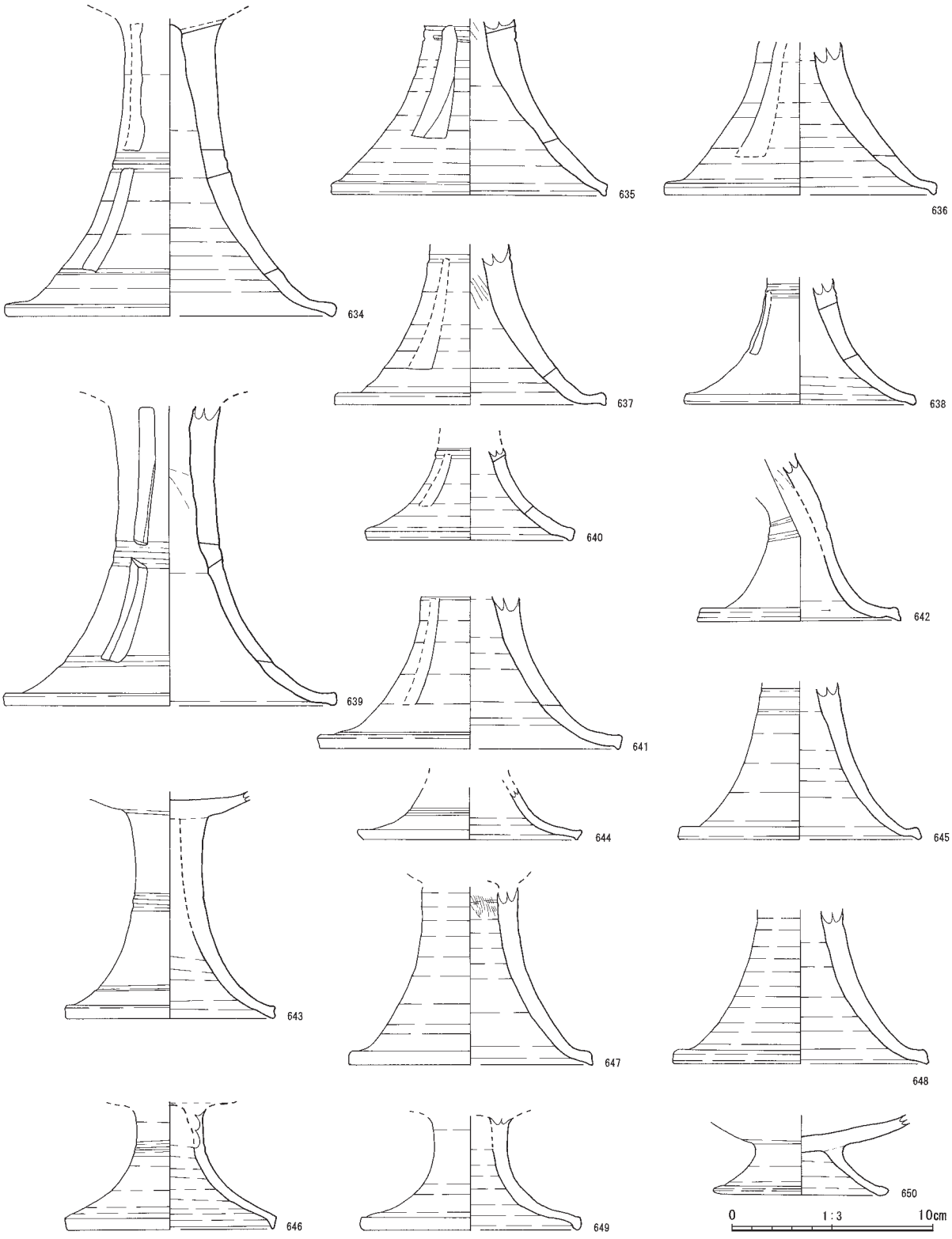
Ｂ類（第 113 図 **682・683・686**）　玉縁状の口縁部をもつ。頸部から口縁部にかけては外反するが、開きは弱い。

Ｃ類（第 113 図 **685**）　頸部から内湾して立ち上がり、口頸部の中位に１条ないし２条の沈線を有する。口縁端部は丸く仕上げるのみである。

さらに把手の形状が、ボタン状のもの（**681**）と、鉤状のもの（**685・686**）とがある。

(10) 平瓶（第 114 図 **687・688**）

口縁部は外反して開き、底部は平底となる。肩部で最大径をとるが、底径との法量差は少なく、全体

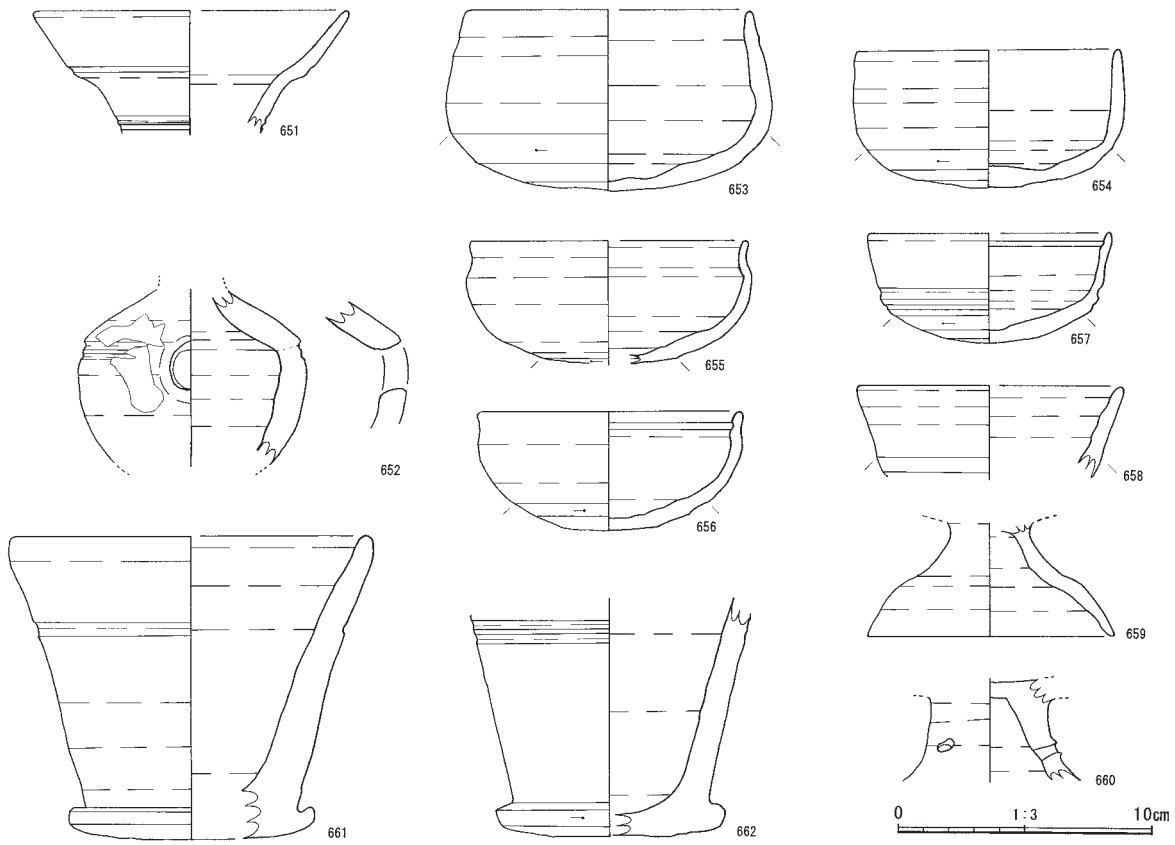


第 110 図　出土須恵器実測図７（高坏）

として箱形に近い形状を呈する。外面底部は手持ちのヘラケズリを施す。体部にはタタキ目が残る。

(11) 横瓶（第 115・116 図）

口縁端部は面をもち、外反気味に立ち上がる。体部外面は閉塞部分を除いてタタキを施した後に中央に縦方向の沈線を２条巡らせる。



第 111 図　出土須恵器実測図８（碗・盌・陶臼）

(12) 甕

口縁部の形態から、３類に分けられる。

Ａ類（第 117 図 692 ～ 693・697・700）　口縁端部を肥厚させて外面側に張り出させる。さらに、下方から工具を当てて突帯状に作り出すものと、断面が三角形になるものがある。

Ｂ類（第 117 図 696・698・699）　口縁部の外側に面を設ける。外面に一切の装飾は認められない。

Ｃ類（第 112 図 679）　口縁端部に内傾した面をつくり、口頸部の中位に２条の沈線をもつ。

(13) 甑（第 119 図 701 ～ 703）

把手部分の断面形は丸形に近く、ナデ整形によって仕上げている。内面には当て具痕が残る。底部は残存しないため、１孔式であるか多孔式であるかは不明である。

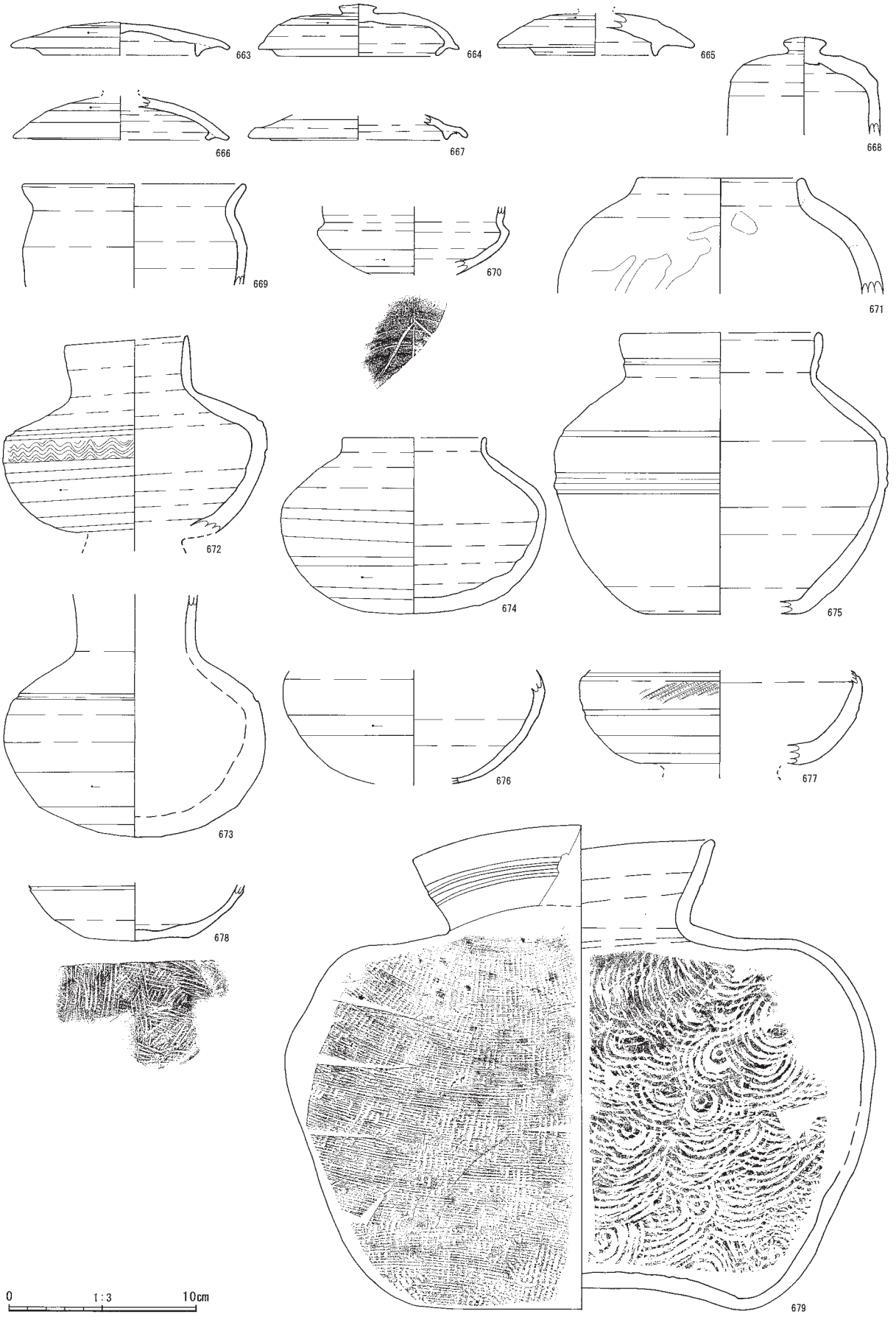
(14) 熔着資料（第 119 図 704 ～ 707）

先に触れたように、寺家前遺跡では焼成中に別個体と熔着したもの、焼き歪みが著しいもの、あるいは焼成不良により器面が脆弱・剥離したものが多数確認できた。その割合はおよそ 17%にものぼる。多少の歪みにとどまらず、通常の使用にすら耐えられないと思われるほど原形を留めない個体すら見受けられる。

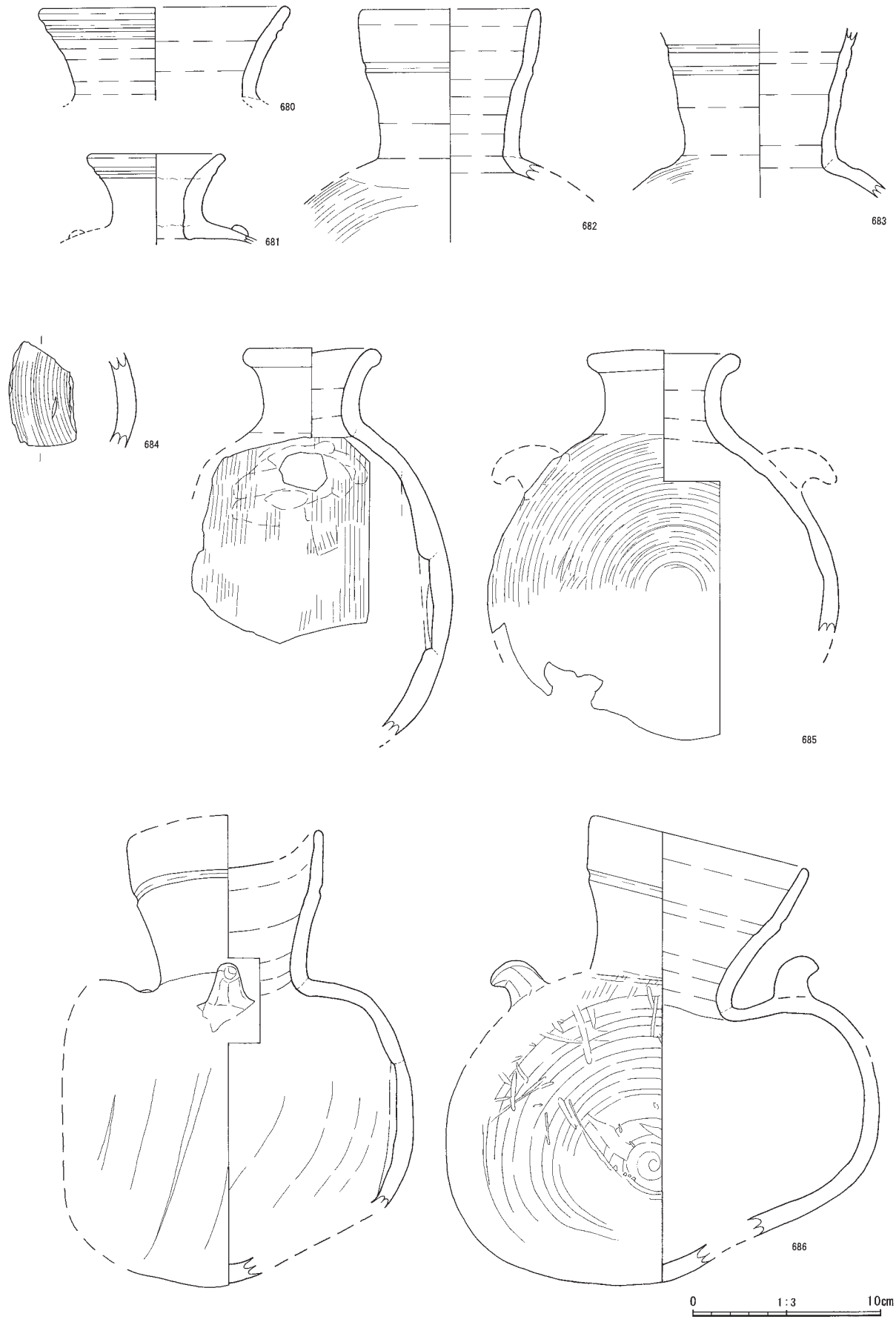
２　遺構出土の須恵器

（１）SR9526 出土の須恵器（第 57・58 図）

土師器と同様に、最もまとまった量が出土したのは自然流路 SR9526 のみである。この遺構の詳細は第２章第２節（１）、および本章第２節－２を参照されたい。数が多いとはいえ、個体の識別が可能である点数はおよそ 30 点で、土師器の出土量のわずか 25%に満たない。全体の傾向としては、土師器



第 112 図　出土須恵器実測図９（壷・甕）

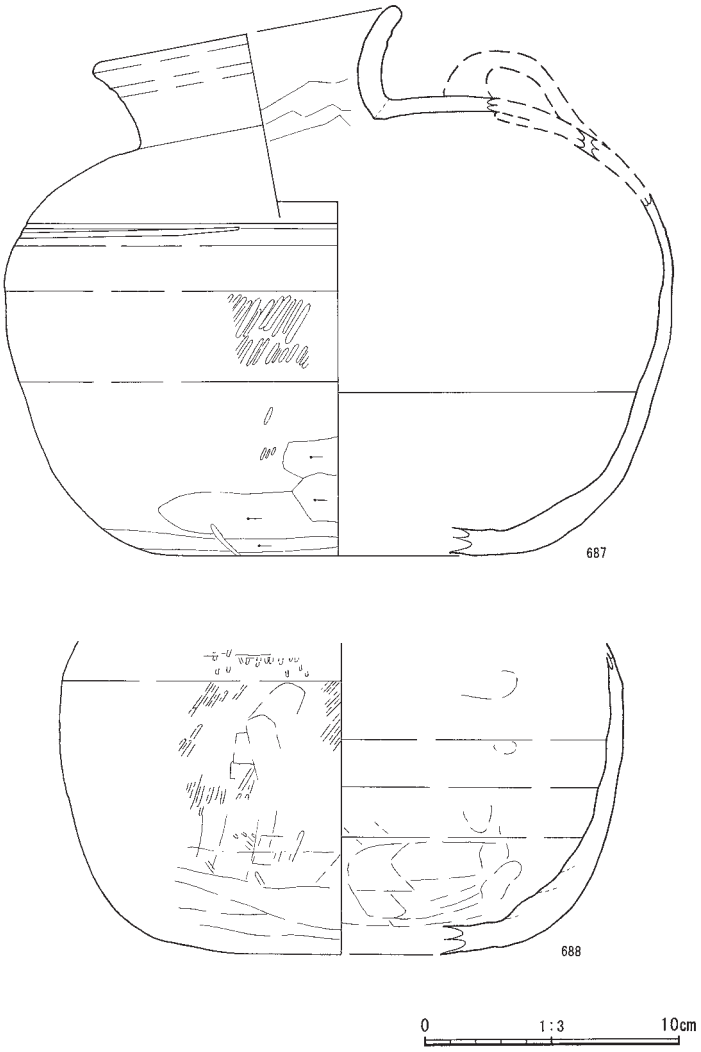


第 113 図　出土須恵器実測図 10（提瓶）

の器種組成と同様に坏類が最も多いが57％程度で、土師器坏類の79％と比較すると極端に多いとはいえない。また、土師器の器種組成と大きく異なる点は甕の割合である。体部破片は出土しているものの遺跡全体の割合と比べても少なく、一個体として認識できるものはなかった。

坏蓋はA2類（65）とB2類（66～69）・C1類（62～65）・C2類（70・71）がある。65は回転ヘラケズリの範囲が天井部の1/3ほどと狭く、内面は口縁端部の手前に沈線を有する。66・67の口縁部も同様の形状である。器高が高く、天井部から口縁部にかけて丸みを帯びる。62～64は口縁部が直線的に開き、全体として扁平な印象を受ける。口縁端部は先細りする。70・71はB2類と同様に丸みを帯びた形状を呈する。

坏身はA類（72～77）が多く見られる。72～75は受部を水平に長く引き出す。歪みを考慮しても、口径と器高が4:1ほどと扁平な器形である。76・77は底部が丸みを帯びており、同じA類の個体と比べると器高が深い。受部は上方に由良く引き出す。B類（78）は器高が深く、平底気味である。A類と比べると全体的に器壁が厚手で、特に底部は１㎝ほどの厚みをもつ。立ち上がりは短く内傾する。受部は工具により凹ませ、短く引き上げる。



第114図　出土須恵器実測図11（平瓶）

高坏はA類がある。80は坏蓋C1類と同様の器形で、天井部にボタン状の摘みが付く。81は坏身A類の坏部をもち、口縁端部は先細りする。底部内面には当て具痕が見られる。脚部と接合する際に圧着するために当て具を用いた痕跡と思われる。脚部にはおそらく３方向に長方形透かしが入る。79は口縁部を欠くため分類は不明である。丸みを帯びた底部はヘラナデを施し、脚部には透かしの痕跡が確認できるが、残存部分を見るとやや形の崩れた方形透かしのようである。

82は瓶の口頸部破片である。頸部径は3.8㎝ほどで、外反して開く。口縁部と頸部の境を強く屈曲させて段を設け、さらに段の上部をナデで凹ませている。

83は脚付盆の脚である。脚部高の中位にゆるやかな段をもち、裾に向かってやや内湾しながら広がる。透かしは一切認められない。

84は壷蓋である。短い返りをもち、受け部をやや下方に引き延ばす。天井部には宝珠状の摘みが付けられ、摘みの重さ分、天井部が焼き沈んでいる。

壷類はA類のみである（86･89）。86はなで肩で、おそらく体部中位辺りで最大径をとると推定される。口縁部は短く開く。時期・器種ともに検討を要する資料である。85と88は頸部より上が欠損する。85

第 115 図　出土須恵器実測図 12（横瓶）

は最大径が肩部にあり、１条の沈線を巡らせる。最大径と比して頸部径が細いため、長頸壷の可能性が考えられる。88 はやはり肩部で最大径をとるが、張りは強くない。肩部と体部中位それぞれを沈線で区画し、肩部の沈線より下に櫛描斜線文を施す。89 は平底の壷で、肩部～体部にかけては 88 と良く似た形状を呈する。但し、沈線以外の施文はもたない。口縁部は内湾する。

87 は体部に残る痕跡からＢ類の提瓶と思われる。把手の周辺は丁寧にナデつけが行われている。口縁部は玉縁状を呈する。

90 は横瓶の体部破片である。外面はタタキを施す。閉塞部のみナデの後に放射状の、それ以外の部分は斜位のタタキ目が見られる。

３　包含層出土の須恵器

（１）坏蓋

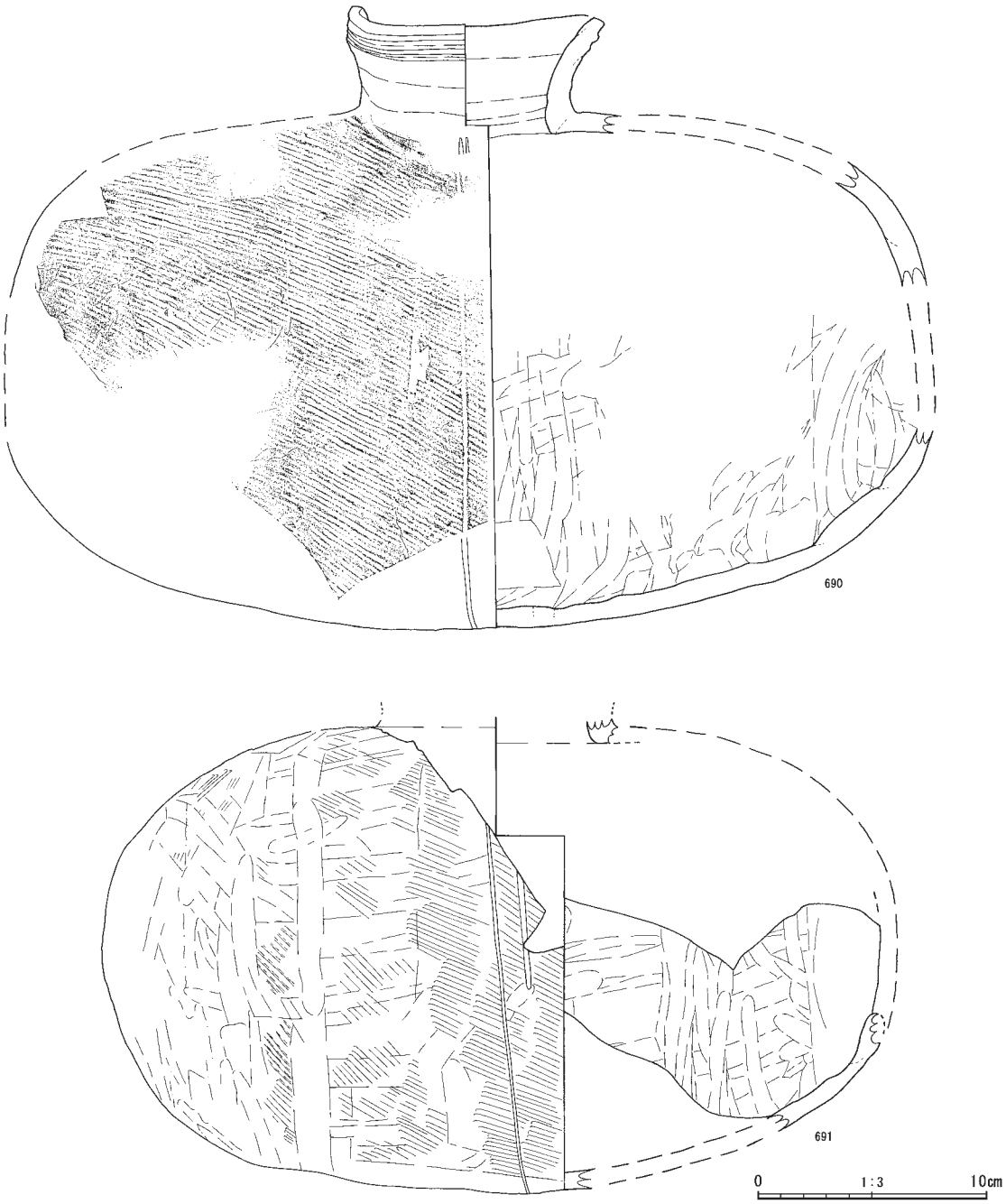
A1 類　508 は稜を鋭く作りだし、口縁部はわずかに外反するものの、ほぼ垂直である。口縁端部は内傾面に沈線をめぐらせる。非常に丁寧な作りである。509 は全体的に丸みを帯びた器形に、工具によって稜を尖らせる。

A2 類　511 ～ 513 の口縁部には内面に沈線を巡らせる。513 は天井部の中心はヘラナデで、その外周に回転ヘラケズリを施す。510・514 は口縁部の端部手前に強めのナデを行い凹ませている。510 の外面は沈線に近い辺りまで広く回転ヘラケズリを行う。514 は内外面ともに平滑に仕上げているが、頂部にはヘラキリの際の粘土の高まりが消しきれずに残る。

B1 類　519 は残存部分では外面の回転ヘラケズリの痕跡が認められず、ヘラキリ後不調整あるいは 1/3 にも満たない非常に狭い範囲のみヘラケズリを行ったと思われる。

B2 類　524 は天井部が平坦気味で、厚みは最大で１㎝弱ほどある。拓本で図示していないが、525 の天井部にはヘラ記号（「＃」）が残る。527 は外面に沈線が２本認められ、またその位置も残存部から推定される器高に対して高い印象を受ける。したがって別器種の可能性も考えられる。

C1 類　542・543 は天井部の下位にくぼみがあり、天井部が突出したような器形である。542 は回転ヘラケズリを施すものの非常に粗雑で、543 では頂部は不調整のままで、その外周に回転ヘラケズリを行っている。547 ～ 549 は焼き歪みが著しく、ほぼ原形を保っていないが、口縁部が直線的に立ち上が



第 116 図　出土須恵器実測図 13（横瓶）

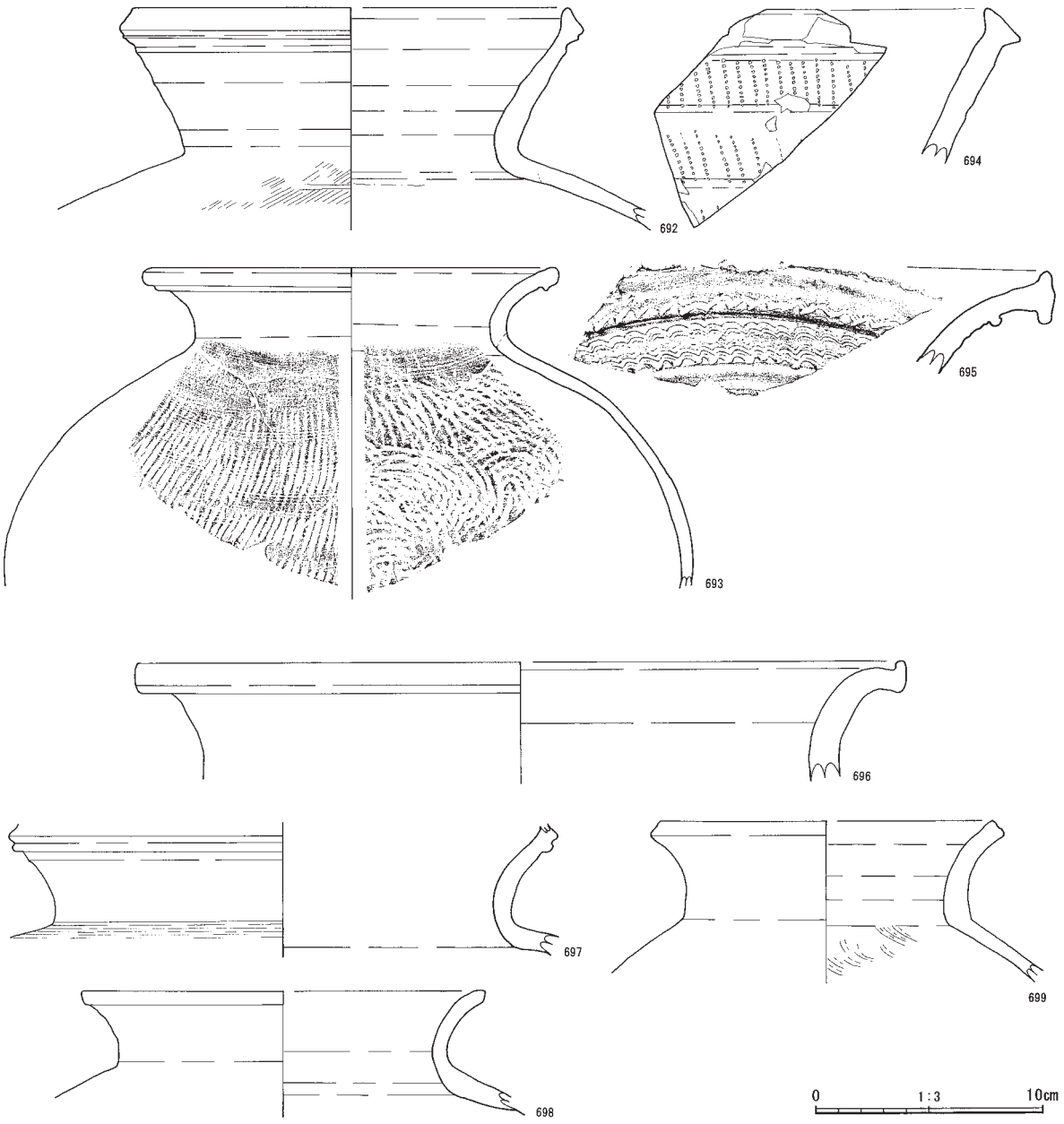
るため C1 類に分類した。

C2 類　544 の天井部はヘラキリの後に回転ヘラケズリの調整行わず、軽くなでる程度である。546 は口縁部の内面に沈線を有する。

（２）坏身

Ａ類　550 ～ 558 は器高が深く、底部は丸みを帯びた形状である。受部は短く上方へ引き出す。非常に丁寧な作りで、内面まで平滑に仕上げている。550 ～ 552 は口縁部の立ち上がりが特に薄手で、直立する。553 は底部に回転ヘラケズリを行わず、おそらくヘラケズリの後にさらに回転ナデ調整を施したと思われる。555 の底部内面には当て具痕をナデ消したような痕跡が見られる。

Ｂ類　612 は立ち上がり高がわずか 0.3 ㎝弱と低く内傾し、受部を上方に強く引き出す。そのため口



第 117 図　出土須恵器実測図 14（甕）

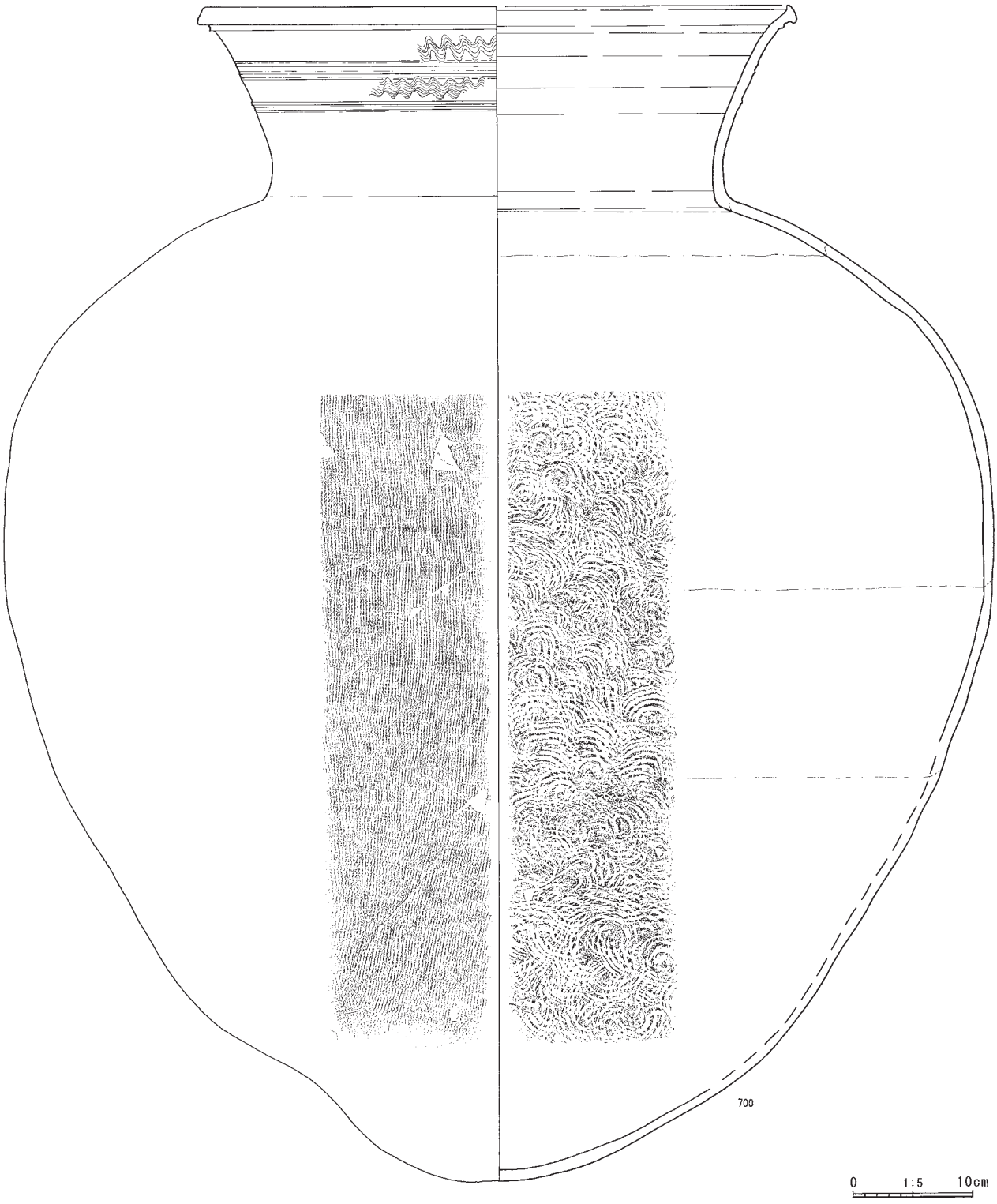
縁部と受部がほぼ同じ高さである。外面の中心はヘラキリ後不調整で、その外周のみ回転ヘラケズリを施している。613 ～ 618 は焼き歪みが著しい。

（３）高坏

Ａ類　623・627 は宝珠状の、626 は中央を凹ませたボタン状の摘みが付く。624 は口縁端部に沈線を有する。627 の口縁部は急角度で開くが、これは焼き歪みによるもので、本来は 623 や 626 と同様の器形であろう。

Ｂ類　631 は底部と口縁部との境は強く屈曲させ、屈曲部分に下から工具を当てて沈線を施す。内面は非常に平滑で、平坦な底部から口縁部が直立する。633 は幾分屈曲が弱いが、やはり口縁部が直立する。沈線の上部に波状文をもつ。

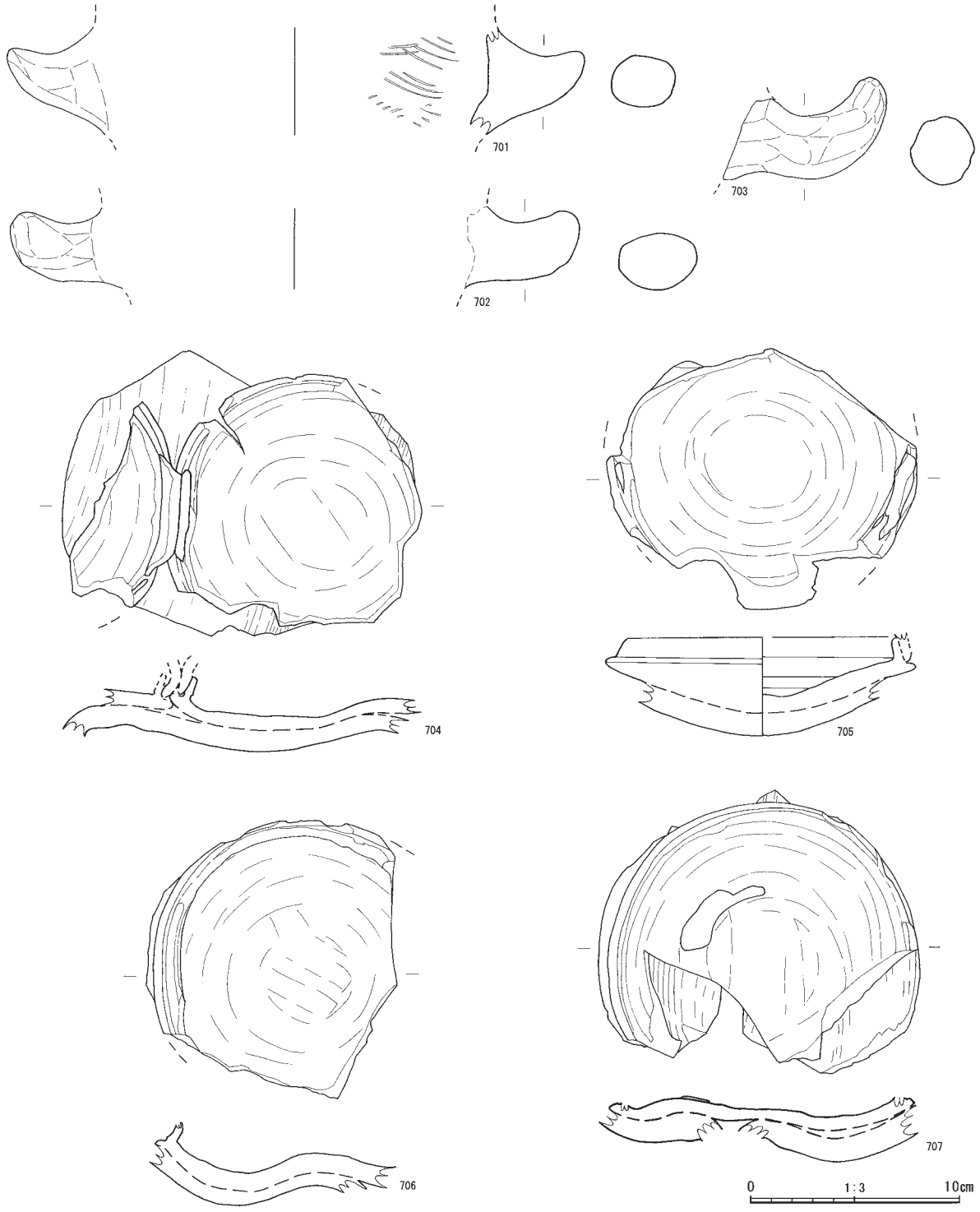
C1 類　634 ～ 641 は上下段に３方向の方形透かしをもつ。透かしはいずれも器壁を貫通しており、切り残しやスリット状のものは見られない。634・639 は下段の透かしの下位にも沈線を施す。太めの基



第 118 図　出土須恵器実測図 15（甕）

部から裾に向かってハの字状に大きく開き、端部の手前で内外面ともにナデで強く凹ませ、端部に面を作る。２点とも灰白色を呈し、胎土はやや砂質である。接合はしなかったが、坏部 632 と胎土・色調ともに似ており、有蓋高坏（A類）に伴う脚であろう。642 ～ 645 は透かしをもたない。642 は焼き歪みによって脚の途中から大きく曲がっている。また、端面がナデで凹む。

C2 類　647・648 は一切の加飾がなく、脚の高さも９㎝弱と低めである。また、C1 類と比べると裾の



第 119 図　出土須恵器実測図 16（甑・熔着資料）

開きも小さい。

D類　646 は脚部高の 2/3 ほどの位置に２条の沈線を巡らせる。裾部は下方に強く折れる。649 は沈線をもたない１段の脚で、端部は丸く仕上げる。650 は大きく広がる坏部をもち、脚部高は 2.4 ㎝ほどとD類の他の２点と比べても極端に低い。脚端部は外面側に丸く肥厚する。

（４）甕

651 は口頸部のみの破片である。頸部に２条の沈線をもつ。652 は体部から底部にかけて高さのある、

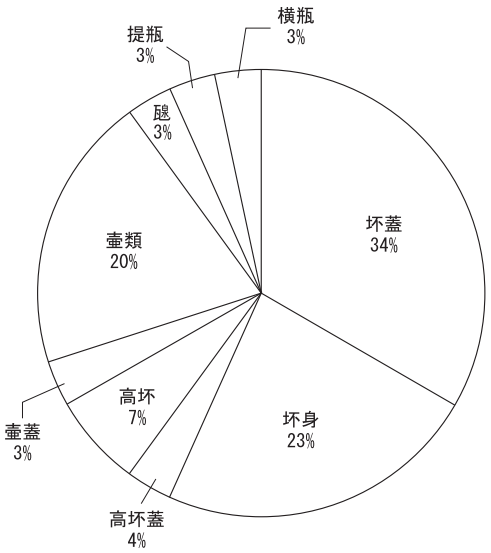
球体に近い形状を呈している。注口部は円形に穿孔するのみである。沈線を境にして体部と頸部を接合した痕跡が残る。

（５）盌

Ａ類　653 は底部に近い位置で最大径をとり、口縁部に向かってすぼまる。内面は最大径の辺りで内湾し、口縁部に向かって直線的に引き上げる。654 は口縁部がほぼ垂直に立ち上がる。

Ｂ類　655 はくぼみの下位で強く屈曲し、わずかにすぼまる形で口縁部を引き出す。656 ではくぼみは弱く、口縁部内面の内湾した部分に沈線を巡らせる。体部は丸みを帯びるものの、回転ヘラケズリによって底部はやや平坦気味である。

Ｃ類　657 は坏蓋 B2 類を天地逆にしたような形状で、底部と口縁部の境に２条の沈線を設ける。また口縁端部の内面にも沈線が巡る。658 は底部の形状が不明だが、口縁部が直立する器形と口径から判断して盌に分類した。他の個体と比べると器壁は厚めで、内面は回転ナデによる凹凸が強く残る。



第 120 図　SR9526 出土須恵器器種組成図

660 は脚付盌と思われる脚部である。ハの字気味に広がり、おそらく３箇所に円形透かしをもつ。

（６）陶臼

661 の内面は使用により細かな剥離痕が見られる。

（７）壺蓋

Ａ類　663 は天井部を回転ヘラケズリを丁寧に施し、平坦に仕上げる。器高が低く、受け部を長く引き伸ばしており、長頸壺の蓋であろう。664 は天井部に宝珠状の摘みをもつ。

Ｂ類　668 は天井部に宝珠状の摘みを有する。全体の形状から短頸壺に伴うものと考えられる。

（８）壺類

Ａ類　671 は非常に頸が短く、肩の張りも弱い。胎土が他の個体と比べると異質な点からも、より新しい時代の製品かもしれない。672 は口頸部が３㎝弱と、幾分高めである。肩部に沈線を巡らせ、その下に波状文を施す。体部から底部にかけては丁寧に回転ヘラケズリで調整する。脚の接合痕が残る。674 は全体的に丸みを帯びた形状で、最大径の位置は低くく張りも弱い。669 は頸部と体部径の差が小さく、口縁部も大きく広がるため、他器種の可能性がある。670 は体部の張りが強い点から壺に分類したが、盌Ｃ類の可能性もある。底部には４方向に伸びるヘラ記号が認められる。

Ｂ類　673 は肩部に１条の沈線をもち、頸部から口縁部にかけてはほぼ垂直に立ち上がる。底部は丸底で、回転ヘラケズリを施す。

676 ～ 678 は体部のみのため、どちらに属するかは不明である。677 は肩部と体部に沈線を巡らせ、その間を櫛状工具による刺突文で充填する。678 の底部は平坦気味で、体部に１条の沈線を有する。底部に弱いナデを施した後に櫛状の工具で格子状の文様をつけている。

（９）提瓶

Ａ類　680 は口縁部の開きから瓶類の一部と思われる。平瓶あるいは横瓶に伴うものであろうか。681 は肩部に小型のボタン状把手をもつ。残存部から推定して、肩の張った丸みのある器形のようである。

Ｃ類　682 は焼き歪みが著しく、頸部から体部にかけての破片も小破片ながら残存するが、焼成中に破損した後に歪んだために部分的にしか接合できない。686 もやはり大きく焼き歪んでいる。体部は同心円カキ目を施すが、施文は弱めで工具が当たった傷も多く残っており、全体的に粗雑な作りである。

出土した提瓶は大部分が体部外面を同心円のカキ目調整を行っているが、この他に１点ではあるが円形の二重円の外側に放射状に櫛描文を施す個体がある（図版 77- ７）。

(10) 平瓶

687 は把手を除き、ほぼ完形である。把手の接合痕が２箇所に残っており、肩部の平坦面に環状把手が付けられていたことがわかる。688 も器形や調整方法から推測して 687 と同様の平瓶と思われる。

(11) 横瓶

689 は焼き歪みや焼成時の破損が著しく、かろうじて原形を留めている程度である。焼成中に破損しおり、口縁部や体部はねじれて、割れ口にも別個体の破片がくっついた状態であった。口縁部はハの字状に広がり、端部付近に１条の幅広の沈線が巡る。体部の中位には縦方向に１条の沈線が残っており、おそらく他の個体同様に２条が設けられていたのであろう。外面はタタキを施し、閉塞部分は丁寧なナデで仕上げている。690・691 も外形や調整など、689 とほぼ同様である。内外面ともに接合時のナデの痕跡が良く残っている。

(12) 甕

Ａ類　694 は口頸部に２本以上の沈線を巡らせ、その間に刺突文を等間隔で施す。推定される口径は 700 と同程度のやはり大型の甕で、全体の復原は不可能であったものの、少なくとも２個体以上の大甕が存在したようである。695 は口縁端部に設けた突帯を垂下させ、さらに 0.9 ㎝ほど頸部寄りの位置にもう１条の突帯を作り、その前後を波状文で加飾する。700 は大甕である。口頸部は 16 ㎝ほどと高く、２条ずつ２段の沈線を設け、さらにそれぞれの沈線の上部に波状文を施す。内面には幅およそ 16 ㎝単位で粘土板を積んだ痕跡が明瞭に認められる。容量は約 277 ℓ である。

Ｂ類　699 は口縁端部に外傾する面をもつ。

Ｃ類　679 は焼き歪みのため平底気味になっているが、本来は幾分平坦ではあるものの丸底であったと推測される。全体的に火ぶくれやハゼによる凹凸が多い。外面は細かな単位でタタキとカキ目を施している。

(11) 甑

702 は接合部分が体部側に向かって突出しており、体部に突き刺すような状態で接合したことがわかる。いずれも把手部分の残存のため、法量および形態は一切不明である。３点とも内面に当て具痕が認められることから、甕の体部破片としたなかに甑の体部が含まれると思われるが、残念ながら把手部と接合したものはなかった。

(12) 熔着・焼き歪み資料

第 114 図に掲載した４点は坏身と他器種が熔着したものである。704・705 では坏身の受け部に重ね焼きした坏蓋の口縁部が残っており、使用時と同じ合子状に合わせた状態で焼成したことがわかる。

他に図化資料としては、547 ～ 549・613 ～ 618・642・679・686・689・690 などがある。いずれも器種の判別がつく程度には原形を保ってはいるものの、その器種本来の用途を果たせたとは考えにくいほど歪みが著しい。

(13) ヘラ記号

器種ではないが、坏類の外面にヘラ記号が記された個体が何点か確認できた。その種類は判別できたもので「－」「＝」「＋（×）」「＃」があり、「－」が最も多く見受けられる。この他に直線を何本か組み合わせたものなどがある。

ヘラ記号はもちろん産地を示すものではなく、消費地である集落出土の製品に刻まれた記号が特別の意味をもつわけではないが、寺家前遺跡出土須恵器の特徴のひとつとして挙げておきたい。

４　出土土器の年代

前項までで述べたように、寺家前遺跡で出土した須恵器は大半が蓋坏類である。それ以外では器種の特定すらできないものも多く、また器種が特定できたものについても個体数が限られるため、形態分類を行うには充分とは言い難い。したがって型式変化の明らかな蓋坏、および高坏を中心に検討し、寺家前遺跡で出土した須恵器の編年的な位置付けを行いたい。

なお、志太地域出土の須恵器を用いた編年は提示されていないため、若干の地域差・時期差は考慮しなければならないが、遠江の窯跡出土資料を扱った遠江編年（鈴木　2001）と、陶邑窯出土須恵器を資料とした田辺編年（田辺　1980）に準拠することとする。

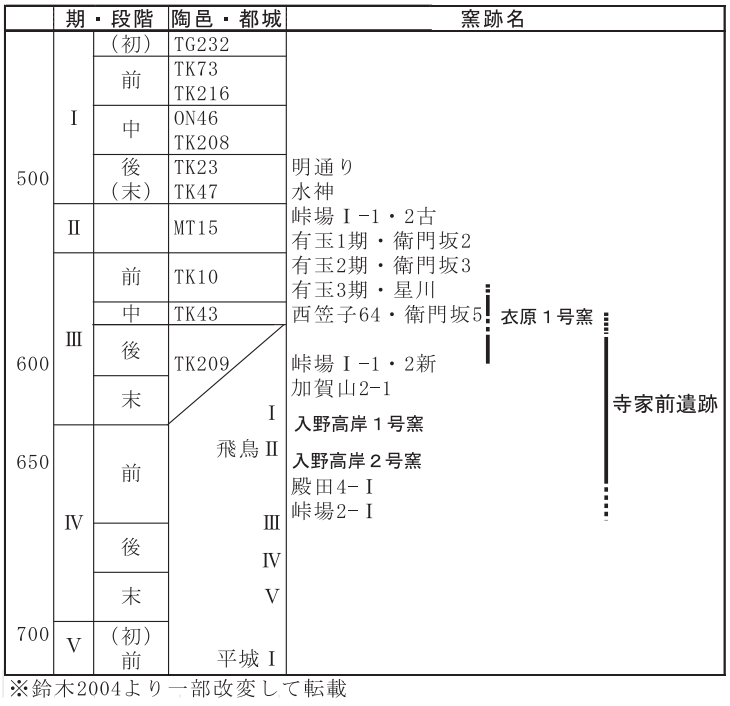
坏蓋　坏蓋は天井部と口縁部の境の形状からＡ・Ｂ・Ｃ類の３つに分類できる。さらにＢ・Ｃ類は外面の屈曲の有無で細分した。Ａ類は天井部と口縁部の境が突帯状に張り出す。上端の稜のみ鋭く突出させるもの（A1 類）と、上端が突出するものの下端のふくらみが消し切れていないもの（２類）がある。A1 類は作りが丁寧である点や、鋭く突出した稜の形状など、出土した須恵器のなかでも古い要素をもつものである。とくに 508 は口縁端部に内傾面と沈線をもち、口径も 16 ㎝弱と大型であることからⅢ期前葉（TK10 型式併行期）まで遡る可能性がある。ただし、わずか数点と非常に数が限られており、集落本体の時期と考えることはできないであろう。A2 類は口径が 12 ㎝以上のものと 11 ～ 10 ㎝台のものがある。前者は天井部の 2/3 ほどの広い範囲に回転ヘラケズリを施す。後者は口径に比べて器高が高く、天井部の回転ヘラケズリの範囲も狭い。また口縁部に沈線をもつものがあり、Ⅳ期前半（TK217 型式併行期）に比定できよう。

Ｂ類は天井部と口縁部の境を沈線で区画する。B1 類は口径が 13 ㎝前後のものと 11 ㎝前後のものがあり、外面は天井部の 2/3 ほどを回転ヘラケズリ調整する。B2 類は 12 ㎝台と、11 ㎝前後のものがある。

Ｃ類は沈線や稜などの明確な区画をもたない。C1 類は口径が 12 ㎝以上の大型のものと、10 ～ 11 ㎝の小型のものに分けられる。前者は全体的に扁平な器形を呈する。後者は器高が高く、回転ヘラケズリは中心付近の狭い範囲のみに施される。C2 類は器高が高く、外面の回転ヘラケズリを省略するものも見られることからⅣ期前半に比定される。

坏身　坏身はＡ・Ｂ類の２類型がある。Ａ類は立ち上がり高が１㎝前後と高く、やや内傾はするものの、垂直気味に立ち上がる。底部は最大径の分布域は 12.0 ～ 16.0 ㎝弱と幅広いものの、14 ㎝前後のものと、それより幾分小さい 12 ㎝前後のものがある。前者は底部は基本的には回転ヘラケズリで仕上げるが、なかにはヘラキリの後に軽くなでるか、もしくは無調整のままの個体も認められる。これらの特徴からＡ類は遠江編年Ⅲ期後半～末葉（TK209 型式併行期）に属する。550 ～ 552 に見られる口縁部を薄く高く立ち上がらせるタイプのものは、口径が幾分小さいものも含まれるが器高が４㎝以上と深く、作りが非常に丁寧で、口縁端部に面を意識したような丸みをもつことからⅢ期前葉（TK10 型式併行期）～中葉（TK43 型式併行期）の所産であると考えられる。

Ｂ類は最大径の分布を見ると２グループが存在する。12 ㎝以上のグループと、11 ㎝前半以下を中心とするグループである。最大径と器高の割合を見ると、大型のグループは器高の低い扁平な形状を呈するものが多い。底部は回転ヘラケズリを基本とするが、わずかだがヘラキリ後不調整のものも見られる。最大径が 12 ～ 13 ㎝を中心としており、外面の 1/3 ～ 2/3 の範囲に回転ヘラケズリを行う点など、Ⅲ期後葉～末葉（TK209 型式併行期）の特徴をもつ。一方、小型のグループは立ち上がり高が５㎝前後とさらに低い。器高は深く、底部も含め全体的に丸みを帯びた形状を呈している。底部の調整はヘラキリ



※鈴木2004より一部改変して転載

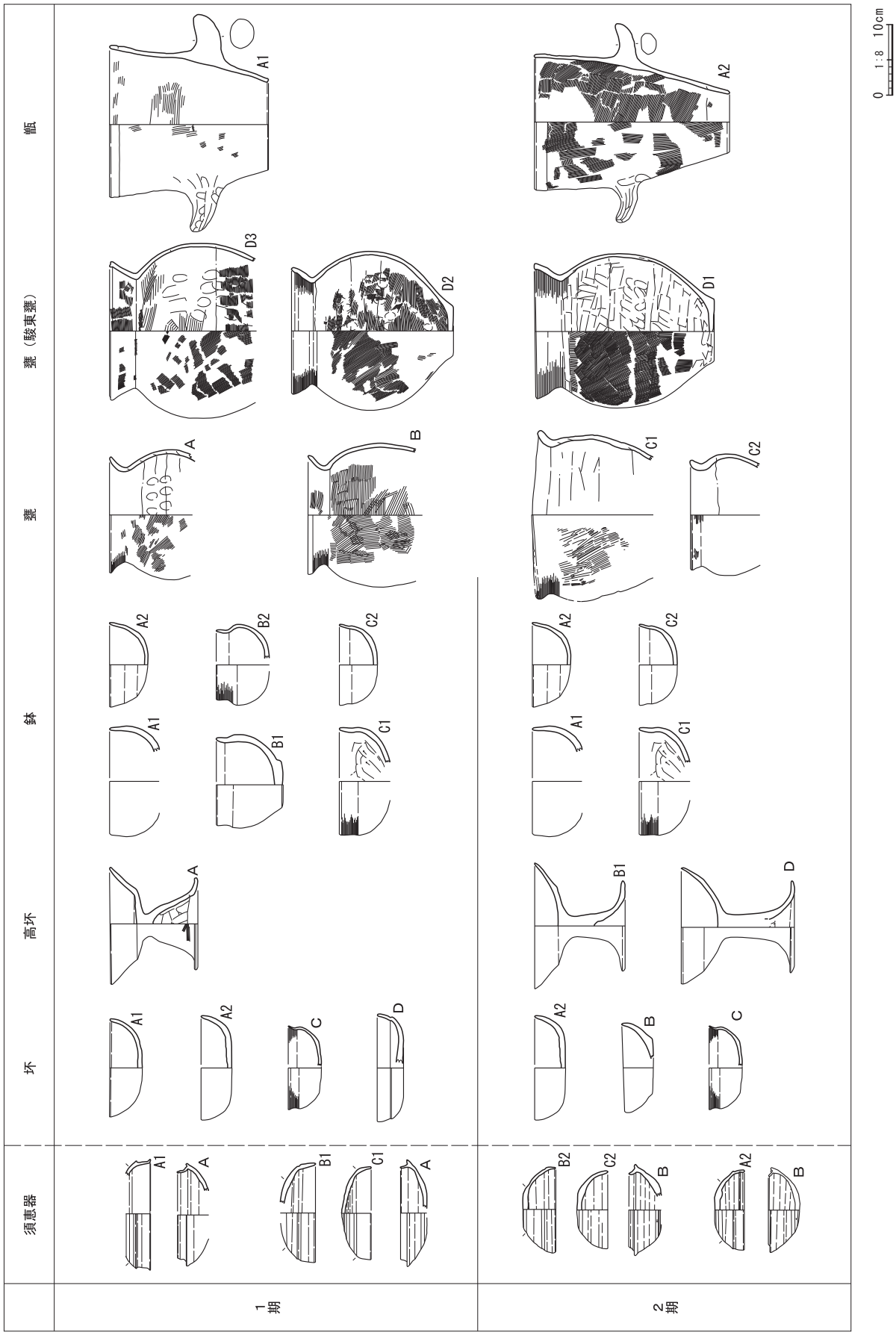
第 121 図　須恵器編年対比図

後不調整あるいは弱い回転ヘラケズリを行うものが一定量存在する。最大径が小型化する点、半球形とまではいえないが、器高が深く、外面底部の回転ヘラケズリが省略される点からⅣ期前半（TK217 型式併行期）に比定できる。なお、612 では口縁部の高さとほぼ同程度まで低くなっている。その特徴から寺家前遺跡出土の古墳時代後期須恵器のなかでは最も新しい要素をもつものである。個体数として数えられたのはわずかに１点であるが、他に小破片で数点確認できた。

高坏　蓋の有無で２類に、さらに長脚（C類）、短脚（D類）がある。C類はさらに段を区画する沈線、透かしの有無で細分できる。A類は坏部最大径が 14.6 ～ 16.2 ㎝で、立ち上がりが１㎝ほどと、坏身A類の大型のタイプの器形をもつ。また、透かしをもつ個体は全て孔が貫通しており、スリット状や切り残しなど形骸化したものは認められなかった。したがってⅢ期後葉より新しくなることはない。脚部高が 15 ㎝弱と長大化するなど、Ⅲ期中葉の特徴をもつものも含まれる。一方、いわゆる半球形高坏と呼ばれる坏部は１点しか確認できなかった。ただしこの１点も残存率が低いため、別器種（脚付盌など）の可能性も否定できない。

以上から、寺家前遺跡で出土した須恵器は蓋坏および高坏の型式からⅢ期前葉もしくは中葉、Ⅲ期後葉～末葉、Ⅳ期前半の３時期に比定することができる。ただし、Ⅲ期中葉以前のものは量的に多くはなく、出土土器の主体をなすものではない。よって出土須恵器から推定される集落の時期は大きく２時期に分かれるであろう。これは SR9526 の上層出土土器と下層出土土器の型式差と合致するものである。すなわち１期は須恵器Ⅲ期後葉～末葉段階までの時期で、古くはⅢ期前葉も含むと思われる。この時期に伴うと考えられる須恵器は坏蓋 A1・A2・B1・C1 類、坏身A・B類、高坏A・B・C・D1 類である。その他の器種は年代を特定し難いが、おそらく瑞、盌、提瓶B・C類、平瓶、横瓶がこの時期に属するものであろう。一方、２期は須恵器Ⅳ期前半段階である。この時期には坏蓋 A2・B1・B2・C2 類、坏身B類、高坏 D2 類、提瓶は口縁部の形状からA類が伴うと考えられる。２期に属する器種は少なく、蓋坏が主体である。全体の出土量をみてみると、１期のものがおよそ 67%にのぼる。２期はそれまでの古墳時代を特徴づける長脚高坏・提瓶・脚付壷・盌などが消滅し、蓋坏が器種構成の大半を占める段階ではあるが、蓋坏に関してだけみても１期の製品がおよそ 67%を占めており、それを考慮しても１期が圧倒的な割合を占めることは明らかである。

竪穴住居跡と掘立柱建物の組合せからⅠ群・Ⅱ -1 群・Ⅱ -2 群の３群に分けているが、出土須恵器の１期・２期がそれぞれどのグループに対応するかは不明である。住居内・建物内からの出土量が限られており、時期の特定するのに充分とはいえないためである。ただ、住居内出土の須恵器を見る限りではⅢ期後葉ないし末葉、特にⅢ期後葉の時期の製品が多いようである。



第122図　出土土器編年図

第４節　土製品その他

１　土製品

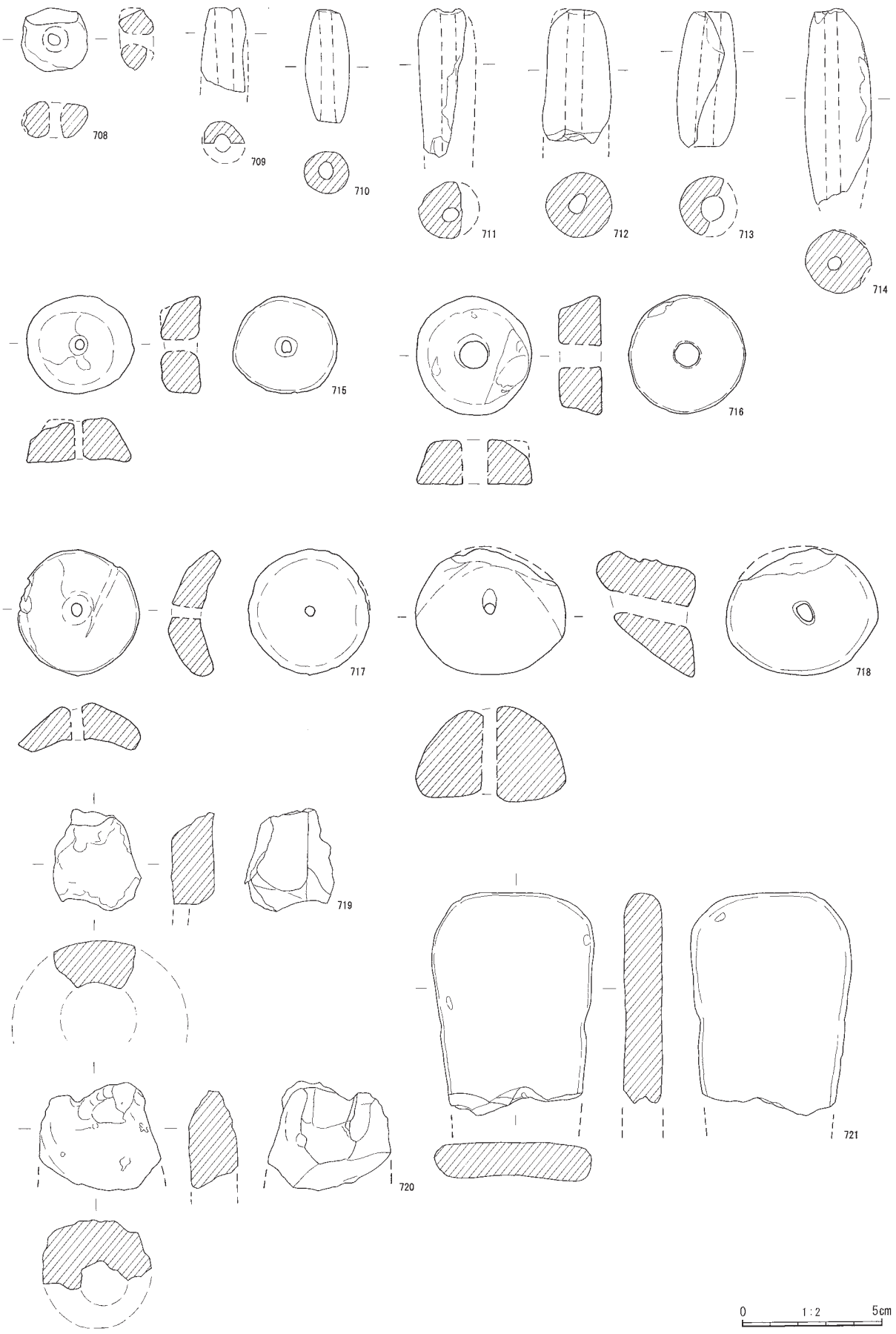
第 123 図は古墳時代の土製品である。**708** は E-2 区の古墳時代包含層より出土した。直径 2.3 ㎝ほどの不正形な丸い形状で、中央に径 0.4 ㎝の円形孔が貫通している。側面の一部が欠損している。紡錘車にしては小型であることから用途不明品としている。

土錘は **709** ～ **714** の６点が出土している。いずれも紡錘形をしている。**709** は E-3 区の掘立柱建物 SH322 の南西角柱 SP9213 の覆土内より出土した。掘立柱建物 SH322 は自然流路 SR9526 の左岸側に位置する１×１間の小型の建物である（第 36 図、図版 27）。**709** は下半分が欠損している。最大径は 1.4 ㎝ほどで、孔の径は 0.6 ㎝である。同建物の南東角柱 SP9218 の覆土からも **711** が出土している。SP9218 は径 55 × 49 ㎝、深さ 37 ㎝の柱穴で覆土には炭化物と径４㎝以下の礫を含んでいる。**711** は下半分と側面の一部が欠損している。孔の内径は 0.5 ㎝である。**710** は E-4 区の６層より出土した。ほぼ完形品で長さ４㎝、最大径は 1.6 ㎝、孔の内径は 0.5 ㎝、重量は７ g である。胎土は灰白色で 0.1 ～ 0.2 ㎝の黒色礫が混じる。**712** は E-3 区の自然流路 SR9526 覆土より出土した土錘である。上端部の一部と下端部が欠けているがほぼ完形に近い形状である。残存長は 4.8 ㎝、最大径は 2.4 ㎝、孔の径は 0.6 ～ 0.7 ㎝、重量は 26 g である。自然流路 SR9526 の覆土内から出土する土器は古墳時代後期の土師器が主体である。土錘も同時期に属するととらえられる。**713** は E-4 区の７層より出土した土錘である。右半分が欠損している。残存長は 4.8 ㎝、残存径は 1.65 ㎝、孔の径は 0.9 ㎝ほどある。表面には指ナデ押さえらしき痕跡もある。７層では古墳時代後期の包含層であることから土錘も同時期のものであろう。**714** は E-3 区 129C-10 グリッドの暗褐色砂礫混層より出土した。129C-10 グリッドは集落のある微高地上に位置する。下端部がわずかに欠損するが残存長は 6.95 ㎝と遺跡内では最も大型である。最大径は 2.3 ㎝、孔の径は 0.5 ㎝、残存重量は 32 g である。表面には焼成時の黒斑がある。

715 ～ **718** の４点は紡錘車形土製品である。**715** は平面形が直径 3.5 ㎝の円形で、厚さ 1.6 ㎝の逆台形の形状である。下面の一部が欠けているがほぼ完形に近い。中心に貫通する孔は径 0.7 ㎝、重量は 18 g である。紡錘車は E-3 区の竪穴住居 SB308 床面層より出土した。竪穴住居 SB308 より出土した須恵器坏蓋はⅢ期末葉である。**716** は E-3 区 129E-9 グリッド内の包含層より出土した。下面の一部が欠けているものの、ほぼ完形品である。最大径は 4.2 ㎝、高さ 1.6 ㎝の逆台形状を呈する。重量は 29 g、中心の孔は径 0.9 ～ 1.0 ㎝である。**717** は E-3 区の自然流路 SR8280 中層より出土した。流路は自然流路 SR9526 の上層部にあたり、覆土から出土する土器は須恵器や土師器とともに山茶碗等も出土している。しかし出土土器の主体は圧倒的に古墳時代後期であることから当該期に属するものと思われる。平面形は直径 4.45 ㎝の円形だが、側面形は凹面状に上端面がくぼんでいる。重量は 23 g、中心には径 0.35 ～ 0.5 ㎝の貫通孔がある。孔には鉄製の芯が通っていたような付着物がある。**718** は直径 5.4 ㎝、高さ 3.4 ㎝の円錐形を呈する。側面の一部が欠けている。中央付近に径 0.9 ㎝の孔がやや斜めに貫通している。紡錘車としてはかなり歪な形状をしており、別の用途の可能性もある。

719・720 は鞴の羽口の破片である。いずれも E-3 区の微高地から低地に向かう縁辺部の遺物包含層より出土している。**719** は外径が約 6.2 ㎝、内径は 2.8 ㎝ほどの羽口だったであろう。全体に被熱しており、上端部は炭化した煤が付いている。外周面には指ナデの痕跡が見える。**720** は鞴の羽口の上端部分であろう。**719** と同じく外周径 6.8 ㎝、孔の径が 2.4 ㎝である。全体に被熱しており、上端部は火を受けて煤や付着物がある。胎土は密だが径 0.1 ～ 0.5 ㎝の礫がわずかに入っている。

721 は土器片を転用して表面から周囲縁辺を磨いて作られている土製板である。下半部は欠損してい



第 123 図　出土土製品実測図

る。表面に線刻等は見られない。何に使われたものか用途は不明である。E-2 区の中間層除去中にみつかっているが中間層には弥生土器から土師器、須恵器まで含まれているため、時期年代が特定できない。

２　その他

古墳時代の金属製品については『寺家前遺跡Ⅱ（木製品・石製品・金属製品他編）』第１章第３節に掲載している（以下、『寺家前Ⅱ』）。

鉄釘は５点出土した（『寺家前Ⅱ』第 128 図 841 ～ 845）。いずれも古墳時代後期の竪穴住居跡の覆土内で見つかっている。竪穴住居の構造材を固定するために使われていたと考えられる。

耳環（『寺家前Ⅱ』第 128 図 848）も竪穴住居跡 SB302 の覆土より出土した。SB302 はⅡ -1 群に属する古墳時代後期の竪穴住居で、最も大型である（第 16 図）。同住居跡では鉄釘も３点（『寺家前Ⅱ』第 128 図 841・843・844）見つかっている。

SR10054-1 で金属製の鈴が出土している（『寺家前Ⅱ』第 128 図 849）。現地調査の所見ではこの流路は古墳時代～古代の旧流路と認識している。詳細は『寺家前Ⅱ』に記述している。

楔（『寺家前Ⅱ』第 128 図 854）は古墳時代の包含層より出土した。長さ 5.7 ㎝と小型だが完形である。

鉄鏃（『寺家前Ⅱ』第 128 図 855）は先端部の破片で、集落内の柱穴 SP9666 覆土より見つかった。柱穴は掘立柱建物 SH323 や SH324 のあるグリッド内にあり、同時期の遺構と考えられる。

鉄斧（『寺家前Ⅱ』第 128 図 856）は古墳時代後期の溝 SD421 検出時に見つかっている。

その他に用途が不明な鉄製品として『寺家前Ⅱ』第 128 図 846・847・850 ～ 853 などが包含層より出土した。

種子や瓢箪などの自然遺物も古墳時代後期の遺構から数多く出土した。種子の出土遺構については『寺家前Ⅱ』第 132 図に分布図、包含層出土分布図は第 131 図に示した。最も多く出土した場所は E-1 区の南側である。ここは畔 SK419 や溝 SD420･421 を検出した位置でもあることに起因する。瓢箪は（『寺家前Ⅱ』図版 79）自然流路 SR9526 より出土した。

註

１　須恵器模倣坏は駿河東部以東では坏の中心的な位置を占めており、また出現当初の段階では、須恵器の形態を比較的、忠実に模倣しており、坏身･坏蓋の差も明らかである。しかし、寺家前遺跡の段階では、すでに模倣坏の形態は独自に変化するらしく、坏蓋の口縁部（身受け部）が次第に長くなり､外に張り出す傾向が強くなる。これは須恵器坏の形態変化とは流れを異にしている。須恵器坏蓋を模倣した土師器が、坏身に転化したことによって起きる現象ではないかと考えている。土師器坏には本来坏蓋が無かったことがこうした変化を促した要因であろう。

２　坏Ａ類からＤ類までを器形によって分類してきたが、Ｅ類は器面の調整技法で分けているので、分類の基準が異なっている。しかし、Ｅ類の出土量が少ないこと、器種毎に分解して説明することの煩わしさを避けて、ここでは一括して、黒色土器として説明した。

３　駿東甕とはいかなる甕を指すのか、土器の名がよく知られているわりに明確な定義がされていないようである。駿河東部地域で「口縁部内面を肥厚させ、球状の胴部を呈し、底部に突き出し」をもった甕を指して呼ばれることが多い（北川　1988）。また、器形だけでなく、胎土、焼成などにも特徴がある。

４　神明原・元宮川遺跡でみると、遺構によっては多くの高坏を出土した遺構（SX483）がある反面、全く高坏をもたない、あるいは極少量の高坏しかもたない遺構が多く、また、藤守遺跡でも総じて土師器の高坏は出土量が少ない。

第４章　調査のまとめ

第１節　遺構群の年代的な継続と断絶

寺家前遺跡の遺構群の年代については、すでに本書の第１章第１節において、周辺遺跡の年代と合わせて、第４表の周辺遺跡消長表に示したとおりである。寺家前遺跡は弥生時代後期後半に人々が集落と水田を築き、古墳時代初頭まで継続していたことがわかっている（『寺家前遺跡Ⅰ』第３章第３節）。再度整理すると、葉梨川流域の過去の発掘調査では、寺家前遺跡の以前は、1.6㎞ほど南にある上藪田川の丁遺跡（弥生時代中期後半）の後に、上藪田モミダ遺跡（弥生時代後期）が続き、その直後が寺家前遺跡の時期であるとの所見がある（註１）。その後、寺家前遺跡では古墳時代前期になると集落域に古墳時代前期の土器を伴った遺構が見られなくなり、一旦、集落が途絶える。代わって、寺家前遺跡から東に0.8㎞の位置にある中ノ合遺跡では、古墳時代前期の土器を伴う竪穴住居跡などの遺構が見つかっている。直接の原因が何であったか定かではないが、寺家前遺跡から中ノ合遺跡へ集落が移動したと考えられる。中ノ合遺跡の集落では古墳時代前期の竪穴住居のほかに古墳時代後期の古墳群も確認されている（『中ノ合イセ山遺跡・中ノ合イセ山古墳群・中ノ合遺跡』2010）。ここでも古墳時代中期（５世紀代）以降になると、再び集落を別の場所に移したと見られるが、集落を移した場所がどこなのか、これまでのところわかっていないが、葉梨川流域では弥生時代から古墳時代にかけて、こうした流域内の谷筋で集落の移動があったのではないかと考えられる。

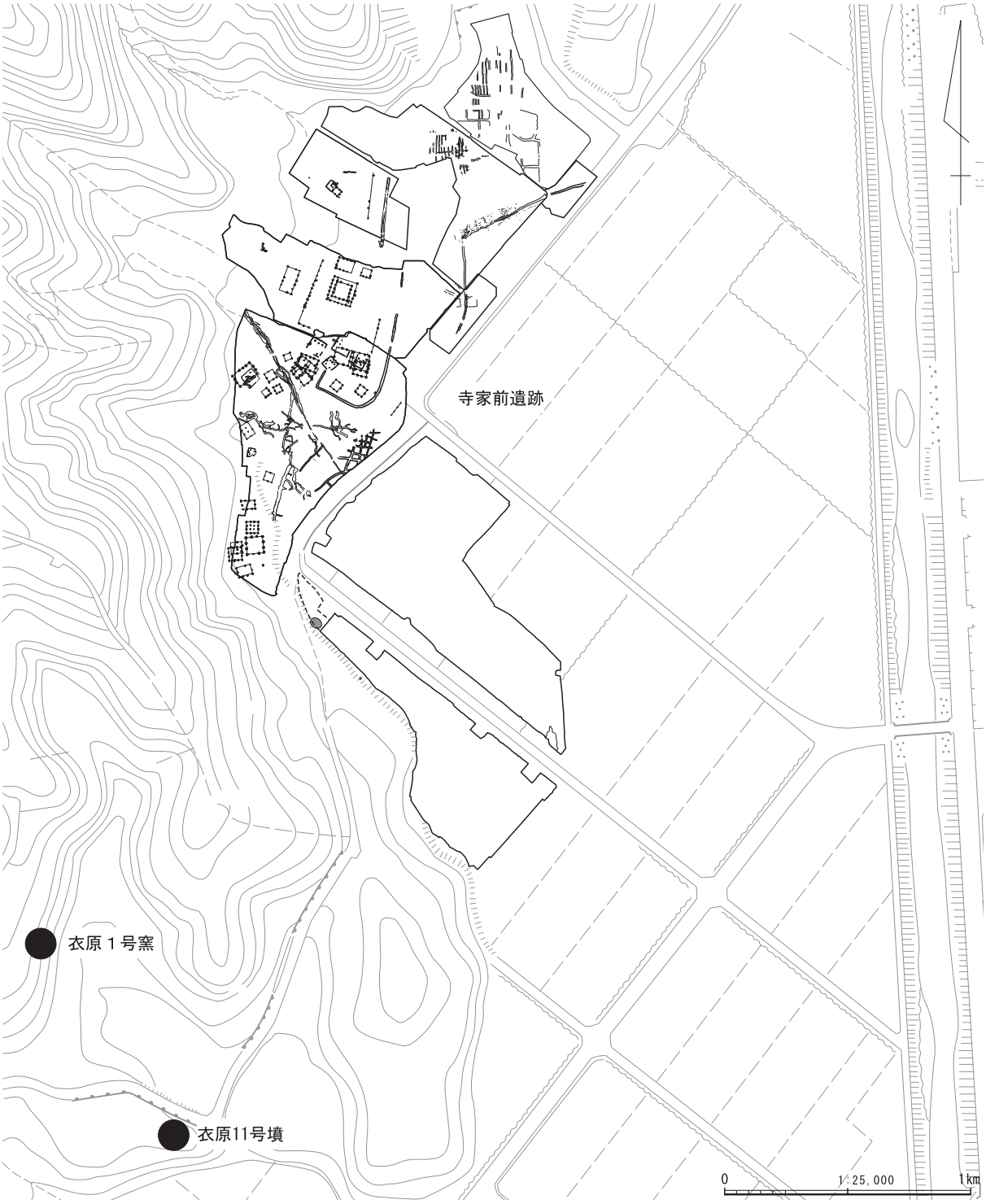
再び当地に集落が戻ってくるのは、６世紀末の古墳時代後期である。集落は出土した土器群が示す通り、６世紀末から７世紀初頭まで継続している。寺家前遺跡の周辺で見つかっている須恵器焼成窯は、人々が生業の中心としていた場所である。丘陵上には衣原11号墳が見つかっている。衣原古墳群はこの集落に伴う墓域であろう（『衣原古墳群・衣原遺跡・衣原古窯群』2010）。生業は窯業生産だけではなかったようで、集落南側の低地では、弥生時代後期に開田された水田を改修して、稲作生産の耕地として古墳時代後期にも使っていたと考えられる。

古墳時代後期に集落として機能していた当地も、律令期に入ると居住した痕跡は再び見えなくなる。

第４表　葉梨川流域の集落継続変遷表

集落

	弥生時代前期	弥生時代中期	弥生時代後期	古墳時代前期	古墳時代中期	古墳時代後期	奈良時代	平安時代
上藪田川の丁遺跡		━	━					
上藪田モミダ遺跡			━					
東浦遺跡			━	━			━	
寺家前遺跡		▪▪	━			━	▪▪	
中ノ合遺跡				━				
衣原遺跡			━				━	



第 124 図　寺家前遺跡・衣原遺跡群古墳時代後期全体図

奈良時代の竪穴住居跡は西側に隣接する衣原遺跡の西向き斜面で数軒見つかっているが、集落全体の様相は明らかではない。しかしその一方で、水田域は条里制に則った水田として整備され、整然とした方形の水田に大畔が作られている。低地の範囲は耕地として継続して使っていた様相が見える。

その後、再び当地が居住域として機能する時期は 11 世紀末であり、12 世紀から 13 世紀代に溝や柵列で区画された屋敷地が築かれている（『寺家前遺跡Ⅰ』2012）。

第２節　出土須恵器と周辺の須恵器窯

１　出土須恵器の特徴

寺家前遺跡出土の須恵器はその形態的特徴から、遠江須恵器編年のⅢ期前葉ないし中葉からⅣ期前半にかけての所産であると考えられる。須恵器の出土量は個体数にして、土師器 478 点に対して須恵器 516 点と、割合が高い印象を受ける。静岡県内では群集墳の増加に伴い、須恵器生産が活発となる時期ではあるが、その供給先の主体となるのは古墳であり、集落からまとまった量が出土することは注目できよう。

器種構成　第３表で示したように、寺家前遺跡では蓋坏がおよそ 60％近くを占める。ついで高坏・壷類・瓶類と続く。坏以外の器種は高坏で 13％、壷類 10％、瓶類６％、甕２％と少数ではあるが、一定量出土していることがわかる。

窯業遺跡特有の遺物　窯跡出土の資料に見られるような焼成不良・焼き歪みによる変形・熔着・破損した個体が数多く認められた。須恵器全体に対しての割合でみると実に 17％をも占める。これらは、到底使用には耐えられないと思われるほど状態が悪く、通常窯跡では出荷できない失敗品として窯体内や灰原に廃棄されるものである。

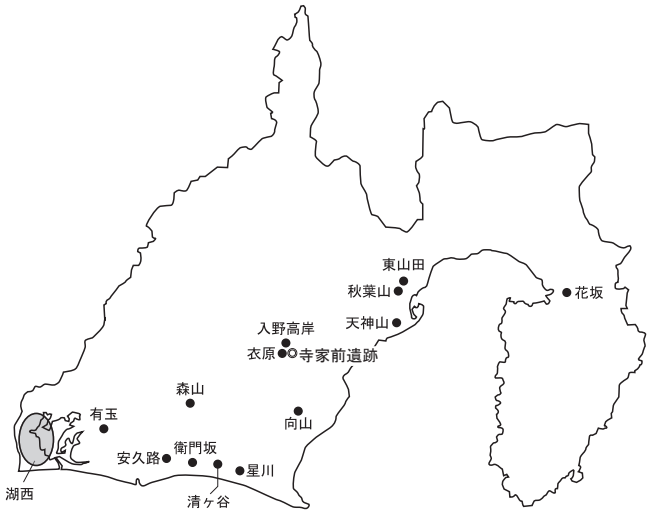
窯詰め状況を示す遺物　降灰の状態や坏身の受部に蓋の口縁部破片が残るものが多いことから、坏類は基本的に蓋と身を合子状に合わせて焼成したようである。坏身の口縁端部を二次的に細かく打ち欠いたような個体があり、これは坏身同士を重ね焼きした際に熔着した上の個体から剥がした痕跡であろうか。坏は脚部外面に降灰するもののみで、逆位焼成の個体は確認できなかった。有蓋高坏は蓋坏と同様に蓋をかぶせた状態で焼成したと思われる。また、坏類と壷・瓶・甕類など大型の器種とが熔着した資料が多く見られた。中・大型の器種の隙間に小型の器種を並べた状況が推測できる。

２　周辺の須恵器窯と寺家前遺跡

一般には窯跡で見られる焼き歪み・熔着・破損・焼成不良の個体が多量に出土することは、通常の集落としては特異であるといえよう。こうした場合、須恵器の生産に関わる工房もしくは須恵器工人の居住した集落の可能性が考えられる。そこで、いくつかの類例と比較し、寺家前遺跡の検討を行いたい。

島田市池上遺跡でも住居内からⅢ期後葉の須恵器の坏身に大型の窯壁片が窯着した個体が２点出土している（島田市教育委員会　2010）。この池上遺跡は同じく６世紀後半の須恵器窯である向山古窯と直線距離で 500 mほどと近距離に位置し、関係性が指摘されている。その理由として、遺跡周辺の集落で須恵器が出現するより早い段階で須恵器を伴うこと、胎土の肉眼観察では湖西窯の製品とは異なる特徴をもつことを挙げている。

大野城市上園遺跡では、やはり６世紀中頃～後半にかけての集落遺跡で焼き歪みや熔着した須恵器が多数出土した（早



第 125 図　静岡県内須恵器窯跡分布図

瀬　2013)。上園遺跡は牛頸窯跡群の北端に位置し、集落と同時期の窯跡が 50 ～ 140 ｍの距離で発見されている。出土した土器の８割強が須恵器で、土師器は甕・甑など煮炊き用の器種のみが出土しており、坏は伴わない。また、竪穴住居２軒ではロクロピットと粘土貯蔵穴が検出され、工房であったことがわかっている。

寺家前遺跡の周辺では衣原１号窯と入野高岸古窯群が確認されている。

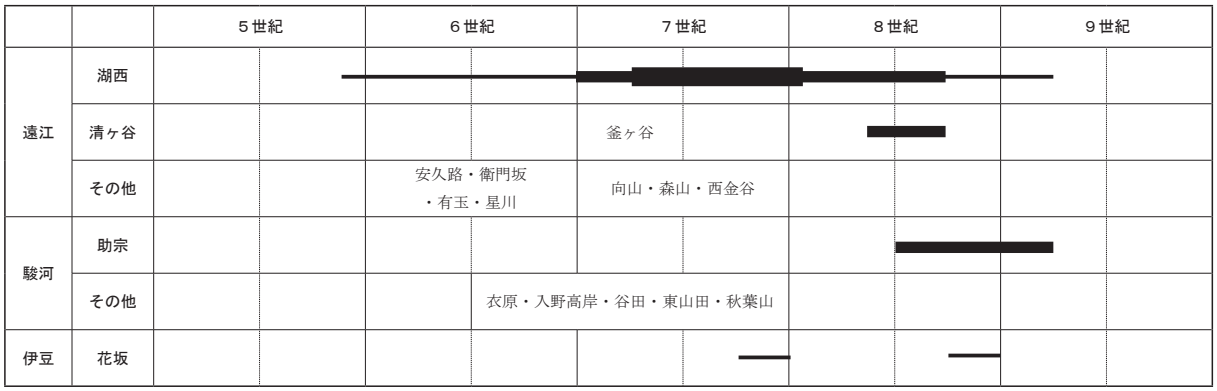
衣原１号窯は寺家前遺跡と尾根をひとつ挟んだ東側斜面に位置する（第 124 図)。確認できたのはわずか１基のみであった。焼成器種は坏蓋・長脚高坏（無蓋・有蓋)・瑞・陶臼・提瓶・平瓶・短頸壷・脚付壷・甕および特殊扁壷である。Ⅲ期前葉に開業し、途中断絶期間をおきながらⅢ期後葉まで営窯する、志太平野では初現となる窯である。

入野高岸古窯群は寺家前遺跡からおよそ 2.5㎞ 北東の丘陵に位置し、２基が並んで検出された。衣原１号窯と同様、窯尻に排煙調整溝と呼ばれる施設をもつ。１号窯はⅢ期末葉に開業し、Ⅳ期前半の早い段階まで、若干の時期をおいて２号窯が開業する。ただし、１号窯が停止してから２号窯で再開するまでの期間は数年程度と思われ、２号窯もⅣ期前半段階には操業を終える。１号窯の焼成器種は坏蓋・長脚高坏（有蓋・無蓋)・瑞・陶臼・提瓶・平瓶・甕、２号窯は坏蓋・長脚高坏（有蓋・無蓋)・短脚高坏(無蓋)・瑞・短頸壷・甕などである。

寺家前遺跡で出土した須恵器のうち、Ⅲ期前葉～後葉の製品は衣原１号窯と、Ⅳ期前半の製品は入野高岸１・２号窯とそれぞれ帰属時期が重なる。衣原１号窯の蓋坏は内面底部を回転ナデ後に一方向に幅広のナデで仕上げる。外面の回転ヘラケズリは天井部もしくは底部の 1/3 から 2/3 の広い範囲に渦巻き状に施す。高坏は長脚で透かしを有するタイプで、脚端部は弱い凹線をもつ。入野高岸１号窯の蓋坏は内面底部のナデ調整が不定方向あるいは三角形を描くような形で施される。外面は渦巻き状に回転ヘラケズリを施すが、ヘラキリ後不調整のものも数点見られる。坏蓋は外面の区画を省略したもののみである。坏身では底部から体部までゆるやかに立ち上がるタイプと、受部の真下で強く凹むタイプがある。高坏の脚部は２段ないし１段で、方形の透かしは形骸化しスリット状の切り込みを入れる程度である。脚部裾は端部の手前で凹ませる。２号窯の蓋坏の外面はヘラキリ後不調整が基本である。また、坏蓋の天井部が突出する特徴をもつ。

寺家前遺跡の須恵器と比較してみると、Ⅲ期後葉とした製品は内面ナデ調整が幅広の一方向に施された個体が一定量存在する点や、坏身の受部の形状、胎土など衣原１号窯の製品と共通した特徴をもつものが見られる。一方、Ⅳ期前半坏蓋では天井部が突出した **542・543** は入野高岸２号窯の特徴と類似する。坏身 **604・609** は受部の真下が凹む器形から入野高岸１号窯の製品と考えられる。今回出土した焼き歪みや熔着など、失敗作ともいうべき製品は、すべてⅢ期後葉段階のものに限られ、かつ胎土や色調が衣

第５表　静岡県内窯跡消長表

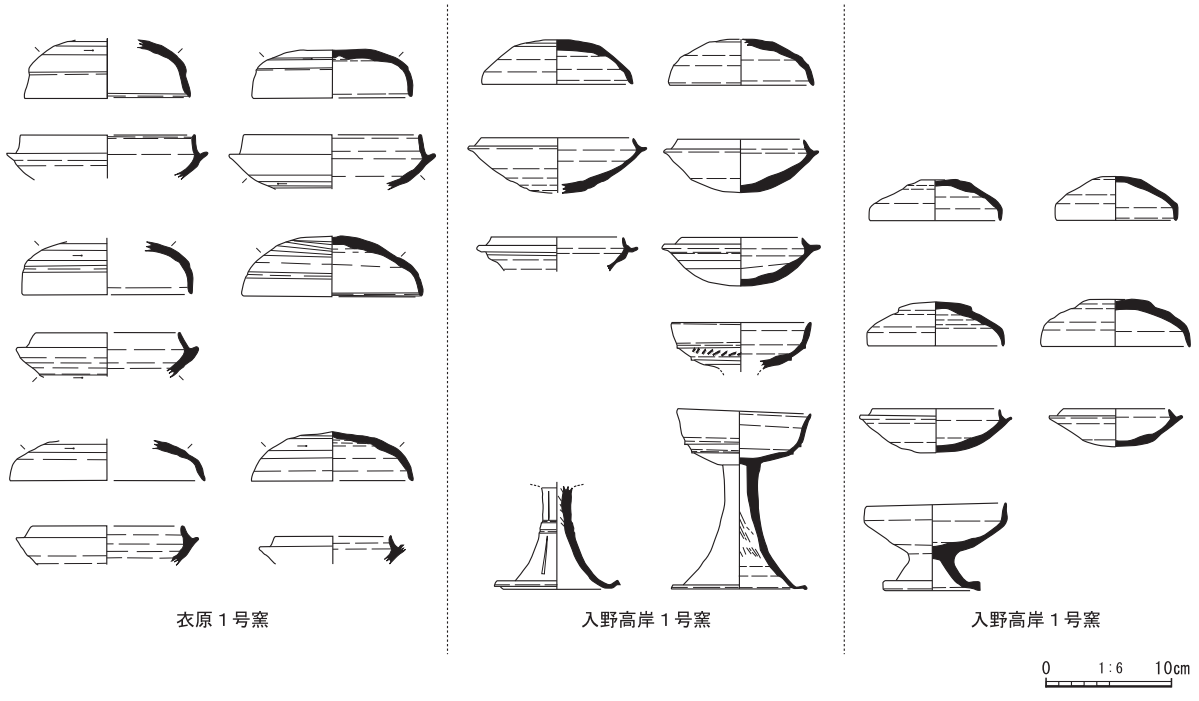


原１号窯の製品と酷似している。次のⅣ期前半段階のものは入野高岸古窯の製品と思われる個体も含まれるが、むしろ同心円状となる回転ヘラケズリやナデ調整の仕方、胎土の様子などから湖西窯など別の産地からの搬入品が多いと考えられる。各窯跡および寺家前遺跡出土の須恵器の胎土分析結果でも、寺家前遺跡の製品が衣原１号窯で作られた可能性が高いことが指摘されている（『寺家前Ⅱ』第４章 -10・11）。

前述したように、寺家前遺跡で出土した窯跡特有の遺物は衣原１号窯の営窯時期と合致し、また製品や胎土の特徴も衣原の製品と酷似することから、寺家前遺跡は衣原１号窯の須恵器生産に関わる工人たちの集落である可能性が高い。山田邦和氏は須恵器工人の住居・工房・窯の関係について「窯跡の近くに工房を兼ねた住居を営む「職住近接型」」、「窯のそばに工房をもつが、主たる住居は離れたところにある「通勤型」」、「工人がはるか離れたところに本貫地をもち、作業の一定期間にだけ工房に泊まり込む「単身赴任型」」の３つのパターンを想定している（山田　1998）。寺家前遺跡では須恵器製作に関わる粘土･当て具や窯道具などの遺物､ロクロピットなどの工房を示す遺構は検出されていない。したがって、寺家前遺跡の場合は工房や工房を内包した集落でないことは明らかで、山田氏の分類における「通勤型」に当てはめることができよう。窯に近接して工房があり、尾根を挟んだ寺家前遺跡の地に工人の居住集落が営まれた状況が推測できるが、残念ながら衣原１号窯では周囲に工房と推定できるような平場もしくは柱穴の痕跡は認められなかった。ただ、１号窯の築かれた斜面は後世の茶畑で削平されているため、工房が存在した可能性も否定はできない。

寺家前遺跡が工人集落であったとして、なぜ容器としての機能を果たさない製品をわざわざ集落に持ち帰ったかが疑問である。前述した上園遺跡ではほぼ全ての住居の覆土から出土していることから、住居廃絶後に廃棄場所として利用していたことがわかっている。しかし、寺家前遺跡では住居覆土から多量に出土するような状況は認められない。

衣原１号窯は静岡県中部において最も早い段階に操業を開始した須恵器焼成窯であるとともに、特殊な窯構造や製品など多元的な要素をもつ窯である。須恵器生産という新技術をもつ集団が居住した可能性の高い集落が発見されたことは注目に値しよう。



第 126 図　入野高岸古窯群・衣原１号窯出土須恵器実測図

第３節　遺構の年代と性格

１　寺家前遺跡集落の構造

寺家前遺跡は掘立柱建物・竪穴住居跡の両方が存在している。おそらくその両者は組み合わせになって、一つの集落を構成していたものであろうし、その中心部分には大型の掘立柱建物が、そして、その周囲に中・小の掘立柱建物と竪穴住居跡が配置されていた。１群では比較的竪穴住居跡の数が多いが、Ⅱ群では竪穴住居跡の数は極少なく、掘立柱建物の数との比率でも非常に少ない。

掘立柱建物の間にも、その規模には大きな差がある。最大の規模をもった建物はSH210で、側柱の内側で､実に100㎡の広さをもっている。小規模な建物は２間×２間ほどのもので10㎡前後のものがあり、当然その中間的な大きさの建物も存在している。

これらの建物は規模・形態・建物の位置などから、住居・倉庫・作業場などと様々な機能をもっていたことが推定できるし、また、竪穴住居跡は掘立柱建物と組み合わせになっていた。それらから建物の機能を推定してみれば、

①　大型の掘立柱建物は居住施設

②　規模の小さな正方形の建物は倉庫であり、それよりやや大きめの掘立柱建物は住居あるいは作業場であろう。

③　竪穴住居跡は竈をもっており、他に竈がないこと、配置されている位置などから竈が中心的な施設で、おそらく釜屋の機能をもったものであろう。

したがって、寺家前遺跡では住居・倉庫・作業場などは掘立柱建物からなり、竪穴住居跡は居住施設というより、釜屋としての機能をもったもので、掘立柱建物と竪穴住居跡が組み合わせになって、集落を構成していたものと考えられる。

２　建物群の構成

建物群の位置・重複関係から、全体を２期３群に分けているが、１期はSH311を中心に掘立柱建物11棟と竪穴住居跡７軒からなっており、SR9526の両側に広がっている。２期は２群からなり、Ⅱ-1群はSH210を核とする建物群で、掘立柱建物９棟、竪穴住居跡２軒からなっている。Ⅱ-2群はSH329を中心とする一群で、やはり掘立柱建物７棟、竪穴住居跡１軒からなっている。建物群の重複関係からⅠ期とⅡ-1群との間には明確に時間差があることが知られる。これらを出土した土器群が示す６世紀末から７世紀初頭のものであると考えた。

３　古墳時代豪族の居館

（１）溝・柵で囲まれた区画

Ⅱ-1群は本文でも述べたとおり、東面および南面の半分をSD6289とSD9500で区画しており、東面はさらにSA202・SA203でも区画されている。また、東面の区画溝（SD9500）はSH210の正面で途切れており、この部分に出入り口が設けられていたものらしい。南面はSH323・SH325・SH315など同一方向をもつ掘立柱建物群の並び、および柵で区画されている。また、北面はSD6290で区画している。したがって、Ⅱ-1群は丘陵に接する西側を除いた３方を、不完全ながら、溝あるいは掘立柱建物を配置することで、区画していることになり、区画の面積は3500㎡ほどに達する。また、中心の建物であるSH210の西側はSA201で区画しており、建物群の内部をも区画していることが理解できる。こうした区画施設をもち、大型の掘立柱建物を中心とする建物群をこの期の豪族居館と推定している。

（２）掘立柱建物と竪穴住居跡

集落の一角に大型の掘立柱建物が検出されている遺跡は古墳時代の早い段階から認められており、古墳時代前期の浜松市大平遺跡（鈴木　1992）では掘立柱建物と竪穴住居跡からなる集落の一角に方形の溝で区画した区域から４間×４間の掘立柱建物が検出されており、この集落の首長の居館だと考えられている。

袋井市古新田遺跡（柴田　1992）では集落そのものが掘立柱建物が卓越しており、古墳時代中期の豪族居館として広く知られている。

先に挙げた坂尻遺跡や横山遺跡でも、大型の掘立柱建物をもつ中心部分には掘立柱建物を中心とする区画の存在が認められており、その周辺に掘立柱建物と竪穴住居跡からなる区画が検出されている。すでに説明してきたように寺家前遺跡でもⅡ-1群にみるように大型の掘立柱建物（SH201）を中心とする区画の存在が知られている。

こうした、大型の掘立柱建物群と竪穴住居跡からなる遺跡の例として、袋井市坂尻遺跡と小山町横山遺跡の例を挙げてきたが、当該遺跡の建物群配置図を示して（第128・129図）、もう少し説明しよう。

（ア）坂尻遺跡の区画溝と掘立柱建物と竪穴住居跡

坂尻遺跡では自然流路、溝などで区画された５群の建物群が検出されている（松井他　1995）が、報告書では区画Ａが首長の居館だとされている。ここでは自然の流路である大溝や水田地域に続く低地を除いて人工的に掘削された溝で区画された中に大・小の掘立柱建物と竪穴住居跡が検出されている。区画は必ずしも方形をなしておらず、自然地形を使ったやや不正形をなしている。区画の内部は大型の掘立柱建物３棟と小型の掘立柱建物２棟、竪穴住居跡４軒からなっている。やはり大型の掘立柱建物を住居に小型の掘立柱建物を倉庫に、竪穴住居跡を釜屋に比定しており、掘立柱建物の数や規模には多少の差があるが、基本的な構成は寺家前遺跡や横山遺跡のあり方とも良く似ている。また、周囲に居館部分とした区画Ａとは建物群の構成が異なる群が４群ほど認められていることも､類似している。ここでも、区画は不正方形であり、明確な門の遺構は検出されていない。

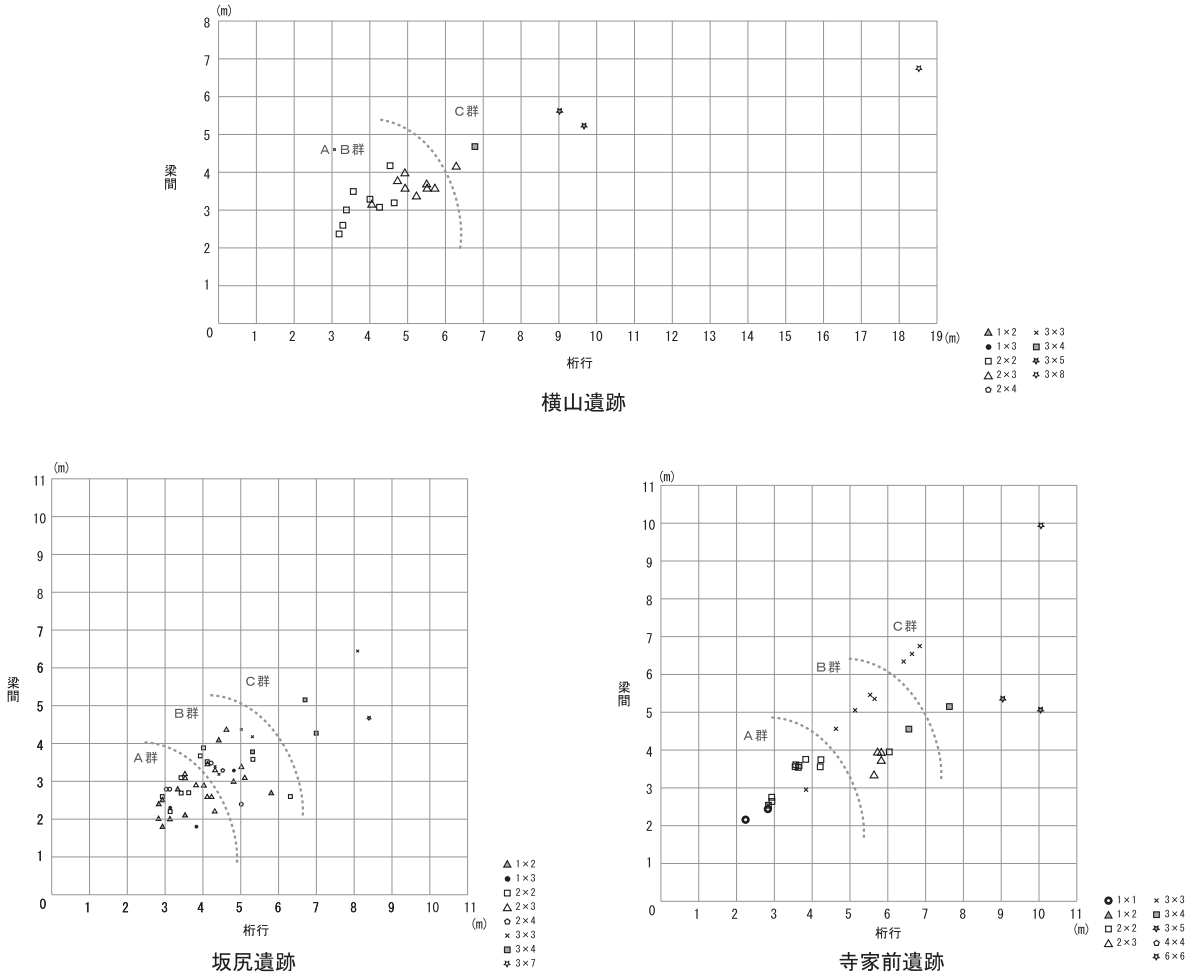
（イ）横山遺跡の柵列と掘立柱建物と竪穴住居跡

横山遺跡は須恵器Ⅳ期前半から始まりⅤ期にまで及んでおり、７世紀中葉から８世紀前半までの大集落であるが、遺跡の中心部分に柵列で囲まれた長台形に近い区画内に大型の掘立柱建物を中心に掘立柱建物群、その周辺から掘立柱建物と竪穴住居跡が検出されている。中心部分の掘立柱建物群は重複関係や建物の棟方向のずれなどもあり、まだ充分に分析されていないが、いくつかの時期と組み合わせが考えられている。SH203とした大型の柱掘形をもった４間×２間の掘立柱建物を中心にこれに伴う柵列あるいは棟方向を同じくする建物群からなる一群、あるいはSH207・SH224などの大型の掘立柱建物を中心とする建物群などを抽出することができる。したがって、中心部分の掘立柱建物群を豪族の居館跡と考え、周囲に広がるいくつかに分割が可能な掘立柱建物群と竪穴住居跡群を、豪族を支える一族の建物群として、全体でこの地域に威をふるった豪族の居館とその集落と考えた。

横山遺跡中心部分の掘立柱建物群はその外側に配置された柵列あるいは掘立柱建物で区画されており、一つのまとまりを示している。柵列は必ずしも完結しているものではなく、不正方形で、柵には途切れた部分もある。例えばSA201あるいはSA202の南側は同一位置で途切れており、この部分が出入り口であったことを推定できる。このように区画が不成形で、柵あるいは掘りが完結していないことは寺家前遺跡の場合と良く似ており、奈良時代の官衙遺跡の外部施設が大略方形をなし、門が設けられている場合が多いことと明確に差がある。私的な空間と公的な空間の差異であろうか。

（３）掘立柱建物の大きさ

寺家前遺跡の掘立柱建物群には床面積から大・中・小の区別があり、それぞれの規模によって遺構の



第 127 図　掘立柱建物規模一覧図

用途・性格に違いのあることが推定されてきている。第 127 図に改めて建物規模を示した。

Ａ群　最も規模の小さなものは２間×２間で、床面積も 20 ㎡前後あるいはそれ以下のものが多い。これは床張り、土間造りを問わずおそらく倉庫であったろう。

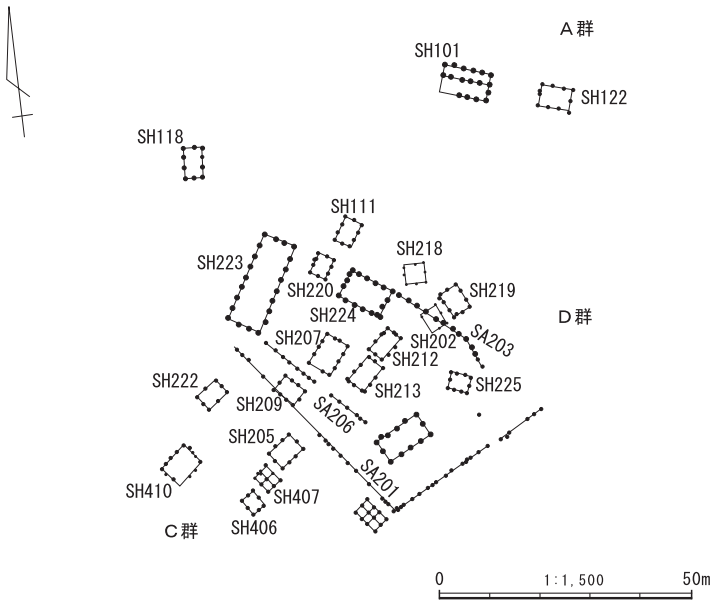
Ｂ群は２間×３間程度のもので、面積は 25 ㎡程度のものが中心である。Ａ群の建物よりは面積がやや大きくなっている。

Ｃ群　梁間が３間以上のもので（庇を加えるとさらに大きくなる）、その規模には幅があるが、梁間２間のものとは建物の構造が異なっており、外観もかなり差があったと考えられる。これらには SH311 のように３間×５間と梁間より桁行が長い建物と３間×３間あるいは４間×４間（SH210）とほぼ正方形をなすものとがある。いずれも住居であろうが外観にはかなりの差があろう。

横山遺跡でもＡ群とした２間×２間のものは 20 ㎡前後あるいはそれ以下の規模のものが多いことは寺家前遺跡の場合と同じであるが、Ａ群とＢ類群とした２間×３間の建物群の規模が比較的接近している。Ｂ群とした建物に比較的規模の小さなものが多いことを示していよう。梁間３間の建物は多くはないがやはり建物群の中心に位置し、その規模も大きくなる。

坂尻遺跡では建物の規模と柱間の関係は比較的バラツキが多いが、やはりＡ群とした２間×２間の建物には 20 ㎡以下のものが多く、規模的にはこれに重なってＢ群とした２間×３間の建物がある。やはり梁間３間の建物（Ｃ群）には規模の大きなものが多い。３間×３間の建物にも一部には 20 ㎡前後のものが含まれている。

以上見てきたように、３つの遺跡ともにＡ・Ｂ群のあり方には差が少ない。詳しくみれば坂尻遺跡のＢ群が規模が小さく、Ａ群の広がりと重なっている程度である。Ｃ群とした梁間３間以上の建物には横山遺跡や坂尻遺跡ともに、梁間に比べて桁行が長い建物が多いのに対して、寺家前遺跡の特にⅡ-1 群には梁間・桁行の長さが近似している建物の存在が目に付く。建物の規模を大きくする場合、梁間が同じであれば、桁行を大きくすることで可能であり、構造的にも比較的容易なはずである。これに対し梁間を拡大することは建物の構造上にも大きな影響があったと考えられよう。したがって、両者には外観もかなりの差が合ったことが窺われる。



第 128 図　横山遺跡集落中央部掘立柱建物配置概念図

このように、横山遺跡・坂尻遺跡と寺家前遺跡とでは主に居住用の建物の外観を中心にかなりの違いがあったことをうかがうことができる。

４　SH210　四面庇の建物について

SH210 は４間×４間の身舎の四面に１間ずつの庇を付けた６間×６間で平面積 100 ㎡になる大きな建物である。この建物の屋根がどのような構造、外観を持っていたのかはわからないが、こうした平面形をもつ建物の例は多くはないようである。早く発見された群馬県三ッ寺遺跡の１号掘立柱建物あるいは同じく中溝・深町遺跡に良く似た形態の建物が知られているが、これらはいずれも古墳時代中期あるいは前期の建物であるので、ここでは別にすると、同じ７世紀代の建物として、良く似た構造の建物に大阪市遠里小野遺跡の掘立柱建物がある。ここでは周囲を柵で囲んだ中に２間×２間の身舎の四面に庇を付けた建物が検出されている。規模の大きな建物で、平面積は 207 ㎡に及んでいる。建物の前後に大きな柱穴が一箇所ずつ検出されており、遺跡の占める地理的な位置からも「津の管理に関わる楼閣風のたてものだろう」と考えられている（積山・清水　1989）。かなり特殊な建物であろう。

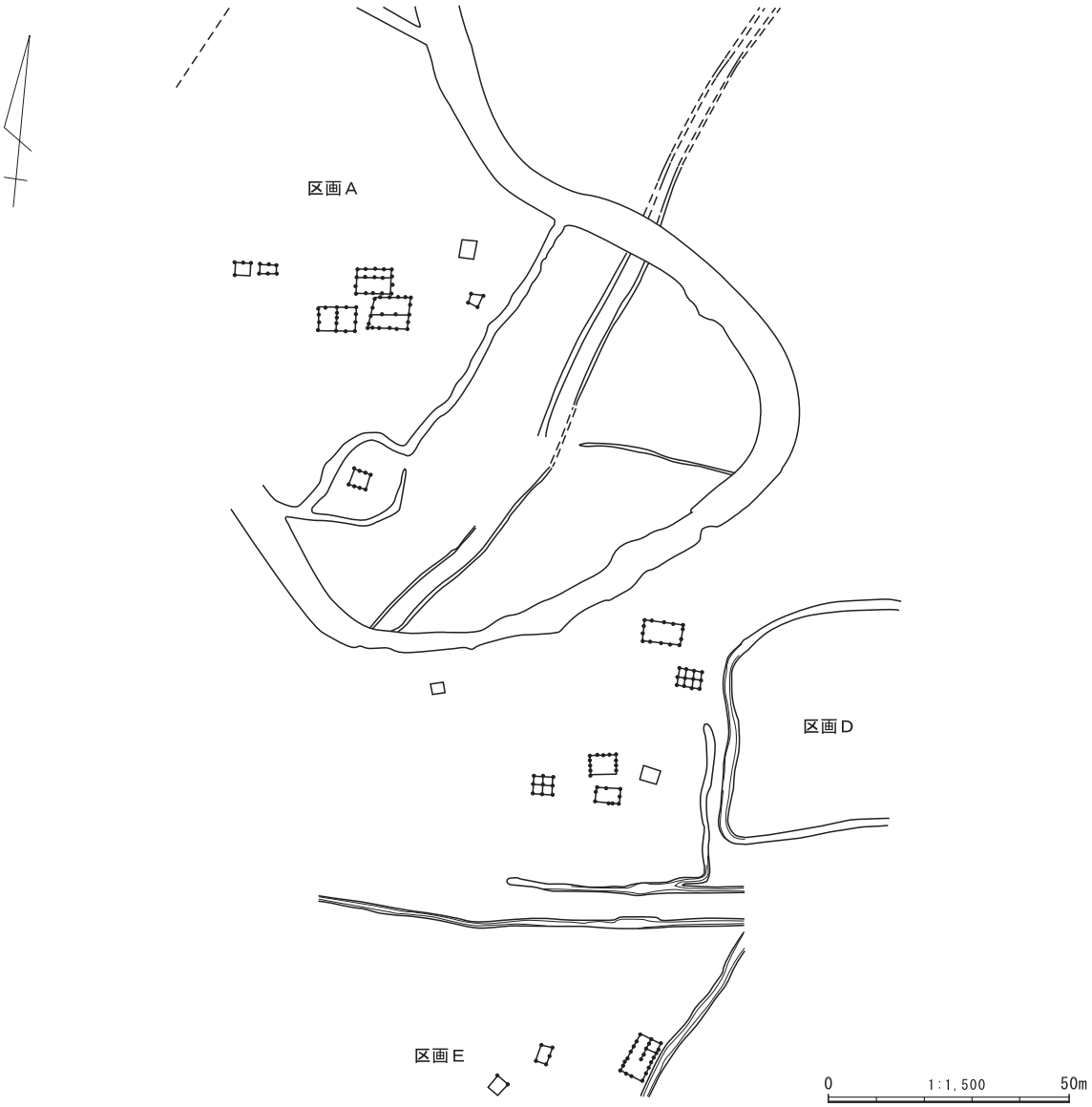
また、奈良県上の宮遺跡では、中心部分から６～７世紀初頭の段階の建物として４間×３間の身舎の４面に庇を付けた掘立柱建物が検出されている。「大陸的様相の強い」「飛鳥貴族の邸宅」（清水 1996）だと考えられている。桁行の数はともかく４面に庇をもった建物はかなり特殊な建物であり、特異な外観をもった建物であることが理解できる。寺家前遺跡では３間×３間の建物に加えて、中心に位置する SH210 の特異な外観は周辺地域に大きなインパクトを与えた建物であることが理解できよう。

５　出土した遺物

検出された遺構から寺家前遺跡の建物群を古墳時代後期の地方豪族の居館であろうと推定したが、次に出土した遺物に触れてみたい。

（１）須恵器と土師器の比率

須恵器・土師器の個体数は須恵器 516 点、土師器 478 点を数える。したがって、須恵器が 50％強、



第 129 図　坂尻遺跡古墳時代集落構成概念図

土師器が 50％弱ということになろう。他の遺跡での比率をもちあわせていないので、明確にはならないが、須恵器の占める割合が高い印象をもっている。

後で再度触れるが、須恵器・土師器ともに坏類の占める割合が非常に多く、土師器で 76％、須恵器で 57％を占めており、坏類の占める割合が非常に高いことが注意される。

また、前項でも触れているように、須恵器の器種組成は衣原１号窯での組成と良く似ており、坏以外にもと壷・提瓶・横瓶など多くの器種を含んでいる。

（２）SR9526 と SR8280 の土器

SR8280 は SR9526 の上層に当たる部分で、下層の SR9526 は須恵器Ⅲ期末葉の段階の須恵器が出土しており、上層はⅣ期前半の須恵器を伴う時期だと考えているが、出土した土器は両者の間で基本的には差がない。したがって古墳時代後期のこの段階で、集落での土器群の構成に大きな差があったとは考える必要はない。

（３）坏類が圧倒的な量を占める

SR9526 出土の土師器は個体数でみて圧倒的に坏類の比率が多く、出土量の 70％を数えている。これ

は寺家前遺跡の包含層出土土器のうち、土師器坏の占める割合が 40％程度であったことからみると、突出しているということができる。良く似たあり方を示す遺跡に神明原・元宮川遺跡の土器集中部分が（宮川３区 SX481・SX478 など）ある。神明原・本宮川遺跡のこうした土器群は祭祀に伴う廃棄跡だとされておることから、先にも触れたように、SR9526 出土の土器群を寺家前遺跡の集落で行われた祭祀に伴うものだと考えている。

また、先に触れた坂尻遺跡でもＡ群のうち特殊な建物とされた SX １に近接する SD80 と SD148 から出土した土器群は土師器供膳具が 60％、須恵器を加えると 70 ～ 80% 以上が供膳具だとされている。供膳具の出土比率が集落の一般的な傾向と異なることから、この遺構群を、祭祀を宰領した首長居館の根拠に挙げている。

そうだとすれば、寺家前遺跡でも集落内を流れる SR9526 出土の土器群に坏類が圧倒的に多いことから、この遺跡を、この地で祭祀を宰領した豪族の居館だとすることが可能であろう。

６　焼け損じ、変形した須恵器の出土

居館跡を示す積極的な資料あるいは特殊な遺物は検出されていない（出土した遺物の何を以て居館跡だと考えるのはかなり難しい）が、土師器坏類が非常に多い遺構が含まれていることをみてきたが、あわせて注意を要するものに、焼損じ、変形した須恵器の出土が目に付く。明らかに実用には耐えないと思われるものは坏・高坏だけでなく、横瓶あるいは甕などほぼ全ての器種に及んでいる。製品と焼けひずみ、あるいは熔着のある須恵器の比率は本文でも述べているとおり 17％ほどであるが、一般的な集落遺跡あるいは古墳と比較すると著しく多いことが知られる。

実用には耐えなく、当然流通にも乗らなかった須恵器の出土が多いことの理由を探し出すのは難しいが、一般の集落には多くはみられない、いわば不良品を多く出土する遺跡は、それら須恵器の生産に係わった人達と関係が深いことは十分推定できよう。したがって寺家前遺跡は隣接する衣原古窯や入野高岸古窯で須恵器生産に係わった人達に関する遺跡だと考えて良い。とすれば、寺家前遺跡で検出された居館跡は、それらの地域で直接的に須恵器生産を主導した豪族の居館だと考えることができよう。

須恵器生産を行った窯跡、あるいは須恵器製作の工房跡の調査例は数多く認められる。工房跡の遺構の多くは窯に隣接しており、様々な製作工程を示す遺構が認められている。しかし、工人達の居住した集落の例はあまり知られていない。これは工人の集落が基本的には他の集落との間に大きな差がないことからでもあろう。先に、変形・熔着した須恵器の出土量が多いことから、衣原遺跡を隣接する助宗窯での生産に従事した人達の集落ではないかと推定したことがある（（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所 2010）。今回は寺家前遺跡から検出された建物群を、時代的に重なる衣原古窯あるいは入野高岸古窯での須恵器生産を主宰した地方豪族の居館であろうと考えている。

寺家前遺跡をこの地域の須恵器生産を含めて、新たな始まった新技術集団を率いた人物の館だとしたが、３間×３間のほぼ正方形を呈した建物あるいは４面に庇のある建物をもった集落の景観も従来の古墳時代の集落とはかなり異なってみえており、いかにも新しい技術集団の出現を思わせよう。

この段階は志太平野の入野高岸古窯・衣原古窯さらには静岡平野の秋葉山窯跡・東山田古窯跡などで新たな須恵器生産が始まった段階であり、従来よりも東の地域に須恵器生産が拡散した時期でもある。寺家前遺跡をそうした新しい生産技術の展開に関わって、地方に招聘あるいは進出してきた技術集団とその宰領者の居館だと考えている。

この時期の須恵器生産がどのような組織あるいは機構の中で行われたのかについての検討は全くできていない。近年注目されている「ミヤケ」との関係を含めて、さらに検討を要しよう。

第４節　「駿東型の甕」の出現と終焉

静岡県の東部、駿河湾を巡る地域は律令制の下では駿河国に当たるが、この東部地域を中心に、古墳時代の後期から奈良時代にかけて、特徴的な甕が広がっていることは早く小野真一氏が注意されて「在地的な土器」との位置付けをしている（小野　1972）。また、天間代山遺跡の報告書では「球胴甕」として、伴出している長胴甕を含めて、分布とその系譜の検討も行っている（植松　1977）。また、富士市東平遺跡では奈良～平安時代の土器が多量に出土し、甕についてもその分類と編年が考えられている（平林・志村他　1981）。

「駿東型の甕」の名称が最初に使われたのは、こうした甕が認識されてから、多少遅れて 1983 年のこと（瀬川他　1983）らしい。その後、各遺跡で出土例が増加するとともに、その分布・形態変化さらには、その初現と終末についての見通しも大枠が示されてきており（北川　1988）、併せて、口縁部をくの字に屈曲させた駿東型の長胴甕（植松　2008）、あるいは大きくコの字状に屈曲させた長胴甕（コの字甕）など（註２）、奈良時代後半に広がる甕との組み合わせも論議されてきている。

甕のみでなく、奈良・平安時代の土器群全体についての組成と編年も 1990 年代には池谷初恵氏によって試みられており（池谷　1995）、その後、木ノ内義昭氏（木ノ内　2001）や植松章八氏などによって、さらに詳細に検討されてきている（植松　2008）。こうした編年作業によって、駿東型の甕の出発から終焉に至る大枠は現在ではほぼ共通の理解ができていると言って良いかもしれない。しかし、こうした作業に併行して、静岡平野の神明原・元宮川遺跡を始め、志太平野の藤守遺跡（柴田　2002）・寺家前遺跡など、駿河西部での集落遺跡の調査が進み、資料の蓄積も増えてきたことから、従来考えられてきた「駿東型の甕」あるいは「駿東型の長胴甕」さらには「コの字甕」への変化を含めて、新たな説明が必要になってきている部分がある。ここでは、寺家前遺跡の資料整理にあわせて、先学諸氏の編年観に従いながら、当該期の土器群の組み合わせとその変化の様相を整理し、その成立と終末の意味を再度考えてみたい。

１　駿東型の甕の資料

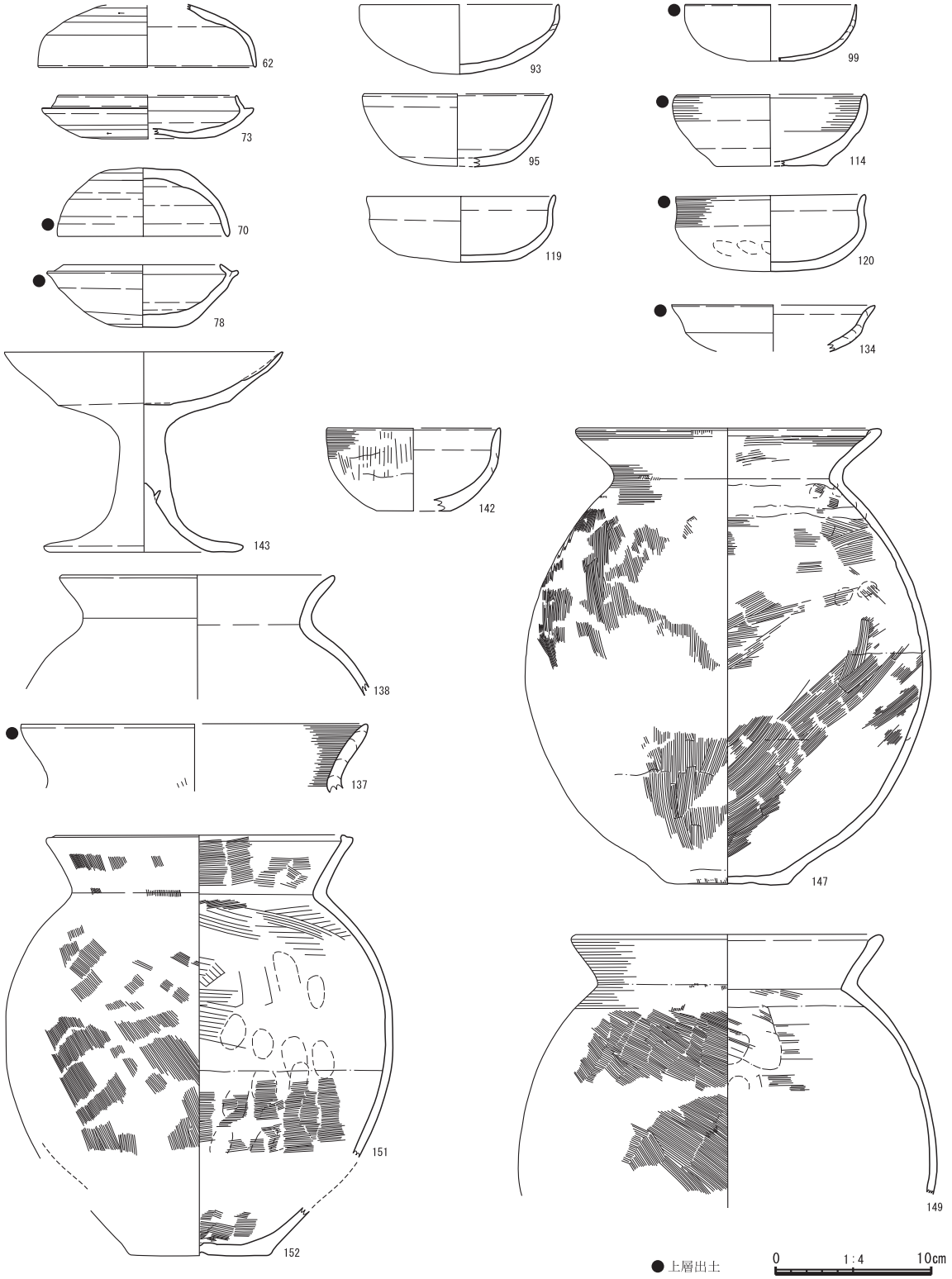
駿河での古墳時代から律令期の甕は集落遺跡からかなりの量が出土してきている。中でも駿東型の甕はその器形あるいは器面調整上の特徴から、比較的目に付きやすく、また出土量も比較的多いこともあって、年代・分布・形態的特徴とその機能など、様々な観点から、論議されてきており、明らかにされてきている部分が多い。先に触れたように、土器群の編年的研究は池谷・木ノ内・植松の諸氏によって詳細に述べられており、駿東型の甕の終末についても、８世紀後半（池谷）あるいは８世紀第３四半期（植松）とされ、特に後者では駿東型の甕の終末を奈良・平安時代における土器編年の大きな画期と位置付けられている。基本的にはその編年観に従って論議を進めるが、ここではその起源と終末に関わる土器群の様子について、本文で必要な部分に限って改めて簡単に触れていこう。駿東型の甕の研究史は早い段階で北川氏が触れている（北川　1988）ので、呼名については、それに従うこととし、駿東型の甕を出土した遺跡のいくつかを年代的に並べることにしよう。

（１）寺家前遺跡 SR9526 出土の土器（第 130 図）

寺家前遺跡では集落の中を流れる SR9526 と呼んだ細い自然流路から多くの土器が出土している。これらの土器についてはすでに触れているが、坏の占める割合が 70％を超しており、包含層全体から出土した土器のうち坏の占める割合が 40％程度であることと比較すると、坏の占める割合が非常に高い。同じような資料は、祭祀に伴う廃棄遺構だと考えられている静岡市の神明原・元宮川遺跡の流路跡で見られている。したがって、寺家前遺跡の SR9526 出土の土器群についても、この集落での祭祀のあと廃

棄されたものであろうと推定した。坏・甕を中心に多量な土器が出土しているが、その一部を再度第130図に示している。

SR9526は上・下２層に分けられるが、（図のうち●印を付けたものは上層のものである）須恵器で見れば下層からはⅢ期末葉（62・63）の坏が、上層からはⅣ期前半の坏（70・78）が出土しており、伴出した土師器も、ほぼその段階のものだと理解できる。土師器坏（註３）は下層からは各種のものが出



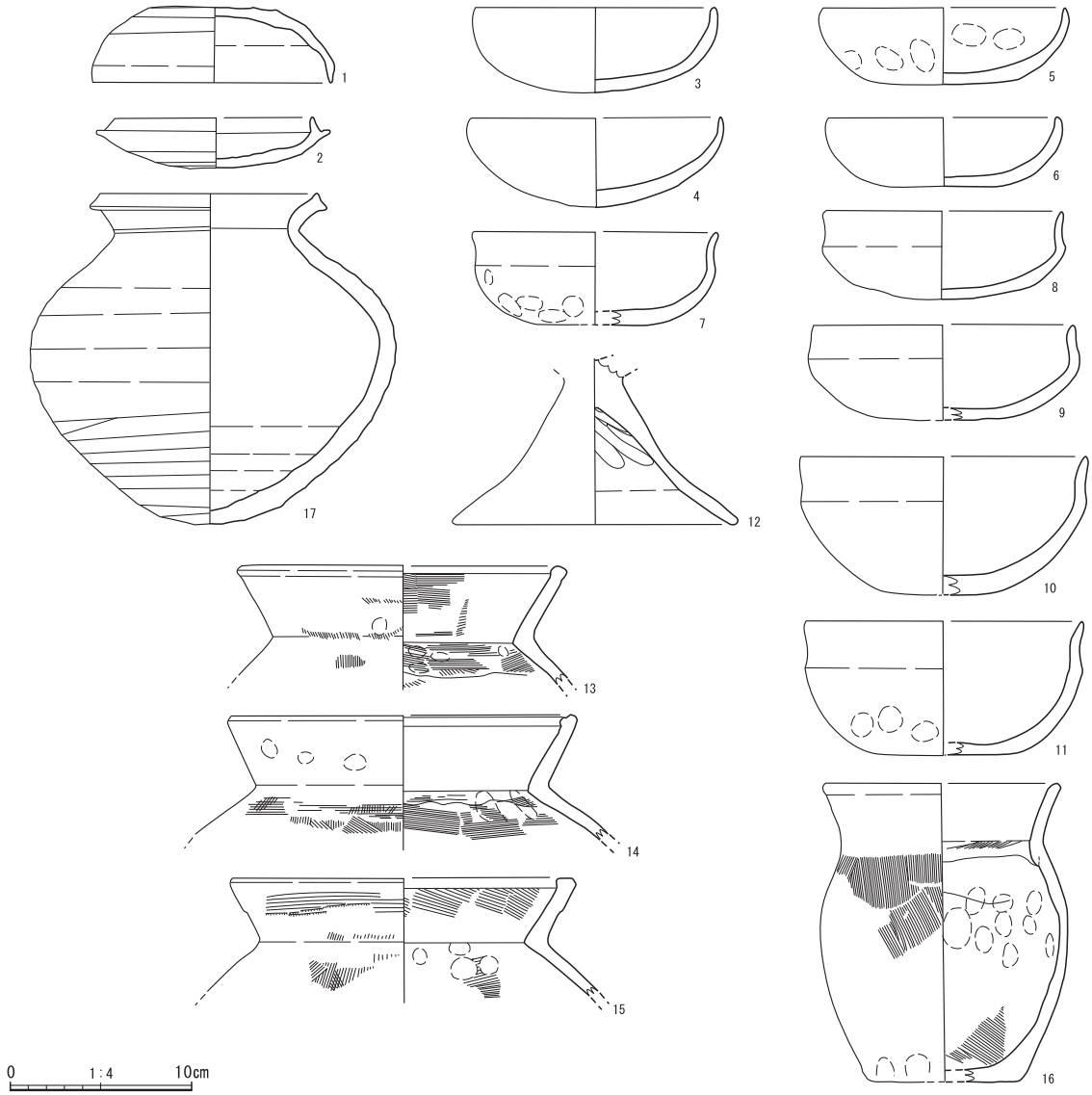
第130図　SR9526上層・下層出土土器実測図

土しているが量的にはA1・C類が中心で、上層ではA2・B類が中心になっている。したがって、上層と下層の間では坏類に多少の差がある。高坏の坏部は伝統的な土師器高坏の坏部であるが、脚が中実になってきている。

甕にはA類とした口縁が外に張り出し、胴部の比較的張った丸胴に近い甕（15）があるが、量的に多いものはD類とした駿東型の甕（147・149・151・152）である。図示したものはいずれも下層出土のものであるが、口唇部の形態からD1・D2・D3類とほぼ全てが含まれている。志太平野におけるこの段階の土器の様相を示す資料であろう。土師器の器種分類については報告書本文での分類を基本にしており、以下の遺跡資料の説明では可能なかぎりこの分類で説明してゆくが、土師器は比較的小さな区域で形態・分類・組み合わせに変化があり、駿河東部では報告書での分類と一致していない部分がある。

（２）神明原・元宮川遺跡宮川３区 SX481 出土土器（第 131 図）

静岡平野の東を流れる大谷川の改修工事に伴って早くに発掘された遺跡であり、旧流路を中心に多くの土器溜まりが検出されている。川の流れの跡からの出土でもあり、共に採集された木製祭祀具との共伴関係を含め、出土状態について論議を呼んだが、木製品を別にすれば、土器群には比較的まとまりのあるものも含まれている。ここに示したSX481もそうした遺構の一つで、SR485呼んだ旧流路の左岸側



第 131 図　神明原・元宮川遺跡宮川３区 SX481 出土土器実測図

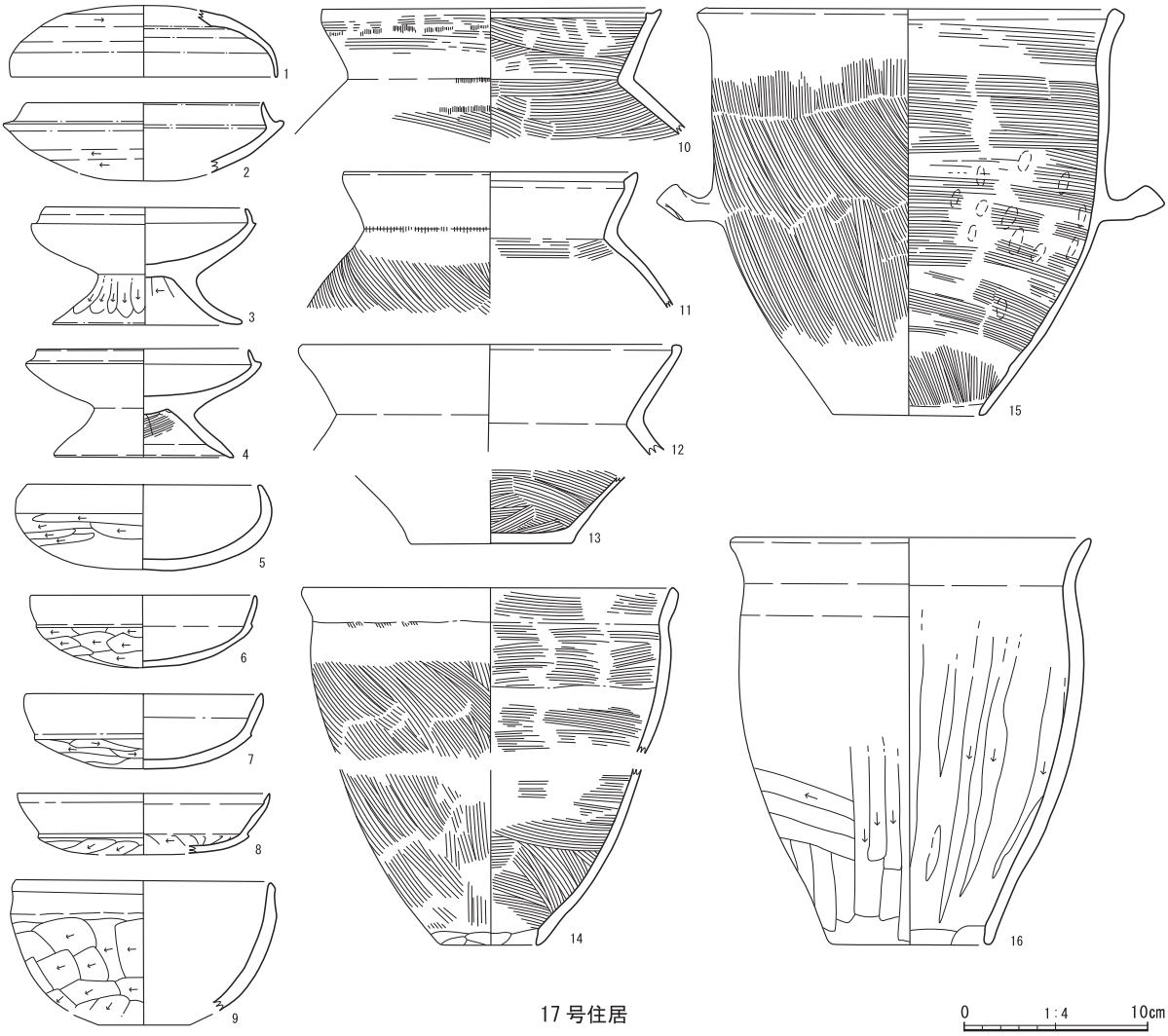
で検出され、流路が埋没していく過程で投棄された土器群だとされている（成島　1987）が、南北６ｍ×東西１ｍほどの範囲から出土したもので、南北で土器の様相が多少異なり、北側では甕が多く、南側は坏が中心であるが、両者は基本的には一体のものだと考えられている。

第Ⅲ期末段階の須恵器坏（１・２）に伴って、土師器坏 A1・A2・C類（７）が出土しており、量的に最も多いものはC類の坏である。口径は 12 ～ 14cm と比較的まとまっている。この他に高坏A類、鉢 C2 類などが出土しており、これに伴って駿東型の甕が検出されている。土師器坏B類は検出されておらず､また高坏も破片ではあるがA類のもののみである。高坏B類あるいは坏B類は検出されておらず、これらが、SX481 より時間的に多少遅れるものであることを示していよう。駿東型の甕は D1・D3 類が含まれている。

（３）中島下舞台 17 号住居跡出土土器（第 132 図）

遺跡は田方平野を南北に貫流している狩野川の支流である大場川、さらにその支流に当たる御殿川の改修工事に伴って発掘された遺跡（鈴木他　1983）である。ここではその 17 号住居跡出土の土器を挙げた。この土器群は北川氏によって駿東型の甕第２段階の資料として取り上げられる（北川　1988）など、比較的早くから注目されてきた資料である。

17 号住居跡は調査区の東端で検出された竪穴住居跡で、他の住居跡との切り合いは内側が一部すでに削り取られるなど、多少荒れていた。竈を北面に付けているが、住居跡内からは須恵器Ⅲ期後葉段階

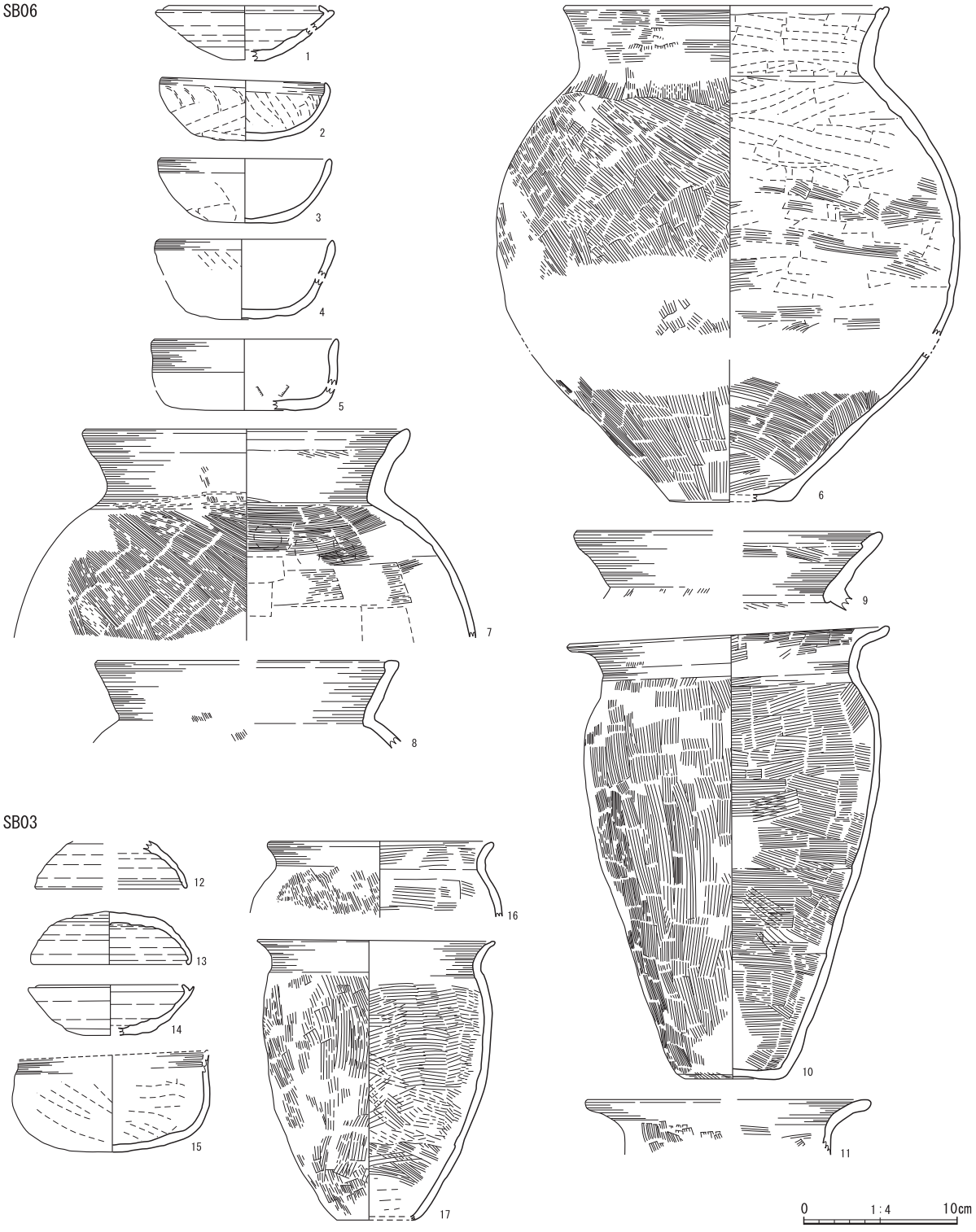


第 132 図　中島下舞台遺跡 17 号住居出土土器実測図

の坏蓋・身が検出されており、土師器は坏 A2 類（５）・D類（６～８）、高坏C類（４）、碗A類（９）、駿東型の甕Ａ・Ｂ・Ｃ類、胴部を縦方向にヘラケズリを施した１孔式の甑などが検出されている。坏はD類とした模倣坏が多いが、全て坏蓋が坏身に転化した形態のものである。駿東型の甕出現期の駿河東部における土師器の様相を示していよう。

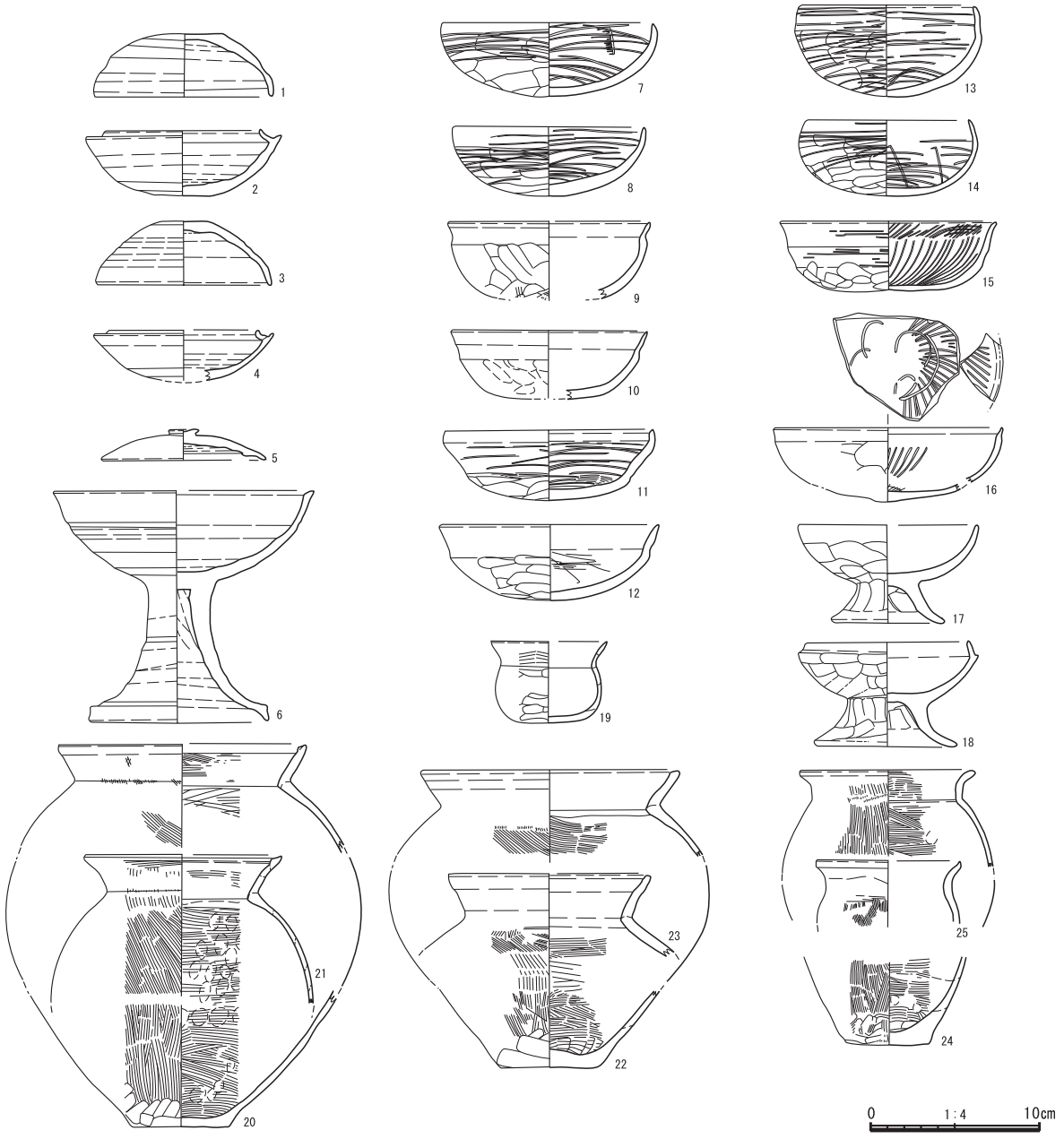
（４）藤守遺跡 SB03・SB06 出土土器（第 133 図）

大井川左岸の下流域に所在する遺跡で、現在の航空自衛隊静浜基地の下層から周辺に広がっている。



第 133 図　藤守遺跡 SB03・SB06 出土土器実測図

2000 年に行われた発掘調査で、古墳時代末から奈良時代にかけての竪穴住居跡９軒と溝跡などが発掘された（柴田　2002)。ここではそのうち SB03・SB06 号住居跡から出土した土器を取り上げる。SB03・SB06 ともに調査区の北端近くで検出された方形を呈する竪穴住居跡で、他の住居跡とは重複はしていない。両者ともに北東面に竈を付けている。SB03 からはⅣ期前半に比定できる須恵器坏身・坏蓋が出土しており、そのほかに図示はしなかったが坏部が丸くなった無蓋の高坏が何点か出土している。したがって、須恵器坏で示されるⅣ期前半段階の住居跡であろう。土師器は C1 類とした鉢（６）が伴い、甕は D1・D2 類の駿東型の甕がある。注意されるのはこれに伴ってＢ類の甕が出土していることである。第 133 図 17 の甕は少し小振りではあるが、口縁部を外側に張り出し、胴部が直線化した長胴甕で、第 133 図 10 ほど口縁部が強く外反していない。他の遺跡ではさほど類例は多くはないが、藤枝市東浦遺跡 C-6 号住居跡（八木　1988）など志太平野の当該期の遺跡でまま見られる甕である。おそらく、奈良後半段階に駿河各地で確認されている、駿東型の長胴甕と呼ばれている甕の祖形となるものであろう。



第 134 図　横山遺跡 SB104 出土土器実測図

SB06 からやはりⅣ期前半の須恵器坏（１）が何点か出土しており、これに伴って土師器坏 A2 類（２・３）、Ｃ類（５）などが伴出している。合わせて D2・D3 類とした駿東型の甕が出土している。10・11 は口縁を外側に強く張り出した、いわゆる「コの字甕」であり、平坦な底部を持った長胴甕である。大井川以西の遠江では主流を占める甕である。

（５）横山遺跡 SB104 号住居跡出土土器（第 134 図）

横山遺跡は富士山の北東側、足柄峠を望む位置にある大規模な集落跡で、1983 年に小山高校建設に伴って、発掘調査が行われた（平野　1985）。この集落は須恵器Ⅳ期前半段階に遺跡の形成が始まり、奈良前半段階で終末を迎えている。須走駅跡あるいは足柄峠に関わる計画的な集落だとする意見もある（渡辺　1989）が、明らかではない。墨書土器など官衙を窺わせる資料の出土が少ないことから、むしろ７～８世紀前半にかけての、この地域の豪族の居館を含む集落だと考えている。

SB104 は集落の北端近くに位置しており、北西の端を SB103 に切られている。ちなみに、SB103 からはⅣ期後半段階の内側に返りをもった坏が出土している。SB104 からは須恵器Ⅳ期前半の坏（１・２）に加えて、猿投窯産の無蓋の高坏に加えて、碗状の坏部をもつ無蓋の高坏（６）が出土している。さらに坏蓋（５）が出土しているが、Ⅳ期後半に比定されるこの須恵器坏の有・無はこの段階の土師器の組み合わせには基本的には影響はなかった。土師器坏Ａ（7・8）・坏Ｃ（9・10・15）・坏Ｄ類（11・12）が中心で、坏Ｃ類には内面に放射状の暗紋を施すものがある（15）。この他に鉢 A2（14）・鉢 C2 類（13）がある。高坏Ｃがあるが坏部が模倣坏の形態をなすもの（18）と、碗状をなすもの（17）とがある。

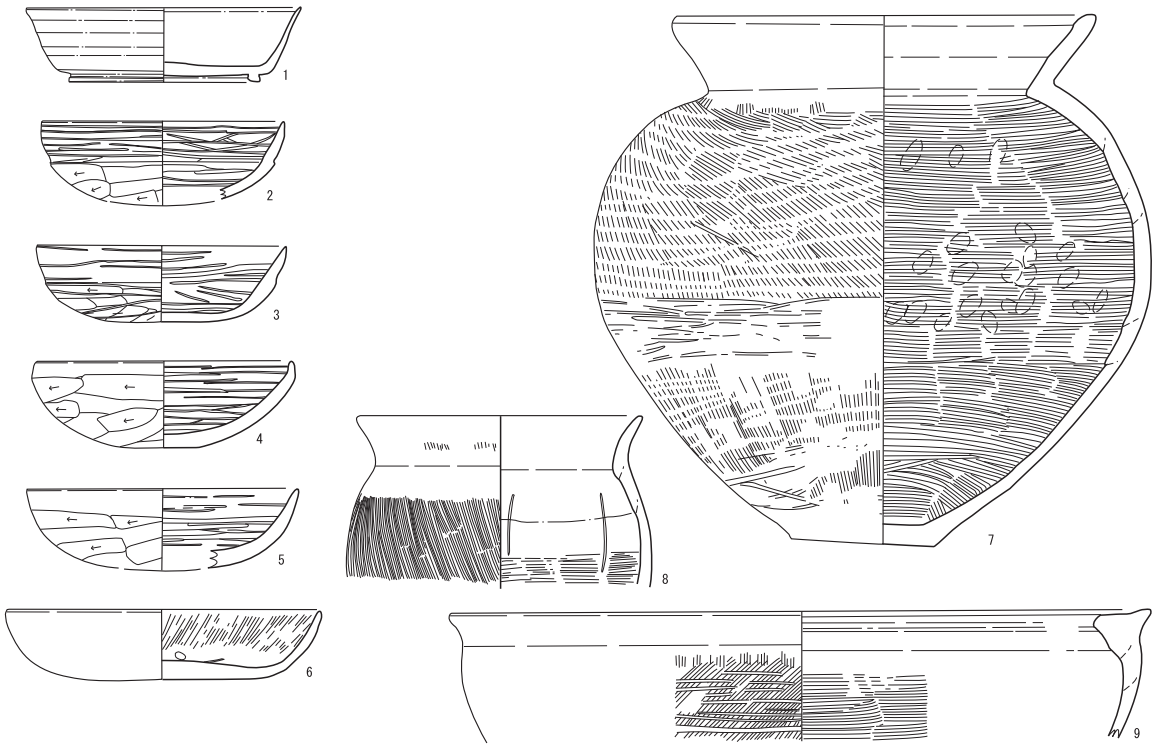
甕は駿東型の甕が主体で、D1・D2・D3 類共に認められる。しかし、注目されることはＢ類の長胴甕が出土している（24）ことで、小型甕にもＣ類が含まれている（25）。この段階に駿河東部にもこうした甕の存在を確認することができる。

（６）伊豆逓信病院敷地内遺跡４号住居跡・23 号住居跡出土土器（第 135 図）

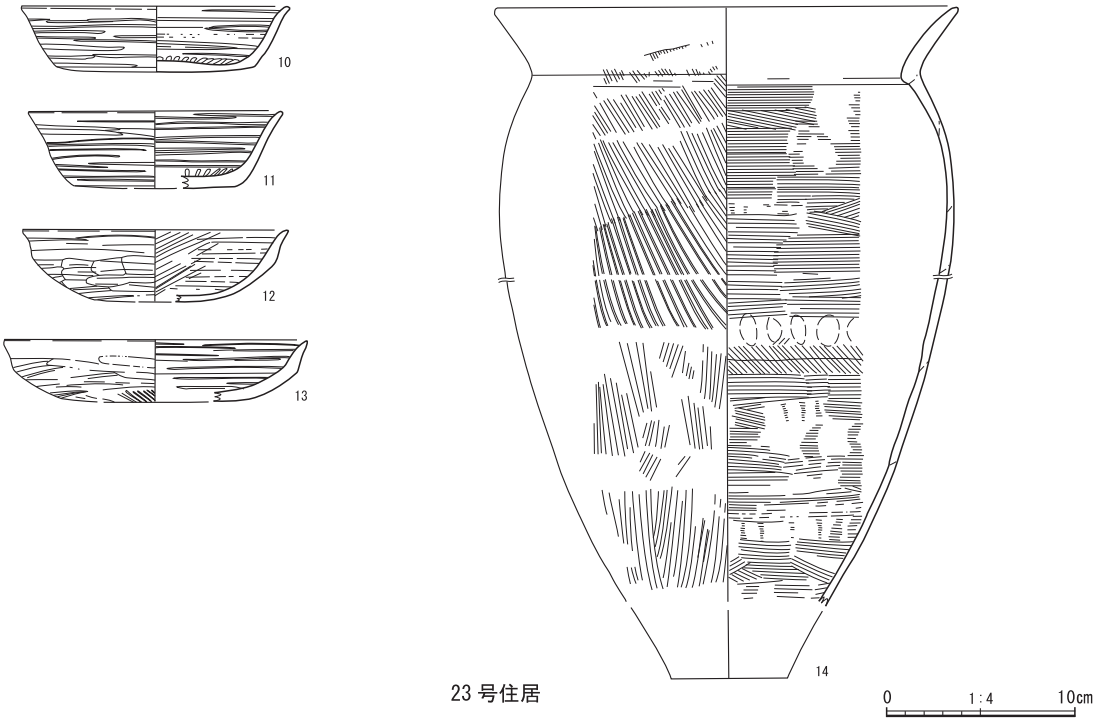
静岡平野以西では奈良時代後半の集落など、良好な資料を出土した遺跡が確認されていないので、ここでは駿河東部を中心に、比較的早い段階で調査された資料によることになる。伊豆逓信病院敷地内遺跡は函南町平井に所在する遺跡で 1982 ～ 83 年にかけて発掘調査が行われ、大きな集落跡の一部が確認された（長野他　1984）。ここではそのうち４号住居跡と 23 号住居跡の資料を見てみよう。

４号住居跡はＦ区とした調査区のほぼ中央で検出された竪穴住居跡で、この時の調査で検出された竪穴住居跡の中では最大の規模であり、出土した遺物の量も多い。検出された須恵器坏は全て高台坏である。１に示したものは平坦な底部をもった坏であるが、伴出している坏には底部が高台よりも下がっているものがあり、図示した土器も実測図で見る限り、高台の形態にも差があり、助宗窯産の須恵器だとは思えない。したがって、須恵器坏で見る限りこの住居跡は助宗窯での須恵器生産が開始される以前の奈良時代前半のもということになろう。土師器坏には坏Ｄ類とした模倣坏が多い（２・３）が、器面の内外を丁寧にヘラ磨きを行っており、駿河東部に特徴的な坏である。A1・A2 類とした坏に良く似た形態の坏があるが、器面の調整は外面はヘラケズリ、内面はヘラ磨きで、寺家前遺跡で A・A2 類と呼んだものとは全く異なっており、やはり駿河東部で特徴的な坏である。内・外面に赤彩の施された皿（６）が含まれている。甕は当然のこととして全て駿東型の甕で D2 類（７）が多く、D3 類も含まれている。D1 類としたものは含まれていないが、この時期になかったということではないだろう。この他に少量ではあるが、小型のくの字長甕（８）がある。

23 号住居はＤ区の南西の隅で検出された住居で、攪乱によって西半分は失われている。北壁の中央部に竈を設けており、竈内から坏と長胴甕が出土している。坏Ｄ類（12）と底部が平坦で、口縁の立ち上がりがきつく、全体に箱形を呈したいわゆる駿東坏が伴っている。これらは底部に放射状のヘラ磨きを施している（10・11）。13 は皿であり、内面は横のヘラ磨きを施している。14 は口縁を外側に強く



４号住居



23 号住居

第 135 図　伊豆逓信病院敷地内遺跡４・23 号住居出土土器実測図

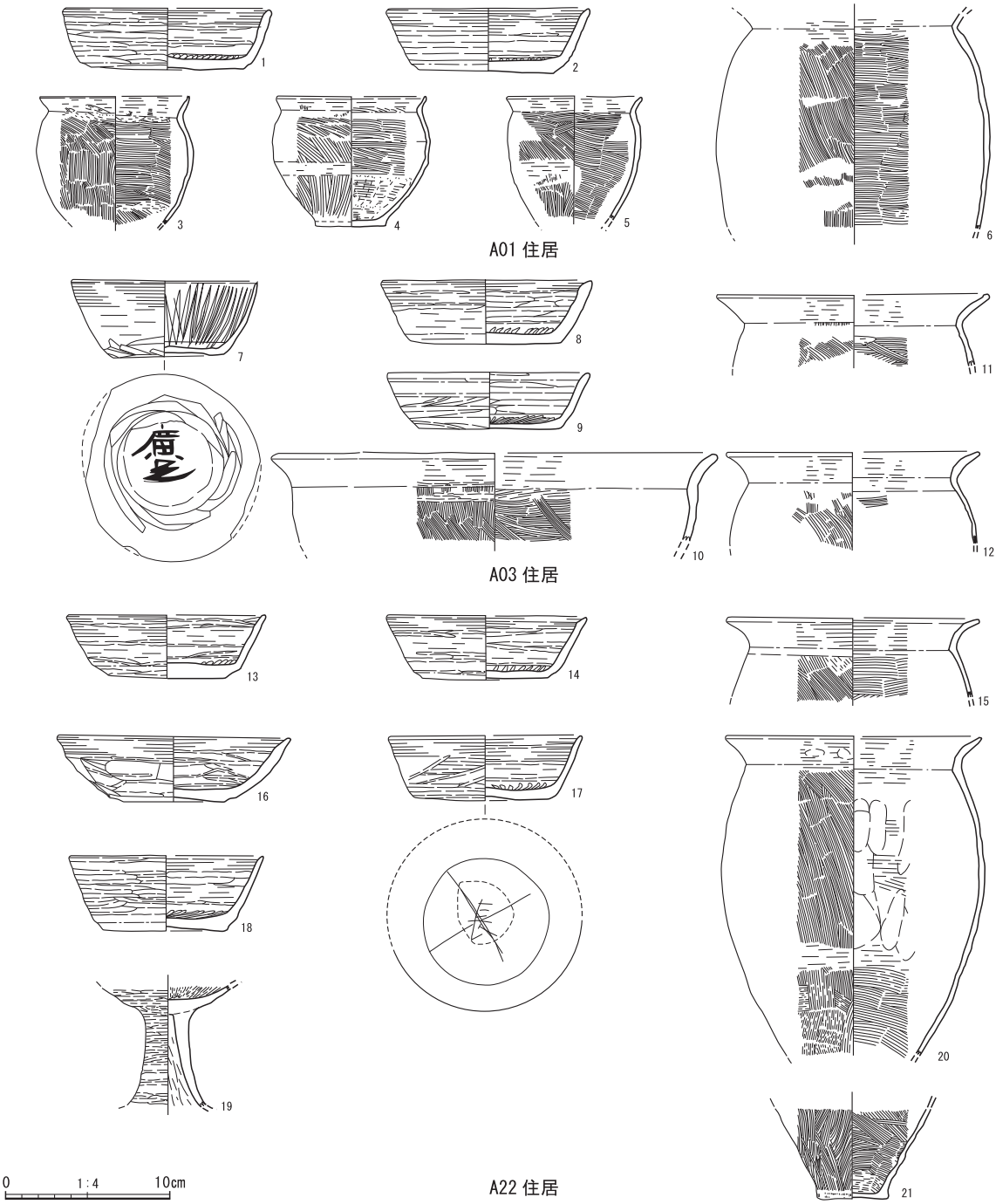
張り出した駿東型の長胴甕である。胴部外面は縦方向のハケ、内面は横方向のハケを施している。したがって、23 号住居跡の資料から駿東坏に伴っているのは駿東型の甕ではなく、駿東型の長胴甕であることが理解できる。こうした段階の資料として、富士川流域の三新田遺跡あるいは早く資料が示された

天間代山遺跡の資料を挙げることができよう。

（７）三新田遺跡 A01・A03・A22 住居跡出土遺物（第 136 図）

三新田遺跡は富士川の東側に広がる田子の浦の砂丘地域に形成された遺跡で、1981 ～ 82 年にかけて調査された（平林・志村他　1983）。古式土師器を伴う集落と共に奈良時代の集落が発掘されている。ここでは主として３軒の竪穴住居跡から出土した土器をとりあげることにする。

A01 住居跡出土土器（１～６）　調査区の東端で検出された、比較的小さな竪穴住居跡で、西壁に竈を持っている。竈の脇から土器群が出土している。1・2 は駿東坏で底部内面に放射状のヘラ磨きをもっている。これに口縁部の先端を欠くが、駿東型の長胴甕がともなっている（6）。この他に C2 類とした小型のくの字甕（4・5）が伴出しており、先の逓信病院内 23 号住居のあり方と同様である。



第 136 図　三新田遺跡 A01・A03・A22 住居出土土器実測図

A03 住居出土土器（７～ 12）　調査区の南西側で検出された竪穴住居跡で８号竪穴住居跡と北東隅が重複している。竈は北面の中央部に設けられ、竈の東脇から「広足」と墨書された甲斐型の坏が出土している（７）。８・９は駿東坏で、底部に放射状のヘラ磨きを施している。10 は鍋である。これらに伴って駿東型の長胴甕が出土している（11･12）。坏と甕のあり方は、先の 01 号住居と良く似ているが、ここでは甲斐型の坏が伴っている。

A22 住居出土土器　調査区の南西部分に位置し、３号・１号住居跡に近接している。一部を２号住居跡に切られているが、北面の壁に竈を設けている。出土した土師器は駿東坏（13 ～ 15）とやや変形したＤ類の坏（16）に伴って、駿東型の長胴甕が出土している（17）。駿東坏は内面底部に放射状のヘラ磨きを施しており、形態からも 01・03 号住居跡から出土しているものと同様である。ここでは前段階で盛行する坏の影響を留めるもの（16）が出土しており、駿東型の坏の初期の段階のものであることが知られる。駿東型坏と駿東型の長胴甕が共伴する遺構は多く、A27 住居跡などでも認められる（19 ～ 21）。

以上、いくつか取り上げた竪穴住居跡出土の遺物で見るように駿東型坏が出現する段階で、駿東型の甕は姿を消し、駿東型の長胴甕に代わっていることが理解できる。

（８）天間代山遺跡７号住居跡出土土器（第 137 図）

富士山の西麓に位置し、天間沢を望む台地上にある遺跡で、かなり大きな規模の集落と推定されているが、1975 年に一部分が発掘調査されている（植松他　1977）。９軒の竪穴住居跡が発掘されているが、ここでは、最も規模が大きい７号住居跡出土の土器の一部を示した。７号住居跡出土の土器は早く植松章八氏によって、代山２類とされ、奈良時代後半から平安前期と位置づけられている。

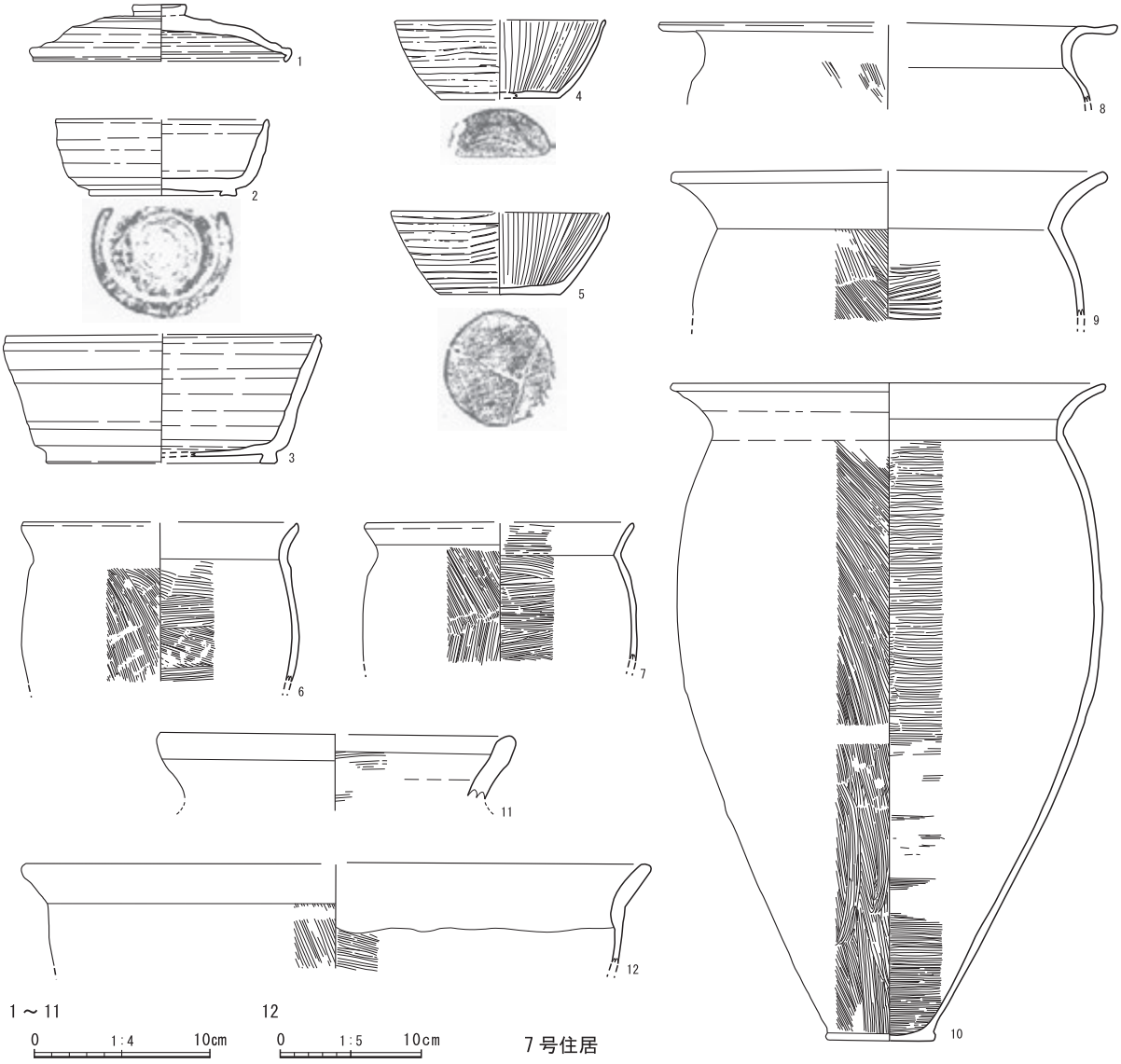
ここからは何点かの須恵器坏が出土しているが、形態からみて全て助宗窯産の須恵器坏だと考えられる。図示したものは平坦な底部にヘラケズリを施した高台杯である（２）が、糸切り痕がそのまま残されているものもあるらしい。したがって、須恵器坏には多少の時間差があることを考慮する必要があるかもしれない。土師器には甲斐型坏（４・５）があるが、駿東型坏の出土は確認されていないらしい。しかし、三新田 A03 号住居で見るように、この段階の甲斐型坏には駿東坏が伴っている。したがって、ここでも当然駿東型坏は伴っていたと考えて良い。甕には駿東型の長胴甕（9・10）とコの字甕（８）の両者があるが、この地域では駿東型の長胴甕がコの字甕に優先するらしく、先の三新田遺跡あるいは逓信病院内 23 号住居でも駿東型の長胴甕で占められており、コの字甕の出土例は多くはない。これは時間的に駿東型の長胴甕がコの字甕に先行するためなのか、何らかの事情でくの字甕が優先的に受け入れられた事の結果なのかは明確ではない。併せて、駿東甕が含まれている。この段階は、基本的には駿東型の甕がすでに駿東型の長胴甕に取って代わられた段階であり、先に触れたように資料そのものに多少の時間差を含んでいるのか、あるいは一部にはなお駿東型の甕が残っていると考えて良いのかのどちらかであろう。合わせて C2 類とした小型のくの字甕が何点か含まれており、加えて鍋が含まれている。

２　起源と終焉

駿東型の甕を出土した遺跡のいくつかを、比較的早い段階で調査された資料まで取り上げ、伴出する土器群の組み合わせも含めて、一部分説明してきた。ここでは表題に沿って、主にその起源と、終末に関わる問題を中心に考えてみよう。

①　駿東型の甕の出現

駿東型の甕は須恵器第Ⅲ期後半段階に駿河各地域で始まっていることは早い段階で気が付かれており、その起源についても北川氏がすでに述べている（北川　1988）。北川氏は明確な駿東型の甕はまだ含まれていないことを確認した上で、その起源を南伊豆町日詰遺跡の A-Ⅳ祭祀址出土遺物あるいは



第 137 図　天間代山遺跡７号住居出土土器実測図

H-12 号住居出土土器などに求め、中でも胴の張った甕に口縁を肥厚させる個体があることに注意をして、これが変化して、駿東型の甕の最大の特徴の一つである口唇部の肥厚になるだろうとしている。

しかし、A-4 祭祀址出土の土師器は関東での編年に従えば、和泉式の新しい部分か鬼高式の古い段階の土師器で、須恵器を伴うとすれば古式の須恵器であり、Ⅲ期後葉段階とする駿東型の甕出現までに多少の時間差がある。H12 号住居址出土の土器は甕だけが示されており、検討の手がかりは乏しい。むしろ H-3 号住居に駿東型の甕が出土しており、ここではⅢ期中葉から後半段階の須恵器坏が数点示されている（鈴木　1978）。須恵器に多少の時間差が考えられるが、駿東型の甕が後半の須恵器に伴ったと考えれば、他の遺跡でのあり方と矛盾はない。北川氏が第２段階とした H-4 住居跡出土の土器も須恵器を伴ってはいないが、ほぼこの段階のものであろう。

同じような段階の資料は早く調査された中島下舞台遺跡 17 号住居跡に破片であるがⅢ期後葉段階の須恵器に伴って、D1 ～ D3 類の駿東型の甕が出土している。神明原・元宮川遺跡３区 SX481 からはⅢ期後葉あるいはⅢ期末葉段階の須恵器に伴って D1・D3 類の駿東型の甕が出土している。したがって、駿東型の甕は北川氏が第２段階とした須恵器Ⅲ期後葉を伴う時期に各地域でほぼ一斉に始まっており、口

縁部の形態もD1 ～ D3 と分けた全ての形が検出されていることが理解できる。

駿東型の甕が須恵器Ⅲ期後葉段階に駿河の各地域でほぼ一斉に始まり、その当初段階から口縁部の形態も様々で、当初から駿東型の甕の特徴として挙げられた多くの特徴を備えていることはこの土器が従来の土師器甕の形態変化からもたらされたものではなく、あるモデルの存在を前提に、それを模倣することから始まったことを示していよう。そのモデルとは、広がり始めた須恵器甕だと考えて良い。口縁を複雑に作ること、胴部が丸く張った甕の器形は須恵器甕の模倣の結果であろう。したがって、その器形の変化は時間軸に比較して乏しく、土師器の甕が長胴化してゆく現象とは一線を画している。その背景は、須恵器模倣坏・須恵器模倣の高坏が受け入れられる事と同じような原理が働いたもので、当然その社会において、こうした形態の、新たな「甕」が必要であったことが背景にあろう。

② 駿東型の甕と組み合わせになる土器群

駿東型の甕の出現をⅢ期後葉からⅢ期末葉の段階における須恵器甕の模倣であるとしたが、次に、古墳時代末から奈良時代初期の土師器の組み合わせを見ながら、駿東型の甕の位置を考えてみよう。

藤守遺跡のSB06 はⅣ前半段階の須恵器坏を伴っており、土師器坏の志太平野でのあり方を示しているが、注意しなくてはいけないのはここでは駿東型の甕にともなってＢ・Ｃ類とした長胴の甕が存在している事である。藤守遺跡SB03 にも同様にＢ類の甕が伴っている。寺家前遺跡でもSR9526 ではＣ類の甕が伴っており（第130 図13)、包含層では駿東型の甕D1・D2 類も伴っている。したがって、駿東型の甕とＢ・Ｃ類の甕が伴うことが志太平野でのあり方だと考えて良い。坏類は坏Ａ・坏Ｂ・坏Ｃ類に少量の坏Ｄ類がともなっており、志太平野でのあり方を示していよう。先にも触れているように、坏類の組み合わせ・量的なあり方は静岡平野（神明原・元宮川遺跡、ケイセイ遺跡など）と志太平野ではかなり様子が異なっている。

同じようにⅣ期前半段階の須恵器を伴った小山町横山遺跡SB104 住居でも量的に圧倒的に多いのは駿東型の甕であるが、なかにＢ類および小型のＣ類の甕が含まれている（第134 図24・25)。この段階に駿河東部にも少量ながら、こうした甕が含まれていることは注意をしておく必要がある。言うまでもないことであるが、Ｂ類・Ｃ類の甕は胴部に縦方向のハケ調整を施しており、胴部にヘラケズリが顕著な相模など東国の土器とは明らかに様相を異にしており、その起源は、おそらく遠江以西で盛行している甕の影響を強く受けた駿河西部の志太平野に由来する甕であろう。横山遺跡での坏類は駿河東部の各遺跡に共通する要素で、静岡平野など駿河西部とは明らかに様相を異にする。従来から指摘されているように、土師器坏は駿河東部・静岡平野・志太平野などの比較的狭い範囲で形態、あるいはその組み合わせが異なっているが、駿東型の甕に限れば、駿河全域にほぼ均一な形態を保っている。このように、駿東型の甕は比較的均一な形態を保っていることが、かえって、従来行われてきた形態分類と編年は明快にはならなかった原因でもあろう。なぜなら認識された駿東型の甕の形態差は有意性のある形態差ではなかったからである。先にも述べたように駿東型の甕の形態変化は口縁部の形態変化が示していると考えられる。その変化は複雑なものから単純なものへと変っているようにも見える。それはともあれ、こうした均一な形態はこの甕の持つ役割が各地域で一定のもので、大きな変化のなかったことに依るのであろう。

また、駿河西部では煮沸形態の長胴甕を伴っているが、静岡平野以東では煮沸形態の甕は少ない。小型の甕が目に付く程度であるが、合わせて、鍋の出土が注意される。出土量の点検を行っていないが、各遺跡から出土していることが目に付く。あるいはこの地域では鍋が煮沸形態の土器として、重要な機能を果たしているのかもしれない。これは大井川の西側とは大きく異なる要素であり、西の長胴甕に対し東の鍋と考えることができるのかもしれないが、これは別の機会に改めて触れることにしたい。

③　駿東型の甕の終末

先に触れた植松氏の奈良・平安時代の土器編年でも述べられているが、植松編年のⅢ期が大きな画期であり、この期では駿東坏が出現するとともに駿東型の甕が消滅するらしい。同様なことは池谷氏のⅡ期でも認められている。図示した資料では、逓信病院内遺跡４号住居からは高台をもった須恵器坏が出土しているが、この住居跡は先に述べたように、奈良時代前半と考えられ、甕は駿東型の甕であり、土師器坏はＡ類に似たものとＤ類とした模倣坏である。これに内･外面を丹塗りした皿が伴っている。従って奈良時代前半には、甕は、なお駿東型の甕が中心であったことがわかる。

逓信病院内遺跡 23 号住居では箱形の駿東坏とＤ類の坏さらには皿が出土しており、ここではＣ類の駿東型の長胴甕が伴っている。この住居跡からは駿東型の甕は出土していない。

同様な組み合わせは富士市の天間代山遺跡７号住居跡でも認められており、ここでは助宗窯産の須恵器坏と甲斐型坏にともなって、駿東型の長胴甕（第 137 図９・10）とコの字甕（８）が出土している。小型のくの字甕も含まれている。注目されるのはこれらに伴って､なお駿東型の甕が含まれている（11）ことであり、底部にヘラケズリを施し、糸切り痕を残さない助宗窯の高台坏と糸切り痕をそのまま残す坏が共存しているとすれば、７号住居跡の土器群はなお細分されるものか、あるいは両者が共存する段階があると考えれば、その段階に駿東型の甕と駿東型の長胴甕・コの字甕の両者が併存していることになろう（植松氏の編年のⅢ期がそれに当たるかもしれない)。

駿東坏・甲斐型坏に伴なって駿東型の長胴甕が盛行していることは三新田遺跡の A01・A03・A22 号住居跡などの資料でも明瞭である。

奈良中葉以後、東海地域では箱形をした無高台の坏が盛行しており、湖西窯では奈良時代後半にはこうした箱形坏が主流になる。助宗窯では比較的後まで無高台杯に混じって、高台杯が作られているが、これはむしろ特異なあり方らしい。土師器の駿東坏は、こうした須恵器の箱形坏を模倣して作られた坏だと考えており（平野　1991)、須恵器箱形坏の代わりを為すように、駿河東部には箱形の駿東坏が広がっている。これに伴って駿東型の長胴甕が駿河東部にも盛行してくるらしい。駿東型の甕の終末が奈良時代の第３四半期であろうことはすでに北川氏や植松氏も指摘していることであるが、駿東坏に底部に糸切り痕をそのまま残した助宗窯産の箱形の坏が伴うことなどを考慮すると、須恵器箱形坏を模倣した駿東型坏の出現と前後して駿東型の甕が終焉を迎えていることが明らかになろう。

ところで、助宗窯産の須恵器が奈良時代前半（第２四半期）以後、駿河地域に広く分布していることは知られていることであり、この窯は律令期に駿河国内の官衙や寺院に須恵器を供給するために設けられたいわば官窯であろうとすることはすでに述べてきている。このことは、駿河から分離され、本格的な須恵器生産地をもたなかった伊豆国に当たる地域で、奈良中葉以後、逆に須恵器の出土が急速に減少している現象（池谷　1995）によっても裏付けられよう。こうした現象は駿河国とは独立した伊豆国では駿河国の官の支配下にある助宗窯からは須恵器の供給が行われなかったこと、また、それに代わるべき須恵器の供給地を確保出来なかったことをうかがわせるものである。こうした助宗窯の製品の広がりと合わせて、無高台の箱形坏を模倣した土師器坏（駿東型坏）が出現する段階と駿東型の甕が駿東型の長胴甕あるいはコの字甕と交代する段階とが一致していることになろう。

３　まとめ

駿東型の甕の出現と終焉について概述してきたが、再度、整理してみれば、

①　駿東型の甕は従来考えられていたように、土師器甕の形態変化から起きるものではなく、須恵器甕を模倣した土師器であり、その出現は須恵器編年Ⅲ後葉段階のことで、６世紀後半のことであろう。したがって、駿東型の甕の本来は貯蔵形態の土器であり、多くは貯蔵用の甕として用いられたものであ

ろう。もちろんしばしば指摘されているように、火にかけた痕跡が残るものもあることは認められるが、それは本来的な使われ方ではなかった。駿河西部の志太平野では煮沸形態の土器である長胴甕が伴うのがそうした考えを裏付けるし、駿河東部ではおそらく煮炊き用としては小型甕や鍋が存在していたのではないかと考えている。

駿東型の甕が成立する、須恵器Ⅲ期後葉段階は後期古墳においても大きな画期をなす段階だと考えて良いだろう。最も特徴的なものは各地域の王墓と目されている前方後円墳あるいは大きな円墳の存在が目立たなくなる段階であり、反対に各地域毎に中小の古墳群が形成され始める段階である。いわば古墳時代も後期後半の段階であり、それに伴うように、出土する遺物でも様々な変化が目立つ時期だと言って良い。これは当然、後期古墳社会における変化を反映したものであろうし、駿東型の甕の成立も、この地域におけるそうした変化の何らかの姿を反映したものであろう（註４）。須恵器甕が必要量に応じて供給された地域（大井川以西の地域）には駿東型の甕は成立する必要がなかったであろうし、より後進的な箱根以東の地域でもやはり駿東型の甕は成立していない。今更ながらではあるが、駿東型の甕に限らず、いずれの器種においても、それを必要とする社会・地域があってこそ生まれたものであることを考えれば、そこにこそ、この甕の成立の考古学的な意味を知ることができよう。

② 駿東型の甕の終焉は、すでに指摘されているように、おそらく８世紀第３四半期にあるだろうし、駿東型の長胴甕（Ｃ類甕）の盛行あるいは駿東型坏の出現と期を一にしている。しかし、それはしばしば指摘されているように長胴甕に取って代わられたことによって消滅するのではなく、貯蔵用の甕としての役割を終えたことによるものであったろう。おそらく、須恵器の生産・流通の増加をも含めて、駿東型の甕を必要とする社会条件がなくなったことが原因であったはずである。

③ 駿東型の甕の終末は箱形の駿東型坏の出現と期を一にしている。駿東型坏が須恵器箱形坏の模倣であることはすでに指摘しているが、そのモデルが助宗窯産の須恵器（湖西窯産の箱形坏であってもかまわないが、地域に広がる他の須恵器が助宗窯産のものであることを考慮すると、おそらく助宗窯産の須恵器を模倣したものであろう）であることを考慮すると、これと時間的に一致する、駿東型の甕の消滅は律令体制の深化に伴って起こったものであり、植松氏はこれを「律令的器の成立」と評価している。このことは、この地域の古墳時代社会に必要であった甕が、社会情況の変化によって不要になったことの反映であろう。そうした変化とは何であったのか、考古学的に明らかにすることは難しく、今はそうした変化があったことを推定しうるに過ぎないが、甕のこうした変化は、供膳形態である坏類が古墳時代以来の伝統的な形態であるＡ類・Ｂ類類・Ｄ類などから、新しい形態である箱坏の駿東型坏に一新されたことと期を一にしており、ここに駿東型の甕を必要としない社会の背景を考えることが必要だろう。

④ 駿東型の甕は古墳時代後半から奈良時代前期にかけて、駿河地域全体でほぼそのままの形態で用いられている。繰り返しになるが、これは、おそらくそうした形態の甕が必要だったことに由来するだろう。遠江では当然ながら須恵器の甕がそうした役割を果たしているはずである。駿東型の甕がいかなる役割をもった甕なのかを検討するためには、古墳時代後期の土器の組み合わせやその比率を含めて検討すべき事項は多く残っているが、それは古墳時代後期社会のあり方全体を考える事の中から浮かんでくるものであろう。

駿東型の甕が須恵器甕を模倣することよって成立することから始まって、多少のことを付け加えてきた。結論的には極く当たり前のことを、しかもすでに指摘されていることを繰り返したに過ぎないかもしれない。

註

１　静岡大学の篠原和大教授によれば、寺家前遺跡の出土土器は上藪田モミダ遺跡の直後の時期であろうとの見解である。

２　くの字甕、コの字甕などの呼び名は比較的早くから発掘現場などで使われてきたが、具体的に定義されて文章化されたものはないようである。くの字甕を植松章八氏は「駿東型の長胴甕」と呼んでいるので、ここではそれに従っている。しかし、その出生は本文でも触れたように、寺家前遺跡でB2類・C2類とした小型甕が遠江の長胴甕と接触する中で生まれたもので、その地域は駿河西部（おそらく志太平野）であろう。

３　土師器の器種分類は本文の土師器の分類を基本にしている。以下の遺跡での資料説明では、可能な限りこの分類に依って説明するが、駿河東部ではコの字甕の分類に必ずしも合致しない部分がある

４　湖西産の箱形坏でもかまわないが、土師器の底部に糸切り痕を残すこと。あるいは、他の土器の多くが助宗窯産のものであることを考慮すると、おそらく、助宗窯産の須恵器箱形坏を模倣したものであろう。

第５章　理化学分析

第１節　寺家前遺跡出土の弥生時代～古墳時代の木製品の樹種

鈴木三男・小川とみ・小林和貴（東北大学植物園）

静岡県藤枝市、志太平野の北東に位置する寺家前遺跡は弥生時代から近・現代までの集落・生産遺跡で、ここから各時代の大量の木材・木製品が出土している。ここではこれら出土品のうち、弥生時代～古墳時代を中心とし若干の中世等も含む出土木材・木製品 1860 点の樹種を調べた結果を報告する。この遺跡では古代～近世の木材・木製品も多く出土しており、そのうち 231 点の樹種が既に報告されている（静岡県埋蔵文化財センター　2012)。また本報告で樹種が報告されているもののうちのかなりものは静岡県埋蔵文化財センター『寺家前遺跡Ⅱ（木製品・石製品・金属製品他編)』2013 掲載の木製品観察表及び実測図にその樹種が記載されている。

ここでは『寺家前遺跡Ⅰ（古代・中～近世編)』で扱った資料でのみ認められた樹種についてはその種名を掲載するにとどめ、それ以外については、その顕微鏡写真を掲載すると共に、同定の根拠となった材形質と材質等について記載し、寺家前遺跡における弥生時代～中・近世までの木材資源、用材選択と利用について考察した。

樹種同定に用いたプレパラートは（旧）財団法人静岡県埋蔵文化財研究所および静岡県埋蔵文化財センターが作成し、小川・鈴木･小林が光学顕微鏡により、観察同定したものである。これらのプレパラートは静岡県埋蔵文化財センターに所蔵されてある。

なお、樹木の科の分類及び配列は APG システム（米倉　2010）に依った。

１　寺家前遺跡で同定された全樹種

1. モミ属　Abies　マツ科　挿写真 19-1a ～ 1c（プレパラート番号 13053）

一般に年輪が幅広く、明瞭な針葉樹材で、垂直・水平両樹脂道ともない。仮道管は整然と並び、早材部、晩材部とも幅広く、早材から晩材への移行は緩やかでスギに似る。放射組織は、単列で放射柔細胞のみからなる。放射柔細胞の水平壁及び垂直壁に多くの単壁孔（モミ型壁孔）がみられる。分野壁孔は小型のスギ型で、一分野に２～４個ある。以上の形質から、マツ科のモミ属の材と同定した。

モミ属の樹木は日本列島の亜寒帯（亜高山帯）から暖帯にいくつかの種が分布し、北海道にはトドマツ Abies sachalinensis (Fr. Schm.) Mast. が、本州の亜高山帯にアオモリトドマツ（オオシラビソ）Abies mariesii Mast.、シラベ Abies veitchii Lindley、温帯にはウラジロモミ Abies homoepis Siebold et Zucc.、そして暖帯にモミがあり、これらの種は材構造は互いによく似ていて、材構造での樹種の識別はできないが、本州、四国、九州の低山地から山地帯に広く分布するモミ Abies firmSiebold et Zucc. がもっとも普通なものである。モミは成長が早く、幹がまっすぐに立ち、幹径１ｍ・樹高 30 ｍの大木となり、大材が得やすく、加工も容易でスギやヒノキと同じ用途の代用品に用いられることが多い。

本遺跡出土材からは弥生時代後期の田下駄、矢板など８点、中～近世の曲物２点、板材６点、合計 16 点が出土している。

2. カラマツ　Larix kaempferi (Lamb.) Car.　マツ科

『寺家前遺跡Ⅰ（古代・中～近世編)』2012 既報告。本遺跡出土材は中～近世の曲物１点である。奥

地林の材であるカラマツの利用は近世になってからのことであるといえる。

3. トウヒ属　Picea　マツ科

『寺家前遺跡Ⅰ（古代・中～近世編)』2012 既報告。本遺跡出土材は中～近世の曲物容器の底板４点と切り欠きのある板材１点である。カラマツ同様、奥地林の材であるトウヒ属の利用は近世になってからのことであるといえる。

4. アカマツ　Pinus densiflora Siebold et Zucc.　マツ科　挿写真 19-2a ～ 2c（プレパラート番号 14176）

年輪が明瞭な針葉樹材で、水平・垂直両樹脂道をともにもつ。早材部、晩材部とも幅広く、早材から晩材への移行はややゆるやかである。放射組織は単列と紡錘形があり、柔細胞、放射仮道管、それに水平樹脂道を囲む分泌細胞からなる。放射組織の上下に１～数層の放射仮道管があり、その細胞内壁には顕著な鋸歯状肥厚がある。放射柔組織の水平壁は平滑で、分野壁孔は大型の窓状で１分野に１個存在する。以上の形質より、マツ科のマツ属複維管束亜属のアカマツの材と同定した。

アカマツは本州から九州までの低地から山地にかけて広く分布する針葉樹で、陽光地、二次林に多い。材は木理通直、肌目は粗く、芯材の保存性は良く、特に水湿に強いので、建築材（特に基礎、土台回りなど)、土木用材、器具材などに幅広い用途があるほか、杭木などの特用がある。

本遺跡出土材は 35 点あり、中～近世の杭が 18 点、柱、丸太、棒など 13 点、棟札と自在鉤が１点ずつ、合計 33 点あり、弥生時代後期とされる棒状木製品が１点、それに時期不詳の丸太材が１点である。マツ材の利用はもっぱら中近世（というより近世）以降であることがこれでよく分かる。

5. クロマツ　Pinus thunbergii Parl.　マツ科　挿写真 19-3a ～ 3c（プレパラート番号 14174）

アカマツによく似た針葉樹材で、垂直、水平の樹脂道をもつ。早材から晩材への移行はゆるやか、晩材部は幅広い。放射組織は単列と紡錘形があり、後者に水平樹脂道がある。単列放射組織は放射柔細胞と放射仮道管からなり、分野壁孔は大型の窓状である。放射仮道管の内壁は厚く肥厚するが著しい歯牙状とはならないことでアカマツと区別される。これらの形質からマツ属複維管束亜属のクロマツの材と同定した。

クロマツは北海道を除く全国の主に海岸部に生育あるいは植栽される常緑針葉樹で、幹径１ｍ・樹高 30 ｍ以上になる。材はアカマツ同様だが樹脂分がそれより多い。本遺跡出土材は中～近世の杭５点､板、棒などが３点、時期不詳の杭が１点で、アカマツ同様、クロマツの利用は近世以降のことである。また、アカマツより量が少ないのは、アカマツが都市や農村部周囲の雑木林の過度の伐採に起因してアカマツ林が増えたものを利用しているのに対し、クロマツは主に海岸飛砂防止等に植林されたものを使ったとみられ、そもそもの資源量の違いを反映していると考えられる。

5’. マツ属　Pinus　マツ科

上に述べたとおり、アカマツとクロマツは放射仮道管の内壁の歯牙状肥厚の顕著さで区別されるが、材の保存が悪く、細胞壁が劣化しているためそのいずれとも判定できず、またゴヨウマツなどの単維管束亜属の樹種とも区別ができないため「マツ属」とした。

本遺跡出土材は中～近世の丸太、板、棒が３点で、アカマツかクロマツ材であると考えられる。

6. イヌマキ属　Podocarpus　マキ科　挿写真 20-4a ～ 4c（プレパラート番号　12925）

材が均質で年輪のはっきりしない針葉樹材で、早材から晩材への移行は緩やかで、晩材部は年輪附近の数細胞しか認められない。樹脂細胞は横断面で扁平な四角形、量が多く、年輪内全体に均一に散在するが、スギ科やヒノキ科のもののように黒褐色の樹脂様物質が蓄積されることはないので、横断面では見つけにくい。また樹脂細胞の水平壁はイヌガヤと違い、薄く平滑で、数珠状に肥厚することはない。放射組織は背の低い単列で、柔細胞のみから成り、分野壁孔は、小型のヒノキからトウヒ型、１分野あ

たり１～２個存在する。以上の形質から、マキ科のイヌマキ属の材と同定した。

イヌマキ属には関東地方南部以南の沿岸部の温暖地に生育するイヌマキ Podocarpus macrophyllus (Thunb.) Lambert とさらに紀伊半島南部より南西に分布するナギ Podocarpus nagi (Thunb.) Zoll. et Moritzi の２種があり、静岡県地方では後者もしばしば植栽されているが、その自然分布から本遺跡出土材はイヌマキと考えられる。イヌマキの材は年輪が不明瞭で木理通直、硬く緻密で粘りがあり特に水湿に強く、また、シロアリにも強い。

本遺跡出土材は弥生時代後期が 39 点、古墳時代後期が 14 点、古代が２点、中～近世が４点、時期不詳が９点、合計 68 点ある。弥生時代後期のイヌマキ属材の大部分は杭材、柱材、垂木、丸太材、棒材などで自然木が１点ある。古墳時代後期も同様だが、鋤鍬の柄が２点ある。その他の時期、時期不詳の材も弥生後期と同様である。

7. ヒノキ　Chamaecyparis obtusa Siebold et Zucc.　ヒノキ科　挿写真 20-5a ～ 5c（プレパラート番号 14200）

水平・垂直の両樹脂道をもたない針葉樹材で、早材から晩材への移行は急で年輪は明瞭だが、晩材部の量が少ないので年輪そのものは目立たない。樹脂細胞が早材部から晩材部にかけて接線方向に緩く集まって散在し、その水平壁は数珠状に肥厚する。放射組織は単列で、放射柔組織のみからなり、分野壁孔は中型のヒノキ～トウヒ型で、１分野に１～２個ある。これらの形質から、ヒノキ科ヒノキ属のヒノキと同定した。

ヒノキは関東地方北部から九州屋久島までの温帯域に広く分布するが、特に中部地方の山地帯に多い。わが国の針葉樹類中でもっとも材質が優れたものの一つで、古代の幾内地方を中心に大型の建築物の建築材や各種器具材、細工物、木簡や形代、斎串、曲物など、広く用いられてきている。

本遺跡出土材は合計 19 点で、古代の曲物側板が３点、中～近世の曲物側板や底板が４点、板材が５点、棒が１点、それに扇（檜扇）が１点ある。時期不詳は５点で、木簡が１点、曲物が２点、箸が１点ある。

8. サワラ　Chamaecyparis pisifera Siebold et Zucc.　ヒノキ科

『寺家前遺跡Ⅰ（古代・中～近世編）』2012 既報告。本遺跡出土材は中～近世の曲物の側板４点、底板４点、桶の側板２点、それと時期不詳の曲物底板と下駄が１点ずつである。

9. ネズコ　Thuja standishii (Gordon) Carr.　ヒノキ科

『寺家前遺跡Ⅰ（古代・中～近世編）』2012 既報告。本遺跡出土材は中～近世の桶側板１点である。

10. アスナロ　Thujopsis dolabrata (Linn. f.) Siebold et Zucc.　ヒノキ科

『寺家前遺跡Ⅰ（古代･中～近世編）』2012 既報告。本遺跡出土材は古代の斎串、中～近世の曲物底板、時期不詳の曲物がそれぞれ１点ずつである。

11. スギ　Cryptomeria japonica (Linn.f.) D.Don　ヒノキ科　挿写真 20-6a ～ 6c（プレパラート番号 13150）

水平・垂直の両樹脂道を持たない針葉樹材で、年輪は明瞭で、早材から晩材への移行はゆるやか～やや急で、年輪幅は広いものから非常に狭いものまでの変異がある。樹脂細胞は晩材部に接線方向にややまとまりながら散在している。樹脂細胞の水平壁はやや厚くなり、微小な単壁孔があるが、通常は数珠状に肥厚することはない。放射組織は単列で放射柔細胞のみからなる。放射柔細胞の水平壁、垂直壁は平滑で壁孔は見られない。分野壁孔は大型のスギ型で１分野あたり通常２個あり、開孔部の長軸は水平に近い方向になる。以上の形質より、スギ科のスギの材と同定した。

スギ材は青森県南部から九州屋久島まで広く分布し、特に本州日本海側と東海地方に多い。成長が早く、幹径１ｍ･樹高 30 ｍを超える大木になり、大材が得易く、建築材を始め、各種器具材に縄文時代以来、北陸、東海地方でよく利用されてきている。

中世～近世のスギ材は合計で 131 点あり、井戸の構造材が 54 点、曲物、折敷、組み物（桶）などの容器が 24 点、大足、下駄、扇、箸、しゃもじ、脚台、そして用途が不明の板材、棒材などである。

12. カヤ　Torreya nucifera（L.）Siebold et Zucc.　イチイ科　挿写真 21-7a ～ 7c（プレパラート番号 14310）

出土材は黄褐色をした保存性の良い針葉樹材で、年輪は目立たず、樹脂細胞はなく、仮道管と放射組織からなる。早材部には方形の仮道管が整然と並び、晩材部ではやや細く厚壁となる。仮道管内壁には顕著ならせん肥厚があり、２～３本ずつまとまって走る。放射組織は柔細胞のみからなり、背が低く、分野壁孔は小さい。これらの形質からイチイ科のカヤの材と同定した。

カヤは東北地方南部以南の暖帯に広く生える常緑針葉樹で、幹径１ｍ・樹高 25 ｍの大木となる。幹は通直で材の木理も通直、堅く粘りがあり、緻密で弾性が強く、切削加工が容易で木肌美しく、保存性も高くて、極めて優秀な針葉樹材である。建築材、各種器具材など実に多様な用途があるが、碁盤、将棋盤などの特用がある。特に、古来、一木の木彫仏に重用されている。

本遺跡出土材は弥生時代後期の矢板と石斧柄が１点ずつ、それに時期不詳の木片が３点である。カヤ材の矢板、石斧柄への利用は他に類例をほとんど聞かない。

13. シキミ　Illicium religiosum Siebold et Zucc.　シキミ科

『寺家前遺跡Ⅰ（古代・中～近世編）』2012 既報告。本遺跡出土材は中～近世の農具の柄と思われる棒１点である。

14. モクレン属　Magnolia　モクレン科

『寺家前遺跡Ⅰ（古代・中～近世編）』2012 既報告。本遺跡出土材は中～近世の漆椀３点である。用途から見てホオノキ Magnolia obovata Thunb. であると考えられる。

15. クスノキ　Cinnamomum camphora(Linn.)Siebold et Zucc.　クスノキ科　挿写真 21-8a ～ 8c(プレパラート番号 9290)

丸くやや厚壁の中型の道管が単独あるいは２個放射方向に複合して比較的まばらに分布する散孔材で、年輪界に向けて道管径はかなり小さくなる。道管の穿孔は単一、希に横棒の少ない階段状で、側壁の壁孔は小孔紋で交互状、道管内にはチローシスが発達し、横断面でもよく見える。柔組織は周囲状でときどき大型の油細胞が混じり、横断面で道管のように見えることがある。放射組織は２～３細胞幅の異性、背が低く、接線断面の形状は紡錘状であり、直立細胞に大きく膨らんだ油細胞が混じる。遺跡出土材でも芳香を保持している。以上の形質からクスノキの材と同定した。

クスノキは関東南部以南の暖帯に生える常緑高木で、成長が早く幹径１ｍ・樹高 20 ｍを超える大木となる。社寺等には直径２ｍを越える大木がありしばしば天然記念物等に指定される。古くから良く植栽されてきたので、現在の分布域は本来の自生域よりかなり広まっていると考えられる。材は堅硬で耐久力、保存性にすぐれ、光沢があって芳香をもち、建築材、和洋家具、箱物、木魚などの各種器具材に良く用いられる。

本遺跡出土材は 15 点ありすべて弥生時代後期のものである。鼠返しが７点、礎板が２点、田下駄が２点、臼が１点、それに板材などであり、静岡県内の他の弥生時代遺跡と同様の利用である。

16. クスノキ科　Lauraceae　挿写真 21-9a ～ 9c（プレパラート番号 14352）

丸く壁がやや厚い小道管が単独あるいは放射方向に２～３個複合してまばらに均一に分布する散孔材で、年輪は目立たない。道管の穿孔は横棒の少ない階段状あるいは単一である。柔組織は周囲状でときどきやや大型になって精油を含んだ油細胞が混じる。放射組織は背が低く、２～３細胞幅の紡錘形で、異性、上下端にある直立細胞にわずかに膨らんだ油細胞が混じる。以上の形質からクスノキ科のクスノキ以外の材と同定した。

クスノキ科には多くの属、種があるが材の基本構造は共通である。中でも、静岡県地方によく生える照葉樹林の主要素であるタブノキ Machilus thunbergii Siebold. et Zucc.、シロダモ Neolitsea sericea (Blume) Koidz.、ヤブニッケイ Cinnamomum japonicum Siebold ex Nakai、カゴノキ Actinodaphne lancifolia (Siebold et Zucc.) Meisn. などは互いによく似ていて区別が困難である。タブノキは照葉樹林を特徴づける常緑高木で、幹径１m・樹高 15 mくらいになり、しばしば横に拡がった樹形となり海岸部に多い。シロダモは幹径 50 ㎝、樹高 15 mほどの常緑高木で東北地方南部以南に広く分布する。いずれも材はやや堅く、きめは粗く、割裂困難で加工性はあまり良くない。精油成分をもつので芳香があり、保存性はよいがクスノキほどではない。建築材、家具、器具材、細工物などに使われる。

本遺跡出土材は弥生時代後期の垂木２点、柱材１点、杭２点で、数が少ないので断言はできないがクスノキとは明瞭に異なった利用が図られているようだ。

17. カツラ　Cercidiphyllum japonicum Siebold et Zucc.　カツラ科

「寺家前遺跡Ⅰ（古代・中～近世編）」2012 既報告。本遺跡出土材は中～近世の用途不明品の板材１点である。

18. ネムノキ　Albizzia julibrissin Durazz.　マメ科　挿写真 22-10a ～ 10c（プレパラート番号 14849）

丸い大道管が年輪始めに１～３層に並び、順次径を減じて晩材部ではやや壁の厚い丸い小道管が単独あるいは数個放射方向に複合したものがまばらに散在する環孔材で、道管の穿孔は単一、木部柔組織は周囲状及び翼状で、特に晩材部で目立つ。放射組織は２～４細胞幅くらいの同性で、輪郭が不整である。以上の形質からマメ科のネムノキの材と同定した。

ネムノキは東北地方中部以南の全国の山野、沢沿いに広く分布する落葉小高木で、幹径 30 ㎝・樹高７mくらいになる。材は軽軟で脆く、保存、耐朽性も低く、各種器具材に使われる程度である。

本遺跡出土材は弥生後期の板材が２点である。

19. ヤマザクラ　Prunus jamasakura Siebold ex Koidz.　バラ科　挿写真 22-11a ～ 11c（プレパラート番号 9040）

丸い小道管が単独あるいは数個が様々な方向に複合して密度高く均一に分布する散孔材で、年輪はじめの道管群はやや太く、密度が高い。道管の穿孔は単一、内壁にらせん肥厚をもつ。またしばしば茶褐色の物質が道管内を埋める。放射組織は１～４細胞幅で同性に近い異性、接線断面で比較的綺麗な紡錘形となる。これらの形質からバラ科サクラ属のヤマザクラの材と同定した。

ヤマザクラは東北地方南部以南九州屋久島までの暖帯～温帯に分布する落葉広葉樹で、幹径 60 ㎝・樹高 20 mほどになる。芯材が赤褐色を帯びる散孔材で、やや緻密、堅硬で割裂容易、保存性良く、光沢がある。建築物の内装部分、洋家具、机、椅子、仏壇、橋、杓子、漆器木地、盆、楽器、彫刻、下駄など実に多様な用途がある。また樹皮は「樺細工」に用いられる。

本遺跡出土材は弥生時代後期の刳物の槽、杭、矢板が１点ずつ、それに中～近世の柱材３点である。

20. モモ　Prunus persica (L.) Batsch.　バラ科　挿写真 22-12a ～ 12c（プレパラート番号 14264）

年輪始めに中型の丸い道管がほぼ１～数層に並び、その外には小さい丸い道管が単独あるいは数個が様々な方向に複合したものが比較的密に均一に分布する半環孔材である。道管の穿孔は単一、内壁らせん肥厚がある。放射組織は異性で幅１～５細胞くらい、時にそれ以上になり、背は比較的高くて大型となり、接線面では比較的綺麗な紡錘形となる。これらの形質からバラ科サクラ属のうち、モモの材と同定した。ヤマザクラなどの野生の桜類からは年輪始めに大きめの道管が並ぶことで区別される。ウメ、スモモもよく似るが年輪はじめの大きい道管のサイズ等で区別される。

モモは中国原産の果樹で幹径 20 ㎝・樹高 10 ｍほどになる。もっぱら果樹として利用されているため木材の性質、用途に関する情報はほとんどない。モモの核は縄文時代前期（長崎県伊木力遺跡）以降知られていて、弥生時代以降では多くの遺跡から出土している。モモの材は古墳時代（長野県石川条里遺跡）以降に知られている。

当遺跡出土材は中～近世の杭１点である。芯持ち丸木で手近にあった木を伐って使ったことが考えられる。

21. サクラ属　Prunus　バラ科　挿写真 23-13a ～ 13c（プレパラート番号 9556）

丸い小道管が単独あるいは主に放射方向に数個複合して密度高く様々な紋をなして均一に分布する散孔材で、道管の穿孔は単一、側壁の壁孔は大振りの小孔紋で交互状、内壁にらせん肥厚がある。木部柔組織は散在状で、放射組織は１～５細胞幅くらいの同性にやや近い異性、その構成細胞は大振りである。これらの形質からバラ科のヤマザクラを除くサクラ属の材と同定した。

サクラ属には落葉性のイヌザクラ Prunus buergeriana Miq.、ウワミズザクラ Prunus grayana Maxim.、マメザクラ Prunus incise Thunb.、常緑性のリンボク Prunus spinulosa Siebold et Zucc.、バクチノキ Prunus zipperiana Miq. など多数の種があるが、特徴的な形質が見られない限り、種の特定は困難である。

本遺跡出土材は弥生時代後期の刳物の槽、材、棒など３点、古代の板が１点、中～近世の柱と棒が１点ずつ、合計６点である。

22. グミ属　Elaeagnus　グミ科　挿写真 23-14a ～ 14c（プレパラート番号 9035）

年輪始めに丸い小～中型の道管がほぼ１層に並び、それ以外では丸い小道管が単独で均一に分布する（半環孔材～）散孔材で、道管の穿孔は単一、内壁にらせん肥厚をもちサクラ属の材によく似る。木部柔組織は散在状で均一に分布する。放射組織は３～８細胞幅くらい、背が高く大型で、ほぼ同性である。これらの形質からグミ科のグミ属の材と同定した。

グミ属には落葉性のナワシログミ Elaeagnus pungens Thunb. やアキグミ Elaeagnus umbellate Thunb.、常緑性のツルグミ Elaeagnus glabra Thunb. など多くの種がある。いずれも樹高２～８ｍ程度の低木～小高木、あるいは蔓性で幹径が 20 ㎝程度になるものもある。材は小さく、また脆いので利用はほとんどない。本遺跡出土材は弥生後期の鎌の柄１点である。

23. ケヤキ　Zelkova serrata Thunb.　ニレ科　挿写真 23-15a ～ 15c（プレパラート番 14297）

丸～楕円形の大道管が年輪はじめに１層に並び、孔圏外では薄壁多角形の小道管が多数集まって塊状～波状の紋をなす環孔材で、道管の穿孔は単一、道管相互の壁孔は小孔紋で交互状、小道管内壁には顕著ならせん肥厚がある。放射組織は１～８細胞幅ほどで背は余り高くなく、上下辺にしばしば大型の結晶細胞をもつ。これらの形質からニレ科のケヤキの材と同定した。

ケヤキは本州北端から四国、九州の全域の平地～山地帯に広く分布する落葉高木で、時に幹が３ｍに達する巨木となる。材は肌目やや粗で堅硬、強靭、弾力があり、加工性良く、時に美しい木目が出る。大型建築物の構造材、彫刻材、漆器木地等の特用の他、家具、器具などあらゆる用途がある。本遺跡出土材は中～近世の漆器椀５点と材片１点である。

24. エノキ属　Celtis　アサ科　挿写真 24-16a ～ 16c（プレパラート番号 14301）

出土材は淡黒褐色となることが多く、保存性が悪い。材は年輪始めに丸～楕円の大道管が１～数層並び、順次径を減じて晩材部では薄壁多角形の小道管が集まって接線方向に長い塊をつくり、全体として波状の紋をなす環孔材で、道管の穿孔は単一、道管相互の壁孔は小孔紋で交互状、小道管内壁にはらせん肥厚がある。放射組織は３～５細胞幅、時に 10 細胞幅近い大型の紡錘形で鞘細胞をもち、異性である。これらの形質からニレ科のエノキ属の材と同定した。

エノキ属には東北地方南部以南の暖帯に広く分布し、特に二次林や屋敷林に多いエノキ Celtis sinensis Pers. var. japonica Nakai と、それより冷涼な北海道から九州にかけての温帯に多いエゾエノキ Celtis jessoensis Koidz. があり、両者の材構造での区別は困難であるが、その分布と、普遍性から本遺跡出土材はエノキである可能性が高い。エノキは成長が早く時には幹径２ｍ・樹高 30 ｍの大木となり、材は比較的堅硬で柔曲性に富み、割裂困難で、建築材、ラケットなどの器具材、農工具の柄などの用途がある。

本遺跡出土材は中～近世の柱材１点である。

25. カジノキ属　Broussonetia　クワ科　挿写真 24-17a ～ 17c（プレパラート番号 13830）

年輪始めに楕円形の中～大型の単独あるいは２個放射方向に複合した道管がややルーズに配列し、そこから年輪外方に向かって順次直径を減じ、年輪中程では中～小形の単独あるいは２個放射方向に複合した道管が散在し、晩材部では薄壁多角形の微細な道管が数個ずつ集まったものが散在する環孔材で、道管の穿孔は単一、小道管内壁にはらせん肥厚がある。木部柔組織は周囲状である。放射組織は１～５細胞幅で背はあまり高くなく、異性である。これらの形質からクワ科のカジノキ属の材と同定した。

日本に野生するカジノキ属の植物は東北以南奄美大島までの温帯～暖帯に分布する低木性のヒメコウゾ Broussonetia kazinoki Siebold と中国地方、四国、九州に分布する蔓性のツルコウゾ Broussonetia kaempferi Siebold がある。一方、渡来時期は明らかでは無いが中国からカジノキ属のカジノキ Broussonetia papyrifera（Linn.）Vent. が移入され、植栽されている。そしてこのカジノキがヒメコウゾと雑種をつくり製紙原料として広く栽培されるようになったものがコウゾ Broussonetia kazinoki x papyrifera である。ヒメコウゾは山野に自生する落葉低木で高さ３ｍほどになるが、材は根元で 10cm 程度である。カジノキは樹高 10 ｍ・幹径 20 ㎝ほどになる落葉小高木で、中国中南部では農村地帯に普通に生え、またしばしば植えられる。日本でのカジノキの植栽は多くはない。コウゾは畑に植栽され、製紙原料として生産するところでは株から成長した高さ２ｍほどに伸びた枝を毎年刈り取るが、放置された木では樹高５～６ｍになるものもあるが、木材利用はほとんど知られていない。本遺跡出土材は弥生後期の棒１点である。

26. クリ　Castanea crenata Siebold et Zucc.　ブナ科　挿写真 24-18a ～ 18c（プレパラート番号 9432）

年輪のはじめに円～卵形の大道管が１～３層に並び、そこから順次径を減じ、晩材部では薄壁多角形の小道管が周囲状仮道管や木部柔組織とともに火炎状の紋をなす環孔材である。道管の穿孔は単一、側壁の壁孔はやや大振りの小孔紋で交互状にやや隙間をあけて配列する。らせん肥厚はない。木部柔組織は周囲状及び単細胞幅の独立帯状で、晩材部で目立つ。放射組織は単列同性で背は低い。道管－放射組織間壁孔は不定形の楕円形で大振り、柵状にきちんと並ぶことはない。これらの形質からブナ科のクリの材と同定した。

クリは北海道石狩低地周辺から九州鹿児島県までの温帯から暖帯に広く分布する落葉高木で、幹径１ｍ以上・樹高 30 ｍほどとなる。材質は堅く、割裂が容易で心材は耐久力つよく水湿に特に強い。大材が得られるので大型建造物から一般の家屋の大黒柱や土台回り、屋根葺き材（くれこば）などに用いられるほか、家具、農具、などさまざまな部分に用いられ、また水湿に強いことから土木用材や鉄道枕木などの特用があった。

本遺跡出土材は弥生時代後期が 81 点、古代が１点（板材）、中～近世が 61 点、時期不詳が７点、合計 150 点とスギに次いで多く、弥生時代後期の 81 点は杭が 52 点の他、柱材が８点、梁・桁、垂木、礎板などの土木建築用材、板材、棒、割材などである。中～近世では柱材が 42 点と最も多く、杭や板材、棒などがある。また、漆椀と横槌が１点ずつある。時期不詳のものも柱材や板材などである。

27. コジイ　Castanopsis cuspidata (Thunb.) Schottky　ブナ科　挿写真 25-19a ～ 19c（プレパラート番号 12982）

年輪の始めに丸い中～大型の道管が間隔を置いて１～３層に並び、晩材部ではクリ同様薄壁多角形の小道管､周囲状仮道管､木部柔組織が集まって火炎状となる放射孔材～環孔材で､年輪はやや明瞭である。道管の穿孔は単一、側壁の壁孔は丸い小孔紋で交互状、木部柔組織は散在状及び単接線状である。放射組織は単列同性と集合放射組織の２型がある。集合放射組織は時に放射組織細胞の割合が高くなり複合状となる。道管－放射組織間壁孔は楕円形でしばしば縦に柵状に並ぶ。これらの形質からシイ属のコジイの材と同定した。スダジイからは集合放射組織が存在することで区別される。

コジイ（別名ツブラジイ）は関東地方南部以西の暖地に分布する常緑高木で、照葉樹林の主要な要素である。スダジイが海岸部に多いのに対し、これは内陸部に多い。樹高 20 m・幹径１mの大木となり、材はやや堅硬で緻密、割裂容易であるが肌目は粗く保存性は低い。建築材、器具材（柄物など)、下駄、薪炭材などに用いる。

本遺跡出土材は弥生時代後期が 42 点、古墳時代後期が２点、中～近世が４点と圧倒的に弥生後期が多い。その内訳は杭が 15 点、板材が 12 点の他、鍬？が２点、梯子が１点などである。古墳時代後期の２点は杭と柱材である。中～近世は組み下駄３点と柱材１点である。

28. スダジイ　Castanopsis sieboldoldii (Makino) Hatusima　ブナ科　挿写真 25-20a ～ 20c（プレパラート番号 9418）

クリ、コジイによく似た材で、年輪の始めに大～中型の丸い道管が間隔を置いて配列し、そこから順次径を減じて晩材部では薄壁多角形の小道管、周囲状仮道管、木部柔組織が集まって火炎状となる放射孔材～環孔材で、年輪はやや明瞭である。木部柔組織は接線状で、晩材部で目立つ。道管の穿孔は単一、側壁の壁孔は小孔紋で交互状である。放射組織は単列同性である。このように道管形態、配列はコジイとほとんど変わらない環孔材で、集合状～複合状の放射組織をもたないことで区別される。

スダジイは東北南部以南九州屋久島までの照葉樹林帯に広く分布し、特に海岸部に多い。樹高 20 m・幹径１m以上となる常緑広葉樹で、特に海岸部では幹は高くならず横枝が発達する。材はコジイ同様、やや堅硬で緻密であるが、肌目粗く、保存性が低い。用途等はコジイと区別されない。

本遺跡出土材は弥生時代後期が 18 点、古墳後期が４点、中～近世の材片が１点で、弥生時代後期のものは杭が 10 点の他、掘棒、矢板、角棒、割材などである。古墳時代後期は柱材が３点と鍬（？）が１点で、総じてコジイと区別された用途とはみえない。

28’. クリ／シイ　Castanea/Castanopsis　ブナ科

『寺家前遺跡Ⅰ（古代・中～近世編)』2012 既報告。本遺跡出土材は中～近世の農工具の柄の棒１点である。

29. ブナ属　Fagus　ブナ科　挿写真 25-21a ～ 21c（プレパラート番号 13954）

薄壁多角形の道管が均一に分布する散孔材で、道管の大きさは年輪に向かって順次小さくなる。道管は数個が様々な方向に複合し、密にあるが、年輪付近では直径が小さくなるので密度が低く見える。穿孔は単一及び横棒が 10 本くらいと数の少ない階段状で、道管内壁にらせん肥厚はない。木部柔組織は散在状及び短接線状で、晩材部でやや目立つ。放射組織は１～数細胞幅の狭くて背の低いものから 10 細胞以上となり肉眼で見えるほど幅広く背の高い大きなものまであり、ほぼ同性である。これらの形質からブナ属の材と同定した。

ブナ属には北海道南部から九州鹿児島県までの温帯に広く分布するブナ Fagus crenata Blume と本州の太平洋側、四国、九州の温帯下部から暖帯上部に分布するイヌブナ Fagus japonica Maxim. があるが、材構造は互いによく似ていて識別は困難である。いずれも幹直径１m・樹高 30 mに達する落葉

大高木である。分布から見ると本遺跡出土材は両方の可能性がある。ブナの材は堅硬緻密で割裂が容易で保存性は低いが加工性はよく、建築材、家具材、器具材など広く用いられる。イヌブナの材はブナに比べると脆く、材質は劣るが、ブナ同様の用途があるが資源が限られており、あまり利用されない。
本遺跡出土材はすべて漆椀で、中～近世が９点、時期不詳が１点である。

30. イチイガシ　Quercus gilva Blume　ブナ科　挿写真 26-22a ～ 22c（プレパラート番号 13157）

丸～楕円形の単独道管が緩く集まって放射方向に配列する放射孔材で、大きな道管は直径 220 μｍを超える。道管の穿孔は単一、木部柔組織は接線状に配列する。放射組織は単列と大きな複合放射組織がある。これらの形質からブナ科コナラ属アカガシ亜属のイチイガシの材と同定した。

アカガシ亜属の材は道管が放射方向に配列する形質で他の樹木から区別されるが、アカガシ亜属にはアカガシ、シラカシ、ウラジロガシなど多数の種があり、材構造が互いに似ていて個々の種を区別するのは困難である。その中でイチイガシは道管径が他の種に比べて一回り大きく、大きなものの直径が 220 μｍを超えることで区別できる。イチイガシは関東地方南部以西の太平洋側及び瀬戸内地方、四国、九州に分布する常緑高木で、幹径１ｍ・樹高 30 ｍ以上になる。有用な木材が得られるので古くから植栽・植林されており、現在の分布域は元々の天然分布域を越えて拡がっていると考えられている。材は堅硬緻密で、木理通直、割裂自在で弾性強く強靭である。床柱、硬い材質を活かした各種器具、柄物、舟の櫓、櫂、車輪、歯車など広い用途がある。イチイガシは関東から九州の弥生～古墳時代の木製農具に特に多用されるが、本遺跡出土材は弥生時代後期が 28 点、古墳時代後期が６点、古代が１点（板材）、中～近世が３点（角棒、材片）、合計 38 点ある。弥生時代後期の材は 16 点が鍬、３点が鋤及び鋤の柄、それに横槌が１点、板材が４点などである。古墳時代後期の鍬と竪杵が１点ずつにミカン割り材などである。

30’. イチイガシ？　Quercus cf. gilva Blume　ブナ科

上記の通り、イチイガシは他のアカガシ亜属の種から大道管の直径が大きいことで区別されるが、他のアカガシ亜属の種には大道管径が 200 μｍ程度になることが希にあるためイチイガシとはいいきれないことから「イチイガシ？」とした。本遺跡からは３点出土しているが、弥生後期の又鍬と背負板、古墳後期のエブリでイチイガシと同様の用途であり、これらはイチイガシであろうと考えている。

31. コナラ属アカガシ亜属　Quercus subgen. Cyclobalanopsis　ブナ科　挿写真 26-23a ～ 23c（プレパラート番号 14848）

直径が 120 ～ 180 μｍ程度の中型で丸い厚壁の道管がゆるくまとまりながら放射方向に年輪を越えて配列する放射孔材で、木部柔組織は独立帯状で接線状に多数配列してよく目立つ。道管の穿孔は単一、道管内壁にらせん肥厚はない。放射組織は単列のものと複合放射組織があり、道管－放射組織間壁孔は縦に長い楕円形で柵状に配列する。これらの形質からブナ科のコナラ属のうち、常緑のカシ類であるアカガシ亜属（イチイガシを除く）の材と同定した。

アカガシ亜属（カシ類）はブナ科コナラ属のうち、アカガシ、シラカシ、イチイガシなど常緑の樹種からなる亜属で、東北地方以南の全国の暖帯に広く分布し、照葉樹林の主要素である。多数の種があり、材構造による個々の種の識別は困難である。いずれの材も硬く緻密で強靭で粘りがあり、加工性には難があるが、建築材、各種器具材、車輛材、柄物など広い用途がある。本遺跡出土材は弥生時代後期の杭が４点、鍬が１点の他板材等合わせて７点、古代の板材等が２点、中～近世の杭が１点である。鍬が１点あるが、イチイガシでは鋤鍬類が多いのに対して「アカガシ亜属」と同定されたものはそれが少なく、異なる樹種を異なる用途に用いていたことがいえる。

32. ウバメガシ　Quercus phillyraeoides A. Gray　ブナ科　挿写真 26-24a ～ 24c（プレパラート番号 14916）

直径が 100 ～ 150 μｍ程度の中（～小）型の丸い道管が緩く放射方向に集まって配列する放射孔材で、

年輪は目立たない。道管の穿孔は単一、道管放射組織間壁孔は柵状になる。木部柔組織は接線状で１～数細胞層である。放射組織は単列同性と集合～複合状で、後者はかなり大きい。以上の形質からブナ科コナラ属コナラ亜属の常緑のウバメガシの材であることが分かる。アカガシ亜属からは道管径が小さいことと集合状の放射組織をしばしばもつことで区別される。

ウバメガシは関東地方南部以西、四国、九州の沿岸部に生える常緑亜高木～低木で、幹の根元径 30 ㎝、樹高２～８ｍ程度になる。材は極めて硬くて重く、割裂、折損困難である。各種柄類、独楽などの細工物、艪の柄やへそ、車軸などに使われるが、その極めて硬い材質から備長炭としても重用される。本遺跡出土材は弥生時代後期の杭が２点と柄？が１点、中～近世の杭と板が１点ずつである。

33. コナラ属クヌギ節　Quercus sect. Aegilops　ブナ科　挿写真 27-25a ～ 25c（プレパラート番号 11366）

年輪の始めに丸い大道管が１～数層配列する環孔材で、孔圏外では丸い単独小道管が緩く放射方向に配列する。道管の穿孔は単一、らせん肥厚はない。木部柔組織は接線状で、孔圏外でよく目立つ。放射組織は単列同性と複合状で、複合放射組織内には大きな結晶細胞が混じる。これらの形質からコナラ亜属クヌギ節の材と同定した。

クヌギ節には東北中部以南から九州までの全国に広く分布するクヌギ Quercus acutissima Carr. と関東北陸以西から九州北部まで分布するアベマキ Quercus variabilis Blume があり、これら両者の材構造は互いによく似ていて識別は困難である。両者とも暖帯性の落葉高木で、幹径 60 ㎝、樹高 20 ｍ以上になる。材はやや堅硬、木理は粗く、割裂自在で、ミカン割り材をつくりやすい。各種柄類、車軸、艪の柄などの用途があるが、椎茸のほだ木としてよく使われる。本遺跡出土材は弥生時代後期の杭、柱材、丸太など 58 点、時期不詳の曲物の底板かと思われる板と板材の２点である。

34. コナラ属コナラ節　Quercus sect. Prinus　ブナ科　挿写真 27-26a ～ 26c（プレパラート番号 15069）

年輪の始めに丸い大道管が１～数層並び、そこから順次径を減じて晩材部ではクリ同様、薄壁多角形の小道管が多数集まって火炎状となる環孔材で、道管の穿孔は単一、木部柔組織は２～３細胞幅の独立帯状で、晩材部でよく目立つ。放射組織は単列同性と複合状があり、道管－放射組織間の壁孔はカシ類と異なり、いびつな楕円形で縦に長くならない。以上の形質からコナラ属コナラ亜属のうち、コナラ節の材と同定した。コナラ節の材は火炎状に配列する道管でクリ、スダジイに類似し、更に複合放射組織を持つことでコジイと非常に似てくる。クリとの識別は、横断面、接線断面の切片を大きくつくることで複合放射組織の存在を確認する一方、スダジイ、コジイとの識別は年輪はじめの大道管が隙間なく配列することに注意を払って行う。

コナラ節には全国の山野に普通で特に二次林に多いコナラ Quercus serrata Thunb.、青森県から九州の温帯から温帯に分布するナラガシワ Quercus aliena Blume、全国の温帯に多いミズナラ Quercus mongolica Fish. var. grosseserata Rhed.、暖帯、温帯から亜寒帯にあるカシワ Quercus dentata Thunb. などがあり、静岡県地方ではコナラが普通にあり、山地上部に行くとミズナラが出現し、カシワが希にあるがナラガシワはあまり見かけない。コナラは幹径 60 ㎝・樹高 15 ｍくらいになる落葉高木で、材はやや堅硬で肌目は粗く、割裂容易で、建築材、各種器具材、特に柄物、細工物など、特に薪炭材に用いる。ミズナラは幹径１ｍ・樹高 20 ｍを超える大木となり、材質もコナラより優れていて、特に家具材に重用される。本遺跡出土材は弥生後期の杭と中～近世の柱材１点である。

35. カバノキ属　Betula カバノキ科

『寺家前遺跡Ⅰ（古代・中～近世編）』2012 既報告。本遺跡出土材は中～近世の横櫛１点である。

36. ヤナギ属　Salix　ヤナギ科

『寺家前遺跡Ⅰ（古代・中～近世編）』2012 既報告。本遺跡出土材は中～近世の下駄１点である。

37. ヌルデ　Rhus javanica L. var. roxburghii (DC.) Rheder　ウルシ科　挿写真 27-27a ～ 27c（プレパラート番号 15166）

年輪始めに丸い中型の道管が並び、そこから順次径を減じて晩材部では薄壁多角形の小道管が複合した塊が散在する環孔材。木部柔組織は周囲状で晩材部では連合翼状となる。道管の穿孔は単一、放射組織は１～２細胞幅の異性で、接線面では細長く見える。これらの形質からウルシ科のヌルデの材と同定した。

ヌルデは北海道南部～九州沖縄までの全国の山野に広く分布する落葉小高木で、幹径 20 ㎝・樹高 10 m程度になる。材は比較的柔らかく、木理は粗、耐朽性、保存性は中くらい、切削加工は容易で、小細工もの、釣りの浮き、下駄材などの用途がある。出土材は弥生時代後期の杭２点である。

38. ムクロジ　Sapindus mukorossi Gaertn.　ムクロジ科　挿写真 28-28a ～ 28c（プレパラート番号 9430）

年輪始めに大道管が数層並び、晩材部では厚壁で多角形の小道管が数個集まって塊となったものが散在する環孔材で、周囲状柔組織及び帯状柔組織があり、特に晩材部で帯状柔組織の量が多く、肉眼では多層の縞模様に見える。道管の穿孔は単一、小道管の内壁にはらせん肥厚があり、また道管内に黄褐色の透明物質がしばしば詰まっている。放射組織は３～５細胞幅で背は高くなく、接線面で見たときの輪郭が不整形である。これらの形質からムクロジの材と同定した。

ムクロジは関東地方以西から九州沖縄までの暖地に比較的希に生える幹径 30 ～ 40 ㎝・樹高 15 mほどになる落葉高木で、しばしば社寺、鎮守様、農家敷地などに植えられるので天然分布は明らかでない。材は軽軟で肌目は粗く、脆いが切削加工容易である。机や箱類、小細工もの、キリの代用として下駄などの用途がある。実にサポニンを含み、若実を「石鹸」の代用にするほか、黒くて丸い種子を羽根つきの羽根の頭にする。本遺跡出土材は弥生後期の杭４点と梯子、板材各１点である。

39. トチノキ　Aesculus trubinata Blume　トチノキ科

『寺家前遺跡Ⅰ（古代・中～近世編）』2012 既報告。本遺跡出土材は中～近世の漆椀２点である。

40. キハダ　Phellodendron amurense Rupr.　ミカン科　挿写真 28-29a ～ 29c（プレパラート番号 12554）

出土材はしばしば赤褐色状を呈し、道管内には褐色の物質が蓄積している。大きな楕円形の道管が年輪はじめに単独あるいは２個複合して数層に配列し、順次径を減じて晩材部では薄壁多角形の小道管が多数集まって斜め接線状の幅広いゾーンをなす環孔材で、道管の穿孔は単一、側壁の壁孔はやや大振りの小孔紋で、やや間隔をあけて交互状に配列し、小道管の内壁には顕著ならせん肥厚がある。柔組織は周囲状であまりめだたない。放射組織は２～４細胞幅くらいの同性で、背は低く、板目面で見る輪郭が綺麗な紡錘形となる。これらの形質からキハダの材と同定した。

キハダは北海道から九州にかけての温帯に分布する落葉高木で、幹径 60 ㎝・樹高 20 mになる。材は柔らかいが強く粘りがあり、木理が美しく加工性も容易な優秀な材である。建築物の装飾的部分、家具、各種器具材などに用いられる。樹皮の内側部分がベルベリンを含んでいて黄色い「黄檗」で、薬用、染料とされる。本遺跡出土材は弥生後期の梁・桁材とミカン割り材各１点である。

41. ミズキ　Cornus controversa Hemsl. ex Prain　ミズキ科　挿写真 28-30a ～ 30c（プレパラート番号 15135）

丸みを帯びた薄壁多角形の小道管が単独あるいは数個放射方向に複合して均一に分布する散孔材で、年輪は目立たない。木部柔組織は散在するが目立たない。道管の穿孔は横棒の多い階段状、側壁の壁孔

は小孔紋で交互状、らせん肥厚はない。放射組織は１～５細胞幅くらいの典型的な異性で、単列の翼部は時に高くなる。これらの形質よりミズキの材と同定した。

ミズキは北海道から九州の暖帯～亜寒帯の山地、丘陵、平野に広く分布する落葉高木で、成長が早く、樹高 15 m・幹径 40 ㎝以上になる。材はやや軽軟だが肌目は緻密、切削加工が容易で材の白さもあって各種器具材、特にこけしなどの彫刻材の特用がある。本遺跡出土材は弥生時代後期の杭１点である。

42. ヤマボウシ　Cornus kousa Buerger ex Hance subsp. kousa　ミズキ科　挿写真29-31a～31c(プレパラート番号 15128)

丸い小道管が単独で比較的まばらに均一に散在する散孔材で、年輪は不明瞭である。木部柔組織は散在状で量は少ない。道管の穿孔は多数の横棒からなる階段状である。放射組織は７細胞幅位、時に 10 細胞幅を超えて大きく、背も比較的高く、木口面でも目立つ。典型的な異性で上下に単列の翼部がある。これらの形質からミズキ科のヤマボウシの材と同定した。よく似た材にクマノミズキがあるが、放射組織が大きいことで区別される。

ヤマボウシはおおむね樹高 10 m以下、幹根元径 20 ㎝程度の落葉小高木で、本州、四国、九州の温帯上部～温帯の山地丘陵に広く生え、４枚の白い苞を持つ花が咲いてよく目立つ。材質は堅硬強靭緻密で粘りがあり、折れにくく、切削加工は難しい。材質を活かして各種柄物、下駄、機械材などに重用される。本遺跡出土材は弥生時代後期の杭１点である。

43. クマノミズキ　Cornus macrophylla Wall.　ミズキ科　挿写真 29-32a ～ 32c（プレパラート番号 14184)

丸い小道管が単独で比較的まばらに均一に散在する散孔材で、年輪は不明瞭である。木部柔組織は散在状で量は少ない。道管の穿孔は多数の横棒からなる階段状である。放射組織は３～５細胞幅位の典型的な異性で単列の翼部が目立つ。これらの形質からミズキ科のクマノミズキの材と同定した。

クマノミズキは青森県以南の本州、四国、九州の温帯下部に広く分布する落葉高木で、幹径 40 ㎝・樹高 15 mほどになる。葉や樹形がミズキとよく似ているが、葉が対生すること、花期は初夏でミズキより一月ほど遅く、また、実が秋に熟することで区別できる。材はかなり重くやや硬くて強いがヤマボウシのように強靭ではない。材はミズキ同様梁に用いられる他、各種器具材、柄類などミズキ同様の用途がある。本遺跡出土材は中～近世の丸太材と時期不詳の板材各１点である。

44. ウツギ　Deutzia crenata Siebold et Zucc.　アジサイ科　挿写真 29-33a ～ 33c（プレパラート番号 14910)

薄壁多角形だがやや丸みを帯びた微細道管が均一に分布する散孔材で年輪は全く目立たない。道管の穿孔は横棒が多数の階段状。木部柔組織は散在状で量は少ない。放射組織は１～４細胞幅の異性で、直立細胞は非常に背が高く、また平伏細胞も大振りで全体として粗雑、放射組織全体は非常に背が高い。これらの形質からアジサイ科（旧ユキノシタ科）のウツギの材と同定した。

ウツギは北海道南部～九州にかけての全国の温帯から暖帯の山野に広く分布する落葉低木で幹の根元径５㎝・高さ３mほどになる。茎の髄は中空であることから「空木」の名があるが、材は硬く緻密で粘りがあり、木釘、串状の細工物などに用いられる。本遺跡出土材は時期不詳の杭材１点である。

45. カキノキ属　Diospyros　カキノキ科　挿写真 30-34a ～ 34c（プレパラート番号 15162)

中型～小形の楕円形の道管が単独あるいは時に２～数個が主に放射方向に複合して密度低く均一に散在する散孔材で、年輪は全く目立たない。道管壁はやや厚く、穿孔は単一、道管相互の壁孔は微細な小孔紋で交互状である。木部柔組織は周囲状と接線状で後者は幅が１細胞。放射組織は１～２列の異性で背は低く、層階状に配列する。これらの形質からカキ科のカキノキ属の材と同定した。

静岡県地方に生えるカキノキ属には、伊豆半島以南の本州～琉球の暖地に生えるトキワガキ（トキワ

マメガキ）Diospyros morrisiana Hance、北海道を除く各地に植えられる中国原産のカキノキ Diospyros kaki Thunb. とその変種で山野に自生するというヤマガキ Diospyros kaki Thunb. var. sylvestris Makino、古くに柿渋を採るため中国から移入されたと言われるマメガキ Diospyros lotus L.、関東地方以西～九州琉球に分布するリュウキュウマメガキ Diospyros japonica Siebold et Zucc. がある。いずれも材構造はよく似ていて個々の種を区別することは困難である。カキノキ属の芯材はいずれも黒色を帯び、黒檀同様となる。材は堅硬緻密で工作容易、床柱などの建築材、箪笥、机、書棚など和洋家具、調度品類、箱物、細工物、彫刻、ゴルフのウッドの頭など幅広い用途に使われる。本遺跡出土材は弥生時代後期の杭２点、中～近世の角材と棒各１点である。

46. タイミンタチバナ　Myrsine seguinii Lev.　ヤブコウジ科　挿写真 30-35a ～ 35c（プレパラート番号 14867）

薄壁でやや丸みを帯びた多角形の小道管が単独あるいは２～３個放射方向に複合して量少なく均一に散在する散孔材で、道管径は年輪内でほとんど変わらず、年輪は全く目立たない。道管の穿孔は単一、道管相互の壁孔は微少孔紋で交互状に密に配列する。木部柔組織は周囲状、繊維細胞は隔壁を持つ。放射組織は単列と多列があり、前者は極めて背の高い直立細胞のみからなる。多列放射組織は３～８細胞幅程度で極めて背が高い。構成細胞は大振りで不整形、時に結晶をもつ。以上の形質からタイミンタチバナの材と同定した。

タイミンタチバナは千葉県南部以南西の温暖地、特に海岸近くに生える常緑小高木で、幹径 15 ㎝、樹高６ｍくらいになる。材はやや重く堅硬緻密で、保存性も良いが狂いやすく、小細工ものなどに使われるにすぎない。本遺跡出土材は弥生時代後期の杭 10 点と屋根板材１点、それに中～近世の棒１点である。

47. サカキ　Cleyera japonica Thunb.　ツバキ科　挿写真 30-36a ～ 36c（プレパラート番号 13088）

薄壁で多角形の微細な道管が均一に分布する散孔材で、年輪は全く目立たない。道管はほぼ単独で、穿孔は横棒の多い階段状である。木部柔組織は散在状で均一に分布する。放射組織はほぼ単列の異性で、背は比較的高く、平伏細胞及び背の大変高い直立細胞からなる。これらの形質からツバキ科のサカキの材と同定した。

サカキは関東南部以西～九州琉球に分布する照葉樹林を特徴づける常緑小高木で、幹径 20 ㎝・樹高８ｍくらいになる。材は堅硬で肌目はやや粗く、強靭で割裂困難であり、萠芽枝がまっすぐによく伸びることから柄物に重用される。各種柄物、杵、天秤棒、舟の棹、櫛等に用いられる。本遺跡出土材は弥生時代後期の杭が８点、石斧の膝柄が１点、棒が１点あり、それに古墳時代後期の杭と中～近世の材片が各１点ある。

48. ヒサカキ　Eurya japonica Thunb.　ツバキ科　挿写真 31-37a ～ 37c（プレパラート番号 13155）

薄壁多角形の微細な道管が単独あるいは２個放射方向に複合して均一に分布する散孔材で年輪は目立たない。道管の穿孔は横棒の数が多い（40 本ほど）階段状。木部柔組織は散在状で目立たない。放射組織は１～４細胞幅で異性、単列部は直立細胞と方形細胞から、多列部は平伏細胞で構成される。これらの形質からツバキ科のヒサカキの材と同定した。

ヒサカキ東北地方以南～九州琉球の暖帯に広く分布する常緑小高木で、幹径 15 ㎝・樹高８ｍ程度になる。材は堅硬緻密で粘りがあり割裂折損困難でサカキ同様の用途がある。本遺跡出土材は弥生時代後期の丸太と割材の２点、古墳時代後期の板材と時期不詳の丸太各１点である。

49. ツツジ属　Rhododendron　ツツジ科　挿写真 31-38a ～ 38c（プレパラート番号 15126）

断面多角形のごく微細な道管がほぼ単独で均一に分布する散孔材で年輪は全く目立たない。道管の穿孔は横棒が 10 本程度の階段状。木部柔組織は散在状で目立たない。放射組織は単列で直立細胞のみか

らなるものが大部分を占め、３～５細胞幅の多列の放射組織が不均一に出現する。これらの形質からツツジ科のツツジ属のうち、シャクナゲなどのような小高木になる樹種を除いた、ヤマツツジやミツバツツジの仲間の材であると同定した。

ツツジ属の材は硬く緻密で粘りがあり、折損困難で柄物などに向いているが資源が少ないのでほとんど利用されない。本遺跡出土材は弥生時代後期の杭が１点、中～近世の箸（？）と棒が１点ずつで、箸（？）としたものは単なる枝材かも知れない。

50. トネリコ属　Fraxinus　モクセイ科

『寺家前遺跡Ⅰ（古代・中～近世編）』2012 既報告。本遺跡出土材は中～近世の漆椀２点、皿１点と用途不明品の板材１点である。

51. ムラサキシキブ属　Callicarpa　シソ科　挿写真図版 31-39a ～ 39c（プレパラート番号 14263）

小型で厚壁のまるい道管が単独あるいは２～数個放射方向に複合して密度低く散在する散孔材で年輪は目立たない。道管の直径は年輪の終わりでやや減少する。道管の穿孔は単一、道管相互の壁孔は微小な孔紋で、密に交互状に分布する。放射組織は異性で２～３細胞幅、しばしば単列部が連結して、多列放射組織が連続する。道管と放射組織との壁孔もごく小型で、交互状に密に配列する。これらの形質からシソ科（旧クマツヅラ科）のムラサキシキブ属の材と同定した。

静岡県地方に分布するムラサキシキブ属の樹木は、暖帯の山野に普通の樹高３ｍほどの低木のムラサキシキブ Callicarpa japonica Thunb.、２～３ｍ程度の低木になるヤブムラサキ Callicarpa mollis Siebold et Zucc.、1.5ｍ程度の小高木のコムラサキ Callicarpa dichotoma（Lour.）K.Koch などがあるが、材構造は互いに似ていて区別は困難である。最も普通のムラサキシキブは根元径が 10 ㎝近くなる落葉樹で、株立ちになり、根元から２ｍほどの真っ直ぐな萠芽枝が出る性質がある。材は硬く緻密で粘りがあり、丸木のままで柄物に、また削り込んで木釘などの用途がある。本遺跡出土材は中～近世の材片１点である。

52. クサギ　Clerodendrum trichotomum Thunb.　シソ科　挿写真 32-40a ～ 40c（プレパラート番号 14230）

丸い中型の道管が単独で、あるいは２個が様々な方向に複合したものが１～３層に配列し、そこから順次径を減じてまばらに散在し、晩材部ではやや厚壁の小道管が単独あるいは数個複合して散在する環孔材で、年輪は明瞭である。道管の穿孔は単一、側壁は小孔紋で交互状。木部柔組織は周囲状。放射組織は１～４細胞幅くらいで背は低く、同性に近い異性である。これらの形質からシソ科（旧クマツヅラ科）のクサギの材と同定した。

クサギは北海道～九州琉球の温帯～暖帯の山野に普通に生える落葉大低木ないし小高木で、根元径 20 ㎝、樹高８ｍほどになる。材は軽軟で肌目粗く、木理不整であり、下駄、薪炭材に用いる程度である。本遺跡出土材は弥生時代後期と中～近世の杭各１点である。

53. ニワトコ　Sambucus racemosa L. subsp. sieboldoldiana（Miq.）Hara　レンプクソウ科　挿写真 32-41a ～ 41c（プレパラート番号 14774）

早材部では小型の道管が単独もしくは数個複合して年輪界に沿って並び、晩材部では徐々に径を減じた道管が、斜め接線方向に配列して波状の紋となる散孔材。年輪の終わりには、小道管が帯状に配列している。道管の穿孔は単一。側壁の壁孔は大振りの小孔紋で交互状に配列する。放射組織は異性で１～５細胞幅程度、鞘細胞をもつ。以上の形質により、レンプクソウ科（旧スイカズラ科）のニワトコの材と同定した。

ニワトコは北海道～九州奄美大島の温帯～暖帯の山野に広く分布する落葉低木～小高木で、特に人里近くに多い。幹根元径 20 ㎝・樹高８ｍになるがしばしば根元から株立ちとなる。材は軽軟緻密で小細

工もの、寄せ木などに用いられる。本遺跡出土材は時期不詳の材片１点である。

54. タラノキ　Aralia elata（Miq.）Seemann　ウコギ科　挿写真 32-42a ～ 42c（プレパラート番号 13827）

遺跡出土材の保存性は比較的悪い。年輪始めに楕円形で壁の比較的薄い中型の道管が単独あるいは２個複合して１～４層に並び、それから順次少しずつ径を減じて晩材部では薄壁で丸みを帯びた多角形の小道管が放射方向に数個複合したものが斜め接線状に配列して波状、あるいは同心円状の紋をなす環孔材である。道管の穿孔は単一、側壁の壁孔は大振りの丸い小孔紋で、ややスペースを開けて交互状に配列する。木部柔組織は目立たない。放射組織は３～６細胞幅くらいの輪郭が綺麗な紡錘形で構成細胞は大振りであり、鞘細胞をもつ。道管－放射組織間の壁孔は大振りな円～楕円で、間隔をおいて配列する。これらの形質からウコギ科のタラノキの材と同定した。

タラノキは北海道～九州の全国の亜寒帯から暖帯の山野に広く分布する落葉小高木で、特に二次林や路傍に先駆的に生えてくる。幹径 15 ㎝・樹高８ｍ程度になるが、材は軽軟で肌目粗く木理不整で、脆く、下駄、小細工もの、箱物などの用途がわずかにある。新芽が山菜として喜ばれる。本遺跡出土材は弥生時代後期の柄（？）１点である。

55. 竹類　Bamboosoideae　イネ科

『寺家前遺跡Ⅰ（古代・中～近世編）』2012 既報告。本遺跡出土材は時期不詳の竹材１点である。

２　寺家前遺跡出土材の樹種組成

以上記載したように寺家前遺跡から出土した樹皮等を除く 1860 点の資料から針葉樹 13 種類、広葉樹類 44 種類、それに竹笹類を合わせて 58 種類が同定された。これらの出土数を弥生時代後期、古墳時代後期、古代（奈良時代～平安時代）、中世～近世、それに時期が不明のもの及び上記の複数の時期にまたがるものをまとめて「時期不詳」として時代別にまとめたのが第６表である。ここでは理解を助けるため、出土数がまとまって多い弥生後期と中～近世の２時期についてはその百分率も示してある。また、樹種の配列にあたり、針葉樹と広葉樹に分け、弥生後期の数の多い順に並べ、それ以外については中～近世の数の多い順に並べた。ただし、近縁な種群（例えば、アカマツ、クロマツとマツ属、コジイとスダジイ、イチイガシ、イチイガシ？とアカガシ亜属など）はそれぞれまとめて配列してある。

また、それらの用途を土木建築材、容器、農工具、生活具、器具材、祭祀具、織具と、大きく７つのカテゴリーに分け、その時期別の出土樹種を集計したものが第７表である。土木建築材としたものは杭、矢板、暗渠構成材、畦畔横木などの土木材、柱、礎板、井戸材、鼠返し、梯子、屋根板、壁板、梁・桁、垂木、破風板、屋根板材、棟札などの建築部材で 960 点ある。容器としたものは曲物、折敷、桶、漆椀、片口、皿、刳物、槽などで 95 点ある。農工具としたものは鋤鍬類、農工具の柄、石斧柄、田下駄、大足、田舟、横槌、臼、竪杵、掘棒、木錘で 68 点ある。生活具としたものは下駄、金剛草履、箸、しゃもじ、横櫛、扇、付札、自在鉤で 21 点、器具材としたものは背負板、案、机、脚台、台で 14 点、祭祀具としたのは斎串、舟形、剣形、形代などの５点、織具としたのは刀杼と筬の２点である。また、用途不明品の木材が 693 点ある。これらは遺構を構成せずに集積した形で出土したものであり、またその形状からその用途などが類推困難なものである。その形状から板材とされるものが 485 点あり、それらには枘穴、出枘のあるもの、表面に手斧痕があるもの、一部が炭化したものなど様々である。棒とされたものが 71 点、角棒とされたものが 33 点、丸棒が８点、角材が４点ある。これらは出土した部分の長さや太さが様々であり、そのサイズに応じて異なる目的に使用されていたものと思われる。その他、丸太、割材、材片などである。これらの時期別の木材利用を見ると以下のことがいえる。

第６表　出土木製品の樹種組成

樹種名	弥生後期	（%）	古墳後期	古代	中～近世	（%）	時期不詳	総計
スギ	1027	76.9	34	29	128	38.7	50	1268
イヌマキ属	39	2.9	14	2	4	1.2	9	68
モミ属	8	0.6			8	2.4		16
カヤ	2	0.1					3	5
アカマツ	1	0.1			33	10.0	1	35
クロマツ					8	2.4	1	9
マツ属					3	0.9		3
ヒノキ				3	11	3.3	5	19
アスナロ				1	1	0.3	1	3
ネズコ					1	0.3		1
サワラ					8	2.4	2	10
トウヒ属					5	1.5		5
カラマツ					1	0.3		1
針葉樹小計	1077	80.6	48	35	211	63.7	72	1443
クリ	81	6.1		1	61	18.4	7	150
コジイ	42	3.1	2		4	1.2		48
スダジイ	18	1.3	4		1	0.3		23
クリ／スダジイ					1	0.3		1
イチイガシ	28	2.1	6	1	3	0.9		38
イチイガシ？	2	0.1	1					3
アカガシ亜属	7	0.5		2	1	0.3		10
コナラ属クヌギ節	5	0.4					2	7
コナラ属コナラ節	4	0.3			2	0.6	3	9
ウバメガシ	3	0.2			2	0.6		5
クスノキ	15	1.1						15
タイミンタチバナ	11	0.8			1	0.3		12
サカキ	10	0.7	1		1	0.3		12
クスノキ科	5	0.4						5
ムクロジ	5	0.4						5
サクラ属	3	0.2		1	2	0.6		6
ヤマザクラ	3	0.2			3	0.9		6
ヒサカキ	2	0.1	1		1	0.3	1	5
カキノキ属	2	0.1			2	0.6		4
キハダ	2	0.1						2
ヌルデ	2	0.1						2
ネムノキ	2	0.1						2
ツツジ属	1	0.1			2	0.6		3
クサギ	1	0.1			1	0.3		2
カジノキ属	1	0.1						1
グミ属	1	0.1						1
タラノキ	1	0.1						1
ミズキ	1	0.1						1
ヤマボウシ	1	0.1						1
ブナ属					9	2.7	1	10
ケヤキ					6	1.8		6
トネリコ属					4	1.2		4
モクレン属					3	0.9		3
トチノキ					2	0.6		2
クマノミズキ					1	0.3	1	2
エノキ属					1	0.3		1
カツラ					1	0.3		1
カバノキ属					1	0.3		1
シキミ					1	0.3		1
ムラサキシキブ属					1	0.3		1
モモ					1	0.3		1
ヤナギ属					1	0.3		1
ウツギ							1	1
ニワトコ							1	1
広葉樹小計	259	19.4	15	5	120	36.3	17	416
竹類							1	1
総計	1336		63	40	331		90	1860

（１）弥生時代後期の樹種構成

弥生後期は後述するようにスギが圧倒的に多く、それ以外の樹種を見ると、針葉樹ではイヌマキ属が 39 点（2.9%）と目立って多く、それにモミ属の８点（0.6%）の他はカヤ、アカマツの合計３点と、わずかしかない。東海地方の弥生時代遺跡では古くから知られているようにイヌマキ属の利用が非常に目立ち、それも丸木弓の用途例が非常に多い。当遺跡では比較的多数のイヌマキ属材が出土したにもかかわらず丸木弓は１点もなく、大部分が土木用材であり、出土遺跡の性格が他の弥生時代遺跡と異なることが考えられる。また、出土針葉樹材の樹種構成が単純で、ヒノキ及びその近縁種の材の出土もないことはこの地域の出土材傾向としては異例ともいえる。

広葉樹材ではクリが 81 点(6.1%)と最も多かった。その用材は土木建築材で、これは縄文時代から続く木材利用といいえる。これに対しシイ材（コジイ、スダジイ）の利用も合わせて 60 点（4.4%）と比較的多い。シイ材はクリ材に比べて耐朽性に劣り土木材としては決して良い樹種選択ではないのだが、それを上回る資源量の存在がそうさせたと考えることができる。次いでカシ類もよく使われている。イチイガシは西日本の弥生時代の鋤鍬等の農具の用材として最も利用されているものだが、これは本遺跡でもその傾向にある。これまでアカガシ亜属の材は互いに似ているため、個々の種を識別することは困難だったが近年の研究で道管サイズからイチイガシを識別することが可能になった。今回それに基づいて同定がなされたが、イチイガシは農具に良く用いられ、それ以外のアカガシ亜属材は農具ではなしに土木用材等に使われるという傾向がはっきりした。同じコナラ属の材ではこの他クヌギ節、コナラ節、そしてウバメガシの材が識別されたがこれらは重要な木材という扱いではないことがその用途か

第7表　出土木製品の用途別樹種組成

	土木建築材						容器						農工具						生活具			器具材			祭祀具				繊具			用途不明						総計
樹種	弥生	古墳	古代	中近	不詳	小計	弥生	古墳	古代	中近	不詳	小計	弥生	古墳	古代	中近	不詳	小計	中近	不詳	小計	弥生	中近	小計	弥生	古墳	不詳	小計	弥生	古代	小計	弥生	古墳	古代	中近	不詳	小計	
スギ	588	14	3	62	9	676	9	3	2	18	8	40	16	1	7	1	1	26	5	5	10	8	1	9	2		1	3		1	1	403	16	16	41	26	502	1267
イヌマキ属	27	5				32								2				2														11	7	2	4	9	33	67
アカマツ				21		21													1		1											1			11	1	13	35
クロマツ				5	1	6																													3		3	9
マツ属				1		1																													2		2	3
ヒノキ									3	4	2	9							1	1	2						1	1							6	1	7	19
サワラ										8	1	9								1	1																	10
アスナロ										1	1	2														1		1										3
ネズコ										1		1																										1
モミ属	2			1		3				2		2	1					1														5			5		10	16
カヤ	1					1							1					1																	3	3	5
トウヒ属										4		4																							1		1	5
カラマツ										1		1																										1
針葉樹計	618	19	3	90	10	740	9	3	5	39	12	68	18	3	7	1	1	30	7	7	14	8	1	9	2	1	2	5	0	1	1	618	23	18	73	40	574	1441
クリ	65			45	2	112				1		1				1		1	1		1											16		1	13	5	35	150
コジイ	18	2		1		21							2					2	3		3											22					22	48
スダジイ	12	3				15							1	1				2														5			1		6	23
クリ／スダジイ																1		1																				1
イチイガシ													21	2				23				1		1					1		1	5	4	1	3		13	38
イチイガシ?													1	1				2				1		1														3
アカガシ亜属	4			1		5							1					1														2		2			4	10
コナラ節	2			1		3																										2			1	3	6	9
クヌギ節	3					3					1	1																				2				1	3	7
ウバメガシ	2			1		3																1		1											1		1	5
クスノキ	9					9							3					3				1		1								2					2	15
サカキ	8	1				9							1					1														1			1		2	12
タイミンタチバナ	11					11																													1		1	12
ブナ属										9	1	10																										10
ケヤキ										5		5																							1		1	6
ヤマザクラ	2			3		5	1					1																										6
サクラ属				1		1	1					1																				2		1	1		4	6
モモ				1		1																																1
クスノキ科	5					5																																5
ヒサカキ																																2	1		1	1	5	5
ムクロジ	4					4																										1					1	5
カキノキ属	2					2																													2		2	4
トネリコ属										3		3																							1		1	4
ツツジ属	1					1													1		1														1		1	3
モクレン属										3		3																										3
キハダ	1					1																										1					1	2
クサギ	1			1		2																																2
クマノミズキ																																			1	1	2	2
トチノキ										2		2																										2
ヌルデ	2					2																																2
ネムノキ																																2					2	2
ウツギ					1	1																																1
エノキ属				1		1																																1
カジノキ属																																1					1	1
カツラ																																			1		1	1
カバノキ属																			1		1																	1
グミ属													1					1																					1
シキミ																1		1																					1
タラノキ																						1		1															1
ニワトコ																																					1	1	1
ミズキ	1					1																																	1
ムラサキシキブ属																																			1		1	1
ヤナギ属																			1		1																	1
ヤマボウシ	1					1																																	1
広葉樹計	154	6	0	56	3	219	2	0	0	23	2	27	31	4	0	3	0	38	7	0	7	5	0	5	0	0	0	0	1	0	1	66	5	5	31	12	119	416
竹類					1	1																																	1
総計	772	25	3	146	14	960	11	3	5	62	14	95	49	7	7	4	1	68	14	7	21	13	1	14	2	1	2	5	1	1	2	486	28	23	104	52	693	1858

注：弥生＝弥生時代後期；　古墳＝古墳時代後期；中近：中世～近世；　不詳：時期不詳（遺物の時期が分からないか、あるいはここでの時期区分の複数にまたがるもの）

らみて取れる。

一方、クスノキの材もやや多く出土している。その用材はクスノキの項に記載されているように、鼠返し、礎板といった高床建物の重要な部分に用いられたものであり、その油成分に基づく保存性等が評価された結果だろう。また、クスノキ科としたものはクスノキ以外の樹種で、タブノキ、カゴノキ、シロダモなどが考えられるが、それらは特に樹種を選んで利用された結果とはあまり認められない。その他サカキ、ムクロジ、サクラ類以下様々な樹種が少しずつ出土しているが、特に用材を選んでの利用と認められるものはほとんどない。

静岡県地方では弥生時代～現在まで、山地丘陵から平野部にかけては照葉樹林が発達し、縄文時代からの森林伐採により集落の周辺域では雑木林が形成され、それが弥生時代まで継承されてきたと考えられる。また海岸部にはウバメガシやアカガシ亜属、スダジイ、クスノキ科、サカキ、ヒサカキなどからなる海岸性の照葉樹林も発達していたことだろう。ここに同定された樹種のほとんどはそのような植生の要素であり、遺跡周辺でここに使われた木材が調達されたと考えることができる。

（２）古墳時代後期の樹種構成

この時期の木材は 63 点が同定された。うち 48 点は針葉樹でその７割がスギ材である。弥生時代後期と同じくイヌマキ材が 14 点と多く、針葉樹はこの２種類で、イチイガシが６点、スダジイとコジイが合わせて６点、他にイチイガシ？、サカキ、ヒサカキが各１点である。これらすべては常緑樹で照葉樹林の構成種であり、基本的に弥生時代後期と同じ植生の下で同じような木材選択によって利用された結果の表れと見なすことができる。

（３）古代の樹種構成

古代の木材は 40 点ある。35 点が針葉樹で、その８割がスギで、ヒノキが３点、イヌマキ属が２点、アスナロが１点である。ヒノキは曲物、アスナロは斎串でいずれも古代における特徴的な木製品であり樹種利用である。広葉樹はアカガシ亜属が２点、イチイガシ、クリ、サクラ属が１点で、アカガシ亜属の２点は用途不明品の木材であるのに対しイチイガシは斎串であった。イチイガシの斎串というのは他には類を見ないことである。クリ、サクラ属とも板材で、特に注目すべきことはない。

（４）中～近世の樹種構成

中世～近世の木材は 331 点の樹種が同定され、うち 211 点（63.7%）が針葉樹であった。その６割（全体の 39%）がスギ材で、次いでマツ類（アカマツ＋クロマツ＋マツ属）が 44 点（全体の 13.3%）になる。また、ヒノキ類（ヒノキ＋サワラ＋アスナロ＋ネズコ）が 21 点（全体の 6.3%）になる。

日本列島の自然植生の中でアカマツは暖帯～温帯にかけての地域に分布するが、その生育地は火山荒原や痩せ尾根など、土壌の発達しない場所に限られる。しかし、人間が自然林を伐採し、二次遷移が引き起こされるとその先駆種として現れるが、それはやがて広葉樹の林（二次林、雑木林）になっていく。その二次林の伐採が繰り返えされると伐採の度に土壌がある程度失われて土地がだんだん痩せていき、ある限界に達したとき、アカマツが優占する林ができ上がる。そのようなアカマツ林の成立は畿内、中国地方では約 1500 年前頃と早いが、それ以外の地方では多くは近世になる頃からである。寺家前遺跡での中～近世のアカマツ材の比較的多い出土は静岡県地方ではその頃になってマツ林が成立したことを示しているといえる。一方、クロマツは本来海岸砂丘地にはない樹木で、これもやはり西南日本の海岸崖地などの痩せ地などに「細々」と生きてきたものである。潮風に強いことから砂丘地の緑化樹として選ばれ、それが大々的に植栽されるようになったのは東海地方では近世になってからであることが広重の東海道五十三次の浮世絵にみて取れる。本遺跡でのクロマツ材の出土はそれら植栽された海岸林が育って、利用されたものと考えるのが妥当だろう。

スギやマツ類が基本的に「現地性」であるのに対し、ヒノキ類は藤枝市付近に自生していた樹木では

無く、製品あるいは半製品が他所から持ち込まれたものが出土したものとみなしている。ヒノキの出土品には檜扇や用途不明品の板材や棒があるがそれ以外とサワラ、アスナロ、ネズコのすべては曲物あるいは桶である。これらは中世以降の流通経済の下で消費されたものといえる。また、やはり「現地性」でない針葉樹にトウヒ属とカラマツがある。これらは南アルプスや富士山に行けば自生しているものだが、そのような奥地林の木材が平野部で消費されるということも流通経済の表れといえる。

中～近世の広葉樹材で最も多いのは弥生後期と同様、クリであり、その大部分は柱材である。縄文時代の建築物の柱材はほとんど100%クリ材といっても過言ではないが、弥生時代以降、クリ材の利用はそれほどではなくなっているのが全国的傾向である。その中で中～近世になってその水湿に強い特性に着目し、重点を置いた利用が図られるのは、他の木材資源との関係もあって木材利用史上注目すべきことである。これは豊富に資源があったと考えられるシイ類がほとんど利用されていないことでみて取れる。

シイ類同様中～近世になって出土量が弥生時代後期に比べて明確に少ない樹種がいくつかある。イチイガシ（＋カシ類）、クスノキ、タイミンタチバナ、サカキである。弥生後期のイチイガシは木製農具に、そしてサカキはそれらの「柄」として利用されたもので、中～近世では農具類が出土しなかったためにそれらの樹種の材が出土しなかったともいえるが、それと同時に農具が鉄の刃に代わり、柄には丈夫なカシ類が使われるようになった。つまり柄類にサカキなどは使われなくなったことも影響していると考えられる。弥生時代にはクスノキは様々な用途に使われている。特にクスノキの臼などは弥生時代特有のものであるが、中～近世になるとクスノキ材はほとんど利用されていないことが今回の結果から判明した。これが出土遺物の組成の違いによるものか、クスノキ材の資源がなくなったことによるものかなどは今のところ不明である。弥生後期のタイミンタチバナは丸木の杭であるが、水湿に強い土木用材としてタイミンタチバナの材が杭に向いているわけではないので、これは原材を手近なところで採取して使った結果と考えると、中～近世の杭材として出土していないことはその裏返しであろう。

一方、弥生時代後期にはほとんど利用が見られなかった樹種が中～近世にはいくつか登場している。その代表がブナ属、ケヤキ、トネリコ属、モクレン属、トチノキである。これらのほとんどは挽物あるいは刳物で、漆椀が大部分を占める。流通経済の下で、他産地で生産された漆器類が当遺跡で消費されたことの反映である。

３　スギ材の利用とその資源

静岡県地方の平野部の遺跡ではスギ材の利用が極めて普遍的である。寺家前遺跡でもその通りで、樹種同定がなされた1860点の木材のうち、実に1268点（68.2%）がスギ材であった（第６表）。自然木

第８表　寺家前遺跡におけるスギ材の時期別用途

用途＼時期	弥生後期	古墳後期	古代	中～近世	時期不詳	総計
土木建築材	588	14	3	62	9	676
容器	9	3	2	18	8	40
農工具	16	1	7	1	1	26
器具材	8			1		9
生活具				5	5	10
祭祀具	2				1	3
織具			1			1
用途不明	403	16	16	41	26	502
総計	1026	34	29	128	50	1267

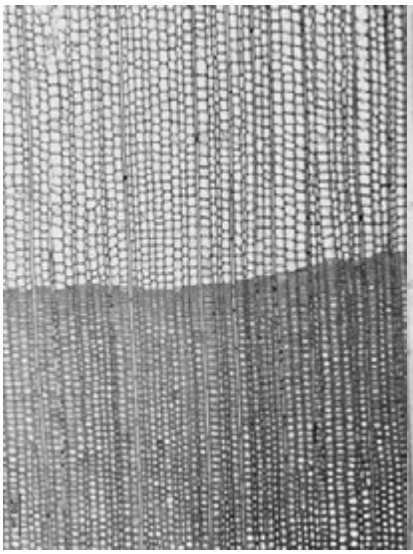
１点を除く 1267 点について、その用途を時期別に集計したのが第８表である。土木建築材は 676 点あり、本遺跡でもスギが主要な土木建築材であることがこの結果から良く理解できる。容器としたものは弥生後期のものは刳物の槽や片口などで曲物は未だ出現していない。古代～中近世では曲物、桶などで、ヒノキ類とともにスギ材も利用されていたことが分かる。農工具としたものは弥生後期のものはほとんどが田下駄であり、古墳後期及び古代のものは大足、中～近世の１点は木錘であった。器具材としたものは弥生後期のものは背負板の部材が５点と案、台などの組み物である。生活具としたのは中近世のものは下駄、しゃもじ、扇、付札で、時期不詳のものも同様である。祭祀具としたものは舟形、形代などである。織具は古代の筬である。

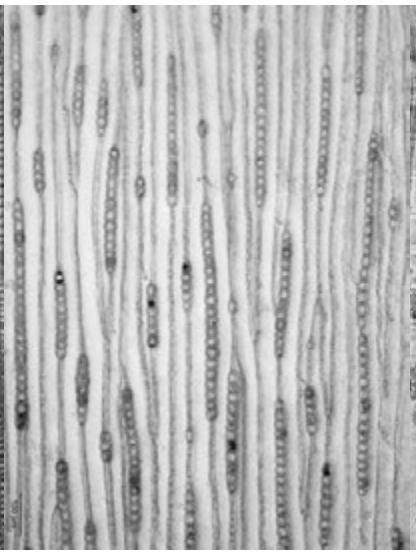
それではこれらの大量のスギ材はどこから供給されたものなのだろうか？現在のスギの天然分布域は青森県津軽地方を北限に本州日本海側を中国地方までと、伊豆半島、箱根から紀伊半島までの地域、それに四国、九州である。これらは年間降水量が 2000㎜ 以上の地域と良く一致するといい（遠山 1976）、多湿な環境がスギの生育を促しているといえる。しかし、現在では天然杉の生育地はこれらの地域の山奥に限られ、平地に天然林というものはない。しかし、本州日本海側の地域では平地でのスギ埋没林の存在が点々と知られている。これらのうち、あるものは海水準変動に伴う埋没で失われ（富山県魚津の海底林）、あるものは縄文時代以降の伐採と低地開発で失われたことが知られている（福井県黒田の埋没林、山口県宇生賀盆地の埋没林）。静岡県でも登呂遺跡の周辺にスギとカシ類からなる林があったことが報告されており、かつてはスギの分布域には奥地だけではなく平地にもスギ林があったことが考えられる。そうした一角に弥生時代後期には寺家前遺跡が営まれたが、遺跡人達はその豊富なスギ資源を大いに利用して弥生社会を営んでいたといえる。その資源量はかなりの量であったことが近世まで一貫してスギ材が最も多く出土していることからもいえよう。しかし近世には天然スギ資源が枯渇し、代わって造林が行われるようになり、人工林のスギが使われるようになるとともに、これまでに利用があまりなかったマツ材、そしてトウヒ、カラマツなどが生える奥地林の開発とその木材利用が計られるようになってきたことが今回の出土木材の調査で明らかになったといえる。

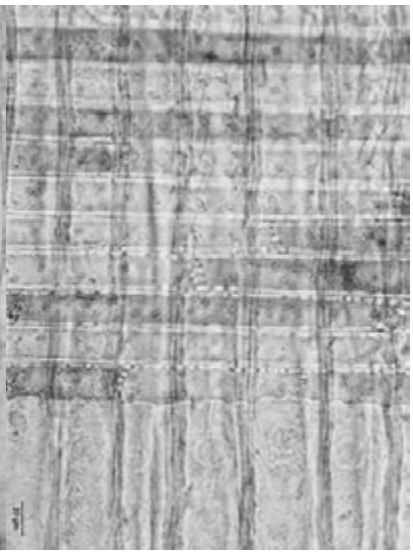
参考文献

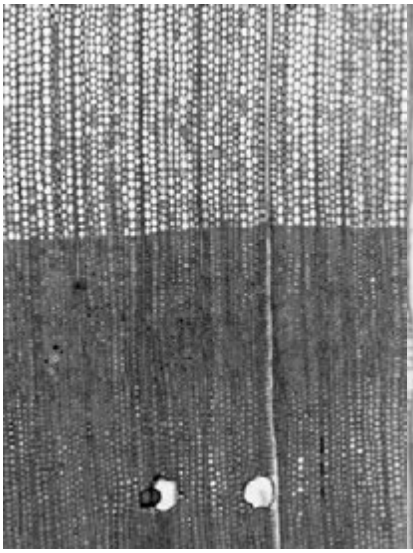
米倉浩司　2010 『高等植物分類表』 北隆館

遠山富太郎　1976 『スギの来た道』 中公新書

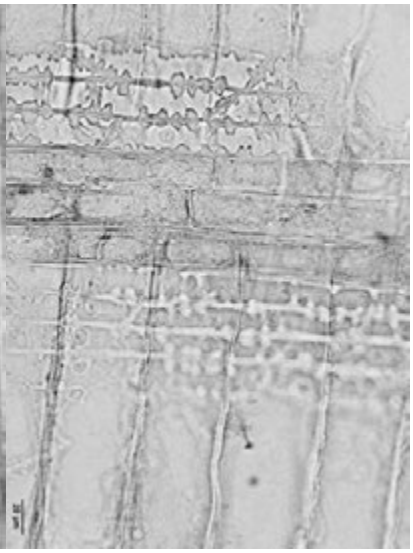

1a．モミ属　13053　木口× 30.

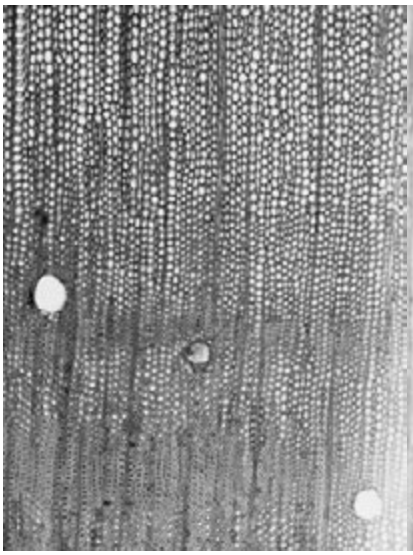

1b．同　板目× 60.

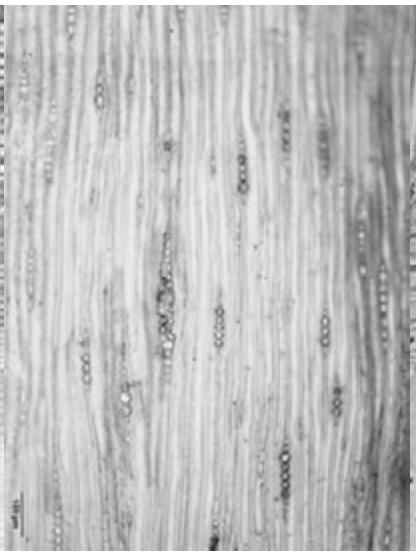

1c．同　柾目× 240.


2a．アカマツ　14176　木口× 30.

2b．同　板目× 60.

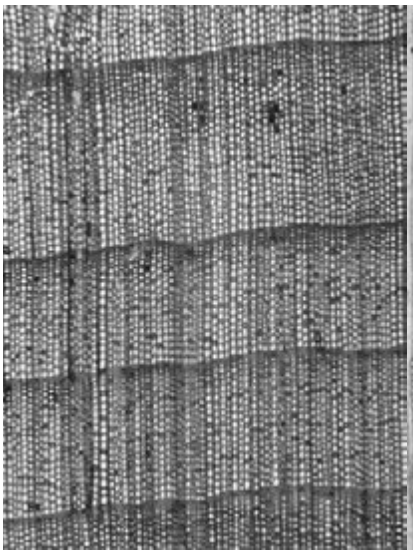

2c．同　柾目× 240.


3a．クロマツ　14174　木口× 30.


3b．同　板目× 60.

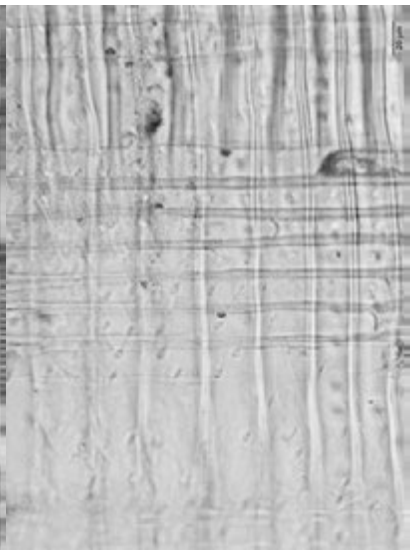
3c．同　柾目× 240.

写真 19　出土木材　顕微鏡写真 1

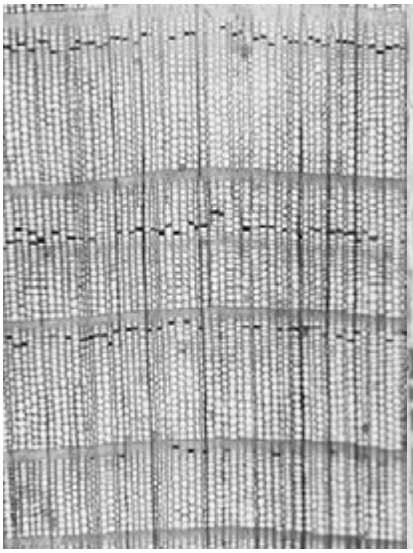


4a．イヌマキ属　12925　木口× 30.

4b．同　板目× 60.

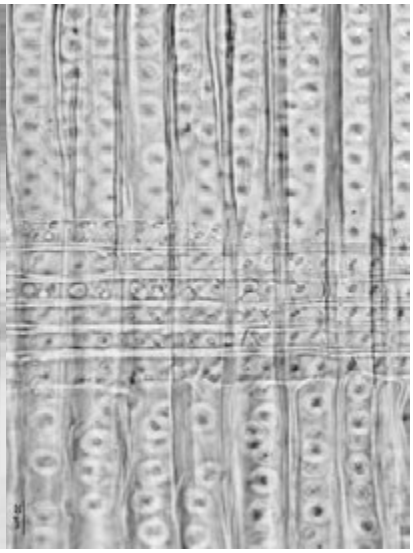


4c．同　柾目× 240.

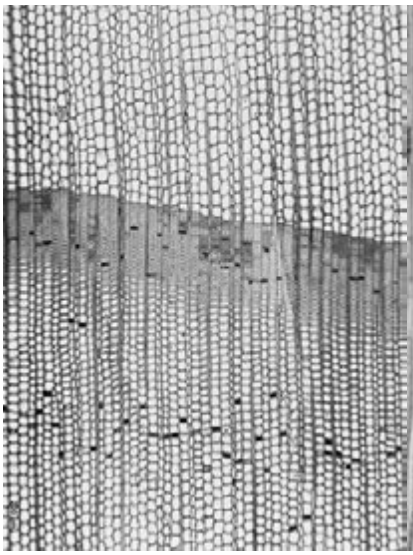


5a．ヒノキ　14200　木口× 30.

5b．同　板目× 60.

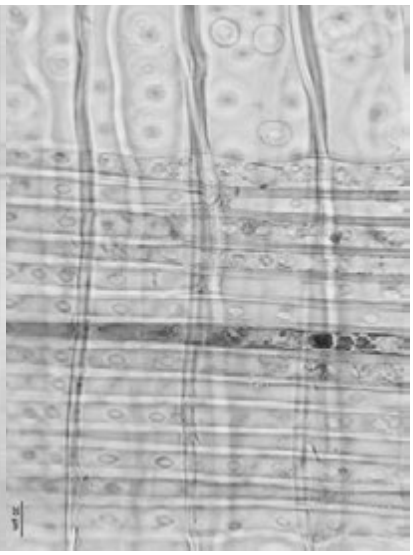


5c．同　柾目× 240.



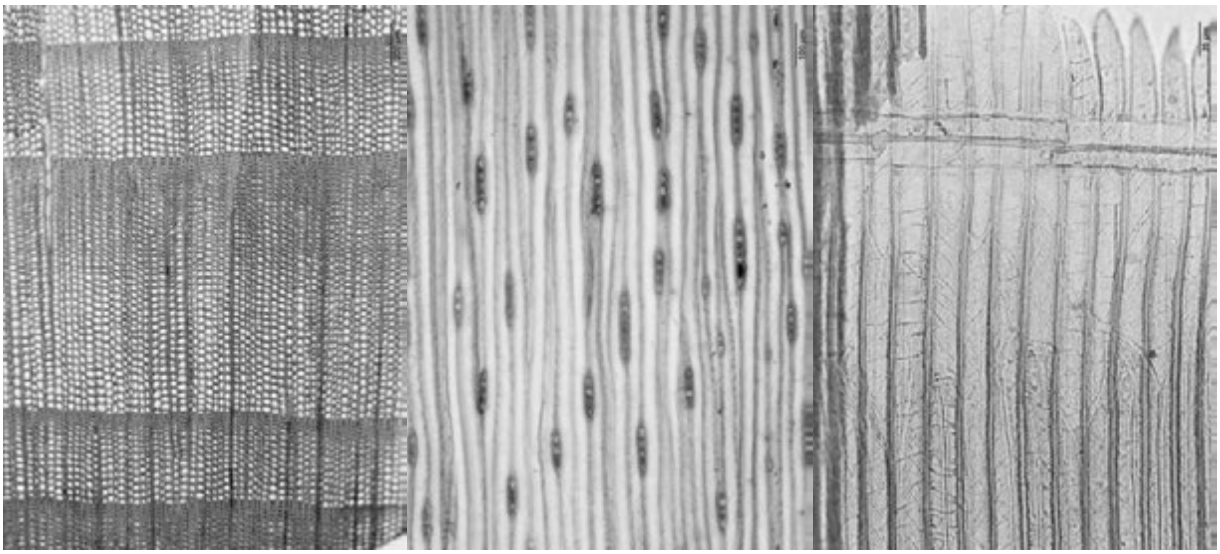
6a．スギ　13150　木口× 30.

6b．同　板目× 60.



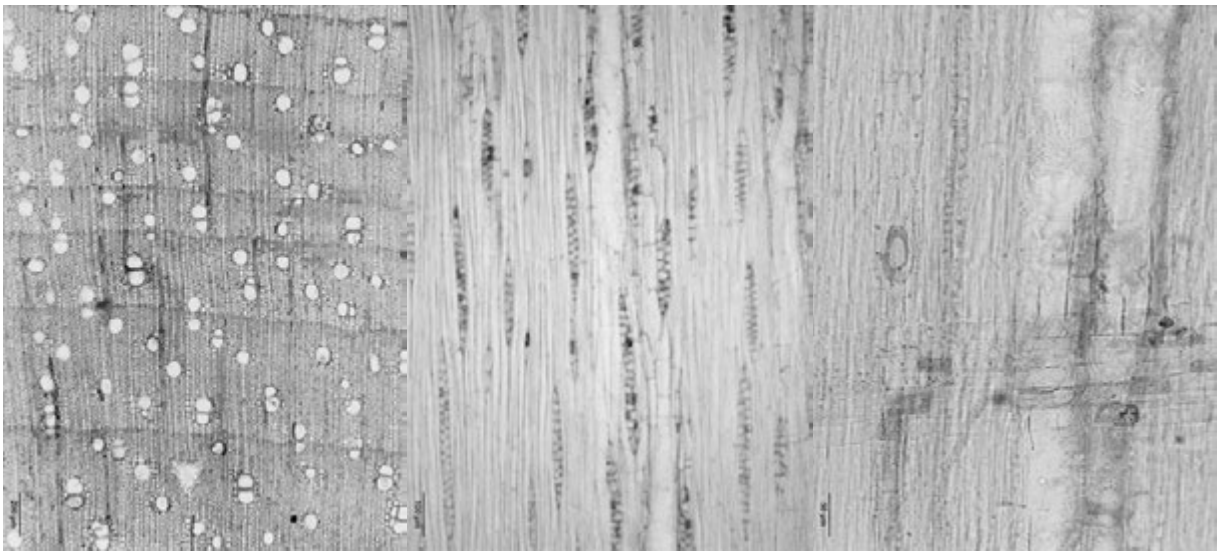
6c．同　柾目× 240.

写真 20　出土木材　顕微鏡写真２



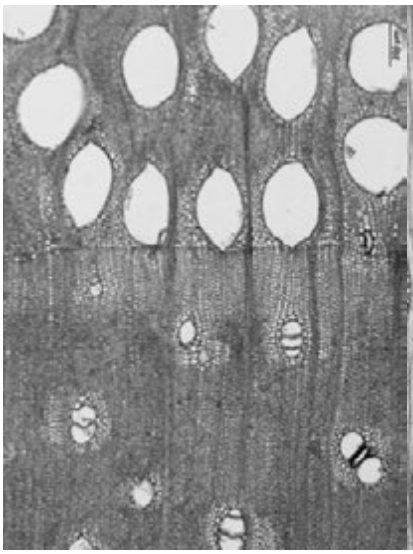
7a．カヤ　14310　木口× 30.　　7b．同　板目× 60.　　7c．同　柾目× 240.

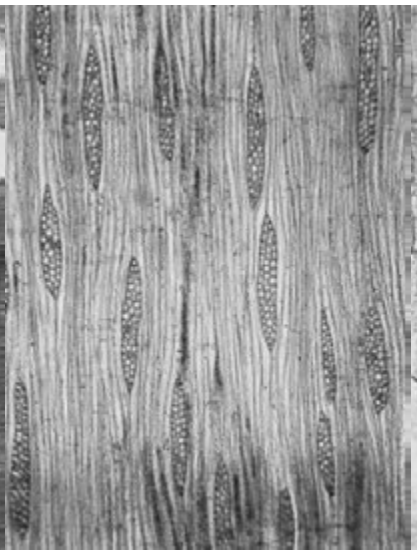
8a．クスノキ　9290　木口× 30.　　8b．同　板目× 60.　　8c．同　柾目× 120.



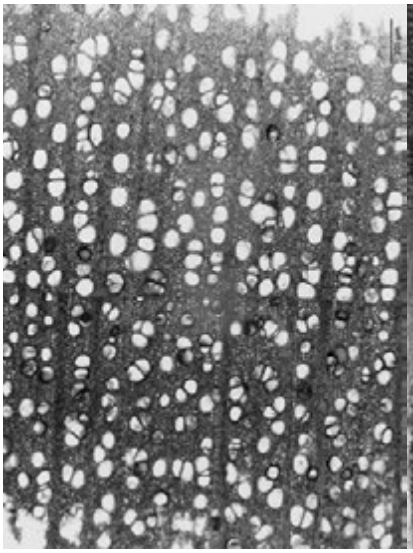
9a．クスノキ科　14352　木口× 30.　　9b．同　板目× 60.　　9c．同　柾目× 240.

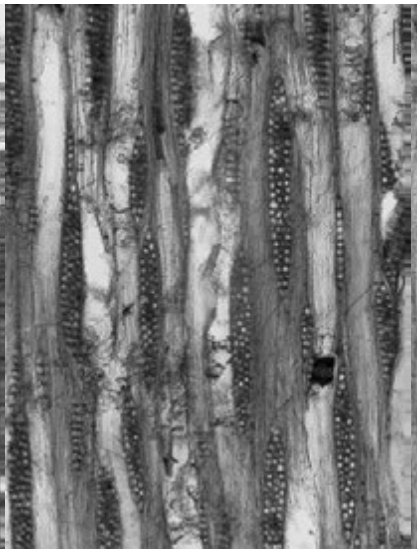
写真 21　出土木材　顕微鏡写真３


10a．ネムノキ　14849　木口× 30.


10b．同　板目× 60.

10c．同　柾目× 240.


11a．ヤマザクラ　9040　木口× 30.


11b．同　板目× 60.

11c．同　柾目× 120.

12a．モモ　14264　木口× 30.

12b．同　板目× 60.

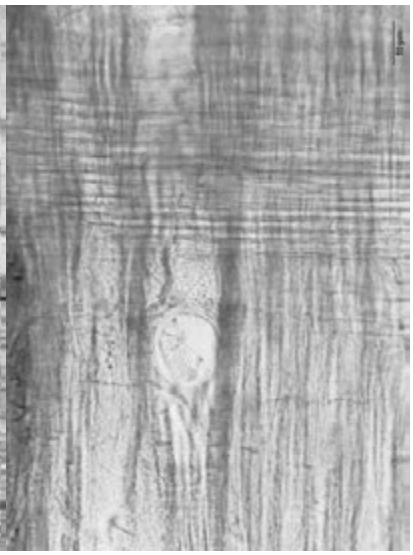
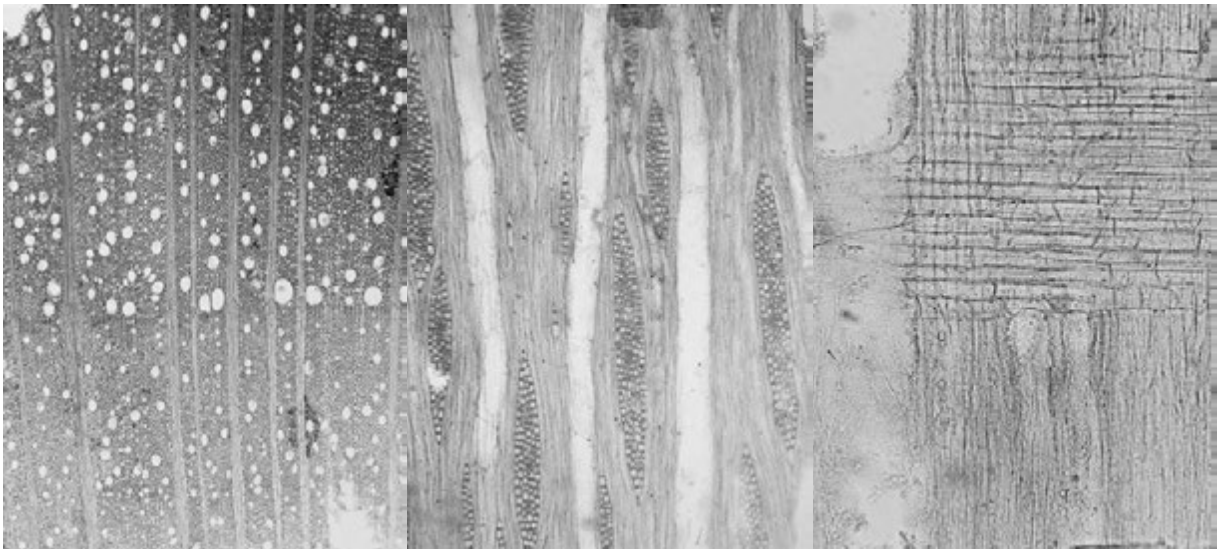
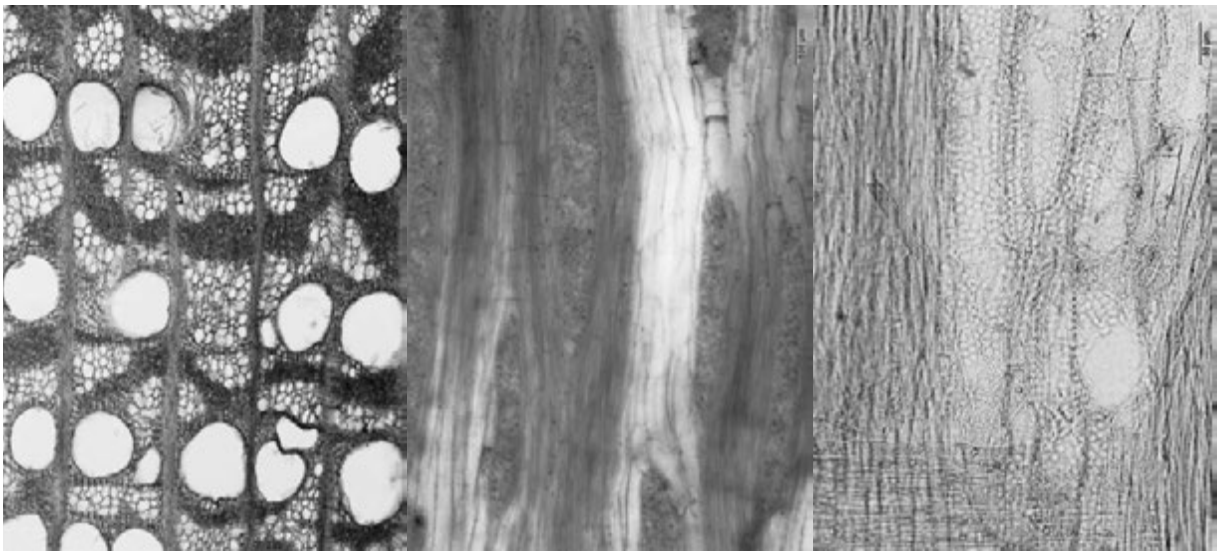

12c．同　柾目× 120.

写真 22　出土木材　顕微鏡写真４

13a．サクラ属　9556　木口× 30.　13b．同　板目× 60.　13c．同　柾目× 120.



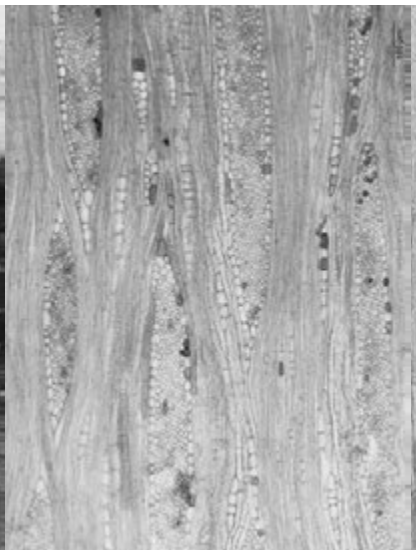
14a．グミ属　9035　木口× 30.　14b．同　板目× 60.　14c．同　柾目× 120.



15a．ケヤキ　14297　木口× 30.　15b．同　板目× 60.　15c．同　柾目× 120.

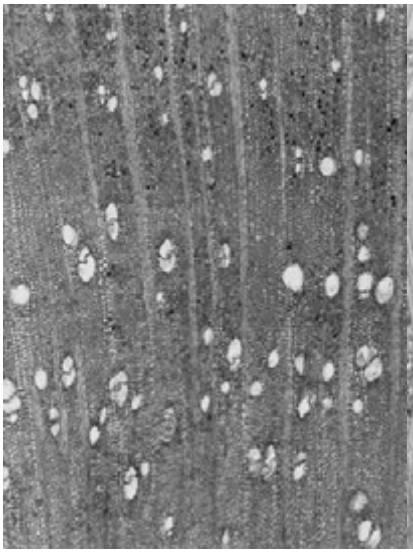
写真 23　出土木材　顕微鏡写真５

16a．エノキ属　14301　木口× 30.

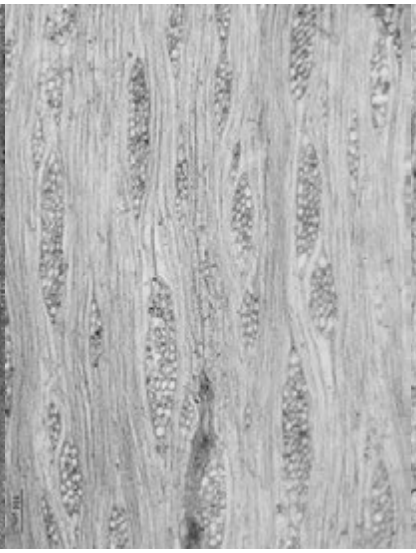


16b．同　板目× 60.

16c．同　柾目× 120.

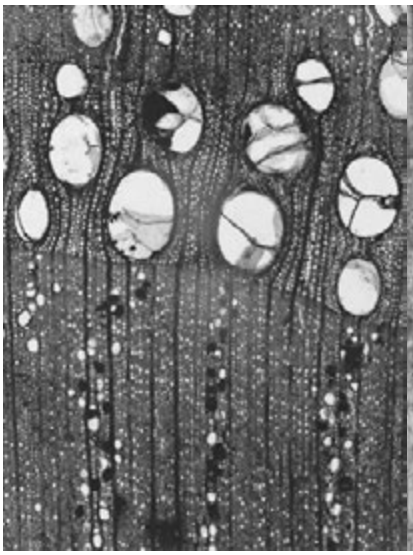


17a．カジノキ属　13830　木口× 30.



17b．同　板目× 60.

17c．同　柾目× 120.

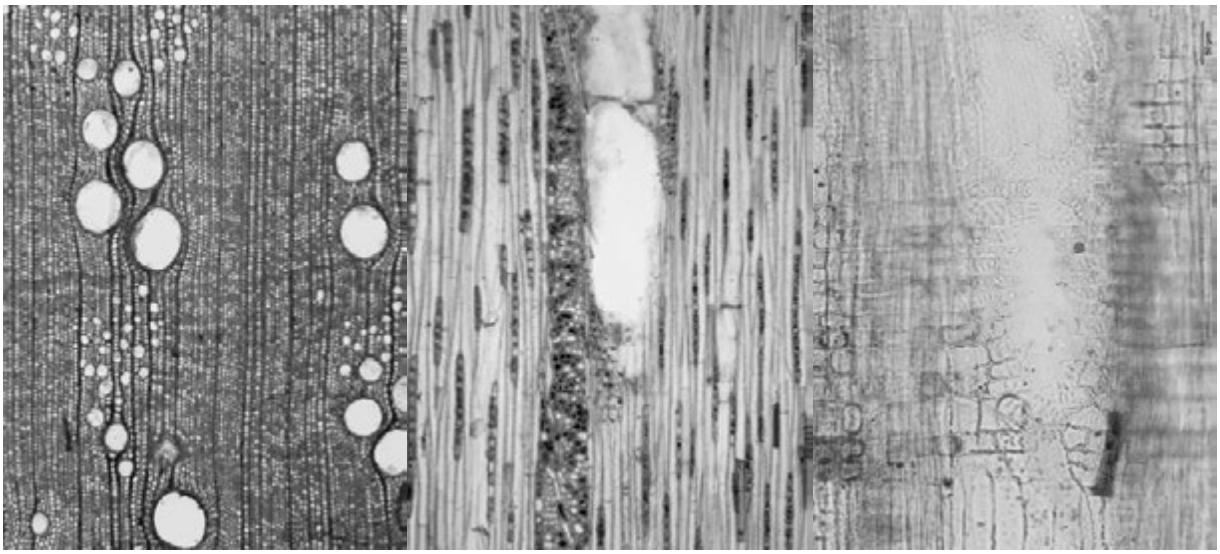


18a．クリ　9432　木口× 30.

18b．同　板目× 60.

18c．同　柾目× 120.

写真 24　出土木材　顕微鏡写真６

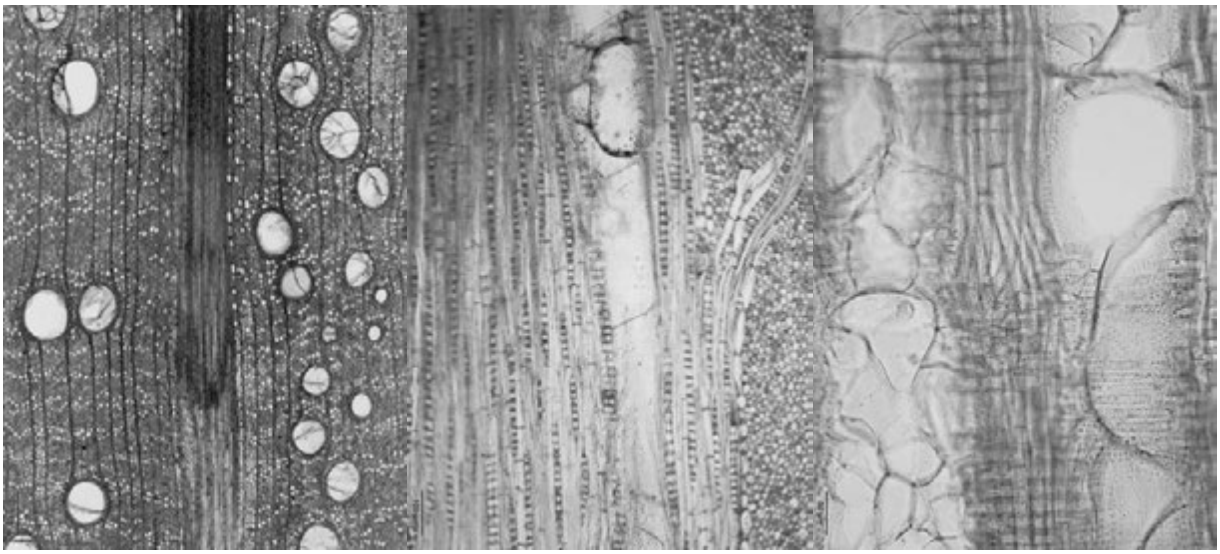


19a．コジイ　12982　木口× 30.　19b．同　板目× 60.　19c．同　柾目× 120.

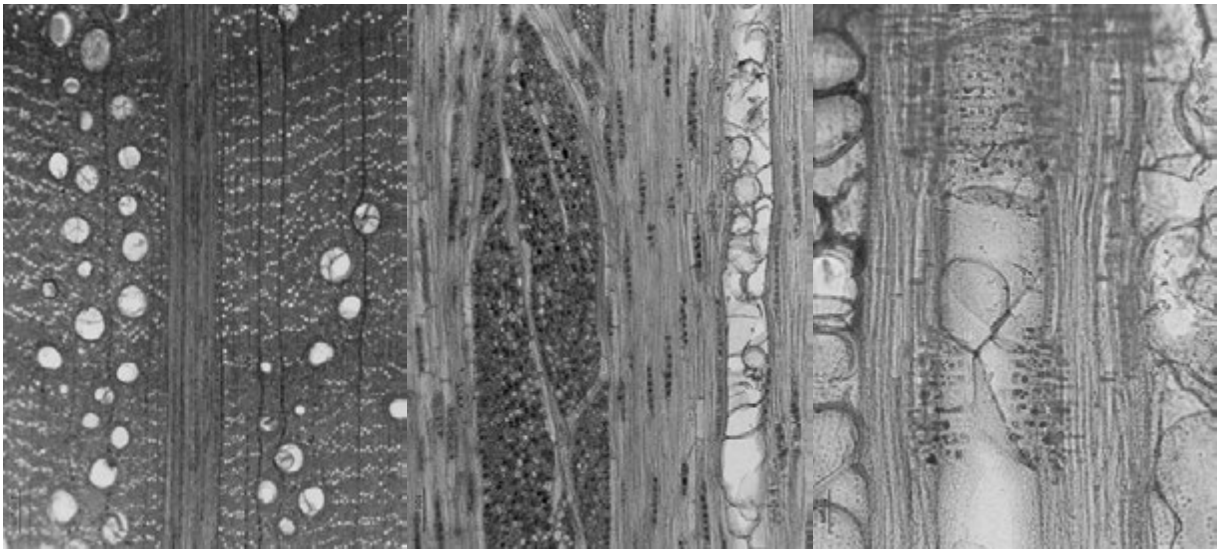
20a．スダジイ　9418　木口× 30.　20b．同　板目× 60.　20c．同　柾目× 120.

21a．ブナ属　13954　木口× 30.　21b．同　板目× 60.　21c．同　柾目× 120.

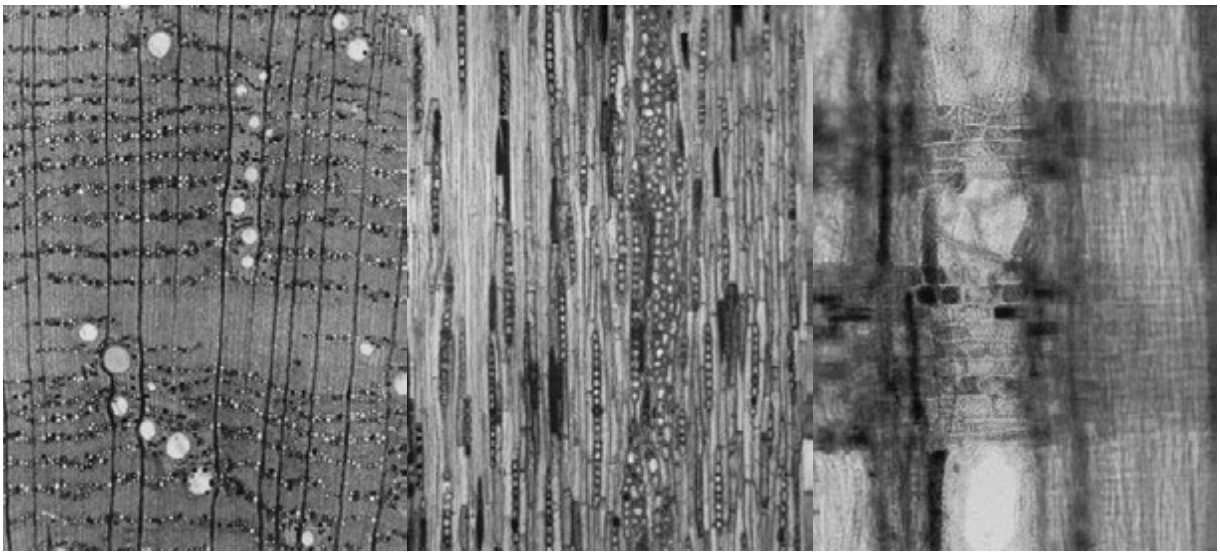
写真 25　出土木材　顕微鏡写真 7



22a．イチイガシ　13157　木口× 30.　22b．同　板目× 60.　22c．同　柾目× 120.

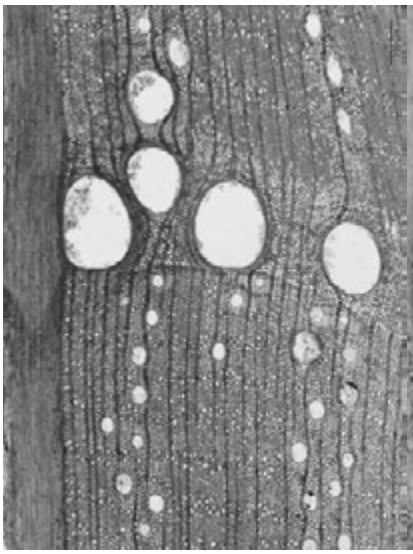


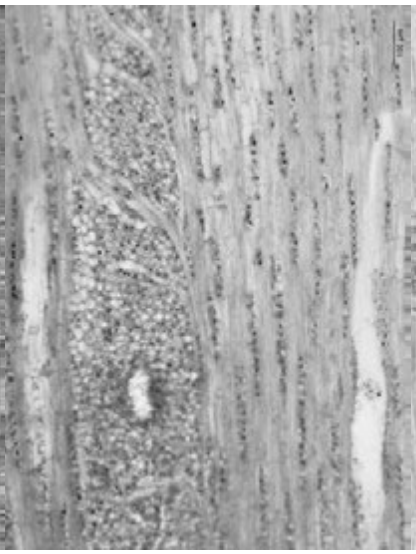
23a．アカガシ亜属　14848　木口× 30.　23b．同　板目× 60.　23c．同　柾目× 120.

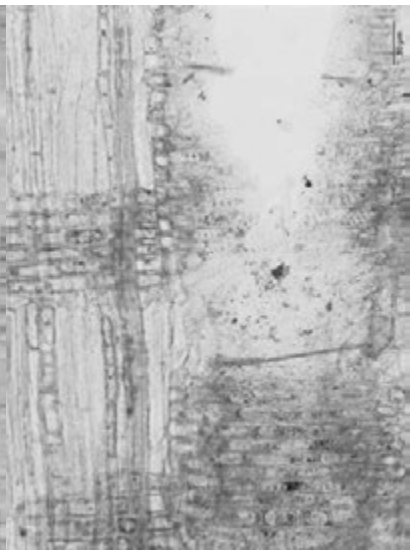


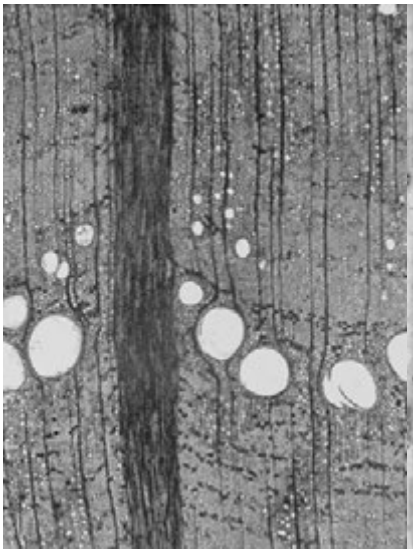
24a．ウバメガシ　14916　木口× 30.　24b．同　板目× 60.　24c．同　柾目× 120.

写真 26　出土木材　顕微鏡写真８

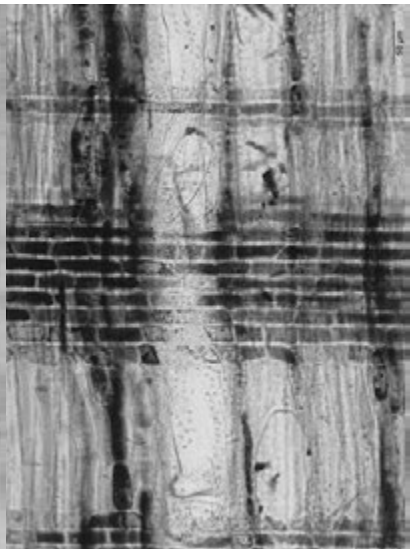

25a．クヌギ節　11366　木口× 30.

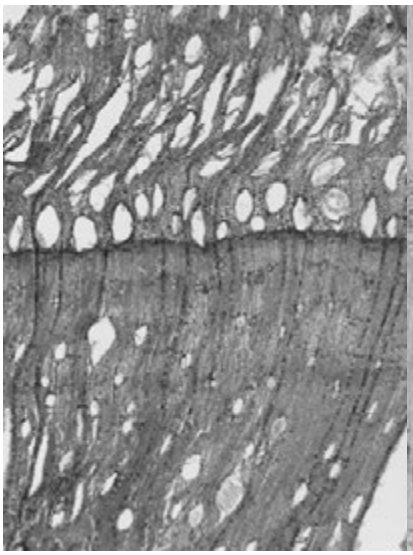

25b．同　板目× 60.

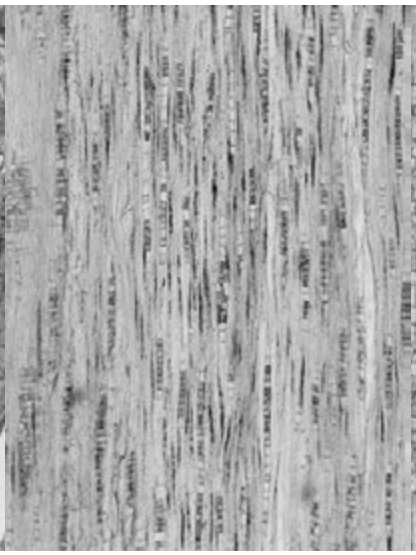

25c．同　柾目× 120.


26a．コナラ節　15069　木口× 30.

26b．同　板目× 60.


26c．同　柾目× 120.


27a．ヌルデ　15166　木口× 30.


27b．同　板目× 60.

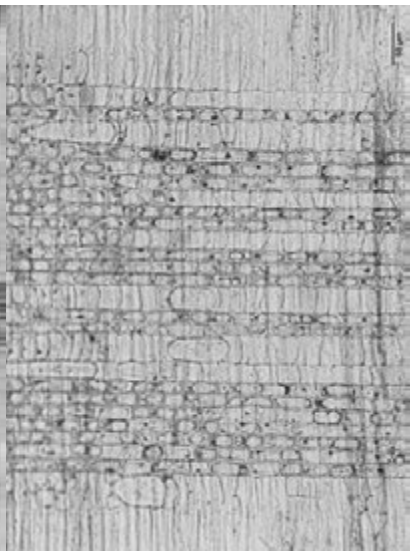
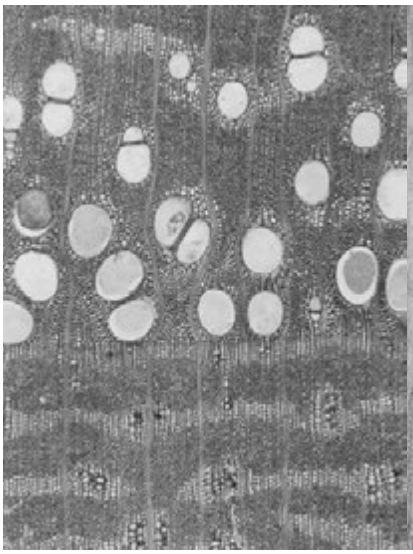
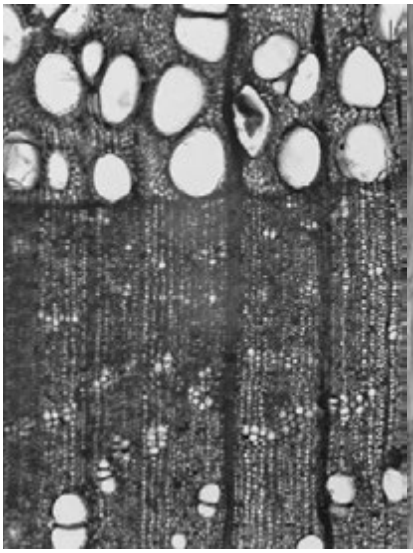

27c．同　柾目× 120.

写真 27　出土木材　顕微鏡写真９


28a．ムクロジ　9430　木口× 30.

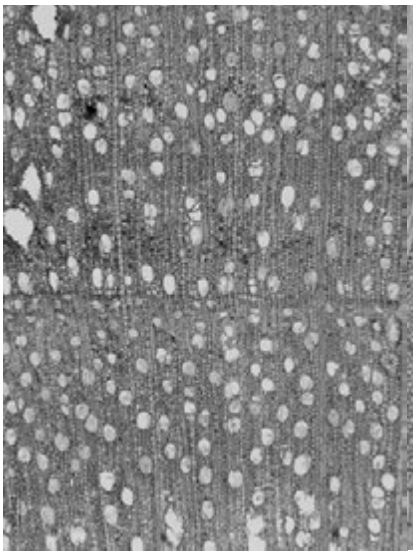
28b．同　板目× 60.

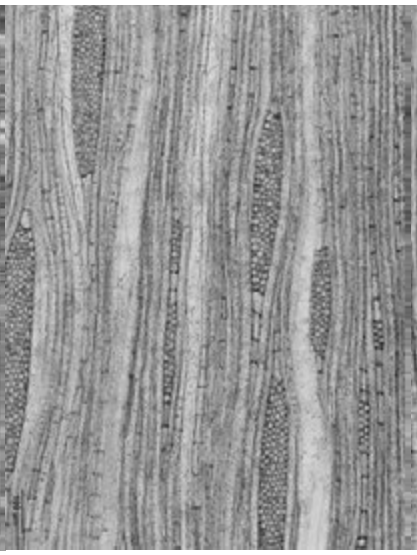
28c．同　柾目× 120.


29a．キハダ　12554　木口× 30.

29b．同　板目× 60.

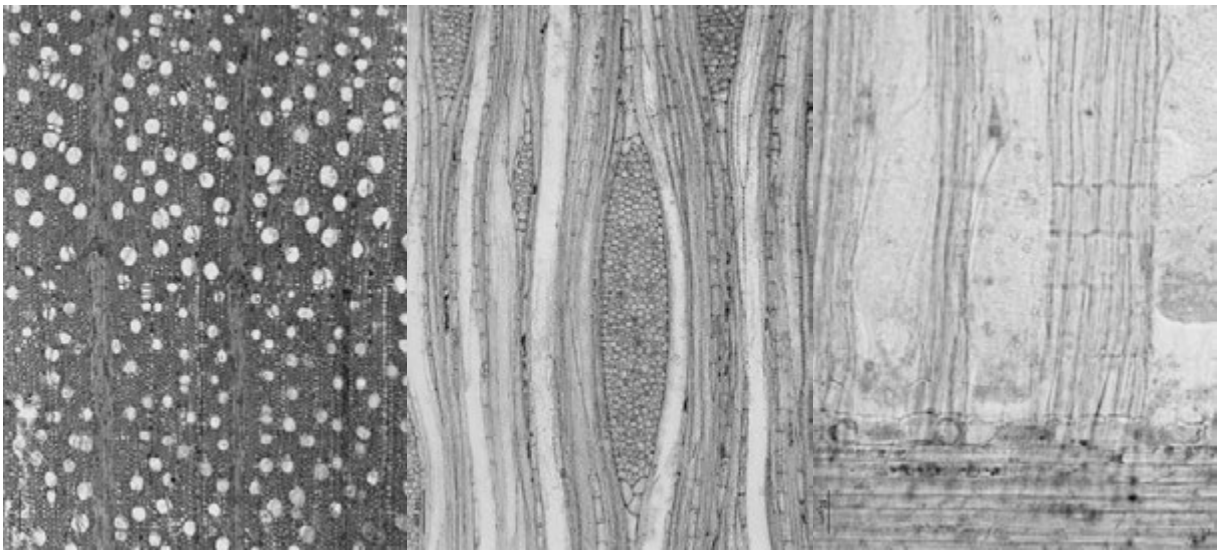
29c．同　柾目× 120.


30a．ミズキ　15135　木口× 30.

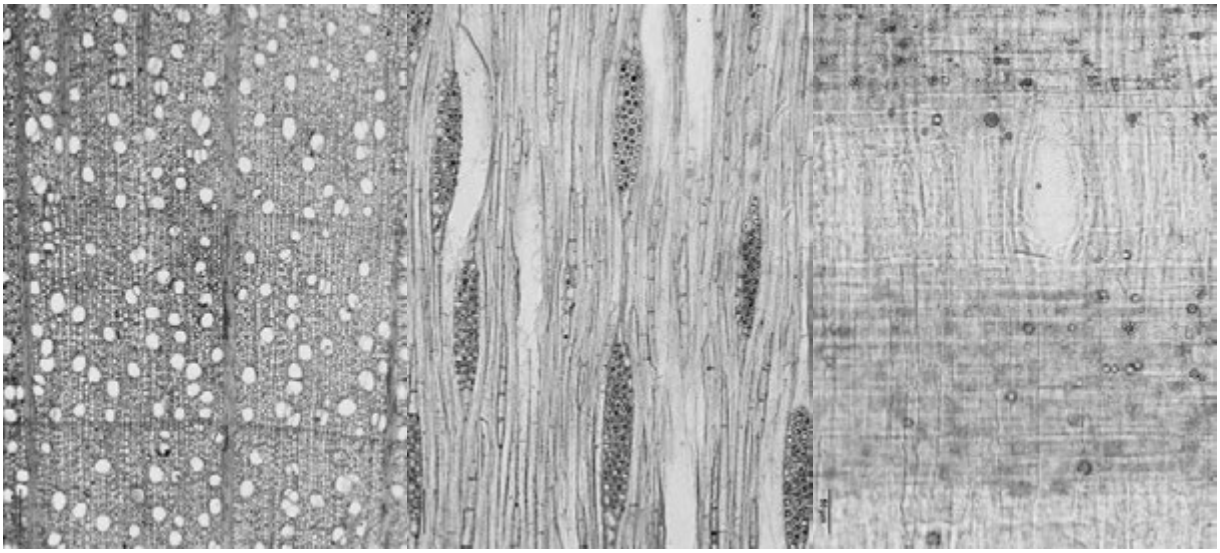

30b．同　板目× 60.

30c．同　柾目× 120.

写真 28　出土木材　顕微鏡写真 10



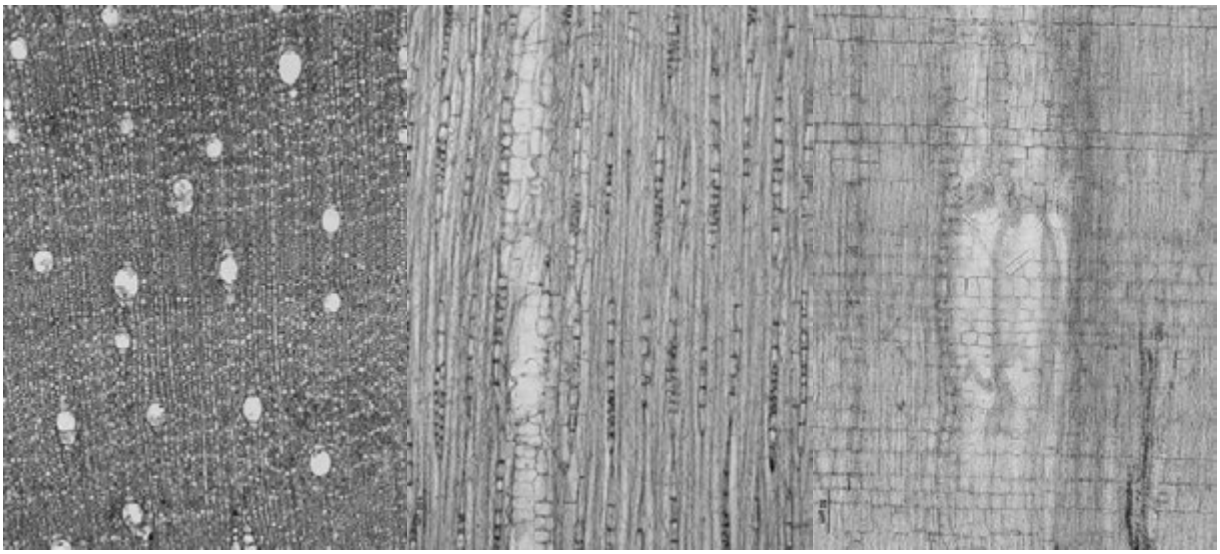
31a．ヤマボウシ　15128　木口× 30.　31b．同　板目× 60.　31c．同　柾目× 120.



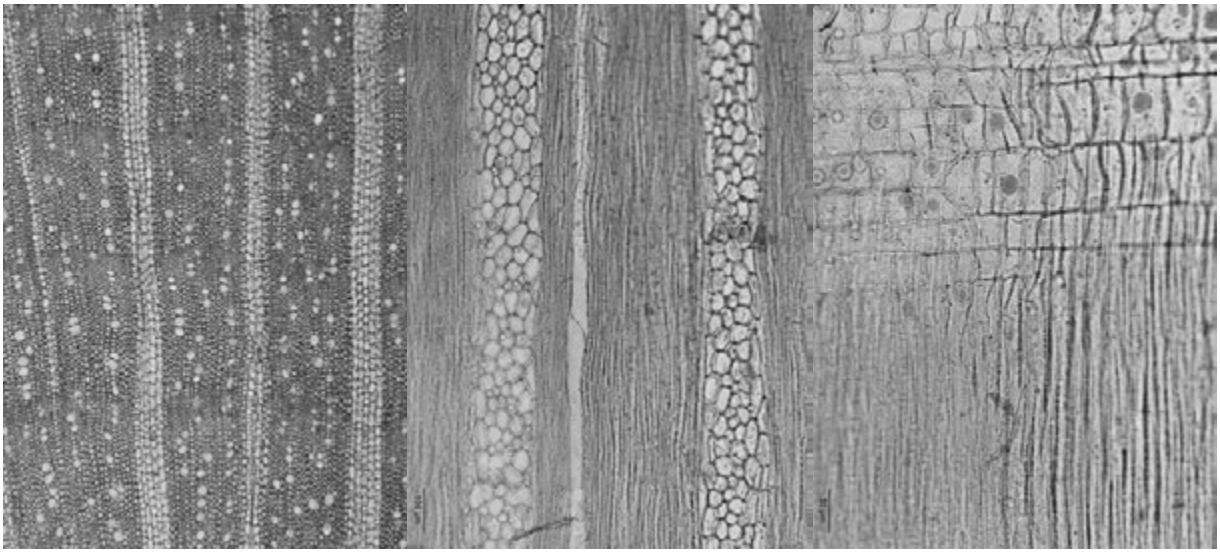
32a．クマノミズキ　14184　木口× 30.　32b．同　板目× 60.　32c．同　柾目× 120.

33a．ウツギ　14910　木口× 30.　33b．同　板目× 60.　33c．同　柾目× 120.

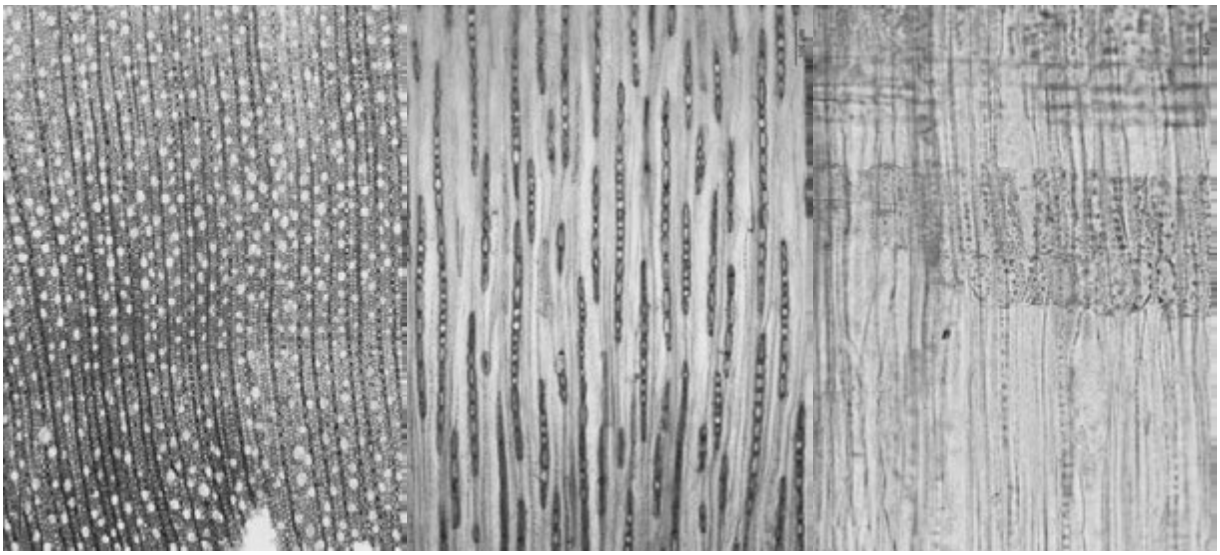
写真 29　出土木材　顕微鏡写真 11



34a．マメガキ　15162　木口× 30.　　34b．同　板目× 60.　　34c．同　柾目× 120.

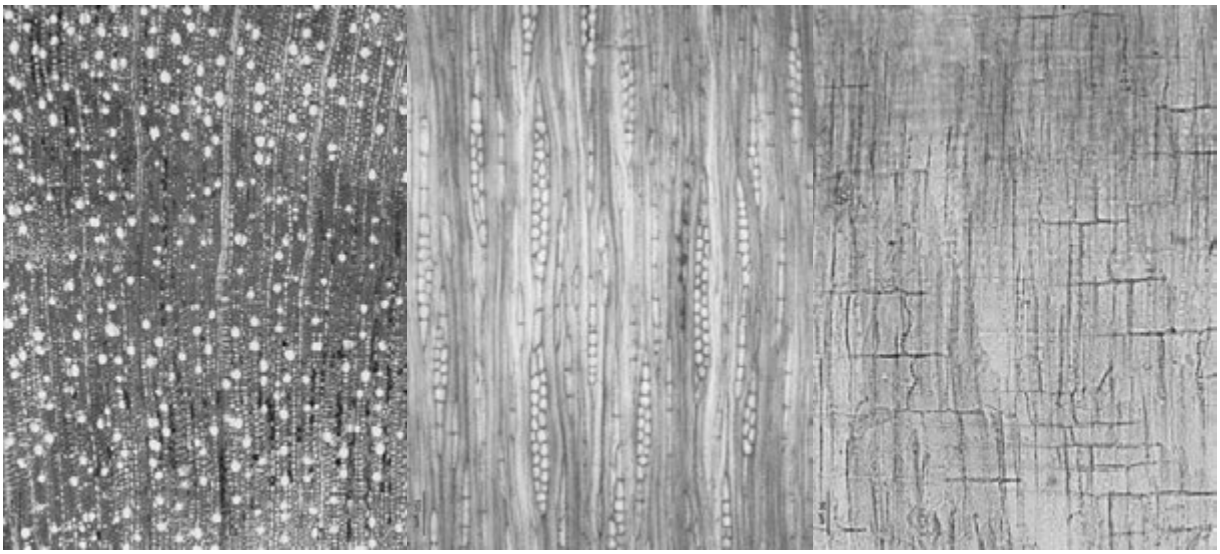


35a．タイミンタチバナ　14867　木口× 30.　　35b．同　板目× 60.　　35c．同　柾目× 120.

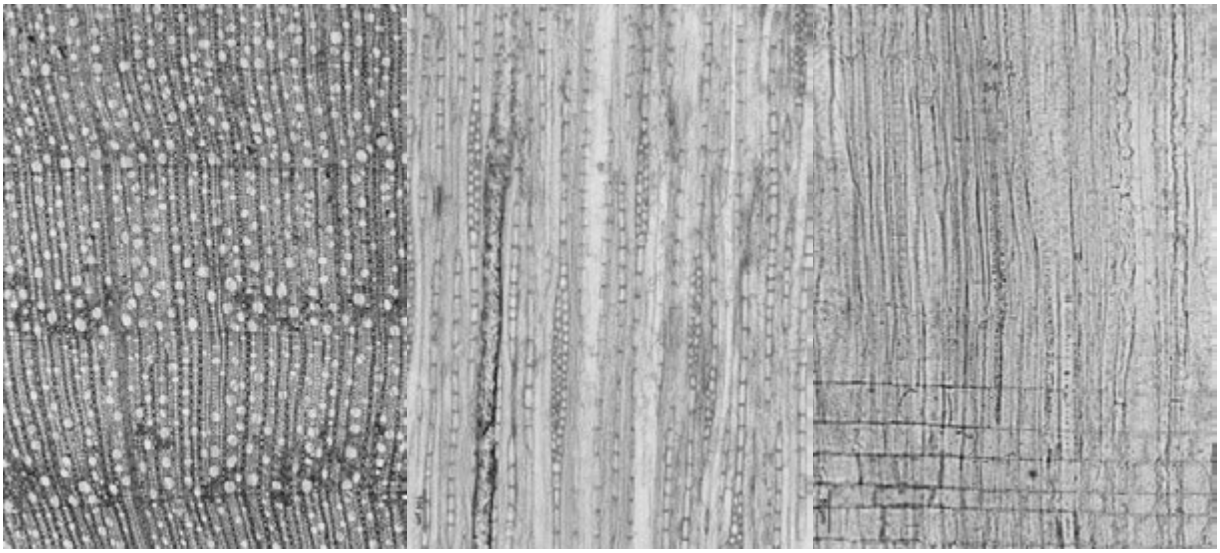


36a．サカキ　13088　木口× 30.　　36b．同　板目× 60.　　36c．同　柾目× 120.

写真 30　出土木材　顕微鏡写真 12



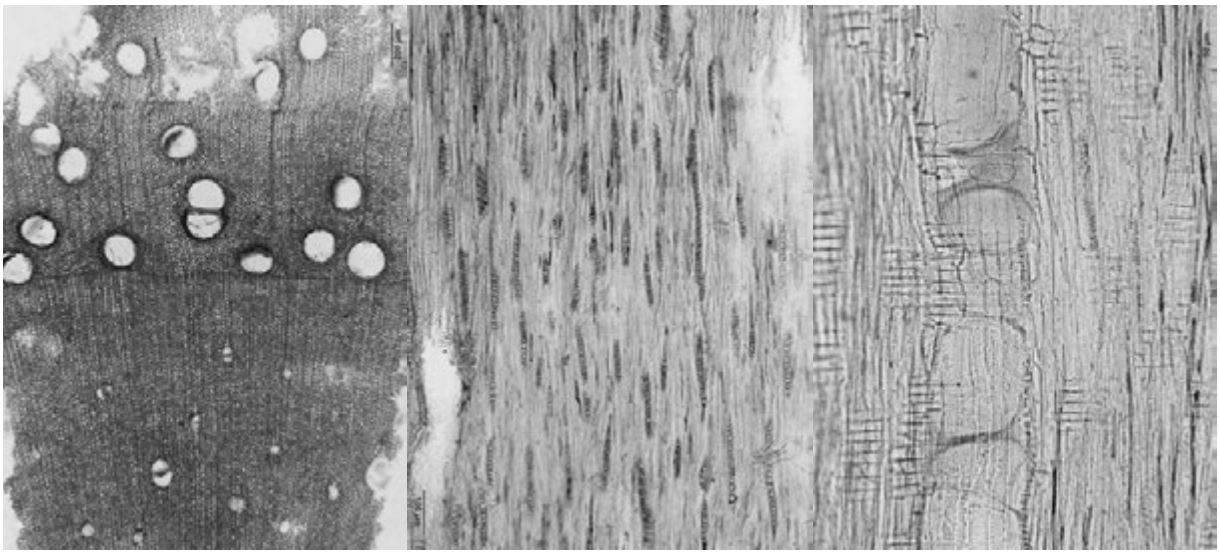
37a．ヒサカキ　13155　木口× 30.　37b．同　板目× 60.　37c．同　柾目× 120.



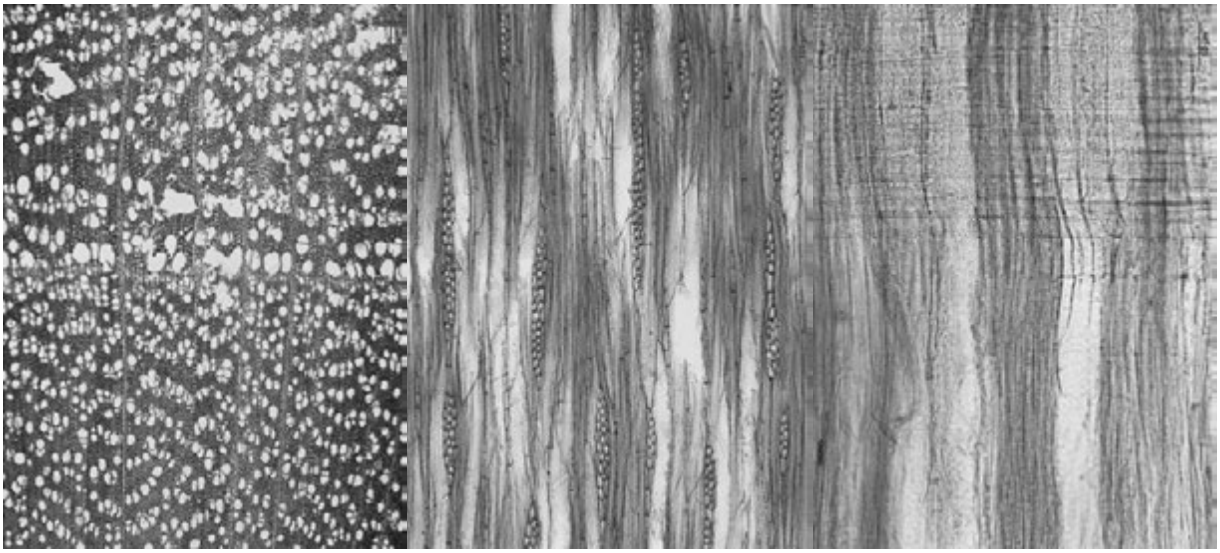
38a．ツツジ属　15126　木口× 30.　38b．同　板目× 60.　38c．同　柾目× 120.

39a．ムラサキシキブ属　14236　木口× 30.　39b．同　板目× 60.　39c．同　柾目× 120.

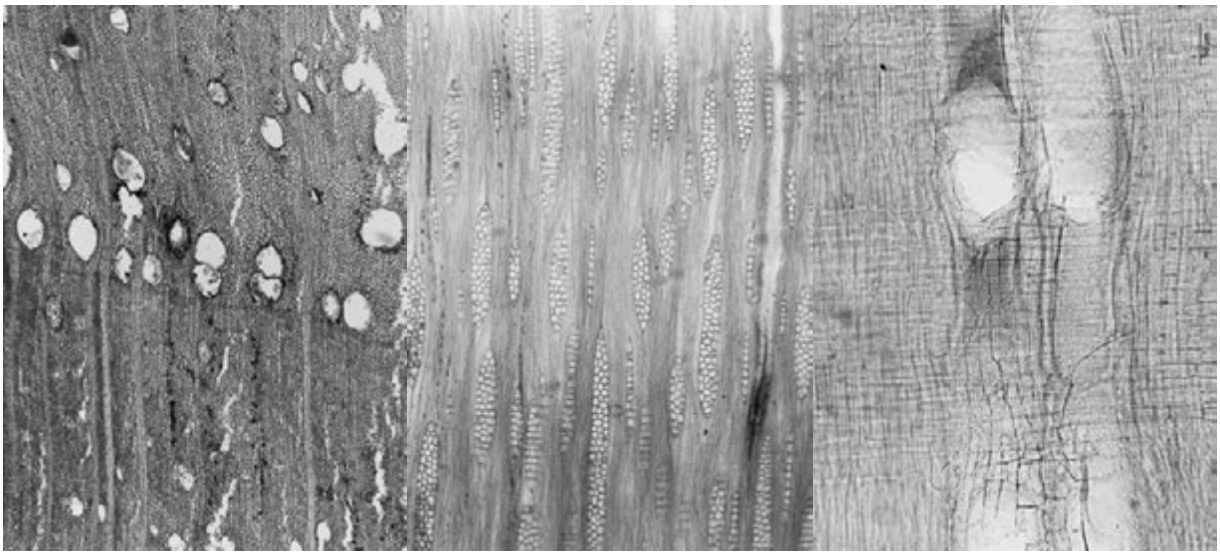
写真 31　出土木材　顕微鏡写真 13



40a．クサギ　14230　木口× 30.　　40b．同　板目× 60.　　40c．同　柾目× 120.



41a．ニワトコ　14774　木口× 30.　　41b．同　板目× 60.　　41c．同　柾目× 120.



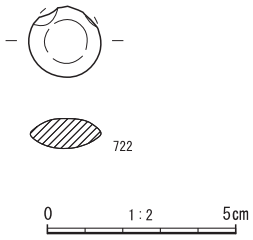
42a．タラノキ　13827　木口× 30.　　42b．同　板目× 60.　　42c．同　柾目× 120.

写真 32　出土木材　顕微鏡写真 14

附編

平成 24 年度までに『寺家前遺跡Ⅰ（古代・中～近世編）』と『寺家前遺跡Ⅱ（木製品・石製品・金属製品他編）』（以下、『寺家前Ⅰ』、『寺家前Ⅱ』を刊行してきたところであるが、本稿に追加・修正をまとめて報告する。

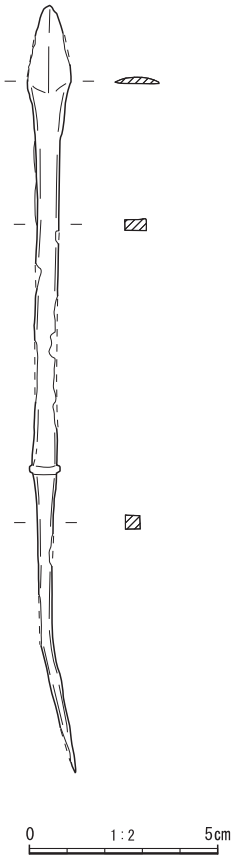
新規追加は第 138 図 722 の碁石である。722 は平成 17 年度に本調査を実施したＦ区包含層より出土した石製品である。径 1.9 ㎝、厚みは 0.8 ㎝の円形で、断面形は紡錘形をしている。火を受けているためか色調は橙色をしている。Ｆ区は中世末から近世にかけての墓坑３基と五輪塔などが見つかっている。正確な年代の決め手になるものは近世墓 SF1555 より出土した寛永通寶（新）（『寺家前Ⅰ』図 145-1155 ～ 1157）のみで 18 世紀以降に下るが、その他に年代を特定出来るような出土品はない。調査時の所見ではＦ区で火葬墓の痕跡も見られたとあることから、722 は火葬墓に副葬された可能性がある。



第 138 図　出土碁石実測図

『寺家前Ⅰ』の図 149 に掲載した尖根系柳葉式長頸鏃（1230）は、茎部の形状が挿図の形ではなく、同図の 1229 と同じ形状である。第 139 図に修正図を掲載した。

同じく『寺家前Ⅰ』の図 154-1303 と 1296 は接合することが判明した。また報告書に非掲載の金属製品ともよく似ていることから、これらは恐らく同一個体であろう。この金属製品は糸切り鋏の可能性が高い。



第 139 図　出土鉄鏃訂正図

『寺家前Ⅱ』で報告した遺構については３箇所を変更した。まず、古墳時代後期の掘立柱建物と報告した掘立柱建物 SH212 と SH213 は遺構検討の結果、弥生時代後期の掘立柱建物とした。そのため同書第３図１～５の礎板は弥生時代後期に属する。もうひとつは E-1 区で検出した古墳時代後期の杭列「SX419」である。不明遺構としていたが、周辺遺構との検討をしていくなかで、杭列は大畔の機能をもっている可能性が考えられるようになった。そのため本書では「SX419」を改め、「畔 SK419」とした。挿図や図版、観察表内にある「SX419」は「畔 SK419」と読み替えられたい。

『寺家前Ⅱ』の表 26　出土木製品観察表の訂正は３箇所ある。表内の挿図№.96 の遺構層位は正しくは「SP10247」、挿図№.97 の遺構層位は正しくは SP10458 である。もうひとつは挿図№.475 と№.476 は表内の項目が全て入れ替わる。

『寺家前Ⅱ』の図版 64 の最上段に掲載した 705 の左側に展開した写真は別のもので、本書への掲載がない木製品である。

なお、これ以外の修正は第９表の正誤表にまとめた。

第９表　『寺家前遺跡Ⅰ』・『寺家前遺跡Ⅱ』正誤表

報告書名	頁	誤	正
『寺家前Ⅰ』	目次	第４章　２．寺家前遺跡井戸遺構の花粉分析	第４章　２．寺家前遺跡井戸遺構の花粉化石
	目次	表 20　出土銭貨観察表・・・・312	表 20　出土銭貨観察表・・・・311
	目次	表 21　出土金属製品観察表・・・・313	表 21　出土金属製品観察表・・・・312
	54	図 23　４号墓	図 23　４群墓
	58	（図 18・23，図版 17・18）	（図 19・23、図版 17・18）
	59	（SD8185・SD9067 など）	（SD8183・SD9067 など）
	143	図 91　458 ～ 459　１：４	図 91　458 ～ 459　１：２
	193	図 137　1077　１：４	図 137　1077　１：２
	212	1351　観察表なし	1351　観察表　本書　第 13 表
	278	挿図№ 156　壷	挿図№ 156　長頸壷（または長頸の平壷）
	300	挿図№ 905　鉢	挿図№ 905　大鉢
	309	挿図№ 1084	挿図№ 1085
	309	挿図№ 1085	挿図№ 1084
	図版 18	1. A-1 区　近世以降・・・A535・536・537（南から）	1. A-1 区　近世以降・・・A535（南から）
	図版 103	1163	1168
	図版 103	1167	1163
	図版 103	1168	1167
『寺家前Ⅱ』	51	第 39 図 245　縮尺 1：16	第 39 図 245　縮尺 1：21
	55	第 42 図 255　縮尺 1：8	第 42 図 255　縮尺 1：8.2
	73	第 58 図 337　縮尺 1：8	第 58 図 337　縮尺 1：9.2
	75	第 59 図 345　縮尺 1：8	第 59 図 345　縮尺 1：16
	75	第 59 図 347　縮尺 1：8	第 59 図 347　縮尺 1：10.7
	85	第 67 図 394　縮尺 1：8	第 67 図 394　縮尺 1：10
	99	第 77 図 433　縮尺 1：8	第 77 図 433　縮尺 1：7.82
	105	31 行目　長さは 61.9 ㎝、・・・	31 行目　長さは 82.0 ㎝、・・・
	106	第 82 図 456　縮尺 1：8	第 82 図 456　縮尺 1：7.4
	107	第 83 図 467　スケール　466 ～ 468	第 83 図 467　スケール　466・468
	108	第 84 図 471・474　縮尺 1：8	第 84 図 471・474　縮尺 1：16
	108	第 84 図 470・472・473・475・476　縮尺 1：16	第 84 図 470・472・473・475・476　縮尺 1：8
	121	第 92 図　スケール 533 ～ 542・545・546	第 92 図　スケール 533 ～ 542・544 ～ 546
	147	SX10466	SK10466
	169	第 127 図　石製品出土分布図	第 127 図　石製品出土遺構
	209	第 155 図　用途不明	第 155 図　用途不明品
	334	49　最大長 65.60 ㎝　最大幅 6.20 ㎝　厚さ 1.80 ㎝	49　最大長 70.50 ㎝　最大幅 11.30 ㎝　厚さ 3.10 ㎝
	334	50　最大長 70.50 ㎝　最大幅 11.30 ㎝　厚さ 3.10 ㎝	50　最大長 65.60 ㎝　最大幅 6.20 ㎝　厚さ 1.80 ㎝
	335	111　最大長 137.30 ㎝（本文 24 頁　137 ㎝）	111　最大長 127.30 ㎝（本文 24 頁　127 ㎝）
	335	131　最大長 16.60 ㎝　最大幅 24.40 ㎝	131　最大長 24.40 ㎝　最大幅 16.60 ㎝
	336	176　最大長 42.20 ㎝　最大幅 66.70 ㎝	176　最大長 66.70 ㎝　最大幅 42.20 ㎝
	340 ～ 341	SX423	SK423
	340	397　長さ 15.90 ㎝	397　長さ 36.70 ㎝
	340	409　E-4　110 B -2	409　E-4　110 B -7
	341	454　長さ 106.80 ㎝	454　長さ 111.60 ㎝
	341	461　長さ 61.90 ㎝	461　長さ 82.00 ㎝
	341	475　長さ 29.40 ㎝	475　長さ 53.50 ㎝
	341	462・469　E-4　110 B -2	462・464・469　E -4　110 B -7
	341	464　E-4　110 B -2	464　E-4　－
	344	表 26　644　TP22 出土	表 26　644　SK611 出土
	344	表 26　645・646　TP23 出土	表 26　645・646　TP23 出土　SK611 関連
	342	535　最大長 20.60 ㎝　最大幅 5.20 ㎝　厚さ 0.20 ㎝	535　最大長 30.60 ㎝　最大幅 5.90 ㎝　厚さ 0.90 ㎝
	342	542　最大長 56.60 ㎝　最大幅 26.90 ㎝　厚さ 2.80 ㎝	542　最大長 70.50 ㎝　最大幅 22.60 ㎝　厚さ 1.90 ㎝
	344	647　最大長 134.80 ㎝	647　最大長 131.80 ㎝
	344	656　最大長 16.50 ㎝	656　最大長 61.50 ㎝

参考文献

池谷初恵　1995 「伊豆国における奈良平安時代の土器様相」『大場川遺跡群』 三島市教育委員会

植松章八　1977 「土器の編年・年代と地域性」『天間代山遺跡』 富士市教育委員会

植松章八　2008 「東駿河の奈良・平安時代遺跡と土器」『禰宜ノ前遺跡』 富士市教育委員会

小野真一　1972 「上多賀宮脇祭祀遺跡」『熱海市史』資料編　熱海市

窯跡研究会　2011 『古代窯業における窯・工人・生産組織－須恵器生産を軸に－』
窯跡研究会第４会シンポジウム資料

川江秀孝 1979 「静岡県下の須恵器について」『須恵器－古代陶質土器－の編年』 静岡県考古学会

北川恵一　1988 「駿東型甕の初現と終末について」『沼津市博物館紀要』12　沼津市歴史民俗資料館

木ノ内義昭　2002 「須恵器流入以降～律令時代の土師器の様相」
『東平遺跡　第 16 地区（三日廃寺跡）、第 27 地区発掘調査報告書』 富士市教育委員会

後藤建一　2000 「古墳出土須恵器にみる地域流通の解体と一元化
－駿河西部域における６世紀から７世紀の古墳出土須恵器を事例として－」『日本考古学』第９号　日本考古学会

（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所　1999 『元島遺跡』

（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所　2007 『入野東古墳群・入野高岸古窯』

（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所　2010 『衣原古墳群・衣原遺跡・衣原古窯群』

（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所　2010 『中ノ合イセ山遺跡・中ノ合イセ山古墳・中ノ合遺跡』

佐藤達雄他　1983 『上横山遺跡』 小山町教育委員会

佐藤達雄他　1989 『大谷川遺跡Ⅳ』（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県教育委員会　1989 『静岡県の窯業遺跡』

静岡県教育委員会　1989 『静岡県遺跡地名表－焼津以西－』

静岡県埋蔵文化財センター　2012 『寺家前遺跡Ⅰ（古代・中～近世編）』

静岡県埋蔵文化財センター　2013 『寺家前遺跡Ⅱ（木製品・石製品・金属製品他編）』

静岡県埋蔵文化財センター　2014 『寺家前遺跡Ⅳ（弥生時代後期～古墳時代初頭編）』（刊行予定）

柴田　稔　1992 『古新田遺跡　遺構編』 浅羽町教育委員会

柴田　睦　2002 『藤守遺跡』（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所

島田市教育委員会　2010 『市内遺跡発掘調査報告書』静岡県島田市埋蔵文化財報告　第 43 集

鈴木敏中他　1983 『中島下舞台遺跡』 三島市教育委員会

鈴木敏則　2001 「湖西窯古墳時代須恵器編年の再構築」『須恵器生産の出現から消滅』 東海土器研究会

鈴木敏則　2004 「静岡県下の須恵器編年」『有玉古窯』 浜松市教育委員会

瀬川裕一郎・平林将信・志村博　1983 「東駿河地域」『奈良・平安時代土器の諸問題』 神奈川考古同人会

積山洋・清水和明　1989 「橋邸建替工事に伴う遠里小野遺跡発掘調査（OR87-6）」
『昭和 62 年度　大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』 大阪府教育委員会・大阪市文化財協会

平林将信・志村博他　1983 『三新田遺跡発掘調査報告書』 富士市教育委員会

長野康敏他　1984 『伊豆逓信病院敷地内遺跡』 函南町教育委員会

成島　仁　1987 「宮川地区」『大谷川遺跡Ⅱ』（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所

羽鳥靖子　1984 「「駿東型甕」の機能について」『伊豆逓信病院敷地内遺跡』 函南町教育委員会

浜松市教育委員会　1979 『伊場遺跡Ⅰ　遺構編１』

早瀬　賢　2013 「上園遺跡（第 13 次の調査概要報告）－牛頸須恵器窯跡群の生産工人集落の発見」
『平成 25 年度九州考古学会総会発表資料』

平野吾郎　1985 『横山遺跡』 静岡県教育委員会
平野吾郎　1991 「遠江・駿河における歴史時代土器の成立と展開」『古代探叢』Ⅲ　早稲田大学考古学研究会
藤枝市史編纂委員会　2006 『藤枝市史　資料編１　考古』 藤枝市
藤枝市史編纂委員会　2010 『藤枝市史　通史編　上（原始・古代・中世)』 藤枝市
藤枝市史編纂委員会　2013 『図説　藤枝市史』
松井一明他　1995 『坂尻遺跡』 袋井市教育委員会
南伊豆町教育委員会　1978 『日詰遺跡』
望月精司・鹿島昌也　2010 「北陸の古代土器生産と窯・工房・工人」
『古代窯業の基礎研究－須恵器窯の技術と系譜－』窯跡研究会編　真陽社
焼津市教育委員会　1982 『宮之腰遺跡』
八木勝行他　1988 『東浦遺跡発掘調査報告書』 藤枝市教育委員会
山田邦和　1998 『須恵器生産の研究』 学生社
渡辺康弘　1989 「横山・上横山遺跡の成立」『小山町の歴史』３号　小山町

第 10 表　出土土器観察表

挿図 No.	図版 No.	区	グリッド	遺構層位	種別	器種名	口径	底径	器高	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存率 (%)	備考
1		E-2	109H-8	SB204	土師器	坏	(10.1)		(7.2)	ナデ	密　2㎜以下黒色礫、赤褐色粒少	良	7.5YR7/6 橙	40	摩滅
2	49	E-2	109H-8	SB204	土師器	甕	17.7	9.1	(31.0)	内：板ナデ・ナデ・ヨコナデ・底部ハケ後ナデ 外：ヨコナデ・ハケ・底部ナデ・木葉痕	密　白色粒多。灰色・褐色・黒色粒	良	5YR4/6 赤褐	30	頸部径：15.9 ㎝ 体部径：(27.9) ㎝ 摩滅
3		E-2	109F-10	SB217	須恵器	坏蓋	(12.4)		(3.2)	回転ナデ	密　白色粒少	良	7.5Y6/1 灰	5	
4・343	49	E-2	109G-7 ～ 10	6407 (SB217)	土師器	高坏	(16.4)	10.85	16.1	内ナデ・調整不明・ヘラケズリ 外：ナデ・調整不明	密　灰白・灰・褐粒。3㎜以下灰白・灰・褐色礫少	良	内：7.5YR7/4 にぶい橙 外：5YR7/6 橙	90	基部径：(3.5) ㎝ 摩滅
5	49	E-2	110F-1	SP6407 (SB217)	土師器	甕	17.2	9.0	(26.10)	内：ナデ・ヨコナデ 外：ヨコナデ・ハケ・ナデ・底部木葉痕	粗　灰白色粒多。灰・褐色粒	良	7.5YR5/4 にぶい褐色	口 60 ～底部 80	頸部径：14.7 ㎝ 体部径：(24.5) ㎝ 歪みあり 外面煤付着
6		E-3	129F-8	SB301	須恵器	坏蓋	(13.0)		4.7	回転ナデ　内：ナデ 外：回転ヘラヘラケズリ	密　1～2㎜白色粒。5㎜礫。	良	N6/ 灰	40	
7		E-3	129F-8	SB301	土師器	坏	(13.4)	(5.8)	4.7	内：ヨコナデ（板ナデ？） 外：ナデ？	密	良	5YR7/6 橙	40	摩滅著しい
8		E-3	129F-8	SB301	須恵器	高坏	(12.0)	3.6	(4.6)	回転ナデ　内：ナデ 外：透かし	密　3～5㎜白色礫少。白色粒	良	5GY7/1 明オリーブ灰 自然釉：5Y4/2 灰オリーブ	口 50 ～脚部 5	基部径：3.6 ㎝。右回転。3 方透かし 歪み著しい 外面自然釉
9		E-3	129G-8	SB301 床面直上	土師器	坏	11.6	6.4	4.5	内外：ナデ	密　茶色・黒色粒僅	良	5YR7/6 橙	80	
10		E-3	129F-8	SB301	土師器	鉢				内：ハケ後ナデ 外：調整不明	密　2㎜以下灰色・褐色礫少。灰色・褐色粒多	良	5YR7/6 橙	20	体部径：(12.95) ㎝ 摩滅
11		E-3	129F-8	SB301 床面	土師器	甕	(15.7)	8.2	(23.0)	内：ナデ・ヨコナデ・底部ナデ・ハケ 外：ハケ・ヨコナデ・底部木葉痕	密　2㎜以下白色・褐色・灰色粒多。雲母少	良	7.5YR6/3 にぶい褐 7.5YR6/4 にぶい橙 5YR6/6 橙	口 20 ～底部 100	頸部径：(13.65) ㎝ 摩滅
12		E-3	129G-8	SB301	土師器	甕		9.0	(4.4)	内：ハケ・板ナデ 外：ナデ・底部木葉痕	密　白色・赤色・薄茶・灰色粒	良	内：5YR5/6 明赤褐 外：2.5YR5/6 明赤褐	底部 100	外面煤付着
13	49	E-3	129B-10	SB302	須恵器	坏身	10.1	最大径 (12.2)	4.15	回転ナデ　内：底部ナデ 外：底部回転ヘラケズリ	密　色粒少。1～2㎜白色礫少	良	内：N6/ 灰 外：2.5GY6/1 オリーブ灰	70	右回転 歪みあり 外面薄く降灰
14		E-3	129B-10	SB302 床直	土師器	坏	(11.9)		(3.7)	内：ヨコナデ？ 外：ナデ・ヨコナデ	密　2㎜黒色礫少	良	2.5YR6/8 橙	10	摩滅
15		E-3	129B-10	SB302	土師器	碗	(8.8)		(3.0)	調整不明	密　2～3㎜黒色礫少	良	10YR7/4 にぶい黄橙	5	
16		E-3	129B-10	SB302 床面	土師器	坏	(11.7)		(2.5)	内：ナデ？ 外：ナデ・ヨコナデ	密	良	7.5YR7/6 橙	5	
17		E-3	129B-10	SB302 床面	土師器	甑				ナデ	密　2～3㎜礫	良	5YR7/8 橙	把手部 40	
18		E-3		SB303 竈埋土	土師器	坏	(11.6)		4.65	ナデ	密　黒色粒僅	良	7.5YR7/6 橙	20	摩滅
19		E-3		SB303	土師器	甕	(22.8)		(5.0)	ヨコナデ？	密　白色粒多	良	5YR4/6 赤褐	口縁部 15	頸部径：(20.2) ㎝ 摩滅
20		E-3		SB303	土師器	甕		(9.8)	(3.6)	ナデ	密　白色粒多	良	内：7.5YR4/3 褐 外：5YR4/6 赤褐	底部 10	
21		E-3		SB303 (SP9726)	土師器	甕		8.6	(8.6)	内：ハケ後板ナデ・底部板ナデ 外：ハケ後ナデ・底部木葉痕	密　白色・灰色粒多	良	10YR7/4 にぶい黄橙	体 20 ～底部 100	内外面黒斑
22		E-3	130C-2	SB304 埋土	須恵器	坏身	(11.5)	最大径 (13.6)	(3.4)	回転ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　灰白色粒	良	内：N5/ 灰 外：N6/ 灰	10	右回転 歪みあり
23		E-3	130B-1	SB305	須恵器	坏蓋	(12.8)		(2.7)	回転ナデ	密　白色粒	良	内：N6/ 灰　外：N4/ 灰	5	
24		E-3		SB305 床面直上	須恵器	坏身	9.1	最大径 (11.4)	3.9	回転ナデ　内：ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　灰白色粒多。3㎜以下灰白色礫少	良	N5/ 灰	80	歪みあり 重ね焼き痕
25		E-3		SB305 竈埋土	須恵器	坏身	(11.2)	最大径 (13.5)	3.35	回転ナデ　内：ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　2㎜以下黒色礫	良	内：10YR6/1 褐灰 外：10YR3/1 黒褐	5	摩滅
26		E-3	130B-1	SB305 床面	須恵器	壷蓋			(4.0)	調整不明	密　灰白色粒少。2㎜以下灰白・4㎜以下灰色礫少	不良	内：N8/ 灰白 外：2.5Y 黄灰	70	最大径：(9.6) ㎝ 回転方向不明 摩滅
27		E-3	130B-1	SB305	土師器	鉢	(10.6)		(5.3)	ナデ	密　2㎜灰・白・黒色礫少	良	7.5YR7/6 橙	30	頸部径：(10.8) ㎝ 体部径：(11.2) ㎝
28		E-3		SB305 床面直上	土師器	甕		(8.1)	(5.3)	内：ナデ 外：ハケ後ナデ・底部ナデ？	密　白色粒多	良	内：7.5YR7/6 橙 外：7.5YR5/3 にぶい褐	底部 50	黒斑 摩滅
29		E-3	129C-8	SB307	須恵器	坏身	(10.4)	最大径 (12.8)	(2.5)	回転ナデ	密　灰白色・褐色粒僅。石英粒僅	やや良	内：2.5Y5/1 黄灰 外：N4/ 灰　10YR7/2 にぶい黄橙	20	右回転
30	72	E-3	129C-8	SB307	須恵器	坏蓋 坏身 壷甕瓶類				坏身内：回転ナデ 坏蓋内：回転ナデ・ナデ 外：回転ナデ 壷甕瓶類内：回転ナデ 外：調整不明	密　坏身：灰白色粒少 他：灰白色粒。4㎜灰白色礫	良	坏身：5P7/1 明紫灰 坏蓋内：5P7/1 明紫灰 外：2.5Y6/1 黄灰 壷甕瓶類 2.5Y6/1.5 黄灰	—	坏：右回転 歪み著しい 自然釉
31		E-3	130C-1	SB308	須恵器	坏蓋	(14.2)		(2.7)	回転ナデ	密　黒色粒	良	内：7.5Y7/1 灰白 外：7.5Y6/1 灰	10	
32		E-3		SB308	土師器	坏	(11.8)		(4.2)	ナデ？	密　褐色・赤色粒。2㎜赤色・黒色礫僅	良	内：7.5YR8/4 浅黄橙 外：7.5YR7/6 橙	25	摩滅
33		E-3		SB308	土師器	坏	(11.8)	(5.5)	3.85	ナデ	密　3～5㎜黒色礫。2㎜以下灰色・赤色粒少	良	内：10YR8/3 浅黄橙 外：10YR7/3 にぶい黄橙	40	摩滅
34					須恵器	坏身		最大径 (11.8)	(3.35)	回転ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒子	良	N6/ 灰色	20	左回転 土器片付着

第 10 表　出土土器観察表

挿図 No.	図版 No.	区	グリッド	遺構 層位	種別	器種名	口径	底径	器高	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存率 (%)	備考
35		E-3	129D-9	SP9516 (SH312)	須恵器	坏蓋	(13.5)		(3.25)	回転ナデ	密　白色粒。6 ㎜以下灰白色礫少	良	N5/ 灰	5	左回転
36		E-3	129C-10	SP9230 (SH319)	須恵器	坏蓋	(12.0)		(2.0)	回転ナデ	密　白色・黒色粒	良	内 :5Y6/1 灰 外 :7.5Y4/1 灰	5	左回転？ 外面薄く降灰
37	49	E-3	129F-9	SP9790	土師器	坏	(15.4)		(5.1)	調整不明	密　雲母？灰色・赤色粒	良	5YR7/4 にぶい橙	60	摩滅 歪みあり
38	49	E-3		SP9457 (SH324)	土師器	壷	(9.2)		7.1	内：ナデ？ヨコナデ 外：ハケ後ナデ？ヨコナデ	密　白・灰色粒。石英粒僅	良	内 :5YR7/4 にぶい橙 外 :2.5YR6/4 にぶい橙	70	頸部径：(9.25) ㎝ 体部径：(10.3) ㎝ 摩滅
39	49	E-3	130C-2	SP9460 (SH324)	土師器	坏	12.6		5.1	ナデ	密　白・灰色粒多。石英粒、3 ㎜礫僅	良	内 :2.5YR6/6 橙 外 :5YR7/6 橙	90	
40		E-2		SD6171	須恵器	坏身	(9.4)	最大径 (12.2)	(3.5)	回転ナデ　内：ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色・灰色粒子。石英僅少	良	N 7/　灰白色		
41		E-3		SR10064	須恵器	坏身	(10.3)	最大径 (13.0)	(4.6)	回転ナデ 外面底部：回転ヘラケズリ	密　白色粒子少	良	7.5Y7/1　灰白色	20	
42		E-3	130G-1	SD9500	須恵器	坏身		(4.8)	(2.0)	回転ナデ	密　白色粒	不良	N8/　灰白色	5	摩滅
43		E-2	110J-4	SD6171	土師器	坏	(13.75)		(3.75)	調整不明	密　灰白色・褐色粒。1 ㎜褐色礫僅	良	内：2.5YR6/6 橙 外：2.5YR6/8 橙	20	摩滅
44		E-2	110J-4	SD6171	土師器	坏			(3.8)	調整不明	密　2 ㎜以下褐色粒	良	5YR7/6 橙	20	摩滅
45	49	E-3	130E-3	SD6171	土師器	坏	(13.2)		5.9	ハケ後ナデ・ヨコナデ・底部木葉痕	密　白・灰色粒、石英粒	良	内：5YR7/6 橙 外：7.5YR6/3 にぶい褐色	50	歪みあり 外面底部黒斑？
46		E-3	130D-3	SR10064	土師器	坏	(12.0)		(4.8)	調整不明	密　褐色・赤色粒	良	5YR7/6 橙	20	摩滅
47		E-3	130E-3	SD6171	土師器	坏	(10.7)		3.9	内：ナデ・調整不明 外：ナデ・ヨコナデ	密 褐・灰色粒。白色粒僅	良	内：7.5YR7/4 にぶい橙 外：5YR7/3 にぶい橙	45	摩滅
48・383	50	E-3	130C-3	SR10064	土師器	甕	13.5		(8.3)	内：板ナデ？ナデ・ハケ後ヨコナデ 外：ハケ・ナデ・ハケ後ヨコナデ	密　白色・灰色粒多。5 ㎜以下灰色礫僅	良	内 :2.5Y7/2 灰黄 外 :7.5YR7/3 にぶい橙	口～体部 60	頸部径 :11.8 ㎝ 煤付着？
49		E-2	110J-4	SD6171	土師器	甕	(18.45)		(5.45)	内：調整不明・ヨコナデ？ 外：ハケ後ナデ？	粗　灰白・灰・褐色粒、2 ㎜以下灰白・灰・褐色礫多。石英粒少	良	内：10YR3/1 黒褐。7.5YR5/3 にぶい褐色 外：10YR3/2 黒褐 5YR5/6 明赤褐	35	頸部径：(16.0) ㎝ 摩滅
50		E-2	110H-3	SD6289	土師器	甕	(20.2)		(7.7)	内：ナデ・ハケ 外：調整不明・ナデ	粗　灰白色粒多。2 ㎜以下灰白色礫多）	やや良	内：7.5YR6/4 にぶい橙　外：5YR6/4 にぶい橙	15	頸部径：(18.5) ㎝ 摩滅
51	50	E-2	110H-3	SD6289	土師器	壷	(9.2)	7.1	(14.1)	内：ナデ 外：ナデ？ハケ？底部木葉痕	密　灰白・灰色粒多。径 2 ㎜以下灰白色礫僅。9 ㎜以下灰・2 以下㎜灰褐色礫）	良	内：7.5YR6/3 にぶい褐 外：7.5YR5/3 にぶい褐色。10YR5/3 赤褐	口 30 ～底部 100	頸部径：(10.15) ㎝ 体部径：(11.2) ㎝ 摩滅 外面煤付着
52		E-2	110H-3	SD6289	須恵器	壷	12.4		(6.4)	回転ナデ	密　白色粒子。3 ㎜以下白色小礫少	良	内：N5/ 灰色 外：5YR5/1 褐灰色	口頸部 80	左回転？ 口縁部自然釉
53		E-2	110E-2	SD6290	土師器	甕	(16.6)		(6.45)	内：ハケ後ナデ・ハケ 外：ハケ後ヨコナデ・ナデ	粗　灰白・灰・褐色粒、雲母？石英粒、2 ㎜以下灰白・灰・褐色礫多	良	内：5YR4/3 にぶい赤褐 外：7.5YR3/3 暗褐	35	頸部径 (16.2)
54・400	50	E-2	110E-2	SD6290	土師器	甕	23.1		(17.2)	内：ナデ？ 外：ハケ・ヨコナデ	密　灰色・褐色粒。3 ㎜以下褐色礫。5 ㎜以下灰白色礫	良	内：10YR8/3 浅黄橙 外：10YR7/3 にぶい黄橙	口 90 ～体部 60	頸部径 :21.8 ㎝ 体部径 :23.6 ㎝ 歪みあり。摩滅
55・405		E-2	110E-2	S6290	土師器	甕	(23.3)		(9.9)	内：ヘラナデ？ナデ・ヨコナデ 外：ハケ・ヨコナデ	密　灰白・灰・褐色粒、石英・雲母粒多。2 ㎜以下灰白・灰・褐色礫僅	良	10YR4/2 灰黄褐	25	頸部径：(21.2) ㎝ 体部径：(23.1) ㎝
56・401		E-2	110E-2	SD6290	土師器	甕	(23.3)		(4.55)	内：調整不明 外：ハケ・調整不明	密　灰白色粒。5 ㎜以下灰白色礫）	やや良	7.5YR8/4 浅黄橙	20	頸部径：(22.0) ㎝ 摩滅
57		E-2		SD6290	土師器	甕	(24.4)		(6.5)	内：ヨコナデ・ナデ 外：ハケ・ナデ・板ナデ	密　3 ～ 4 ㎜白色礫 2 ㎜以下白・灰色砂粒多	良	2.5Y8/3 淡黄	口縁部 10	頸部径：(22.9) ㎝
58・415	50	E-2	110E-2	SD6290	土師器	甕	(16.4)		14.1	内：調整不明 外：ハケ・底部ナデ？	密　灰白・灰・褐色粒。3 ㎜以下灰白・褐色礫、5 ㎜以下灰色礫少	良	内：10YR7/2 にぶい黄橙 外：10YR7/3 にぶい黄橙　N4/ 灰	60	頸部径：(15.1) ㎝ 体部径：(16.4) ㎝ 底径：(6.15) ㎝ 摩滅
59		E-2		SD6290	土師器	甕	(21.6)		(4.5)	内：調整不明 外：調整不明・ハケ	密　3 ㎜以下白色・灰色粒、砂礫多	良	10YR8/4 浅黄橙	口縁部 15	頸部径：(20.1) ㎝ 摩滅
60		E-2		SD6290	土師器	甕	(17.8)		(3.7)	内：ハケ後ナデ？ 外：ナデ・ヨコナデ	密　2 ㎜以下灰色・白色粒	良	内：7.5YR8/4 浅黄橙 外：5YR7/6 橙	口縁部 10	頸部径：(16.3) ㎝
61・419		E-2	110E-2	SD6290	土師器	甕	(11.0)		(10.5)	内：ハケ？ナデ・ヨコナデ？ 外：ハケ？ヨコナデ？	密　3 ㎜以下灰色・白色砂粒、砂礫多	良	10YR8/2 灰白	口～体部 10	頸部径：(11.5) ㎝ 体部径：(16.2) ㎝
62		E-3		SR9526	須恵器	坏蓋	(13.8)		(4.0)	回転ナデ　内：ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒子	不良	N8/ 灰白色	30	回転方向不明 摩滅
63		E-3		SR8280	須恵器	坏蓋	(13.2)		4.2	回転ナデ　内：ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒子・4 ㎜以下白色小礫	良	内 :5PB6/1 青灰色 外 :N6/ 灰色	20	左回転。歪みあり 外面薄く降灰
64		E-3		SR9526	須恵器	坏蓋	(13.2)		(3.0)	回転ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒子	良	7.5Y6/1 灰色	15	回転方向不明
65		E-3		SR8280	須恵器	坏蓋	(10.6)		(3.4)	回転ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒子多	良	N6/ 灰色	20	外面薄く降灰
66	51	E-3		SR9526	須恵器	坏蓋	11.05		4.5	回転ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒子。7 ㎜以下白色小礫少量	良	5PB7/1 明青灰色	95	右回転 薄く降灰
67		E-3		SR9526	須恵器	坏蓋	(10.8)		(3.85)	回転ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒子・4 ㎜以下白色小礫少量	良	5PB4/1 暗青灰色	20	右回転 外面薄く降灰
68	50	E-3		SR9526	須恵器	坏蓋	(10.8)		(3.85)	回転ナデ　内：ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒子・白色小礫	良	5PB5/1 青灰色	40	回転方向 歪みあり 外面薄く降灰
69	51	E-3		SR9526	須恵器	坏蓋	(11.1)		(4.45)	回転ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒子・白色小礫少量	良	内 :5PB5/1 青灰色 外 :N5/ 灰色	70	右回転 歪みあり
70	50	E-3		SR8280	須恵器	坏蓋	(10.8)		4.4	回転ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒子	良	5Y7/1 灰白色	30	右回転

第 10 表　出土土器観察表

挿図 No.	図版 No.	区	グリッド	遺構 層位	種別	器種名	口径	底径	器高	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存率 (%)	備考
71	51	E-3		SR9526	須恵器	坏蓋	10.4		4.1	回転ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒子・5 ㎜以下白色小礫	良	5P6/1 紫灰色	95	左回転 外面薄く降灰
72		E-3		SR9133	須恵器	坏身	(13.1)	最大径 (15.2)	(3.75)	回転ナデ　内：ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒子・灰色小礫	不良	内：7.5YR4/1 褐灰色 外：2.5Y7/1 灰白色	20	右回転・摩滅
73		E-3	129F-9	SR9125	須恵器	坏身	(11.4)	最大径 (13.6)	(2.8)	回転ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒子・2 ㎜以下白色小礫僅少	良	7.5Y6/1 灰色	30	右回転 外面薄く降灰
74		E-3	129F-9	SR9526	須恵器	坏身	(12.0)	最大径 (14.8)	3.4	回転ナデ　内：ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒子・灰色粒子・白色小礫	良	内：5P7/1 明紫灰色 外：N7/　灰白色	50	左回転。歪み著しい。外面薄く降灰
75		E-3	129F-9	SR9526	須恵器	坏身	(12.3)	最大径 (13.8)	(2.3)	回転ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒子	良	5PB6/1 青灰色	40	右回転。歪み著しい。内外薄く降灰
76	51	E-3	129D-9	SR9526	須恵器	坏身	(10.2)	最大径 (12.6)	3.6	回転ナデ　内：ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白・灰色粒子。3 ㎜以下白色小礫少	良	5B6/1 青灰色	80	右回転 歪みあり 外面薄く降灰
77	51	E-3	129C-9	SR9526	須恵器	坏身	(10.0)	最大径 (12.2)	4.0	回転ナデ	密　白色粒子・灰色小礫少	不良	2.5Y8/1 灰白色	40	右回転 歪みあり。摩滅
78	50	E-3	129C-8	SR8280	須恵器	坏身	(10.1)	最大径 (12.3)	4.0	回転ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒子多。3 ㎝以下白色小礫少	やや良	内：N 6/　灰色 外：7.5Y6/1 灰色	60	右回転 重ね焼き痕
79		E-3	129E-9	SR8280	須恵器	高坏	−		−	回転ナデ　内：ナデ 外：ヘラナデ・方形透かし	密　白色粒子・3 ㎜以下灰白色小礫	不良	内：5Y4/1 灰色 外：2.5Y8/1 灰白色	坏〜脚部 30	基部径：(3.8) ㎝
80	51	E-3	129A-8	SR9526	須恵器	高坏	(13.2)		4.8	回転ナデ　内：ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒子		内：2.5Y5/1 黄灰色 外：5Y7/1 灰白色		摘部径：(1.95) ㎝ 右回転 歪みあり。摩滅
81	51	E-3	129D-9	SR9526	須恵器	高坏	(13.1)		(4.45)	回転ナデ　内：ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒子・9 ㎜以下白色小礫	良	内：2.5Y7/1 灰白色 外：5Y8/1 灰白色	坏部 50	左回転 3 方透かし
82		E-3	129C-9	SR9526	須恵器	壺	−			回転ナデ	密　白色粒子多	良	内：N7/ 灰白色 外：2.5Y8/1 灰白色	頸部 60	外面自然釉
83・659	77	E-3	129G-9	SR8280	須恵器	脚付壺	−	(9.7)	(4.5)	回転ナデ	密　白色粒子・3 ㎜以下白色小礫	良	内：7.5YR5/1 褐灰色 外：N5/ 灰色	脚部 40	回転方向不明 内面自然釉
84		E-3		SR9125	須恵器	壺蓋	(7.0)		3.1	回転ナデ 内：ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒子	良	内：5B5/1 青灰色 外：N5/ 灰色	100	摘部径：(2.0) ㎝ 最大径：(10.35) ㎝ 右回転。歪み著しい。外面薄く降灰
85		E-3	129C-9	SR9526	須恵器	壺	−		−	回転ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒子。白色小礫僅少	良	N6/ 灰色	肩部 25	頸部径：(3.8) ㎝ 回転方向不明 外面薄く降灰
86		E-3	129C-9	SR8280	須恵器	壺	(8.1)		(4.4)	回転ナデ	密　白色粒子多。4 ㎜以下白色小礫少	良	N7/ 灰白色	口〜肩部 25	頸部径：(7.7) ㎝ 左回転。摩滅気味
87・685		E-3		SR9133	須恵器	提瓶	(7.3)		(20.8)	内：回転ナデ・未調整・ナデ 外：カキ目・ナデ・回転ナデ	密　灰白色粒。4 ㎜以下灰白色礫少。6 ㎜以下灰色礫少）	やや不良	内：N6/ 灰 外：N5/ 灰	口 30〜体部 30	頸部径：(6.2) ㎝ 体部径 (18.6) ㎝ 摩滅。歪みあり 自然釉付着
88		E-3	129C-9	SR9526	須恵器	壺	−		−	回転ナデ 外：斜線文	密　白色粒子。2 ㎜以下白色小礫僅少	良	N5/ 灰色	体部 40	右回転
89・675	51	E-3	129C-9	SR9526	須恵器	短頸壺	(10.4)	(9.2)	(15.1)	回転ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒子・3 ㎜以下白色小礫・5 ㎜以下灰色小礫	良	N7/ 灰白色	45	頸部径：(10.2) ㎝ 体部径：(17.8) ㎝ 歪みあり。摩滅
90		E-3	129C-9	SR8280	須恵器	横瓶	−		−	回転ナデ　内面：ナデ 外：タタキ後ナデ・ヘラ描文	密　白色粒子。白色小礫少	良	5YR5/2 灰褐色	体部 30	左回転
91	52	E-3	129C-9	SR9526	土師器	坏	(12.2)	7.7 ？	5.4	内：ハケ後ミガキ・ナデ 外：ナデ	密　灰・白・褐色粒	良	内：7.5YR6/4 にぶい橙 外：7.5YR7/3 にぶい橙	60	摩滅
92		E-3	129C-9	SR9526	土師器	坏	(12.6)		4.8	内：ナデ・ヨコナデ 外：ハケ後ナデ？ヨコナデ	密　白・灰色粒。白色粒少	良	内：7.5YR7/6 橙 外：7.5YR8/4 浅黄橙	50	摩滅
93		E-3	129E-9	SR9526	土師器	坏	(12.7)		4.5	ナデ・底部木葉痕	密　5 ㎜以下灰色礫。灰色・白色砂粒	良	10R6/4 にぶい赤褐 2.5YR6/6 橙	50	摩滅
94		E-3	129C-9	SR9526	土師器	坏	(11.7)		(4.8)	内：ミガキ 外：調整不明	密　2 ㎜以下灰色粒	良	内：10R6/6 赤褐 外：10R6/4 にぶい赤褐	20	摩滅
95		E-3	129C-9	SR9526	土師器	坏	(12.0)		4.7	ナデ	密　灰・赤褐色粒少	良	7.5YR8/4 浅黄橙	40	摩滅
96	52	E-3	129D-9	SR9526	土師器	坏	(11.6)		(3.5 〜 3.8 ？)	ナデ	密　褐色・灰色粒	良	内：2.5YR6/6 橙 外：2.5YR6/4 にぶい橙	90	摩滅
97	52	E-3	129C-9	SR9526	土師器	坏	(10.8)		4.25	ナデ	密　白・灰色粒	良	5YR8/1 灰白	45	
98	52	E-3	129C-9	SR9526	土師器	坏	(10.8)		3.2	ナデ	密　白・灰色粒	良	内：5YR6/4 橙 外：10YR5/3 にぶい黄褐色	80	底部外面黒色化
99	50	E-3	129C-8	SR8280	土師器	坏	(11.0)	(3.0)	3.6	調整不明	密　褐色・黒色粒	良	10R6/6 赤褐	40	摩滅
100	52	E-3	129D-9	SR9526	土師器	坏	(11.8)	7.55 ？	4.2	ナデ	密　白色粒。3 ㎜礫少	やや良	内：2.5YR6/6 橙 外：5YR7/4 にぶい橙	50	摩滅
101		E-3	129C-9	SR9526	土師器	坏	(12.8)	(7.1)	4.75	内：ミガキ・ナデ 外：ナデ。底部木葉痕	密　赤褐色粒少	良	内：2.5YR7/4 淡赤橙 外：10R6/4 にぶい赤褐	20	
102		E-3		SR9133	土師器	坏	(11.3)	(6.8)	3.8	ナデ・ヨコナデ・底部ナデ・木葉痕	密　褐色粒、2 〜 5 ㎜礫少	良	5YR7/6 橙	40	
103		E-3	129C-9	SR9526	土師器	坏	(11.1)		3.6	内：ミガキ・ヨコナデ？ 外：ハケ後ナデ・ヨコナデ？・底部ナデ	密	良	内：5YR6/6 橙 外：5YR7/4 にぶい橙	5	
104		E-3	129F-9	SR9526	土師器	坏	(11.3)	(6.0)	3.3	内：調整不明 外：調整不明。底部木葉痕	密　4 ㎜以下褐色礫　褐色・黒色粒	良	内：5YR7/6 橙 外：2.5YR7/6 橙	40	摩滅
105		E-3	129F-9	SR9526	土師器	坏	(12.3)		(3.6)	調整不明	密　黒色粒少	良	5YR7/4 にぶい橙	15	摩滅
106		E-3		SR9133	土師器	坏	(12.4)	(6.9)	3.25	ナデ・ヨコナデ	密　黒・赤褐色粒	良	7.5YR8/4 浅黄橙	30	摩滅
107	52	E-3	129F-9	SR9526	土師器	坏	11.6	7.0	4.6	ナデ・ヨコナデ・底部ナデ・木葉痕	密　灰・褐色粒、2 ㎜礫	良	7.5YR7/4 にぶい橙	75	

第 10 表　出土土器観察表

挿図No.	図版No.	区	グリッド	遺構層位	種別	器種名	口径	底径	器高	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考
108		E-3		SR9133	土師器	坏	(12.2)		3.5	ナデ・ヨコナデ・底部木葉痕？	密　黒色粒子	良	5YR7/6 橙	30	
109		E-3		SR9125	土師器	坏	(12.8)		(3.1)	ナデ・ヨコナデ	密	良	10YR8/4 浅黄橙	10	
110		E-3		SR9133	土師器	坏	(10.0)	(5.8)	4.1	ナデ　底部ナデ・木葉痕・	密　赤褐色粒多	良	7.5YR8/4 浅黄橙	25	摩滅
111		E-3		SR9125	土師器	坏	(11.9)	(6.9)	4.6	ナデ・ヨコナデ・底部木葉痕	密　灰・赤褐色粒多。2～3㎜赤褐色礫少	良	5YR8/4 淡橙	20	摩滅
112		E-3		SR9133	土師器	坏	(10.4)	(5.6)	3.6	内：ナデ　外：ナデ・底部ナデ？木葉痕？	密　赤褐色粒、5㎜以下礫少	良	7.5YR8/4 浅黄橙	20	摩滅
113		E-3		SR9133	土師器	坏	(10.8)	7.1	3.7	ナデ・ヨコナデ 底部ナデ？木葉痕	密	良	5YR7/6 橙	口 30 ～底部 80	
114		E-3	129D-9	SR9526	土師器	坏	(10.9)	(6.4)	4.3	内：ハケ後ナデ・ナデ・ヨコナデ 外：ナデ・ヨコナデ・底部木葉痕	密　2㎜以下褐色・灰色粒多	良	内：10YR7/4 にぶい黄橙 外：10YR7/4 にぶい黄橙。10R6/4 にぶい赤褐	30	摩滅
115		E-3		SR9125	土師器	坏	(8.5)		(2.65)	調整不明	密　褐色粒	良	7.5YR8/4 浅黄橙	10	手捏ね。摩滅
116	52	E-3	129C-9	SR9526	土師器	坏	11.0		5.2	ナデ後ミガキ・ヨコナデ	密　白・褐色粒	良	5YR6/6 橙	70	器面剥離
117	52	E-3	129C-9	SR9526	土師器	坏	(11.9)	(6.8)	4.5	内：ナデ・ヨコナデ 外：ハケ後ナデ？ヨコナデ・底部木葉痕	密　白・灰色粒。2㎜礫少	良	2.5Y7/6 橙	40	
118	52	E-3	129C-9	SR9526	土師器	坏	(11.5)	(6.6)	4.3	内：ナデ・ヨコナデ 外：ハケ後ナデ・ヨコナデ。底部ナデ・木葉痕	密　白・灰・褐色粒。白色粒、2㎜礫少	良	内：7.5YR6/3 にぶい褐色 外：2.5YR6/6 橙	50	底部外面黒色化
119	52	E-3	129C-9	SR9526	土師器	坏	12.0		4.4	ナデ・ヨコナデ 底部ナデ・木葉痕	密　白・灰色粒。2～5㎜礫	良	内：5YR6/6 橙 外：7.5YR7/6 橙	95	歪みあり
120	51	E-3		SR9133	土師器	坏	12.2		4.9	ナデ・ヨコナデ 底部ナデ・木葉痕	密　灰・白色粒。2㎜礫僅	良	内：7.5YR5/2 灰褐 外：7.5YR7/2 明褐灰	70	
121	53	E-3	129C-9	SR9526	土師器	坏	11.5	8.0？	4.5	内：ナデ・ヨコナデ 外：ナデ・板ナデ・ヨコナデ。底部ナデ・木葉痕	密　白色・灰色・黒灰色粒。2㎜礫少	良	内：10R5/6 赤 外：2.5YR6/4 にぶい橙	80	
122		E-3	129C-9	SR9526	土師器	坏	(11.8)	(7.0)	4.7	ナデ・ヨコナデ 底部木葉痕	密　白色・灰色粒。2㎜礫少	良	内：10R5/6 赤 外：5YR6/4 にぶい橙	40	
123		E-3	129C-9	SR9526	土師器	坏	(11.0)		(4.2)	内：ハケ後ナデ・ヨコナデ？ 外：調整不明	密　9㎜以下灰色礫少。褐色白色粒多	良	内：5YR7/6 橙 外：5YR6/6 橙	15	摩滅
124		E-3	129C-9	SR9526	土師器	坏	(10.5)		(3.7)	ハケ後ナデ・ヨコナデ	密　2㎜白色粒少。白色・褐色粒多	良	内：5YR6/8 橙 外：2.5YR6/6 橙	25	
125		E-3	129C-9	SR9526	土師器	坏	(11.2)		(3.9)	内：ナデ 外：ナデ・ヨコナデ	密赤褐色粒多。灰色粒少	良	2.5YR6/8 橙	30	
126		E-3		9526	土師器	坏	(10.8)		(4.1)	ナデ・ヨコナデ	密　2㎜以下灰・赤褐色	良	10YR8/4 浅黄橙	20	摩滅
127・501		E-3	129C-9	SR9526	土師器	坏	(9.4)		(3.8)	内外：ナデか	粗	良	2.5YR6/6 橙	5	赤彩 発泡状の胎土
128・503		E-3	129B-8	SR9526	土師器	坏		(3.3)	(3.8)	内：ハケ後ナデ 外：調整不明	密　4㎜以下褐色・白色砂粒、砂礫	良	内：2.5YR7/6 橙（朱） 外：7.5YR7/2 明褐灰	40	内面朱付着 摩滅
129		E-3	129C-9	SR9526	土師器	坏	(11.8)		(4.3)	ナデ・ヨコナデ	密　白色・黒色粒	良	7.5YR7/6 橙	10	摩滅
130		E-3	129C-9	SR9526	土師器	坏	(12.0)		(3.8)	内：ナデ・ヨコナデ 外：ミガキ・ヨコナデ	密　2㎜以下褐色・灰色・白色粒多	良	7.5YR7/6 橙	15	
131		E-3	129B-8	SR9526	土師器	坏			(3.1)	調整不明	密　褐色・灰色粒多	良	5YR7/6 橙	20	摩滅
132		E-3	129C-9	SR9526	土師器	坏	(10.9)		(3.2)	調整不明	密　2㎜以下褐色粒	良	2.5YR7/6 橙	10	摩滅
133		E-3	129E-9	SR8280	土師器	坏	(12.0)		(3.3)	内：ミガキ？ヨコナデ 外：ナデ・ヨコナデ	密	良	7.5YR6/3 にぶい褐	10	摩滅
134		E-3	129F-8	SR8280	土師器	坏	(12.9)		(3.0)	調整不明	密　褐色・黒色・白色砂粒、砂礫	良	内：7.5YR7/4 にぶい橙 外：10YR7/4 にぶい黄橙	10	摩滅
135		E-3	129D-9	SR9526	土師器	坏	(10.0)		(2.5)	内：ナデ 外：ナデ・ヨコナデ	密	良	内：2.5YR7/6 橙 外：2.5YR2/1 赤黒	10	
136	53	E-3	129E-9	SR9526	土師器	坏蓋	(12.4)		(4.05)	内：ミガキ 外：調整不明・ナデ？	密　石英・灰粒	良	内：10YR8/2 灰白 外：10YR7/2 にぶい黄橙	40	摩滅
137		E-3	129E-9	SR8280	土師器	甕	(22.2)		(4.4)	内：ヨコナデ・ハケ？ 外：調整不明・ハケ？	密5㎜灰色礫。白色・灰色・褐色粒	良	5YR8/4 淡橙	5	頸部径：(18.8) ㎝ 摩滅
138		E-3	129C-9	SR9526	土師器	甕	(17.3)		(7.8)	調整不明	密　白色粒。灰色・橙色粒	良	内：7.5YR8/4 浅黄橙 外：7.5YR7/6 橙	口～肩部 20	頸部径：(14.6) ㎝ 摩滅
139・374	53	E-3	129C-9	SR9526	土師器	壷	(15.7)		(13.4)	内：ナデ・ハケ 外：ハケ後ナデ・ナデ・ヨコナデ	密　白・灰色粒多。2～5㎜礫少	良	内：5YR7/4 にぶい橙 外：7.5YR7/3 にぶい橙。10YR7/1 灰白	20	頸部径：(14.6) ㎝
140		E-3		SR9133	土師器	壷	(11.6)		(5.6)	ナデ・ヨコナデ	密　黒灰色・赤褐色粒	良	7.5YR8/4 浅黄橙	口縁部 40	頸部径：(10.8) ㎝ 摩滅
141	53	E-3	129D-10	SR9526	土師器	鉢	16.7		(10.0)	内：板ナデ？ 外：ナデ・ヘラケズリ？ヨコナデ	密　白・灰・褐色粒。2～5㎜礫	良	10YR7/2 にぶい黄橙。	70	頸部径：16.65 ㎝ 体部径：17.1 ㎝
142		E-3	129C-9	SR9526	土師器	鉢	(11.0)	(4.7)	5.3	内：ナデ 外：ナデ・ハケ後ヨコナデ	密　5㎜以下褐色礫少。褐色・灰色粒多	良	7.5YR8/4 浅黄橙	40	
143・326	53	E-3	129C-9	SR9526	土師器	高坏	(17.8)		12.8	内：ナデ・ハケ後ナデ 外：ハケ後ナデ？	密　白・灰色粒多。灰色・白色粒	やや良	内：7.5YR6/6 橙 外：5YR7/6 橙	30	基部径：2.9 ㎝ 脚部径：(11.8) ㎝ 摩滅
144	50	E-3	129B-8	SR8280	土師器	高坏				内：ナデ・板ナデ・調整不明 外：ナデ・ヨコナデ	密	軟	7.5YR6/6 橙	脚部 90	基部径：3.4 ㎝ 脚部径：9.8 ㎝ 器面剥離
145		E-3	129B-9	SR8280	土師器	甑				外：ナデ	密　6㎜灰色礫、灰・褐色粒、砂礫	良	外：7.5YR8/3 浅黄橙	5	
146		E-3	129E-9	SR8280	土師器	甕	(20.4)		(8.1)	内外：ハケ・ヨコナデ	密　灰白・黒色粒、2㎜以下白色礫多	良	5YR5/4 にぶい赤褐	20	頸部径：(18.6) ㎝
147		E-3	129C -9	SR9526	土師器	甕	(19.2)	7.8	(29.2)	ハケ・ナデ・ハケ後ヨコナデ・底部木葉痕	密　4㎜灰色礫僅。3㎜以下灰・褐・白色礫多	良	内：7.5YR7/4 にぶい橙 外：5YR7/2 明褐灰。7.5YR6/6 橙	30	頸部径：(14.7) ㎝ 体部径：(26.0) ㎝ 摩滅

第 10 表　出土土器観察表

挿図 No.	図版 No.	区	グリッド	遺構 層位	種別	器種名	口径	底径	器高	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存率 (%)	備考
148	53	E-3	129C-9	SR9526	土師器	甕	17.05		(8.6)	内：ハケ後ナデ・ナデ 外：ナデ・ヨコナデ？	密　白色粒多	良	5YR6/4 にぶい橙	口縁部 60	頸部径：(14.8) cm 摩滅
149	53	E-3	129C-9	SR9526	土師器	甕	(19.4)		(16.7)	内：ハケ後ナデ・ナデ 外：ハケ後ナデ・ハケ・ナデ	密　石英、白色・灰色・赤色粒	良	内：7.5YR6/4 にぶい橙 外：5YR6/4 にぶい橙	口縁～肩部 30	頸部径：(16.6) cm
150		E-3	129D-9	SR8280	土師器	甕	(18.4)		(6.8)	ハケ・ヨコナデ・ハケ後ナデ	密　白色・黒色粒	良	7.5YR5/4 にぶい褐色	口頸部 10	頸部径：(16.7) cm 器面剥離
151	53	E-3	129D-9	SR9526	土師器	甕	(18.4)		(20.7)	内：ハケ後ヨコナデ 外：ハケ・ハケ後ナデ？	密　石英、白色・灰色・橙色粒	良	内：7.5YR6/4 にぶい橙 外：5YR6/8 橙	口～肩部 30	頸部径：(16.3) cm 体部径：(24.7) cm 摩滅
152		E-3	129E-10	SR9526	土師器	甕		(8.8)	(3.1)	内：ハケ 外：ナデ・底部木葉痕	密　石英、白色粒	良	内：10YR6/3 にぶい黄橙 外：7.5YR5/3 にぶい褐色	底部 70	
153	72	A-1		SX541	須恵器	坏蓋	14.3		4.05	回転ナデ　内：ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒子。1 cm 以下白色小礫少	良	N5/ 灰色	95	右回転。歪み著しい。外面薄く降灰
154	70	A-1		SX541	須恵器	坏身	12.4	最大径 14.6	2.75	回転ナデ　内：ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　灰色粒子多。4 ㎜以下灰色小礫僅少	良	N6/　灰色	80	右回転。歪み著しい。重ね焼き痕
155		A-1		SX541	須恵器	坏身	(12.0)	最大径 (14.0)	(3.25)	回転ナデ　内：ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒子・白色小礫少	良	7.5Y7/1　灰白色	10	右回転
156		A-1		SX541	須恵器	壷蓋	-			回転ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒子。2 ㎜以下白色小礫少	不良	内：7.5Y7/1 灰白色 外：N5/ 灰色	30	最大径：(11.4) cm 回転方向不明 摩滅。薄く降灰
157	54	A-1		SX541	土師器	坏身	(13.6)	(9.2)	4.75	ナデ・ヨコナデ	密　橙・白色粒。2～4 ㎜礫	良	7.5YR8/6 浅黄橙	60	摩滅している
158		A-1	149B-5	SX541	土師器	坏		7.1	(3.5)	ナデ？	密	良	2.5YR6/8 橙	体～底部 80	摩滅
159		A-1		SX541	土師器	坏	(13.0)	(8.0)	4.0	内：ナデ 外：ナデ・底部木葉痕	密	良	5YR7/6 橙	90	歪みあり
160		A-1	149B-5	SX541	土師器	坏	(11.9)	7.3	3.7	ナデ・底部木葉痕	密	良	5YR7/6 橙	70	摩滅
161	54	A-1		SX541	土師器	坏	12.0	6.1	4.15	ナデ・ヨコナデ・底部木葉痕	密　黒色粒少	良	内：7.5YR7/6 橙 外：7.5YR2/1 黒	60	摩滅
162	54	A-2		SX605 付近 8 層	土師器	坏	(12.7)	5.2	5.0	内：ナデ 外：調整不明・底部木葉痕	密　白色粒。灰色・赤色粒	良	5YR7/6 橙	40	摩滅
163・318	54	A-2		SX605	土師器	高坏	16.3	12.0	12.5	内：ナデ・板ナデ・ヨコナデ 外：ハケ後ナデ	密 7 ㎜礫。灰色・橙色粒	良	7.5YR6/1 褐灰 7.5YR8/3 浅黄橙	80	基部径：(3.2) cm
164・389	60	A-1		SF240	土師器	甕	(16.0)	7.0	20.5	内：ナデ・板ナデ？ヨコナデ 外：板ナデ・ヨコナデ・底部ナデ	密　3 ㎜以下白色・灰色礫多	良	7.5YR5/6 明褐	口 20～底部 100	頸部径：(15.0) cm 頸部径：(17.2) cm 摩滅
165		E-1	110G-7	SX419 砂礫層	須恵器	坏蓋	(12.0)		(3.2)	回転ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒	良	内：5P7/1 明紫灰 外：5Y6/1 灰	20	外面自然釉
166		E-1	110H-6	SX419 砂礫層	須恵器	坏蓋	(11.40)		(4.20)	回転ナデ　内：ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒。7 ㎜以下灰色礫少。5 ㎜以下灰色礫	良	内：N7/ 灰白 外：N5/ 灰	10	歪みあり
167	54	E-1	110H-6	SX419	須恵器	坏身	(10.0)	最大径 (12.2)	4.45	回転ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒。2 ㎜以下白色礫僅	良	内：N5/ 灰 外：N6/ 灰	70	歪みあり
168	54	E-1		SX419	土師器	坏	(10.8)		4.0	ナデ・ヨコナデ	密　赤褐色粒	良	5YR7/6 橙	20	
169		E-1	110H-6	SX419 砂礫層	土師器	坏	(12.00)		(4.10)	調整不明	密　灰色粒。3 ㎜灰色礫	不良	内：7.5YR7/4 にぶい橙 外：2.5Y6/1 黄灰 7.5YR7/4 にぶい橙	30	摩滅
170		E-1	110H-6	SX419 砂礫層	土師器	坏	(11.60)		(3.45)	調整不明	密　白色・赤褐色粒少。2 ㎜灰色礫少	不良	内：7.5YR6/4 にぶい橙　外：2.5YR6/6 橙	15	摩滅
171		E-1		SX419	土師器	坏	(12.2)		(4.2)	ナデ：ヨコナデ	密　2 ㎜以下礫少	良	5YR7/6 橙	5	
172		E-1	110H-6	SX419 砂礫層	土師器	坏	(12.90)		(4.30)	調整不明	密　灰色粒、2 ㎜灰色礫。白・橙色粒、4 ㎜橙色礫少	不良	内：10YR6/3 にぶい黄橙 外：5Y4/1 灰 7.5YR6/4 にぶい橙	20	摩滅
173		E-1		SX419	土師器	坏	(12.7)		(4.4)	ナデ・ヨコナデ	密　白・褐・黒色粒	良	7.5YR7/6 橙	10	摩滅
174		E-1		SX419	土師器	坏	(12.0)		(3.9)	ナデ・ヨコナデ	密　赤褐色粒	良	5YR7/4 にぶい橙	5	
175		E-1		SX419	土師器	坏	(9.6)		(2.5)	ヨコナデ？	密　3 ㎜以下礫	良	5YR6/6 橙	10	
176		E-1		SX419	土師器	鉢	(14.0)	(14.3)	(5.6)	ヨコナデ？ナデ？	密　灰色・黒色粒	良	7.5YR7/6 橙	口縁部 25	頸部径：(14.2) cm 摩滅
177		E-1		SX419	土師器	甕	(14.8)		(3.3)	ヨコナデ	密　黒褐色粒	良	7.5YR7/4 にぶい橙	口縁部 10	頸部径：(12.4) cm
178		E-1	110H-6	SX419 砂礫層	土師器	甕	(15.10)	(13.4)	(4.95)	ヨコナデ	やや粗　灰白粒多。2 ㎜以下灰白礫多	やや良	内：10YR6/2 灰黄褐 外：7.5YR5/3 にぶい褐	20	剥離・摩滅
179		E-1	110H-6	SX419 砂礫層	土師器	甕	(16.80)	(15.1)	(7.00)	内：ハケ・ハケ後ナデ 外：ヨコナデ・ハケ	やや粗　灰白粒、2 ㎜以下灰白礫）	やや良	内：2.5Y5/2 暗灰黄 外：10YR5/3 にぶい黄褐	口縁 20～体部 5	摩滅 歪みあり
180		E-1	110H-6	SD420	土師器	坏	(12.80)		4.60	調整不明	密　赤褐色粒	不良	内：5YR6/6 橙 外：5YR7/6 橙	20	器面剥離
181		E-1	110H-6	SD420	土師器	坏	(10.90)		(3.20)	調整不明	密	不良	内：5YR6/6 橙 外：5YR7/6 橙	10	摩滅
182		E-1		SD420	土師器	坏	(12.5)		(4.0)	ナデ	密　白・灰色粒多。3～4 ㎜灰・白色礫僅	良	7.5YR7/4 にぶい橙。5YR6/4 にぶい橙	15	摩滅
183		E-1		SD420	土師器	坏	(13.1)		(4.7)	ナデ・ヨコナデ	密　白・褐色粒多。2 ㎜灰色砂礫僅	良	5YR7/4 にぶい橙	10	摩滅
184		E-1		SD420	土師器	坏				ミガキ・ヨコナデ	密　灰・白色粒	良	7.5YR2/1 黒	10	摩滅
185		E-1	110G-7	SD421 砂礫層	須恵器	坏蓋	(10.8)		(2.85)	回転ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒	良	N6/ 灰	10	
186		E-1	110F-9	SD421 砂礫層	須恵器	坏身	(11.60)	最大径 (14.0)	(2.25)	回転ナデ	密　白色粒少。1 ㎜白色礫少	良	内：2.5Y5/1 黄灰 外：N7/ 灰　5Y6/2 灰オリーブ（自然釉）	5	重ね焼き痕 外面自然釉

第 10 表　出土土器観察表

挿図 No.	図版 No.	区	グリッド	遺構 層位	種別	器種名	口径	底径	器高	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存率 (%)	備考
187		E-1	110G-8	SD421	須恵器	脚付盤			4.85	盤部内：回転ナデ 外：回転ナデ・回転ヘラケズリ 脚部内外：回転ナデ	密　白色粒	良	N6/ 灰 10Y4/2 オリーブ灰（自然釉）	盤部 20 ～ 脚部 50	基部径：(5.1) cm 歪みあり
188		E-1	110G-9	SD421 砂礫層	土師器	坏	(12.40)		(4.40)	調整不明	密　赤褐色粒僅	不良	5YR7/6 橙	20	摩滅
189 ・277	54	E-1	110G-7	SD421	土師器	坏	(12.0)		(3.8)	ナデ・ヨコナデ	密　灰色・褐色粒	良	5YR7/6 橙	20	摩滅
190		E-1	110G-7	SD421 砂礫層	土師器	甕	(16.2)		(4.7)	ヨコナデ	密　白色・灰白粒・雲母粒	良	内：10YR5/1 褐灰。 外：10YR6/3 にぶい黄橙	20	頸部径：(13.7) cm 歪みあり
191	54	E-1	110G-8	SD421 砂礫層	土師器	坏	(11.65)		4.90	内：ミガキ・ヨコナデ 外：調整不明・ヨコナデ・底部木葉痕	密　赤褐色粒多。3 ㎜以下赤褐色礫少	やや良	内：5YR7/4 にぶい橙 外：5YR7/4 にぶい橙　2.5YR6/3 にぶい橙	70	摩滅
192		E-1	110G-7	水田域	須恵器	坏蓋	(11.85)		(4.25)	回転ナデ　内：ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒子。5 ㎜以下白色小礫少	良	N5/ 灰色	10	右回転 外面薄く降灰
193		E-2	110G-6	北東水田	須恵器	坏蓋	(9.4)		3.5	回転ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒子	良	N6/ 灰色	25	左回転
194		E-2	110G-5	北東水田	須恵器	坏身	(14.0)	最大径 (16.2)	(2.15)	回転ナデ	密　白色粒子多。3 ㎜以下白色礫	良	N7/ 灰白色	10	右回転
195		E-1	110H-6	水田域	須恵器	坏身	(10.2)	最大径 (12.4)	3.8	回転ナデ　内：ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒子・3 ㎜以下白色礫	漁	N5/ 灰色	20	左回転？
196		E-1	110H-6	水田域	須恵器	坏身	(10.5)	最大径 (11.6)	(3.2)	回転ナデ　内：ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒子。3 ㎜以下白色礫少	不良	内：2.5Y7/1 灰白色 外：2.5Y6/2 灰黄色	5	右回転
197		E-2	110G-5	北東水田	須恵器	高坏		(15.3)	(6.35)	回転ナデ	密　白色粒子多。6 ㎜以下白色礫	良	N7/ 灰白色	脚部 10	右回転 4 方透かし
198		E-1	110gG-8	水田域	土師器	坏	—		—	調整不明 底部木葉痕	密　褐色粒子多。灰白色粒・2 ㎜以下褐色礫少	やや不良	内：10YR6/4 赤褐色 外：2.5YR6/4 にぶい橙色	30	摩滅
199		E-5	110J-6	杭列畔 7 ～ 8 層	土師器	甕	(21.6)		(3.0)	ナデ・ヨコナデ？	密　白・赤褐色粒少	良	5YR6/8 橙	10	
200		E-5	110J-6	杭列畔	土師器	甕	(15.0)		(3.0)	ナデ・ヨコナデ	密　灰・赤褐・白色粒	良	10YR7/3 にぶい黄橙	10	
201		E-4	110E-10	畔	土師器	甕	(17.6)		(4.8)	ナデ・ヨコナデ	密　白・灰色粒多	良	7.5YR7/4 にぶい橙	10	
202		A-1	170B-3		土師器	甑	—		—	ナデ	密　3 ㎜以下灰白色礫	良	5YR7/6 橙色	把手部 100	摩滅
203	55	E-3	130D-1	TR	土師器	坏	13.2		4.3	内：ミガキ 外：調整不明	密　灰色・橙色粒	良	7.5YR8/3 浅黄橙 (7.5YR7/6 橙)	90	摩滅
204	55	E-2	110G-3		土師器	坏	13.7		4.7	調整不明	粗　灰色・褐色粒、2 ㎜以下褐色・4 ㎜灰色礫多	良	内：7.5YR7/4 にぶい橙　外：7.5YR7/2 明褐灰　4/ 灰	75	黒斑 摩滅
205		E-1	110E-4	包含層	土師器	坏	(12.70)	(7.80)	(5.05)	ナデ 底部木葉痕	密　褐色粒、3 ㎜以下褐色礫多	やや不良	7.5YR6/4 にぶい橙	25	
206		E-3	129E-10	包含層	土師器	坏	(11.8)		(4.4)	ハケ後ナデ・ヨコナデ	密　3 ㎜褐・白礫少。白・灰・褐色粒多	良	5YR7/6 橙	20	摩滅
207		E-3	129G-9	包含層	土師器	坏	(12.9)		4.4	ハケ後ナデ・ナデ	密　白色・灰色粒多。3 ㎜白色砂礫少	良	7.5YR7/6 橙 2.5YR6/6 橙	15	摩滅
208	55	E-3	129F-8	包含層	土師器	坏	12.5		4.05	ナデ・ヨコナデ？	密　灰色・白色粒	良	内：5YR7/6 橙 外：5YR8/4 淡橙	90	
209	55	E-2	110E-3		土師器	坏	(11.8)		4.3	調整不明	密　褐色粒、2 ㎜以下褐色礫	良	10YR7/2 にぶい黄橙 (7.5YR7/4 にぶい橙)	60	摩滅
210		E-2	110G-1		土師器	坏	(11.9)		4.1	調整不明	やや密　灰白色粒、3 ㎜以下灰白色粒多。褐色粒、6 ㎜以下褐色礫	やや良	内：7.5YR8/4 浅黄橙 外：10YR8/4 浅黄橙	25	摩滅
211	55	E-2	109J-9	6401	土師器	坏	(12.4)		4.4	調整不明	密　白色・灰色粒。4 ㎜以下灰色礫	良	内：10YR8/3 浅黄橙 外：10YR7/3 にぶい黄橙	60	底部黒斑 歪みあり 摩滅
212		E-3	129E-10	包含層	土師器	坏	(11.2)	(5.5)	4.7	調整不明	密　灰色・褐色粒多。4 ㎜以下灰色砂礫少	良	内：2.5YR7/6 橙 外：10R6/6 赤橙	20	摩滅
213		E-3	129G-10		土師器	坏	(11.0)	3.9	4.0	ナデ　底部木葉痕？	密　白色・灰色粒。3 ㎜灰色礫僅	良	内：2.5YR6/8 橙 外：2.5YR6/4 にぶい橙　10YR6/2 灰黄褐	40	歪みあり
214		E-3	129E-10		土師器	坏	(11.0)		(4.2)	調整不明	密　灰色・褐色粒	良	7.5YR7/4 にぶい橙 2.5YR6/6 橙	30	摩滅
215		E-2	109J-9	SR6401	土師器	坏	(11.2)		(3.4)	ナデ	密　灰色・白色粒多	良	5YR6/6 橙	20	器面剥離
216		E-2	110F-6	包含層	土師器	坏	(10.3)		(4.2)	ミガキ？ヨコナデ	密　褐色・灰色粒多	良	内：5YR7/4 にぶい橙 外：5YR7/6 橙	25	摩滅
217	55	E-3	129F-8		土師器	坏	10.4	(2.9)	4.4	ナデ・ヨコナデ？	密　3 ㎜以下灰・白色礫、砂粒多。5 ㎜灰色礫少	良	5YR6/6 橙	60	摩滅
218		E-1	110E-3		土師器	坏	(14.5)		4.35	調整不明 底部木葉痕	密　白色・灰色・赤色粒	良	7.5YR8/6 浅黄橙	30	摩滅
219		E-3			土師器	坏	(13.6)	(4.5)	4.2	ナデ	密	良	7.5YR8/4 浅黄橙	30	摩滅
220	55	B 区南	150A-4	SX610	土師器	坏	(14.0)		4.35	ナデ 底部木葉痕	密　灰色・褐色粒多。4 ㎜以下灰色・3 ㎜以下褐色礫	良	内：2.5YR6/6 橙色 外：10R6/6 赤褐色	10	摩滅
221		E-3	129H-8	包含層	土師器	坏	(14.3)	(8.4)	4.1	ナデ　底部木葉痕	密	良	7.5YR8/3 浅黄橙	15	摩滅
222		E-1			土師器	坏	(13.2)	(6.6)	3.7	ナデ 底部木葉痕	密　黒色粒。5 以下 ㎜礫	良	10YR7/3 にぶい黄橙	20	摩滅
223		E-3	129E-10	包含層	土師器	坏	(13.3)	(5.0)	3.7	ナデ	密　灰・褐・白色粒多	良	内：10YR8/4 浅黄橙 外：10YR7/3 にぶい黄橙	20	摩滅
224		E-3	129G-10		土師器	坏	(12.2)	(7.6)	3.6	ナデ	密	良	5YR7/6 橙	20	摩滅
225	55	E-3	129I-9	包含層	土師器	坏	(12.6)	7.2	4.4	ナデ 底部木葉痕？	密　4 ㎜灰・褐色礫少。3 ㎜以下白・灰・褐色礫	良	内：7.5YR7/4 にぶい橙 外：7.5YR7/4 にぶい橙　2.5YR7/6 橙	70	

第 10 表　出土土器観察表

挿図No.	図版No.	区	グリッド	遺構層位	種別	器種名	口径	底径	器高	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考
226		E-2	110G-2	包含層	土師器	坏	(12.4)	(7.6)	4.4	ナデ 底部木葉痕	密　2㎜以下灰色・白色・褐色粒多	良	10YR6/2 灰黄褐色。 7.5YR7/6 橙	30	器面剥離
227		E-3	129H-10	包含層	土師器	坏	(11.8)	(7.2)	3.7	ナデ	密　灰色粒僅	良	5YR7/6 橙	15	摩滅
228		E-3	130P-1	包含層	土師器	坏	(11.5)	(5.0)	3.8	内：ハケ後ナデ？ 外：調整不明・底部木葉痕	密　灰色・白色粒	良	5YR7/6 橙	25	摩滅
229	55	E-3	129I-9		土師器	坏	(12.6)	6.9	3.7	ナデ・底部木葉痕	密　赤褐色粒。2～3㎜礫少	良	7.5YR7/4 にぶい橙	60	歪みあり
230		E-3	129F-10	包含層	土師器	坏	(12.2)	(7.4)	3.3	ナデ・底部木葉痕	密　灰色・褐色粒。3㎜褐色礫僅	良	7.5YR7/4 にぶい橙	40	摩滅
231	55	E-2	110E-2		土師器	坏	(11.9)		3.8	調整不明	密　灰・褐色粒。4㎜以下灰色・2㎜以下褐色礫	良	5YR6/6 橙	60	外面黒斑 摩滅著しい
232		E-3	129I-9	包含層	土師器	坏	(11.7)	(6.3)	3.3	ナデ・底部木葉痕？	密　白・灰・褐色粒多。4㎜灰色礫僅	良	2.5YR7/6 橙	25	摩滅
233		E-3	129F-10		土師器	坏	(11.9)	(6.8)	3.4	ナデ・底部板ナデ	密	良	5YR7/6 橙	15	摩滅
234		A-1	170A-3		土師器	坏	(11.8)	(5.5)	3.75	ナデ・底部木葉痕？	密　黒色粒僅	良	7.5YR8/4	20	摩滅
235		E-2	110G-2	包含層	土師器	坏	(11.6)	(6.8)	3.4	ナデ・底部木葉痕？	密　白色・灰色粒多	良	内：10YR6/3 にぶい黄橙　外：7.5YR7/6 橙	25	摩滅
236		E-3	129E-9	包含層	土師器	坏		(5.9)	(3.6)	内：板ナデ 外：ハケ後ナデ・底部木葉痕	密　灰色・褐色粒。白色粒僅	良	内：10YR8/3 浅黄橙 外：7.5YR8/2 灰白色	40	
237		E-3	129F-10		土師器	坏	(10.8)	(6.0)	3.75	ナデ	密　赤褐色粒僅	良	5YR7/6 橙	30	歪みあり。摩滅
238		E-2	110G-2		土師器	坏	(10.8)	(6.8)	3.1	ナデ	密　黒色粒僅	良	5YR7/6 橙	15	摩滅
239	56	E-2	110E-3		土師器	坏	(11.0)		3.6	ナデ・ヨコナデ・底部木葉痕	密　黒・灰・褐・白色粒多	良	10YR7/3 にぶい黄橙	25	内面漆付着
240		E-3	129E-10	包含層	土師器	坏	(11.4)	(6.8)	3.2	ナデ	密	良	5YR7/6 橙	20	摩滅
241		E-3	129I-9	包含層	土師器	坏	(10.8)	(6.0)	3.7	ナデ・ヨコナデ	密　5㎜以下礫	良	5YR7/6 橙	20	摩滅
242		E-3	129E-10		土師器	坏	(13.8)	(7.6)	4.7	ナデ・底部木葉痕	密　赤褐色粒多。3㎜以下礫少	良	7.5YR7/6 橙	30	
243		E-3	129F-9		土師器	坏	(12.3)	(8.6)	4.5	内：ナデ・板ナデ 外：ナデ・底部木葉痕	密	良	5YR7/4 にぶい橙	20	摩滅
244		E-3	129F-10		土師器	坏	(14.0)	(7.8)	4.6	ナデ・底部木葉痕	密　赤褐色粒	良	5YR7/6 橙	20	
245	56	A-1			土師器	坏	11.9	7.9	4.05	内：調整不明 外：ナデ？底部木葉痕	密　白色・橙色粒	良	内：2.5YR6/6 橙 外：7.5YR7/4 にぶい橙	75	摩滅
246	56	E-3	129E-10	包含層	土師器	坏	12.2	7.0	4.4	調整不明。底部木葉痕	密　白色粒。灰色・赤色粒	良	2.5YR6/4 にぶい橙	95	炭化物付着 摩滅
247		E-3	129E-10		土師器	坏	(11.7)	6.8	4.3	ナデ・底部木葉痕	密　赤褐色粒	良	5YR7/6 橙	75	摩滅
248	56	E-3	129E-9	包含層	土師器	坏	12.6	7.8	3.9	調整不明・底部木葉痕	密　白色粒。灰色・橙色粒、9㎜以下礫	良	7.5YR7/4 にぶい橙	70	摩滅
249	56	E-3	129F-9	包含層	土師器	坏	12.8	7.0	3.7	ナデ・底部木葉痕	密　褐色・灰色粒。白色粒、2㎜礫僅	良	内：7.5YR7/6 橙 外：5YR7/4 にぶい橙	80	
250		E-3	129F-10		土師器	坏	(12.8)	(7.6)	4.5	ナデ・底部木葉痕・	密　赤褐・黒色粒少	良	7.5YR8/4 浅黄橙	20	
251		E-2		包含層	土師器	坏	(12.3)	(8.6)	3.7	ナデ・底部木葉痕	密	良	内：5YR7/6 橙 外：2.5YR6/6 橙	25	歪みあり 摩滅
252	56	E-3	129F-9	包含層	土師器	坏	12.3	7.8	4.25	調整不明・底部木葉痕	密　赤色砂粒。1㎝以下礫	良	7.5YR7/6 橙	95	摩滅
253	56	E-2	110E-1		土師器	坏	12.15	7.55	4.05	調整不明・底部木葉痕	密　3㎜以下褐色・灰色礫僅	良	内：7.5YR6/4 にぶい橙 外：2.5YR5/4 にぶい赤褐色	70	摩滅
254	56	E-2	110E-3		土師器	坏	(12.25)	7.15	3.6	ナデ・底部木葉痕	密　褐色・灰白粒多。4㎜以下褐色・3㎜以下灰色・8㎜以下灰黄色礫少	やや良	内：7.5YR7/6 橙 外：5YR6/4 にぶい橙	75	摩滅
255		E-3	129F-10		土師器	坏	(12.0)	(6.8)	4.6	ナデ？	密　赤褐色・黒色粒	良	2.5YR7/8 橙	25	歪みあり
256		E-1	110D-3		土師器	坏	11.5	7.75	4.6	調整不明・底部木葉痕	密　灰白色・雲母粒僅。3㎜以下灰白色・灰色・褐色礫	不良	内：5YR7/6 橙 外：7.5YR7/4 にぶい橙	100	摩滅
257		E-3	129F-9		土師器	坏	(11.6)	(7.2)	4.1	ナデ・底部木葉痕	密　赤褐色粒	良	5YR7/6 橙	40	摩滅
258	56	E-3	129E-9	SR9128	土師器	坏	(12.2)	(7.4)	5.0	ナデ・底部木葉痕	密　赤褐色粒少	良	5YR7/4 にぶい橙	50	
259	57	E-3	129I-9	包含層	土師器	坏	(12.0)	7.5	3.75	ナデ・底部木葉痕	密　3㎜以下灰色礫	良	10YR8/4 浅黄橙	80	
260	57	E-3	129E-10	包含層	土師器	坏	11.65	7.6	3.75	調整不明・底部木葉痕	密　灰・橙色粒。8㎜以下礫	良	5YR7/8 橙	85	摩滅
261	57	E-3	129F-7		土師器	坏	(11.7)	(6.1)	4.7	内外：ナデか。底部木葉痕	密	良	7.5YR8/6 浅黄橙	80	摩滅
262		E-3	129G-10		土師器	坏	(11.6)	(7.3)	4.0	内外：ナデ。底部木葉痕か	密	良	5YR7/4 にぶい橙	30	摩滅
263	57	E-3	129E-9	包含層	土師器	坏	(11.6)	(7.2)	4.4	内：ハケ？板ナデ？ヨコナデ 外：ナデ・ヨコナデ・底部木葉痕？	密　白色・灰色粒。石英粒僅	良	内：5YR6/6 橙 外：5YR6/4 にぶい橙	45	
264	57	E-3	129E-10	包含層	土師器	坏	(11.35)	6.2	4.2	内：板ナデ 外：ナデ・底部木葉痕	密	良	5YR7/4 にぶい橙	50	
265		E-1	110E-3		土師器	坏	(11.80)	(7.30)	3.80	調整不明	密　白色粒、3㎜以下灰色礫僅	不良	5YR7/6 橙	25	歪みあり 摩滅
266		E-3		SR9130	土師器	坏	(11.6)	(8.0)	4.0	ナデ・底部木葉痕？	密　灰・白色粒。3㎜灰色礫僅	良	内：2.5YR7/8 橙 外：5YR7/6 橙	15	摩滅
267	57	E-2	110H-3	SP6405	土師器	坏	(12.0)	7.0	4.5	ナデ・ヨコナデ 底部木葉痕	密　黒色・褐色粒少	良	5YR7/4 にぶい橙	口 20 ～底部 50	
268		E-1	110D-3		土師器	坏	(11.0)	(6.8)	3.6	ナデ・底部木葉痕	密	良	5YR7/4 にぶい橙	20	
269		E-3	129H-9		土師器	坏	(11.4)	(7.8)	3.8	ナデ	密　赤褐色粒	良	7.5YR8/6 浅黄橙	50	摩滅
270		E-2	110G-2		土師器	坏	(11.8)	(7.0)	3.6	ナデ　底部木葉痕	密	良	7.5YR7/6 橙	20	摩滅
271		E-1	110E-3		土師器	坏	(11.30)	(7.0)	4.35	調整不明	密　3㎜以下灰色礫、3～6㎜褐色礫少	不良	内：5YR7/6 橙。 2.5YR6/4 にぶい橙 外：5YR6/4 にぶい橙	25	摩滅
272	57	E-3	129F-9	包含層	土師器	坏	10.65	7.4	3.1	ナデ・ヨコナデ？底部木葉痕	密　灰色・白色粒。石英粒少	良	内：5YR7/6 橙 外：5YR7/4 にぶい橙	60	
273		E-3	130F-1		土師器	坏	(10.7)	(7.1)	4.1	ナデ・底部木葉痕？	密　1㎜の礫少	良	2.5YR7/6 橙	30	

第 10 表　出土土器観察表

挿図 No.	図版 No.	区	グリッド	遺構 層位	種別	器種名	口径	底径	器高	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存率 (%)	備考
274		E-3		9129	土師器	坏	(11.0)	(5.8)	4.3	ナデ・ヨコナデ・底部木葉痕	密	良	5YR7/6 橙	口縁部 10	摩滅
275		E-3	129E-9	SR9128	土師器	坏	(11.1)	(5.7)	3.4	ナデ・ヨコナデ・底部木葉痕	密　灰色・白色粒多	良	内 :7.5YR8/4 浅黄橙 外 :5YR7/6 橙	20	摩滅
276		E-3	129E-10	包含層	土師器	坏	(10.8)	(6.3)	3.15	ナデ・底部木葉痕？	密　2 ㎜以下赤褐色粒少	良	5YR7/6 橙	20	
278	57	E-1	110G-7	8 層	土師器	坏	(12.2)		4.25	ナデ・ヨコナデ・底部木葉痕	1.5 ㎜以下白色粒僅。微細の礫	やや軟	2.5YR6/6 橙	20	体部径 :(12.2) ㎝ 内面漆付着
279		E-3	130F-1		土師器	坏	(14.2)		(3.8)	ナデ・ヨコナデ	密　褐色粒。2 ㎜以下褐色礫僅	良	内 :2.5YR5/6 明赤褐 外 :5YR7/6 橙	15	摩滅
280		E-3	129E-10		土師器	坏	(12.8)		4.2	ナデ・ヨコナデ	密　黒色粒、2 ～ 3 ㎜礫少	良	7.5YR7/4 にぶい橙	40	摩滅
281	57	E-1	110C-4		土師器	坏	(13.00)		4.30	調整不明	やや密　灰白・灰粒多。褐色粒、7 ㎜以下褐・4 ㎜以下灰・2 以下㎜灰白色礫少	不良	内 :10YR8/3 浅黄橙 外 :10YR7/3 にぶい黄橙 5YR6/6 橙	口 25 ～底部 60	摩滅
282		E-3	129F-10	包含層	土師器	坏	(13.7)		(4.6)	調整不明	密　褐色粒	良	7.5YR7/4 にぶい橙	20	器面剥離
283		E-3	129F-9	包含層	土師器	坏	(12.8)		(4.3)	ナデ・ヨコナデ	密　黒色・赤褐色粒	良	5YR7/6 橙	20 弱	
284	57	E-3	129G-9	包含層	土師器	坏	12.9		4.7	ナデ・ヨコナデ	密　灰黒色粒多。白色、透明の細かい粒少	良	内 :10R5/6 赤 外 :10R6/6 赤橙	約 90	
285		E-3	129H-9	包含層	土師器	坏	(13.6)		(4.7)	ナデ・ヨコナデ	密　2 ～ 4 ㎜の礫やや多	良	5YR7/6 橙	30	摩滅
286	58	E-3	129D-9	SR-1	土師器	坏	(12.6)		4.7	ナデ	密　黒色粒少	良	2.5YR5/4 にぶい赤褐色	40	摩滅
287		確認その 2		TP10 10 層	土師器	坏	(12.8)		(4.4)	ナデ・ヨコナデ	密　黒・赤褐色粒多。2 ～ 3 ㎜の礫少	良	内 :7.5YR7/4 にぶい橙 外 :2.5YR7/6 橙	40	歪みあり
288		E-2	110J-1	6345	土師器	坏			(4.5)	調整不明	密　4 ～ 10 ㎜灰色礫。3 ㎜以下礫多	良	5Y6/1 灰 5YR7/6 橙	25	剥離・摩滅
289		E-3	129F-9	包含層	土師器	坏	(12.6)		(4.5)	内：ヨコナデ・ナデ 外：ハケ後ナデ？	密　褐・灰色粒。白色粒、2 ㎜の礫僅	良	内 :7.5YR7/3 にぶい橙 外 :5YR7/3 にぶい橙	25	
290		E-3	129B-8	包含層	土師器	坏	(12.6)		(3.9)	ナデ	密	良	2.5YR7/6 橙	10	摩滅
291		E-3	129H-9		土師器	坏	(12.0)		(4.2)	ナデ・ヨコナデ	密　黒・赤褐色粒、1 ～ 2 ㎜の礫少	良	5YR6/4 にぶい橙	15	歪みあり
292		E-3	129F-10		土師器	坏	(13.4)		(3.4)	ナデ・ヨコナデ	密	良	5YR7/4 にぶい橙	口縁部 10	
293		E-1	110D-3	集落域流路	土師器	坏	(12.35)	(7.1)	4.2	調整不明	密　灰白色・褐色粒少	不良	内 :7.5YR7/3 にぶい橙 外 :2.5YR6/6 橙	口 5 ～底部 50	摩滅 歪みあり
294	58	E-3	149A-9	包含層	土師器	坏	(12.5)		4.3	ナデ・ヨコナデ	密　黒・褐色粒少。3 ㎜礫僅	良	7.5YR7/4 にぶい橙	50	摩滅
295		A-1	170A-3	TP10 8 層	土師器	坏	(11.9)		4.4	ナデ・ヨコナデ・底部木葉痕	密　1 ～ 2 ㎜灰色・黒色・赤褐色粒	良	7.5YR8/3 浅黄橙	40	摩滅
296	58	E-3	129I-9	古代層	土師器	坏	12.6		4.8	ナデ・ヨコナデ 底部木葉痕	密　2 ㎜以下白色礫少	良	5YR7/6 橙	90	歪みあり
297	58	E-3	129D-9	包含層	土師器	坏	(12.3)		5.1	ナデ・ヨコナデ 底部木葉痕	密　0.3 ㎜の白色粒多。細かい褐色・灰色粒少	良	内 :2.5YR6/6 橙 外 :5YR6/4 にぶい橙	90	
298		E-3	129E-10	包含層	土師器	坏	(10.9)	(4.4)	4.6	ナデ	密　3 ㎜白色砂礫少。2 ㎜以下白色・灰色粒多	良	5YR7/6 橙	40	摩滅
299		E-3	129F-10	包含層	土師器	坏	(10.6)		(4.3)	ナデ・ヨコナデ 底部木葉痕	密	良	7.5YR8/4 浅黄橙	5	
300		E-3	129E-10		土師器	坏	(11.2)		(4.0)	ナデ・ヨコナデ	密　2 ㎜黒色礫少	良	内 :2.5YR6/8 橙 外 :5YR7/6 橙	口縁部 10	
301		E-1	110D-3	包含層	土師器	坏			(3.75)	調整不明	密　灰白色粒、1 ㎜灰白礫僅	不良	2.5YR4/4 にぶい赤褐色	25	最大径 :(12.0) ㎝ 摩滅
302		E-3	129E-10	包含層	土師器	坏	(10.8)		(3.7)	ナデ・ヨコナデ	密　黒・赤褐色粒、2 ㎜以下灰色礫少	良	5YR7/6 橙	20	摩滅
303		E-2	110F-2	包含層	土師器	坏	(10.4)		(3.65)	調整不明	密　灰・赤色粒。1 ～ 2 ㎜礫	良	5YR6/6 橙	20	器面剥離
304		E-3		SR9126	土師器	坏	(11.9)		(4.5)	ナデ	密　1 ～ 2 ㎜の灰色・赤褐色礫多	良	2.5YR7/6 橙	口縁部 5	摩滅
305		E-3	129F-10	包含層	土師器	坏	(10.5)		(2.6)	ナデ・ヨコナデ	密　赤色などの砂粒	良	10YR7/4 にぶい黄橙	口～体部 20	全体に煤付着か
306	58	E-3	129E-9	SR9128	土師器	坏	13.9		4.8	ナデ・ヨコナデ	密　白・礫色粒多。3 ㎜白・黒色礫少	良	5YR7/4 にぶい橙 10YR6/1 褐灰	80	器面剥離
307		E-3	129F-9	包含層	土師器	坏	(13.9)		(3.0)	ナデ	密　白色粒、透明の細かい粒多	良	内 :7.5YR5/3 にぶい褐 外 :7.5YR5/2 灰褐	15	
308		E-3	129G-9	包含層	土師器	坏	(14.2)		(3.1)	調整不明	密　灰・褐色粒 3 ㎜以下灰・5 ㎜以下褐色礫	良	内 :5YR6/6 橙 外 :10YR4/1 褐灰	10	摩滅
309		E-2	130A-4		土師器	坏	(12.1)		3.6	ナデ	密　灰色・赤色などの砂粒	良	内 :5YR7/6 橙 外 :7.5YR7/4 にぶい橙	20	摩滅
310		E-3	129E-10	包含層	土師器	坏	(12.6)		(3.7)	ナデ・ヨコナデ	密　灰色・褐色粒	良	7.5YR6/4 にぶい橙	10	薄く煤付着
311		E-3	129E-10	包含層	土師器	坏	(12.5)		(3.15)	調整不明・ヨコナデ？	密　灰色・褐色粒。1 ～ 2 ㎜褐色礫少	良	7.5YR5/3 にぶい褐色	20	摩滅
312		E-3	130B-1	SP10212	土師器	坏	(11.6)		(3.5)	ナデ・ヨコナデ	密　1 ㎜以下黒色・白色粒多。3 ㎜灰色砂礫僅	良	内 :7.5YR7/4 にぶい橙 外 :10YR5/2 灰黄褐	15	摩滅
313		E-3	129F-10	包含層	土師器	坏	(12.0)	(3.0)	3.9	内：ミガキ・ヨコナデ 外：ヨコナデ・ヘラケズリ	密　石英・白色粒	良	10YR4/1 褐灰	体～底部 40	

第 10 表　出土土器観察表

挿図 No.	図版 No.	区	グリッド	遺構 層位	種別	器種名	口径	底径	器高	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存率 (%)	備考
314		A-1	150D-2	黒色土層	土師器	坏	(11.7)		(4.55)	ミガキ	密　3㎜以下褐色礫少	良	内 :N4/ 灰 外 :10YR7/3 にぶい黄橙	20	
315		E-1	110G-8		土師器	坏	(12.8)		(3.50)	ナデ・ヨコナデ	密　灰白色粒、2㎜以下灰白・4㎜灰色礫僅	やや良	内 :N2/ 黒色　外 :N3/ 暗灰	15	全体に煤付着か
316		E-1			土師器	坏		(7.2)	(2.4)	回転ナデ	密　灰色礫僅	良	2.5Y 灰黄	底部 25	外面煤付着 摩滅
317		E-4	110B-6		土師器	坏		(5.8)	(2.4)	ナデ	密	良	7.5YR7/3 にぶい橙	5	外面煤付着か
319		E-3	130F-1		土師器	高坏				調整不明	密　灰色・褐色粒、3㎜以下灰色礫、3㎜以下褐色礫多	良	内 :10YR8/3 浅黄橙 5YR7/6 橙 外 :10YR8/2 灰白 5YR7/4 にぶい橙	坏 30 ～脚部 20	基部径 :3.05 ㎝ 摩滅
320		E-2	110I-1		土師器	高坏				ナデ	密　3㎜以下白色砂礫、白色・灰色粒	良	5YR7/6 橙	坏 10 ～脚部 30	基部径 :3.0 ㎝ 器面剥離
321	58	E-2	110G-4		土師器	高坏		(14.1)	(9.2)	調整不明	密　灰色・橙色・白色粒	良	内 :7.5YR7/4 にぶい橙　外 :7.5YR7/6 橙	脚部 45	基部径 :3.6 ㎝ 摩滅
322		E-3			土師器	高坏		10.2	(5.4)	ナデ	密　白色・灰色粒多	良	5YR7/4 にぶい橙	脚部 20	摩滅
323		E-2	110G-4	包含層	土師器	高坏		(12.9)	(7.0)	内 : ナデ 外 : ミガキ？	密　3㎜以下褐・灰色礫多。4 ～ 7㎜褐色礫	良	7.5YR8/4 浅黄橙	脚部 50	摩滅
324		E-2	110H-3		土師器	高坏				ナデ	密　灰色・褐色粒多。3㎜灰色・褐色礫	良	内 :10YR8/3 浅黄橙 外 :2.5YR7/3 淡赤褐	脚部 70	基部径 :2.5 ㎝ 摩滅
325		E-2	110H-3		土師器	高坏				ナデ	密　灰・白・褐色粒多。7㎜以下灰・褐色礫少	良	5YR8/4 淡橙	30	基部径 :2.1 ㎝ 摩滅
327	59	B 南	151A-3N		土師器	高坏	16.7		(5.45)	ハケ後ナデ	密　白色粒・灰色粒	良	内 :7.5YR6/4 にぶい橙 外 :7.5YR7/3 にぶい橙	坏部 70	
328	59	E-3	129C-10	9478	土師器	高坏	(16.8)		(5.8)	内 : ナデ 外 : ナデ・ヨコナデ？	密　白色粒僅。灰色・褐色粒	良	内 :2.5YR7/6 橙 外 :5YR7/6 橙	坏部 20	基部径 :(5.4) ㎝
329		E-3	129F-9		土師器	高坏				ナデ	密　白色・黒色粒多	良	5YR7/6 橙	坏 20 ～脚部 10	基部径 :4.6 ㎝ 摩滅
330	58	E-3	129G-9		土師器	高坏		10.7	(8.8)	内 : ヘラケズリ・ナデ 外 : 調整不明	密　白色・灰色・赤色粒	良	2.5YR7/6 橙	脚部 98	摩滅
331		E-1			土師器	高坏				ナデ	密　3㎜以下灰色・褐色砂粒・砂礫	良	5YR8/4 淡橙	脚部 30	基部径 :3.7 ㎝ 摩滅
332	58	E-3	129G-10	包含層	土師器	高坏		(12.2)	(13.6)	内 : ハケ後ナデ・ナデ 外 : ナデ・ヨコナデ	密　褐色・灰色粒	良	内 :7.5YR7/2 明褐灰 外 :5YR7/3 にぶい橙	脚部 55	基部径 :(5.0) ㎝
333		E-3	129E・F-8		土師器	高坏				ナデ	密　灰色・褐色粒多	良	5YR8/4 浅黄橙	脚部 70	基部径 :(3.4) ㎝ 摩滅
334		E-3	129F-9	包含層	土師器	高坏				内 : 調整不明・板ナデ 外 : 板ナデ	密　褐色・灰色粒多。4㎜白色・灰色礫僅	良	内 :10YR7/2 にぶい黄橙 外 :7.5YR8/4 浅黄橙	脚部 40	基部径 :(4.3) ㎝ 摩滅
335		E-3	129F-10	包含層	土師器	高坏		(12.1)	(5.3)	ナデ	密　灰白色・白色粒多	良	5YR7/6 橙　2.5YR6/6 橙	脚部 25	摩滅
336		E-2	110G-2	包含層	土師器	高坏				調整不明	密　白色・灰色粒多	良	7.5YR7/3 にぶい橙 5YR7/6 橙	脚部 70	基部径 :(3.3) ㎝ 摩滅
337		E-3	129F-10	包含層	土師器	高坏	(11.8)		(3.8)	調整不明	密　白色・灰色粒多。4㎜以下灰色礫少	良	内 :2.5YR7/6 橙 外 :7.5YR8/4 浅黄橙 2.5YR7/6 橙	坏部 20	摩滅
338		E-3			土師器	高坏				内 : ヘラケズリ？ 外 : 調整不明	密　白色・灰色・橙色粒	良	内 :10YR6/1 褐灰 外 :2.5YR7/6 橙	脚部 60	摩滅
339	58	E-3	129E-9	包含層	土師器	高坏		13.8	(9.3)	内 : ナデ・ハケ後ナデ 外 : ナデ	密　白色・灰色粒多。灰色・白色礫少	良	内 :5YR7/6 橙 外 :7.5YR7/4 にぶい橙	脚部 80	基部径 :3.7 ㎝ 摩滅
340		E-3	129F-7	包含層	土師器	高坏				調整不明	密　白・灰・褐色砂粒多。4㎜灰色・褐色礫僅	良	内 :2.5YR6/8 橙 外 :7.5YR7/6 橙 2.5YR6/6 橙	坏部 20	摩滅
341		E-2	110G-3	流路	土師器	高坏				ナデ	密　白色・灰色粒多。4㎜白色・灰色礫僅	良	2.5YR7/3 淡赤橙	脚部 70	基部径 :3.0 ㎝ 摩滅
342					土師器	高坏				調整不明	密　白色・灰色粒。4㎜以下白色・褐色礫少	良	2.5YR7/4 淡赤橙 7.5YR8/4 浅黄橙	坏 20 ～脚部 10	基部径 :4.0 ㎝ 摩滅
344	59	E-3	129E-9	包含層	土師器	鉢	(14.2)	(7.1)	6.6	ナデ・ヨコナデ 底部木葉痕	密　灰色・褐色粒多	良	内 :10YR8/3 浅黄橙 外 :10YR7/2 にぶい黄橙	40	摩滅
345	59	E-1	110E-4	包含層	土師器	鉢	(14.70)		(7.05)	調整不明	密	不良	2.5YR5/6 明赤褐	40	摩滅
346	59	E-3	129H-9	包含層	土師器	鉢	(16.65)	7.9	7.4	調整不明 底部木葉痕	密　灰・褐色粒多。4㎜以下褐・5㎜以下灰色礫	良	7.5YR7/3 にぶい橙	口 40 ～底部 90	摩滅 歪み著しい
347	59	E-2	110E-2	TR11	土師器	鉢		8.4	(8.15)	ハケ後ナデ？ 底部木葉痕	粗　灰色粒多。褐色粒、7㎜以下灰色礫、6㎜以下褐色礫	良	内 :5YR7/4 にぶい橙 外 :2.5YR6/4 にぶい橙	体 60 ～底部 100	外面黒斑 歪み著しい 摩滅
348		E-3	129E-10	包含層	土師器	鉢	(11.7)	(3.7)	5.6	ハケ後ナデ	密　2㎜以下褐色・黒色・白色礫	良	7.5YR7/4 にぶい橙	20	摩滅
349	59	E-2	110E-2		土師器	鉢	(11.8)		5.45	ナデ	密　灰・褐色粒多。4㎜以下灰・褐色礫	良	内 :N5/ 灰色。2.5YR6/6 橙 外 :N5/ 灰	口縁～底部 60	摩滅。歪み著しい
350	59	E-2	110F-3		土師器	鉢	(13.9)	(7.05)	5.9	調整不明	密　褐色粒多。灰・灰白色粒、3㎜以下褐・6㎜以下灰色礫少	良	内 :5YR7/6 橙 外 :7.5YR7/6 橙	口縁 30 ～底部 20	摩滅
351		E-2			土師器	鉢	(12.5)		7.55	ナデ・ヨコナデ？ 底部木葉痕？	密　灰色・褐色礫少	良	5YR6/4 にぶい橙	20	体部径 :(14.6) ㎝ 摩滅

第 10 表　出土土器観察表

挿図No.	図版No.	区	グリッド	遺構層位	種別	器種名	口径	底径	器高	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考
352	59	E-3	129E-9		土師器	鉢	(14.4)		8.3	ハケ後ナデ？・ヨコナデ？	密　灰白・灰色・褐色粒。2㎜灰白色礫、3㎜以下褐色礫少	良	内 2.5YR6/6 橙 外 :5YR7/6 橙	25	体部径：(15.5) ㎝ 摩滅
353	60	E-1	110D-3		土師器	鉢	(12.1)	6.4	9.45	調整不明	やや密　灰白色・灰色・褐色粒多。8㎜以下灰白・褐色礫	不良	7.5YR7/6 橙	口 40 ～底部 70	摩滅 歪みあり
354		E-2	110J-5	SR6523	土師器	鉢	(13.0)		(5.7)	内：ヨコナデ 外：ヘラケズリ・ヨコナデ	密　白色・褐色粒多	良	10YR6/4 にぶい黄橙	15	摩滅気味
355		E-3		SR9135	土師器	鉢	(12.2)	最大径 (14.5)	(6.8)	ナデ・ヨコナデ	密　3㎜以下灰色・褐色砂粒、砂礫多。7㎜灰色礫僅	良	内 :5YR7/4 にぶい橙 外 :5YR7/4 にぶい橙。10YR6/1 褐灰	20	
356		E-3	129E-10		土師器	鉢	(12.0)	最大径 (12.9)	(6.05)	ナデ・ヨコナデ	密　褐色粒。褐色礫	良	5YR7/6 橙	10	摩滅
357	60	E-1	110E-3	8 層直上	土師器	鉢	(9.6)	最大径 (11.4)	7.5	調整不明・ヨコナデ	密　褐色粒多。4㎜以下褐色・灰色礫少	良	内 :7.5YR6/4 にぶい橙 外 :10YR6/2 灰黄褐 7.5YR7/3 にぶい橙	50	摩滅
358	59	E-1	110E-4	8 層直上	土師器	坩	9.4	最大径 10.8	6.60	ヨコナデ　内：板ナデ 外：調整不明・底部ヘラナデ？	密：　灰色粒、2㎜以下灰色・褐色礫少。褐色粒多	良	内 :5YR6/4 にぶい橙 外 :5YR6/6 橙。 7.5YR6/4 にぶい橙	80	摩滅 歪みあり
359	60	E-2	110G-3 ・110H-3		土師器	鉢	(14.9)	最大径 (15.3)	(7.15)	ナデ・ヨコナデ	密　灰白色・灰色・褐色粒	やや良	7.5YR7/4 にぶい橙	25	摩滅
360		E-3	129F-10	包含層	土師器	鉢	(13.2)		(5.35)	ナデ・ヨコナデ	密　灰白・褐色粒、2㎜以下灰白色礫、3㎜以下灰色礫僅	良	内 :7.5YR7/4 にぶい橙　外 :5Y7/6 橙	10	摩滅
361	60	E-1	110F-7		土師器	鉢	(11.20)		5.40	調整不明	粗　灰・褐色粒多。4㎜以下灰・褐色礫少	やや良	内 :10YR7/3 にぶい黄橙 外 :7.5YR8/3 浅黄橙	口 5～ 底部 60	器面剥離 歪みあり
362		E-3	129G-10	包含層	土師器	鉢	(12.70)		(3.2)	ナデ・ヨコナデ	密　褐色粒	良	5YR7/4 にぶい橙	5	
363		E-3	129F-10	包含層	土師器	鉢	(11.7)		(3.5)	ナデ・ヨコナデ？	密　灰白色粒、灰白色礫少	良	7.5YR7/4 にぶい橙	5	摩滅
364		E			土師器	鉢	(10.9)		(2.7)	ナデ・ヨコナデ？	密　褐色粒、褐色礫僅	良	7.5YR7/4 にぶい橙	5	摩滅
365		E-3	129E-9		土師器	鉢	(12.0)		(4.3)	調整不明	密　灰白・灰色粒、2㎜以下灰白・灰色礫	良	5YR6/4 にぶい橙	10	摩滅
366		E-2	110G-1		土師器	鉢	(12.0)		(4.55)	ナデ	密　灰白色・褐色粒	良	内 :7.5YR6/3 にぶい褐色　外 :5YR7/4 にぶい橙	15	摩滅
367		E-3	129E-10	包含層	土師器	鉢	(11.1)		(4.9)	調整不明	密　灰色・褐色粒、5㎜以下灰色礫	良	内 :2.5YR6/6 橙 外 :2.5YR5/4 にぶい赤褐色	25	器面剥離
368		E-3	129F-10	包含層	土師器	鉢	(11.2)		(4.4)	調整不明	密　灰白・灰色・褐色粒、3㎜以下灰色礫。2㎜灰白礫僅。	良	5YR7/4 橙	口 5～ 底部 20	摩滅
369		E-2	110J-1	6345	土師器	鉢	(13.8)		(5.5)	調整不明	密　灰色・褐色粒	良	7.5YR8/4 浅黄橙	口～体部 10	摩滅
370	60	E-3	129E-9		土師器	鉢	(16.1)	(6.4)	9.6	内：ナデ？ 外：ハケ後ナデ？	密　白色・褐色粒。灰色礫僅	良	外 :5YR7/4 にぶい橙	25	摩滅
371		E-3		SR9129	土師器	鉢	(18.3)		6.7	ナデ・ヨコナデ	密　4㎜以下灰色、赤褐色礫少	良	7.5YR8/4 浅黄橙	口縁 10	最大径：(18.6) ㎝ 摩滅
372		E-3	129F-8	包含層	土師器	鉢				調整不明	密　灰白色・灰色粒。3㎜褐色礫僅	良	内 :7.5YR6/6 橙 外 :2.5YR3/1 黒褐色	10	最大径：(20.0) ㎝ 摩滅
373		E-3	129F-10		土師器	鉢	(13.2)		(5.1)	ヨコナデ　内：ナデ 外：ヘラケズリ？	密　赤色粒	良	7.5YR6/4 にぶい橙	口～体部 15	
375		E-2	110G-1		土師器	壷	(16.5)		(5.55)	調整不明	やや密　灰白・灰色粒。5㎜灰黄色礫、3㎜以下灰色礫僅	不良	7.5YR7/4 にぶい橙	15	頸部径：(15.2) ㎝ 摩滅
376		E-1	110H-6		土師器	壷	(13.70)		(4.85)	ヨコナデ？　内：ハケ・ナデ 外：ハケ後ナデ	密　灰白色・褐色粒。3㎜以下灰色礫、2㎜以下褐色礫少	やや良	内 :10YR8/2 灰白 7.5YR6/2 灰褐 外 :2.5Y5/2 暗灰黄	10	頸部径：(11.7) ㎝ 摩滅
377		E-2	109J-10	SR6345	土師器	鍋	(33.5)		(4.3)	ヨコナデ？　口縁部：ハケ後ヨコナデ	密　灰白・灰・褐色粒、灰・褐色礫、2㎜以下灰白色礫多。石英粒僅	良	内 :5YR4/4 にぶい赤褐 外 :7.5YR3/2 黒褐	5	頸部径：(31.9) ㎝ 器面剥離
378		E-3	130G-2		土師器	鍋	(28.0)		(4.2)	内：ハケ後ナデ　外：ナデ	密　石英。雲母	良	10YR5/2 灰黄褐色	5	
379		E-2	109J-9	SR6401	土師器	鍋			(1.6)	ナデ	やや密　灰白・灰色・褐色粒多。石英粒僅	良	内 :7.5YR4/2 灰褐色 外 :7.5YR3/2 黒褐色	5	摩滅
380	62	A-2	130E-1	8 層	土師器	甕	16.2		(12.1)	ヨコナデ　内：ナデ 外：ハケ・ナデ	密　白色・灰色粒。2㎜以下礫	良	10YR7/2 にぶい黄橙	約 30	頸部径：13.4 ㎝ 体部径：(18.5) ㎝
381		E-1	110E-3		土師器	甕	(16.4)		(9.7)	内：ナデ 外：ハケ	密　灰白色粒少	やや良	内 :10YR7/3 にぶい黄橙 外 :10YR6/2 灰黄褐	口縁 5 ～体部 30	頸部径：(14.8) ㎝ 摩滅 歪みあり
382		E-3	129B-9		土師器	甕	(19.7)		(7.7)	内：ナデ・板ナデ？ハケ後ナデ？ 外：ナデ・ハケナデ？	密　白色・灰色粒。2㎜灰色礫少	良	内 :2.5Y5/1 黄灰 外 :7.5YR7/4 にぶい橙	口縁～ 肩部 10	頸部径：(15.6) ㎝
384	60	E-2	110J-6		土師器	甕	(13.2)		(7.7)	ヨコナデ　内：調整不明 外：ハケ後ナデ	密　灰色粒	良	内 :2.5YR6/6 橙 外 :5YR6/6 橙	口縁部 40	頸部径：(11.2) ㎝ 外面煤付着。摩滅
385		E-1	110E-3		土師器	甕	(14.1)		(4.5)	調整不明	密　灰色・褐色粒。2㎜以下灰色礫	良	7.5YR7/4 にぶい橙	5	頸部径：(13.0) ㎝ 摩滅
386		E-2	110I-1		土師器	甕	(15.9)		(3.85)	ナデ？	密　灰色・褐色粒。4㎜以下褐色礫、2㎜以下灰色礫少	良	内 :10YR7/2 にぶい黄橙 外 :2.5Y 黄灰	15	頸部径：(14.2) ㎝ 摩滅
387		E-3	129G-9	包含層	土師器	甕	(20.55)		(8.6)	調整不明	密　褐・灰色粒、3㎜以下褐色礫。1～2㎜灰色礫	良	7.5YR7/3 にぶい橙	20	頸部径：(19.5) ㎝ 体部径：(22.8) ㎝ 摩滅
388		E-3	129G-8	包含層	土師器	甕				調整不明	密　灰白・灰・褐色粒多。3㎜以下褐・4㎜以下灰色礫少	良	内 :2.5YR6/6 橙 外 :7.5YR7/4 にぶい橙	15	頸部径：(20.3) ㎝ 摩滅

第 10 表　出土土器観察表

挿図 No.	図版 No.	区	グリッド	遺構 層位	種別	器種名	口径	底径	器高	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存率 (%)	備考
390	60	E-3	129F-10	包含層	土師器	甕	(16.6)		(15.3)	内：ハケ・ハケ後ナデ？ 外：ハケ・ヨコナデ	密　石英・雲母	良	10YR7/2 にぶい黄橙	口 30 ～体部 25	頸部径：(13.9) cm 体部径：(20.4) cm 煤付着
391	61	E-2	110E-2	TR11	土師器	甕	(14.1)		(8.15)	ハケ後ナデ？	粗　灰・褐色粒、4 ㎜以下灰・褐色礫多	良	内：5YR6/6 橙 外：2.5YR6/6 橙	30	頸部径：(11.9) cm 摩滅
392		E-2		SR6401	土師器	甕	(12.0)		(4.2)	内：ハケ・ナデ・ヨコナデ 外：ハケ後ナデ・ヨコナデ	密　2 ㎜以下白色・灰色粒多	良	内：10YR7/4 にぶい黄橙 外：10YR6/3 にぶい黄橙	10	頸部径：(11.5) cm
393		E-3	129E-10	包含層	土師器	甕		(7.9)	(4.7)	内：板ナデ 外：ナデ・底部木葉痕	密　2 ～ 3 ㎜白色・灰色・褐色礫	良	10YR8/3 浅黄橙	底部 30	器面剥離
394	61	E-3	129F-9		土師器	壷		8.5	(18.3)	内：ハケ・ナデ 外：ミガキ	密　2 ㎜以下白色・灰色・赤色礫多。3 ～ 4 ㎜礫	良	5YR5/4 にぶい赤褐	口 10 ～底部 100	頸部径：(10.9) cm 体部径：(18.0) cm 摩滅
395		E-3	129E-10		土師器	甕				ハケ？	密　灰色粒、3 ㎜以下灰色礫多。褐色粒	良	7.5YR7/4 にぶい橙	20	頸部径：(13.4) cm 体部径：(15.9) cm 摩滅
396		E-2	109J-10	SR6345	土師器	甕	(12.3)		(5.0)	ナデ	密　灰白色粒	良	内：10YR5/3 にぶい赤褐 外：5YR5/4 にぶい赤褐	15	頸部径：(11.6) cm
397		E-2	109J-9	SR6401	土師器	甕	(12.6)		(7.3)	内：ハケ後ナデ 外：ハケ・ナデ	密　3 ㎜以下灰色・白色砂粒、砂礫。4 ～ 5 ㎜灰色礫少	良	5YR7/6 橙	15	頸部径：(12.2) cm 体部径：(14.6) cm 摩滅
398	61	A-1	170A-3		土師器	甕	(11.55)		(8.3)	ハケ	密　灰色・褐色粒、8 ㎜以下褐色礫、3 ㎜以下灰色礫	良	5YR6/6 橙	口 80 ～体部 5	頸部径：10.8 cm 体部径：(13.3) cm 摩滅
399		E-2 北東	110E-2		土師器	甕	(27.0)		(5.0)	内：ハケ・ナデ 外：ハケ	密　灰白色・灰色粒、4 ㎜以下灰色礫、3 ㎜以下灰白色礫	良	内：10YR7/3 にぶい黄橙 外：10YR7/4 にぶい黄橙	10	頸部径：(25.8) cm 摩滅
402		E-1	110E-3		土師器	甕		7.25	(11.3)	内：ヘラナデ・ナデ 外：ハケ・底部ナデ	密　灰色粒、2 ㎜以下灰色礫	やや良	内：10YR7/3 にぶい黄橙 外：2.5Y6/2 灰黄 5Y2/1 黒	体 30 ～底部 95	外面煤付着 摩滅
403		E-1	110E-4		土師器	甕	(23.90)		(3.4)	ヨコナデ	密　灰白色粒、2 ㎜以下灰白色礫少	やや良	内：10YR4/1 褐灰 外：10YR3/1 黒褐	10	頸部径：(22.0) cm 摩滅
404		E-2	109E-10	SD3964	土師器	甕	(21.9)		(5.2)	内：ナデ・板ナデ・ヨコナデ 外：ハケ・ナデ・ヨコナデ	密　灰色粒	良	2.5Y8/3 淡黄	口縁部 25	頸部径：(20.7) cm 歪みあり
406		E-3	129I-9		土師器	甕	(27.1)		(3.75)	調整不明	密　灰白・灰・褐色粒、4 ㎜以下灰白色礫	良	7.5YR6/4 にぶい橙	15	頸部径：(24.3) cm 摩滅
407		E-2	110G-1		土師器	甕	(25.4)		(5.2)	内：ナデ・ヨコナデ 外：調整不明・ヨコナデ・ナデ	密　灰白色粒。雲母粒僅	良	10YR7/2 にぶい黄橙	15	頸部径：(23.4) cm 摩滅 歪み著しい
408		E-2	不明		土師器	甕	(22.8)		(4.1)	ハケ後ヨコナデ	密　白色粒、4 ㎜以下灰色礫、3 ㎜以下赤褐色礫	不良	内：7.5YR8/3 浅黄橙 外：7.5YR8/4 浅黄橙	口縁部 20	頸部径：(20.4) cm 摩滅
409		E-2	110F-3	3952 ②	土師器	甕	(20.0)		(5.5)	内：調整不明・ナデ 外：調整不明	やや密　2 ㎜以下白色礫	良	7.5YR7/4 にぶい橙	口縁部 5	頸部径：(19.4) cm 摩滅
410		E-2	109E-10		土師器	甕	(19.3)		(4.05)	内外：調整不明	密　灰白色粒多。2 ㎜以下灰白色・灰色礫、橙色粒、4 ㎜以下橙色礫	良	7.5YR7/4 にぶい橙	10	頸部径：(17.3) cm 摩滅
411		E-3	129E-10		土師器	甕	(17.8)		(9.0)	内：ハケ後ナデ 外：ハケ・ハケ後ナデ	密　石英、雲母、灰色・赤色粒	良	10YR7/4 にぶい黄橙	口～肩部 20	頸部径：(15.2) cm 摩滅
412	61	E-2	110I-1	SX2595	土師器	甕	(16.0)	(6.4)	14.4	調整不明	やや密　灰白・灰・褐色粒、3 ㎜以下灰白・6 ㎜以下褐・7 ㎜以下灰色礫		7.5YR8/4 浅黄橙色	口 25 ～底部 95	頸部径：(15.3) cm 体部径：(17.2) cm
413	61	E-1	110E-3		土師器	甕	(15.2)		(9.9)	内：ナデ？ 外：ナデ・ハケ	密　灰白色粒、2 ㎜以下灰白色・灰色礫	やや不良	内：10YR7/4 にぶい黄橙 外：10YR6/4 にぶい黄橙	35	頸部径：(14.5) cm 体部径：(17.2) cm 煤少量付着。摩滅 歪みあり
414		E-2	109E-9	1463	土師器	甕		(6.1)	(2.75)	調整不明	やや粗　灰白・灰・褐色粒、6 ㎜以下灰白・2 ㎜灰色礫少	やや良	内：10YR7/4 にぶい黄橙 外：5Y4/1 灰	30	摩滅
416		E-1	110E-3		土師器	甕	(17.1)		(3.35)	調整不明	密　灰白色粒、2 ㎜以下灰白色礫、4 ㎜以下灰色礫僅	不良	2.5Y6/2 灰黄	15	頸部径：(15.3) cm
417		E-2	表土		土師器	甕	(18.6)		(5.2)	ナデ・ヨコナデ	密　黒色粒、2 ～ 3 ㎜礫	良	7.5YR8/4 浅黄橙	口縁部 30	頸部径：(18.1) cm 歪みあり
418		E-2	109E-10	SD3942	土師器	甕	(15.05)		(4.05)	内：ヨコナデ？ 外：ナデ・ハケ	密　灰白色・灰色粒。3 ㎜以下灰色礫少	良	内：10YR8/2 灰白 外：10YR7/2 にぶい黄橙	55	頸部径：(13.9) cm 煤付着 摩滅。歪みあり
420	62	E-3	129F-10	包含層	土師器	甕	(18.8)		(11.5)	ハケ・ヨコナデ	密　白色・褐色粒多	良	10YR6/3 にぶい黄橙	10	頸部径：(17.6) cm
421		E-3	129G-10	包含層	土師器	甕	(21.0)		(11.1)	内：ハケ後ナデ？ハケ・ナデ 外：ハケ後ナデ・ハケ・ヨコナデ。	密　石英、灰色・赤色粒	良	内：10YR6/4 にぶい黄橙 外：7.5YR6/6 橙	口縁部 25	頸部径：(17.5) cm 煤付着 摩滅
422	61	E-3	130E-1	包含層	土師器	甕	17.9		(20.3)	内：ナデ・ハケ調整・ヨコナデ？ 外：ハケ・ヨコナデ？ナデ	密　2 ㎜以下白色・黒色・褐色粒多	良	7.5YR5/8 明褐	口 90 ～体部 20	頸部径：14.7 cm 体部径：(26.1) cm 摩滅。黒斑あり
423		E-3	129G-9	包含層	土師器	甕		9.2	(6.4)	内：ハケ・ナデ 外：ハケ後ナデ・底部木葉痕	密　2 ㎜以下白色・黒色粒多	良	内：2.5Y6/1 黄灰 外：10YR5/3 にぶい黄褐	底部 70	器面剥離
424	61	A-1	150D-2		土師器	甕	15.5		(6.2)	内：ハケ・ナデ・ハケナデ？ 外：ハケ後ナデ・ハケ・ヨコナデ	密　白色・灰色・赤色粒	良	5YR6/4 にぶい橙	口縁部 98	頸部径：13.45 cm

第 10 表　出土土器観察表

挿図No.	図版No.	区	グリッド	遺構層位	種別	器種名	口径	底径	器高	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考
425		A-1	170A-2 150E-2	SX585	土師器	甕	(18.2)	(9.0)		内：ナデ・ハケ後ナデ・ヨコナデ 外：ハケ・板ナデ。ヨコナデ・底部ナデ？	密　白色・赤褐色礫少	良	内：7.5YR6/2 にぶい橙 外：7.5YR4/2 灰褐	5	頸部径：(16.6) cm 摩滅
426	63	E-3	129H-9	包含層	土師器	甕	(18.0)		(23.1)	内：ナデ・ハケ後ヨコナデ 外：ハケ・ハケ後ヨコナデ	密　1 ㎜白色・赤褐色・灰色礫多	良	7.5YR6/4 にぶい橙	口～体部 40	頸部径：(15.6) cm 体部径：(26.5) cm
427		E-2	109I-10		土師器	甕	17.8	8.4	(23.0)	内：ハケ・ヨコナデ・ナデ 外：ハケ・ナデ・ヨコナデ	密　1 ㎜以下白色粒・礫多	良	7.5YR6/6 橙	口 70～底部 95	頸部径：(14.9) cm 摩滅
428		E-3		SR9129	土師器	甕	(19.3)		(11.9)	内：ハケ後ナデ？ヨコナデ 外：ハケ・ヨコナデ	密　1 ㎜白色・褐色・灰色礫多	良	7.5YR7/4 にぶい橙	口縁部 5	頸部径：(16.2) cm
429		E-3		SR9135	土師器	甕	(12.9)	4.7	(14.9)	内：ハケ・ヨコナデ・ナデ 外：ハケ・ナデ・底部ナデ	密　2 ㎜以下白色・黒色粒多	良	内：10YR6/4 にぶい黄橙 外：2.5Y3/2 黒褐・5YR6/4 にぶい橙	40	頸部径：(12.8) cm 体部径：(17.8) cm
430	65	E-3	149A-9		土師器	甕	18.7	8.6	25.5	内：板ナデ・ナデ・ヨコナデ 外：ナデ・ハケ・ヨコナデ	密　白色粒多。灰色・赤褐色粒少	良	7.5YR6/4 にぶい橙	70	頸部径：15.9 cm 体部径：21.9 cm 煤付着
431		E-3	129F-10	包含層	土師器	甕	(18.0)		(8.0)	内：ハケ後ナデ・ナデ・ハケ後ヨコナデ 外：ハケ・ナデ・ハケ後ナデ？	密　石英、白色・橙色粒	良	7.5YR7/1 明褐灰	口縁部 50	頸部径：(14.7) cm
432	62	E-3	129F-10		土師器	甕	19.5		(6.8)	内：ナデ・ハケ・ヨコナデ 外：ヨコナデ	密　白色・灰色礫多。赤色粒少	良	5YR5/4 にぶい赤褐	口 90～体部 20	頸部径：16.8 cm 摩滅
433		E-3	129E-10	包含層	土師器	甕	(16.6)		(7.8)	内：ハケ後ナデ 外：ハケ後ナデ・ナデ	密　石英、白色・灰色・赤色粒	良	内：7.5YR6/4 にぶい橙 外：5YR6/6 橙	口縁部 30	頸部径：(15.5) cm 摩滅
434		A-1	150E-2		土師器	甕	(16.7)		(3.9)	内：ハケ・ナデ 外：ヨコナデ・ハケ後ヨコナデ	粗　灰白粒多。2 ㎜以下灰白礫・石英少	やや良	7.5YR6/6 橙	10	頸部径：(16.1) cm 摩滅
435		E-2	110E-1		土師器	甕	(18.5)		(3.9)	ハケ・ヨコナデ	粗　灰白・褐色粒多。2 ㎜以下灰白・褐色礫。石英粒、石英少	良	内：10YR5/3 にぶい黄褐 外：7.5YR5/3 にぶい褐	5	頸部径：(15.95) cm
436		E-1	110E-4	包含層	土師器	甕	(19.70)		(4.70)	ヨコナデ	やや粗　灰白色粒、2 ㎜以下灰白色礫多	やや良	内：10YR3/2 黒褐 外：10YR3/2 黒褐	15	頸部径：(18.4) cm 摩滅
437		E-2	109D-10	TR11	土師器	甕	(21.6)		(4.8)	内：ハケ 外：調整不明	粗　白色粒。2 ㎜以下白色・灰色礫	良	内：5YR5/3 にぶい赤褐　外：2.5YR4/6 赤褐	5 以下	頸部径：(20.0) cm 摩滅
438		E-2	109H-8	6172	土師器	甕	(20.2)		(6.25)	内：調整不明・ハケ後ナデ 外：ハケ後ヨコナデ・ハケ	粗　灰白色粒多。2 ㎜以下灰白色・灰色・褐色礫	良	内：7.5YR7/4 にぶい橙色　外：10YR6/3 黄橙	15	頸部径：(18.5) cm 摩滅
439		E-1	110D-3		土師器	甕	(20.5)		(5.6)	内：ハケ・ハケ後ナデ 外：ナデ・ヨコナデ	粗　灰白色粒、2 ㎜以下灰白色礫多。2 ㎜以下灰褐色礫少	良	内：5YR5/4 にぶい赤褐　7.5YR5/2 灰褐 外：5YR5/4 にぶい赤褐色	15	頸部径：(18.2) cm 摩滅
440		E-2	109H-8	6172	土師器	甕	(21.2)		(5.9)	ハケ・ヨコナデ	密　2 ㎜以下白色・灰色粒多	良	内：7.5YR7/6 橙 外：10YR6/3 にぶい黄橙　7.5YR7/6 橙	口縁部 15	頸部径：(19.7) cm 摩滅
441		E-2	130A-4		土師器	甕	(16.4)		(12.3)	内：調整不明 外：ハケ・調整不明	密　白色粒	良	内：10YR7/4 にぶい黄橙 外：5YR7/6 橙	口～体部 15	頸部径：(12.3) cm 摩滅
442		E-2	110J-4		土師器	甕	(17.4)		(8.5)	ハケ後ナデ・ハケ・ヨコナデ	密　石英・長石・雲母	良	7.5YR7/4 にぶい橙	口～肩部 20	頸部径：(14.7) cm
443	62	E-3	129F-9		土師器	甕	(12.5)		(6.2)	内：ヨコナデ 外：ハケ・ヨコナデ	密　1 ㎜白色礫多	良	7.5YR8/2 灰白	口 25～肩部 30	頸部径：(11.3) cm
444	65	E-3	129G-10		土師器	甕	(18.0)	7.0	23.0	ハケ後ナデ・ナデ・ハケ・ヨコナデ 底部木葉痕	密　白・灰色粒多。石英粒少	良	内：7.5YR5/3 にぶい褐 外：7.5YR6/3 にぶい褐　7.5YR4/2 灰褐	75	頸部径：(15.29 cm 体部径：(22.6) cm 外面煤付着
445	62	E-3	129F-10	包含層	土師器	甕	22.0		(7.2)	内：ハケ・ヨコナデ・ナデ 外：ハケ・ヨコナデ	密　2 ㎜以下白色・黒色粒多	良	7.5YR6/4 にぶい橙。5YR5/6 明赤褐	口縁部 60	頸部径：18.1 cm 摩滅
446		E-2	109J-10	SR6345	土師器	甕	(19.5)		5.3	ナデ	粗　灰白色粒、2 ㎜灰白色礫多。㎜石英僅	良	5YR6/6 橙	20	頸部径：(16.4) cm 摩滅
447		E-3	129G-10		土師器	甕		8.15	(3.5)	内：ハケ・ナデ 外：ハケ後ナデ・底部木葉痕	密　灰白色粒僅。灰色・褐色粒多。雲母・石英粒僅	良	内：10YR5/3 にぶい黄褐　外：10YR3/1 黒褐	体 10～底部 100	外面煤付着 摩滅
448		E-3	129G-10	包含層	土師器	甕	(18.1)		(6.2)	内：ナデ・ヨコナデ 外：ハケ・ヨコナデ	密　2 ㎜以下白色・黒色・褐色粒多	良	内：5YR6/6 橙 外：5YR6/6 橙	口縁部 20	頸部径：(15.3) cm 摩滅
449		E-3	129G-10	包含層	土師器	甕	(17.8)		(4.5)	内：調整不明・ヨコナデ 外：ハケ後ヨコナデ	密　2 ㎜以下白色・灰色粒多	良	内：7.5YR7/6 橙 外：7.5YR6/3 にぶい褐	口縁部 20	頸部径：(16.4) cm 摩滅
450		B			土師器	甕		8.5	(6.4)	内：ナデ 外：ハケ後ナデ・底部木葉痕	密　白色・灰色・赤色砂粒、石英	良	5YR6/6 橙	底部 90	摩滅
451	62	E-3	129E-10	包含層	土師器	甕	(24.9)	(9.7)	(30.0)	ハケ・調整不明・底部木葉痕	密　3 ㎜以下白色・灰色礫多。4 ㎜灰色礫僅	良	内：10YR5/6 黄褐 外：2.5Y4/1 黄灰　10YR5/6 黄褐	40	頸部径：(20.1) cm 体部径：(28.6) cm 摩滅
452		E-1	110D-3	集落域流路	土師器	甕	(18.45)	(15.6)	(5.7)	内：ハケ後ナデ・ナデ 外：ヨコナデ・ナデ	密　灰白色粒多。雲母粒。1 ㎜灰白色礫	やや良	内：5Y4/1 灰　10YR6/4 にぶい黄褐 外：10YR5/3 にぶい黄褐	20	摩滅
453		E-3		SR9126	土師器	甕	(17.0)	(14.0)	(4.6)	内：ナデ・ヨコナデ 外：ヨコナデ	密　白色・赤褐色・灰色粒多	良	7.5YR7/6 橙	口縁部 20	
454		E-2		SR6345	土師器	甕	(16.0)		(2.8)	ヨコナデ	密　2 ㎜以下白色・灰色粒多	良	10YR7/1 灰白	口縁部 10	摩滅
455		E-2	109H-8	6172	土師器	甕	(17.9)		(6.0)	内外：ハケ・ハケ後ヨコナデ	密　2 ㎜以下白色・灰色粒多	良	7.5YR7/6 橙	口～肩部 5	頸部径：(14.3) cm 摩滅

第 10 表　出土土器観察表

挿図 No.	図版 No.	区	グリッド	遺構 層位	種別	器種名	口径	底径	器高	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存率 (%)	備考
456		E-2	109I-7	2929	土師器	甕	(24.3)		(4.1)	内：ハケ・ナデ 外：ナデ	密　白色・灰色粒多	良	5YR6/6 橙	口縁部 5	頸部径：(22.2) ㎝
457		E-1	110E-3	8 層直上	土師器	甕		(7.7)	(4.5)	内：調整不明 外：ハケ後ナデ・底部木葉痕？	粗　灰白色粒、2 ㎜以下灰白色礫多。褐色粒。1 ㎜褐色礫	やや良	内：7.5YR6/4 にぶい橙 外：7.5YR5/3 にぶい褐	体 25 ～底部 50	摩滅
458	62	E-3	129E-9	包含層	土師器	甕	(18.9)	9.0		内：ナデ・ハケ・ヨコナデ・板ナデ 外：板ナデ・ハケ・ナデ・ヨコナデ・底部木葉痕	密　1 ㎜以下白色・灰色黒色・茶褐色粒、雲母片多。	良	内：10YR7/4 にぶい黄橙　外：10YR3/2 黒褐	口 50 ～底部 90	頸部径：(16.5) ㎝ 摩滅
459		E-2	110F-1		土師器	甕	(19.6)		(6.5)	内：ハケ・ナデ・ヨコナデ 外：ハケ後ヨコナデ・ヨコナデ	粗　灰白色粒多。石英・雲母粒、灰白色礫。石英・褐色・黒色礫僅	良	7.5YR6/4 にぶい橙	20	頸部径：(15.8) ㎝
460		E-3	129G-9	包含層	土師器	甕	(18.6)		(5.5)	ナデ・ハケ	密　2 ㎜以下白色・黒色粒多	良	内：10YR5/2 灰黄褐色 外：10YR7/4 にぶい黄橙	口縁部 20	頸部径：(15.1) ㎝ 摩滅
461		E-3	130C-3	排水溝	土師器	甕	(18.2)		(5.5)	内：ナデ・ハケ後ヨコナデ 外：ハケ後ヨコナデ	密　2 ㎜以下白色・黒色・褐色粒多	良	内：7.5YR5/3 にぶい褐色 外：10YR3/2 黒褐	口縁部 15	頸部径：(16.5) ㎝
462	62	E-3	130F-1	包含層	土師器	甕	(18.6)		(6.5)	ナデ・ハケ	密　2 ㎜以下白色・黒色粒多	良	内：10YR7/3 にぶい黄橙 外：7.5YR6/6 橙	口 45 ～肩部 15	頸部径：(16.5) ㎝ 摩滅
463	62	E-3	130F-1		土師器	甕	(22.4)		(7.0)	内：ハケ・ヨコナデ 外：ハケ・ヨコナデ	密　2 ㎜以下白色・黒色褐色粒多	良	内：10YR6/3 にぶい黄橙 外：10YR4/1 褐灰	口～肩部 30	頸部径：(20.6) ㎝ 摩滅
464	63	E-3	129F-10	包含層	土師器	甕	(20.1)	(8.2)	(27.7)	内：板ナデ・ナデ・ヨコナデ 外：ハケ・板ナデ・ナデ・ヨコナデ・底部木葉痕	密　白色・黒色粒	良	7.5YR4/3 褐色	口～底部 40	頸部径：(17.4) ㎝ 体部径：(26.1) ㎝ 煤付着
465		E-3		表土	土師器	甕	(30.6)		(7.3)	内：ナデ・ヨコナデ 外：ハケ・ヨコナデ	密　石英、赤色粒	良	内：7.5YR5/2 灰褐 外：7.5YR6/2 灰褐	口縁部 10	頸部径：(29.4) ㎝ 摩滅
466	63	E-1	110D-3	包含層	土師器	甑	21.5	(13.0)	22.5	内：ハケ後ナデ・ナデ 外：ハケ後ナデ・ナデ・底部ナデ	密　白色・灰色粒多。2 ㎜礫僅	良	内：7.5YR7/4 にぶい橙 外：5YR6/4 にぶい橙	80	摩滅
467		E-2	129A-9		土師器	甑				調整不明・ナデ	粗　灰色・褐色粒、3 ㎜灰・褐色礫多	良	内：N5/ 灰色 外：10YR8/2 灰白	把手部 90	摩滅
468		E-1	110D-3	包含層	土師器	甑	(22.0)		(27.3)	内：板ナデ？ナデ 外：ハケ・ナデ	密　2 ㎜以下白色・黒色粒多	良	内：2.5Y7/3 浅黄 外：10YR7/3 にぶい黄橙	50	摩滅
469		E-3	129E-10	包含層	土師器	甑				内：ハケ 外：ナデ	密　白色・黒色粒。3 ㎜白色砂礫僅	良	内：7.5YR7/6 橙 外：5YR7/6 橙	把手部 50	摩滅
470		E-3	129G-9	包含層	土師器	甑				把手部外：指ナデ	密　3 ㎜以下黒・褐・灰色粒・砂礫多	良	内：10YR8/2 灰白 外：7.5YR8/4 浅黄橙	把手部 50	
471		E-3	129H-9	包含層	土師器	甑				内：ハケ 外：ハケ後ナデ・ナデ	密　2 ㎜以下灰色・褐色粒多	良	内：5YR7/6 橙 外：7.5YR8/4 浅黄橙 2.5YR6/6 橙	体 5 ～把手 50	摩滅
472	63	E-1	110D-2		土師器	甑	(19.2)	9.0	27.7	内：ハケ・ハケ後ナデ 外：ハケ後ナデ・ナデ	密　白色・灰色粒多。灰色粒、2 ㎜礫少	良	内：7.5YR6/3 にぶい褐色 外：2.5YR6/4 にぶい橙	50	
473	64	E-1	110C-4	8 層直上	土師器	甑				内：ハケ 外：ハケ・ハケ後ナデ・ナデ	粗　灰色・褐色粒多。3 ㎜以下褐色・6 ㎜以下灰色礫	やや良	内：10YR5/2 灰黄褐 外：10YR5/2 灰黄褐 10YR7/2 にぶい黄橙	40	煤付着 摩滅 歪み著しい
474	64	E-3	130E-1		土師器	甑	17.6	8.8	18.1	ハケ・板ナデ？	密　白色・橙色粒	良	5YR8/3 淡橙	95	摩滅
475		E-2	110D-1		土師器	甑				内：ハケ 外：調整不明・ナデ	密　灰白・灰・褐色粒多。2 ㎜以下灰・褐色礫、雲母粒少	良	内：7.5YR7/4 にぶい橙 外：5YR6/6 橙	体 15 ～把手部 50	摩滅
476		E-3	129E-10	包含層	土師器	甑				ナデ	密　2 ㎜以下灰・褐色粒多。5 ㎜白・灰色礫僅	良	外：10YR6/6 赤褐	把手部 50	
477		E-1	110D-3		土師器	甑				内：ハケ調整 外：ナデ	やや粗　灰色粒多。褐色粒。5 ㎜以下灰色礫、2 ㎜以下褐色礫少	良	10YR7/3 にぶい黄橙	把手部 30	歪みあり
478		E-3		包含層	土師器	甑				内：ナデ 把手部外：ナデ	密　3 ㎜以下白・灰色礫・砂礫多。4 ～8 ㎜白色・灰色礫少	良	7.5YR7/4 にぶい橙	把手部 50	摩滅
479		E-2	109J-10	SR6398	土師器	甑				外：調整不明	粗　灰色・褐色粒多。4 ㎜以下礫多	良	10YR7/3 にぶい黄橙	把手部 40	摩滅
480		E-3		SR9135	土師器	甑		(12.8)	(11.3)	ナデ	密　4 ㎜以下灰・褐・白色礫。5 ～ 7 ㎜灰色・褐色礫少	良	内：2.5Y7/6 橙 外：2.5Y7/6 橙 7.5YR7/4 にぶい橙	10	摩滅
481	63	E-3	130F-1	古代層	土師器	甑	15.5	7.2	11.4	外：調整不明・ナデ 内：ハケ・ハケ後ナデ	密　白色・灰色・橙色粒	良	内：7.5YR7/4 にぶい橙 外：5YR7/4 にぶい橙	80	外面黒斑あり 器面剥離
482	64	E-3	129E-10	包含層	土師器	甑	(11.1)	(6.6)	10.8	内：ナデ 外：ナデ・底部木葉痕	密　灰色砂粒。5 ～6 ㎜礫	良	7.5YR6/4 にぶい橙	25	底部穿孔 器面剥離
483	64	E-2	109I-8	SR6400B	土師器	甑		(9.6)	(5.2)	調整不明・底部穿孔	密　白色・灰色・橙色粒	やや不良	内：2.5Y5/1 黄灰色 外 N7/1 灰白色	底部 20	多孔式 摩滅
484		E-3	130B-1	SF9607	土師器	甑		(7.9)	1.5	内外：ナデ	密　2 ㎜礫僅	良	5YR7/6 橙	底部 20	底部穿孔 (12 箇所)
485		E-2	110G-1		土師器	甑		(7.4)	(2.0)	内：ナデ 外：調整不明	密　灰色・褐色粒	良	内：10YR8/3 浅黄橙 外：5YR7/4 にぶい橙	底部 25	底部穿孔
486	64	E-2	109J-9	SR6401	土師器	甑		(6.0)	(4.4)	内：ハケ後ナデ 外：ハケ後ナデ・底部ナデ	密　3 ㎜以下灰白・白色粒・砂礫多	良	5Y5/1 灰	体 10 ～底部 25	底部穿孔 摩滅
487		E-2	110G-1		土師器	甑		(6.8)	(2.1)	ナデ	密　赤褐色粒、2 ㎜礫僅	良	7.5YR8/6 浅黄橙	底部 20	底部穿孔

第 10 表　出土土器観察表

挿図 No.	図版 No.	区	グリッド	遺構 層位	種別	器種名	口径	底径	器高	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存率 (%)	備考
488	64	E-3	129E-9	包含層	土師器	坏	8.8		4.7	内：ナデ 外：ヘラケズリ・ナデ	密　灰色・褐色粒多。 石英粒僅	良	10YR8/2 灰白	90	
489		E-1	110E-4	8 層直上	土師器	坏	(9.4)		(2.8)	ナデ	密　3 ㎜以下礫	良	2.5YR6/8 橙	10	
490		E-3	129E-10		土師器	坏	(9.9)		(2.4)	ナデ	密	良	5YR7/6 橙	10	491 と同一個体か
491		E-3	129E-10		土師器	坏	(9.9)		(2.4) 2.0)	ナデ	密	良	5YR7/6 橙	10	490 と同一個体か
492		E-3	129E-10		土師器	坏			(3.0)	内：ナデ　外：ヘラケズリ	密　黒色・赤褐色粒	良	2.5Y8/2 灰白	40	
493		E-2	110H-3	流路	土師器	坏		2.0	(3.6)	調整不明	密　1 ㎜以下灰色・ 褐色粒多	良	内：10YR7/4 にぶい黄 橙 外：5YR7/6 橙 7.5YR7/4 にぶい橙	50	摩滅
494		E-3	130F-1		土師器	坏	(8.9)		(2.8)	ナデ	密	良	2.5YR7/6 橙	5	
495		E-2	110G-1	包含層	土師器	坏	(9.0)		(3.5)	内：ナデ（工具ナデ？） 外：ナデ・ヨコナデ・工具 ナデ？	密　黒色・褐色粒	良	内：7.5YR3/1 黒褐色 外：7.5YR7/3 にぶい 橙	10	煤付着？
496	64	E-2	110I-5	包含層	土師器	甑				外：ナデ	密		外：2.5YR6/8 橙		
497		E-2	110J-5		土師器	壷				内：ナデ 外：調整不明	密　灰色粒、2 ㎜以 下灰色礫多。褐色粒	良	7.5YR7/4 にぶい橙	20	頸部径：(6.15) ㎝ 摩滅
498		E-3	130D-4		土師器	坏	(8.9)		(3.0)	ナデ	密	良	5YR7/6 橙	5	
499		E-3	129G-10	包含層	土師器	坏	(8.8)		(2.7)	ナデ	密　黒色・赤褐色粒	良	7.5YR7/4 にぶい橙	5	
500		E-3	129E-9		土師器	坏	(11.9)		(4.5)	内：板ナデ・ナデ 外：ナデ	密　灰色・褐色粒。 2 ㎜黒色・褐色礫僅	良	内：7.5YR5/4 にぶい 褐 外：5YR6/4 にぶい橙	25	赤彩 摩滅 歪み著しい
502		E-3	129B-8		土師器	坏	(9.8)		(4.3)	ナデ	密	良	2.5YR7/6 橙	5	赤彩 発泡状の胎土
504		E-3	130D-3		土師器	坏	(9.8)		(2.8)	ナデ	粗	良	2.5YR6/6 橙	5	赤彩 発泡状の胎土
505		E-3	130E-3		土師器	坏	(9.8)		(2.6)	ナデ	密	良	2.5YR7/6 橙	5	赤彩
506		E-3		SR10054	土師器	坏	(9.8)		(2.2)	ナデ	粗	良	2.5YR6/6 橙	5	赤彩 発泡状の胎土
507		E-3		表土	土師器	高坏				内：ナデ 外：ヘラナデ（塗彩前）	密	良	内：5YR7/6 橙 外：2.5YR6/4 にぶい 橙	坏部 5	赤彩 発泡状の胎土
508		E-3	129I-9	包含層	須恵器	坏蓋	(15.75)		(3.5)	回転ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒。白色礫・ 石英僅少	良	N4/ 灰色	5	回転方向不明 外面薄く降灰
509	66	E-2	110E-2		須恵器	坏蓋	(13.25)		5.1	回転ナデ　内：ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒。3 ㎜以 下白色礫僅少	良	N6/ 灰色	40	左回転？ 歪みあり
510	66・ 71	A-1	170A-3		須恵器	坏蓋	(12.35)	最大径 (13.1)	4.6	回転ナデ　内：ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒多	良	N5/ 灰色	70	歪みあり 右回転 外面薄く降灰
511		E-3	130E-1	包含層	須恵器	坏蓋	(10.0)		4.6	回転ナデ　外：回転ヘラケ ズリ	密　白色粒・白色礫	良	内：2.5YR4/2 灰赤色 外：N5/ 灰色	40	左回転
512	66	E-2	110G-1		須恵器	坏蓋	11.0		4.25	回転ナデ 外面：回転ヘラケズリ	密　白色粒。白色小 礫僅少	良	内：N5/ 灰色 外：5PB6/1 青灰色	80	左回転。歪みあり 火ぶくれあり
513		A-1	150E-2		須恵器	坏蓋	(10.6)		(4.25)	回転ナデ 外面：回転ヘラケズリ	密　白色粒・白色小 礫	良	5B5/1 青灰色	25	回転方向不明 火ぶくれあり
514	66	E-3	129F-10	包含層	須恵器	坏蓋	10.75		3.55	回転ナデ 外面：回転ヘラケズリ	密　白色粒。7 ㎜以 下白色小礫少	良	5PB5/1 青灰色	90	左回転
515		E-2	110J-2	SR6221	須恵器	坏蓋	—		—	回転ナデ 外面：回転ヘラケズリ	密　白色粒	良	N7/ 灰白色	15	
516		E-3	129F-10	包含層	須恵器	坏蓋	(15.2)		(4.9)	回転ナデ　外：回転ヘラケ ズリ　内：ナデ	密　白色粒・褐色粒 子。白色礫僅	不良	内：10YR7/2 にぶい黄 橙色 外：7.5Y8/1 灰白色	20	右回転 摩滅
517	66	E-3	129I-9	包含層	須恵器	坏蓋	(13.9)		(4.95)	回転ナデ　内：ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒。4 ㎜以 下白色礫少	不良	2.5Y7/1 灰白色	60	右回転 摩滅
518	66	E-3	129G-9	包含層	須恵器	坏蓋	(12.2)		4.9	回転ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒少	良	N6/ 灰色	40	右回転？ 歪みあり
519		E-3		SR9125	須恵器	坏蓋	(11.4)		(3.65)	回転ナデ 外：ヘラキリ無調整	密　白色粒・3 ㎜以 下白色礫	良	内：5PB6/1 青灰色 外：N5/ 灰色	20	回転方向不明
520	66	E-3	129F-10	包含層	須恵器	坏蓋	(11.7)		(3.7)	回転ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒	良	N7/ 灰白色	30	左回転
521		E-2	109H-8		須恵器	坏蓋	(11.15)		4.9	回転ナデ 外面：回転ヘラケズリ	密　白色粒。白色小 礫僅少	良	7.5YR5/3 にぶい褐色	10	左回転 歪みあり
522		E-2	110F-1		須恵器	坏蓋	(11.85)		4.2	回転ナデ 外面：回転ヘラケズリ	密　白色粒	良	N5/ 灰色	20	左回転
523		E-3	129F-10	包含層	須恵器	坏蓋	(11.7)		3.95	回転ナデ　内：ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒	良	内：N5/ 灰色 外：5PB6/1 青灰色	30	右回転 歪みあり
524	66	E-3	129G-10	包含層	須恵器	坏蓋	(11.75)		4.65	回転ナデ 外面：回転ヘラケズリ	密　白色粒・白色礫	良	N6/ 灰色	80	右回転 外面薄く降灰
525		E-3	130E-1	包含層	須恵器	坏蓋	(12.7)		(4.0)	回転ナデ 外面：回転ヘラケズリ	密　白色粒	良	内：5PB6/1 青灰色 外：5Y6/1 灰色	45	左回転。ヘラ記号 外面自然釉
526		E-2	109H-8		須恵器	坏蓋	(10.95)		(3.3)	回転ナデ　内：ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒・石英多	良	N6/ 灰色	25	右回転 内面煤付着
527		E-3		ST9126	須恵器	坏蓋	(11.4)		(3.1)	回転ナデ	密　白色粒	良	7.5Y6/1 灰色	5	回転方向不明
528	66	E-3	129G-9	包含層	須恵器	坏蓋	(13.75)		4.45	回転ナデ 外面：回転ヘラケズリ	密　白色粒。白色礫 少	不良	N6/ 灰色	30	右回転。摩滅
529	66	E-2	110E-4		須恵器	坏蓋	(12.9)		(4.2)	回転ナデ　内：ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒。白色礫 量	良	N5/ 灰色	25	左回転？ 歪みあり
530	67	E-3	129I-9	包含層	須恵器	坏蓋	(13.5)		4.8	調整不明	密　白色粒	不良	7.5Y7/1 灰白色	60	右回転。摩滅
531		E-1	110E-3		須恵器	坏蓋	(13.1)		4.2	回転ナデ 外面：回転ヘラケズリ	密　白色粒。白色礫 僅少	不良	N5/ 灰色	30	左回転 摩滅
532	67	E-3	129F-10	包含層	須恵器	坏蓋	(12.4)		4.5	回転ナデ 外面：回転ヘラケズリ	密　白色粒	良	2.5Y7/1 灰白色	45	回転方向不明 摩滅
533	67	E-3	130E-1	包含層	須恵器	坏蓋	12.35		4.5	回転ナデ　内：ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒。白色礫 僅少	良	N7/ 灰白色	75	右回転 歪みあり
534	67	E-3	129F-9	包含層	須恵器	坏蓋	(12.75)		4.1	回転ナデ　内：ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒子。5 ㎜ 以下白色礫少	良	内：5PB6/1 青灰色 外：N6/ 灰色	60	右回転。 歪み著しい

第 10 表　出土土器観察表

挿図No.	図版No.	区	グリッド	遺構層位	種別	器種名	口径	底径	器高	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考
535		E-3	129E-10	包含層	須恵器	坏蓋	(13.0)		(4.2)	回転ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒・白色礫	良	N6/ 灰色	30	右回転 摩滅
536		E-1	110C-4		須恵器	坏蓋	(13.3)		4.4	回転ナデ　内：ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒。白色礫僅	良	N7/ 灰白色	5	左回転？
537	67	E-2	129F-10	包含層	須恵器	坏蓋	12.1		4.55	回転ナデ　内：ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒。白色礫僅	良	N6/ 灰色	70	右回転
538	67	E-1	110G-7	砂礫層	須恵器	坏蓋	(11.4)		(4.0)	回転ナデ　内：ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒。5㎜以下白色礫少	良	N7/ 灰白色	40	右回転。歪み著しい。外面薄く降灰
539		E-3	129F-10	包含層	須恵器	坏蓋	(11.7)		3.9	回転ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒	良	N5/ 灰色	80	左回転
540		E-3		SR9126	須恵器	坏蓋	(12.6)		(2.9)	回転ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒	良	5Y8/1 灰白色	10	
541		E-3			須恵器	坏蓋	(12.2)		4.05	回転ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒・白色礫	良	5PB6/1 青灰色	30	回転方向不明 歪みあり
542		E-3	149A-9	包含層	須恵器	坏蓋	(11.35)		3.85	回転ナデ　内：ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒。白色礫少	良	N7/ 灰白色	30	左回転？歪みあり。外面自然釉
543	67	E-2	109J-10	SR6401	須恵器	坏蓋	(11.15)		4.2	回転ナデ 外：ヘラキリ無調整	密　白色粒・5㎜以下白色礫	良	N6/ 灰色	60	右回転 歪みあり
544	67	E-3			須恵器	坏蓋	(10.55)		4.1	回転ナデ　内：ナデ 外：ヘラキリ無調整	密　白色粒少	良	2.5Y5/1 黄灰色	30	右回転 火ぶくれあり
545	67	E-3	129F-10	包含層	須恵器	坏蓋	(11.1)		4.05	回転ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒多	良	10Y5/1 灰色	70	右回転 歪みあり
546	67	E-2	109J-10		須恵器	坏蓋	(11.1)		3.85	回転ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒。白色礫少	良	N7/ 灰白色	70	左回転 外面土器片付着
547	72	E-3	129G-9	包含層	須恵器	坏蓋	(12.3)		(3.9)	回転ナデ　内：ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒。5㎜以下白色礫少	良	N6/ 灰色	70	右回転 歪み著しい
548		E-3	129G-9	包含層	須恵器	坏蓋	(12.7)		(3.25)	回転ナデ　内：ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒・白色礫	良	N5/ 灰色	70	右回転 歪み著しい
549	72	E-3	129E-9	包含層	須恵器	坏蓋	(12.3)		(2.95)	回転ナデ　内：ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒・3㎜以下白色礫	良	N5/ 灰色	70	右回転。歪み著しい。重ね焼き痕
550	68	A-1	1740A-3		須恵器	坏身	(10.1)	最大径(12.2)	(4.75)	回転ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒・白色礫	良	N5/ 灰色	50	左回転
551		A-1	170A-3		須恵器	坏身	(10.5)	最大径(12.2)	(3.9)	回転ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒	良	N4/ 灰色	40	右回転。重ね焼き痕。外面薄く降灰
552		E-3	129E-10	SR9136	須恵器	坏身	(12.1)	最大径(14.6)	(4.4)		密　白色粒	良	N6/ 灰色	20	回転方向不明 歪みあり
553		E-1	110D-4		須恵器	坏身	(11.5)	最大径(13.9)	4.8	回転ナデ 外：ヘラキリ不調整	密　白色粒多。5㎜以下白色礫少	良	N6/ 灰色	30	左回転 歪み著しい
554	68	E-2	110F-4		須恵器	坏身	(11.6)	最大径(13.6)	4.6	回転ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒・石英	良	N6/ 灰色	50	右回転 摩滅
555		E-3	129E-10	包含層	須恵器	坏身	(11.4)	最大径(13.5)	(4.45)	回転ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒	良	7.5Y3/1 オリーブ黒色	30	右回転
556	68	E-3	129C-10	撹乱	須恵器	坏身	(10.2)	最大径(12.5)	4.2	回転ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒・白色礫	良	内：N7/ 灰白色 外：5PB6/1 青灰色	40	右。重ね焼き痕 外面自然釉
557	68	E-3	129H-8		須恵器	坏身	10.15	最大径12.3	4.5	回転ナデ　内：ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒	良	N6/ 灰色	95	左回転。歪みあり 重ね焼き痕
558		E-2	110G-1		須恵器	坏身	(9.7)	最大径(13.4)	3.2	回転ナデ	密　白色粒。白色礫僅	良	内：10YA5/1 褐灰色 外：2.5Y7/1 灰白色	35	左回転 外面自然釉
559		E-3	129F-10	包含層	須恵器	坏身	(13.2)	最大径(15.9)	(3.85)	回転ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒少。6㎜以下灰白色礫僅	不良	内：5Y5/1 灰白色 外：N3/ 暗灰色	10	左回転？ 摩滅
560		E-3	129H-9	包含層	須恵器	坏身	(11.9)	最大径(13.8)	(4.1)	回転ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒。白色礫少	不良	N6/　灰色	25	右回転 摩滅
561		E-3	129F-9		須恵器	坏身	(12.5)	最大径(14.8)	4.05	回転ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒。白色礫僅	不良	内：5Y8/1 灰白色 外：N6/ 灰色	40	右回転 摩滅
562		E-3	110E-3	包含層	須恵器	坏身	(11.6)	最大径(13.6)	(3.2)	回転ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒。白色礫僅	良	N5/ 灰色	20	左回転？
563		A-1	150E-2		須恵器	坏身	(12.1)	最大径(14.4)	(2.8)	回転ナデ　内：ナデ 外：調整不明	密　白色粒少。5㎜以下白色礫僅	不良	内：2.5Y7/1 灰白色 外：N6/ 灰色	15	右回転。摩滅 歪みあり
564		E-2	109J-10	SP6213	須恵器	坏身	(12.6)	最大径(14.4)	(2.3)	回転ナデ	密　白色粒	良	5Y7/1 灰白色	5	歪みあり
565	68	E-3	130E-1	包含層	須恵器	坏身	11.65	最大径(13.9)	3.3	回転ナデ　内：ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒。7㎜以下白色礫少	良	N6/　灰色	60	右回転 外面薄く降灰
566		E-3	149B-8	包含層	須恵器	坏身	(11.6)	最大径(13.8)	4.5	回転ナデ　内：ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒・白色礫	やや良	5Y6/ 灰色	30	左回転。歪み著しい。外面薄く降灰
567	73	A-1	170A-3		須恵器	坏身	(10.75)	最大径(13.0)	(4.0)	回転ナデ　内：ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒子。白色小礫僅少	良	内：N6/ 灰色 外：2.5Y6/1 黄灰色	25	右回転。外面薄く降灰。歪み著しい。坏蓋と熔着
568		E-1	110D-3		須恵器	坏身	(11.7)	最大径(14.0)	(3.65)	回転ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒。白色礫少	良	N6/ 灰色	20	右回転。歪みあり 外面薄く降灰
569	68	E-2	110G-2		須恵器	坏身	(11.3)	最大径(13.9)	4.1	回転ナデ　内：ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒少。6㎜以下灰白色礫僅	良	N6/ 灰色	40	右回転 歪みあり
570	68	A-1	150E-3		須恵器	坏身	(10.9)	最大径(13.2)	(10.9)	回転ナデ　内：ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒・7㎜以下白色礫	良	N7/ 灰白色	80	右回転。重ね焼き痕。二次焼成？
571		E-3	129G-10	包含層	須恵器	坏身	(11.6)	最大径(14.1)	(4.0)	回転ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒	やや良	7.5Y6/1 灰色	40	右回転
572		E-3	129I-9	包含層	須恵器	坏身	(12.2)	最大径(14.0)	(3.9)	回転ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒、7㎜以下白色礫	良	内：N6/ 灰色 外：5Y6/1 灰色	40	右回転。外面降灰・土器片付着
573	54	E-2		SP6530	須恵器	坏身	10.45	最大径12.6	3.8	回転ナデ　内：ナデ 外：ヘラケズリ	密　白色粒、5㎜以下白色礫	やや良	内：2.5Y7/1 灰白色 外：N5/ 灰色	80	右回転
574		E-2	109I-10		須恵器	坏身	(12.0)	最大径(13.8)	3.4	回転ナデ　内：ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色・褐色粒、白色礫	良	内：5PB5/1 青灰色 外：N6/ 灰色	20	右回転。歪みあり 外面自然釉
575		E-2	109J-10	SP6213	須恵器	坏身	(11.1)	最大径(13.3)	(2.4)	回転ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色・灰色粒多。白色礫少	不良	2.5Y8/1 灰白色	10	回転方向不明 摩滅
576		A-1	150E-3		須恵器	坏身	(10.1)	最大径(12.0)	(3.3)	回転ナデ　内：ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒。2㎜白色礫僅	やや良	内：N6/ 灰色 外：N7/ 灰白色		右回転 歪み著しい
577		E-2	130A-4		須恵器	坏身	(11.5)		(3.4)	回転ナデ　内：ナデ 外：回転ヘラケズリ	密	良	N6/ 灰色	20	

第 10 表　出土土器観察表

挿図No.	図版No.	区	グリッド	遺構層位	種別	器種名	口径	底径	器高	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考
578	68	E-3	129G-9	SR9137	須恵器	坏身	11.7	最大径(13.6)	3.95	回転ナデ　内：ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒多。6㎜以下灰色礫・4㎜以下褐色礫僅	やや良	7.5YR5/2 灰褐色	80	右回転 摩滅
579		E-3	129E-10	包含層	須恵器	坏身	(10.6)	最大径(13.2)	(3.45)	回転ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒・白色礫	良	N5/ 灰色	25	左回転？重ね焼き痕。外面薄く降灰
580	68・71	E-2	110G-2		須恵器	坏身	10.15	最大径(12.2)	3.55	回転ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒多。白色礫少	良	N6/ 灰色	95	右回転 ヘラ記号
581		E-2	109J-10	SP6213	須恵器	坏身		最大径(13.6)	(2.9)	回転ナデ　内：ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒多	やや良	内：5B5/1 青灰色 N6/ 灰色	20	焼きぶくれ
582	69	E-3	129F-10	包含層	須恵器	坏身	(11.5)	最大径(14.1)	3.8	回転ナデ　内：ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒・白色礫。5㎜以下灰色礫少	良	5B5/1 青灰色	40	右回転
583		A-1	170A-3		須恵器	坏身	(11.2)	最大径(13.6)	(3.9)	回転ナデ　内：ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒多。4㎜以下白色礫少	良	N6/ 灰色	15	右回転
584	69	E-2	110E-1		須恵器	坏身	11.25	最大径(13.6)	4.25	回転ナデ　内：ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒・白色礫	良	5Y6/1 灰色	55	右回転 歪み著しい
585	69・71	E-3	129F-10	包含層	須恵器	坏身	(11.15)	最大径(13.4)	3.8	回転ナデ　内：ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒・2㎜以下白色礫	良	N7/ 灰白色	70	右回転。歪みあり 外面薄く降灰 ヘラ記号
586		E-3	129F-10	包含層	須恵器	坏身	(10.8)	最大径(14.5)	4.1		密　白色粒・4㎜以下灰色礫	不良	5Y7/1 灰白色	80	左回転 摩滅
587	69	E-2	109I-10		須恵器	坏身	(11.75)	最大径(13.4)	4.45	回転ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒・5㎜以下白色礫少	不良	N7/ 灰白色	60	回転方向不明 摩滅
588	69	E-3	129G-9	包含層	須恵器	坏身	(10.5)	最大径(12.5)	3.15	回転ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒	良	5PB4/1 暗青灰色	95	右回転 歪みあり
589	69	E-3		SR9126	須恵器	坏身	(9.7)	最大径(12.2)	3.1	回転ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒	良	N7/ 灰白色	50	右回転。ヘラ記号 歪みあり
590	69	E-3	130D-4		須恵器	坏身	(9.4)	最大径(11.8)	(3.5)	回転ナデ　内：ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　5㎜以下白色礫僅	良	5Y7/1 灰白色	45	左回転
591		E-1	110F-7		須恵器	坏身	(10.6)	最大径(11.7)	(2.1)	回転ナデ	密　白色粒多。白色礫僅	良	N7/ 灰白色	5	右回転
592		A-1	170A-3		須恵器	坏身	(11.3)	最大径(13.8)	(3.3)	回転ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒多。4㎜以下白色礫少	良	N5/ 灰色	20	
593		E-1	110I-7		須恵器	坏身		最大径(13.2)		回転ナデ	密　白色粒、3㎜以下白色礫	良	N6/ 灰色	5	右回転
594		A-1	150D-2		須恵器	坏身	(9.4)	最大径(11.4)	(2.7)	回転ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒	良	5Y6/1 灰色	5	右回転
595	69	E-3	129F-10	包含層	須恵器	坏身	(9.0)	最大径(11.6)	4.2	回転ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒	やや良	内：5PB5/1 青灰色 外：N6/ 灰色	80	右回転 歪みあり
596	69	E-2	110G-2		須恵器	坏身	10.55	最大径12.4	4.1	回転ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒多。石英・4㎜以下白色礫少	良	N6/ 灰色	95	回転方向不明 摩滅
597		E-3		9478	須恵器	坏身	9.7	最大径(11.7)	3.65	回転ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色・灰色粒	やや良	N6/ 灰色	70	右回転。歪みあり 摩滅
598	69	E-3	129E-9	SR8280	須恵器	坏身	(9.6)	最大径(12.2)	(9.6)	回転ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒	良	5Y7/1 灰白色	40	歪みあり 外面自然釉
599	70	E-3	129B-9		須恵器	坏身	(10.4)	最大径(13.4)	(3.4)	回転ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒。灰色礫少	良	内：5P6/1 青灰色 外：N6/ 灰色	25	右回転。歪みあり 外面自然釉
600	70・71	E-3	109E-9	包含層	須恵器	坏身	9.35	最大径(12.0)	4.2	回転ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒	良	内：5PB4/1 暗青灰色 外：N3/ 暗灰色	10	左回転。歪みあり ヘラ記号
601		E-3	129E-10	包含層	須恵器	坏身	(9.0)	最大径(11.2)	3.8	回転ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒少	良	N7/ 灰白色	20	左回転
602	70	E-3	129E-10	包含層	須恵器	坏身	(11.4)	最大径(11.4)	4.3	回転ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒少	良	N6/ 灰色	95	右回転 外面薄く降灰
603	70	E-3	129G-9	包含層	須恵器	坏身	10.3	最大径(12.4)	4.55	回転ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒	良	N7/ 灰白色	100	右回転 歪みあり
604		A-1	150E-3		須恵器	坏身	(8.5)	最大径(11.2)	(3.9)	回転ナデ　内：ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒・白色礫	良	N7/ 灰白色	30	右回転 外面薄く降灰
605	70・71	E-2	109J-10	SR6345	須恵器	坏身	(8.6)	最大径(10.6)	3.55	回転ナデ　内：ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒	やや良	10Y6/1 灰白色	50	右回転 ヘラ記号
606		A-1	150E-2		須恵器	坏身	(10.2)	最大径(12.0)	(2.7)	回転ナデ	密　白色粒	良	N5/ 灰色	10	右回転
607		E-2	110I-5		須恵器	坏身	(8.65)	最大径(10.6)	3.7	回転ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒・灰色粒・4㎜以下白色小礫	やや良	N6/ 灰色	40	回転方向不明。歪みあり
608	69	E-5	111E-1	6層	須恵器	坏身	(9.6)	最大径(11.3)	(4.0)	回転ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色・灰色粒。7㎜以下白色礫僅	やや良	内：N6/ 灰色 外：10Y6/1 灰色	75	右回転。歪みあり 外面薄く降灰
609		E-2	130A-5		須恵器	坏身	(9.3)	最大径(11.1)	(2.65)	回転ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色・灰色粒	良	5PB5/1 青灰色	5	回転方向不明 外面自然釉
610	70	E-3	129E-9		須恵器	坏身	(8.9)	最大径(11.0)	3.75	回転ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒	良	内：N6/ 灰色 外：5B5/1 青灰色		右回転 ヘラ記号
611		E-3	130D-3	包含層	須恵器	坏身	(7.9)	最大径(10.0)	3.05	回転ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒少。石英僅	良	N5/ 灰色	20	右回転
612	70	E-3	129B-10		須恵器	坏身	8.25	最大径10.4	2.9	回転ナデ　内：ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒少	良	N7/ 灰白色	80	右回転
613	70	E-3	129F-10	包含層	須恵器	坏身	8.95	最大径11.3	3.3	回転ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒	良	5PB6/1 青灰色	95	左回転 歪みあり
614		E-3	129F-9	包含層	須恵器	坏身	(10.05)	最大径(12.6)	(2.45)	回転ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒・3㎜以下白色礫少	良	N6/ 灰色	25	右回転。重ね焼き痕。外面自然釉
615		E-3	129G-9	包含層	須恵器	坏身	(10.0)		1.95	回転ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒、2㎜以下白色礫少	良	内：5PB6/1 青灰色 外：N6/ 灰色	40	右回転 歪み著しい
616	72	A-1	170B-3		須恵器	坏身	(11.25)	最大径13.05	(2.65)	回転ナデ　内：ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒。2㎜以下白色礫、6㎜以下灰色礫少	良	N5/ 灰色	50	右回転 歪み著しい
617		E-3	129B-9		須恵器	坏身	(12.1)	最大径(14.9)	(1.65)	回転ナデ　内：ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒。2㎜以下白色礫僅	良	内：5P6/1 紫灰色 外：5Y6/1 灰色	30	右回転。歪み著しい。外面降灰
618		E-3	130E-2	包含層	須恵器	坏身	(10.75)	最大径(12.7)	(2.55)	回転ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒。灰白色礫僅	良	N6/ 灰色	20	右回転。歪み著しい。重ね焼き痕。外面自然釉
619	71	E-2	110F-1		須恵器	坏	—		—	—	密　白色粒	良	N4/ 灰色	—	ヘラ記号
620		E-3	129D-8		須恵器	坏	—		—	—	密　白色粒	良	N4/ 灰色	—	ヘラ記号

第 10 表　出土土器観察表

挿図No.	図版No.	区	グリッド	遺構層位	種別	器種名	口径	底径	器高	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考
621		E-3		包含層	須恵器	坏	—		—	—				—	ヘラ記号
622	71	E-2			須恵器	坏	—		—	—	密　白色粒	良	N6/ 灰色	—	ヘラ記号
623	74	E-3		包含層	須恵器	高坏蓋	14.5		5.4	回転ナデ　内：ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒・石英	不良	7.5YR8/2 灰白色	60	摘部径：2.4 ㎝
624	74	E-1		包含層	須恵器	高坏蓋	(13.2)		(5.4)	回転ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒多。8 ㎜以下白色礫	良	5Y6/1 灰色	55	右回転 外面自然釉
625		E-3			須恵器	高坏蓋	14.1		(4.2)	調整不明	密　白色粒。5 ㎜以下白色礫少	不良	5Y7/1 灰白色	60	回転方向不明 歪みあり。摩滅
626	74	E-3			須恵器	高坏蓋	(14.35)		5.75	回転ナデ　内：ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒・白色礫。5 ㎜白色礫僅	不良	2.5Y7/1 灰白色	70	摘部径：2.9 ㎝ 右回転。摩滅
627		A-1			須恵器	高坏蓋	(14.7)		4.75	回転ナデ　内：ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒。白色粒少	良	5B5/1 青灰色	80	摘み径：2.0 ㎝ 右回転。重ね焼き痕。歪み著しい
628		E-3	129F-10	包含層	須恵器	坏身	(12.0)	最大径(14.8)	(3.8)	回転ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒、6 ㎜以下白色礫	良	5B5/1 青灰色	30	左回転 歪み著しい
629	50	E-3		SR9126	須恵器	高坏	12.8	最大径15.1	4.2	回転ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒・6 ㎜以下灰色礫	良	N6/ 灰色	坏部90	右回転 3 方透かし
630		E-1		包含層	須恵器	高坏	(13.45)	最大径(16.2)	(3.85)	回転ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒・白色礫	良	N7/ 灰白色	坏部40	右回転。歪み著しい。重ね焼き痕 外面自然釉
631	74	E-3		包含層	須恵器	高坏	(11.8)		(4.5)	回転ナデ　外：沈線	密　白色粒。白色礫僅	良	N6/ 灰色	坏部70	右回転 内外面薄く降灰
632		E-3		包含層	須恵器	高坏	(12.2)	最大径(14.6)	(4.35)	回転ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒・白色礫	良	2.5Y8/1 灰白色	坏部30	左回転 歪みあり
633		E-2			須恵器	高坏	—		—	回転ナデ　外：波状文	密　白色粒・白色礫	良	N5/ 灰色	—	
634	74	E-3		包含層	須恵器	高坏		(16.2)	(14.9)	回転ナデ　外：沈線	密　白色粒。5 ㎜以下白色礫少	良	N7/ 灰白色	脚部40	右回転 3 方透かし
635		E-3		包含層	須恵器	高坏		(13.6)	(8.8)	回転ナデ　外：沈線	密　白色粒多。白色礫僅	良	N6/ 灰色	脚部30	右回転 3 方透かし。歪みあり。外面自然釉
637		E-3		SR9128	須恵器	高坏		(13.4)	(8.0)	回転ナデ　外：沈線	密　白色粒多。5 ㎜以下白色礫少	良	N7/ 灰白色	脚部25	右回転 3 方透かし
636	74	E-3		包含層	須恵器	高坏		(13.3)	(7.6)	回転ナデ　外：沈線	密　白色粒・白色礫	良	N7/ 灰白色	脚部20	右回転 3 方透かし。歪みあり。外面自然釉
638	74	E-3		包含層	須恵器	高坏		(11.4)	(6.3)	回転ナデ　外：沈線	密　白色粒多。白色小礫僅	良	N5/ 灰色	脚部90	右回転 2 方透かし
639	74	E-3		包含層	須恵器	高坏		(16.3)	(14.9)	回転ナデ　外：沈線	密　白色粒、4 ㎜以下灰色礫	不良	N7/ 灰白色	脚部60	回転方向不明 3 方透かし。摩滅
640		E-3		包含層	須恵器	高坏		(10.0)	84.6)	回転ナデ　外：沈線	密　白色粒。白色礫僅	良	5Y6/1 灰色	脚部20	右回転。3 方透かし。歪み著しい外面薄く降灰
641		E-3		包含層	須恵器	高坏		(14.8)	(7.6)	回転ナデ　外：沈線	密　白色粒多。7 ㎜以下白色礫僅	良	5Y6/1 灰色	脚部15	右回転 3 方透かし
642	75	E-3		包含層	須恵器	高坏		10.1	(8.4)	回転ナデ　外：沈線	密　白色粒	良	7.5Y4/1	脚部70	基部径：2.9 ㎝ 外面自然釉
643	75	E-2			須恵器	高坏		10.3	(11.35)	回転ナデ　外：沈線	密　白色粒。白色礫僅	良	2.5Y6/1 黄灰色	基～脚部 70	基部径：4.1 ㎝ 右回転。脚部内面土器片熔着
644		E-3		包含層	須恵器	高坏		(10.6)	(2.55)	回転ナデ　外：沈線	密　白色粒。白色礫僅	良	2.5Y5/1 黄灰色	脚部15	右回転。歪みあり 外面薄く降灰
645	75	E-2	109J-10	SR6345	須恵器	高坏		(11.9)	(7.8)	回転ナデ	密　白色粒。3 ㎜以下白色礫少	良	N6/ 灰色	脚部80	右回転。歪み著しい。外面薄く降灰
646	75	E-3		包含層	須恵器	高坏		(10.2)	(6.0)	回転ナデ　外：沈線	密　白色粒多	良	5Y6/1 灰色	脚部60	基部径：3.65 ㎝ 右回転
647		E-3		包含層	須恵器	高坏		(12.0)	(8.85)	回転ナデ	密　白色粒。4 ㎜以下白色礫少	良	7.5Y7/1 灰白色	脚部25	右回転。歪みあり 外面薄く降灰
648	75	E-3			須恵器	高坏		(12.6)	(7.7)	回転ナデ	密　白色粒。4 ㎜以下白色礫少	良	7.5Y6/1 灰色	脚部25	右回転。歪みあり 外面薄く降灰
649	75	E-2			須恵器	高坏		(10.5)	(5.6)	回転ナデ	密　白色粒・白色礫	良	N6/ 灰色	脚部30	基部径：(3.7) ㎝ 左回転 歪み著しい
650	76	E-3		包含層	須恵器	高坏		(7.9)	(4.05)	回転ナデ	密　白色粒。5 ㎜以下白色礫少	良	10YR5/2 灰黄褐色	坏 30～脚部90	左回転 歪みあり
651		E-3	129E-10	包含層	須恵器	甕	(12.2)		(4.8)	回転ナデ	密　白色粒。3 ㎜以下白色礫僅	不良	内：2.5Y7/1 灰白色 外：5 Y 7/1 灰白色	口頸部30	右回転 摩滅
652	77	A-1	150E-2		須恵器	甕	-		-	回転ナデ　体部穿孔	密　白色粒	良	N6/ 灰色	頸～体部 15	体部径：(9.0) ㎝ 右回転 外面薄く降灰
653	76	E-2	110E-2		須恵器	盤	(11.1)		7.1		密　白色粒多。2 ㎜以下白色礫	良	N7/ 灰白色	50	右回転 歪み著しい
654	76	E-1	110E-3	包含層	須恵器	盤	(10.3)		5.4	回転ナデ　内：ナデ 外：回転ヘラケズリ・ヘラキリ不調整	密　白色粒多。3 ㎜以下白色礫	良	5Y6/1 灰色	55	右回転 歪み著しい
655	76	E-1	110E-4	包含層	須恵器	盤	(10.8)		(4.8)	回転ナデ　内：ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒少、6 ㎜以下白色礫、3 ㎜以下灰色礫僅	不良	内：2.5Y6/1 黄灰色 外：10YR6/2 灰黄褐色	40	
656		E-1			須恵器	盤	(10.15)		4.7	回転ナデ	密　白色礫多	良	N5/ 灰色	25	
657	76	E-3	129E-9		須恵器	盤	(9.45)		4.35	回転ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒。2 ㎜以下白色礫・石英僅	良	内：2.5Y5/1　外：N6/ 灰色	45	左回転
658		E-3		SR9135	須恵器	盤	(10.4)		(3.6)	回転ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒多	良	N5/ 灰色	10	
660		E-3		包含層	須恵器	高坏				回転ナデ	密　白色粒。白色粒少	良	N6/ 灰色	脚部50	右回転 円形 3 方透かし

第 10 表　出土土器観察表

挿図No.	図版No.	区	グリッド	遺構層位	種別	器種名	口径	底径	器高	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考
661	75	E-4			須恵器	陶臼	(140.)	(9.8)	(11.9)	回転ナデ 外：回転ヘラケズリ・ヘラナデ	密　白色粒・白色礫多	良	5Y6/1 灰色	30	右回転 内面剥離
662		E-3	129H-9	包含層	須恵器	陶臼	—	(9.3)	(9.4)	回転ナデ　内：ナデ 外：ヘラケズリ	密　白色粒・白色礫	良	内：10BG5/1 青灰色 外：10YR5/1 褐灰色	30	右回転 外面自然釉
663		E-3	129H-9		須恵器	壷蓋	(8.4)		1.75	回転ナデ	密　白色粒子。3㎜以下灰色小礫僅少	不良	N5/ 灰色	60	最大径：11.7㎝ 回転方向不明 摩滅
664	76	E-4	90I-8	包含層	須恵器	壷蓋	8.4		2.7	回転ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒	良	N6/ 灰色	90	最大径：10.7㎝ 右回転
665	76	E-4	110A-8	包含層	須恵器	壷蓋	(6.4)		2.7	回転ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒。4㎜以下白色礫僅	良	2.5YR7/1 灰白色	40	最大径：(10.6)㎝ 右回転
666		E-2	109I-10		須恵器	壷蓋	(9.3)		(2.25)	回転ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒	良	N7/ 灰白色	15	最大径：(11.5)㎝ 左回転 外面自然釉
667		E-2	109J-9		須恵器	壷蓋	(9.4)		(1.35)	回転ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒	良	N6/ 灰色	10	最大径：(11.7)㎝ 回転方向
668	76	E-1	110E-4		須恵器	壷蓋	-		(5.2)	回転ナデ　天井部内面：ナデ	密　白色粒多。10㎜以下白色礫	良	5Y6/ 灰色	体 25～摘部 100	摘部径：2.25㎝ 右回転 歪みあり
669		E-2	109J-9		須恵器	短頸壷	(11.75)	-	(5.5)	回転ナデ	密　白色粒、4㎜以下白色礫少	良	2.5Y6/1 黄灰色	口 5～体部 20	左回転？ 歪み有り
670	71	E-3	130B-1	包含層	須恵器	まり	-		-	回転ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒。2㎜以下白色礫少	良	N6/ 灰色	10	回転方向不明 内外面薄く降灰
671		E-3	129E-7		須恵器	短頸壷	(8.1)		(6.2)	回転ナデ	密　白色粒。6㎜以下白色礫少	良	内：N8/ 灰白色 外：N6/ 灰色	口～体部 45	外面自然釉
672	78	A-1	150D-1		須恵器	脚付短頸壷	(6.5)		(10.3)	回転ナデ 外：波状文・回転ヘラケズリ	密　白色粒多。3㎜以下白色礫僅	良	N6/ 灰色	口 20～底部 90	重ね焼き痕 外面自然釉
673	78	E-3	129I-9		須恵器	壷	-		(13.0)	回転ナデ　内：ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒多。	良	7.5Y7/1 灰白色	頸 20～底部 100	頸部径：6.5㎝ 体部径：13.9㎝ 左回転。粘土熔着
674	77	E-3	129I-9	包含層	須恵器	短頸壷	(7.5)		9.5	回転ナデ　内：ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒。5㎜以下白色礫・石英少	良	N7/ 灰白色	60	頸部径：7.7㎝ 右回転。摩滅気味
676		E-1	110D-3	包含層	須恵器	瓶類		—	—	回転ナデ 外：回転ヘラケズリ	密　白色粒・4㎜以下白色礫	不良	N6/ 灰色	体部 30	摩滅
677		E-2	110J-5	包含層	須恵器	壷	-		-	回転ナデ 外：刺突文・回転ヘラケズリ	密　白色粒	良	内：5B5/1 青灰色 外：N5/ 灰色	体部 15	左回転
678	76	A-1	170A-3		須恵器	壷	-		(3.0)	回転ナデ　内：ナデ 外：櫛目	密　白色粒多	良	N6/ 灰色	底部 75	回転方向不明
679	78	E-3	130E-2	包含層	須恵器	甕	(15.95)		(26.5)	回転ナデ　体部：タタキ	密　白色粒。1㎝以下白色礫少	良	N5/ 灰色	口 70～底部 95	体部径：(31.7)㎝ 頸部径：(12.8)㎝ 右回転 歪み著しい
680	76	E-3	130F-1	包含層	須恵器	瓶類	(11.95)		(4.95)	回転ナデ	密　白色粒多。白色礫・石英僅	不良	N4/ 灰色	口縁～頸部 90	頸部径：(10.1)㎝ 右回転。歪みあり 摩滅
681	77	E-3	129F-10		須恵器	提瓶	6.7		(4.8)	回転ナデ	密　白色・褐色粒。白色礫僅	不良	7.5YR7/8 黄橙色	口頸部 70	摩滅
682	77	E-3	129F-10	包含層	須恵器	瓶類	(9.2)		(9.15)	回転ナデ 外：カキ目	密　白色粒。4㎜以下白色礫少	良	N7/ 灰白色	口縁～体部 90	右回転 歪み著しい 外面自然釉
683		E-2	130A-5		須恵器	広口壷	-		-	回転ナデ 外：カキ目	密　白色・灰色粒	良	N5/ 灰色	頸部 30	頸部径：(8.3)㎝ 右回転
684		A-1	150E-4		須恵器	瓶類	—		—	回転ナデ 外：カキ目	密　白色粒	良	5Y7/1 灰白色	—	右回転
686	77	E-3	129I-9		須恵器	提瓶	(11.45)		(25.05)	回転ナデ 外：カキ目	密　白色粒・白色礫	良	2.5Y7/1 灰白色	口 45～体部 60	右回転 歪み著しい 外面自然釉
687		E-2	109H-8		須恵器	平瓶	(11.8)		(21.7)	回転ナデ　内：ナデ 外：タタキ・ヘラケズリ	密　白色粒。5㎜以下白色礫少	良	2.5YR5/3 にぶい赤褐色	30	右回転？ 環状把手
688		E-3	129F-10	包含層	須恵器	平瓶	-		(12.3)	回転ナデ　内：ナデ 外面：タタキ後ナデ・ヘラナデ	密　白色粒	良	内：5YR5/4 にぶい赤褐色 外：N5/ 灰色	体 10～底部 100	体部径：(22.1)㎝ 回転方向不明
689	73	E-1	110E-3	包含層	須恵器	横瓶	—		(23.75)	回転ナデ 外：タタキ・ナデ	密　白色粒・5㎜以下白色礫	良	5Y7/1 灰白色	口 90～体部 40	最大径：(26.35)㎝ 頸部径：(10.15)㎝ 左回転。歪み著しい。土器片熔着
690	79	E-3	129G-9		須恵器	横瓶	(10.05)		(27.25)	回転ナデ 外：タタキ後ナデ・ナデ	密　白色粒。4㎜以下白色礫少	良	2.5YR5/3 にぶい赤褐色	口 100～体部 60	右回転 歪み著しい 外面薄く降灰
691	79	E-3	129G-9		須恵器	横瓶			(20.5)	回転ナデ 外：タタキ後ナデ・ナデ	密　白色粒、1㎝以下白色礫僅	良	2.5YR5/3 にぶい赤褐色	体部 60	立位焼成 外面自然釉
692		E-3	129F-10		須恵器	甕	(19.1)		(9.8)	回転ナデ 外：カキ目	密　白色粒。3㎜以下白色礫少	良	内：N7/ 灰白色 外：7.5Y7/1 灰白色	口～肩部 40	左回転 内外面自然釉
693	78	E-3	130E-1		須恵器	甕	17.6		(14.15)	回転ナデ　内：当て具 外：タタキ	密　白色粒多。3㎜白色礫少	やや不良	5Y5/1 灰色	口 95～体部 30	右回転 摩滅気味
694		E-2	110G-2		須恵器	甕	-		-	回転ナデ 外：刺突文	密　白色粒。4㎜以下白色礫少	良	2.5Y7/1 灰白色	口縁部 5	左回転
695		E-3	129I-10		須恵器	甕	-		(4.6)	回転ナデ 外：波状文	密　白色粒多	良	N6/ 灰色	口縁部 10	回転方向不明
696		E-3	129B-9		須恵器	甕	(33.6)		(5.4)	回転ナデ	密　白色粒多。3㎜以下白色礫	良	内：2.5GY5/ オリーブ灰色 外：N7/ 灰白色	口頸部 10	回転方向不明 外面自然釉
697		E-2	110H-3		須恵器	甕	-		-	回転ナデ 外：タタキ後カキ目	密　白色粒。5㎜以下白色礫少	良	N3/ 暗灰色	頸部 15	右回転 外面自然釉

第 10 表　出土土器観察表

挿図 No.	図版 No.	区	グリッド	遺構 層位	種別	器種名	口径	底径	器高	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存率 (%)	備考
698		E-3	129D-9		須恵器	甕	(17.7)		(5.35)	回転ナデ 内：当て具	密　白色粒。5 ㎜以下白色礫少	不良	5Y7/1 灰白色	口～肩部 30	頸部径：(14.5) cm 摩滅
699		E-3	129D-9		須恵器	甕	(14.6)		(7.15)	回転ナデ　内：当て具 外：タタキ	密　白色粒。4 ㎜以下白色礫少	不良	5Y7/1 灰白色	口～肩部 50	頸部径：(7.15) cm 摩滅
700	80	E-3	129H-9	包含層	須恵器	甕	(48.8)		98.85	回転ナデ　体部内：当て具 体部外：タタキ	密　白色礫、5 ㎜以下白色礫	良	N6/ 灰色	口 5～底部 60	頸部径：(37.8) cm 体部径：(82.9) cm 焼台の痕跡
701	71	E-2	110G-7		須恵器	甑				ナデ　内：当て具		やや不良	2.5Y7/1 灰白色	把手部 100	
702	71	E-3	129E-9	包含層	須恵器	甑				ナデ	密　2 ㎝以下灰色礫少	やや不良	5Y7/1 灰白色	把手部 100	
703	71	E-3	129D-9	包含層	須恵器	甑				ナデ	密　白色・橙色粒	良	10YR7/3 にぶい黄橙色	把手部 100	器面剥離
704	73	E-3	129E-10	包含層	須恵器	坏蓋・坏身・瓶類									
705	72	E-3	129E-9		須恵器	坏蓋・坏身・壷甕類				回転ナデ・ナデ	密　坏身：灰色礫少 壷甕類：灰色粒、3 ㎜以下灰色礫	良	坏身 内 :N7/0 灰色 外 :N6/0 灰色 坏蓋 外 :N6/0 灰色 壷甕 5Y7/1 灰白色	―	熔着 (3 点)
706	72	E-1		表採	須恵器	坏身・壷類				坏身：回転ナデ・ナデ 壷：回転ナデ	密　白色粒。5 ㎜以下白色礫少	良	坏身：10Y6/1 灰色 壷：7.5Y7/1 灰白色		坏身：左回転 熔着
707	73	E-3	130E-1	包含層	須恵器	坏身・壷甕類				回転ナデ・ナデ・タタキ	密　坏身：灰白色粒。3 ㎜以下灰白色礫少 壷甕類：灰白色粒。4 ㎜以下灰白色礫少	良	内：坏身 N6/0 灰 壷甕 N7/0 灰白 外：坏身 7.5Y7/1 灰白 壷甕 N5/0 灰	―	熔着 (2 点)

第 11 表　出土鞴（羽口）観察表

挿図 No.	図版 No.	地区	グリッド	遺構・層位	全長 (cm)	最大幅 (cm)	厚み (cm)	内径 (cm)	外径 (cm)	備考
719	81	E-3	129J-9	包含層	(3.60)	(3.20)	(1.60)	(2.80)	(6.20)	
720	81	E-3	129E-10	包含層	(4.35)	(3.90)	(1.80)	(2.40)	(6.80)	

第 12 表　出土土錘観察表

挿図 No.	図版 No.	地区	グリッド	遺構　層位	全長 (cm)	最大幅 (cm)	内径 (cm)	重量 (g)	備考
709		E-2	129C-9	SP9213(SH322)	(3.00)	(1.40)	(0.60)		
710	81	E-4	110C-9	6 層	4.00	1.60	0.50	7	
711		E-3	129C-9	SP9218(SH322)	(5.30)	(1.80)	(0.50)	(12)	
712		E-3	129C-9	SR9526	(4.80)	(2.40)	(0.60 ～ 0.70)	26	
713		E-4	110C-8	7 層	(4.80)	(1.60)	(0.90)	(8)	
714	81	E-3	129C-9		(6.95)	(2.30)	(.0.5)	(32)	

第 13 表　出土用途不明土製品観察表

挿図 No.	図版 No.	地区	グリッド	遺構　層位	全長 (cm)	最大幅 (cm)	厚み (cm)	内径 (cm)	備考
708		E-2	130A-1		(2.30)	(2.30)	(1.25)	孔径 (0.40)	
721	81	E-2	110G-2		(7.90)	(5.70)	(1.45)		
1351	107	E-2		SD937	(9.0)	(11.90)	1.2		『寺家前遺跡Ⅰ』に掲載

第 14 表　出土紡錘車観察表

挿図 No.	図版 No.	地区	グリッド	遺構　層位	全長 (cm)	最大幅(cm)	厚み (cm)	内径 (cm)	重量 (g)	備考
715	81	E-3	130C-1	SB308 床面	(3.50)	(3.50)	(1.60)	(0.70)	(18)	
716	81	E-3	129E-9	包含層	(4.20)	(4.20)	(1.60)	(0.90 ～ 1.00)	(29)	
717	81	E-3	129G-9	SR8280	(4.45)	(4.45)	(1.70)	(0.35 ～ 0.50)	(23)	
718	81	E-2	130B-1		(5.40)	(5.40)	(3.40)	(0.90)	(57)	

第 15 表　出土自然遺物一覧表

遺物番号	区	グリッド	遺構 層位	遺物	数量	備考
N-5	E-1		7 層	種子	2	
N-6	E-1		6 層	種子	2	
N-7	E-1	110H-7		種子	1	
N-8	E-1	110G-8		種子	8	
N-10	E-1	110G-7		種子	3	
N-12	E-1		6 層	種子	3	
N-13	E-1	110F-9	7 層	種子	1	
N-14	E-1	110F-8		種子	2	
N-15	E-1	110G-8	7 層	種子	20	
N-17	E-1	110H-6	6 層	種子	13	
N-21	E-1		9 層	種子	2	
N-24	E-1	110-6	6 層	種子	29	
N-27	E-1	110G-8	水田域　6 層	種子	5	
N-28	E-1	110H-7	水田域　6 層	種子	6	
N-31	E-1	110H-6		種子	1	
N-33	E-1	110H-8		種子	2	
N-34	E-1	110G-8		種子	8	
N-38	E-1	110H-8		種子	1	
N-39	E-1	110I-7		種子	3	
N-40	E-1	110H-7		種子	6	
N-42	E-1	110H-7		種子	3	
N-43	E-1	110G-9		種子	1	
N-44	E-1	110G-7		種子	4	
N-45	E-1	110F-9		種子	3	
N-46	E-1	110F-8		種子	14	
N-47	E-1	110G-8	6 層	種子	24	
N-48	E-1	110G-9		種子	20	
N-49	E-1	110G-9		種子	29	
N-53	E-1	110G-7		種子	2	
N-59	E-1	110G-8	6 層	種子	1	
N-61	E-1	110F-9	6 層	種子	2	
N-62	E-1	110I-7	7 層	種子	13	
N-68	E-1	110E-8		種子	5	
N-71	E-1	110D-4	6・7 層境	種子	1	
N-105	E-1	110H-7	6・7 層	種子	1	
N-112	E-1	110F-8	6・7 層	種子	2	
N-113	E-1	110H-7	6・7 層	種子	6	
N-114	E-1	110H-7	6・7 層	種子	5	
N-116	E-1	110H-7	6・7 層	種子	6	
N-117	E-1	110H-7	6・7 層	種子	3	
N-118	E-1	110G-8	6・7 層	種子	4	
N-138	E-2	109J-8 S	撹乱	種子	5	
N-141	E-2	110E-1		種子	1	
N-143	E-2	110G-5		種子	1	
N-144	E-2	109J-9		種子	1	
N-146	E-2	109I-7		種子	1	
N-169	E-2	110J-5		種子	1	
N-173	E-2	110G-1		貝	1	
N-186	E-2	110J-6		種子	1	
N-187	E-2	110J-5		種子	1	
N-188	E-2	130B-3		種子	1	
N-190	E-3	129G-8		瓢箪	1	
N-191	E-3	129G-8		種子	1	
N-192	E-3	130E-2		種子	1	
N-193	E-3	130G-2		種子	1	
N-194	E-3	130G-2		種子	2	
N-195	E-3	130G-1		種子	1	
N-196	E-3	130H-2		種子	1	
N-198	E-3	129I-10		種子	1	
N-199	E-3	129I-10			1	
N-205	E-3	129I-10		種子	1	
N-206	E-3	130F-2		種子	1	
N-207	E-3	130F-2		種子	2	
N-208	E-3	129H-10		種子	1	
N-209	E-3	129I-10		種子	1	
N-211	E-3	129G-10		種子	4	
N-212	E-3	129H-10		種子	2	
N-213	E-3	129G-10		種子	多数	

遺物番号	区	グリッド	遺構 層位	遺物	数量	備考
N-220	E-3	130E-3		種子	4	
N-221	E-3	129G-10	溝	種子	多数	
N-229	E-3	130G-1		種子	1	
N-231	E-3	130G-1		種子	1	
N-235	E-3	130F-1		種子	1	
N-236	E-3	130G-1		種子	1	
N-237	E-3	130D-3		種子	1	
N-240	E-3	129J-9		種子	2	
N-241	E-3	129J-9		種子	1	
N-242	E-3	130C-3		瓢箪	1	
N-243	E-3	130F-2		種子	1	
N-244	E-3	110A-8		種子	1	
N-245	E-3	129H-10		種子	1	
N-246	E-3	129H-10		種子	4	
N-247	E-3	130H-1		種子	1	
N-248	E-3	129I-10		種子	1	
N-249	E-3	130H-1		種子	5	
N-250	E-3	129I-10		種子	2	
N-251	E-3	129H-10		種子	3	
N-252	E-3	130H-1		種子	3	
N-253	E-3	129H-10		種子	7	
N-254	E-3	130H-1		種子	1	
N-256	E-3	129H-10		種子	14	
N-257	E-3	130H-1		種子	2	
N-258	E-3	129I-10		種子	1	
N-260	E-3	130H-1		種子	3	
N-262	E-3	130H-1		種子	2	
N-264	E-3	130G-1		種子	1	
N-266	E-3	129H-10		種子	1	
N-267	E-3	130G-1		種子	2	
N-273	E-3	130H-1		種子	1	
N-274	E-3	130G-1		種子	2	
N-333	E-3	130G-2		種子	1	
N-334	E-3	130D-4		種子	2	
N-335	E-3	130D-3		種子	1	
N-343	E-3	129D-10		種子	1	
N-344	E-3	130D-4		種子	1	
N-345	E-3	129E-9		種子	1	
N-346	E-3	129F-9		種子	1	
N-347	E-3	129F-9		種子	1	
N-348	E-3	129H-10		種子	2	
N-351	E-3	130G-1		種子	1	
N-353	E-3	129I-10		種子	1	
N-355	E-3	129F-10		種子	1	
N-356	E-3	129G-10		種子	1	
N-357	E-3	129I-9		種子	2	
N-358	E-3	129G-10		種子	13	
N-359	E-3	129H-10		種子		
N-10001	E-4	110C-6		種子	1	
N-10002	E-4	110C-7		種子	1	
N-10003	E-4	110E-10		種子	1	
N-10005	E-4	110A-8		種子	1	
N-10006	E-4	110B-9		種子	1	
N-10007	E-4	111C-1 西側	6 層	種子	1	
N-10009	E-4	110E-10		種子	1	
N-10010	E-4	110D-10	6 層	種子	2	
N-10011	E-4	110B-6		種子	1	
N-10012	E-4	110C-7		種子	1	
N-10013	E-4	110C-8		種子	2	
N-10014	E-4	110A-7	6 層	種子	1	
N-10015	E-4	110C-8		種子	1	
N-10016	E-4	110C-9		種子	1	
N-10017	E-4	110E-9	6 層	炭化物	1	
N-10018	E-4	110C-8		種子	1	
N-10020	E-4	110D-10	6 層	種子	1	
N-10021	E-4	111D-1	6 層	種子	1	
N-10022	E-4	110A-8	6 層	種子	1	
N-10024	E-4	110A-9	6 層	種子	1	

第 15 表　出土自然遺物一覧表

遺物番号	区	グリッド	遺構 層位	遺物	数量	備考
N-214	E-3	129H-10		種子	多数	
N-215	E-3	130H-1		種子	2	
N-216	E-3	129I-10		種子	2	
N-217	E-3	130G-1		種子	2	
N-10030	E-4	111D-1		種子	2	
N-10031	E-4	110A-8		種子	1	
N-10032	E-4	110C-9		種子	1	
N-10033	E-4	111D-1		種子	1	
N-10034	E-4	110C-8		種子	4	
N-10035	E-4	110C-10		種子	2	
N-10036	E-4	110D-8		種子	1	
N-10037	E-4	110C-8		種子	2	
N-10038	E-4	110D-9		種子	4	
N-10039	E-4	111C-1		種子	1	
N-10040	E-4	110D-7		種子	1	
N-10041	E-4	110B-7		種子	1	
N-10042	E-4	110B-6		種子	1	
N-10043	E-4	110B-9		種子	1	
N-10044	E-4	110A-9		種子	1	
N-10045	E-4	110A-9		種子	4	
N-10046	E-4	110C-10		種子	2	
N-10047	E-4	110D-9		種子	1	
N-10048	E-4	110C-8		種子	1	
N-10049	E-4	110B-7		種子	1	
N-10050	E-4	110C-8		種子	1	
N-10051	E-4	110A-8		種子	1	
N-10052	E-4	110B-7		種子	1	
N-10053	E-4	110C-9	5 層	種子	1	
N-10054	E-4	90J-8		種子	1	
N-10055	E-4	110B-8		種子	2	
N-10056	E-4	110D-8		種子	1	

遺物番号	区	グリッド	遺構 層位	遺物	数量	備考
N-10025	E-4	90J-7	6 層	種子	2	
N-10026	E-4	110B-9	6 層	種子	1	
N-10027	E-4	110C-10	6 層	種子	1	
N-10028	E-4	110C-10	6 層	種子	2	
N-10061	E-4	110D-8		種子	1	
N-10062	E-4	110A-8	7 層	種子	1	
N-10063	E-4	110E-9		種子	1	
N-10064	E-4	110A-9		種子	2	
N-10069	E-4	110C-7		種子	1	
N-10079	E-4	110C-9 南		種子	1	
N-10081	E-4	110C-8		種子	2	
N-10082	E-4	110C-8		種子	1	
N-10083	E-4	110E-9		種子	1	
N-10092	E-4	110E-10		種子	4	
N-10095	E-4	110D-8		種子	1	
N-10108	E-4	111E-1	5 層	種子	1	
N-1	C-1	131C-4N			1	
N-2	C-1	131B-4S			1	
N-3	C-1	131B-5S			2	
N-4	C-1	131B-4N			1	
N-5	C-1	131B-4N			1	
N-6	C-1	131B-5S			1	
N-7	C-1	131B-4S			1	
N-8	C-1	131B-5S			1	
N-9	C-1	131B-5S			1	
N-10	C-1	131B-5S			1	
N-21	A-1	150E-3			1	
N-23	A-1	170A-3			1	
N-24	A-1	150D-3			1	
N-25	A-1	150D-3			1	
N-42	A-1	150D-1	溝		1	

第 16 表　出土木製品観察表

遺物番号	区	遺構 層位	時期	遺物名	プレパラート 番号	樹種	最大長 （cm）	最大幅 （cm）	厚み （cm）
W-6	E-1		不明	杭	14160	スギ	19.8	5.2	3.7
W-8-1	E-1	排水溝	不明	芯持ち　丸太材	14161	ヒサカキ	13.8	3.8	3.0
W-8-2	E-1	排水溝	不明	芯持ち　丸太材	14162	アカマツ	13.8	3.8	3.0
W-9	E-1	SE105	近世	木片	14163	アカマツ	16.8	1.5	0.2
W-10-1	E-1	SE91	近世	①板状木製品　用途不明 ②杭状木製品	14164	スギ	50.0	3.8	4.0
W-10-2	E-1	SE91	近世	①板状木製品　用途不明 ②杭状木製品	14165	スギ	50.0	3.8	4.0
W-11-1	E-1	SE105	近世	板状木製品＋木片	14166	クリ	39.5	3.1	0.7
W-11-2	E-1	SE105	近世	板状木製品＋木片	14167	コナラ節	39.5	3.1	0.7
W-12	E-1	SE106	近世	板状木製品	14168	クロマツ	19.5	3.7	0.3
W-15	E-1	SE103	近世	板状木製品	14169	スギ	12.9	14.6	2.5
W-18	E-1	排水溝	不明	木片	14170	クマノミズキ	10.3	2.3	1.0
W-18	E-1	排水溝	不明	木片	14171	コナラ節	10.3	2.3	1.0
W-20	E-1	SX164	近世	杭（棒状木製品）	14172	スギ	20.3	2.5	1.6
W-21	E-1	SX205	近世	棒状木製品　用途不明	14173	クリ	66.2	3.5	3.2
W-23	E-1	SX164	近世	棒状木製品　用途不明	14174	クロマツ	20.5	3.6	0.8
W-26	E-1	SX164	近世	板状木製品　他	14175	スギ	37.1	5.7	0.9
W-28	E-1	SX164	近世	柱？	14176	アカマツ	37.5	17.5	14.3
W-34	E-1	SX164	近世	木片	14177	アカマツ	7.6	2.7	1.6
W-35	E-1	SX205	近世	曲物の一部？	14178	ヒノキ	6.7	2.9	0.4
W-36	E-1	SX164	近世	漆と木片	13954	ブナ属	4.7	2.9	0.5
W-38	E-1	SX205	近世	板状木製品	14179	ヒノキ	24.2	4.2	1.5
W-39	E-1	排水溝	不明	板状木製品	14180	スギ	33.8	3.7	2.0
W-41	E-1	SX205	近世	板状木製品　用途不明	14181	スギ	12.8	6.5	0.5
W-42	E-1	SX205	近世	板状木製品　用途不明	14182	スギ	18.5	7.4	1.2
W-44-1	E-1	SX212	近世	芯持ち　丸太材	14183	アカマツ	44.2	4.3	2.5
W-44-2	E-1	SX212	近世	芯持ち　丸太材	14184	クマノミズキ	44.2	4.3	2.5
W-45	E-1	SX118	近世	棒状木製品　芯持ち材	14185	ヒノキ	16.7	3.5	2.4
W-46	E-1	SX205	近世	木片	14186	アカマツ	6.7	2.6	1.1
W-50	E-1	TP08	弥生後期	板状木製品	14187	スギ	100.0	14.5	2.2
W-51-1	E-1	SE212	近世	木片３点	14188	スギ	19.0	2.1	1.8
W-51-2	E-1	SE212	近世	木片３点	14189	クロマツ	19.0	2.1	1.8

第 16 表　出土木製品観察表

遺物番号	区	遺構 層位	時期	遺物名	プレパラート 番号	樹種	最大長 （cm）	最大幅 （cm）	厚み （cm）
W-52	E-1	SX205	近世	木片	14190	イヌマキ属	6.2	1.3	1.0
W-54	E-1	SP150	中世	木片	14191	クリ	11.1	6.8	2.6
W-57	E-1	SP200	近世	①板状木製品 ②杭状木製品	14192	クリ	19.5	5.7	5.0
W-58	E-1	SP241	中～近世	柱根？	14193	ヤマザクラ	25.0	15.0	6.0
W-59	E-1	SP156	中～近世	①柱？②木片	14194	コジイ	25.0	12.3	6.5
W-62	E-1	SP285	中～近世	柱根	14195	クリ	23.5	15.0	14.5
W-64	E-1	SX205	近世	板状木製品	14196	モミ属	71.4	3.1	1.7
W-65	E-1	SX205	近世	？棒状木製品（芯持ち材）	14197	スギ	45.9	2.5	2.0
W-66	E-1	SX205	近世	板状木製品（穴有り）	14198	モミ属	28.5	3.3	1.1
W-67	E-1	SX205	近世	板状木製品	14199	アカマツ	34.9	4.0	1.3
W-68-1	E-1	SX205	近世	板状木製品	14200	ヒノキ	56.5	2.3	1.8
W-69-2	E-1	SX205	近世	板状木製品	14201	ヒノキ	56.5	2.3	1.8
W-69	E-1	SX205	近世	①角材？　②角材	14202	マメガキ	12.0	9.1	8.0
W-70	E-1	SP222	中～近世	柱	14203	クリ	18.5	8.5	6.2
W-71	E-1	SP196	中～近世	柱	14204	クリ	16.2	12.2	9.0
W-74	E-1	SP157	中～近世	板状木製品	14207	クリ	16.8	3.8	0.7
W-72	E-1	SX205	近世	木片	14205	スギ	11.2	7.2	2.3
W-73	E-1	SX205	近世	板状木製品	14206	スギ	7.2	8.5	0.8
W-77-1	E-1	SX205	近世	棒状木製品（芯持ち材）	14208	スギ	18.5	3.1	2.3
W-77-2	E-1	SX205	近世	棒状木製品（芯持ち材）	14209	マメガキ	18.5	3.1	2.3
W-78	E-1	SX205	近世	棒状木製品	14210	サクラ属	19.5	7.0	4.8
W-81	E-1	SE212	近世	杭　横木？	14211	クリ	128.5	7.5	6.0
W-83	E-1	SX212	近世	棒状木製品（ほぞ穴有り）	14212	スギ	57.0	3.5	2.5
W-84	E-1	SX212	近世	杭（芯持ち材）	14213	アカマツ	38.5	3.2	2.5
W-85	E-1	SX212	近世	杭（芯持ち材）	14214	スギ	18.3	3.5	3.5
W-86-1	E-1	SX212	近世	①棒状木製品（芯持ち材） ②棒状木製品	14215	アカマツ	41.7	4.8	1.8
W-86-2	E-1	SX212	近世	①棒状木製品（芯持ち材） ②棒状木製品	14216	クリ	41.7	4.8	1.8
W-87-1	E-1	SX212	近世	①②棒状木製品（芯持ち材）	14217	スギ	22.0	5.0	2.2
W-87-2	E-1	SX212	近世	①②棒状木製品（芯持ち材）	14218	マツ属	22.0	5.0	2.2
W-88	E-1	SP276	中～近世	柱根	14219	クリ	26.2	21.0	12.0
W-89	E-1	SP275	中～近世	柱根	14220	クリ	33.0	15.0	15.3
W-91	E-1	SE212	近世	板状木製品	14221	スギ	15.0	8.1	0.6
W-94	E-1	SE212	近世	板状木製品	14222	スギ	41.3	6.5	1.7
W-95	E-1	SE212	近世	棒状木製品	14223	クリ	61.8	2.3	1.5
W-97	E-1	SE212	近世	角状木製品（破片）	14224	イチイガシ	5.8	6.0	3.2
W-102	E-1	SP199	中～近世	小木片	14286	クリ	5.3	1.7	1.5
W-103	E-1	SE212	近世	杭（丸太材）	14225	ウバメガシ	36.0	4.0	3.5
W-104	E-1	SE212	近世	杭	14226	クロマツ	50.2	6.0	3.0
W-105	E-1	SE212	近世	杭	14227	クロマツ	68.0	5.5	4.5
W-106	E-1	SE212	近世	杭	14228	アカマツ	62.5	4.0	3.5
W-107	E-1	SE212	近世	杭（丸太材）	14229	スギ	95.5	6.5	3.5
W-108	E-1	SE212	近世	杭（丸太材）	14230	クサギ	42.8	2.5	1.3
W-109	E-1	SE212	近世	杭（芯持ち材）	14231	アカマツ	80.0	4.2	4.2
W-110	E-1	SE212	近世	杭（芯持ち材）	14232	クロマツ	69.2	4.2	3.6
W-111	E-1	SE212	近世	杭	14233	アカマツ	61.0	5.0	3.5
W-112	E-1	SE212	近世	杭（芯持ち材）	14234	アカマツ	46.5	4.2	2.0
W-114	E-1	SE212	近世	杭（丸太材）	14235	アカマツ	86.6	4.0	3.5
W-115	E-1	SE212	近世	杭	14236	アカマツ	76.5	4.7	3.5
W-116	E-1	SE212	近世	杭（丸太材）	14237	スギ	89.5	6.0	7.5
W-117	E-1	SE212	近世	杭（丸太材）	14238	アカマツ	79.7	4.2	2.3
W-118	E-1	SE212	近世	杭（芯持ち材）	14239	アカマツ	73.2	4.5	5.3
W-119	E-1	SE212	近世	杭（芯持ち材）	14240	スギ	22.0	4.0	1.5
W-120	E-1	SE212	近世	杭？	14241	クリ	47.0	3.2	1.8
W-121	E-1	SE212	近世	杭	14242	クロマツ	66.8	3.4	2.8
W-122	E-1	SE212	近世	杭（芯持ち材）	14243	クロマツ	45.5	4.2	2.2
W-123	E-1	SE212	近世	杭（丸太材）	14244	アカマツ	77.5	5.5	3.5
W-124	E-1	SE212	近世	杭（丸太材）	14245	アカマツ	40.5	3.5	1.5
W-125	E-1	SE212	近世	杭（丸太材）	14246	スギ	90.5	5.0	2.8
W-126	E-1	SE212	近世	杭（丸太材）	14247	アカマツ	86.0	7.5	5.0
W-127	E-1	SE212	近世	杭（丸太材）	14248	アカマツ	55.8	9.0	4.5
W-128	E-1	SE212	近世	杭	14249	アカマツ	62.3	6.7	4.0
W-129	E-1	SE212	近世	杭（丸太材）	14250	アカマツ	64.4	7.0	3.5
W-130	E-1	SE212	近世	杭（芯持ち材）	14251	アカマツ	38.5	4.2	3.0
W-131	E-1	SE212	近世	棒状木製品　芯持ち材	14252	アカマツ	13.6	2.3	2.3
W-133	E-1	SE212	近世	杭（芯持ち材）	14253	アカマツ	26.8	3.4	2.4
W-134	E-1	SE212	近世	杭（丸太材）	14254	アカマツ	40.0	5.3	4.0
W-135	E-1	SE212	近世	杭（広葉樹　芯持ち材）	14255	アカガシ亜属	27.2	5.6	3.7
W-136	E-1	SE213	近世	棒状木製品　広葉樹	14260	アカマツ	29.8	3.0	2.3
W-137	E-1	SP301	中～近世	柱根	14256	クリ	15.5	13.5	13.5
W-138	E-1	SP366	中～近世	杭（丸太材）	14257	マツ属	37.6	4.2	3.2
W-139	E-1	SP360	中～近世	柱根	14261	クリ	30.5	9.8	7.5

第 16 表　出土木製品観察表

遺物番号	区	遺構 層位	時期	遺物名	プレパラート 番号	樹種	最大長 （cm）	最大幅 （cm）	厚み （cm）
W-140	E-1	SP330	近世	小木片	14262	マツ属	4.7	1.4	0.7
W-141	E-1	SE169	中世	小木片	14263	ムラサキシキブ属	8.0	3.1	1.0
W-142	E-1	SP361	中～近世	杭？	14258	クリ	22.4	5.2	4.7
W-143	E-1	SP379	中～近世	杭（芯持ち材）	14264	モモ	23.0	3.5	1.4
W-144	E-1	SE169	中世	棒状木製品（自然木？）	14265	ヒサカキ	11.2	1.5	0.5
W-145	E-1	SP242	中～近世	木片	13955	樹皮	4.6	2.3	0.3
W-146	E-1	SP301	中～近世	木片	14266	クリ	4.1	1.9	0.5
W-147	E-1	低地部 TR	中～近世	木片	14267	スギ	5.8	1.8	0.8
W-148	E-1	SP342	中～近世	柱根	14268	クリ	13.3	15.5	12.5
W-149	E-1	SP374	中～近世	柱根	14269	クリ	25.2	11.3	11.5
W-150	E-1	SP307	中世	柱　木片	14270	クリ	22.3	10.3	4.2
W-152	E-1	低地部 TR1	中～近世	木片	14271	スダジイ	4.6	4.7	3.0
W-153	E-1		不明	木片	14272	スギ	6.0	1.6	0.4
W-154-1	E-1		不明	木片	14273	イヌマキ属	3.2	1.9	1.5
W-154-2	E-1		不明	木片	14274	コナラ節	3.2	1.9	1.5
W-156	E-1		不明	芯持ち　丸太材　破片	14275	イヌマキ属	9.2	3.5	2.0
W-157	E-1		不明	棒状木製品	14276	スギ	13.6	1.5	0.9
W-158	E-1		不明	木片	14277	カヤ	5.6	3.2	1.5
W-159	E-1		中～近世	小木片	13956	樹皮	2.6	0.9	0.3
W-160	E-1		不明	板状木製品	14278	ヒノキ	13.2	2.2	0.7
W-161	E-1		古墳後期	棒状木製品	14279	イヌマキ属	13.8	2.5	0.8
W-162	E-1	丘陵部南部東西 TR	近世？	木片	14280	クヌギ節	5.3	2.5	1.7
W-163	E-1	TR1	近世？	木片	14283	クリ	5.3	2.3	0.4
W-164-1	E-1	低地部 TR	近世？	曲物の底板か？	14281	クヌギ節	11.3	4.3	0.6
W-164-2	E-1	低地部 TR	近世？	曲物の底板か？	14282	スギ	11.3	4.3	0.6
W-165	E-1		近世？	木片	14284	カヤ	6.0	1.0	1.0
W-166	E-1		近世？	板状木製品	14285	スギ	16.1	2.2	1.1
W-167-1	E-1		近世？	木片	14287	イヌマキ属	9.5	2.3	1.5
W-167-2	E-1		近世？	木片	14288	スギ	9.5	2.3	1.5
W-168	E-1		近世？	木片	14289	クリ	7.5	2.5	3.2
W-169	E-1		不明	木片	14259	コナラ節	6.5	2.1	1.1
W-170	E-1		古墳後期	板状木製品	14290	スギ	15.5	4.7	0.9
W-171-1	E-1		近世？	板状木製品（木片）	14291	スギ	10.1	1.8	0.7
W-171-2	E-1		近世？	板状木製品（木片）	14292	クリ	10.1	1.8	0.7
W-172	E-1		近世？	木片	14293	スギ	7.8	2.0	0.9
W-173	E-1	排水溝	近世？	板状木製品　他	14294	スギ	17.6	5.9	1.0
W-174	E-1		近世？	板状木製品	14295	スギ	26.3	5.9	0.7
W-175-1	E-1		不明	木片	14774	ニワトコ	10.5	2.3	0.4
W-175-2	E-1		不明	木片	14775	スギ	10.5	2.3	0.4
W-176	E-1		不明	木片	14776	イヌマキ属	7.3	3.5	1.2
W-177	E-1		近世？	板状木製品	14296	スギ	20.5	5.3	1.0
W-178	E-1		中世	木片	14297	ケヤキ	10.6	4.6	1.6
W-179	E-1		中世	棒状木製品	14298	スギ	40.8	2.5	1.5
W-180	E-1		中世	棒状木製品（芯持ち材）	14300	イヌマキ属	46.5	3.3	3.1
W-181	E-1	SP408	中世	柱？	14299	クリ	37.6	9.2	8.8
W-182	E-1	SP239	中世	柱片？	14301	エノキ属	21.3	12.2	8.0
W-183	E-1	SP375	中世	①用途不明　広葉樹　木片 ②板状木製品　広葉樹　ミカン割材	14302	イチイガシ	29.3	16.0	8.5
W-184	E-1	SP411	中世	柱？	14303	クリ	17.5	11.3	8.3
W-185	E-1	SP404	中世	柱？	14304	クリ	24.0	10.5	9.2
W-186	E-1		中世	板状木製品	14305	スギ	19.3	5.3	1.3
W-188-1	E-1	低地部	中世	木片	14306	イチイガシ	20.4	3.4	2.5
W-188-2	E-1	低地部	中世	木片	14307	スギ	20.4	3.4	2.5
W-191	E-1	SP412	中世	柱？	14308	クリ	21.5	4.5	3.3
W-192	E-1		不明	木片	14309	スギ	10.4	2.0	0.4
W-193	E-1		不明	木片　板状木製品	14310	カヤ	15.6	3.0	1.6
W-194	E-1		不明	木片	14311	スギ	7.8	1.6	1.5
W-195	E-1		不明	棒状木製品	14312	イヌマキ属	5.3	1.2	1.1
W-196	E-1		不明	杭の先端か？	14313	クロマツ	9.0	3.2	2.7
W-197	E-1		奈良～平安	木片	14314	スギ	8.7	3.5	0.7
W-199	E-1	水田域	奈良～平安	木片	14315	アカガシ亜属	8.0	3.9	3.1
W-200	E-1	TR1	古墳後期	棒状木製品	14316	イヌマキ属	16.4	2.9	1.4
W-202-1	E-1	水田域	奈良～平安	板状木製品	14317	イチイガシ	12.6	3.3	2.0
W-202-2	E-1	水田域	奈良～平安	板状木製品	14318	イヌマキ属	12.6	3.3	2.0
W-203	E-1	水田域	奈良～平安	板状木製品	14319	スギ	16.7	2.3	1.4
W-204-1	E-1	水田域	奈良～平安	板状木製品	14320	スギ	22.3	3.2	1.4
W-204-2	E-1	水田域	奈良～平安	板状木製品	14321	サクラ属	22.3	3.2	1.4
W-211	E-1	SD421	古墳後期	杭　広葉樹端材	14322	イヌマキ属	12.7	7.2	6.0
W-214	E-1	SK419	古墳後期	棒状木製品（丸）杭？	14323	イヌマキ属	28.3	3.5	3.8
W-215	E-1	SK419	古墳後期	棒状木製品（丸）	14324	イヌマキ属	75.4	3.8	3.0
W-224	E-1	SD421	古墳後期	杭？広葉樹丸太材（芯持ち材）	13875	イヌマキ属	25.3	5.0	3.5
W-231	E-1	SD421	古墳後期	棒状木製品	14331	スギ	32.0	3.0	1.1
W-232-1	E-1	SK419	古墳後期	板状木製品	14332	スギ	6.5	4.0	0.5

第 16 表　出土木製品観察表

遺物番号	区	遺構 層位	時期	遺物名	プレパラート 番号	樹種	最大長 （cm）	最大幅 （cm）	厚み （cm）
W-232-2	E-1	SK419	古墳後期	板状木製品	14333	イヌマキ属	6.5	4.0	0.5
W-238-1	E-1	SD421	古墳後期	棒状木製品（丸）杭？	14386	イチイガシ	34.8	3.3	1.2
W-239	E-1	SD421	古墳後期	板状木製品	14334	スギ	7.5	2.9	0.4
W-240	E-1	SD421	古墳後期	板状木製品（端材）	14335	スギ	14.5	8.3	1.3
W-257	E-1		弥生後期	板状木製品	13873	スギ	84	16	0.5
W-258	E-1	SX423	弥生後期	広葉樹　ミカン割材	14387	スダジイ	288.0	15.0	6.0
W-259	E-1	SX423	弥生後期	広葉樹　ミカン割材	15101	コジイ	392.0	16.0	7.0
W-260	E-1	SX423	弥生後期	広葉樹　ミカン割材	15102	コジイ	326.0	14.0	
W-263	E-1		弥生後期	①板状木製品 ②針葉樹　ミカン割材（根元付近）	15103	クリ	215	14.0	13
W-263-2	E-1		弥生後期	ミカン割材	15120	クリ			
W-267	E-1		弥生後期	梯子？　破片	14336	スギ	12.5	11.5	3.5
W-268	？		弥生後期	板状木製品　（ほぞ穴有り）	14337	スギ	57.0	6.8	1.5
W-269	？		弥生後期	板状木製品	14338	スギ	51.0	7.8	1.0
W-272			弥生後期	広葉樹　丸太材　一部炭化	15104	イヌマキ属	135.3	14.0	7.5
W-273	E-1		弥生後期	加工のある丸太材　杭？ 広葉樹丸太材	15105	タイミンタチバナ	26.6	5.0	4.5
W-321	E-1		弥生後期	板状木製品　針葉樹　割面	14340	スギ	153.6	12.0	2.0
W-322	E-1		弥生後期	板状木製品	14341	スギ	105.0	10.8	1.7
W-337	E-1		弥生後期	板状木製品　針葉樹　割面	14342	スギ	145.0	15.0	3.0
W-348	E-1	SK422	弥生後期	広葉樹　ミカン割材	15106	コジイ	215.5	14.5	8.0
W-355	E-1		弥生後期	板　部材	13876	スギ	189.0	24.0	2.5
W-367	E-1		弥生後期	板　部材	14344	スギ	94.5	18.0	3.0
W-369	E-1		弥生後期	板状木製品　針葉樹　割面	14345	スギ	146.5	22.5	2.0
W-374	E-1		弥生後期	板状木製品　針葉樹 割面　一部炭化	14346	スギ	165.0	21.0	3.5
W-382	E-1		弥生後期	板状木製品　針葉樹　割面	14347	スギ	133.5	11.0	1.8
W-383	E-1		弥生後期	板状木製品　針葉樹　割面	14348	スギ	139.0	9.5	1.3
W-386	E-1		弥生後期	板状木製品　針葉樹	14349	スギ	108.5	33.0	2.5
W-392	E-1		弥生後期	板状木製品　針葉樹	14350	スギ	53.0	17.8	2.1
W-397	E-1		弥生後期	板状木製品　針葉樹	14351	スギ	64.0	16.0	2.0
W-399	E-1		弥生後期	板状木製品　針葉樹	14354	スギ	37.3	25.0	2.1
w -404	E-1		弥生後期	板状木製品　針葉樹　（屋根板材か）	13715	スギ	128.0	25.0	2.5
W-416	E-1		弥生後期	板状木製品（加工痕有り）	13716	スギ	49.0	8.8	4.2
W-423	E-1		弥生後期	板状木製品　針葉樹	13717	スギ	47.5	9.0	2.0
W-448	E-1		弥生後期	板状木製品　針葉樹	13718	スギ	70.5	20.5	1.5
W-450	E-1		弥生後期	板状木製品　針葉樹 割面　一部炭化	13719	スギ	151.0	26.8	2.5
W-452	E-1		弥生後期	部材　丸棒状	13720	イヌマキ属	89.0	8.7	7.5
W-459	E-1		弥生後期	板状木製品　針葉樹　割面	13721	スギ	54.0	21.0	3.2
W-462	E-1		弥生後期	板状木製品	13722	スギ	70.0	10.0	3.2
W-467	E-1	SK422	弥生後期	板状木製品　広葉樹？　ほぞ穴有り	13723	スギ	155.0	25.5	1.8
W-468	E-1	SK422	弥生後期	板状木製品　針葉樹	13724	スギ	56.0	16.5	2.5
W-472	E-1		弥生後期	板状木製品　針葉樹　破風板か？	13725	スギ	136.5	14.5	1.5
W-475	E-1		弥生後期	板状木製品　針葉樹　割面	13726	スギ	148.0	12.5	3.0
W-492	E-1		弥生後期	板状木製品　針葉樹　割面 一部加工　ほぞ穴一カ所	13727	スギ	128.5	14.5	3.5
W-497	E-1		弥生後期	板状木製品　針葉樹	13728	スギ	146.0	12.5	1.8
W-499	E-1	SK422	弥生後期	板状木製品	13729	スギ	109.0	16.0	2.3
W-500	E-1	SK422	弥生後期	板状木製品　針葉樹	13730	スギ	167.5	18.5	2.0
W-509	E-1		弥生後期	板状木製品　針葉樹	13731	スギ	96.5	11.5	1.6
W-514	E-1		弥生後期	板状木製品　針葉樹　一部炭化	13732	スギ	123.0	11.2	1.8
W-521	E-1		弥生後期	針葉樹　割材（板状木製品）	13733	スギ	102.0	22.5	2.5
W-523	E-1		弥生後期	板状木製品　針葉樹	13734	スギ	64.0	9.0	1.0
W-526	E-1		弥生後期	板　針葉樹	13735	スギ	134.5	12.5	1.7
W-527	E-1		弥生後期	板　部材	13736	スギ	164.5	9.2	1.8
W-536	E-1		弥生後期	板状木製品　針葉樹　割面	13737	スギ	96.5	18.0	2.7
W-540	E-1	SK422	弥生後期	針葉樹　角材	13738	スギ	102.0	4.5	3.2
W-541	E-1		弥生後期	板状木製品　針葉樹　割材 側面端部加工痕有り	13739	スギ	144.0	16.0	2.0
W-557	E-1		弥生後期	板状木製品　針葉樹　割面	13740	スギ	166.0	8.2	1.8
W-558	E-1		弥生後期	板状木製品　針葉樹	13741	スギ	76.5	13.2	2.0
W-561	E-1		弥生後期	（板状木製品）　針葉樹　割材	13742	スギ	53.5	13.0	1.7
W-566	E-1		弥生後期	（板状木製品）　針葉樹　割材	13743	スギ	63.0	9.0	3.6
W-567	E-1		弥生後期	板状木製品　針葉樹	13744	スギ	53.2	11.5	1.3
W-568	E-1		弥生後期	自然木？杭・柱？広葉樹丸太材	13745	スギ	169.0	11.0	7.0
W-569	E-1		弥生後期	角棒状　針葉樹　割面	13746	スギ	159.5	3.6	2.2
W-570	E-1		弥生後期	板状木製品　針葉樹	13747	スギ	65.5	10.0	1.2
W-571	E-1		弥生後期	部材　角棒状	13748	スギ	179.5	4.0	2.5
W-573	E-1		弥生後期	板状木製品　針葉樹	13749	スギ	129.5	15.5	2.2
W-574	E-1		弥生後期	板状木製品　針葉樹　片面加工痕	13750	スギ	134.0	13.0	2.0
W-581	E-1		弥生後期	板状木製品　針葉樹　炭化部分有り	13751	スギ	134.0	19.0	2.0
W-582	E-1		弥生後期	板状木製品　針葉樹	13752	スギ	85.5	5.3	2.8
W-592	E-1		弥生後期	板状木製品　針葉樹　割面	13753	スギ	130.5	10.5	2.0

第 16 表　出土木製品観察表

遺物番号	区	遺構 層位	時期	遺物名	プレパラート 番号	樹種	最大長 （cm）	最大幅 （cm）	厚み （cm）
W-597	E-1		弥生後期	板　部材	13754	スギ	111.0	7.5	3.2
W-598	E-1		弥生後期	板状木製品　針葉樹	13755	スギ	38.5	10.3	2.0
W-599	E-1		弥生後期	板状木製品　針葉樹	13756	スギ	53.0	10.5	1.5
W-607	E-1		弥生後期	板状木製品	13757	スギ	148.0	20.5	3.5
W-608	E-1		弥生後期	板状木製品　針葉樹 （両面加工痕・炭化）	13758	スギ	98.5	18.0	2.5
W-616	E-1		弥生後期	板　部材（炭化）	13759	スギ	69.0	19.5	2.3
W-619	E-1		弥生後期	板状木製品　針葉樹 加工痕有り　一部炭化	13760	スギ	142.0	12.5	2.3
W-622	E-1		弥生後期	板　部材	13761	スギ	68.0	7.5	1.5
W-624	E-1		弥生後期	広葉樹　半裁材	13762	ヒサカキ	70.5	7.3	5.8
W-631	E-1		弥生後期	針葉樹　割材	13763	イヌマキ属	124.8	5.0	3.5
W-634	E-1		弥生後期	板状木製品　針葉樹	13764	スギ	78.3	10.1	1.7
W-637	E-1		弥生後期	板状木製品　針葉樹　ほぞ穴有り	13765	スギ	166.5	23.5	2.0
W-638	E-1		弥生後期	板状木製品　針葉樹　割面	13766	スギ	131.0	10.5	3.0
W-639	E-1		弥生後期	板状木製品　針葉樹　割面	13767	スギ	131.0	11.1	2.3
W-641	E-1		弥生後期	板状木製品	13768	スギ	81.0	11.5	2.0
W-648	E-1		弥生後期	部材　角棒状	13769	スギ	58.5	2.5	1.5
W-656	E-1		弥生後期	針葉樹　割材（板状木製品）	13770	スギ	50.3	9.5	2.2
W-659	E-1		弥生後期	部材　角棒状	13771	スギ	112.0	3.5	2.5
W-662	E-1		弥生後期	板状木製品　針葉樹	13772	スギ	148.5	15.2	1.8
W-666	E-1		弥生後期	板状木製品　針葉樹	13773	スギ	133.0	14.5	3.5
W-669	E-1		弥生後期	板状木製品　針葉樹 割面（一部加工）	13774	スギ	144.5	21.0	3.0
W-672	E-1		弥生後期	板状木製品	13775	スギ	111.0	9.0	1.8
W-674	E-1		弥生後期	板状木製品	13776	スギ	56.5	14.5	2.8
W-679	E-1		弥生後期	板状木製品　針葉樹 割面　一部炭化	13777	スギ	145.0	10.0	2.5
W-681	E-1		弥生後期	板状木製品	13778	スギ	74.6	7.3	1.5
W-682	E-1		弥生後期	板　部材	13779	スギ	188.5	27.0	2.0
W-684	E-1		弥生後期	杭？部材　角棒状	13780	イヌマキ属	93.0	5.5	5.5
W-687	E-1		弥生後期	針葉樹　ミカン割材　（棒状木製品）	13781	スギ	144.5	5.7	3.5
W-688	E-1		弥生後期	部材　角棒状	13782	スギ	64.2	3.0	2.8
W-690	E-1		弥生後期	板状木製品	13783	スギ	88.2	11.0	2.3
W-691	E-1		弥生後期	板状木製品	13784	スギ	41.2	12.5	2.2
W-693	E-1		弥生後期	板状木製品	13785	スギ	99.5	13.5	2.0
W-697	E-1		弥生後期	板状木製品　針葉樹　ほぞ穴有り	13786	スギ	134.0	21.5	1.5
W-700	E-1		弥生後期	板　倒れた矢板？	13787	スギ	92.2	10.0	1.2
W-705	E-1		弥生後期	板状木製品	13788	スギ	58.5	24.5	1.5
W-718	E-1		弥生後期	板状木製品	13789	スギ	58.0	22.5	3.2
W-719	E-1		弥生後期	部材　角棒状　板	13790	スギ	87.0	4.0	0.2
W-722	E-1		弥生後期	板状木製品	13791	スギ	66.5	18.0	4.0
W-724	E-1		弥生後期	板状木製品	13792	スギ	65.0	10.2	3.5
W-725	E-1		弥生後期	板状木製品	13793	スギ	77.3	19.0	2.0
W-730	E-1		弥生後期	部材　角棒状	13794	スギ	24.0	5.0	2.5
W-737	E-1		弥生後期	板状木製品　針葉樹 ほぞ穴有り（屋根板か？）	13795	スギ	190.0	10.5	2.0
W-739	E-1		弥生後期	板状木製品　針葉樹　割面	13796	スギ	134.8	8.0	1.2
W-743	E-1		弥生後期	板状木製品	13797	スギ	85.2	14.0	2.5
W-745	E-1		弥生後期	板　針葉樹　割材　ほぞ穴有り	13798	スギ	42.0	18.0	4.1
W-747	E-1		弥生後期	板状木製品	13799	スギ	91.7	21.0	3.0
W-748	E-1		弥生後期	板状木製品	13800	スギ	88.5	11.8	2.5
W-753	E-1		弥生後期	板状木製品（炭化）	13801	スギ	47.5	15.0	2.5
W-759	E-1		弥生後期	板状木製品　針葉樹 片面加工痕（一部炭化）	13802	スギ	137.0	6.0	2.5
W-768	E-1		弥生後期	板状木製品	13803	スギ	105.0	13.5	1.2
W-770	E-1		弥生後期	部材　丸棒状　杭？	13804	スギ	51.0	4.0	3.5
W-772	E-1		弥生後期	板状木製品	13805	スギ	59.0	7.2	2.5
W-776	E-1		弥生後期	板状木製品	13806	スギ	45.5	10.5	3.2
W-784	E-1		弥生後期	加工のある丸太材　「又」有り	13807	ヒサカキ	99.2	5.6	3.0
W-786	E-1		弥生後期	部材　角棒状	13808	クリ	126.0	4.0	2.0
W-800	E-1		弥生後期	杭？広葉樹丸太材　板	13809	クサギ	16.5	3.0	2.5
W-801	E-1		弥生後期	角棒状	13810	スギ	68.0	4.2	2.5
W-816	E-1		弥生後期	板状木製品	13811	スギ	114.0	7.5	1.8
W-817	E-1		弥生後期	板状木製品　針葉樹　割面	13812	スギ	186.0	22.5	1.5
W-823	E-1		弥生後期	板状木製品	13813	スギ	122.0	8.9	1.2
W-826	E-1		弥生後期	板状木製品	13814	ムクロジ	78.5	17.8	2.5
W-829	E-1		弥生後期	板状木製品	13815	スギ	82.0	12.5	2.3
W-830	E-1		弥生後期	角棒状	13816	スギ	76.5	3.5	3.5
W-832	E-1		弥生後期	板　部材	13817	スギ	45.0	9.0	1.0
W-838	E-1		弥生後期	板状木製品	13818	スギ	53.5	14.2	1.8
W-845	E-1		弥生後期	板状木製品	13819	スギ	31.0	16.0	2.2
W-850	E-1		弥生後期	柱、杭の一種？　用途不明建築材 広葉樹丸太材	13820	クリ	34.8	7.7	6.2

第 16 表　出土木製品観察表

遺物番号	区	遺構 層位	時期	遺物名	プレパラート 番号	樹種	最大長 （cm）	最大幅 （cm）	厚み （cm）
W-851	E-1		弥生後期	広葉樹　丸太材（炭化）	13821	クリ	63.5	6.7	6.5
W-863	E-1		弥生後期	倒れた杭？広葉樹　丸太材	13822	タイミンタチバナ	87.5	5.2	4.0
W-864	E-1		弥生後期	角棒状　倒れた杭？	13823	スギ	95.0	3.5	2.8
W-867	E-1		弥生後期	板状木製品	13824	スギ	50.3	12.5	11.5
W-877	E-1		弥生後期	角棒状	13825	スギ	86.5	4.0	2.7
W-883	E-1		弥生後期	棒状木製品（角）	13826	スギ	63.3	3.3	2.5
W-887	E-1		弥生後期	柄？	13827	タラノキ	27.5	4.2	3.3
W-890	E-1		弥生後期	角棒状	13828	コジイ	82.0	5.0	3.3
W-898	E-1		弥生後期	板状木製品　針葉樹	13829	スギ	29.5	9.2	1.2
W-899	E-1		弥生後期	棒状木製品	13830	カジノキ属	124.0	4.5	4.0
W-900	E-1		弥生後期	板　部材	13831	スギ	37.5	9.5	4.0
W-902	E-1		弥生後期	（角棒状）杭？針葉樹板材	13832	スギ	32.0	4.5	3.8
W-910	E-1		弥生後期	杭？針葉樹板材	13833	スギ	53.8	5.3	2.7
W-913	E-1		弥生後期	倒れた矢板	13834	スギ	33.0	13.6	2.0
W-920	E-1		弥生後期	板状木製品　針葉樹　片面加工痕	13835	スギ	152.0	20.5	3.2
W-921	E-1		弥生後期	板状木製品	13836	スギ	72.0	19.0	1.0
W-934	E-1		弥生後期	角棒状	13837	スダジイ	45.5	5.2	
W-935	E-1		弥生後期	板状木製品	13838	スギ	97.0	21.5	3.8
W-939	E-1		弥生後期	板　部材	13839	イチイガシ	55.5	13.5	2.3
W-940	E-1		弥生後期	杭？針葉樹角材　部材？	13840	スギ	71.0	3.8	3.6
W-947	E-1		弥生後期	板　部材	13841	スギ	27.0	3.5	1.1
W-953	E-1	SK422	弥生後期	板状木製品	13842	スギ	62.8	6.5	2.0
W-954	E-1	SK422	弥生後期	板　部材	13843	スギ	46.5	6.2	2.3
W-964	E-1	SK422	弥生後期	板状木製品	13844	スギ	73.5	6.3	1.8
W-967	E-1	SK422	弥生後期	板状木製品　針葉樹	13845	スギ	72.0	10.0	1.8
W-968	E-1	SK422	弥生後期	板状木製品　（加工痕有り）	13851	スギ	70.5	9.5	3.0
W-979	E-1	SK422	弥生後期	角状木製品　針葉樹　割材	13852	スギ	114.6	5.7	3.5
W-983	E-1	SK422	弥生後期	ミカン割材	15107	クリ	68.0	11.5	5.8
W-984	E-1		弥生後期	倒れた杭？針葉樹角材	13853	スギ	49.5	5.0	4.0
W-987	E-1		弥生後期	板状木製品	13854	スギ	44.0	10.0	1.7
W-989	E-1	SK422	弥生後期	倒れた杭？広葉樹丸太材	15108	タイミンタチバナ	27.5	4.7	3.5
W-992	E-1	SK422	弥生後期	角棒状	13855	スギ	64.2	4.8	3.5
W-996	E-1	SK422	弥生後期	板状木製品　針葉樹	13856	スギ	32.0	9.0	2.3
W-1001	E-1	SK422	弥生後期	杭　広葉樹丸太材	15109	クリ	43.0	7.5	5.3
W-1003	E-1	SK422	弥生後期	杭　針葉樹角材	13857	スギ	52.0	3.8	3.7
W-1004	E-1	SK422	弥生後期	杭　針葉樹板材	13858	スギ	19.5	8.5	1.8
W-1006	E-1	SK422	弥生後期	杭　針葉樹角材（丸太割材）	15110	クリ	48.2	7.8	5.3
W-1007	E-1	SK422	弥生後期	杭　針葉樹板材	13859	スギ	35.8	5.5	2.9
W-1009	E-1	SK422	弥生後期	杭　針葉樹板材	13860	スギ	38.0	5.7	2.8
W-1012	E-1	SK422	弥生後期	矢板　針葉樹板材	13861	スギ	52.0	9.7	2.6
W-1013	E-1	SK422	弥生後期	杭　針葉樹板材	13862	スギ	42.0	5.5	1.8
W-1015	E-1	SK422	弥生後期	杭　針葉樹板材	13863	スギ	27.0	5.2	2.5
W-1018	E-1	SK422	弥生後期	棒状木製品（丸）	13864	イヌマキ属	55.0	2.0	2.3
W-1022	E-1	SK422	弥生後期	杭　針葉樹割材	15111	クリ	40.5	7.0	4.5
W-1023	E-1	SK422	弥生後期	杭　広葉樹丸太材	15112	コジイ	123.5	5.5	
W-1024	E-1	SK422	弥生後期	杭　広葉樹丸太材	15113	タイミンタチバナ	37.0	6.2	5.4
W-1026	E-1	SK422	弥生後期	杭　針葉樹角材	15114	クリ	31.2	3.6	3.0
W-1029	E-1	SK422	弥生後期	倒れた杭　針葉樹角材	13865	スギ	28.0	3.5	3.4
W-1042	E-1	SK422	弥生後期	矢板　針葉樹板材	13866	スギ	45.5	6.5	2.0
W-1043	E-1	SK422	弥生後期	矢板　板状木製品（ほぞ穴有り）	13867	スギ	32.7	11.2	2.0
W-1046	E-1	SK422	弥生後期	板　針葉樹板材	13868	スギ	101.1	8.0	2.5
W-1053	E-1	SK422	弥生後期	杭　針葉樹板材	13869	スギ	47.5	5.0	2.5
W-1057	E-1	SK422	弥生後期	杭　針葉樹角材	15115	クリ	28.5	8.0	4.5
W-1058	E-1	SK422	弥生後期	棒状木製品（角）	13870	スギ	70.0	2.8	2.1
W-1063	E-1	SK422	弥生後期	横木　針葉樹　芯持ち材	15116	クリ	150.0	6.5	6.5
W-1075	E-1	SK422	弥生後期	杭　広葉樹角材	15117	コジイ	37.0	5.0	4.8
W-1077	E-1	SK422	弥生後期	矢板（板状木製品）	13871	スギ	125.0	18.0	3.2
W-1079	E-1	SK422	弥生後期	矢板　針葉樹板材	13872	スギ	44.5	10.0	3.0
W-1081	E-1	SK422	弥生後期	杭　針葉樹　ミカン割材	15118	クリ	57.0	5.8	3.8
W-1084	E-1	SK422	弥生後期	杭　広葉樹丸太材	13874	イヌマキ属	42.2	4.5	3.5
W-1097	E-1	SK422	弥生後期	杭　広葉樹角材	15119	スダジイ	84.2	4.8	4.2
W-1102	E-1	SK422	弥生後期	倒れた杭　針葉樹角材	14355	スギ	30.0	2.5	3.0
W-1106	E-1	SK422	弥生後期	板　広葉樹板材	15121	スギ	40.5	8.5	1.3
W-1118	E-1	SK422	弥生後期	杭　針葉樹板材	15122	スダジイ	38.5	3.5	3.4
W-1119	E-1	SK422	弥生後期	杭　針葉樹板材	15123	コジイ	41.0	2.8	4.2
W-1125	E-1	SK422	弥生後期	杭　針葉樹角材	14356	スギ	55.0	8.2	4.8
W-1129	E-1	SK422	弥生後期	角棒状	14357	スギ	59.5	4.8	
W-1137	E-1	SK422	弥生後期	矢板（板状木製品）	14358	スギ	59.5	19.0	3.0
W-1139	E-1	SK422	弥生後期	板状木製品　針葉樹	14359	スギ	111.5	17.2	1.2
W-1147	E-1	SK422	弥生後期	杭　針葉樹丸太材	14360	イヌマキ属	112.0	6.7	7.5
W-1150	E-1	SK422	弥生後期	杭　針葉樹板材（炭化）	14361	スギ	37.2	4.8	3.2
W-1152	E-1	SK422	弥生後期	杭　広葉樹丸太材	15124	ウバメガシ	106.0	5.3	4.4
W-1157	E-1	SK422	弥生後期	部材　角棒状	14362	スギ	114.0	4.3	2.8
W-1160	E-1	SK422	弥生後期	杭　広葉樹角材	15125	クリ	70.5	8.5	5.5

第 16 表　出土木製品観察表

遺物番号	区	遺構 層位	時期	遺物名	プレパラート 番号	樹種	最大長 （cm）	最大幅 （cm）	厚み （cm）
W-1163	E-1	SK422	弥生後期	杭　針葉樹板材	14363	スギ	107.5	8.5	6.0
W-1165	E-1	SK422	弥生後期	杭　広葉樹丸太材	15126	ツツジ属	99.5	4.5	4.0
W-1166	E-1	SK422	弥生後期	板　部材（加工痕有り）	14364	スギ	41.5	7.0	2.3
W-1168	E-1	SK422	弥生後期	板　針葉樹（ほぞ穴有り）	14365	スギ	142.3	14.0	1.5
W-1169	E-1	SK422	弥生後期	板状木製品	14760	コジイ	67.8	11.0	3.4
W-1170	E-1	SK422	弥生後期	杭　広葉樹丸太材	15127	クスノキ科	101.0	6.2	5.8
W-1173	E-1	SK422	弥生後期	杭　広葉樹丸太材	15128	ヤマボウシ	99.5	7.0	6.5
W-1174	E-1	SK422	弥生後期	杭　広葉樹丸太材	15129	クリ	49.0	6.2	6.5
W-1177 ②	E-1	SK422	弥生後期	杭　広葉樹丸太材	15130	アカガシ亜属	104.5	7.0	8.3
W-1178	E-1	SK422	弥生後期	杭　広葉樹丸太材	15131	サカキ	82.0	6.5	5.0
W-1179	E-1	SK422	弥生後期	杭　広葉樹丸太材	15132	サカキ	116.0	7.0	7.5
W-1180	E-1	SK422	弥生後期	杭　広葉樹丸太材	15133	アカガシ亜属	102.0	5.2	5.5
W-1181	E-1	SK422	弥生後期	杭　広葉樹丸太材	15134	コナラ節	26.5	5.0	4.5
W-1186	E-1		弥生後期	板状木製品	14762	スギ	66.8	8.0	2.2
W-1190	E-1	SK422	弥生後期	杭　広葉樹丸太材 自然木を加工せず、そのまま使用？	15135	ミズキ	71.5	6.7	4.2
W-1197	E-1	SK422	弥生後期	板状木製品	14752	スギ	56.0	5.0	2.4
W-1198			弥生後期	板状木製品	14761	スギ			
W-1199	E-1	SK422	弥生後期	板状木製品　針葉樹	14763	モミ属	115.0	21.8	3.0
W-1205	E-1	SK422	弥生後期	矢板（板状木製品）	14366	スギ	38.0	16.5	2.7
W-1207	E-1	SK422	弥生後期	板　棒状木製品	14772	スギ	57.0	2.5	2.0
W-1219	E-1	SK422	弥生後期	板状木製品	14773	スギ	74.0	8.0	
W-1224	E-1	SK422	弥生後期	板状木製品　針葉樹　（割材）	15001	スギ	232.0	11.5	2.0
W-1231	E-1	SK422	弥生後期	板状木製品	14769	スギ	100.0	12.5	2.2
W-1236	E-1	SK422	弥生後期	板状木製品	14777	スギ	64.0	10.2	2.0
W-1239	E-1	SK422	弥生後期	角棒状	15002	イヌマキ属	41.2	4.8	2.2
W-1256	E-1	SK422	弥生後期	横板　板状木製品	14781	スギ	106.5	10.5	1.2
W-1261	E-1	SK422	弥生後期	板状木製品	14770	スギ	118.8	14.2	2.5
W-1262	E-1	SK422	弥生後期	横板	14782	スギ	92.5	9.3	1.5
W-1266	E-1	SK422	弥生後期	板状木製品	14753	スギ	92.5	11.8	2.5
W-1267	E-1	SK422	弥生後期	針葉樹　割材	15003	スギ	293.0	7.0	3.0
W-1268	E-1	SK422	弥生後期	板状木製品　針葉樹（加工痕有り）	15004	スギ	145.0	26.0	2.5
W-1273	E-1	SK422	弥生後期	板状木製品	14771	スギ	142.5	10.0	1.5
W-1280	E-1	SK422	弥生後期	板状木製品	14778	スギ	116.0	16.3	2.0
W-1282	E-1	SK422	弥生後期	棒状木製品（角）	14779	スギ	40.0	3.6	2.0
W-1283	E-1	SK422	弥生後期	角棒状	15005	スギ	43.8	2.5	2.3
W-1286	E-1	SK422	弥生後期	板状木製品　針葉樹　両面加工有り	14780	スギ	91.0	14.0	2.5
W-1294	E-1	SK422	弥生後期	板状木製品	14783	スギ	41.0	14.2	2.2
W-1298	E-1	SK422	弥生後期	杭　針葉樹角材	15136	クリ	30.5	5.2	5.5
W-1301	E-1	SK422	弥生後期	矢板（板状木製品）	14367	スギ	30.0	9.8	2.2
W-1303	E-1	SK422	弥生後期	棒状木製品（角）	14751	スギ	49.0	3.5	2.5
W-1309	E-1	SK422	弥生後期	杭　針葉樹角材	15137	クリ	25.8	4.0	3.2
W-1319	E-1	SK422	弥生後期	倒れた杭　針葉樹板材	14368	スギ	19.5	6.5	3.2
W-1327	E-1	SK422	弥生後期	板状木製品	14754	スギ	133.0	6.8	2.2
W-1331	E-1	SK422	弥生後期	板状木製品	14757	スギ	163.2	13.0	2.0
W-1336	E-1	SK422	弥生後期	杭　針葉樹板材	15138	クヌギ節	15.5	4.5	2.2
W-1337	E-1	SK422	弥生後期	板　倒れた矢板？	14802	モミ属	75.0	19.5	2.5
W-1341	E-1	SK422	弥生後期	杭　広葉樹角材	15139	スダジイ	79.8	6.5	4.6
W-1344	E-1	SK422	弥生後期	杭　広葉樹割材	15140	コジイ	53.0	6.5	3.8
W-1345	E-1	SK422	弥生後期	杭　広葉樹丸太材	15141	サカキ	37.0	5.0	3.5
W-1351	E-1	SK422	弥生後期	杭　針葉樹割材	14370	スギ	64.0	6.5	2.7
W-1352	E-1	SK422	弥生後期	杭　針葉樹ミカン割材	15142	クリ	42.6	6.5	4.0
W-1356	E-1	SK422	弥生後期	角棒状	15006	スギ	88.5	2.5	3.3
W-1357	E-1	SK422	弥生後期	板状木製品	14786	スギ	69.5	7.8	2.8
W-1358	E-1	SK422	弥生後期	板状木製品	14759	スギ	62.5	15.5	3.5
W-1363	E-1	SK422	弥生後期	板状木製品	14755	スギ	70.0	8.2	1.7
W-1367	E-1	SK422	弥生後期	板状木製品	14788	コジイ	71.5	9.2	2.0
W-1369	E-1	SK422	弥生後期	板状木製品（ほぞ穴有り）	14787	スギ	66.8	7.5	1.2
W-1371	E-1	SK422	弥生後期	板状木製品	14789	スギ	53.0	9.4	2.3
W-1372	E-1	SK422	弥生後期	倒れた矢板？（板状木製品）	14784	コジイ	52.0	11.0	1.3
W-1382	E-1	SK422	弥生後期	倒れた杭　針葉樹板材	14371	イヌマキ属	61.0	6.5	2.5
W-1386	E-1	SK422	弥生後期	横板　板状木製品	14758	モミ属	77.0	9.0	2.8
W-1387	E-1	SK422	弥生後期	横板　板状木製品	14764	スギ	138.0	10.0	2.2
W-1389	E-1	SK422	弥生後期	ミカン割材　広葉樹	14765	キハダ	148.0	10.0	9.0
W-1392	E-1	SK422	弥生後期	板状木製品　加工痕有り	14756	スギ	83.0	13.5	2.8
W-1399	E-1	SK422	弥生後期	矢板　針葉樹板材	14372	スギ	51.5	16.0	2.7
W-1402	E-1	SK422	弥生後期	杭　針葉樹丸太材	14373	イヌマキ属	165.0	8.3	8.5
W-1403	E-1	SK422	弥生後期	杭　広葉樹割材（半裁半円形）	15143	コジイ	76.0	6.5	3.5
W-1405	E-1	SK422	弥生後期	杭　広葉樹丸太材	15144	コジイ	42.0	6.8	3.5
W-1406	E-1	SK422	弥生後期	杭　広葉樹丸太材	15145	タイミンタチバナ	42.0	4.5	4.0
W-1407	E-1	SK422	弥生後期	杭　広葉樹丸太材	15146	ヌルデ	34.5	3.5	3.8
W-1411	E-1	SK422	弥生後期	杭　針葉樹板材	14374	スギ	27.5	7.4	3.5
W-1412	E-1	SK422	弥生後期	杭　針葉樹丸太材	14375	イヌマキ属	163.0	7.5	7.5
W-1414	E-1	SK422	弥生後期	杭　広葉樹丸太材	15147	クスノキ科	39.5	4.0	4.8

第 16 表　出土木製品観察表

遺物番号	区	遺構 層位	時期	遺物名	プレパラート 番号	樹種	最大長 （cm）	最大幅 （cm）	厚み （cm）
W-1416	E-1	SK422	弥生後期	杭　針葉樹板材	15148	クリ	47.5	5.5	3.8
W-1417	E-1	SK422	弥生後期	杭　針葉樹板材	15149	クリ	25.0	6.2	3.3
W-1424	E-1	SK422	弥生後期	杭　針葉樹角材	14376	スギ	113.0	4.8	3.3
W-1432	E-1	SK422	弥生後期	ミカン割材	14767	コジイ	329.5	10.8	7.5
W-1433	E-1	SK422	弥生後期	板状木製品	14766	スギ	74.0	8.8	108
W-1447			弥生後期	板　部材	14768	スギ	76.0	12.0	4.0
W-1465	E-1	SK422	弥生後期	柄？棒状木製品（丸太材）　広葉樹？	15007	ウバメガシ	30.5	4.3	2.8
W-1468	E-1	SK422	弥生後期	杭　針葉樹角材	14377	スギ	56.8	6.5	5.4
W-1472	E-1	SK422	弥生後期	杭　針葉樹角材	14378	スギ	63.0	5.5	4.2
W-1474	E-1	SK422	弥生後期	杭　針葉樹割材	14379	スギ	63.5	7.7	4.5
W-1476	E-1	SK422	弥生後期	杭　針葉樹角材	14380	スギ	61.2	8.2	4.8
W-1477	E-1	SK422	弥生後期	杭　針葉樹板材	14381	スギ	53.5	7.3	4.8
W-1480	E-1	SK422	弥生後期	杭　針葉樹丸太材	14382	イヌマキ属	107.0	6.8	7.0
W-1481	E-1	SK422	弥生後期	杭　針葉樹割材	14383	スギ	61.5	4.8	3.0
W-1482	E-1	SK422	弥生後期	杭　針葉樹角材	14384	スギ	64.0	5.0	4.8
W-1483	E-1	SK422	弥生後期	杭　針葉樹角材	14385	スギ	60.5	7.3	4.3
W-1486	E-1	SK422	弥生後期	杭　広葉樹丸太材	15150	ウバメガシ	31.5	3.0	3.2
W-1489	E-1	SK422	弥生後期	杭　広葉樹割材	15151	クヌギ節	61.8	6.5	4.5
W-1490	E-1	SK422	弥生後期	杭　針葉樹板材（加工痕有り）	14388	スギ	69.5	6.5	2.8
W-1491	E-1	SK422	弥生後期	丸太材　針葉樹　（垂木か？）	15008	イヌマキ属	162.5	7.0	7.0
W-1493	E-1	SK422	弥生後期	針葉樹　半裁材	15009	スギ	129.5	6.2	3.8
W-1494	E-1	SK422	弥生後期	杭　広葉樹丸太材	15152	サカキ	102.5	6.2	5.5
W-1507	E-1	SK422	弥生後期	杭　広葉樹割材	15153	コジイ	85.5	7.5	6.0
W-1509	E-1	SK422	弥生後期	杭　針葉樹ミカン割材	14389	スギ	107.0	6.0	5.8
W-1511	E-1	SK422	弥生後期	杭　針葉樹角材	15154	クリ	23.6	4.0	3.3
W-1512	E-1	SK422	弥生後期	杭　針葉樹板材（転用品）	14390	スギ	34.5	7.3	2.8
W-1513	E-1	SK422	弥生後期	杭　針葉樹板材	14391	スギ	30.0	3.5	2.0
W-1514	E-1	SK422	弥生後期	杭　針葉樹板材	15155	クリ	40.5	5.0	3.5
W-1519	E-1	SK422	弥生後期	杭　広葉樹割材	15156	コジイ	85.0	7.5	4.8
W-1530	E-1	SK422	弥生後期	杭　針葉樹角材	14392	スギ	36.0	5.0	3.5
W-1532	E-1	SK422	弥生後期	杭　針葉樹板材	14393	スギ	68.0	5.0	2.0
W-1534	E-1	SK422	弥生後期	矢板　針葉樹板材	14394	スギ	75.5	10.0	2.4
W-1535	E-1	SK422	弥生後期	矢板　（板状木製品）	14395	スギ	75.0	10.5	3.0
W-1536	E-1	SK422	弥生後期	杭　針葉樹板材（ほぞ穴有り・炭化）	14396	スギ	16.3	9.0	2.2
W-1537	E-1	SK422	弥生後期	杭　広葉樹丸太材	15157	マメガキ	25.5	3.8	3.1
W-1539	E-1	SK422	弥生後期	杭　針葉樹割材	14397	スギ	71.2	4.0	2.0
W-1541	E-1	SK422	弥生後期	杭　広葉樹割材	15159	スダジイ	52.0	6.2	5.3
W-1542	E-1	SK422	弥生後期	杭　針葉樹板材	15160	コジイ	21.3	5.2	2.5
W-1543	E-1	SK422	弥生後期	矢板　板の転用	14790	スギ	98.0	19.5	2.2
W-1545	E-1	SK422	弥生後期	矢板（板状木製品）	15010	スギ	72.5	10.5	2.7
W-1547	E-1	SK422	弥生後期	杭　針葉樹角材	15161	コジイ	36.0	3.0	2.3
W-1550	E-1	SK422	弥生後期	杭　広葉樹丸太材	15011	タイミンタチバナ	95.0	5.5	6.0
W-1551	E-1	SK422	弥生後期	杭　角材	15158	コジイ	45.7	4.5	4.2
W-1554	E-1	SK422	弥生後期	杭　広葉樹丸太材	15012	スダジイ	88.0	4.5	3.0
W-1558	E-1	SK422	弥生後期	杭　広葉樹丸太材	15013	タイミンタチバナ	69.0	7.0	7.5
W-1559	E-1	SK422	弥生後期	杭　針葉樹板材	13877	スギ	107.0	6.5	3.3
W-1562	E-1	SK422	弥生後期	杭　広葉樹丸太材	15014	アカガシ亜属	82.0	5.0	4.8
W-1563	E-1	SK422	弥生後期	杭　針葉樹角材	15015	スギ	54.0	4.2	3.0
W-1565	E-1	SK422	弥生後期	杭　針葉樹角材	15016	クリ	81.2	4.5	4.2
W-1567	E-1	SK422	弥生後期	横板	14797	スギ	44.0	2.5	1.5
W-1569	E-1	SK422	弥生後期	横木　板状木製品	14791	スギ	25.2	5.5	3.4
W-1570	E-1	SK422	弥生後期	横木　板状木製品　針葉樹	15017	スギ	141.0	6.0	2.6
W-1573	E-1	SK422	弥生後期	杭　針葉樹角状（割面）	13878	スギ	135.0	6.0	4.8
W-1574	E-1	SK422	弥生後期	杭　針葉樹角材	15018	スギ	97.5	4.3	3.8
W-1577	E-1	SK422	弥生後期	杭　針葉樹板材	14792	スギ	91.0	4.0	2.0
W-1584	E-1	SK422	弥生後期	杭　広葉樹板材　ミカン割材	15019	スダジイ	93.5	12.0	4.5
W-1585	E-1	SK422	弥生後期	杭　針葉樹角材	15020	スギ	58.5	3.2	2.7
W-1586	E-1	SK422	弥生後期	杭　針葉樹角材	13879	スギ	36.8	4.2	2.5
W-1587	E-1	SK422	弥生後期	杭　針葉樹割材	14793	スギ	64.0	4.0	3.5
W-1588	E-1	SK422	弥生後期	杭　広葉樹丸太材	15162	マメガキ	35.6	3.2	3.0
W-1590	E-1	SK422	弥生後期	杭　針葉樹板材	14798	スギ	74.0	4.0	2.0
W-1592	E-1	SK422	弥生後期	杭　針葉樹割材	14794	スギ	91.5	5.2	3.2
W-1594	E-1	SK422	弥生後期	杭　広葉樹丸太材	15021	タイミンタチバナ	97.5	6.2	6.5
W-1595	E-1	SK422	弥生後期	杭　針葉樹角材	14795	スギ	69.0	5.5	4.0
W-1596	E-1	SK422	弥生後期	杭　針葉樹割材　半裁材	13880	スギ	131.0	7.8	5.3
W-1597	E-1	SK422	弥生後期	丸太材	15022	イヌマキ属	86.5	6.0	5.0
W-1598	E-1	SK422	弥生後期	杭　針葉樹板材	14796	スギ	71.2	5.7	3.0
W-1599	E-1	SK422	弥生後期	杭　針葉樹角材	15163	クリ	34.5	3.5	3.6
W-1601	E-1	SK422	弥生後期	板状木製品	14785	スギ	51.7	10.2	2.0
W-1602	E-1	SK422	弥生後期	板状木製品	14799	スギ	55.5	7.5	4.0
W-1606	E-1	SK422	弥生後期	杭　広葉樹丸太材	15023	スダジイ	51.0	3.2	3.2
W-1611	E-1	SK422	弥生後期	杭　広葉樹割材	14800	スダジイ	62.0	4.0	3.2
W-1612	E-1	SK422	弥生後期	杭　広葉樹丸太材	15164	タイミンタチバナ	36.0	3.5	2.6
W-1615	E-1	SK422	弥生後期	杭？　針葉樹板材　板？	15024	スギ	49.0	7.0	2.8

第 16 表　出土木製品観察表

遺物番号	区	遺構 層位	時期	遺物名	プレパラート 番号	樹種	最大長 （cm）	最大幅 （cm）	厚み （cm）
W-1616	E-1	SK422	弥生後期	杭　針葉樹角材	15025	スギ	92.5	7.8	5.8
W-1622	E-1	SK422	弥生後期	杭　広葉樹丸太材	15165	コジイ	29.0	3.5	3.8
W-1623	E-1	SK422	弥生後期	杭　広葉樹丸太材	15166	ヌルデ	41.8	3.0	3.0
W-1627	E-1	SK422	弥生後期	杭　広葉樹割材　三角材？	14803	コジイ	32.8	4.6	3.6
W-1640	E-1	SK422	弥生後期	杭　針葉樹板材	13881	スギ	22.5	7.5	3.5
W-1641	E-1	SK422	弥生後期	板状木製品	14801	スギ	65.8	10.5	2.2
W-1645	E-1	SK422	弥生後期	板状木製品	14804	スギ	37.5	13.2	
W-1653	E-1	SK422	弥生後期	（丸）棒状木製品　広葉樹 芯持ち材	15026	サカキ	108.5	5.0	4.5
W-1651	E-1	SK422	弥生後期	棒状木製品（角）	14805	スギ	83.5	2.7	2.5
W-1710	E-2		中～近世	曲物の底板か？	13882%	スギ	7.3	2.2	0.3
W-1712	E-2		中～近世	箸か？	15167	ツツジ属	12.0	0.6	0.4
W-1717	E-2	1567	中世		14812	アカマツ	5.8	2.3	1.5
W-1733	E-2	3620	中～近世	柱根	15168	クリ	31.5	12.5	7.8
W-1734	E-2		中～近世	柱根	15169	クリ	26.0	11.5	13.0
W-1735	E-2		中～近世	柱根	15170	クリ	38.0	15.6	23.5
W-1736	E-2		中～近世	柱根	15171	クリ	32.0	14.5	13.0
W-1745	E-2	SP1041(SH208)	中～近世	柱根	15172	クリ	29.0	25.0	18.5
W-1746	E-2	SP2489(SA102C)	中～近世	柱根	15173	クリ	31.5	17.8	12.5
W-1749	E-2	TR11	弥生後期	柱根の一部か	13883	スギ	13.0	8.5	3.2
W-1750	E-2	3276	中世	柱根（芯持ち材）	14806	クリ	33.0	9.7	8.5
W-1751	E-2	3285	中世	柱根（芯持ち材）	14813	クリ	22.5	11.0	9.5
W-1752	E-2	3435	中世	柱根（芯持ち材）	15058	クリ	9.0	13.0	7.8
W-1753	E-2	2306	中世	柱根（芯持ち材）	14807	クリ	20.5	13.0	7.5
W-1754	E-2		中世	柱根（芯持ち材）	14808	クリ	45.0	13.8	13.0
W-1755	E-2		中世	柱根（芯持ち材）	14814	クリ	13.5	10.0	4.5
W-1756	E-2	2785	中世	柱根（芯持ち材）	15069	コナラ節	24.5	7.5	8.5
W-1757	E-2	2864	中世	柱根（芯持ち材）	14809	クリ	23.5	22.5	16.8
W-1758	E-2	3022	中世	柱根	14810	クリ	25.0	23.0	21.8
W-1759	E-2	SH3635(SH129)	中世	柱根　広葉樹　芯持ち材	14811	クリ	19.8	6.2	5.8
W-1760	E-2	3822	中世	柱根　広葉樹　芯持ち材	14815	ヤマザクラ	17.0	7.5	5.8
W-1761	E-2	3638	中世	柱根　広葉樹　芯持ち材	14816	クリ	21.2	7.0	5.0
W-1762	E-2	2222	中世	柱根　広葉樹　芯持ち材	14817	クリ	22.5	8.5	7.5
W-1763	E-2	3902	中世	柱根　広葉樹　半裁材	14818	クリ	34.0	8.5	6.0
W-1764	E-2	3980	中世	柱根　樹種不明　角材	14819	クリ	25.0	12.0	8.9
W-1765	E-2	3543	中世	柱根　広葉樹　芯持ち材	14820	ヤマザクラ	22.0	14.5	
W-1766	E-2	3770	中世	柱根　広葉樹　芯持ち材	14821	クリ	32.5	12.8	14.2
W-1767	E-2	3622	中世	柱根　広葉樹	14828	クリ	22.0	12.3	5.2
W-1768	E-2	3742	中世	柱根	14823	クリ	32.0	16.0	13.0
W-1769	E-2	3930	中世	柱根　広葉樹　芯持ち材	14822	クリ	30.5	13.0	13.0
W-1770	E-2	2403	中世	柱根	14824	クリ	32.0	19.0	17.5
W-1771	E-2		中世	柱根	14825	クリ	38.0	22.0	19.5
W-1772	E-2	3948	中世	柱根　広葉樹　芯持ち材	14826	クリ	30.5	19.0	18.5
W-1774	E-2	3573	中世？	柱根	14977	広葉樹樹皮	33.5	15.0	11.0
W-1778	E-2		古墳後期	杭？	14827%	スギ	30.2	2.3	
W-1781	E-2	SD6170	中～近世	曲物側板	13957	スギ	45.0	2.9	
W-1811	E-2	SR6400	弥生後期	角棒状　針葉樹　割面	15027	スギ	130.1	4.4	2.7
W-1812	E-2	SR6400	弥生後期	角棒状	14829	スギ	86.6	2.7	1.6
W-1813	E-2	SR6400	弥生後期	杭	14830	スギ	119.8	4.2	
W-1816	E-2	SR6400	弥生後期	角棒状	14831	スギ	47.6	3.6	2.5
W-1817	E-2	SR6400	弥生後期	杭	14832	クリ	18.8	5.0	1.0
W-1825	E-2	SR6400	弥生後期	ミカン割材　広葉樹	14833	コジイ	47.2	7.7	
W-1827	E-2	SR6400	弥生後期	梯子？	14834	スギ	29.2	6.5	
W-1819	E-2	SR6400	弥生後期	杭	14835	クリ	33.6	7.6	1.8
W-1826	E-2	SR6400	弥生後期	ミカン割材　広葉樹	14836	コジイ	56.2	5.3	
W-1828	E-2	SR6400	弥生後期	板状木製品	14837	スギ	39.2	5.0	
W-1829	E-2	SR6400	弥生後期	杭	14838	スギ	73.6	4.9	
W-1830	E-2	SR6400	弥生後期	棒状	14839	スギ	24.3	2.2	
W-1831	E-2	SR6400	弥生後期	丸棒状？自然木	14840	イヌマキ属	76.6	3.3	
W-1832	E-2	SR6400	弥生後期	角棒状	14841	スギ	113.0	2.2	
W-1833	E-2	SR6400	弥生後期	角棒状	14842	スギ	28	2.4	
W-1834	E-2	SR6400	弥生後期	板状木製品	14843	スギ	105.2	9.0	
W-1835	E-2	SR6400	弥生後期	板状木製品（薄い）	14978	スギ	40.2	1.5	
W-1836	E-2	SR6400	弥生後期	ミカン割材　広葉樹	14845	コジイ	22.8	9.5	
W-1841	E-2	SR6400	弥生後期	杭？丸太割材	14847	クリ	74.0	9.3	
W-1842	E-2	SR6400	弥生後期	ミカン割材	14848	アカガシ亜属	27.6	6.0	
W-1843	E-2	SR6400	弥生後期	板状木製品	14849	ネムノキ	42.2	7.4	
W-1844	E-2	SR6400	弥生後期	板状木製品　針葉樹	14846	スギ	38.4	2.6	
W-1845	E-2	SR6400	弥生後期	板状木製品　広葉樹	14850	ネムノキ	28.5	6.9	
W-1846	E-2	SR6400	弥生後期	半裁材　広葉樹	14852	クリ	17.3	6.0	
W-1847	E-2	SR6400	弥生後期	棒状	14853	コジイ	17.2	2.9	
W-1850	E-2	SR6400	弥生後期	板状木製品　広葉樹	14854	モミ属	89.9	12.2	
W-1851	E-2	SR6400	弥生後期	広葉樹　丸太材　半分炭化	14855	クヌギ節	41.0	10.2	
W-1858	E-2	SR6400	弥生後期	自然木　針葉樹　丸太	14856	イヌマキ属	33.3	1.5	

第 16 表　出土木製品観察表

遺物番号	区	遺構 層位	時期	遺物名	プレパラート 番号	樹種	最大長 （cm）	最大幅 （cm）	厚み （cm）
W-1860	E-2	SR6400	弥生後期	棒状	9555	クリ	31.2	3.6	1.3
W-1861	E-2	SR6400	弥生後期	棒状	9556	サクラ属	26.8	2.5	1.3
W-1863	E-2	SR6400	弥生後期	板状木製品	14851	スギ	60.3	4.0	
W-1865	E-2	SR6400	弥生後期	板状木製品　針葉樹	14857	スギ	13.0	4.4	3.0
W-1866	E-2	SR6400	弥生後期	板　針葉樹板材	14858	スギ	27.5	9.7	
W-1870	E-2	SR6400	弥生後期	杭？　針葉樹？	14859	コジイ	25.9	7.3	4.5
W-1872	E-2	SR6400	弥生後期	棒状木製品	14860	アカマツ	12.3	4.6	3.5
W-1875	E-2	SR6400	弥生後期	板状木製品	14861	スギ	59.7	4.0	
W-1876	E-2	SR6400	弥生後期	棒状木製品	14862	クリ	50.0	9.3	
W-1877	E-2	SR6400	弥生後期	棒状木製品	14863	スギ	73.2	2.9	
W-1879	E-2	SR6400	弥生後期	板状木製品	14864	クリ	22.3	4.6	
W-1892	E-2	SR6400	弥生後期	板状木製品	14865	スギ	58.6	2.9	
W-1893	E-2	SR6400	弥生後期	角棒状	14866	スギ	72.2	2.2	
W-1894	E-2	SR6400	弥生後期	杭　丸太材	14867	タイミンタチバナ	48.7	5.0	
W-1895	E-2	SR6400	弥生後期	板状木製品	14868	スギ	8.2	4.7	
W-1907	E-2	SR6400	弥生後期	板状木製品	14869	スギ	44.6	4.2	
W-1908	E-2	SR6400	弥生後期	棒状木製品	14870	スギ	38.7	2.0	
W-1909	E-2	SR6400	弥生後期	板状木製品	14871	クスノキ	45.0	10.5	4.5
W-1911	E-2	SP6526-2(SH213)	弥生後期	礎板	14872	スギ	29.0	16.3	
W-1913	E-2	6531-1	弥生後期	礎板	14873	クスノキ	15.4	14.5	
W-1914	E-2	6531-2	弥生後期	礎板	14874	クスノキ	14.8	10.4	
W-1916	E-2	SR6400	弥生後期	板状木製品	14876	コジイ	12.8	3.8	
W-1918	E-2	SR6400	弥生後期	板状木製品	14875	スギ	25.8	8.8	
W-1919	E-2	SD6171	弥生後期	杭？	14877	ヤマザクラ	30.4	2.6	
W-1920	E-2	6529	弥生後期	礎板	14879	スギ	30.9	8.8	
W-1921	E-2	6052	弥生後期	礎板	14878	スギ	30.1	29.1	
W-1922	E-2	SP6541(SH218)	弥生後期	礎板	14880	スギ	27.4	11.3	
W-1923	E-2	SP6541(SH218)	弥生後期	礎板	14881	スギ	30.1	11.2	
W-1924	E-2	SP6527-3(SH213)	弥生後期	柱根	14882	イヌマキ属	16.6	8.4	4.5
W-1926	E-2		弥生後期	板状	14883	コジイ	42.7	7.0	
W-1928	E-2	SR6400	弥生後期	鍬？	15174	コジイ	12.2	4.4	
W-1929	E-2	SR6400	弥生後期	鍬？	15175	コジイ	10.6	8.9	
W-1930	E-2	6049	弥生後期	礎板	14884	スギ	55.3	17.2	
W-1931	E-2		弥生後期	棒状	14885	クリ	14.2	4.6	
W-1932	E-2	6057	弥生後期	礎板	14886	スギ	36.8	21.2	
W-1935	E-2	SP6105(SH210)	弥生後期	礎板	14887	スギ	18.2	17.0	
W-1936	E-2	6432	弥生後期	礎板	14888	スギ	29.2	29.6	
W-1939	E-2	SR6400	弥生後期	棒状	14889	スギ	84.3	4.4	
W-1940	E-2	6561 ①	弥生後期	礎板	14890	スギ	14.1	9.2	
W-1941	E-2	6561 ②	弥生後期	礎板	14891	スギ	12.4	6.2	
W-1942	E-2	6561 ③	弥生後期	礎板	14892	スギ	11.9	3.0	
W-1945	E-2	6267	弥生後期	柱　柱根	14893	クリ	28.3	13.7	8.0
W-1946	E-2	SP6213	弥生後期	柱　柱根	14894	クリ	17.4	13.5	11.0
W-1947	E-2		弥生後期	板状	14895	コジイ	11.0	3.5	
W-1948	E-2	SR6400	弥生後期	角材	14896	スギ	86.1	7.9	
W-1951	E-2	6584	弥生後期	礎板（針葉樹板材）	15028	スギ	38.9	28.2	
W-1952	E-2	6565	弥生後期	礎板（針葉樹板材）	15029	スギ	34.2	11.6	
W-1953	E-2	6566	弥生後期	礎板（針葉樹板材）	15030	スギ	34.7	21.2	
W-1955	E-2	6052	弥生後期	礎板	14897	スギ	43.1	17.7	
W-1959	E-2	SD6171	中世	棒状　自然木？	14898	タイミンタチバナ	36.0	8.0	
W-1960	E-2	SR6400	弥生後期	不明	14899	スダジイ	14.5	9.3	
W-1961	E-2		弥生後期	礎板	14900	スギ	25.3	27.1	
W-1962	E-2	6598	弥生後期	礎板	14901	スギ	30.3	12.9	
W-1963	E-2		弥生後期	礎板	14902	スギ	42.6		
W-1964	E-2		弥生後期	礎板	14903	スギ	47.2	14.0	
W-1965	E-2	6600	弥生後期	礎板（針葉樹板材）	15031	スギ	18.2	7.4	
W-2001	E-2	SK6662	古墳後期	杭　針葉樹　割材	15032	スギ	98.3	8.0	5.5
W-2003	E-2	SK6662	古墳後期	横板　針葉樹板材	15033	スギ	122.3	7.3	
W-2007	E-2	SK6662	古墳後期	杭　丸太材（広葉樹）	15034	コジイ	43.1	3.5	
W-2008	E-2	SK6662	古墳後期	杭　丸太材（針葉樹）	15035	サカキ	56.5	2.9	
W-2009	E-2	SK6662	古墳後期	杭　丸太材（針葉樹）	15036	イヌマキ属	53.2	3.2	
W-2010	E-2	SK6662	古墳後期	杭　丸太材	15037	イヌマキ属	63.7	2.8	
W-2011	E-2	SK6662	弥生後期～ 古墳後期	杭　針葉樹　割材	14908	スギ	96.8	5.7	5.0
W-2012	E-2	SK6662	古墳後期	倒れた杭（針葉樹　割材）	15038	スギ	52.3	11.9	
W-2013	E-2	SK6662	古墳後期	横木　針葉樹　割材	15039	スギ	46.2	7.0	
W-2021	E-2		弥生後期	針葉樹　角棒状	15040	スギ	65.5	2.7	
W-2022	E-2	SK6754	弥生後期	杭　針葉樹　板材	15041	スギ	8.3	5.2	
W-2023	E-2		弥生後期	杭　針葉樹　板材	15042	アカガシ亜属	10.5	3.6	
W-2024	E-2	SK422	弥生後期	杭　針葉樹　割材	15043	クリ	44.7	9.0	
W-2025	E-2	SK422	弥生後期	杭　針葉樹　割材	15044	クリ	56.7	6.7	
W-2026	E-2	SK422	弥生後期	杭　針葉樹　割材	15045	クリ	57.2	7.4	
W-2027	E-2	SK422	弥生後期	杭　針葉樹　割材	15046	クリ	41.0	5.4	
W-2028	E-2	SK422	弥生後期	杭　針葉樹　割材	15047	クリ	29.0	6.3	

第 16 表　出土木製品観察表

遺物番号	区	遺構 層位	時期	遺物名	プレパラート 番号	樹種	最大長 （cm）	最大幅 （cm）	厚み （cm）
W-2029	E-2	SK422	弥生後期	矢板　針葉樹　板材	15048	スギ	63.2	13.0	
W-2044	E-2	SP6752(SB215)	弥生後期	柱・杭　柱根？杭？　針葉樹割材	15049	イヌマキ属	27.2	7.5	
W-2045	E-2	SP6666(SB215)	弥生後期	柱根	15050	クリ	21.5	19.0	
W-2065	E-2	SK6774	弥生後期	杭　針葉樹　割材	14923	クリ	54.1	5.6	
W-2066	E-2	SK6774	弥生後期	杭　針葉樹　割材	14925	スギ	55.7	5.0	
W-2068	E-2	SK6774	弥生後期	矢板　針葉樹　板状木製品	14926	スギ	33.9	6.8	
W-2071	E-2	SK6774	弥生後期	杭　針葉樹　割材	14927	クリ	45.1	6.0	
W-2072	E-2	SK6774	弥生後期	杭　針葉樹　割材	14928	クリ	50.7	7.4	5.0
W-2073	E-2	SK6774	弥生後期	杭　針葉樹　割材	14929	クリ	58.7	10.7	5.0
W-2074	E-2	SK6774	弥生後期	杭　針葉樹　割材	14930	クリ	64.3	8.2	
W-2078	E-2	SK6774	弥生後期	杭　針葉樹　割材	14931	クリ	105.0	6.8	6.5
W-2080	E-2	SK6774	弥生後期	杭　針葉樹　割材	15051	クリ	63.0	8.9	5.5
W-2081	E-2	SK6774	弥生後期	杭　針葉樹　割材	15052	クリ	67.3	9.4	6.0
W-2083	E-2	SK6774	弥生後期	杭　針葉樹　割材	15053	クリ	52.0	10.0	6.5
W-2085	E-2	SK6774	弥生後期	矢板　針葉樹　板状木製品	15054	スギ	45.0	11.0	
W-2096	E-2	SK6774	弥生後期	杭　針葉樹　割材	15055	クリ	36.1	6.1	
W-2103	E-2	SK6774	弥生後期	杭　針葉樹　割材	15056	スギ	65.2	6.1	
W-2106	E-2	SK6774	弥生後期	杭　針葉樹　割材	15057	クリ	77.5	9.8	
W-2107	E-2	SK6774	弥生後期	杭　針葉樹　割材	15059	クリ	68.1	9.3	
W-2109	E-2	SK6774	弥生後期	杭　針葉樹　割材	15060	スギ	70.2	6.2	6.0
W-2111	E-2	SK6774	弥生後期	杭　針葉樹　割材	15061	クリ	68.5	8.2	6.0
W-2113	E-2	SK6774	弥生後期	矢板　針葉樹　板状木製品 （ほぞ穴有り）	15062	スギ	43.1	9.1	
W-2117	E-2	SK6774	弥生後期	杭　針葉樹　割材	15063	スギ	51.3	7.2	
W-2118	E-2	SK6774	弥生後期	杭　針葉樹　割材	15064	スギ	47.5	7.0	
W-2133	E-2	SK6773	弥生後期	杭　針葉樹　割材	15065	コジイ	35.5	5.7	
W-2137	E-2	SK6773	弥生後期	杭　針葉樹　板状木製品 （ほぞ穴有り）	15066	スギ	78.5	9.5	
W-2141	E-2	SK6662	弥生後期～古墳後期	矢板　針葉樹　板状木製品	14924	スギ	38.2	9.3	
W-2142	E-2	SK6662	弥生後期～古墳後期	矢板　針葉樹　板状木製品	14932	スギ	37.3	11.6	
W-2145	E-2	SK6662	弥生後期～古墳後期	杭　針葉樹　割材	14933	スギ	107.4	9.0	5.5
W-2146	E-2	SK6662	弥生後期～古墳後期	杭　針葉樹　割材	14934	スギ	104.2	8.4	3.5
W-1992	E-3	SE8036	中世	板	14904	スギ	66.0	7.5	
W-1993	E-3	SP8304(SH204)	中世	柱根	14905	サクラ属	11.0	5.5	
W-1994	E-3		中世？	板状	14979	スギ	15.9	3.1	
W-1995	E-3	SP8939(SH202)	中世	柱根	14906	クリ	16.4	8.3	7.5
W-1997	E-3		中～近世	板状	14907	スギ	18.4	3.6	
W-2024	E-3	SE8036	中世	板状木製品　加工有り（炭化）	14916	ウバメガシ	25.5	5.6	4.0
W-2030	E-3		不明	板状	14909	スギ	23.5	2.6	
W-2031	E-3		不明	杭　丸太材	14910	ウツギ	25.0	3.0	
W-2032	E-3	SE8036	中世	棒状木製品	14911	スギ	54.7	6.3	5.0
W-2033	E-3	SE8036	中世	棒状木製品	14912	スギ	24.3	4.6	
W-2038	E-3	SE8036	中世	板状木製品	14913	スギ	16.0	6.4	
W-2039	E-3	SE8036	中世	棒状木製品　針葉樹	14914	イヌマキ属	36.4	4.8	
W-2040	E-3	SE8036	中世	板状木製品（薄板）	14980	スギ	16.8	2.1	
W-2043	E-3		中世	板状木製品	14915	スギ			
W-2047	E-3	SE8036	中世	板状木製品	14917	スギ	33.1	6.8	
W-2048	E-3	SE8036	中世	板状木製品	14981	スギ	12.6	3.1	
W-2049	E-3	SE8036	中世	板状木製品　（加工有り）	14918	スギ	27.1	10.2	
W-2050	E-3	SE8036	中世	板状木製品	14919	スギ	23.9	7.6	
W-2051	E-3	SE8036	中世	板状木製品	14920	スギ	31.1	11.1	
W-2052	E-3	SE8036	中世	板状木製品	14921	スギ	55.0	4.8	
W-2056	E-3	SE8680	中～近世	礎板？	14922	スギ	17.0	9.2	
W-2171	E-3		中～近世	板状	14936	スギ	10.1	2.2	
W-2215	E-3		奈良～平安	板状	14937	スギ	37.3	13.3	
W-2235	E-3	SE8036	中世	井戸材	12492	スギ			
W-2252	E-3		奈良～平安	板状	14938	スギ	36.4	3.6	
W-2265	E-3		古墳後期	端材　広葉樹	15067	イヌマキ属	18.2	17.8	
W-2340	E-3	SK10466	弥生後期	板状木製品　針葉樹（割面）	14935	スギ	57.3	12.3	2.5
W-2342	E-3	SK10466	弥生後期	板状木製品　針葉樹 片面加工痕有り	14939	スギ	64.3	24.4	1.0
W-2348	E-3	SK10466	弥生後期	板状木製品　針葉樹	15068	スギ	74.0	34.2	2.1
W-2350	E-3	SK10466	弥生後期	板状木製品　針葉樹 割面　表面炭化	15070	スギ	70.6	28.2	4.6
W-2362	E-3	SK10466	弥生後期	板状木製品	15071	スギ	61.7	22.8	3.4
W-2367	E-3	SK10466	弥生後期	板状木製品	15072	スギ	73.5	25.4	1.7
W-2378	E-3	SK10466	弥生後期	杭　針葉樹　割材	15073	クリ	96.0	8.5	7.5
W-2380	E-3	SK10466	弥生後期	板状木製品　針葉樹（割面）	15074	スギ	56.0	22.3	1.0
W-2382	E-3	SK10466	弥生後期	板状木製品　針葉樹（割面）	15075	スギ	49.5	16.6	1.2
W-2384	E-3	SK10466	弥生後期	板状木製品　針葉樹（割面）	15076	スギ	46.8	19.4	2.3

第 16 表　出土木製品観察表

遺物番号	区	遺構 層位	時期	遺物名	プレパラート 番号	樹種	最大長 （cm）	最大幅 （cm）	厚み （cm）
W-2385	E-3	SK10466	弥生後期	板材	14940	スギ	72.0	29.5	2.4
W-2386	E-3	SK10466	弥生後期	板状木製品　針葉樹　礎板か？	15077	スギ	48.5	27.0	2.0
W-10021	E-4		奈良～平安	丸棒状木製品	14941	スギ	19.3	2.5	2.3
W-10045	E-4		弥生後期	板状木製品　広葉樹（用途不明品）	14942	コジイ	58.5	7.9	2.9
W-10062	E-4		弥生後期	板状木製品　針葉樹 （一部加工痕有り）	14943	スギ	98.3	29.7	0.8
W-10063	E-4		弥生後期	板状木製品　針葉樹	14944	スギ	117.9	6.4	1.2
W-10068	E-4		弥生後期	板状木製品　針葉樹	14945	スギ	29.3	11.2	1.8
W-10069	E-4		弥生後期	板状木製品　針葉樹	14946	スギ	58.9	12.1	2.4
W-10074	E-4		弥生後期	棒状木製品　用途不明	14947	クリ	35.2	2.5	1.2
W-10103	E-4		弥生後期	板状木製品　針葉樹	15078	スギ	71.2	30.7	1.2
W-10105	E-4		弥生後期	板状木製品　針葉樹	15079	スギ	105.3	12.6	0.4
W-10114	E-4		弥生後期	板状木製品　針葉樹（ほぞ穴有り）	15080	スギ	80.1	9.2	0.5
W-10121	E-4		弥生後期	板状木製品　針葉樹（両面加工有り）	15081	スギ	86.6	7.4	7.8
W-10143	E-4	SK5002	弥生後期	角棒状木製品　針葉樹	15082	スギ	60.6	4.1	2.0
W-10165	E-4		弥生後期	板状木製品　針葉樹（割材）	15083	スギ	200.2	19.7	4.2
W-10167	E-4		弥生後期	板状木製品　針葉樹　割面　建築材	15084	スギ	161.2	15.7	3.7
W-10173	E-4		弥生後期	広葉樹　半裁材	15085	クリ	22.45	13.0	3.0
W-10175	E-4		弥生後期	板状木製品　針葉樹　ほぞ穴有り	15086	スギ	128.6	24.9	1.9
W-10178	E-4		弥生後期	板状木製品　針葉樹	15087	スギ	108.0	13.2	0.8
W-10186	E-4		弥生後期	板状木製品　針葉樹 割面（円形切りかけ有り）	15088	スギ	206.3	23.7	2.3
W-10189	E-4		弥生後期	板状木製品　針葉樹　割面	15089	スギ	142.4	11.7	2.3
W-10191	E-4		弥生後期	板状木製品　針葉樹	15090	コジイ	108.0	8.4	1.8
W-10197	E-4		弥生後期	板状木製品　針葉樹　ほぞ穴有り	15091	コジイ	199.3	11.8	1.2
W-10213	E-4		弥生後期	製材板　広葉樹	15092	コジイ	282.2	18.2	3.0
W-10221	E-4		弥生後期	板状木製品　針葉樹（割面）	15093	スギ	49.0	7.6	1.7
W-10223	E-4		弥生後期	板状木製品　針葉樹（割面）	15094	スギ	80.3	11.1	1.6
W-10227	E-4		弥生後期	板状木製品 針葉樹（ほぞ穴・加工痕・炭化有り）	15095	スギ	132.7	15.3	2.2
W-10229	E-4		弥生後期	板状木製品　針葉樹（割面）	15096	スギ	184.8	15.7	2.0
W-10230	E-4		弥生後期	板状木製品　針葉樹（割材）	15097	スギ	72.2	14.2	1.4
W-10231	E-4		弥生後期	板状木製品　針葉樹（割材）	15098	モミ属	88.6	17.1	1.5
W-15049	E-5	TR2	弥生後期	暗渠構成の木	14948	スギ	40.5	26.0	2.4
W-15050	E-5	TR2	弥生後期	暗渠構成の木	14949	スギ	28.3	25.4	2.0
W-15051	E-5		弥生後期	暗渠構成の木	14950	スギ	42.0	21.5	1.7
W-15035	E-5	TR2	弥生後期	角棒状木製品　針葉樹　杭状	15099	スギ	71.5	3.2	2.6
W-15052	E-5	TR2	弥生後期	矢板に加工　針葉樹　板状木製品	15100	スギ	42.5	15.7	3.5
W-204	A-1		中～近世	木片	9548	サカキ			
W-216	A-2	7 層	平安	用途不明品	9549	スギ			
W-217	A-2	7 層	平安	用途不明品	9450	クリ			
W-283	A-2	SK600　9 層	弥生後期	木片	9546	コナラ節	21.3	1.8	1.3
W-289	A-2	SK603　9 層	弥生後期	棒状	9554	スギ	21.6	1.6	1
W-291	A-2	SK603　9 層	弥生後期	棒状	9552	スギ	45	2.8	1.7
W-377	A-2	SX598　9 層	弥生後期	土木材　矢板	9404	スギ	58.4	8.6	0.9
W-379	A-2	SX598　9 層	弥生後期	土木材　矢板	9405	スギ	28.7	11.8	1.4
W-384	A-2	SX598　9 層	弥生後期	土木材　杭	9406	イヌマキ属	81.5	5.4	4.2
W-405	A-2	SX598　9 層	弥生後期	—	9407	スギ	48.3	11.5	2
W-423	A-2	SX598　9 層	弥生後期	土木材　矢板	9408	スギ	59	12.6	1.7
W-434		SX598	弥生後期	矢板	9409	スギ			
W-472	A-2	SK596　9 層	弥生後期	土木材　杭	9430	ムクロジ	82	5.3	3.6
W-473	A-2	SK596　9 層	弥生後期	土木材　杭	9431	スギ	104.6	3.8	1.8
W-480	A-2	SK596　9 層	弥生後期	土木材　杭	9432	クリ	126	8.2	5
W-489	A-2	SK596　9 層	弥生後期	土木材　杭	9433	スギ	87.3	10.5	2
W-497	A-2	SK596　9 層	弥生後期	土木材　杭	9434	ムクロジ	67.8	4.9	4.2
W-498	A-2	SK596　9 層	弥生後期	土木材　杭	9435	スギ	49.8	4.8	2.5
W-499	A-2	SK596　9 層	弥生後期	土木材　杭	9436	スギ	45	3	2.4
W-502	A-2	SK596　9 層	弥生後期	土木材　杭	9437	スギ	63.5	5	2.4
W-503	A-2	SK596　9 層	弥生後期	土木材　杭	9438	スギ	90.8	5.2	3.2
W-504	A-2	SK596　9 層	弥生後期	土木材　杭	9439	スギ	62.1	5.2	2.9
W-505	A-2	SK596　9 層	弥生後期	土木材　杭	9440	スギ	69.7	6.5	1.5
W-506	A-2	SK596　9 層	弥生後期	土木材　杭	9441	スギ	97.4	4	2.9
W-510	A-2	SK596　9 層	弥生後期	土木材　杭	9442	スギ	95	3.5	2.6
W-513	A-2	SK596　9 層	弥生後期	土木材　杭	9443	スギ	61	5.2	2.9
W-515-2	A-2	SK596　9 層	弥生後期	土木材　矢板	9296	スギ	45.8	3.2	1.5
W-520	A-2	SK596　9 層	弥生後期	土木材　杭	9444	クリ	134.8	9.5	6.2
W-523	A-2	SK596　9 層	弥生後期	土木材　矢板	9445	スギ	49.5	6.6	2.3
W-524	A-2	SK596　9 層	弥生後期	土木材　杭	9447	スギ	114	3.7	3.1
W-525	A-2	SK596　9 層	弥生後期	土木材　杭	9448	スギ	107.3	3.6	3.1
W-530	A-2	SK596　9 層	弥生後期	土木材　杭	9450	クリ	68.8	9.3	5.4
W-531	A-2	SK596　9 層	弥生後期	土木材　杭	9451	スギ	56.3	3.3	1.6
W-533	A-2	SK596　9 層	弥生後期	土木材　矢板	9452	スギ	59.7	14.2	2.3
W-538	A-2	SK596　9 層	弥生後期	土木材　杭	9453	スギ	105.3	4.8	3.8
W-542	A-2	SK596　9 層	弥生後期	土木材　杭	9454	ムクロジ	52.3	10.9	4

第 16 表　出土木製品観察表

遺物番号	区	遺構 層位	時期	遺物名	プレパラート 番号	樹種	最大長 （cm）	最大幅 （cm）	厚み （cm）
W-545	A-2	SK596　9層	弥生後期	土木材　杭	9455	スギ	110	4.5	3.9
W-564	A-2	SK599　9層	弥生後期	土木材　杭	9456	スギ	49.8	5.8	3.3
W-566	A-2	SK599　9層	弥生後期	土木材　杭	9457	スギ	80.5	6.7	5.2
W-573	A-2	SK599　9層	弥生後期	土木材　杭	9458	スギ	68	6.2	3.1
W-580	A-2	SK599　9層	弥生後期	土木材　杭	9459	スギ	83.7	9.2	4.3
W-581	A-2	SK599　9層	弥生後期	土木材　杭	9460	スギ	92	8.2	5.5
W-586	A-2	SK599　9層	弥生後期	土木材　杭	9461	スギ	83.2	7.5	4.3
W-587	A-2	SK599　9層	弥生後期	土木材　杭	9462	スギ	85	8	5.3
W-596	A-2	SK599　9層	弥生後期	土木材　杭	9463	スギ	79.3	7.4	4.6
W-597	A-2	SK599　9層	弥生後期	土木材　杭	9464	スギ	84	8	6.5
W-598	A-2	SK599　9層	弥生後期	土木材　杭	9465	スギ	90.7	5.3	6
W-599	A-2	SK599　9層	弥生後期	土木材　杭	9466	スギ	82.3	7.2	4.5
W-600	A-2	SK599　9層	弥生後期	土木材　杭	9519	スギ	78.3	7.5	4.5
W-601	A-2	SK599　9層	弥生後期	土木材　杭	9520	スギ	98.5	6.2	4.5
W-602	A-2	SK599　9層	弥生後期	土木材　杭	9521	スギ	98.2	2.6	2.5
W-611	A-2	SK599　9層	弥生後期	土木材　杭	9522	スギ	96.7	7.7	7.2
W-613	A-2	SK599　9層	弥生後期	土木材　杭	9523	スギ	73	7.5	4.7
W-615	A-2	SK599　9層	弥生後期	土木材　矢板	9524	スギ	78	12.5	1.9
W-623	A-2	SK599　9層	弥生後期	土木材　杭	9525	スギ	83.7	4.6	3
W-624	A-2	SK599　9層	弥生後期	土木材　杭	9526	スギ	71.6	2.7	2
W-626	A-2	SK599　9層	弥生後期	用途不明品　板状（手斧痕あり）	9527	スギ	41	7.3	1.7
W-649	A-2	SK599　9層	弥生後期	土木材　杭	9528	スギ	79.8	7.5	2.8
W-663	A-2	SK599　9層	弥生後期	土木材　矢板	9529	スギ	52.5	22	1
W-666	A-2	SK599　9層	弥生後期	土木材　杭	9530	スギ	61	2.4	2.4
W-669	A-2	SK599　9層	弥生後期	土木材　矢板	9531	スギ	88.3	9.6	2
W-671	A-2	SK599　9層	弥生後期	土木材　矢板	9532	スギ	62.5	10.5	0.5
W-672	A-2	SK599　9層	弥生後期	土木材　杭	9533	スギ	48.8	4	3.8
W-675	A-2	SK599　9層	弥生後期	土木材　矢板	9202	スギ	43.6	20.5	2.8
W-694	A-2	SK599　9層	弥生後期	用途不明品　板状	9534	スギ	112	8.2	1.7
W-697	A-2	SK599　9層	弥生後期	土木材　杭	9535	スギ	51.6	4.5	1.1
W-703	A-2	SK599　9層	弥生後期	土木材　杭	9536	クリ	35	6.7	4
W-704	A-2	SK599　9層	弥生後期	土木材　杭	8753	スギ	66.4	6.1	4.2
W-706	A-2	SK599　9層	弥生後期	土木材　杭	9537	スギ	60.4	1.7	1.9
W-707	A-2	SK599　9層	弥生後期	土木材　杭	8754	クリ	62.7	6.3	3.8
W-724	A-2	SK599　9層	弥生後期	土木材	9538	スギ			
W-725	A-2	SK599　9層	弥生後期	土木材	9539	スギ			
W-727	A-2	SK599　9層	弥生後期	土木材	9540	スギ			
W-728	A-2	SK599　9層	弥生後期	土木材　杭	9541	スギ	55.5	6.5	3.7
W-736	A-2	SK599　9層	弥生後期	土木材　杭	9542	スギ	42	2.8	2.1
W-738	A-2	SK599　9層	弥生後期	板状木製品	9543	スギ	29	11	1.8
W-740	A-2	SK596　9層	弥生後期	土木材　杭	9544	スギ	61.2	4	2.1
W-814	A-2	SK599　9層	弥生後期	杭	9545	クリ	38.2	6.2	5
W-40 ①	B ?		時期不明	用途不明品	9913	クリ			
W-094	B	SK6	弥生後期	土木材　矢板	9394	スギ	74.2	11.5	2
W-111	B	SK6	弥生後期	土木材　矢板	9395	スギ	32	11.4	2.3
W-114	B	SK6	弥生後期	土木材　矢板	9396	スギ	32	10.2	0.7
W-115	B	SK6	弥生後期	土木材　矢板	9397	スギ	52.3	10.9	1.7
W-143	B	SK613	弥生後期	土木材　矢板	9398	スギ	74	11.2	2.3
W-153	B	SK613	弥生後期	土木材　矢板	9399	スギ	42.9	10	1.9
W-176	B	SK6	弥生後期	土木材　矢板	9400	スギ	35	7.4	1.2
W-180	B	SK6	弥生後期	土木材　矢板	9401	スギ	51	5.7	2.2
W-181	B	SK6	弥生後期	土木材　矢板	9402	スギ	54.7	12.8	1.4
W-188	B	SK6	弥生後期	土木材　杭	9403	スギ	100	9.5	6.4
W-1		TP8	弥生後期	針葉樹　板状木製品	14155	スギ	148.0	14.8	1.8
W-2		TP8	弥生後期	（手斧痕）針葉樹　板状木製品 （破風板？）	14156	スギ	175.5	17.3	1.1
W-3		TP8	弥生後期	板状木製品	14157	スギ	144.0	9.8	1.8
W-4 ③		TP8	弥生後期	棒状木製品　広葉樹	14158	コジイ	27.7	4.0	3.0
W-5		TP10	奈良～平安	杭	14159	スギ	56.7	8.8	10.2

第 17 表　竪穴住居計測表

遺構名	区	グリッド	主軸方向	間数		規模（m）		面積（㎡）		柱穴		備考
									床面	平均径（m）	柱痕	
SB204	E-2	109H-8	N-0°			(3.50)	(3.90)	(13.65)	(6.66)	(0.23)		
SB217	E-2	110F-1	N-41° -E			(3.30)	(3.90)	(12.87)	(8.41)	----		
SB301	E-3	129F・G-8	N-74.5° -W			(3.30)	(3.30)	(10.89)	(10.35)	(0.15)		
SB302	E-3	129B-10	N- 55° -W	1	2	(6.50)	(6.60)	(42.90)	(33.60)	(0.20)	○	SP9830 礎板有り
SB303	E-3	130C-1	N-40° -W			4.90	4.80	23.52	(19.15)	(0.18)	○	
SB304	E-3	130C-2	N-27° -E			4.30	4.90	19.35	21.07	(0.16)	○	SH-323 重複
SB305	E-3	130B-1	N-58° -W			7.30	(7.40)	(54.02)	(45.13)	(0.23)		SH-325 重複
SB307	E-3	129C・D-7.8	----			5.80	5.70	33.06	(28.08)	(0.33)	○	SH-311 重複
SB308	E-3	130C-1	N-36.5° -W			3.7	3.7	13.69	9.79	0.13	○	

第 18 表　掘立柱建物計測表

遺構名	区	グリッド	長軸方向	間数		規模（m）		桁÷梁	面積（㎡）	柱穴		備考
				梁	桁	梁	桁			平均径（m）	柱痕	
SH203	E-2	109I・J-9 109I-10	N-20° -W	3	5	5.1	10.0	1.96	51.00	0.48	○	
SH209	E-2	110I-1・2	N-71° -E	3	4	4.6	6.6	1.43	30.40	0.47	○	
SH210	E-2	110J-1・2 110I-1 130A-1・2	N-18° -W	4	4	6.5	6.5	1.00	42.25	0.48	○	
				6	6	10.0	10.0	1.00	100.00	052	○	
SH211	E-2	110I-2・3	N-16° -E	3	3	3.0	3.8	1.26	11.40	0.45	○	
SH212	E-2	110E-1・2 110F-1	N-14° -E	1	2	4.0	6.0	1.50	24.00	0.61		
SH213	E-2	110E-2・3	N-18° -E	3	3	5.5	5.5	1.00	30.25	0.48	○	
SH217	E-2	110F-1.2	N-47° -W	2	2	2.6	2.8	1.07	7.28	0.47		
SH311	E-3	129C・D-7・8	N-52° -E	3	5	5.4	9.0	1.67	48.60	0.96		
SH312	E-3	129C・D-7・8	N-59° -E	2	2	3.6	3.6	1.08	12.96	0.57		
SH313	E-3	129D-9	N-28° -W	2	2	2.7	2.9	1.07	7.83	0.62		
SH314	E-3	129D-8	N-37° -W	2	2	2.8	2.9	1.03	8.12	0.66		
SH315	E-3	129C-10	N-69° -W	3	4	5.2	7.6	1.46	39.52	0.76		
SH316	E-3	129C-10	N-39° -E	2	2	3.8	4.2	1.05	16.80	0.66	○	
SH317	E-3	129C・D-10	N-54° -E	2	2	3.8	3.8	1.03	14.44	0.61		
SH318	E-3	129C-10	N-40° -E	2	2	3.6	4.2	1.17	15.96	0.84		
SH319	E-3	129C-8・9	N-36° -W	2	2	3.6	3.6	1.06	12.96	0.67	○	
SH320	E-3	129C-8・9	N-41° -W	1	1	2.2	2.2	1.00	4.84	0.64	○	
SH321	E-3	129C-8・9	N-74° -E	2	3	3.8	5.8	1.53	22.04	0.60		
SH322	E-3	129C-8・9	N-68° -E	1	1	2.5	2.8	1.12	7.00	0.62		
SH323	E-3	130C-2	N-14° -E	3	3	6.6	6.6	1.00	43.56	0.82		
SH324	E-3	130C-2	N-76° -W	3	3	5.4	5.6	1.04	30.24	1.05		
SH325	E-3	129B・C-10 130B・C-1	N-14° -E	3	3	6.4	6.4	1.00	40.96	0.74		
SH327	E-3	130D-2	N-40° -E	2	2	3.6	3.6	1.00	12.96	0.63	○	
SH328	E-3	129I・J-8	N-0°	3	3	4.6	4.6	1.00	21.16	0.62		
SH329	E-3	129J-9　149A-9	N-84° -E	3	3	6.8	6.8	1.01	46.24	0.90		
SH330	E-3	149A・B-7・8	N-74° -E	2	3	4.0	5.8	1.53	23.20	0.59		
SH331	E-3	129J-7　149A-7	N-85° -E	3	3	5.1	5.1	1.02	26.01	0.65	○	
SH332	E-3	129J-7　149A-7	N-6° -W	2		4.6	5.8	1.26	23.20	0.62	○	
SH333	E-3	129F-7・8	N-57° -E	2	3	4.0	5.7	2.76	22.80	0.37	○	
SH337	E-3	129G・H-9・10	N-20° -E	2	2	3.6	3.6	1.00	12.96	0.37		
SH338	E-3	129G・H-9・10	N-87° -E	2	3	3.4	5.6	1.65	19.04	0.66		
SH339	E-3	130D-1	N-40° -E	2	2	3.6	3.6	1.00	12.96	0.52		

第 19 表　遺構観察表

	遺構番号	遺構名	区	グリッド	年代	備考
1	3	SH102	E-1		近世	
2	7	SH102	E-1		近世	
3	11	SH102	E-1		近世	
4	16		E-1	110C-1	中世	かわらけ
5	23	SH101	E-1		近世	
6	28	SH101	E-1		近世	
7	30	SH101	E-1		近世	
8	33	SH101	E-1		近世	
9	36	SH102	E-1		近世	
10	55	SH101	E-1	110B-1	近世	かわらけ
11	59	SH101	E-1		近世	
12	62	SH101	E-1	110C-1	近世	
13	64	SH101	E-1		近世	
14	67	SH101	E-1		近世	
15	68	SH101	E-1		近世	
16	91	SX91	E-1		近世	近世陶器
17	92	SX92	E-1		近世	近世陶器・かわらけ
18	93	SX93	E-1	110C-3	近世	近世陶器
19	94	SX94	E-1		近世	近世陶器
20	95	SH102	E-1	110C-2	近世	
21	99	SE99	E-1	110C-2	近世	近世陶器・かわらけ
22	101	SE101	E-1	110C-2	近世	
23	102	SE102	E-1		近世	
24	103	SE103	E-1	110C-2	近世	近世陶器・かわらけ
25	105	SE105	E-1	110C-2	近世	近世陶器
26	106	SE106	E-1	110C-2	近世	近世陶器
27	109		E-1	110C-2	近世	かわらけ
28	118	SD118	E-1	110C-2	近世	近世陶器・かわらけ
29	135		E-1		近世	近世陶器・かわらけ
30	140		E-1		中世	山茶碗
31	147		E-1		中世	山茶碗
32	150	SH107	E-1		近世	かわらけ
33	153	SH107	E-1		近世	かわらけ
34	164	SX164	E-1		近世	
35	169		E-1		中世	山茶碗・貿易陶磁
36	177		E-1		近世	近世陶器
37	183		E-1		中世	かわらけ
38	205	SX205	E-1		近世	
39	207		E-1		近世	近世陶器・かわらけ
40	211		E-1		近世	近世陶器
41	212	SX212	E-1		近世	
42	213	SE213	E-1		近世	近世陶器・かわらけ
43	214		E-1		近世	近世陶器
44	221	SH103	E-1		近世	
45	222	SH105	E-1		近世	
46	223	SH105	E-1		近世	近世陶器
47	224	SH105	E-1		近世	近世陶器
48	234	SH106	E-1		近世	
49	237	SH104	E-1		近世	
50	239		E-1		中世	山茶碗
51	240	SH106	E-1		近世	
52	242		E-1		近世	近世陶器
53	249		E-1		中世	かわらけ
54	254	SH107	E-1		近世	
55	258		E-1		近世	近世陶器
56	265		E-1		近世	銭貨
57	273		E-1		近世	近世陶器
58	280	SD280	E-1		近世	銭貨
59	288		E-1		近世	近世陶器
60	290		E-1		中世	山茶碗
61	292	SE292	E-1		近世	近世陶器・かわらけ
62	298		E-1		近世	かわらけ
63	307		E-1		中世	山茶碗
64	308		E-1		近世	近世陶器
65	310		E-1		近世	近世陶器
66	315	SH104	E-1		近世	
67	317		E-1		中世	山茶碗
68	319		E-1		近世	近世陶器
69	321	SH104	E-1		近世	
70	326	SH104	E-1		近世	
71	327	SH105	E-1		近世	
72	329	SH105	E-1		近世	近世陶器
73	330	SH103	E-1		近世	近世陶器
74	331	SH103	E-1		近世	
75	334	SH103	E-1		近世	
76	337	SH103	E-1		近世	
77	338	SH104	E-1		近世	
78	340	SH104	E-1		近世	
79	341		E-1		中世	山茶碗
80	351	SH108	E-1		近世	
81	352	SH108	E-1		近世	
82	354		E-1		中世	山茶碗
83	355		E-1			
84	357	SH108	E-1		近世	
85	358	SH109	E-1		近世	
86	359	SH109	E-1		近世	
87	360	SH109	E-1		近世	
88	369		E-1		近世	近世陶器
89	379	SH106	E-1		近世	
90	399	SH107	E-1		近世	
91	408	SH109	E-1		近世	
92	419	SX419	E-1		古墳後期	須恵器・土師器
93	420	SD420	E-1		古墳後期	土師器
94	421	SD421	E-1		古墳後期	須恵器・土師器
95	422	SK422	E-1		弥生後期	弥生土器
96	423	SX423	E-1		弥生後期	
97	513	SA101	E-2		中世	
98	518	SA101	E-2		中世	
99	534	SH105	E-2		中世	
100	535	SE1156	E-2			
101	536	SE1156	E-2		中世	山茶碗
102	537	SH105	E-2		中世	山茶碗
103	538	SH103	E-2		中世	
104	542	SH104	E-2		中世	
105	546	SH105	E-2		中世	
106	551	SH103	E-2		中世	
107	552		E-2		中世	山茶碗
108	553	SH104	E-2		中世	
109	559		E-2	109I-10	近世	近世陶器
110	560	SH104・135	E-2		中世	
111	562	SH103	E-2		中世	
112	563	SH135	E-2		中世	
113	568	SH105	E-2		中世	
114	569		E-2	109J-9	中世	山茶碗
115	570	SH101	E-2		中世	
116	572	SH105	E-2			
117	573	SH101	E-2		中世	
118	574	SH105	E-2		中世	
119	576	SH105	E-2		中世	
120	579	SH101	E-2		中世	山茶碗
121	584		E-2	109J-9	中世	山茶碗
122	592	SH101	E-2	109J-9	中世	山茶碗
123	598		E-2	109J-9	中世	山茶碗
124	601		E-2		中世	山茶碗
125	605		E-2		中世	山茶碗
126	606	SH101	E-2		中世	
127	608		E-2	109J-9	中世	山茶碗
128	617	SA101	E-2		中世	
129	629	SH166	E-2		中世	
130	638		E-2	109J-10	中世	山茶碗
131	641	SA101	E-2		中世	
132	642	SA101	E-2		中世	
133	643	SA101	E-2		中世	
134	650	SP650	E-2		中世	山茶碗
135	668	SD668	E-2		中世	
136	669	SD668	E-2		中世	
137	670	SP670	E-2		平安～中世	灰釉陶器・山茶碗
138	677	SH102	E-2		中世	
139	684	SH102	E-2		中世	
140	699	SH101	E-2		中世	
141	700	SH101	E-2		中世	
142	706		E-2	109J-9	中世	山茶碗
143	707	SH101	E-2		中世	山茶碗
144	708	SH101	E-2		中世	山茶碗
145	717		E-2	109J-9	近世	かわらけ
146	718		E-2	109J-9	近世	近世陶器
147	721	SH101・102	E-2		中世	山茶碗
148	724		E-2	109J-9	中世	山茶碗

第 19 表　遺構観察表

	遺構番号	遺構名	区	グリッド	年代	備考
149	733		E-2	109J-9	中世	山茶碗
150	737	SH102	E-2		中世	山茶碗・貿易陶磁
151	741		E-2	109J-9	中世	山茶碗
152	742	SH101	E-2		中世	
153	744		E-2	109J-9	中世	山茶碗
154	746	SH102	E-2		中世	山茶碗
155	747	SH103・135	E-2		中世	
156	750	SH101	E-2		中世	
157	754		E-2	109J-9	中世	山茶碗
158	760		E-2	109J-9	中世	山茶碗
159	761	SH101	E-2		中世	
160	766		E-2	109J-9	中世	山茶碗
161	767		E-2	109J-9	中世	山茶碗
162	768	SP768	E-2	109J-9	中世	山茶碗
163	775	SP775	E-2	109J-9	中世	山茶碗
164	785	SH101	E-2	109J-9	中世	山茶碗
165	795	SH101	E-2		中世	
166	796	SH101	E-2		中世	
167	797		E-2	109J-9	中世	山茶碗
168	799		E-2	109J-9	中世	山茶碗
169	801	SH103・135	E-2		中世	
170	806	SD668	E-2		中世	
171	826	SD2452	E-2		中世	
172	834	SP834	E-2		中世	山茶碗
173	855		E-2	109J-10	中世	かわらけ
174	864		E-2		中世	山茶碗
175	872		E-2	129A-10	中世	山茶碗
176	876		E-2	129A-10	近世	近世陶器
177	882		E-2		中世	中世陶器
178	885	SA102-C	E-2		中世	
179	919	SA102-C	E-2		中世	
180	928		E-2	130A-1	中世	貿易陶磁
181	933		E-2	129A-10	中世	山茶碗
182	937	SD937	E-2		中世	
183	939	SH103・135	E-2		中世	
184	946	SH103・135	E-2		中世	
185	957		E-2	109J-10	中世	山茶碗
186	962	SP962	E-2	129A-10	中世	山茶碗
187	971	SH105	E-2		中世	
188	972	SH104	E-2	109J-10	中世	山茶碗
189	993		E-2	109J-10	中世	山茶碗
190	1001		E-2	109J-10	中世	山茶碗
191	1002		E-2		中世	山茶碗
192	1010		E-2		中世	山茶碗
193	1014		E-2		中世	山茶碗
194	1018		E-2	109J-10	中世	山茶碗
195	1029		E-2	109J-10	中世	かわらけ
196	1030		E-2	109J-10	中世	かわらけ
197	1041	SA102-C	E-2		中世	
198	1045		E-2	130A-1	中世	山茶碗
199	1047		E-2	130A-1	中世	かわらけ
200	1055	SF1055	E-2	130A-1	近世	かわらけ・歯・銭貨
201	1059	SA102-C	E-2		中世	山茶碗
202	1065		E-2	110J-1	中世	かわらけ
203	1071		E-2		中世	山茶碗
204	1072	SA102-B	E-2		中世	
205	1073	SA102-B	E-2		中世	
206	1074	SA102-A	E-2		中世	
207	1075	SA102-A	E-2	110J-1	中世	
208	1077	SA102-A	E-2		中世	
209	1084		E-2		中世	山茶碗
210	1086		E-2	109J-10	中世	山茶碗
211	1088		E-2	109J-10	中世	山茶碗
212	1089		E-2	109J-10	中世	山茶碗
213	1093		E-2	109J-10	中世	かわらけ
214	1103		E-2	110I-1	中世	山茶碗
215	1105	SE1105	E-2		近世	
216	1106	SE1106	E-2		近世	
217	1111	SA102-A	E-2		中世	
218	1113	SA102-A	E-2		中世	
219	1124	SA102-A	E-2		中世	
220	1135		E-2	110I-1	中世	山茶碗
220	1135		E-2	110I-1	中世	山茶碗
221	1137	SF1137	E-2	109H-10	近世	桶・歯・銭貨

	遺構番号	遺構名	区	グリッド	年代	備考
222	1139	SE1139	E-2		近世	
223	1140	SE1140	E-2		近世	
224	1145		E-2	109I-10	中世	山茶碗
225	1160	SE1160	E-2		近世	近世陶器
226	1174		E-2	109I-10	中世	山茶碗・貿易陶磁
227	1176	SH142	E-2		中世	
228	1185	SH142	E-2		中世	
229	1187	SE1187	E-2		近世	近世陶器
230	1188	SH142	E-2		中世	
231	1191		E-2	109I-10	中世	山茶碗
232	1199		E-2	109I-10	中世	かわらけ
233	1273		E-2		中世	かわらけ
234	1285	SH138	E-2		中世	
235	1289	SH138	E-2		中世	
236	1299	SH138	E-2		中世	山茶碗
237	1305	SF1305	E-2		近世	
238	1308	SH138	E-2		中世	
239	1329		E-2	109F-10	近世	かわらけ
240	1342		E-2	109G-10	近世	近世陶器
241	1346		E-2		平安	灰釉陶器
242	1353	SA102-B	E-2		中世	
243	1374		E-2		中～近世	山茶碗・貿易陶磁・中世陶器・かわらけ
244	1386	SH161	E-2		中世	
245	1391	SH161	E-2		中世	
246	1400		E-2	109F-10	近世	近世陶器・かわらけ
247	1401		E-2	109F-10	中世	貿易陶磁
248	1404		E-2	109F-10	中世	かわらけ
249	1405	SH161	E-2	109F-10	中世	山茶碗
250	1426	SF1426	E-2	109E-9	近世	かわらけ
251	1451		E-2	109E-9	中世	山茶碗
252	1512		E-2	109E-10	中世	かわらけ
253	1513		E-2	109E-10	中世	かわらけ
254	1523		E-2	109E-10	中世	土師器
255	1529		E-2	109E-10	中世	山茶碗
256	1539	SE1539	E-2		近世	
257	1555	SF1555	E-2		近世	銭貨
258	1561	SE1561	E-2		近世	
259	1564		E-2		近世	近世陶器
260	1575		E-2	110E-1	近世	近世陶器
261	1595		E-2	110F-1	中世	山茶碗
262	1604		E-2	109F-10	中世	かわらけ
263	1606		E-2		奈良	須恵器
264	1618		E-2	110F-1	中世	山茶碗
265	1621		E-2	110F-1	中世	山茶碗
266	1635		E-2		平安	灰釉陶器
267	1648		E-2	110F-1	近世	かわらけ
268	1670		E-2	110G-1	中世	山茶碗
269	1752		E-2		中世	銭貨
270	1763		E-2	110F-2	中世	土師器
271	1794	SE1794	E-2		近世	
272	1795	SE1795	E-2		近世	
273	1806		E-2	110F-1	中世	かわらけ
274	1812		E-2	110F-2	中世	かわらけ
275	1815	SE1815	E-2		近世	
276	1818	SE1818	E-2		近世	
277	1820	SE1820	E-2		近世	
278	1832		E-2	110F-2	中世	山茶碗
279	1841		E-2	110F-2	中世	山茶碗
280	1869		E-2	110G-2	中世	山茶碗・貿易陶磁
281	1881		E-2	110I-1	中世	山茶碗
282	1900		E-2	109F-10	中世	山茶碗
283	1906		E-2	109F-10	中世	かわらけ
284	1909		E-2	109F-10	中世	山茶碗
285	1937		E-2	110F-1	中世	かわらけ
286	1938	SP1938	E-2	110F-1	中世	山茶碗
287	1971		E-2	109F-10	中世	かわらけ
288	1978		E-2	109F-10	中世	かわらけ
289	1983		E-2	110F-10	近世	近世陶器
290	2033		E-2	110F-2	中世	山茶碗
291	2113		E-2	109F-10	中世	山茶碗
292	2120		E-2	109F-10	中世	かわらけ
293	2122		E-2	110F-10	近世	近世陶器
294	2124		E-2	109F-10	中世	かわらけ

第 19 表　遺構観察表

	遺構番号	遺構名	区	グリッド	年代	備考
295	2125		E-2	109F-10	中世	山茶碗
296	2129		E-2	109F-10	中世	
297	2150	SH161	E-2		中世	
298	2152		E-2	109F-10	中世	山茶碗
299	2160	SP2160	E-2		中世	山茶碗
300	2168		E-2	110F-1	中世	山茶碗
301	2173		E-2		中世	山茶碗
302	2198		E-2	110G-1	近世	近世陶器
303	2210		E-2	110G-1	近世	近世陶器
304	2220		E-2	110G-1	中世	山茶碗
305	2222		E-2	110G-1	中世	山茶碗
306	2226		E-2	110H-2	中世	山茶碗
307	2227		E-2	110H-2	中世	かわらけ
308	2270		E-2	109F-10	中世	山茶碗
309	2293		E-2	110H-10	中世	
310	2298	SH141	E-2	109I-8	中世	山茶碗
311	2300	SH141	E-2		中世	
312	2301		E-2	109I-10	中世	山茶碗
313	2303		E-2	109I-10	中世	かわらけ
314	2305		E-2	109I-10	中世	山茶碗
315	2306		E-2	109I-10	中世	貿易陶磁
316	2310		E-2	109J-9	中世	かわらけ
317	2317		E-2	109J-10	中世	山茶碗
318	2318		E-2	109J-10	中世	山茶碗
319	2324		E-2	109I-10	中世	山茶碗
320	2336		E-2	109I-10	中世	山茶碗
321	2342		E-2	109J-10	中世	山茶碗
322	2360	SA102-C	E-2		中世	
323	2378	SH104	E-2		中世	
324	2380	SH103・104・135	E-2	109J-10	中世	
325	2382		E-2		中世	山茶碗
326	2388	SH101	E-2		中世	
327	2389		E-2	109J-9	中世	山茶碗
328	2391		E-2	109J-9	中世	かわらけ
329	2392		E-2	109J-9	中世	山茶碗
330	2393	SH103	E-2		中世	
331	2396	SH102	E-2		中世	山茶碗・土師器
332	2399	SH102	E-2			
333	2403	SH104・135	E-2		中世	山茶碗
334	2405		E-2		中世	山茶碗
335	2408		E-2	109J-9	中世	かわらけ
336	2409		E-2		中世	山茶碗
337	2411	SH103	E-2		中世	
338	2416	SH141	E-2		中世	
339	2420		E-2		中世	山茶碗
340	2421	SH142	E-2		中世	
341	2422	SH142	E-2	109I-10	中世	山茶碗
342	2423	SH141	E-2	109I-10	中世	山茶碗・貿易陶磁
343	2424	SH142	E-2		中世	
344	2425	SH141	E-2		中世	
345	2427	SH142	E-2		中世	
346	2437	SF2437	E-2	109H-10	近世	かわらけ・銭貨
347	2439		E-2	109I-10	中世	山茶碗
348	2447	SH141	E-2		中世	
349	2451		E-2	129A-10	中世	山茶碗
350	2452	SD2452	E-2		中世	山茶碗
351	2462	SD668	E-2		中世	
352	2476		E-2		中世	かわらけ
353	2483		E-2		中世	山茶碗
354	2484		E-2		中世	山茶碗
355	2489	SA102-C	E-2		中世	
356	2490	SA102-B	E-2	129A-10	中世	かわらけ
357	2493	SA102-B	E-2		中世	
358	2495	SH102	E-2		中世	
359	2496	SA102-B	E-2	110J-1	中世	山茶碗
360	2510		E-2		近世	近世陶器
361	2515		E-2	109I-8	中世	中世陶器
362	2525		E-2	109I-10	中世	山茶碗
363	2531		E-2		中世	山茶碗
364	2537		E-2	129A-9	近世	染付け
365	2546	SH103	E-2	109J-10	中世	
366	2547	SH104	E-2		中世	
367	2554	SP2554	E-2	109J-9	中世	山茶碗

	遺構番号	遺構名	区	グリッド	年代	備考
368	2558	SH102	E-2		中世	
369	2562	SH104	E-2	109I-10	中世	かわらけ
370	2566		E-2	109I-10	中世	山茶碗
371	2567		E-2		近世	近世陶器
372	2569		E-2	109I-10	中世	山茶碗
373	2571		E-2	110I-1	中世	山茶碗
374	2575	SH138	E-2		中世	
375	2576	SH138	E-2		中世	
376	2581		E-2	109I-10	中世	山茶碗
377	2584		E-2	109I-10	中世	山茶碗
378	2588	SH138	E-2		中世	
379	2589		E-2	110I-1	中世	かわらけ
380	2592	SP2592	E-2	110I-1	中世	山茶碗
381	2594	SH138	E-2		中世	
382	2595	SX2595	E-2		古墳後期	土師器
383	2602	SA101	E-2		中世	
384	2603	SA101	E-2		中世	
385	2604	SA101	E-2		中世	
386	2613		E-2	109G-8	近世	近世陶器・かわらけ
387	2625		E-2	109H-9	中世	かわらけ
388	2629		E-2	109I-10	中世	山茶碗
389	2630		E-2	109I-10	近世	貿易陶磁・近世陶器
390	2649	SH135	E-2		中世	山茶碗
391	2650	SH105	E-2		中世	
392	2656	SH105	E-2		中世	
393	2663	SA101	E-2		中世	
394	2666	SA101	E-2		中世	
395	2670	SH101	E-2		中世	
396	2674	SA101	E-2		中世	
397	2675	SH104	E-2		中世	
398	2679	SD2679	E-2		中世	
399	2680	SD2452	E-2		中世	
400	2683	SH104	E-2		中世	
401	2696	SP2696	E-2		弥生後期	
402	2698	SH102	E-2		中世	
403	2702		E-2	109J-9	中世	かわらけ
404	2703	SH102	E-2		中世	
405	2706		E-2	109J-9	中世	山茶碗
406	2710	SH101	E-2		中世	
407	2725	SH165	E-2	109H-7	中世	かわらけ
408	2730		E-2	109H-7	中世	かわらけ
409	2731	SH165	E-2	109H-7	中世	かわらけ
410	2738	SH165	E-2		中世	
411	2748		E-2	109H-7	近世	陶磁器
412	2759		E-2	109H-7	中世	かわらけ
413	2763	SF2763	E-2	109H-8	近世	かわらけ・銭貨
414	2765		E-2	109H-8	中世	かわらけ
415	2770		E-2	109H-7	中世	山茶碗
416	2780		E-2	109H-6	中世	
417	2799		E-2	109I-10	中世	かわらけ
418	2801		E-2		中世	
419	2802	SH101・102	E-2		中世	
420	2804	SH102	E-2		中世	
421	2805	SH101	E-2		中世	
422	2807	SH101	E-2		中世	山茶碗
423	2809	SH101	E-2		中世	
424	2850		E-2	109H-7	近世	貿易陶磁
425	2866		E-2	109H-8	中世	山茶碗
426	2869		E-2	109H-8	近世	かわらけ
427	2877		E-2	109H-8	近世	染付け
428	2880		E-2	109H-8	中世	山茶碗
429	2881		E-2	109H-8	中世	山茶碗
430	2887		E-2	109H-8	近世	近世陶器
431	2891		E-2	109H-8	中世	山茶碗
432	2918	SH138	E-2		中世	
433	2922	SH101・102	E-2		中世	
434	2923	SH135	E-2		中世	
435	2942		E-2		近世	近世陶器・かわらけ
436	2947	SD937	E-2		中世	
437	2967	SH153	E-2		中世	
438	2970	SH153	E-2		中世	
439	2974	SH154	E-2		中世	
440	2975		E-2		中世	山茶碗
441	2976	SH153	E-2		中世	

第 19 表　遺構観察表

	遺構番号	遺構名	区	グリッド	年代	備考
442	2981	SH153	E-2		中世	
443	2983		E-2	130A-1	中世	山茶碗
444	2985	SH154	E-2		中世	山茶碗
445	2999	SH153	E-2		中世	
446	3003		E-2	130A-1	中世	山茶碗
447	3004	SH154	E-2		中世	
448	3007	SH154	E-2		中世	
449	3008		E-2		中世	山茶碗
450	3012	SH154	E-2		中世	
451	3014		E-2	130A-1	中世	山茶碗
452	3015	SH154	E-2	130A-1	中世	山茶碗
453	3018		E-2		中世	山茶碗
454	3025	SH153	E-2		中世	
455	3026		E-2		近世	近世陶器
456	3030	SH153	E-2		中世	山茶碗・中世陶器
457	3049	SD2452	E-2		中世	山茶碗
458	3054		E-2	130A-1	中世	山茶碗
459	3056	SH122	E-2		中世	山茶碗
460	3058	SH122	E-2	130A-1	中世	山茶碗
461	3059		E-2	130A-1	中世	山茶碗
462	3064		E-2	130A-1	近世	近世陶器
463	3069		E-2	130A-1	中世	かわらけ
464	3078	SH122	E-2		中世	山茶碗
465	3080		E-2	130B-1	中世	山茶碗
466	3089	SF3089	E-2	109G-8	近世	かわらけ
467	3090	SD937	E-2	129A-8	近世	
468	3091		E-2	109I-6	中世	山茶碗
469	3095		E-2	109I-8	中世	かわらけ
470	3096		E-2		近世	近世陶器
471	3098		E-2	109I-8	中世	山茶碗
472	3132		E-2	110J-2	中世	山茶碗
473	3134	SD3134	E-2		中世	山茶碗・土師器・銭貨
474	3148	SH151	E-2		中世	
475	3164	SD3134	E-2		中世	山茶碗
476	3169		E-2		近世	近世陶器
477	3176	SH166	E-2		中世	
478	3184	SH161	E-2		中世	
479	3185	SH161	E-2		中世	
480	3188	SH161	E-2		中世	
481	3189	SH162	E-2		中世	
482	3197		E-2		平安	灰釉陶器
483	3239		E-2	110H-2	近世	かわらけ
484	3245		E-2	110I-2	中世	かわらけ
485	3258	SH122	E-2		中世	
486	3261		E-2	130A-1	中世	山茶碗
487	3265		E-2	130A-1	中世	かわらけ
488	3267	SH122	E-2		中世	
489	3268		E-2	130A-1	中世	かわらけ
490	3269	SH122	E-2	130A-1	中世	山茶碗
491	3272	SH122	E-2		中世	
492	3277	SH153	E-2		中世	
493	3278	SH154	E-2	130A-1	中世	かわらけ
494	3279	SH153	E-2		中世	
495	3299	SH222	E-2	130A-1	中世	山茶碗
496	3302	SH153	E-2		中世	
497	3305	SH153	E-2		中世	
498	3321	SA103	E-2	110I-3	中世	山茶碗
499	3322	SA103	E-2		中世	
500	3326	SH151	E-2		中世	
501	3335	SH151	E-2		中世	
502	3336	SH152	E-2	110H-3	中世	山茶碗
503	3360		E-2	110H-3	中世	山茶碗
504	3361		E-2	110H-3	中世	かわらけ
505	3362		E-2	110H-3	中世	かわらけ
506	3363	SH152	E-2		中世	
507	3366	SH152	E-2		中世	
508	3369	SA103	E-2		中世	
509	3381		E-2	110H-3	中世	かわらけ
510	3383		E-2	110H-3	中世	中世陶器
511	3384	SH152	E-2		中世	
512	3385	SH152	E-2		中世	
513	3386	SA103	E-2		中世	
514	3394	SA104	E-2		中世	
515	3396	SA104	E-2		中世	

	遺構番号	遺構名	区	グリッド	年代	備考
516	3414		E-2	130A-2	中世	山茶碗
517	3417	SA103	E-2		中世	
518	3430	SH152	E-2		中世	
519	3432	SA104	E-2		中世	
520	3434		E-2	109H-8	中世	山茶碗
521	3435		E-2	109H-9	中世	山茶碗
522	3462	SH165	E-2		中世	
523	3476		E-2		奈良～平安	須恵器
524	3479	SH166	E-2		中世	
525	3486	SH166	E-2		中世	
526	3522	SE3522	E-2		近世	近世陶器
527	3550	SP3550	E-2		近世	かわらけ
528	3555		E-2		中世	かわらけ
529	3556	SH163	E-2		中世	
530	3562		E-2		中世	かわらけ
531	3564		E-2		中世	土師器
532	3565		E-2		中世	山茶碗
533	3569	SH163	E-2		中世	
534	3577		E-2		中世	かわらけ
535	3598		E-2	109F-10	近世	かわらけ
536	3599		E-2	109F-10	中世	土師器
537	3601		E-2	109F-10	中世	土師器
538	3607	SH163	E-2	109F-10	中世	山茶碗
539	3609		E-2	109F-10	近世	かわらけ
540	3611		E-2	110F-10	近世	近世陶器
541	3613		E-2	109F-10	中世	山茶碗
542	3614	SH162・163	E-2		中世	
543	3617	SH162	E-2		中世	
544	3624	SH129	E-2	109F-10	中世	山茶碗
545	3629		E-2	109F-10	中世	土師器
546	3635	SH129	E-2	109F-10	中世	土師器
547	3637	SH164・129	E-2	109F-10	中世	中世陶器
548	3644		E-2	110F-1	中世	かわらけ
549	3648		E-2	110F-1	中世	かわらけ
550	3649	SH129	E-2	110F-1	中世	かわらけ
551	3653		E-2	110F-1	中世	山茶碗
552	3654		E-2	110F-1	中世	山茶碗・土師器
553	3655		E-2	109F-10	中世	かわらけ
554	3656	SH164	E-2		中世	
555	3657	SH129	E-2		中世	
556	3658		E-2	109F-10	中世	かわらけ
557	3659		E-2	109F-10	中世	山茶碗
558	3660	SH164	E-2		中世	
559	3661	SH129	E-2		中世	
560	3681	SP3681	E-2	110F-3	中世	山茶碗
561	3695		E-2	110H-3	中世	かわらけ
562	3704	SD3704	E-2	110F-4	中世	磁器
563	3713	SD3942	E-2		平安	灰釉陶器
564	3714		E-2	110F-1	中世	かわらけ
565	3716	SH129	E-2		中世	
566	3752		E-2	110F-1	中世	かわらけ
567	3759		E-2	110G-1	中世	かわらけ
568	3760		E-2	110G-1	中世	山茶碗
569	3762		E-2	110G-1	中世	かわらけ
570	3769		E-2	110G-2	近世	近世陶器
571	3771		E-2	110G-1	中世	山茶碗
572	3772		E-2	110G-1	中世	土師器
573	3773		E-2	110G-1	中世	山茶碗
574	3777		E-2	110G-1	中世	土師器
575	3781		E-2		奈良～平安	須恵器
576	3790		E-2	110G-2	中世	かわらけ
577	3798		E-2		奈良	須恵器・土師器
578	3801		E-2	110G-2	中世	かわらけ
579	3809		E-2	110G-2	中世	山茶碗
580	3814		E-2	110H-2	中世	土師器
581	3819		E-2	110G-2	中世	山茶碗
582	3826		E-2		中世	山茶碗
583	3834		E-2	110F-2	中世	山茶碗
584	3839	SD3839	E-2		中世	山茶碗・貿易陶磁
585	3847		E-2		近世	近世陶器
586	3848	SP3849	E-2		中世	銭貨
587	3871	SR3871	E-2		近世	
588	3921		E-2	110E-2	中世	山茶碗
589	3942	SD3839	E-2		中世	山茶碗

第 19 表　遺構観察表

	遺構番号	遺構名	区	グリッド	年代	備考
590	3959	SD3942	E-2		平安～中世	灰釉陶器・土師器
591	3963		E-2	110H-8	中世	かわらけ
592	3964	SD3942	E-2		中世	山茶碗・土師器
593	3965	SD3839	E-2		中世	
594	5001	SK5001	E-4		中世	
595	5002	SK5002	E-4		弥生後期	
596	5010	SK5010	E-5 ①		古墳後期	
597	5011	SK5011	E-5 ①		弥生後期	
598	5012	SK5012	E-5 ①		弥生後期	
599	5013	SK5013	E-5 ①		弥生後期	
600	6001	SD6001	E-2	109I-7	弥生後期	弥生土器
601	6002	SD6002	E-2	109I-7 他	弥生後期	弥生土器
602	6008		E-2	109H-7	弥生後期	弥生土器
603	6039		E-2	109I-8	弥生後期	弥生土器
604	6051		E-2	109I-9	古墳後期	須恵器・土師器
605	6053		E-2	109I-9	弥生後期	弥生土器
606	6060		E-2	109I-9	弥生後期	弥生土器
607	6063		E-2	109I-10	弥生後期	弥生土器
608	6067		E-2	109J-9	弥生後期	弥生土器
609	6074		E-2	109J-8	弥生後期	弥生土器
610	6076		E-2	129A-10	弥生後期	弥生土器
611	6077	SA201	E-2	129A-10	古墳後期	
612	6078	SA201	E-2	129A-10	古墳後期	
613	6079		E-2	129A-10	弥生後期	弥生土器
614	6085	SH209	E-2	110I-1	古墳後期	
615	6086	SH209	E-2	110I-2	古墳後期	
616	6087	SH209	E-2	110I-2	古墳後期	
617	6088	SH209	E-2	110I-1	古墳後期	
618	6090	SH209	E-2	110I-1	古墳後期	
619	6091	SH209	E-2	110I-1	古墳後期	
620	6092	SH218	E-2	110I-1	弥生後期	
621	6093		E-2	110I-1	弥生後期	弥生土器
622	6095	SH210	E-2	110I-1	古墳後期	
623	6096	SH210	E-2	110I-1	古墳後期	
624	6097	SH210	E-2	110I-1	古墳後期	
625	6098	SH210	E-2	110J-1	古墳後期	
626	6099	SH210	E-2	110J-1	古墳後期	
627	6100	SH210	E-2	110J-1	古墳後期	
628	6102	SH210	E-2	110J-1	古墳後期	
629	6103	SH210	E-2	110J-1	古墳後期	
630	6104	SR6104	E-2	109I-10	古墳後期	須恵器・土師器
631	6105	SH210	E-2	110J-1	古墳後期	
632	6106	SH210	E-2	110J-2	古墳後期	
633	6107	SH210	E-2	110J-2	古墳後期	
634	6108	SH210	E-2	110J-2	古墳後期	
635	6109	SH210	E-2	110J-2	古墳後期	
636	6110	SH210	E-2	110I-2	古墳後期	
637	6111	SH210	E-2	110I-2	古墳後期	
638	6112	SH211	E-2	110I-2	古墳後期	
639	6113	SH211	E-2	110I-2	古墳後期	
640	6114	SH211	E-2	110I-2	古墳後期	
641	6115	SH211	E-2	110I-2	古墳後期	
642	6116	SH211	E-2	110I-2	古墳後期	
643	6117	SH211	E-2	110I-2 他	古墳後期	
644	6118	SP6118	E-2	110J-2	弥生後期	弥生土器
645	6123	SH210	E-2	110J-2	古墳後期	
646	6124	SH210	E-2	110J-2	古墳後期	
647	6125		E-2	110J-2	弥生後期	弥生土器
648	6128	SH210	E-2	130A-1	古墳後期	
649	6135	SD6135	E-2	110I-4	古墳後期	
650	6136	SP6236	E-2	110J-4	弥生後期	
651	6138		E-2	109H-8	弥生後期	弥生土器
652	6139	SR6139	E-2	109J-8 他	古墳後期	須恵器
653	6140	SH210	E-2	110J-2	古墳後期	
654	6141	SH210	E-2	110J-1	古墳後期	
655	6142	SH210	E-2	110J-1	古墳後期	
656	6145		E-2	130A-1	弥生後期	弥生土器
657	6148		E-2	130A-1	弥生後期	弥生土器
658	6159		E-2	130A-3	弥生後期	弥生土器
659	6170		E-2	130A-3	弥生後期	弥生土器
660	6171	SD9500	E-2	130I-4 他	古墳後期	須恵器・土師器
661	6172		E-2	109H-8	古墳後期	土師器
662	6182	SB202	E-2	109H-7	弥生後期	
663	6197		E-2	129A-9	弥生後期	弥生土器

	遺構番号	遺構名	区	グリッド	年代	備考
664	6200		E-2	129A-9	弥生後期	弥生土器
665	6203		E-2	129A-9	弥生後期	弥生土器
666	6205		E-2	129A-9	古墳後期	土師器
667	6210	SH210	E-2	129A-9	古墳後期	
668	6213	SP6213	E-2	129A-9	平安～中世	灰釉陶器・山茶碗
669	6219		E-2	110J-1	弥生後期	弥生土器
670	6220	SH210	E-2	110J-1	古墳後期	
671	6221		E-2	110J-2	古墳後期	須恵器・土師器
672	6222		E-2	109H-8	弥生後期	弥生土器
673	6223		E-2	109H-8	古墳後期	土師器
674	6231		E-2	109I-8	弥生後期	弥生土器
675	6236		E-2	109H-8	弥生後期	弥生土器
676	6238	SA201	E-2	109J-10	古墳後期	
677	6240	SH210	E-2	110J-2	古墳後期	
678	6246		E-2	109H-8	弥生後期	弥生土器
679	6269		E-2	129A-9	弥生後期	弥生土器
680	6283	SP6283	E-2	130A-1	中世	山茶碗
681	6284	SB218	E-2	130A-1	弥生後期	
682	6289	SD6289	E-2	110H-3	古墳後期	須恵器・土師器
683	6290	SD6290	E-2	110E-2	古墳後期	土師器
684	6294	SB209	E-2	109I-10	弥生後期	弥生土器
685	6295		E-2	109I-10	古墳後期	須恵器・土師器
686	6296		E-2	109H-10	弥生後期	弥生土器
687	6297		E-2	109I-10	古墳後期	土師器
688	6302		E-2	109I-10	弥生後期	弥生土器
689	6306		E-2	109I-10	弥生後期	弥生土器
690	6308	SA201	E-2	110I-1	古墳後期	
691	6309		E-2	110I-1	弥生後期	弥生土器
692	6311	SA201	E-2	110I-1	古墳後期	
693	6320		E-2	109H-8	弥生後期	弥生土器
694	6323		E-2	109H-7	弥生後期	弥生土器
695	6327		E-2	109I-10	弥生後期	弥生土器
696	6329		E-2	109I-10	弥生後期	弥生土器
697	6333	SA201	E-2	109J-10	古墳後期	
698	6337	SA201	E-2	129A-10	古墳後期	須恵器
699	6339		E-2	129A-10	弥生後期	弥生土器
700	6345	SR6345	E-2	109J-10 他	古墳後期	須恵器・土師器
701	6346	SH210	E-2	110J-1	古墳後期	
702	6347	SH210	E-2	110J-1	古墳後期	
703	6348	SH210	E-2	110J-1	古墳後期	
704	6350		E-2	110E-1 他	古墳後期	土師器
705	6362		E-2	109J-9	弥生後期	弥生土器
706	6365	SA201	E-2	109J-10	古墳後期	
707	6367		E-2	130A-1	古墳後期	須恵器
708	6370	SH209	E-2	110I-1	古墳後期	
709	6371	SH209	E-2	110I-1	古墳後期	
710	6372	SH209	E-2	110I-1	古墳後期	
711	6373	SH211	E-2	110I-3	古墳後期	
712	6374	SH217	E-2	110F-1	古墳後期	
713	6376	SH217	E-2	110F-1	古墳後期	
714	6377	SH217	E-2	110F-1	古墳後期	
715	6378	SH217	E-2	110F-1	古墳後期	
716	6379	SH217	E-2	110F-1	古墳後期	
717	6381		E-2	110F-1	古墳後期	土師器
718	6393		E-2	109H-8	弥生後期	弥生土器
719	6395		E-2	109I-10	弥生後期	弥生土器
720	6398	SD6398	E-2	109I-10	古墳後期	須恵器・土師器
721	6401	SR6401	E-2	109J-10	古墳後期	須恵器・土師器
722	6402	SH217	E-2	110F-1	古墳後期	
723	6404		E-2	110E-1 他	古墳後期	土師器
724	6405		E-2	110H-3 他	古墳後期	土師器
725	6408	SH218	E-2	110I-1	弥生後期	
726	6411		E-2	109J-10	弥生後期	弥生土器
727	6412	SH212	E-2	110E-2	弥生後期	礎板
728	6413		E-2	110J-2	弥生後期	弥生土器
729	6416	SH210	E-2	110J-1	古墳後期	
730	6417	SH210	E-2	110J-1	古墳後期	
731	6418	SH210	E-2	110J-1	古墳後期	
732	6421		E-2	129A-10	弥生後期	弥生土器
733	6422	SD6422	E-2	129A-9	弥生後期	弥生土器
734	6423	SH218	E-2	110I-1	弥生後期	
735	6425	SH210	E-2	130A-2	古墳後期	
736	6426	SH210	E-2	110J-2	古墳後期	
737	6427	SH210	E-2	110J-1	古墳後期	

第 19 表　遺構観察表

	遺構番号	遺構名	区	グリッド	年代	備考
738	6428	SH209	E-2	110I-1	古墳後期	
739	6429		E-2	109J-10	弥生後期	弥生土器
740	6436		E-2	109J-10	弥生後期	弥生土器
741	6440	SA201	E-2	109J-10	古墳後期	
742	6441	SH209	E-2	110I-2	古墳後期	
743	6443	SH217	E-2		古墳後期	
744	6445	SD6445	E-2	129A-10 他	弥生後期	弥生土器
745	6448	SP6448	E-2	129A-9	中世	山茶碗
746	6452		E-2	129A-10	弥生後期	弥生土器
747	6453		E-2	109J-10	弥生後期	弥生土器
748	6455	SA201	E-2	110J-1	古墳後期	
749	6457	SH210	E-2		古墳後期	
750	6458	SH210	E-2		古墳後期	
751	6463	SA201	E-2	109J-10	古墳後期	
752	6475		E-2	110J-1	弥生後期	弥生土器
753	6477		E-2	130A-1	弥生後期	弥生土器
754	6481		E-2	110J-1	弥生後期	弥生土器
755	6483	SA201	E-2	109J-10	古墳後期	土師器
756	6487		E-2	109J-10	弥生後期	弥生土器
757	6491		E-2		弥生後期	弥生土器
758	6492	SB218	E-2	130A-1	弥生後期	
759	6493	SB218	E-2	130A-1	弥生後期	
760	6494		E-2	130A-1	古墳後期	土師器
761	6501		E-2		古墳後期	土師器
762	6503		E-2	130A-2	弥生後期	弥生土器
763	6505		E-2	130A-2	弥生後期	弥生土器
764	6509		E-2	130A-2	弥生後期	弥生土器
765	6512		E-2	130A-2	古墳後期	土師器
766	6515		E-2	130A-2	古墳後期	須恵器
767	6519		E-2	109I-10	弥生後期	弥生土器
768	6520		E-2	110I-1	弥生後期	弥生土器
769	6523	SR6823	E-2		古墳後期	須恵器・土師器
770	6526	SH213	E-2	110E-2	弥生後期	礎板
771	6527	SH213	E-2	110E-2	弥生後期	礎板
772	6530	SP6530	E-2	110E-3	古墳後期	礎板
773	6531		E-2	110E-2	古墳前期	古式土師器
774	6533		E-2	110E-3	弥生後期	弥生土器
775	6536	SB219	E-2	110J-1	弥生後期	
776	6539	SA201	E-2	109I-10	弥生後期	弥生土器
777	6541	SH218	E-2	110I-1	弥生後期	
778	6542	SH218	E-2	110I-1	弥生後期	
779	6545	SH209	E-2	110I-1	古墳後期	
780	6547	SH210	E-2	110J-2	古墳後期	
781	6550		E-2	110J-1	弥生後期	弥生土器
782	6562	SA201	E-2		古墳後期	
783	6572		E-2	129A-9	弥生後期	弥生土器
784	6573		E-2	110J-2	弥生後期	弥生土器
785	6580		E-2	110E-1	弥生後期	弥生土器
786	6581		E-2	109I-7	弥生後期	弥生土器
787	6582		E-2	109I-7	古墳後期	土師器
788	6583	SB218	E-2	130A-1	弥生後期	
789	6585		E-2	109H-8	古墳後期	土師器
790	6586		E-2	109H-8	弥生後期	弥生土器
791	6592		E-2	110G-1	弥生後期	弥生土器
792	6594		E-2	110G-1	弥生後期	弥生土器
793	6595		E-2	110G-1	弥生後期	弥生土器
794	6598		E-2	110G-2	弥生後期	弥生土器
795	6599		E-2	110F-2	弥生後期	弥生土器
796	6600		E-2	110F-2	弥生後期	弥生土器
797	6601		E-2	110F-2	弥生後期	弥生土器
798	6602		E-2	110F-1	弥生後期	弥生土器
799	6607		E-2	109H-7	弥生後期	弥生土器
800	6620		E-2		古墳後期	土師器
801	6621		E-2	109H-8	弥生後期	弥生土器
802	6624	SP6624	E-2	110E-4	古墳後期	礎板
803	6625	SF6625	E-2		弥生後期	弥生土器
804	6628		E-2	109H-8	弥生中期	弥生土器
805	6632		E-2	109I-10	弥生後期	弥生土器
806	6645	SB218	E-2		弥生後期	
807	6662	SK6662	E-2	110J-6	弥生後期～古墳前期	古式土師器・弥生土器
808	6663	SX6663	E-2	110F-1 他	弥生後期	弥生土器
809	6666		E-2	129A-10	弥生後期	弥生土器
810	6667		E-2	129A-10	弥生後期	弥生土器

	遺構番号	遺構名	区	グリッド	年代	備考
811	6668	SB215	E-2	129A-10	弥生後期	
812	6669		E-2	129A-10	弥生後期	弥生土器
813	6671	SB215	E-2	129A-10	弥生後期	弥生土器
814	6677		E-2	129A-10	弥生後期	弥生土器
815	6679		E-2	129A-10	弥生後期	弥生土器
816	6680	SB215	E-2	129A-10	弥生後期	弥生土器
817	6683		E-2	129A-10	弥生後期	弥生土器
818	6684		E-2	129A-10	弥生後期	弥生土器
819	6689		E-2		弥生後期	弥生土器
820	6690		E-2	129A-10	弥生後期	弥生土器
821	6691		E-2	129A-10	弥生後期	弥生土器
822	6708	SB224	E-2	110I-1	弥生後期	
823	6710	SH210	E-2		古墳後期	
824	6712	SB212	E-2	110I-1 他	弥生後期	
825	6713	SH210	E-2	109I-10 他	古墳後期	
826	6717		E-2	110I-1	弥生後期	弥生土器
827	6723	SB219	E-2		弥生後期	
828	6739	SB225	E-2	109I-9	弥生後期	
829	6740		E-2	109J-9	弥生後期	弥生土器
830	6742		E-2	109J-9	弥生後期	弥生土器
831	6743		E-2	109J-9	弥生後期	弥生土器
832	6752	SB215	E-2	129A-10	弥生後期	
833	6767	SB225	E-2	109I-10	弥生後期	
834	6769	SB225	E-2	109J-9	弥生後期	
835	6771	SB225	E-2	109J-10	弥生後期	
836	6772	SB225	E-2	109I-10	弥生後期	
837	6773	SK6773	E-2	130A-5	弥生後期	
838	6774	SK6774	E-2	110J-6	弥生後期	
839	6875		E-2		弥生後期	弥生土器
840	8014	SH209	E-3	129F-10	中世	
841	8016	SH209	E-3	129F-10	中世	
842	8017	SH209	E-3	129F-10	中世	
843	8023		E-3	129B-10	中世	山茶碗
844	8031	SD2452	E-3	130B-1	中世	山茶碗
845	8033	SD8033	E-3	130B-1	中世	山茶碗・銭貨
846	8045	SD8045	E-3	129G-8	中世	山茶碗
847	8052	SH208	E-3	129E-10	中世	
848	8053	SH208	E-3	129E-10	中世	
849	8055	SH208	E-3	129E-10	中世	
850	8058	SH208	E-3	129E-10	中世	
851	8059	SH208	E-3	129E-10	中世	
852	8061	SH208	E-3	129E-10	中世	
853	8063	SH209	E-3	129E-10	中世	
854	8065		E-3	129E-10	中世	山茶碗
855	8067	SH208	E-3	130E-1	中世	
856	8069	SH207-2	E-3	129E-10	中世	山茶碗
857	8070	SH209	E-3	129E-10	中世	
858	8072	SH209	E-3	129E-10	中世	
859	8073	SH209	E-3	129E-10	中世	
860	8077	SH209	E-3	129E-10	中世	
861	8078	SH209	E-3	129E-10	中世	
862	8084	SH209	E-3	130F-1	中世	
863	8086	SH209	E-3	129F-10	中世	
864	8087	SH209	E-3	129F-10	中世	
865	8088	SD8088	E-3	129E-10	中世	
866	8090	SH209	E-3		中世	
867	8091		E-3	129E-10	中世	山茶碗
868	8092		E-3	129E-10	中世	山茶碗
869	8093	SH209	E-3	129F-10	中世	
870	8094	SH209	E-3	129F-10	中世	
871	8101	SH209	E-3	129F-10	中世	
872	8111	SH207	E-3	130D-1	中世	
873	8112	SH207	E-3	130D-1	中世	
874	8113	SH207	E-3	130D-1	中世	
875	8119	SH204	E-3	130D-1	中世	
876	8130	SH207	E-3	130D-1	中世	
877	8131	SH207	E-3	129D-10	中世	
878	8133	SH208	E-3	129D-10	中世	
879	8141	SH208	E-3	129E-10	中世	
880	8148	SH208	E-3	130E-1	中世	山茶碗
881	8153	SH208	E-3	130E-1	中世	
882	8155	SH208	E-3	130E-1	中世	山茶碗
883	8183	SD8183	E-3	129D-9	中世	山茶碗・貿易陶磁
884	8185	SD8183	E-3	130E-2	中世	山茶碗

第 19 表　遺構観察表

	遺構番号	遺構名	区	グリッド	年代	備考
885	8188	SH203	E-3	130E-2	中世	
886	8197	SH204	E-3	129D-7	中世	
887	8198	SH203	E-3	129D-8	中世	
888	8202	SH202	E-3	129D-8	中世	
889	8205	SH204	E-3	129D-8	中世	
890	8206	SH203	E-3	129D-8	中世	
891	8207	SH202	E-3	129D-8	中世	
892	8208	SH202	E-3	129D-8	中世	
893	8209	SH202	E-3	129D-8	中世	
894	8211	SH204・202	E-3	129D-8	中世	
895	8212	SH203	E-3	129D-8	中世	
896	8218	SH202	E-3	129D-7	中世	
897	8221	SH203	E-3	129D-7	中世	
898	8222	SH204	E-3	129D-7	中世	
899	8226	SH204	E-3	129D-7	中世	
900	8247	SE8247	E-3	129D-9	近世	
901	8255	SH311	E-3	129C-10	古墳後期	
902	8280	SR8280	E-3	129B-8 他	中世	山茶碗・須恵器・土師器
903	8281	SE8281	E-3	129C-8	近世	
904	8297	SH201	E-3	129B-8	近世	近世陶器
905	8298	SH203	E-3	129B-8	近世	近世陶器
906	8299	SH203	E-3	129B-8	近世	
907	8300		E-3	129B-9	近世	近世陶器
908	8304	SH204	E-3	129B-8	近世	
909	8305	SH204	E-3	129B-8	近世	
910	8306	SH204	E-3	129B-8	近世	
911	8308	SH204	E-3	129B-8	近世	
912	8309	SH204	E-3	129C-7	近世	
913	8310	SH311	E-3	129C-8	古墳後期	
914	8315	SH201	E-3	129C-7	中世	
915	8316	SH201	E-3	129C-7	中世	
916	8323	SH204	E-3	129D-7	中世	
917	8347	SH201	E-3	129B-8	近世	
918	8349		E-3	129B-8	近世	近世陶器
919	8351	SH201	E-3	129B-8	近世	
920	8353		E-3	129B-9	近世	近世陶器
921	8354		E-3	129B-9	近世	近世陶器
922	8356	SH201	E-3	129B-8	近世	
923	8357	SH201	E-3	129B-8	近世	
924	8358	SE8358	E-3	129B-8	近世	
925	8360	SE8360	E-3	129B-8	近世	
926	8362	SR8362	E-3	129B-8	近世	近世陶器
927	8363		E-3	129B-8	中世	山茶碗・中世陶器
928	8364		E-3	129B-8	近世	近世陶器
929	8398	SH210	E-3	129G-8	中世	
930	8405	SH210	E-3	129G-8	中世	
931	8408	SH210	E-3	129G-8	中世	
932	8420	SH210	E-3	129G-8	中世	
933	8421	SH210	E-3	129G-8	中世	
934	8424	SH210	E-3	129G-8	中世	
935	8425	SH210	E-3	129G-8	中世	
936	8430	SH210	E-3	129H-8	中世	
937	8433	SD8088	E-3	129H-8	中世	山茶碗
938	8434	SD8433	E-3	129H-8	中世	山茶碗
939	8436	SD8045	E-3	129J-7	中世	山茶碗
940	8458		E-3	129A-8	奈良	須恵器
941	8461	SH328	E-3	129I-8	古墳後期	
942	8464	SD2679	E-3	130B-1	中世	山茶碗
943	8468		E-3	129D-8	中世	山茶碗
944	8472	SH206	E-3	130C-2	中世	
945	8475	SH205	E-3	130C-2	中世	
946	8476	SH201	E-3	129D-10	近世	
947	8503	SA204	E-3	130C-2	中世	
948	8504	SH205	E-3	130C-2	中世	
949	8511	SH207	E-3	130D-1	中世	
950	8513	SH207	E-3	130C-1	中世	
951	8514	SH207	E-3	130C-1	中世	
952	8515	SH207	E-3	130C-1	中世	
953	8516	SH207	E-3	130C-1	中世	
954	8517	SH207	E-3	130D-1	中世	
955	8518	SH207	E-3	130D-1	中世	
956	8522	SH207	E-3	130D-1	中世	
957	8524	SH207	E-3	129D-10	中世	
958	8525	SH207-2	E-3	129D-10	中世	

	遺構番号	遺構名	区	グリッド	年代	備考
959	8527	SH207	E-3	129D-10	中世	
960	8552	SH205	E-3	130C-2	中世	
961	8580		E-3	130C-2	中世	山茶碗
962	8606	SD2452	E-3	130B-1	中世	
963	8607	SH207-2	E-3	130D-1	中世	
964	8608	SE8608	E-3	129B-9	近世	
965	8609	SE8609	E-3	129B-9	近世	
966	8610	SE8610	E-3	129B-9	近世	
967	8613		E-3	129B-9	中世	山茶碗
968	8630	SE8630	E-3	129C-9	近世	
969	8637	SE8637	E-3	129C-8	近世	
970	8641		E-3	129B-8	近世	近世陶器
971	8663	SH207	E-3	129D-10	中世	
972	8665	SH207	E-3	130D-1	中世	
973	8667	SH207	E-3	130D-1	中世	
974	8668	SH207	E-3	130D-1	中世	
975	8674	SH207	E-3	130D-1	中世	
976	8681	SE8681	E-3	129B-8	近世	
977	8683	SA203	E-3	129C-8	中世	
978	8684	SA203	E-3	129C-8	中世	
979	8685	SH311	E-3	129C-8	古墳後期	
980	8690	SH311	E-3	129C-8	古墳後期	
981	8692		E-3	129B-9	近世	近世陶器
982	8701	SH202	E-3	129D-8	中世	
983	8707	SH202	E-3	129D-8	中世	
984	8746	SA203	E-3	129E-8	中世	
985	8752	SA203	E-3	129C-8	中世	
986	8769	SE8769	E-3	129G-9	中世	
987	8770	SD8770	E-3	129G-9	中世	
988	8778		E-3	129G-9	中世	山茶碗
989	8779		E-3	129G-9	中世	山茶碗
990	8786	SD8786	E-3	129F-9	中世	山茶碗
991	8799		E-3	129B-9	近世	近世陶器
992	8800		E-3	129B-8	近世	近世陶器
993	8802	SD8183	E-3	130F-1	中世	
994	8806	SD8183	E-3	129G-10	中世	
995	8808		E-3	129G-10	中世	山茶碗
996	8810	SD8770	E-3	129G-10	中世	
997	8813	SH201・202	E-3	129B-8	近世	
998	8816	SH203	E-3	129B-8	近世	
999	8866		E-3	130D-1	中世	山茶碗
1000	8872	SH329	E-3	129J-8	古墳後期	
1001	8886	SH328	E-3	129I-8	古墳後期	
1002	8892		E-3	129C-8	中世	山茶碗
1003	8903	SH201	E-3	129C-7	中世	
1004	8904	SH201	E-3	129C-7	中世	
1005	8905	SH311	E-3	129D-7	古墳後期	
1006	8907	SH203	E-3	129D-8	中世	
1007	8911	SH203	E-3	129D-8	中世	
1008	8912	SH203	E-3	129D-8	中世	
1009	8914	SH202	E-3	129D-7	中世	山茶碗
1010	8918	SE8918	E-3	129B-8	近世	
1011	8919	SE8919	E-3	129B-7	近世	
1012	8920	SE8920	E-3	129B-9	近世	近世陶器
1013	8921	SE8921	E-3	129B-9	近世	近世陶器
1014	8922		E-3	129B-9	近世	近世陶器
1015	8923	SH208	E-3	129D-10	中世	
1016	8925	SD8183	E-3	130F-1	中世	貿易陶磁
1017	8927	SD8927	E-3	129I-8	中世	
1018	8938	SH202・203	E-3	129B-8	近世	
1019	8939	SH202	E-3	129B-8	近世	
1020	8943	SH202	E-3	129D-8	中世	
1021	8945	SH203	E-3	129D-7	中世	
1022	8947	SH203	E-3	129D-7	中世	
1023	8956	SH202	E-3	129B-8	近世	
1024	8959	SH203	E-3	129B-8	近世	
1025	8963	SH207-2	E-3	129D-10	中世	
1026	8981		E-3	129C-8	中世	山茶碗
1027	8983	SH311	E-3	129D-7	古墳後期	
1028	8987	SH311	E-3	129D-7	古墳後期	
1029	8989	SH202	E-3	129C-8	中世	
1030	8992	SH207-2	E-3	129D-10	中世	
1031	8999	SH202	E-3	129C-8	中世	
1032	9015	SH328	E-3	129I-7	古墳後期	

第 19 表　遺構観察表

	遺構番号	遺構名	区	グリッド	年代	備考
1033	9016	SH328	E-3	129I-7	古墳後期	
1034	9020	SH329	E-3	149B-8	古墳後期	
1035	9022	SH331	E-3	149A-7	古墳後期	
1036	9023	SD3134	E-3	110B-1	中世	山茶碗
1037	9024	SH204	E-3	129D-7	中世	
1038	9050	SH207	E-3	129D-10	中世	
1039	9051	SH207	E-3	129D-10	中世	
1040	9065	SH208	E-3	129E-10	中世	
1041	9066	SH208	E-3	129E-10	中世	
1042	9067	SD9067	E-3	129G-10 他	中世	山茶碗
1043	9068	SH208	E-3	129E-10	中世	
1044	9089	SF9089	E-3	130D-3	近世	
1045	9090	SF9090	E-3	130D-3	近世	
1046	9091	SF9091	E-3	130D-3	近世	
1047	9092	SF9092	E-3	130D-3	近世	
1048	9093		E-3	129G-10	中世	山茶碗
1049	9097	SH206	E-3	130D-2	中世	
1050	9099	SH206	E-3	130C-3	中世	
1051	9100	SH206	E-3	130C-3	中世	
1052	9101	SH206	E-3	130C-3	中世	
1053	9103	SH205	E-3	130C-2	中世	
1054	9104	SH205	E-3	130C-2	中世	
1055	9105	SH205	E-3	130C-2	中世	
1056	9106	SH205	E-3	130C-2	中世	
1057	9107	SH205	E-3	130C-2	中世	
1058	9117	SD9067	E-3	129G-7	中世	山茶碗
1059	9119	SH206	E-3	130D-3	中世	
1060	9120	SH205	E-3	130C-2	中世	
1061	9122		E-3	129H-9	中世	山茶碗
1062	9127	SR9127	E-3		古墳後期	須恵器
1063	9128	SR9128	E-3		古墳後期	須恵器・土師器
1064	9130	SR9130	E-3		古墳後期	土師器
1065	9133	SR9133	E-3		古墳後期	須恵器・土師器
1066	9135	SR9125	E-3		古墳後期	須恵器・土師器
1067	9136	SR9126	E-3		古墳後期	須恵器
1068	9137	SR9137	E-3		古墳後期	須恵器
1069	9157		E-3		弥生後期	弥生土器
1070	9208	SH322	E-3	129B-9	古墳後期	
1071	9211	SH322	E-3	129C-9	古墳後期	
1072	9213	SH322	E-3	129C-9	古墳後期	
1073	9218	SH322	E-3	129C-9	古墳後期	
1074	9221	SH318	E-3	129C-10	古墳後期	
1075	9226	SH318	E-3	129C-9	古墳後期	
1076	9227	SH320	E-3	129C-9	古墳後期	
1077	9230	SH318・319	E-3	129C-10	古墳後期	
1078	9231	SH320	E-3	129C-9	古墳後期	
1079	9234	SH319	E-3	129C-9	古墳後期	
1080	9235	SH319	E-3	129C-9	古墳後期	
1081	9236	SH320	E-3	129C-9	古墳後期	
1082	9237	SH319	E-3	129C-10	古墳後期	
1083	9260	SH333	E-3	129F-8	古墳後期	
1084	9262	SH333	E-3	129F-8	古墳後期	
1085	9264	SH333	E-3	129F-8	古墳後期	
1086	9282	SH328	E-3	129I-7	古墳後期	
1087	9283	SH328	E-3	129I-8	古墳後期	
1088	9285	SH328	E-3	129I-8	古墳後期	
1089	9286	SH328	E-3	129I-8	古墳後期	
1090	9287	SH328	E-3	129I-8	古墳後期	
1091	9289	SH328	E-3	129J-8	古墳後期	
1092	9290	SH328	E-3	129I-7	古墳後期	
1093	9291	SH328	E-3	129J-7	古墳後期	
1094	9293	SH329	E-3	129J-7	古墳後期	柱根
1095	9294		E-3	129J-7	弥生後期	弥生土器
1096	9295	SH332	E-3	129J-7	古墳後期	
1097	9296	SH329	E-3	129J-7	古墳後期	
1098	9299	SH329	E-3	129J-8	古墳後期	
1099	9301	SH329	E-3	149A-8	古墳後期	
1100	9302	SH329	E-3	149A-8	古墳後期	
1101	9305	SF9305	E-3	149A-8	古墳後期	
1102	9308	SH330	E-3	149B-7	古墳後期	
1103	9309	SH330	E-3	149B-7	古墳後期	
1104	9311	SH330	E-3	149A-7	古墳後期	柱根
1105	9312	SH330	E-3	149A-7	古墳後期	
1106	9316	SH332	E-3	149A-7	古墳後期	
1107	9317	SH331	E-3	149A-7	古墳後期	
1108	9319	SH329	E-3	129J-7	古墳後期	柱根
1109	9321	SH332	E-3	109J-7	古墳後期	
1110	9323	SH331	E-3	129J-7	古墳後期	
1111	9333	SH318	E-3	129C-10	古墳後期	
1112	9349	SH319	E-3	129C-10	古墳後期	
1113	9352	SH318	E-3	129C-10	古墳後期	
1114	9353	SH319	E-3	129C-9	古墳後期	
1115	9368	SH333	E-3	129F-7	古墳後期	
1116	9373	SH329	E-3	129J-8	古墳後期	
1117	9379	SH328	E-3	129J-8	古墳後期	
1118	9381	SH313	E-3	129D-8	古墳後期	
1119	9382	SH314	E-3	129D-8	古墳後期	
1120	9385	SH313	E-3	129D-9	古墳後期	
1121	9389	SH313	E-3	129D-9	古墳後期	
1122	9390	SH313	E-3	129D-9	古墳後期	
1123	9392	SH313	E-3	129D-9	古墳後期	
1124	9393	SH313	E-3	129D-9	古墳後期	
1125	9394	SH313	E-3	129D-9	古墳後期	
1126	9395	SH313	E-3	129D-9	古墳後期	
1127	9406	SH325	E-3	130C-1	古墳後期	
1128	9408	SH325	E-3	130B-1	古墳後期	
1129	9410	SH325	E-3	130B-1	古墳後期	
1130	9411	SB305	E-3	130B-1	古墳後期	
1131	9417	SH325	E-3	130C-1	古墳後期	
1132	9419	SH325	E-3	130C-1	古墳後期	
1133	9432	SH325	E-3	130C-2	古墳後期	
1134	9435	SH325	E-3	130C-2	古墳後期	
1135	9436	SH323	E-3	130C-2	古墳後期	
1136	9437		E-3	130C-2	古墳後期	土師器
1137	9439	SH325	E-3	130C-2	古墳後期	
1138	9442	SH323	E-3	130C-2	古墳後期	
1139	9443	SH324	E-3	130C-2	古墳後期	
1140	9445	SH323	E-3	130C-2	古墳後期	
1141	9446	SH324	E-3	130C-2	古墳後期	
1142	9457	SH324	E-3	130C-2	古墳後期	
1143	9460	SH324	E-3	130C-2	古墳後期	土師器
1144	9461	SH328	E-3	130C-2	古墳後期	
1145	9462	SH323	E-3	130C-2	古墳後期	
1146	9463	SH324	E-3	130C-2	古墳後期	
1147	9464	SH323	E-3	130C-2	古墳後期	
1148	9465	SH324	E-3	130C-2	古墳後期	
1149	9467	SH323	E-3	130C-2	古墳後期	
1150	9468	SH323	E-3	130C-2	古墳後期	
1151	9472		E-3	130C-2	古墳後期	土師器
1152	9473	SH324	E-3	130C-2	古墳後期	
1153	9474	SH324	E-3	130C-2	古墳後期	
1154	9478		E-3	129C-9	古墳後期	土師器
1155	9481	SH312	E-3	129C-8	古墳後期	
1156	9482	SH311	E-3	129C-8	古墳後期	
1157	9484	SH311	E-3	129C-8	古墳後期	
1158	9485	SH311	E-3	129C-7	古墳後期	
1159	9486	SH311	E-3	129C-7	古墳後期	
1160	9487	SH323	E-3	129C-7	古墳後期	
1161	9488	SH311	E-3	129C-7	古墳後期	
1162	9489	SH311	E-3	129D-7	古墳後期	
1163	9490	SB307	E-3	129D-7 他	古墳後期	
1164	9491	SH311	E-3	129D-7	古墳後期	
1165	9495	SH319	E-3	129C-9	古墳後期	
1166	9497	SH319	E-3	129C-9 他	古墳後期	
1167	9500	SD9500	E-3	129C-10 他	古墳後期	須恵器・土師器
1168	9507	SH311	E-3	129D-8 他	古墳後期	
1169	9508	SH311	E-3	129C-8	古墳後期	
1170	9509	SH311	E-3	129C-8	古墳後期	
1171	9510	SH311	E-3	129C-8	古墳後期	
1172	9511	SH311	E-3	129C-8	古墳後期	
1173	9512	SH311	E-3	129D-7	古墳後期	
1174	9513	SH312	E-3	129C-8	古墳後期	
1175	9516	SH312	E-3	129D-9	古墳後期	
1176	9518	SH314	E-3	129D-8	古墳後期	
1177	9519	SH314	E-3	129D-8	古墳後期	
1178	9524	SH329	E-3	129J-8	古墳後期	
1179	9526	SR9526	E-3		古墳後期	須恵器・土師器
1180	9527	SH324	E-3	130C-2	古墳後期	

第 19 表　遺構観察表

	遺構番号	遺構名	区	グリッド	年代	備考
1181	9532	SH323	E-3	130C-2	古墳後期	
1182	9533	SH325	E-3	130C-2	古墳後期	
1183	9536	SH323	E-3	130B-2	古墳後期	柱根
1184	9537					
1185	9544	SP9544	E-3	130B-2	古墳後期	柱根
1186	9551	SH323	E-3	130C-2	古墳後期	
1187	9559	SH312	E-3	129C-8	古墳後期	
1188	9560	SH312	E-3	129C-9	古墳後期	
1189	9563		E-2	130B-2	古墳後期	須恵器
1190	9565	SH325	E-3	130B-2	古墳後期	
1191	9567	SH325	E-3	130B-2	古墳後期	
1192	9573	SH312	E-3	129C-8	古墳後期	
1193	9581	SH314	E-3	129D-8	古墳後期	
1194	9588	SA202	E-3	130A-3	古墳後期	
1195	9590	SA202	E-3	130A-3	古墳後期	
1196	9591	SA202	E-3	130A-3	古墳後期	
1197	9592	SA202	E-3	130B-3	古墳後期	
1198	9593	SA202	E-3	130B-3	古墳後期	
1199	9599	SA202	E-3	130B-3	古墳後期	
1200	9600	SA202	E-3	130B-3	古墳後期	
1201	9601	SA202	E-3	130B-3	古墳後期	
1202	9626	SH318	E-3	129C-10	古墳後期	
1203	9629	SH319	E-3	129C-10	古墳後期	
1204	9630	SH318	E-3	129C-10	古墳後期	
1205	9632		E-3	129B-10	古墳後期	須恵器
1206	9634	SF9634	E-3	130D-3	古墳後期	土師器
1207	9636	SH329	E-3	149A-7	古墳後期	柱根
1208	9637	SH329	E-3	149A-7	古墳後期	
1209	9640	SH329	E-3	129J-8	古墳後期	
1210	9659	SH328	E-3	129J-7	古墳後期	
1211	9660	SH328	E-3	129J-8	古墳後期	
1212	9661	SH328	E-3	129J-8	古墳後期	
1213	9662	SH328	E-3	129I-8	古墳後期	
1214	9664	SH328	E-3	129I-8	古墳後期	
1215	9666	SP9666	E-3	130C-2	古墳後期	
1216	9672	SH318	E-3	129C-10	古墳後期	
1217	9673	SH320	E-3	129C-10	古墳後期	
1218	9689	SH327	E-3	130D-2	古墳後期	
1219	9693	SH327	E-3	130D-2	古墳後期	
1220	9695	SH327	E-3	130D-2	古墳後期	
1221	9698	SH327	E-3	130D-2	古墳後期	
1222	9705	SH327	E-3	130D-2	古墳後期	
1223	9706	SH327	E-3	130D-2	古墳後期	
1224	9711	SH312	E-3	129D-8	古墳後期	
1225	9712	SH314	E-3	129D-8	古墳後期	
1226	9713	SH314	E-3	129D-8	古墳後期	
1227	9714	SB301	E-3	129G-8	古墳後期	
1228	9715	SB301	E-3	129F-8	古墳後期	
1229	9716	SB301	E-3	129G-8	古墳後期	
1230	9717	SB301	E-3	129F-8	古墳後期	
1231	9718	SH327	E-3	130D-2	古墳後期	
1232	9720	SH311	E-3	129C-7	古墳後期	
1233	9721	SH311	E-3	129D-7	古墳後期	
1234	9724	SB301	E-3	129F-8	古墳後期	
1235	9726	SB303	E-3	130C-1	古墳後期	土師器
1236	9727	SB303	E-3	130C-1	古墳後期	
1237	9728	SB303	E-3	130C-1	古墳後期	
1238	9730	SH318	E-3	129C-10	古墳後期	
1239	9733	SH330	E-3	149A-8	古墳後期	
1240	9734	SH330	E-3	149A-8	古墳後期	
1241	9740	SH330	E-3	149A-8	古墳後期	
1242	9743	SH330	E-3	149A-7 他	古墳後期	
1243	9745	SH331	E-3	149A-7	古墳後期	
1244	9746	SH331	E-3	149A-7	古墳後期	
1245	9748	SH331	E-3	149A-7	古墳後期	柱根
1246	9751	SH332	E-3	149A-7	古墳後期	
1247	9757	SH331	E-3	129J-7	古墳後期	
1248	9760	SH332	E-3	129J-7	古墳後期	
1249	9768	SB303	E-3	130C-1	古墳後期	
1250	9770	SB304	E-3	130C-2	古墳後期	
1251	9771	SB304	E-3	130C-2	古墳後期	
1252	9772	SB304	E-3	130C-2	古墳後期	
1253	9773	SB304	E-3	130C-2	古墳後期	
1254	9786	SH331	E-3	129J-7	古墳後期	

	遺構番号	遺構名	区	グリッド	年代	備考
1255	9787	SH333	E-3	129E-7	古墳後期	
1256	9788	SH333	E-3	129E-8	古墳後期	
1257	9790	SH333	E-3	129F-7	古墳後期	土師器
1258	9796	SH324	E-3	130C-2	古墳後期	
1259	9797	SH324	E-3	130C-2	古墳後期	
1260	9800	SH324	E-3	130C-2	古墳後期	
1261	9802	SH331	E-3	149A-7	古墳後期	
1262	9803	SH330	E-3	149A-7	古墳後期	
1263	9804	SB308	E-3	130C-1	古墳後期	
1264	9805	SB308	E-3	130C-1	古墳後期	
1265	9806	SB308	E-3	130C-1	古墳後期	
1266	9807	SH325	E-3	130C-1	古墳後期	
1267	9809	SH332	E-3	129J-7	古墳後期	
1268	9812	SH333	E-3	129F-8	古墳後期	
1269	9816	SH333	E-3	129F-7	古墳後期	
1270	9825		E-3	129F-7	古墳後期	土師器
1271	9826		E-3	129F-7	古墳後期	土師器
1272	9830	SB302	E-3	129D-10	古墳後期	
1273	9831	SB302	E-3	129D-10	古墳後期	
1274	9832	SB302	E-3	129D-10	古墳後期	
1275	9833	SB302	E-3	129C-10	古墳後期	
1276	9834	SB305	E-3	130B-1	古墳後期	
1277	9835	SB307	E-3	129C-7	古墳後期	
1278	9837	SB307	E-3	129C-8	古墳後期	
1279	9838	SB307	E-3	129C-8	古墳後期	
1280	9848	SF9848	E-3	129B-10	古墳後期	
1281	9896	SH320	E-3		古墳後期	
1282	10027	SA301	E-3	130E-4	古墳後期	
1283	10028	SA301	E-3	130E-4	古墳後期	
1284	10029	SA301	E-3	130E-3	古墳後期	
1285	10030	SA301	E-3	130E-3	古墳後期	
1286	10038	SR6400	E-3	129B-10	弥生後期	弥生土器
1287	10046	SR6400	E-3	129B-10 他	弥生後期	弥生土器
1288	10050		E-3	129B-9	弥生後期	弥生土器
1289	10053		E-3	130C-3 他	古墳後期	須恵器・土師器
1290	10054	SR10054	E-3	130D-4	古墳後期	土師器
1291	10064	SR10064	E-3	130D-2 他	古墳後期	須恵器・土師器
1292	10065		E-3	129D-10	古墳後期	須恵器
1293	10075		E-3	130C-1 他	弥生後期	弥生土器
1294	10093	SB319	E-3	130D-1	弥生後期	
1295	10115	SH343	E-3	130D-2	弥生後期	礎板
1296	10132	SB310	E-3	130C-1	弥生後期	
1297	10138	SR10138	E-3	130C-1	古墳後期	須恵器
1298	10141	SB310	E-3	130C-1	弥生後期	
1299	10142	SB310	E-3	130C-1	弥生後期	
1300	10148	SB309A	E-3	130C-2	弥生後期	礎板
1301	10158	SB309A	E-3	130B-3	弥生後期	礎板
1302	10160	SB309B	E-3	130B-3	弥生後期	礎板
1303	10162	SB309A	E-3	130B-3	弥生後期	礎板
1304	10172	SB309A	E-3	130C-2	弥生後期	礎板
1305	10173	SD10173	E-3	130D-3 他	古墳後期	須恵器
1306	10190	SB309B	E-3	130C-3	弥生後期	
1307	10191	SB309B	E-3	130C-2	弥生後期	
1308	10192	SB309B	E-3	130C-2	弥生後期	礎板
1309	10193	SB309B	E-3	130D-1	弥生後期	礎板
1310	10196	SP10196	E-3	130D-3	古墳後期	土師器
1311	10203	SB335	E-3	130D-3	弥生後期	
1312	10212	SP10212	E-3	130B-1	古墳後期	土師器
1313	10240	SH343	E-3	130D-2	弥生後期	柱根
1314	10244	SH343	E-3	130D-2	弥生後期	礎板
1315	10247	SH343	E-3	130D-2	弥生後期	礎板
1316	10260	SB316	E-3	130D-2	弥生後期	
1317	10261	SB335	E-3	130D-2	弥生後期	
1318	10264	SB319	E-3	130D-2 他	弥生後期	
1319	10266	SH343	E-3	130D-2	弥生後期	礎板
1320	10285	SB313	E-3	129A-9	弥生後期	柱根
1321	10286	SB313	E-3	129B-9	弥生後期	
1322	10288	SB313	E-3	129B-9	弥生後期	
1323	10290	SB313	E-3	129B-9	弥生後期	
1324	10304	SB335	E-3	130C-3	弥生後期	
1325	10305	SB335	E-3	130C-2	弥生後期	
1326	10314	SB331	E-3	129C-10	弥生後期	
1327	10319	SB331	E-3	130C-1	弥生後期	
1328	10324	SB331	E-3	130C-1	弥生後期	

第 19 表　遺構観察表

	遺構番号	遺構名	区	グリッド	年代	備考
1329	10347	SH342	E-3	129B-10	弥生後期	
1330	10350	SB314	E-3	129B-10	弥生後期	
1331	10351	SH342	E-3	129B-10	弥生後期	
1332	10355	SB314	E-3	129B-10	弥生後期	
1333	10364	SH342	E-3	129B-10	弥生後期	
1334	10370	SH342	E-3	129B-10	弥生後期	
1335	10383	SH340	E-3	129B-10	弥生後期	礎板・柱痕
1336	10386	SH342	E-3	129B-10	弥生後期	
1337	10391	SB314	E-3	129B-10	弥生後期	
1338	10397	SB319	E-3	130D-1	古墳後期	
1339	10403	SB316	E-3	130D-2	弥生後期	
1340	10455	SE10455	E-3	129F-9	弥生後期	
1341	10457	SD10457	E-5 ②		古墳後期	
1342	10458	SH343	E-3	130D-2	弥生後期	礎板・柱痕
1343	10459	SH343	E-3	130C-2	弥生後期	礎板
1344	10460	SH343	E-3	130C-2	弥生後期	
1345	10463	SK10463	E-3		弥生後期	
1346	10464	SK10464	E-3		弥生後期	
1347	10466	SK10466	E-3		弥生後期	
1348	10470	SR10470	E-3	130D-2 他	弥生後期	
1349	10471	SR10471	E-3	130D-4 他	弥生後期	
1350	10478	SH331	E-3		古墳後期	柱根
1351	10479	SH331	E-3		古墳後期	
1352	10480	SH331	E-3		古墳後期	柱根
1353	10483	SP10483	E-3		中世	銭貨
1354	10484	SP10484	E-3		古墳後期	土師器
1355	2	SK2	B 北	130B-4 他	弥生後期～古墳前期	
1356	3	SK3	B 北	130B-4 他	弥生後期～古墳前期	
1357	4	SK4	B 北	130B-4 他	弥生後期～古墳前期	
1358	6	SK6	B 南	151A-4 他	弥生後期～古墳前期	
1359	7	SK7	B 南	151A-4 他	弥生後期～古墳前期	
1360	8	SK8	B 南	150A-5 他	弥生後期～古墳前期	古式土師器
1361	9	SK9	C	131B-4 他	奈良～近世	
1362	60		A-1	150B-1	古墳後期	須恵器
1363	129	SD129	A-1	150C-2	古墳後期	須恵器
1364	240	SX240	A-1	150C-1	古墳後期	土師器
1365	280	SD280	A-1	150C-1 他	近世	
1366	281	SE281	A-1	150D-1		
1367	293		A-1	150C-1	弥生後期	弥生土器
1368	339	SB518	A-1	150D-2	奈良	
1369	341	SB518	A-1	150D-2	奈良	
1370	342		A-1	150D-2	弥生中期	弥生土器
1371	352	SB353	A-1	150D-2	奈良	
1372	353	SB353	A-1	150D-2	奈良	
1373	355		A-1	150D-2	弥生後期	弥生土器
1374	426		A-1	170A-2	弥生後期	弥生土器
1375	470		A-1	170A-3	弥生後期	弥生土器
1376	482	SB353	A-1	150D-2	奈良	
1377	486	SB353	A-1	150D-2	奈良	
1378	518	SB518	A-1	150D-2	奈良	
1379	531	A531	A-1	150D-3 他	奈良～近世	
1380	534	A534	A-1	150D-3 他	奈良～近世	須恵器・灰釉陶器・貿易陶磁・山茶碗
1381	535	A535	A-1	150C-1 他	近世	近世陶器
1382	536	A536	A-1	150D-1 他	近世	近世陶器
1383	541	SX541	A-1	149B-5	古墳後期	須恵器・土師器
1384	542	SK542	A-1		奈良～近世	
1385	543	SK543	A-1		奈良～近世	
1386	544	SK544	A-1		奈良～近世	
1387	545	SK545	A-1		奈良～近世	
1388	546	SK546	A-1		奈良～近世	
1389	547	SK547	A-1		奈良～近世	
1390	548	SK548	A-1		奈良～近世	
1391	549	SK549	A-1		奈良～近世	
1392	550	SK550	A-1		奈良～近世	
1393	551	SK551	A-1		奈良～近世	
1394	552	SK552	A-1		奈良～近世	
1395	553	SK553	A-1		奈良～近世	

	遺構番号	遺構名	区	グリッド	年代	備考
1396	554	SK554	A-1		奈良～近世	
1397	555	SK555	A-1		奈良～近世	
1398	556	SK556	A-1		奈良～近世	
1399	557	SK557	A-1		奈良～近世	
1400	558	SE558	A-1		中世	山茶碗
1401	559	SE559	A-1		中世	
1402	560	SK560	A-2		奈良～近世	
1403	561	SK561	A-2		奈良～近世	
1404	562	SK562	A-2		奈良～近世	
1405	563	SK563	A-2		奈良～近世	
1406	564	SK564	A-2		奈良～近世	
1407	565	SK565	A-2		奈良～近世	
1408	566	SK566	A-2		奈良～近世	
1409	567	SK567	A-2		奈良～近世	
1410	568	SK568	A-2		奈良～近世	
1411	569	SK569	A-2		奈良～近世	
1412	570	SK570	A-2		奈良～近世	
1413	571	SK571	A-2		奈良～近世	
1414	572	SK572	A-2		奈良～近世	
1415	573	SK573	A-2		奈良～近世	
1416	574	SK574	A-2		奈良～近世	
1417	575	SK575	A-2		奈良～近世	
1418	576	SK576	A-2		奈良～近世	
1419	577	SK577	A-2		奈良～近世	
1420	578	SK578	A-2		奈良～近世	
1421	579	SK579	A-2		奈良～近世	
1422	580	SK580	A-2		奈良～近世	
1423	581	SK581	A-2		奈良～近世	
1424	582	SK582	A-2		奈良～近世	
1425	583	SK583	A-2		奈良～近世	
1426	584	SK584	A-1		奈良～近世	
1427	585	SX585	A-1		古墳後期	土師器
1428	591	SK591	A-1		弥生後期～古墳前期	
1429	592	SK592	A-1		弥生後期～古墳前期	
1430	593	SK593	A-1		弥生後期～古墳前期	
1431	594	SK594	A-1		弥生後期～古墳前期	
1432	595	SK595	A-1		弥生後期～古墳前期	
1433	596	SK596	A-2		弥生後期～古墳前期	古式土師器
1434	597	SK597	A-2		弥生後期～古墳前期	
1435	598	SX598	A-2		弥生後期～古墳前期	
1436	599	SK599	A-2		弥生後期～古墳前期	
1437	600	SK600	A-2		弥生後期～古墳前期	
1438	601	SK601	A-2		弥生後期～古墳前期	
1439	602	SK602	A-2		弥生後期～古墳前期	古式土師器
1440	603	SK603			弥生後期～古墳前期	弥生土器
1441	604				弥生後期	弥生土器
1442	606	SK606			弥生後期～古墳前期	
1443	607	SR607	A-1		弥生後期	弥生土器
1444	608	SR608	A-2		弥生後期	弥生土器
1445	610	B610	B 南			
1446	611	SK611	A-2 南		弥生後期～古墳前期	
1447	612	SK612	B 南		弥生後期～古墳前期	
1448	613	SK613	B 南		弥生後期～古墳前期	
1449	614	SK614	A-2		弥生後期～古墳前期	
1450	635	SB353	A-1	150D-2	奈良	

写 真 図 版

図版 1

古墳時代後期調査面全景

図版２

1. E-2区古墳時代後期面遠景（北から）

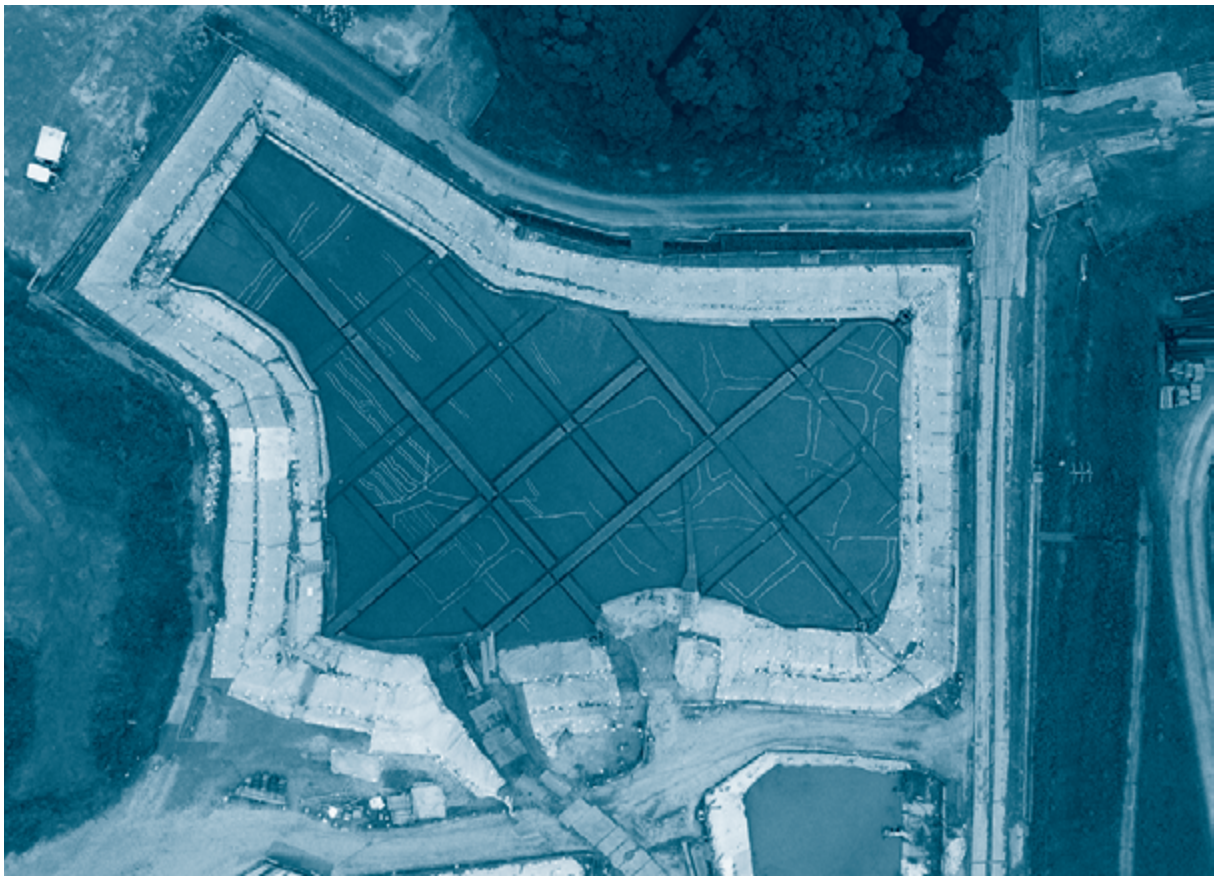
2. E-2区古墳時代後期面全景

1. E-3区古墳時代後期面遠景（南東から）

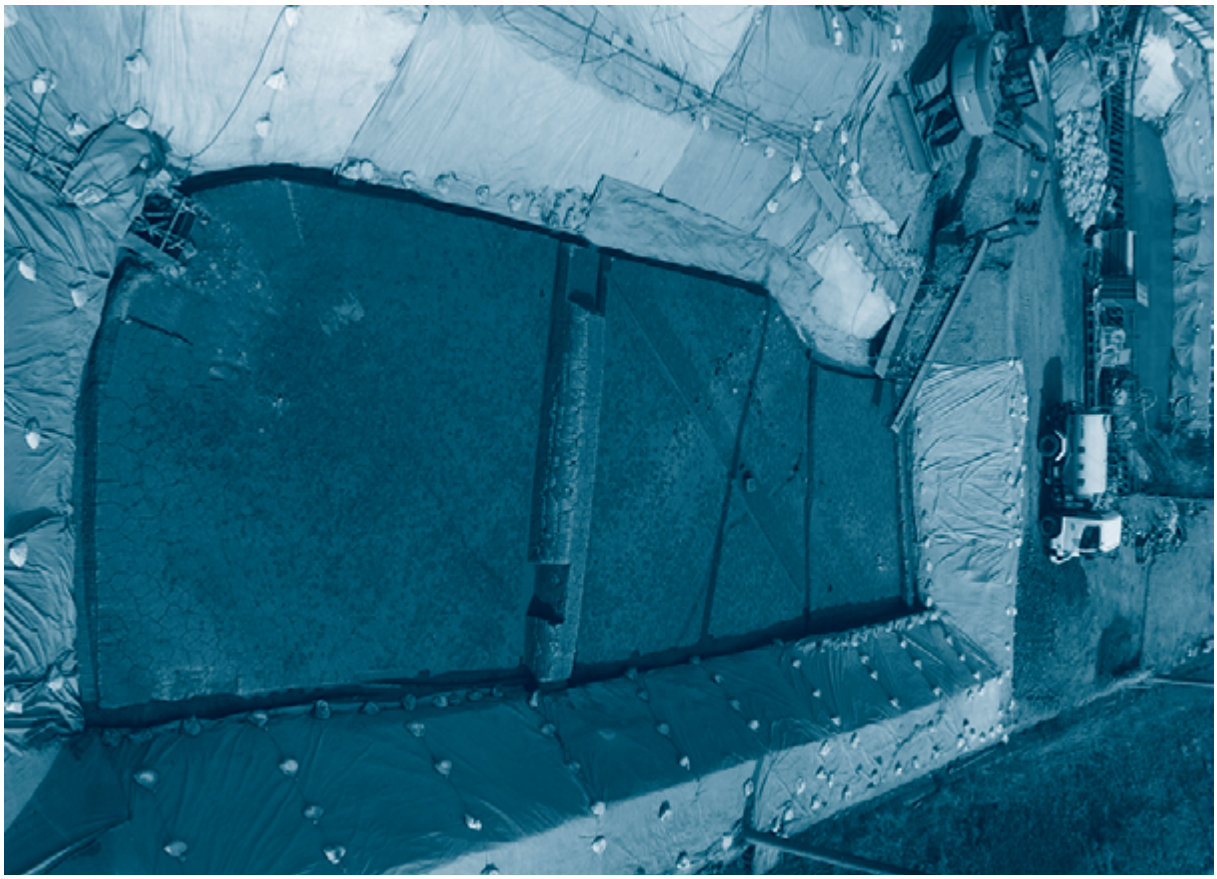
2. E-3区古墳時代後期面全景（北から）

図版４

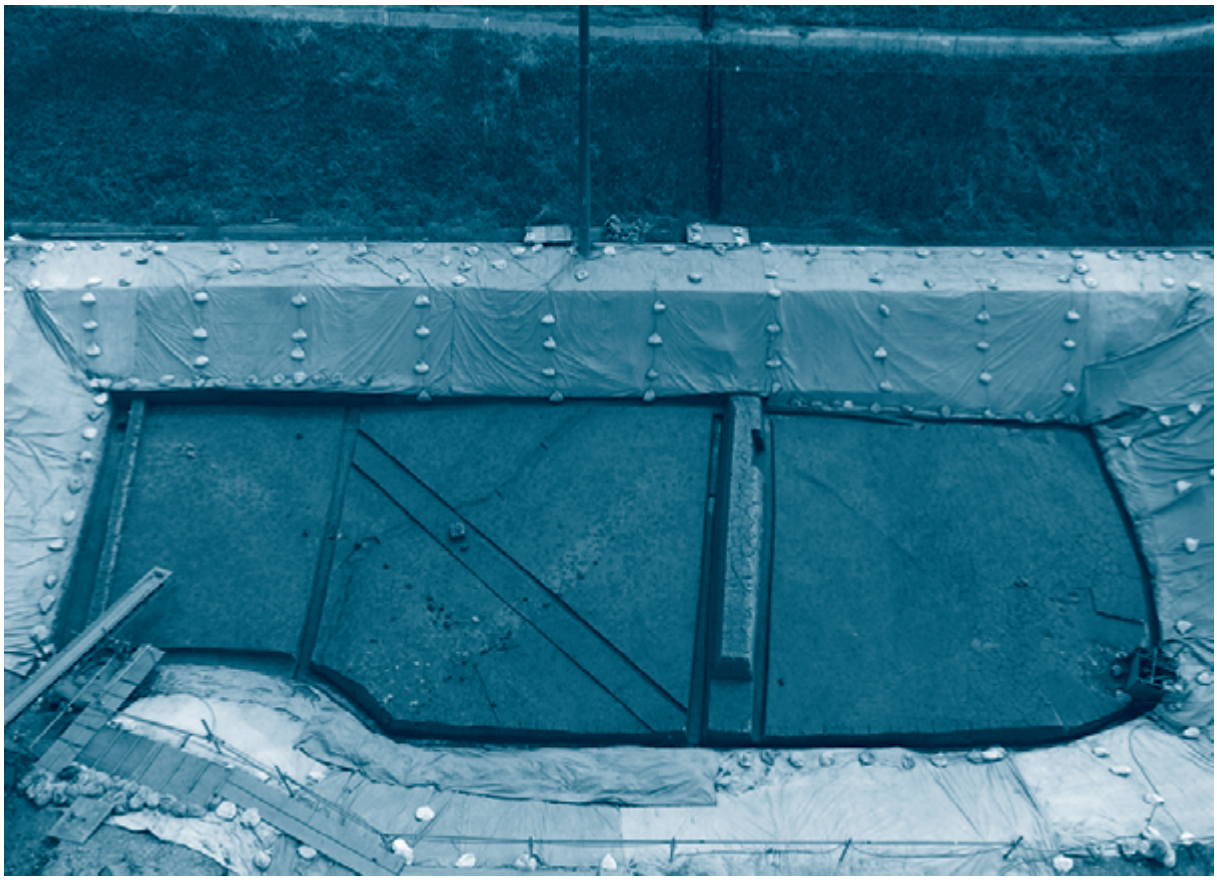
1. E-4区古墳時代後期面遠景



2. E-4区古墳時代後期面全景（北西から）

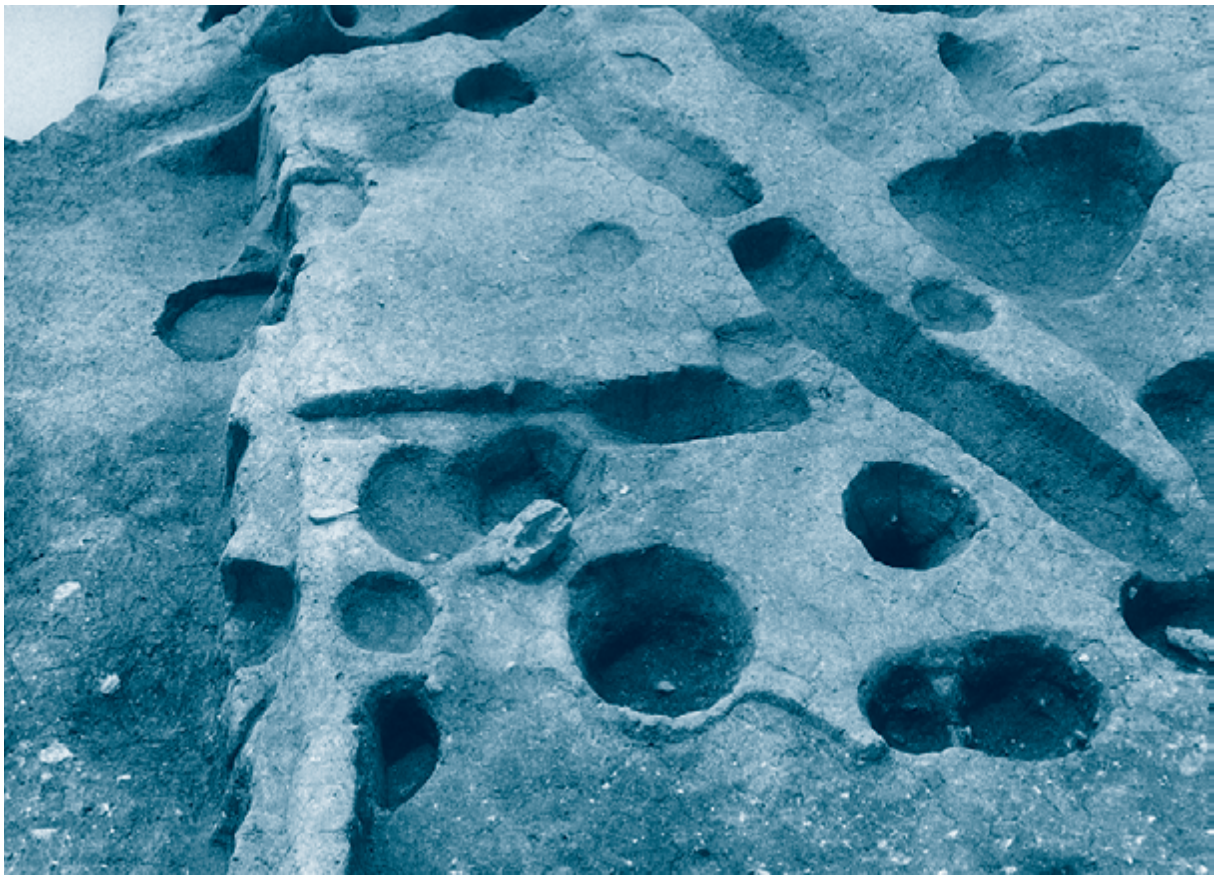


1. E-5区古墳時代後期面遠景（南東から）

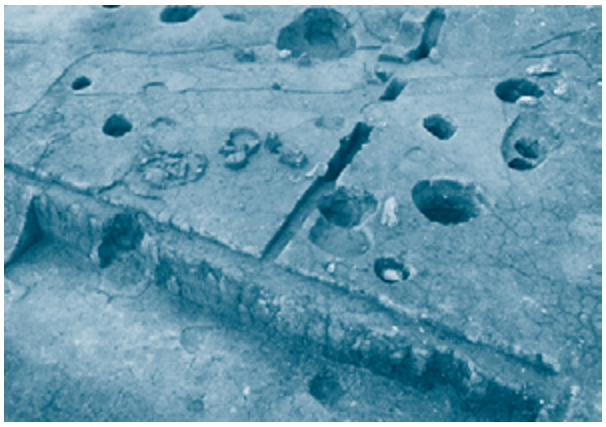


2. E-5区古墳時代後期面全景

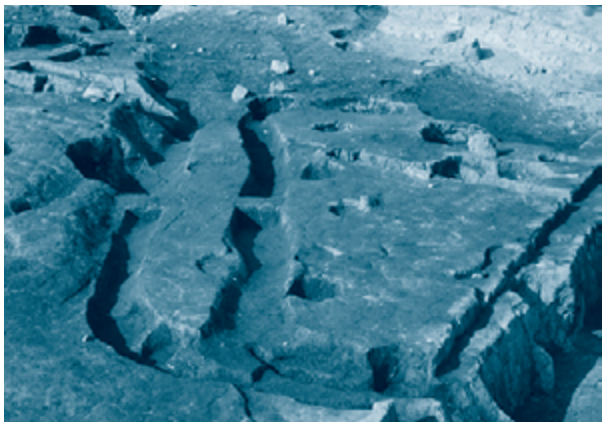
図版６



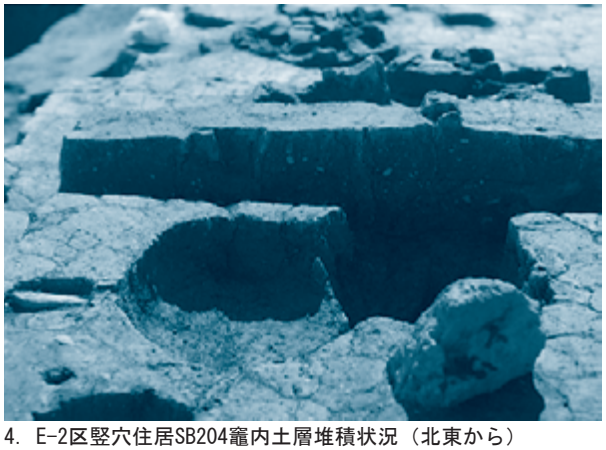
1. E-2区竪穴住居SB204完掘状況（北から）



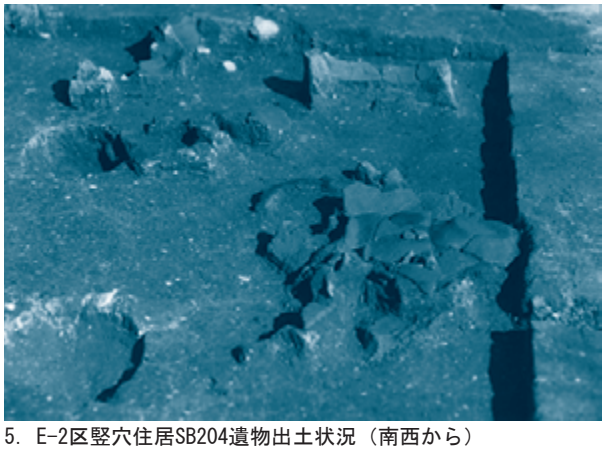
2. E-2区竪穴住居SB204床面検出状況（東から）



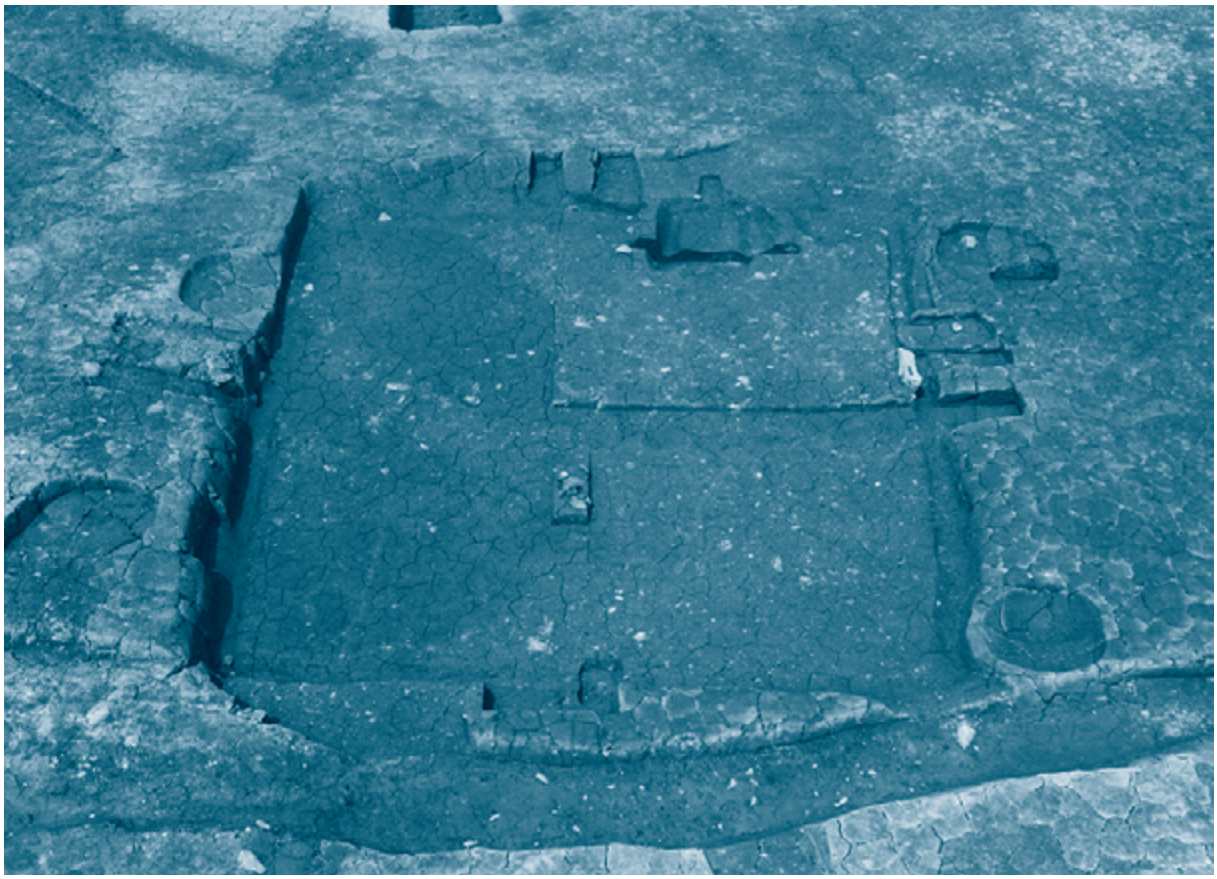
3. E-2区竪穴住居SB204壁溝完掘状況（南から）



4. E-2区竪穴住居SB204竈内土層堆積状況（北東から）



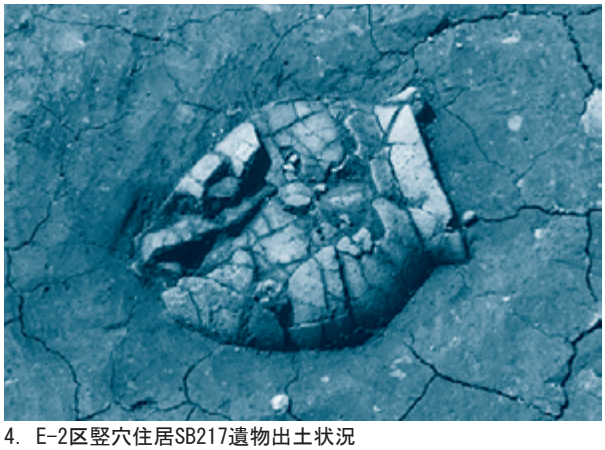
5. E-2区竪穴住居SB204遺物出土状況（南西から）



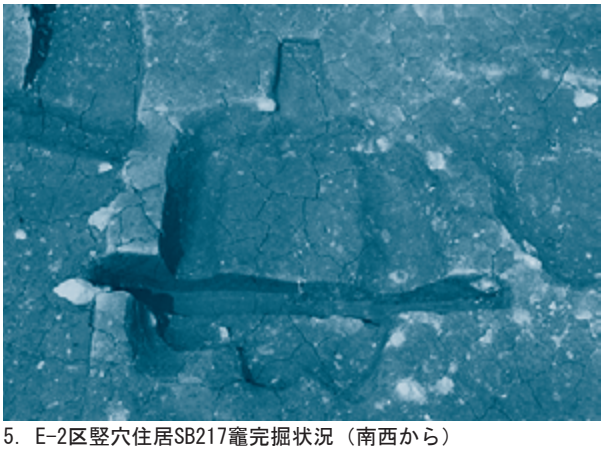
1. E-2区竪穴住居SB217完掘状況（南西から）

2. E-2区竪穴住居SB217床面検出状況（北東から）

3. E-2区竪穴住居SB217床面土層堆積状況（南から）

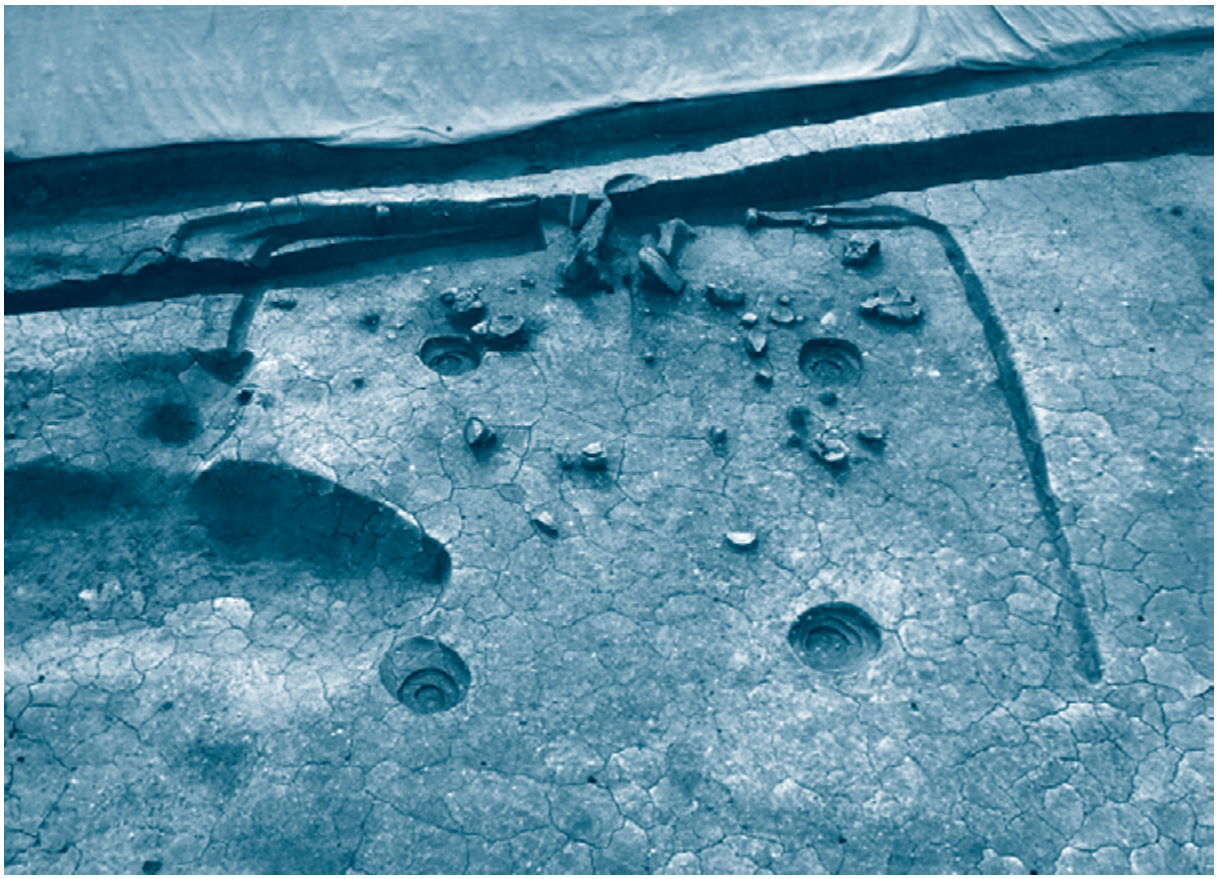


4. E-2区竪穴住居SB217遺物出土状況

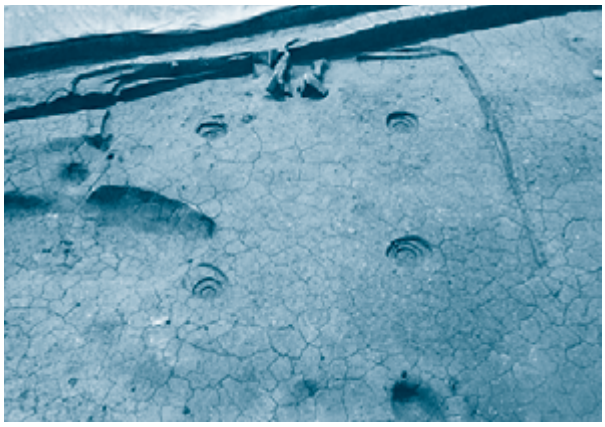


5. E-2区竪穴住居SB217竈完掘状況（南西から）

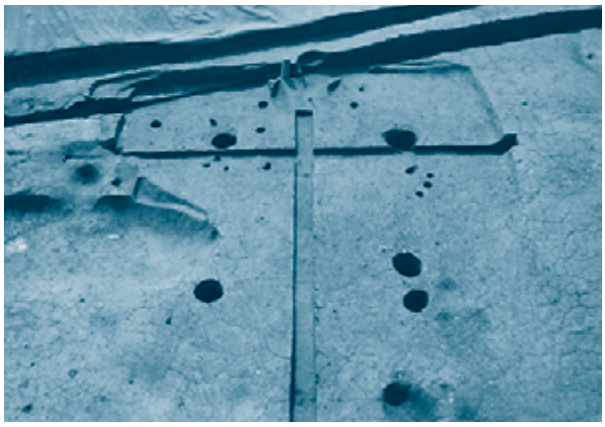
図版８



1. E-3区竪穴住居SB301検出状況（東から）



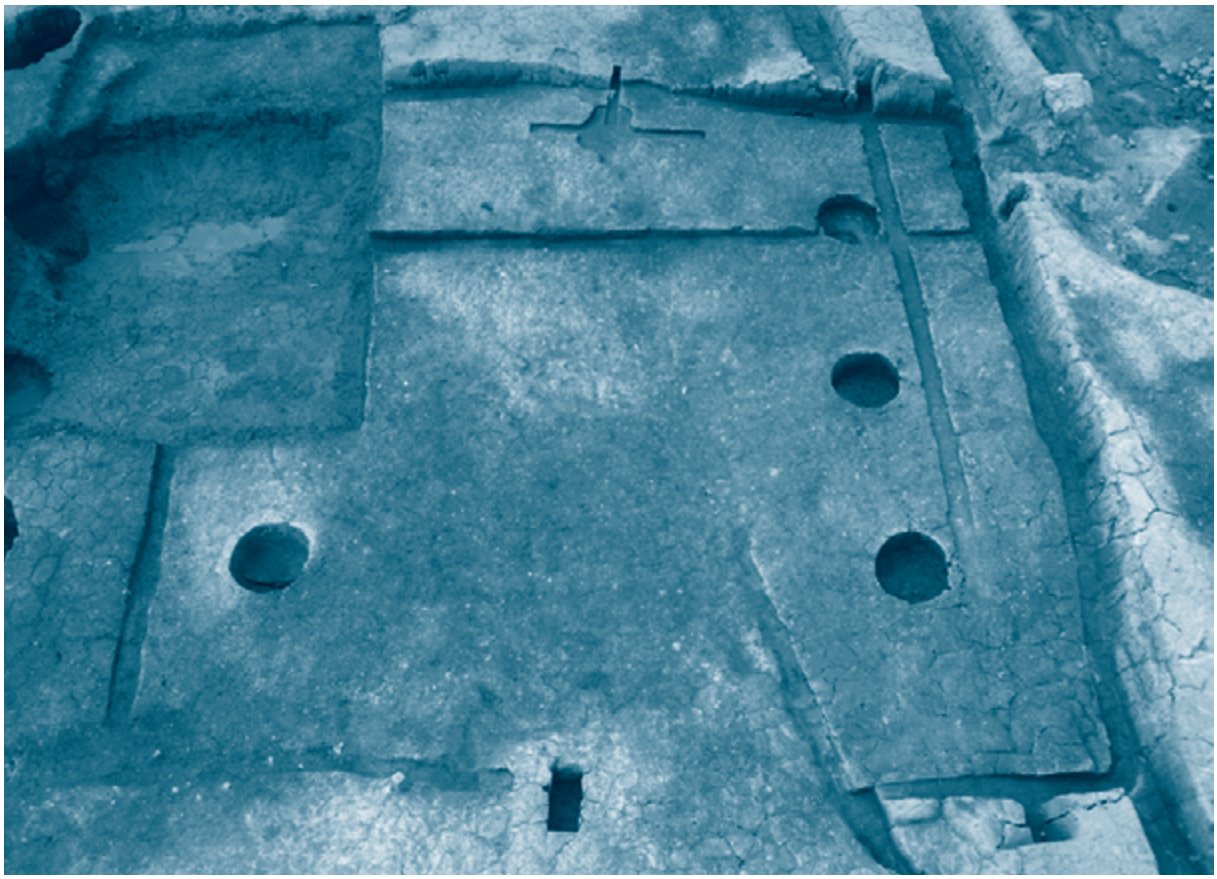
2. E-3区竪穴住居SB301床面検出状況（東から）



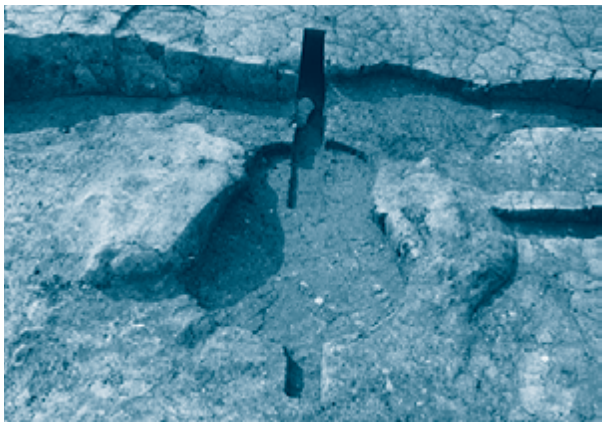
3. E-3区竪穴住居SB301完掘状況（東から）

4. E-3区竪穴住居SB301竈検出状況（東から）

5. E-3区竪穴住居SB301竈完掘状況（東から）

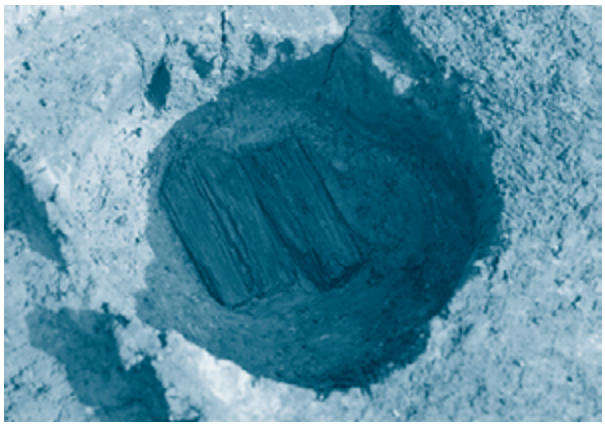


1. E-3区竪穴住居SB302完掘状況（東から）

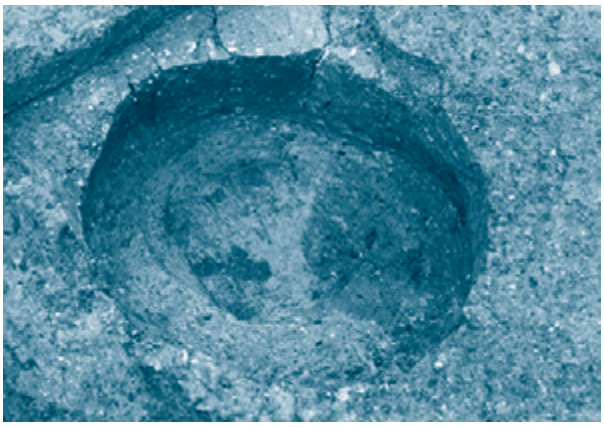


2. E-3区竪穴住居SB302竈完掘状況（東から）

3. E-3区竪穴住居SB302遺物出土状況（南東から）



4. E-3区竪穴住居SB302柱穴SP9830礎板



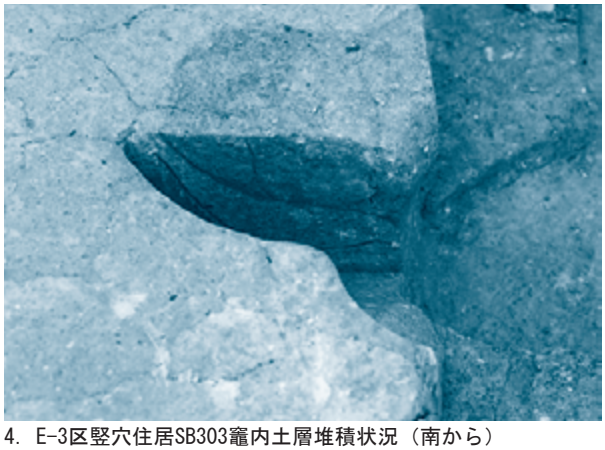
5. E-3区竪穴住居SB302柱穴SP9830

図版10

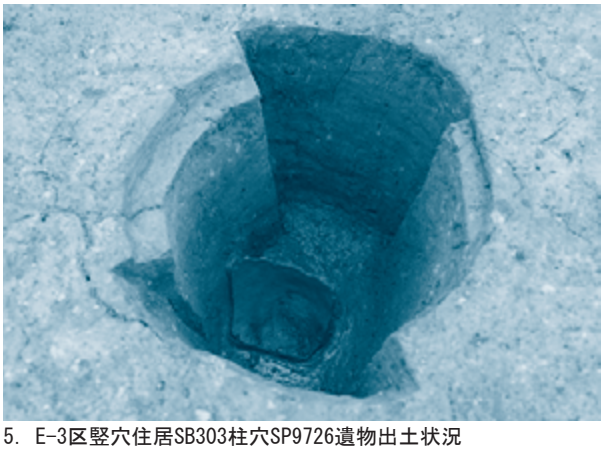
1. E-3区竪穴住居SB303床面検出状況（南東から）

2. E-3区竪穴住居SB303竈完掘状況（南東から）

3. E-3区竪穴住居SB303竈完掘状況（北東から）



4. E-3区竪穴住居SB303竈内土層堆積状況（南から）

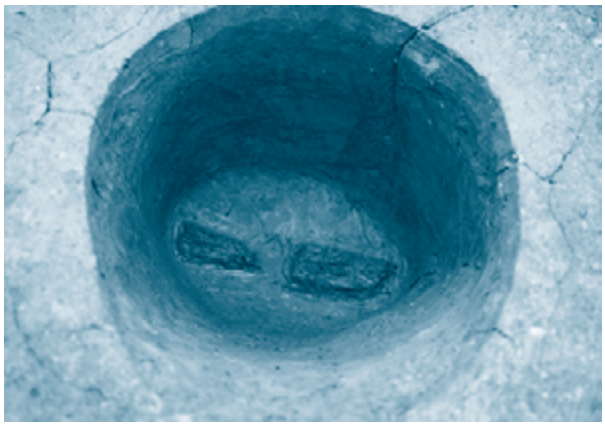


5. E-3区竪穴住居SB303柱穴SP9726遺物出土状況

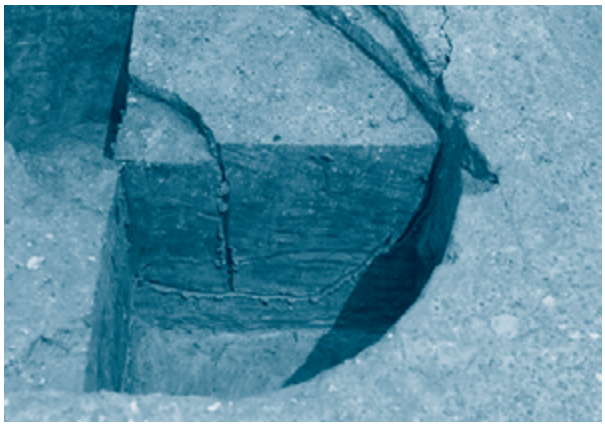
1. E-3区竪穴住居SB304検出状況（南西から）

2. E-3区竪穴住居SB304完掘状況（南西から）

3. E-3区竪穴住居SB304竈残存部分（南から）

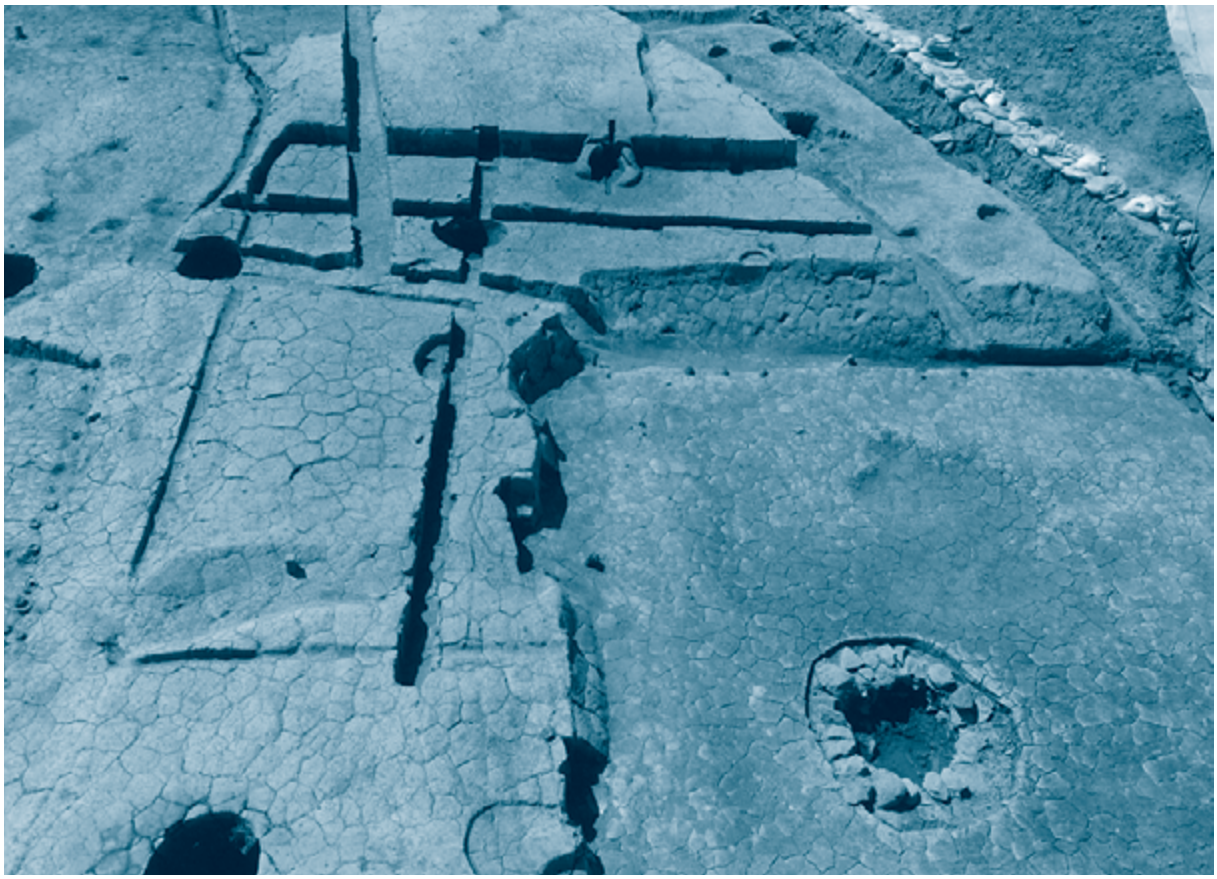


4. E-3区竪穴住居SB304柱穴SP9771



5. E-3区竪穴住居SB304柱穴SP9773

図版12

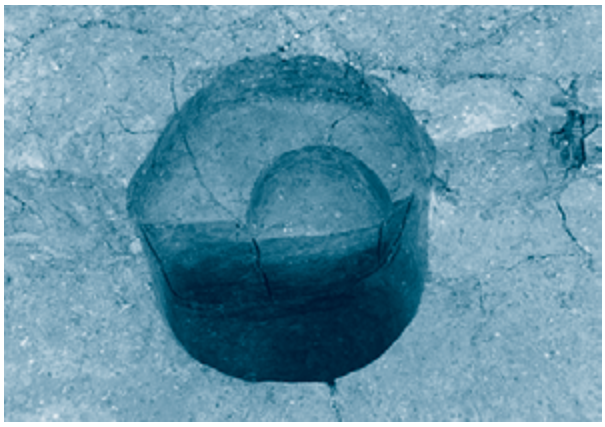


1. E-3区竪穴住居SB305完掘状況（東から）

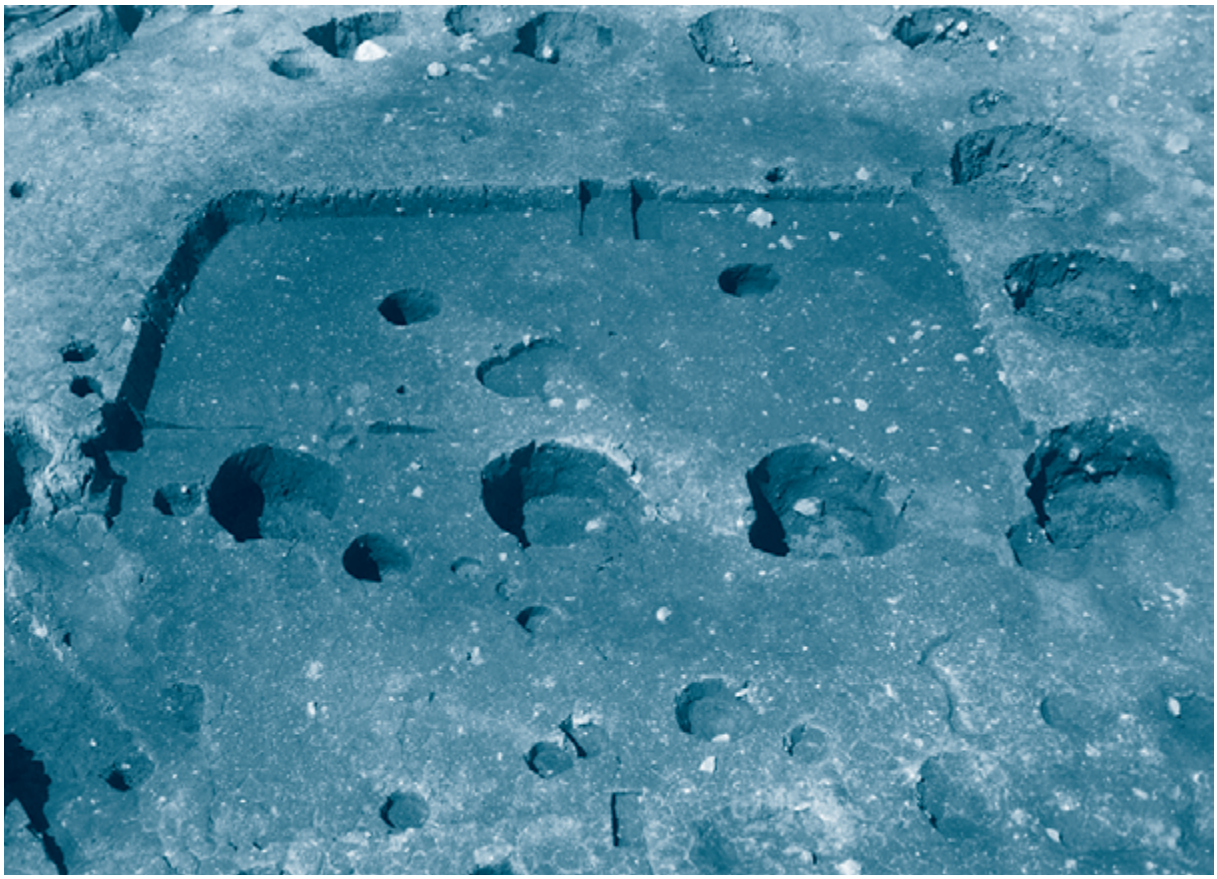
2. E-3区竪穴住居SB305竈検出状況（東から）

3. E-3区竪穴住居SB305竈内土層堆積状況（北から）

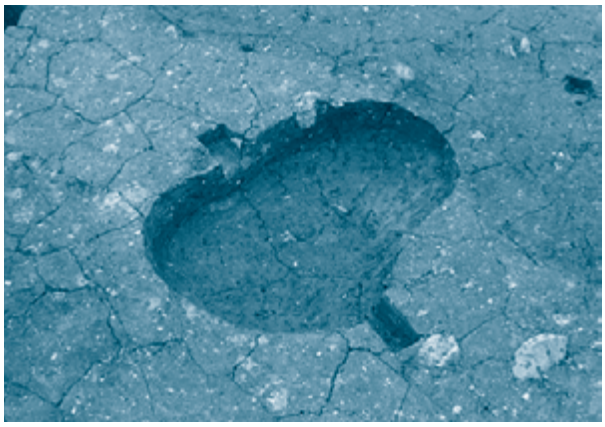
4. E-3区竪穴住居SB305竈完掘状況（東から）



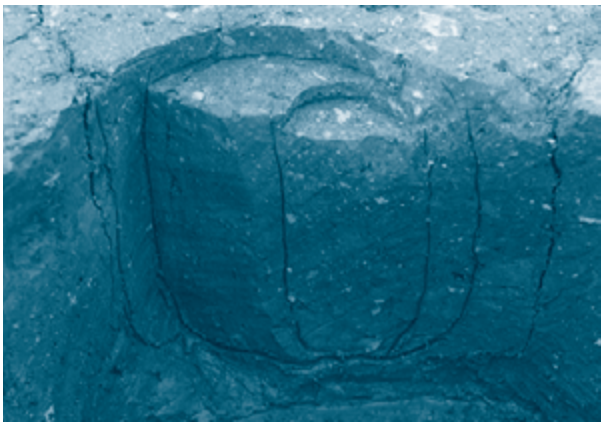
5. E-3区竪穴住居SB305柱穴SP9410



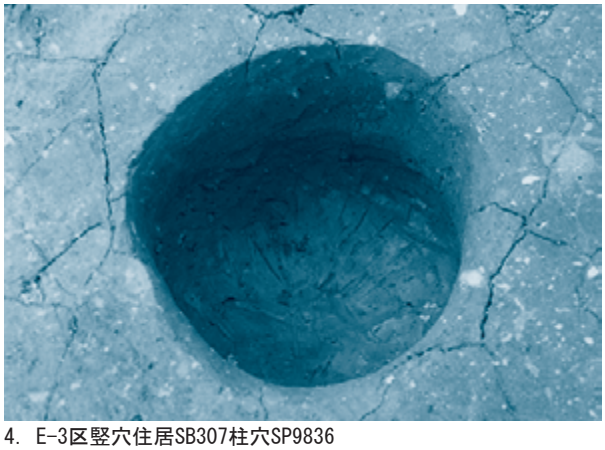
1. E-3区竪穴住居SB307完掘状況（南東から）



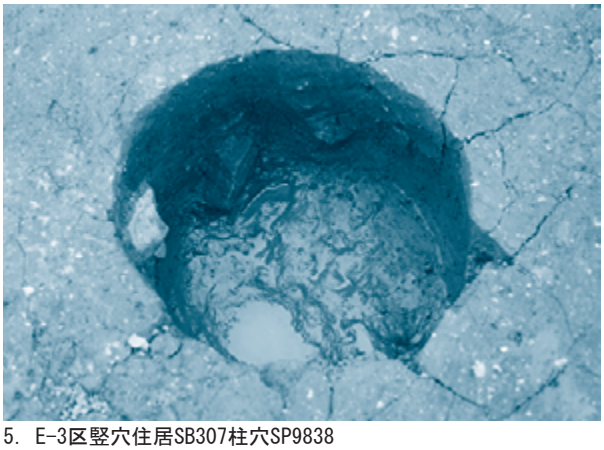
2. E-3区竪穴住居SB307竈完掘状況（東から）



3. E-3区竪穴住居SB307柱穴SP9837

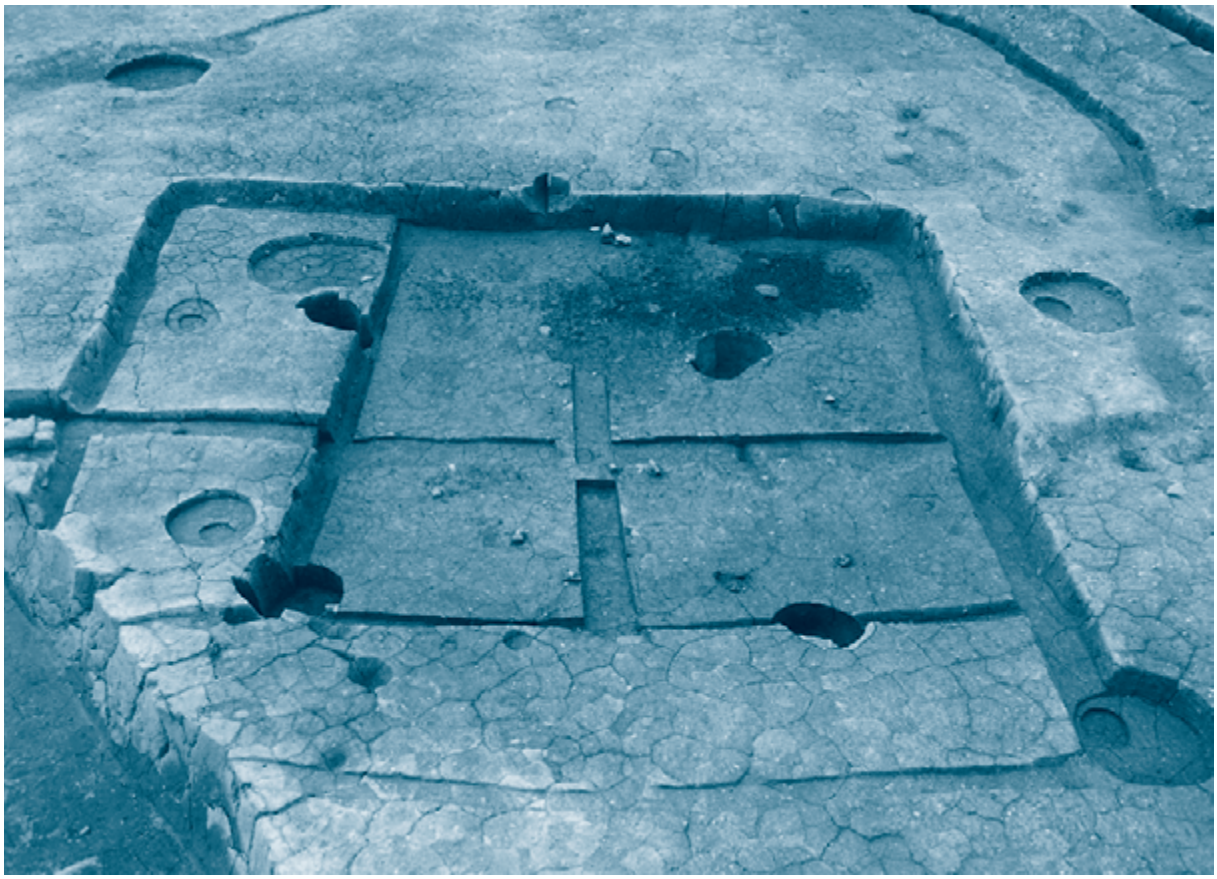


4. E-3区竪穴住居SB307柱穴SP9836



5. E-3区竪穴住居SB307柱穴SP9838

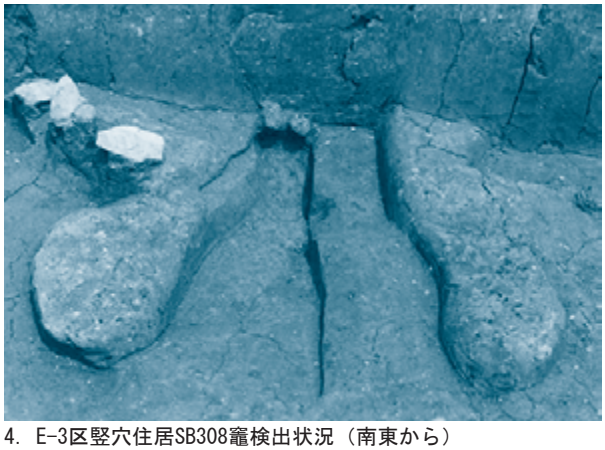
図版14



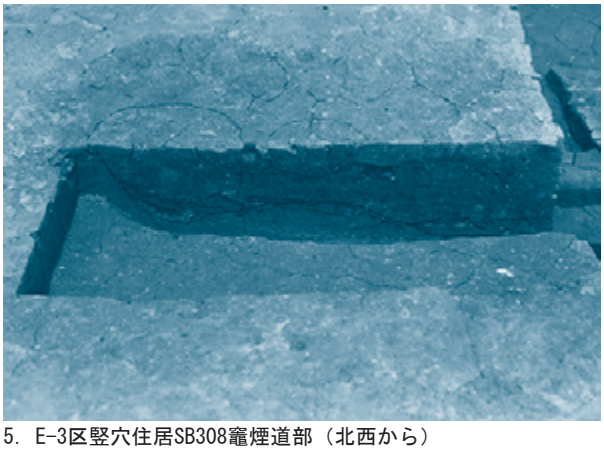
1. E-3区竪穴住居SB308検出状況（南東から）

2. E-3区竪穴住居SB308完掘状況（南東から）

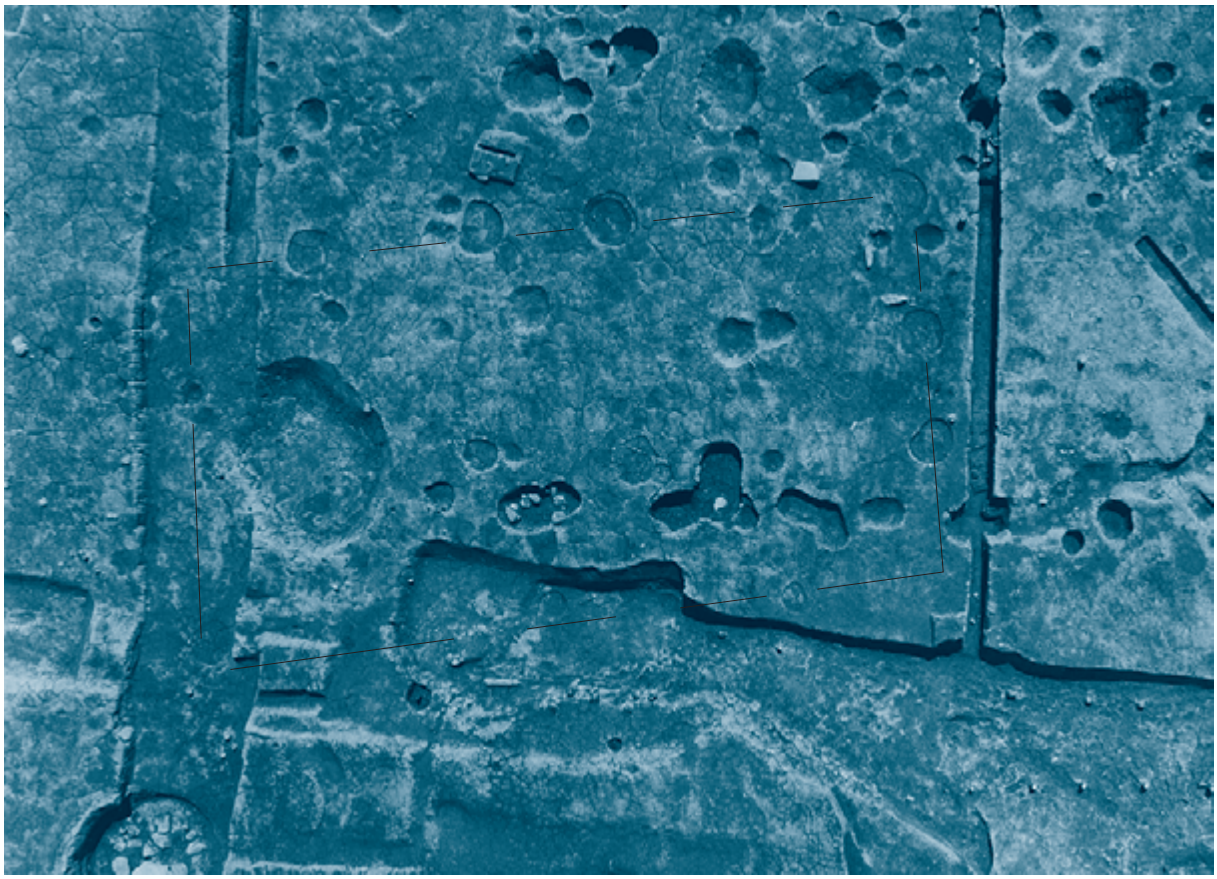
3. E-3区竪穴住居SB308竈内土層堆積状況（南東から）



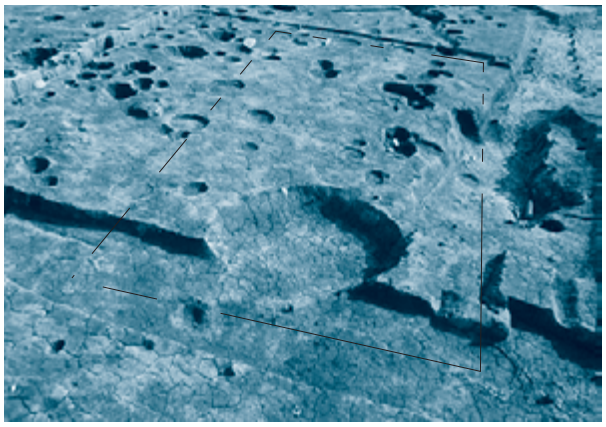
4. E-3区竪穴住居SB308竈検出状況（南東から）



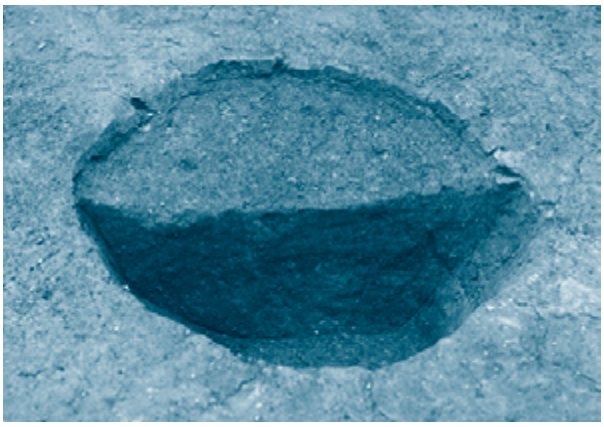
5. E-3区竪穴住居SB308竈煙道部（北西から）



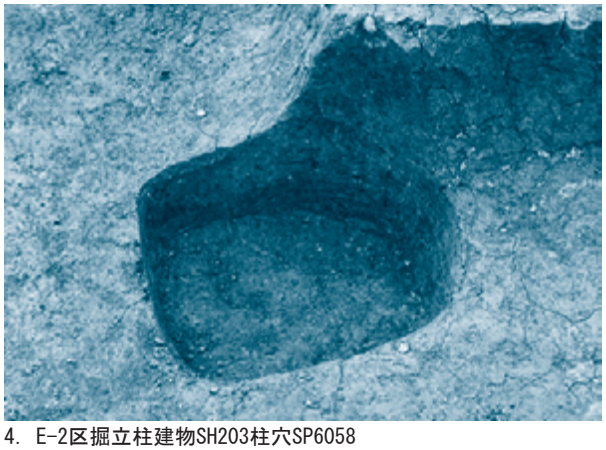
1. E-2区掘立柱建物SH203全景 1



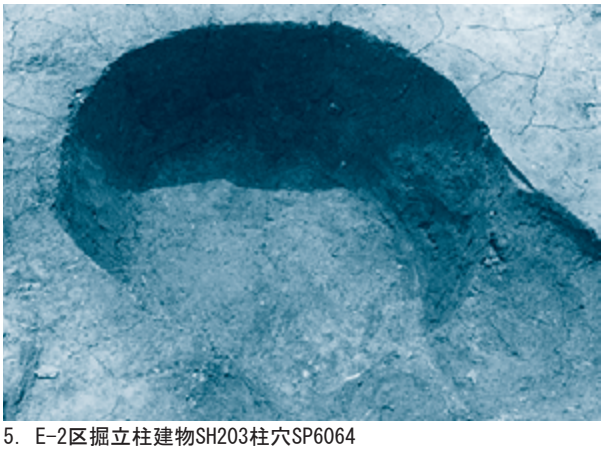
2. E-2区掘立柱建物SH203全景 2（北から）



3. E-2区掘立柱建物SH203柱穴SP6065

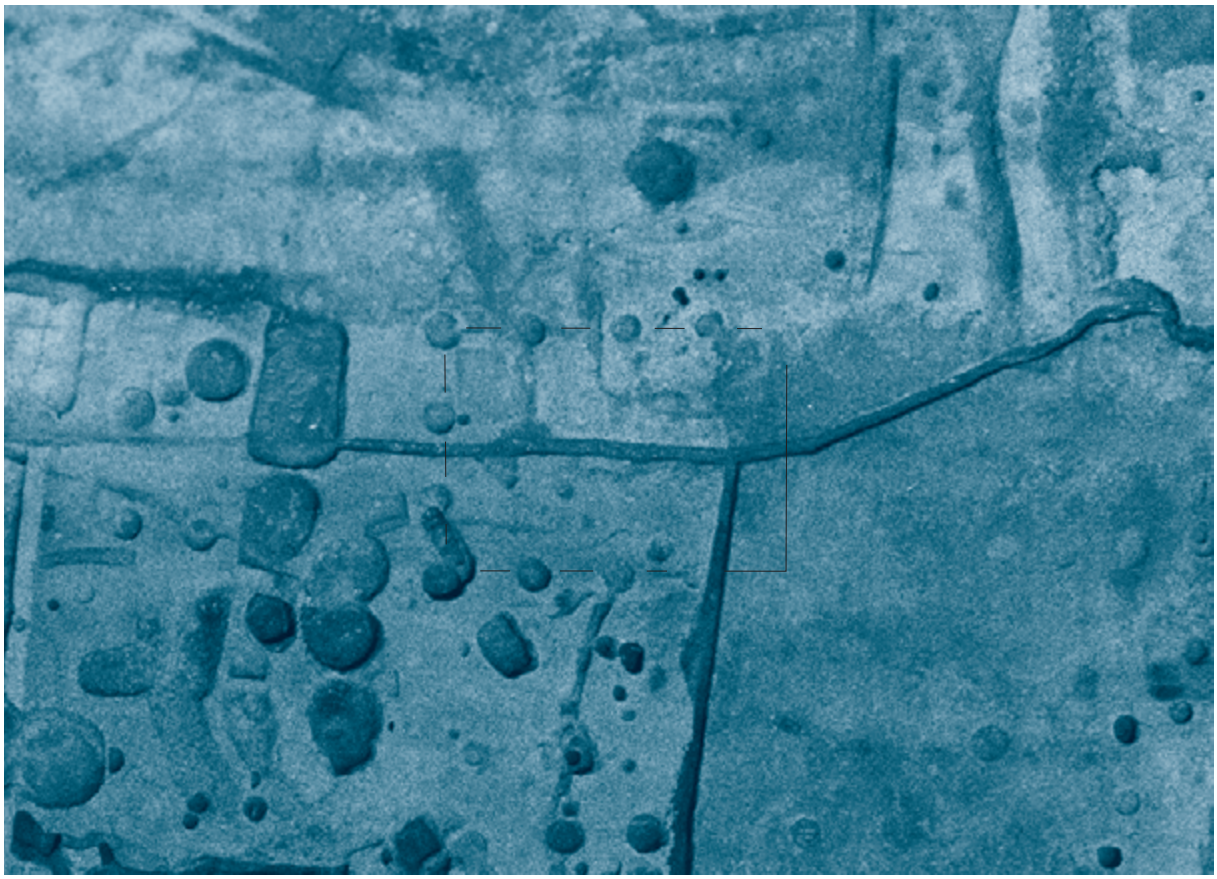


4. E-2区掘立柱建物SH203柱穴SP6058

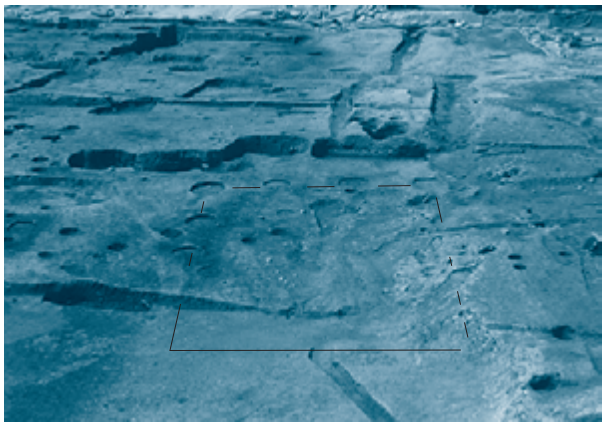


5. E-2区掘立柱建物SH203柱穴SP6064

図版16

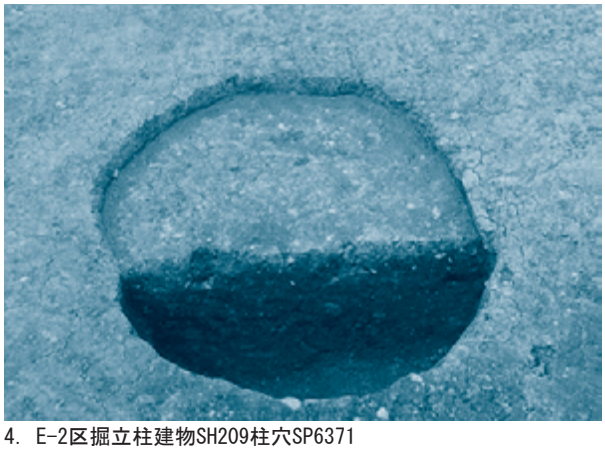


1. E-2区掘立柱建物SH209全景 1

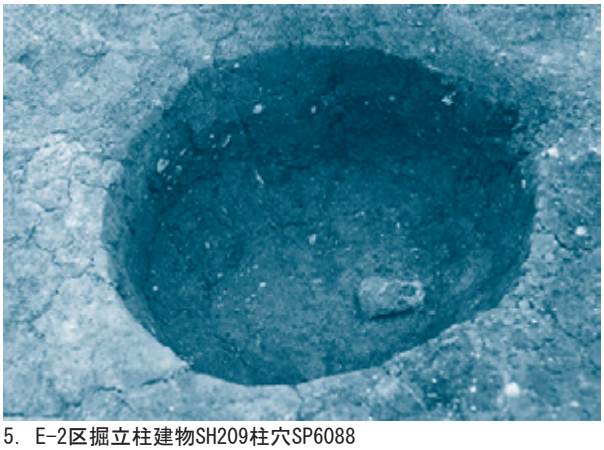


2. E-2区掘立柱建物SH209全景 2（南東から）

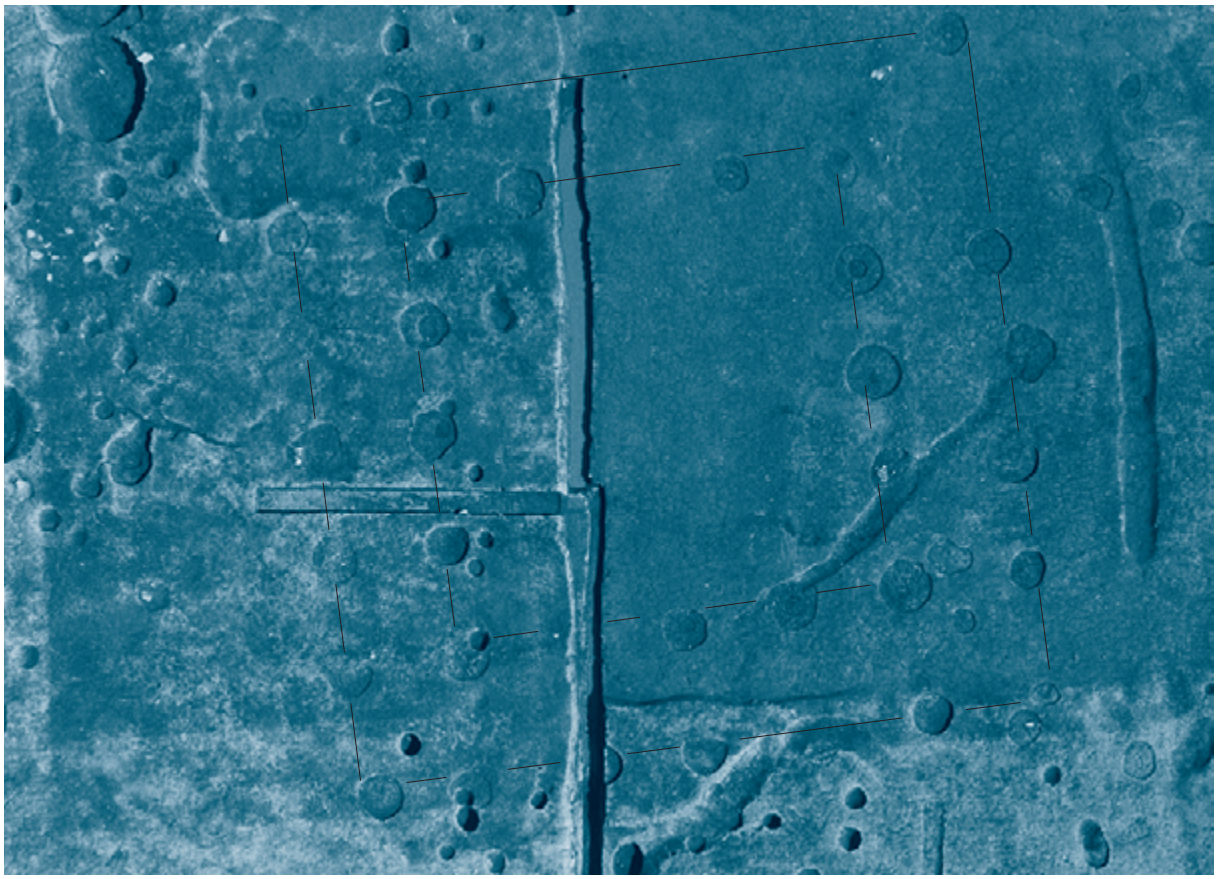
3. E-2区掘立柱建物SH209柱穴SP6370



4. E-2区掘立柱建物SH209柱穴SP6371

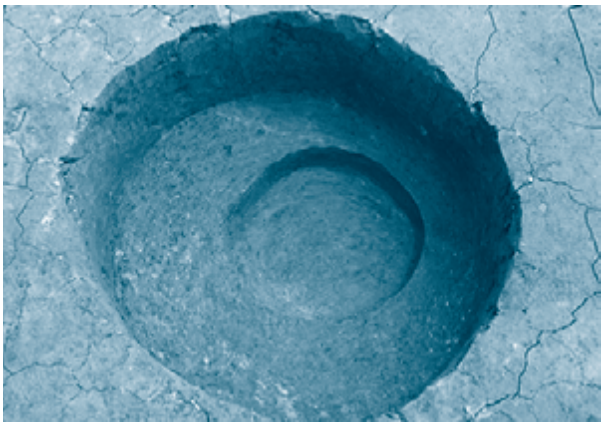


5. E-2区掘立柱建物SH209柱穴SP6088

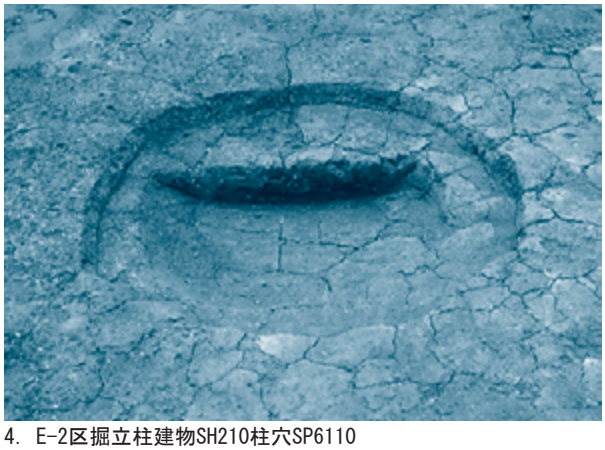


1. E-2区掘立柱建物SH210全景

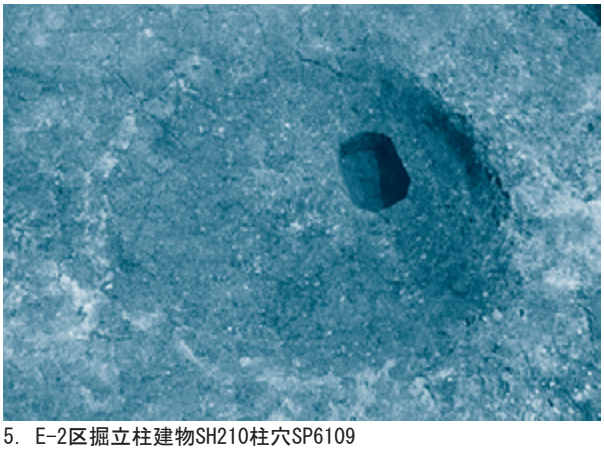
2. E-2区掘立柱建物SH210柱穴SP6105礎板



3. E-2区掘立柱建物SH210柱穴SP6105

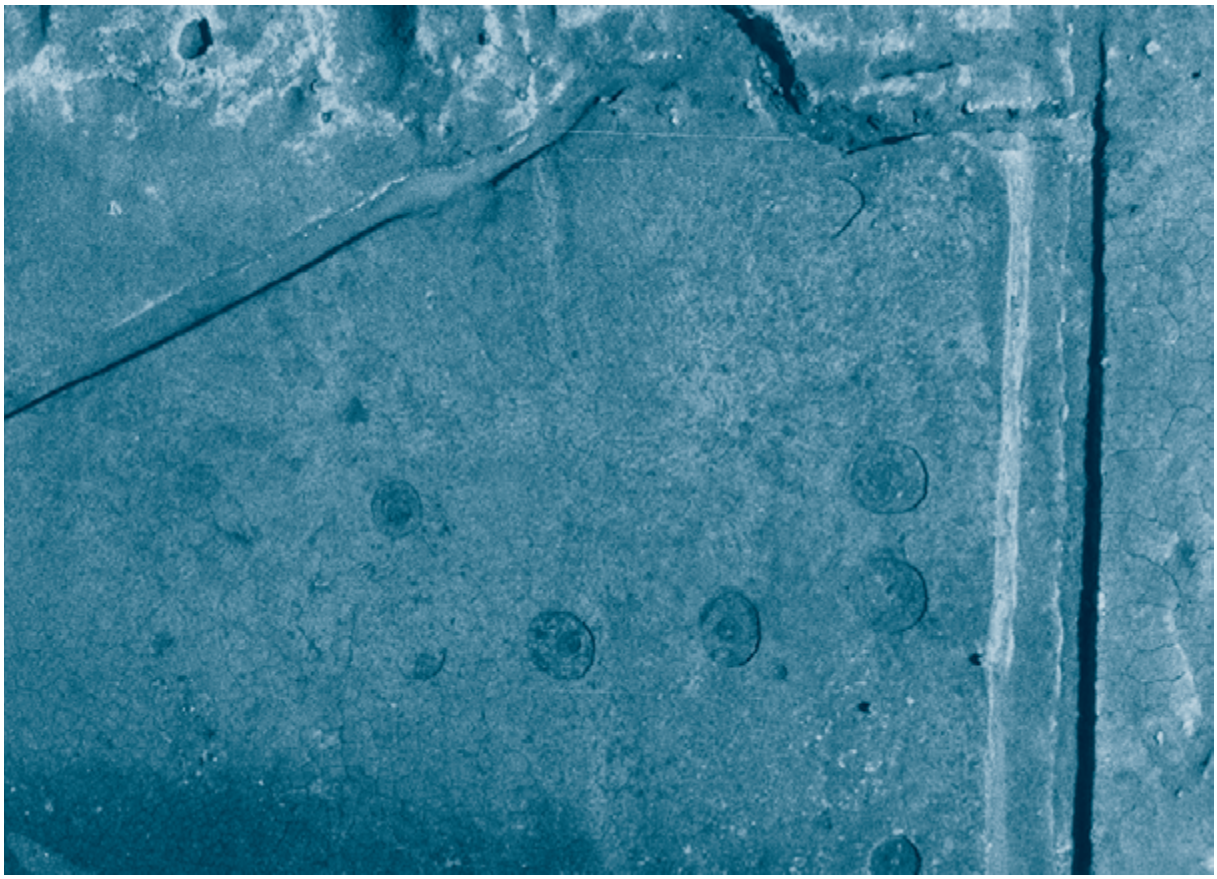


4. E-2区掘立柱建物SH210柱穴SP6110



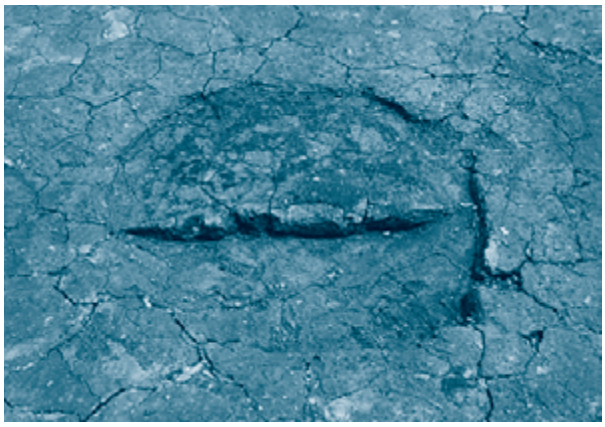
5. E-2区掘立柱建物SH210柱穴SP6109

図版18

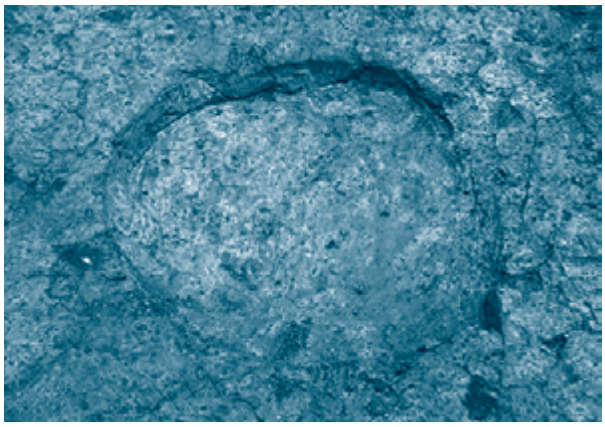


1. E-2区掘立柱建物SH211全景 1

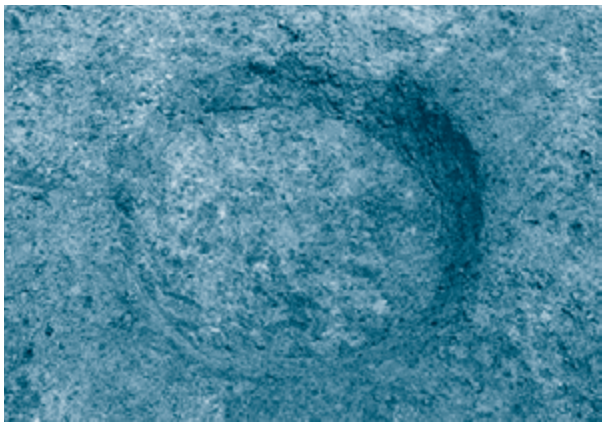
2. E-2区掘立柱建物SH211全景 2（東から）



3. E-2区掘立柱建物SH211柱穴SP6114半截状況

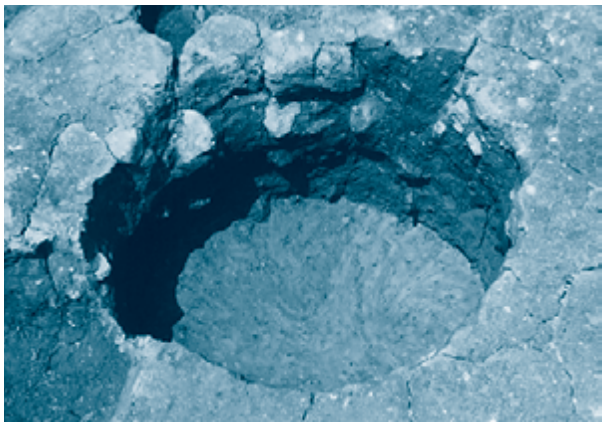


4. E-2区掘立柱建物SH211柱穴SP6114

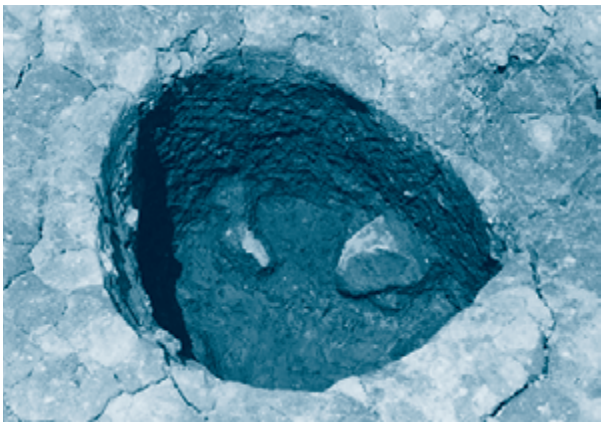


5. E-2区掘立柱建物SH211柱穴SP6115

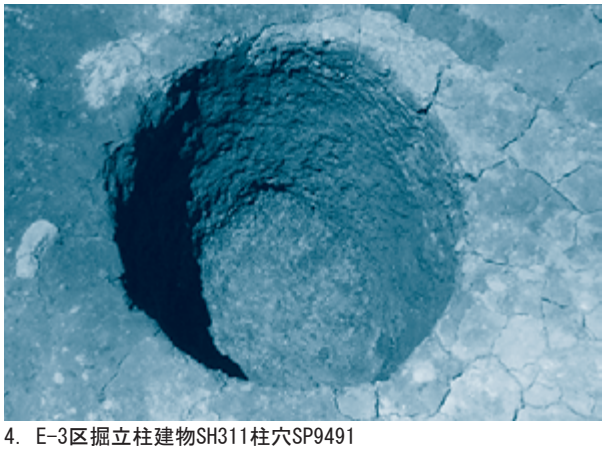
1. E-3区掘立柱建物SH311全景（北東から）



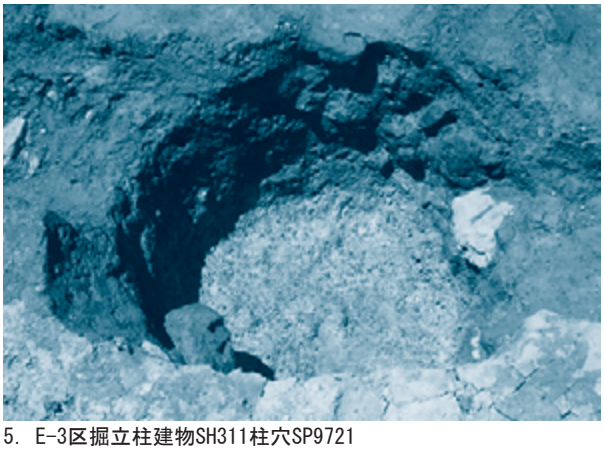
2. E-3区掘立柱建物SH311柱穴SP9509



3. E-3区掘立柱建物SH311柱穴SP9507



4. E-3区掘立柱建物SH311柱穴SP9491

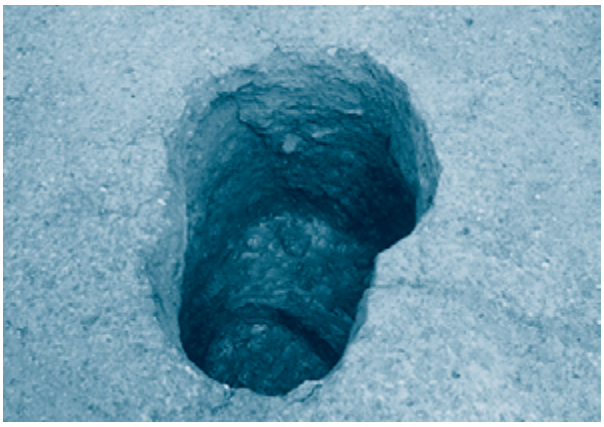


5. E-3区掘立柱建物SH311柱穴SP9721

図版20

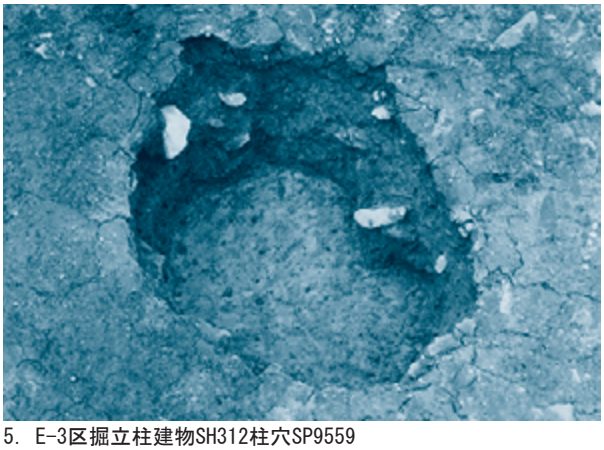
1. E-3区掘立柱建物SH312全景（北東から）

2. E-3区掘立柱建物SH312柱穴SP9713



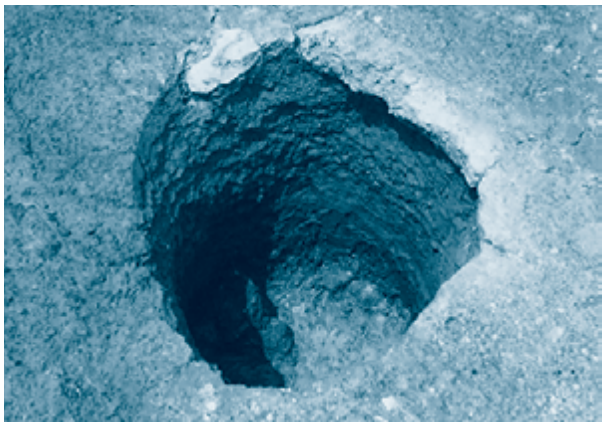
3. E-3区掘立柱建物SH312柱穴SP9711

4. E-3区掘立柱建物SH312柱穴SP9516

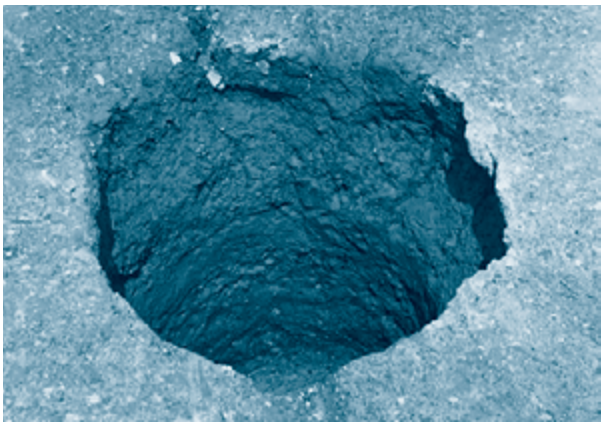


5. E-3区掘立柱建物SH312柱穴SP9559

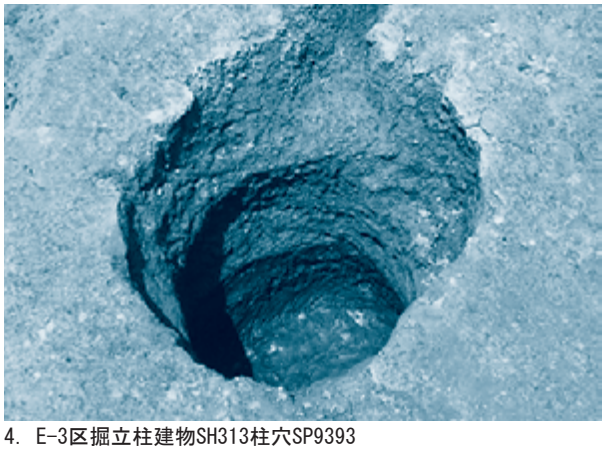
1. E-3区掘立柱建物SH313全景（北東から）



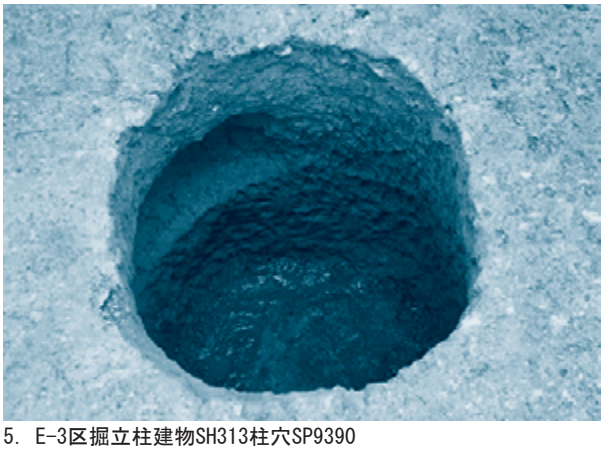
2. E-3区掘立柱建物SH313柱穴SP9392



3. E-3区掘立柱建物SH313柱穴SP9389



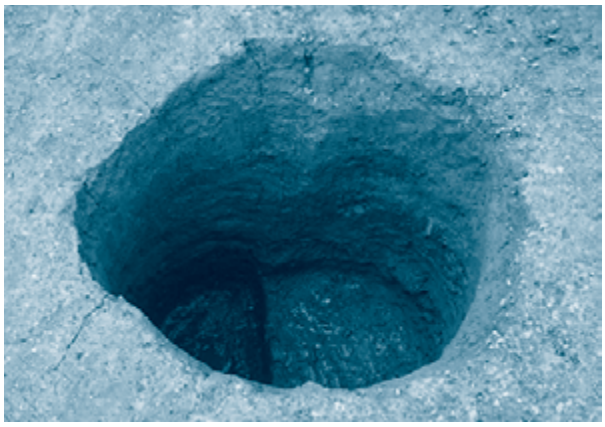
4. E-3区掘立柱建物SH313柱穴SP9393



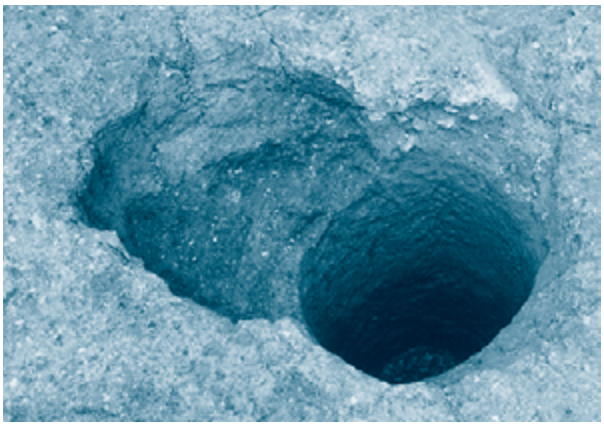
5. E-3区掘立柱建物SH313柱穴SP9390

図版22

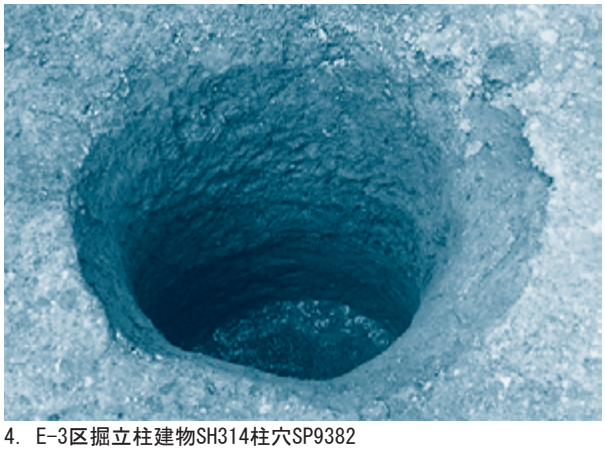
1. E-3区掘立柱建物SH314全景（南から）



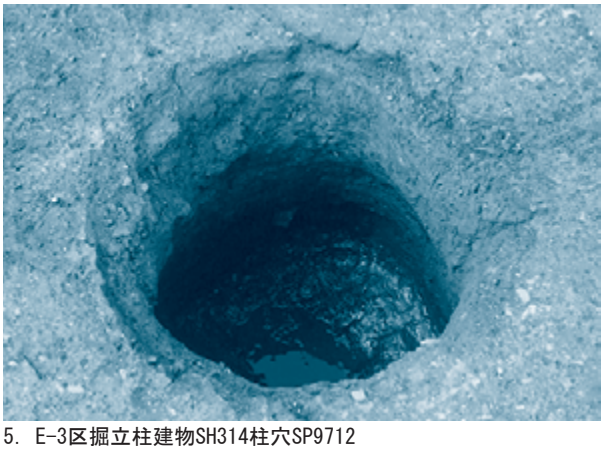
2. E-3区掘立柱建物SH314柱穴SP9518・9519



3. E-3区掘立柱建物SH314柱穴SP9383・9713

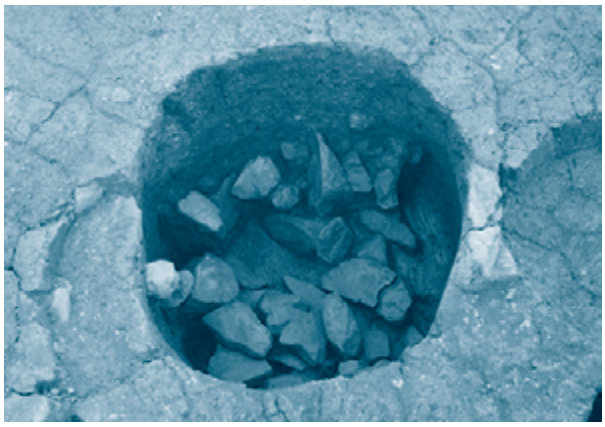


4. E-3区掘立柱建物SH314柱穴SP9382

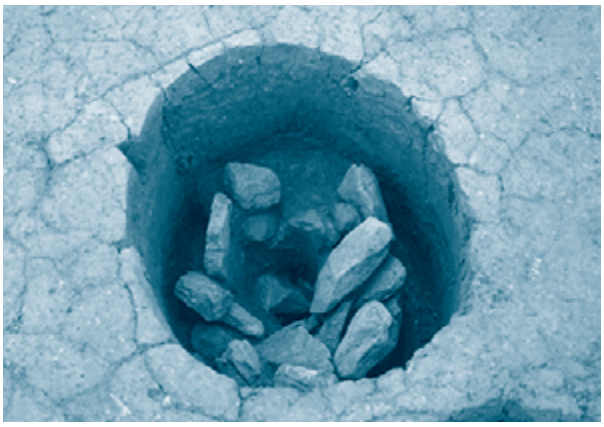


5. E-3区掘立柱建物SH314柱穴SP9712

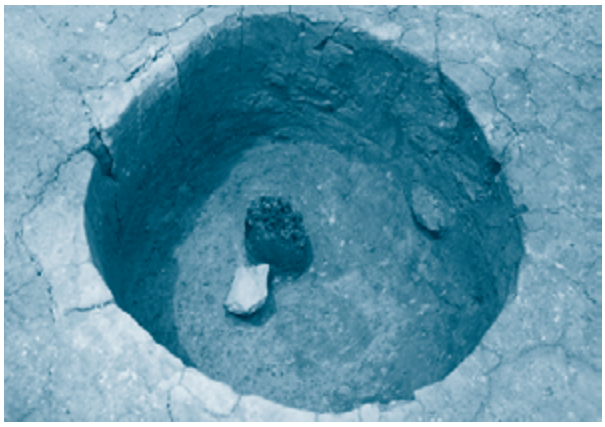
1. E-3区掘立柱建物SH315・316・318全景（南東から）



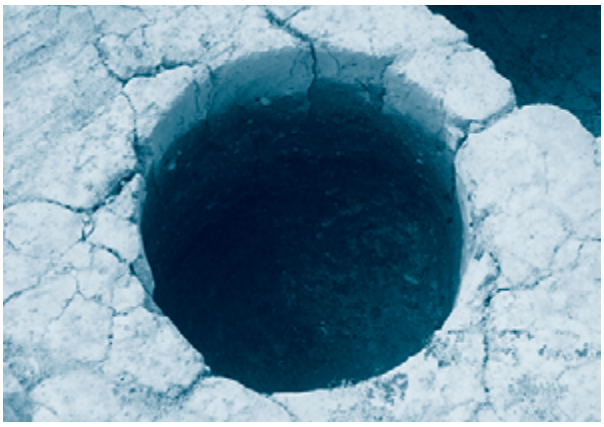
2. E-3区掘立柱建物SH315柱穴SP9350



3. E-3区掘立柱建物SH315柱穴SP9249

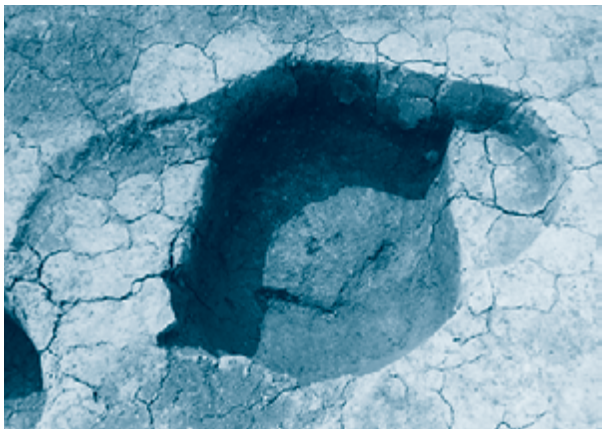


4. E-3区掘立柱建物SH315柱穴SP9246

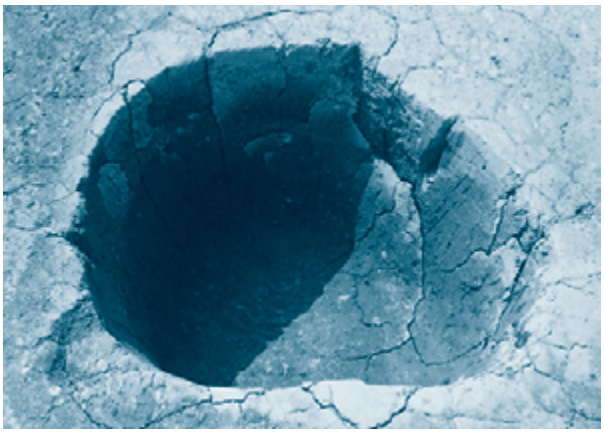


5. E-3区掘立柱建物SH315柱穴SP9223

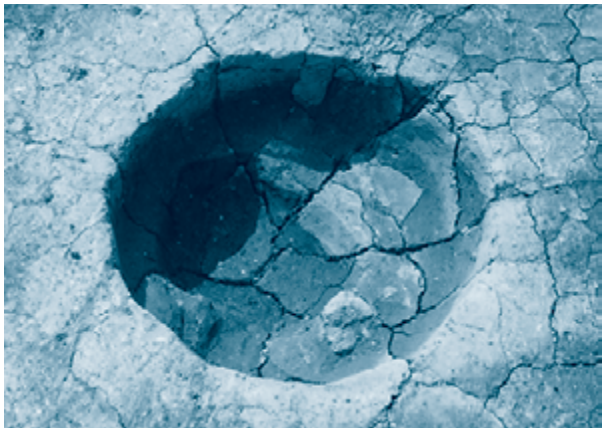
図版24



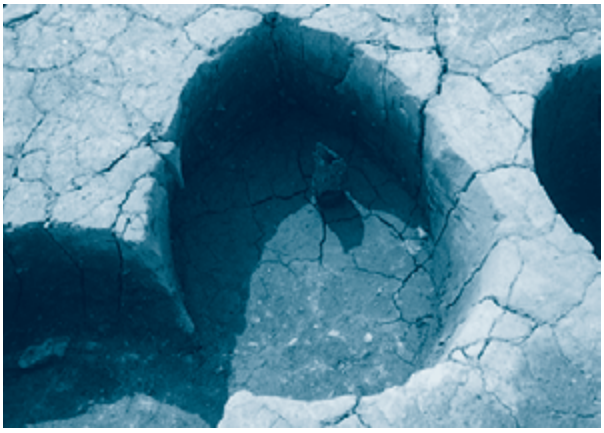
1. E-3区掘立柱建物SH316柱穴SP9624



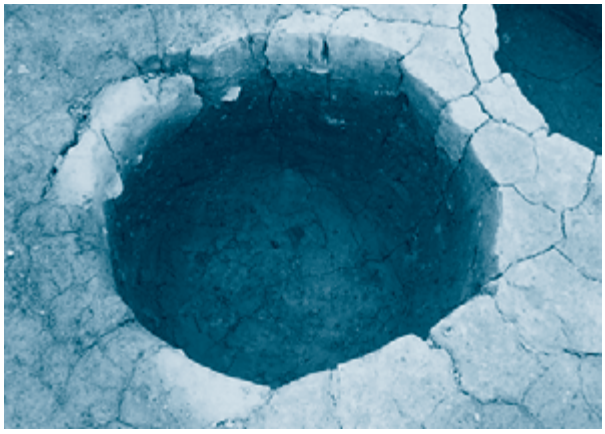
2. E-3区掘立柱建物SH316柱穴SP9242



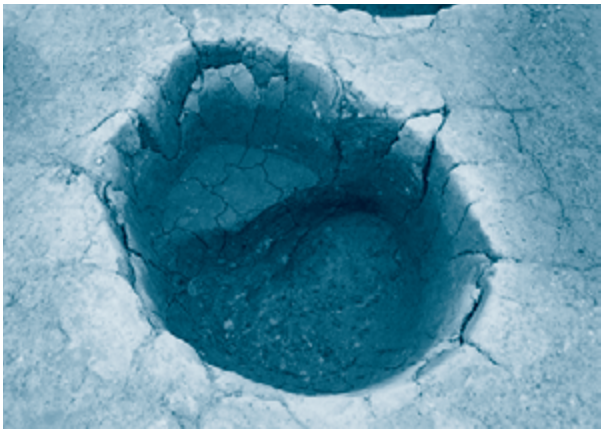
3. E-3区掘立柱建物SH316柱穴SP9251



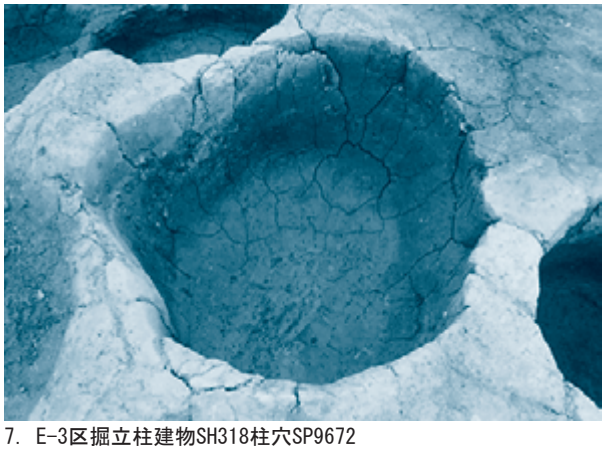
4. E-3区掘立柱建物SH316柱穴SP9245



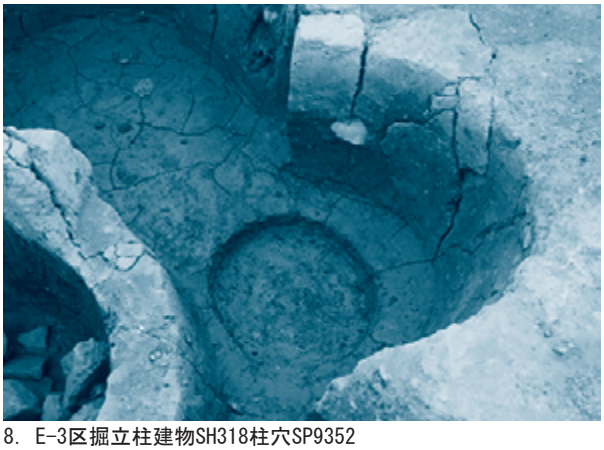
5. E-3区掘立柱建物SH318柱穴SP9226



6. E-3区掘立柱建物SH318柱穴SP9626

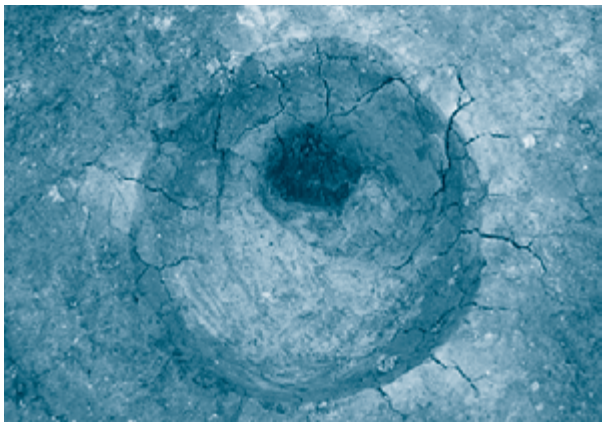


7. E-3区掘立柱建物SH318柱穴SP9672

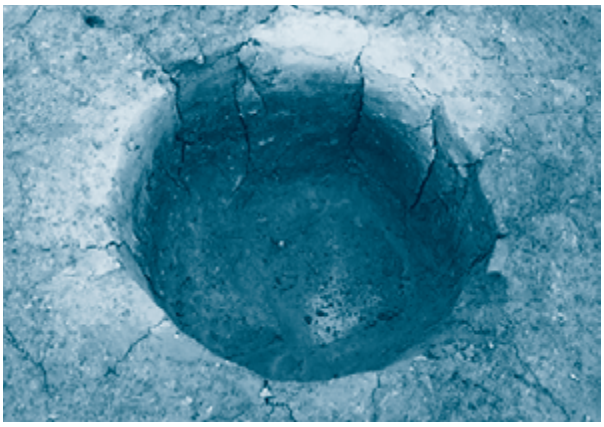


8. E-3区掘立柱建物SH318柱穴SP9352

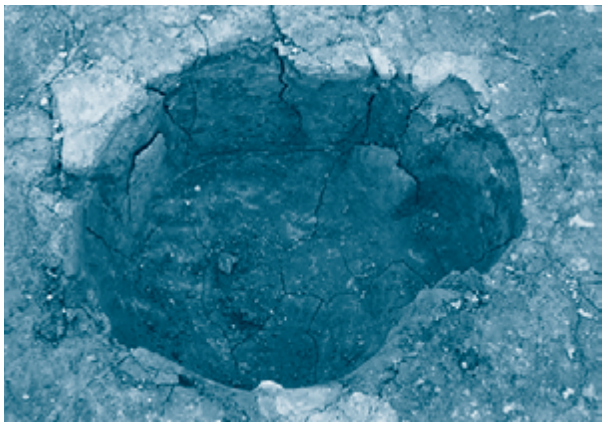
1. E-3区掘立柱建物SH317全景（南東から）



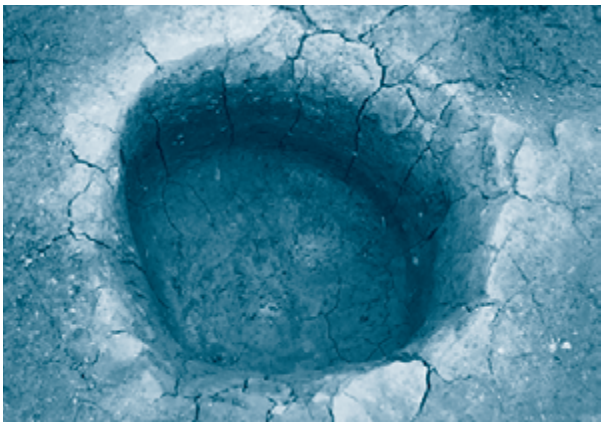
2. E-3区掘立柱建物SH317柱穴SP9355



3. E-3区掘立柱建物SH317柱穴SP9252

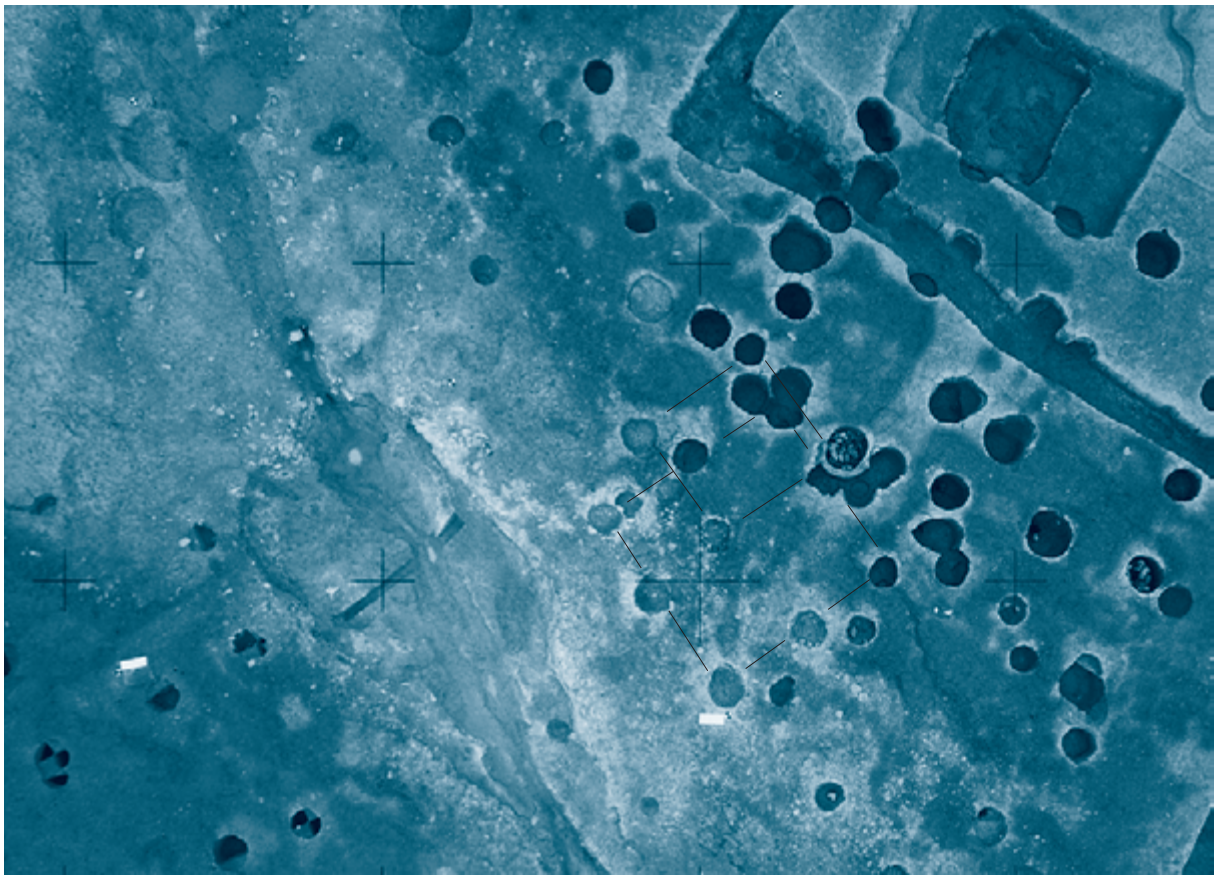


4. E-3区掘立柱建物SH317柱穴SP9238

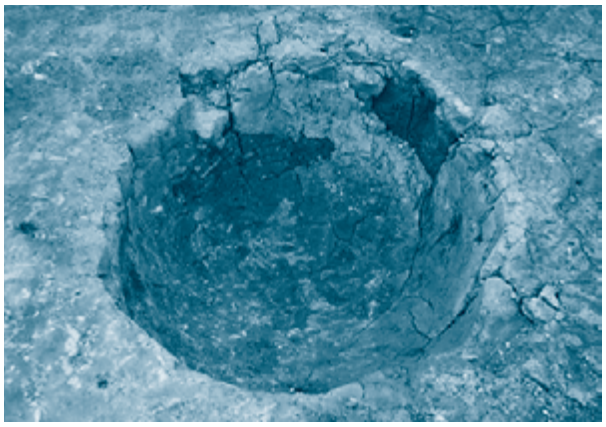


5. E-3区掘立柱建物SH317柱穴SP9253

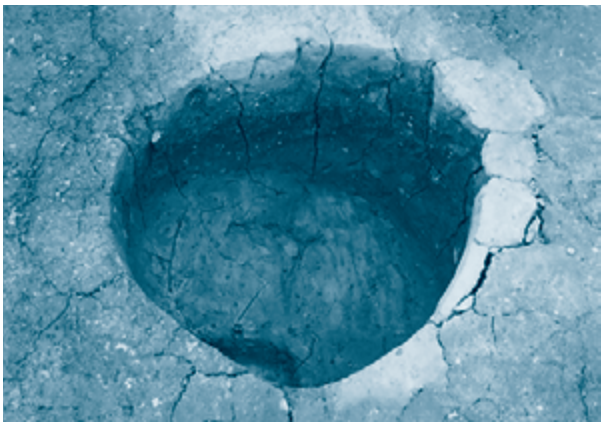
図版26



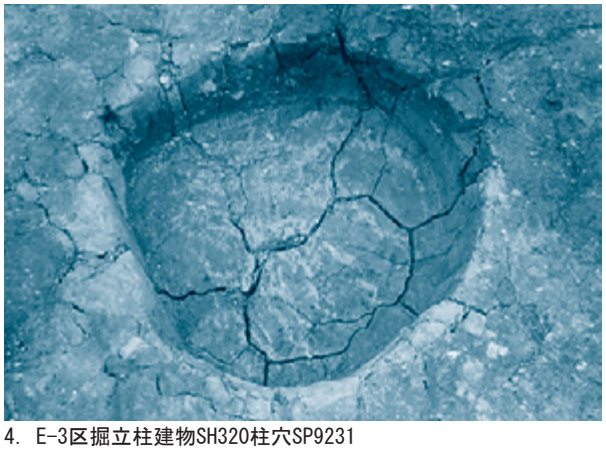
1. E-3区掘立柱建物SH319・320全景



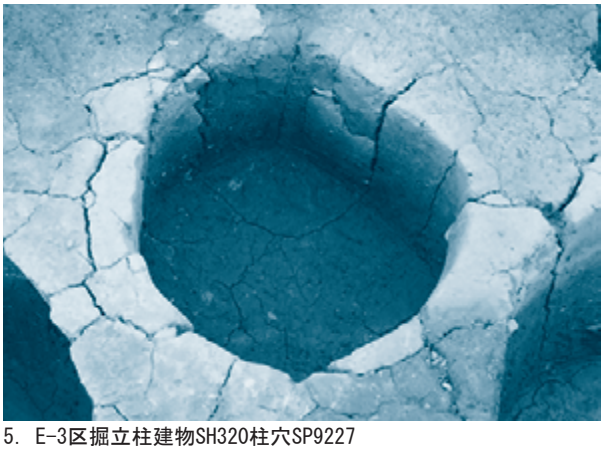
2. E-3区掘立柱建物SH319柱穴SP9497



3. E-3区掘立柱建物SH319柱穴SP9629

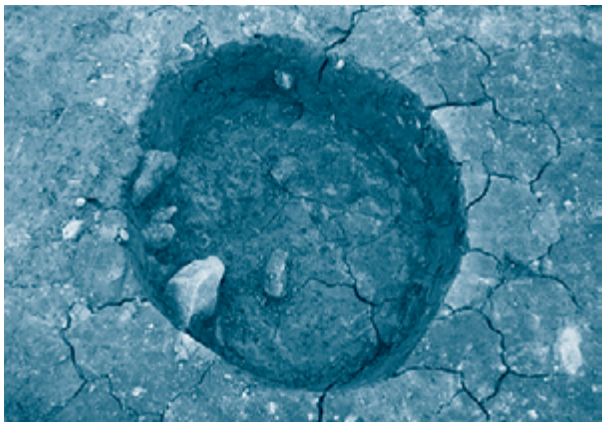


4. E-3区掘立柱建物SH320柱穴SP9231

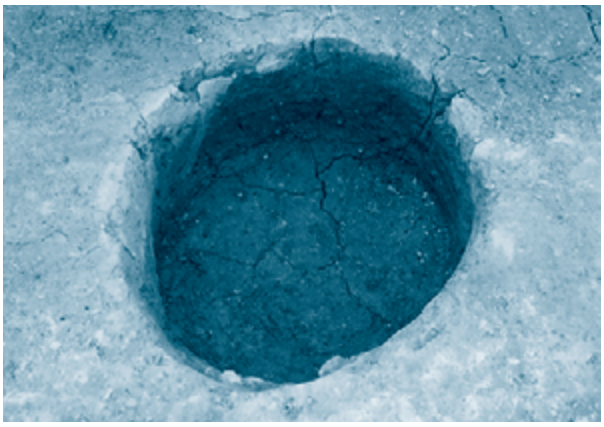


5. E-3区掘立柱建物SH320柱穴SP9227

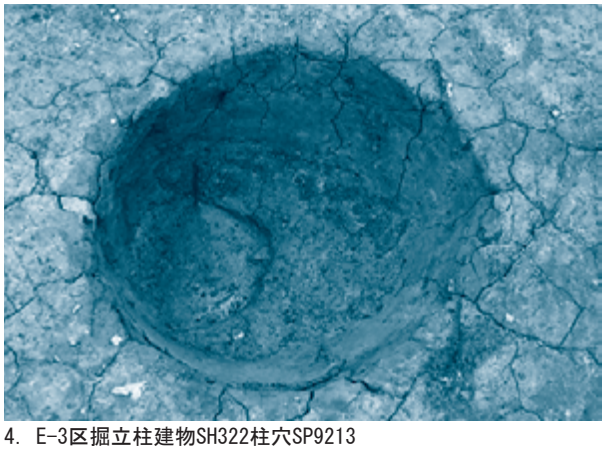
1. E-3区掘立柱建物SH322全景（北東から）



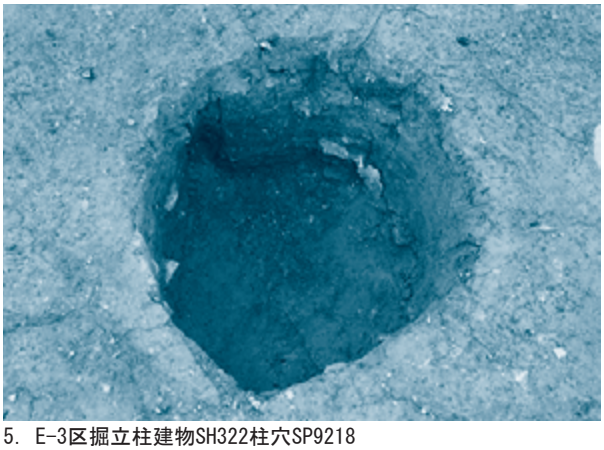
2. E-3区掘立柱建物SH322柱穴SP9211



3. E-3区掘立柱建物SH322柱穴SP9208



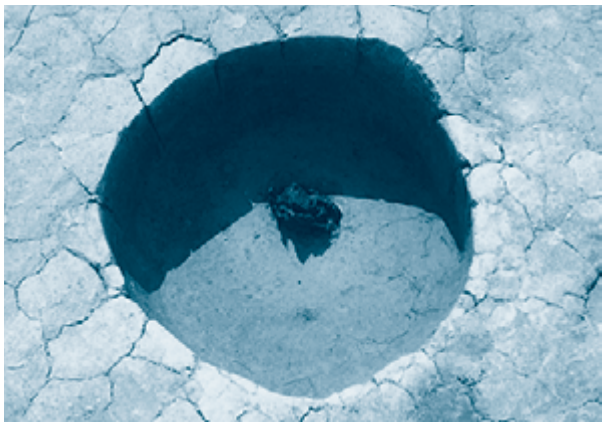
4. E-3区掘立柱建物SH322柱穴SP9213



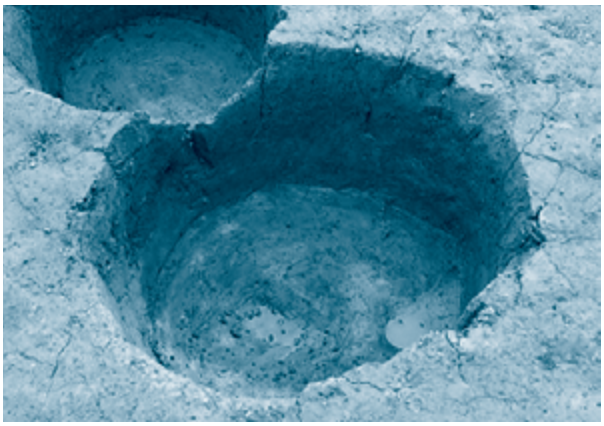
5. E-3区掘立柱建物SH322柱穴SP9218

図版28

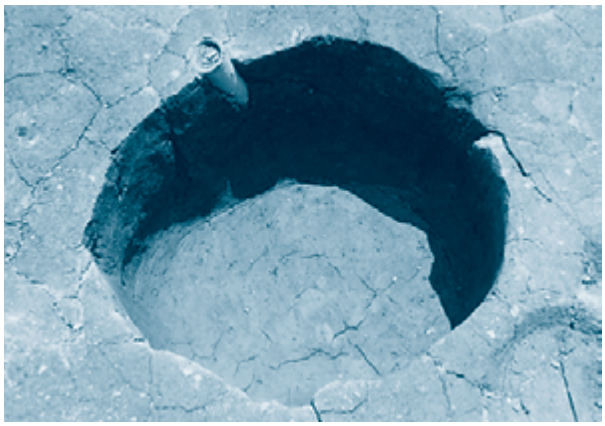
1. E-3区掘立柱建物SH323全景（北西から）



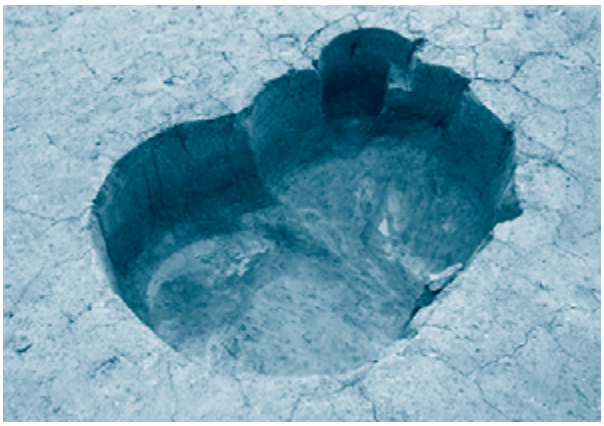
2. E-3区掘立柱建物SH323柱穴SP9462



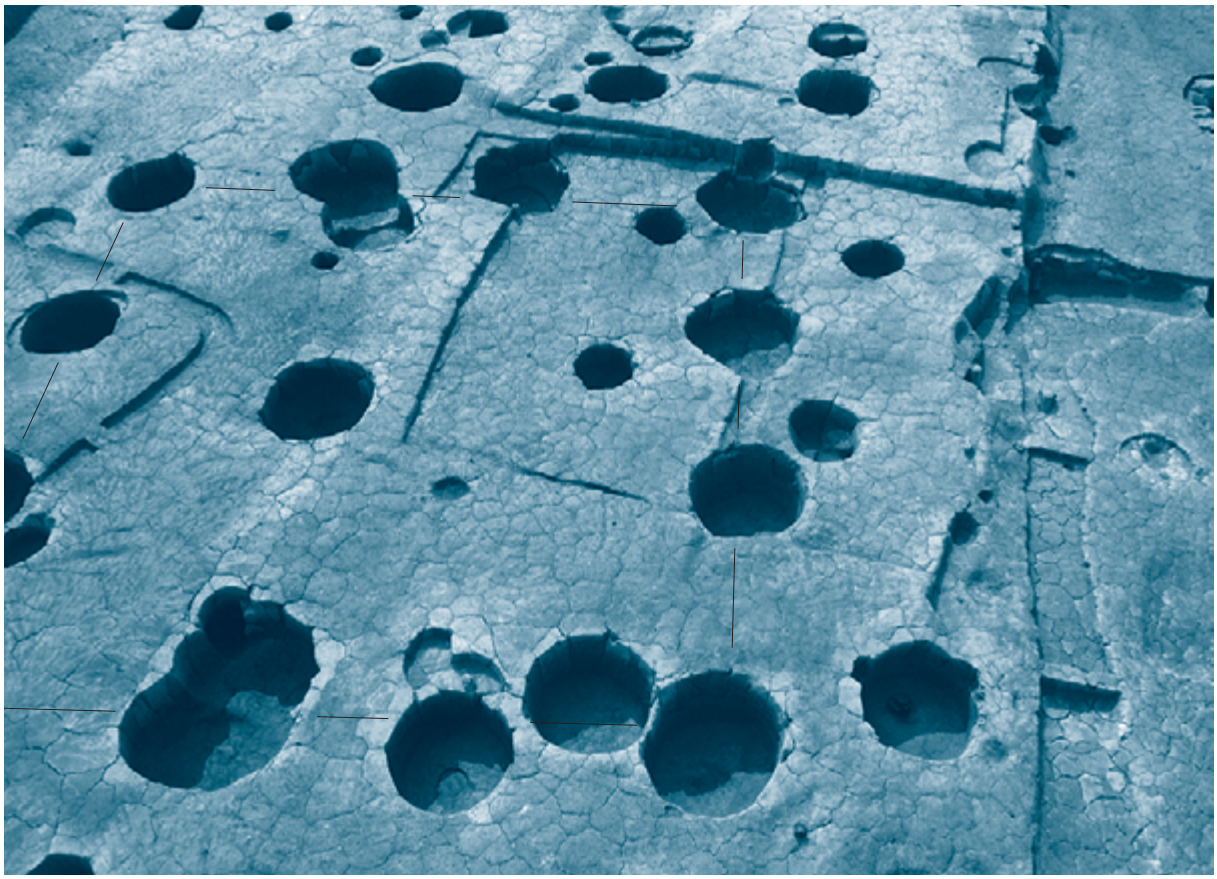
3. E-3区掘立柱建物SH323柱穴SP9464



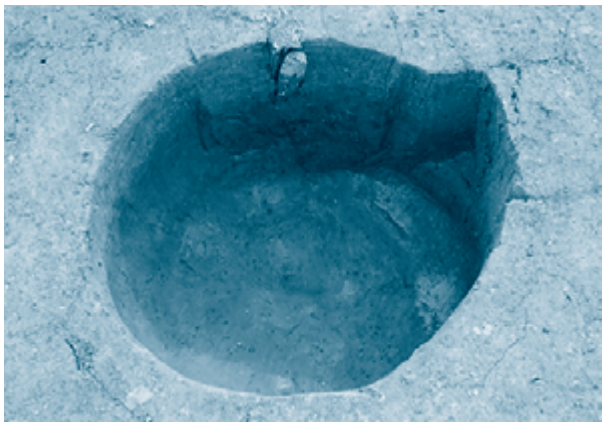
4. E-3区掘立柱建物SH323柱穴SP9436



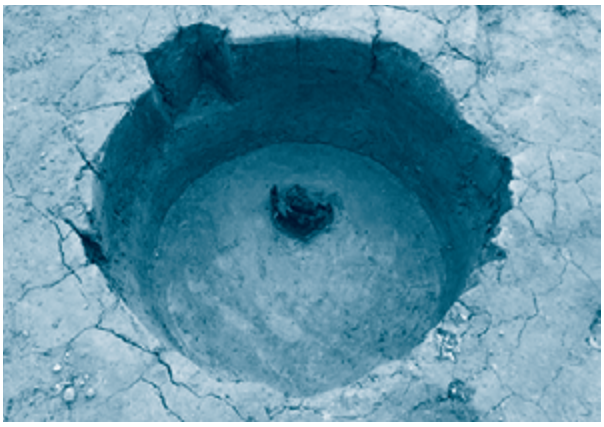
5. E-3区掘立柱建物SH323柱穴SP9468



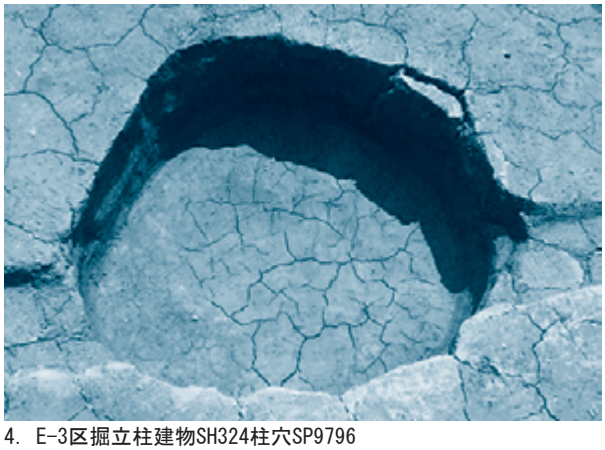
1. E-3区掘立柱建物SH324全景（東から）



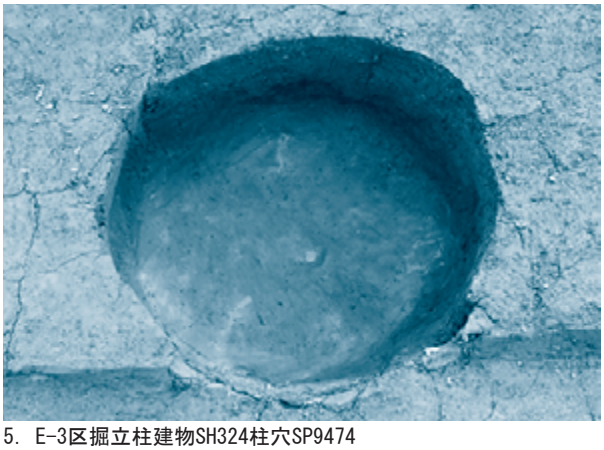
2. E-3区掘立柱建物SH324柱穴SP9457



3. E-3区掘立柱建物SH324柱穴SP9463



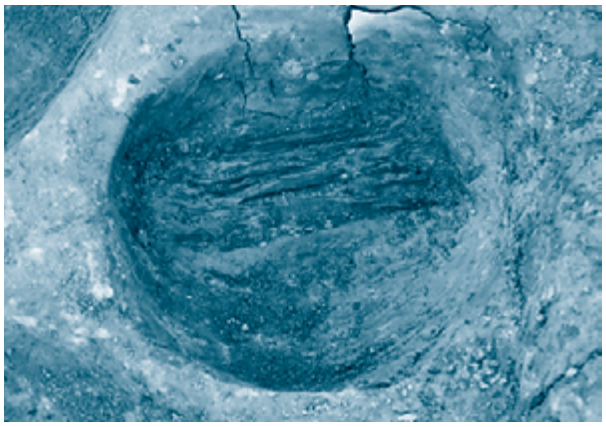
4. E-3区掘立柱建物SH324柱穴SP9796



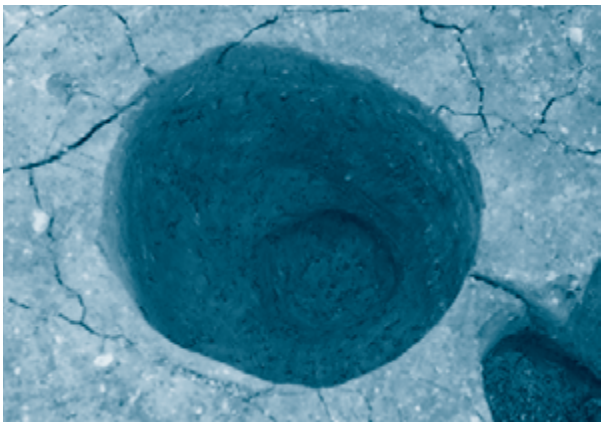
5. E-3区掘立柱建物SH324柱穴SP9474

図版30

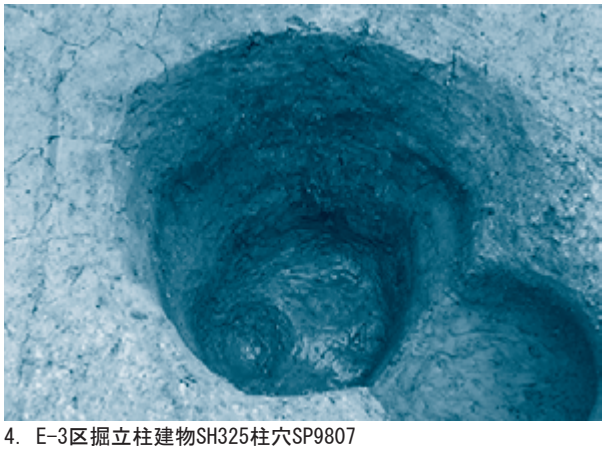
1. E-3区掘立柱建物SH325全景（南から）



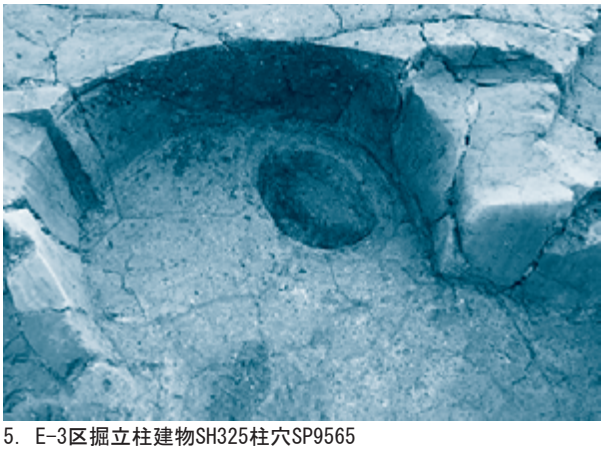
2. E-3区掘立柱建物SH325柱穴SP9410



3. E-3区掘立柱建物SH325柱穴SP9843

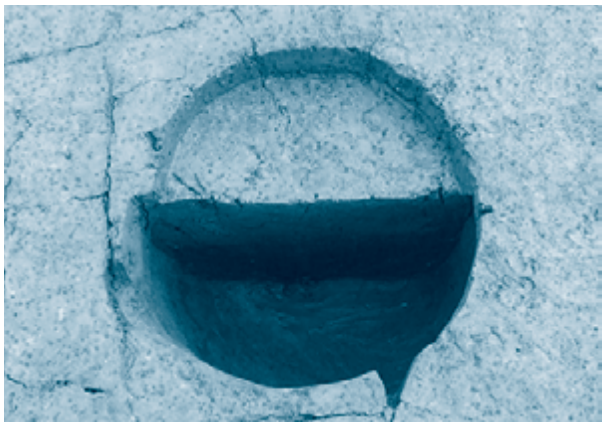


4. E-3区掘立柱建物SH325柱穴SP9807

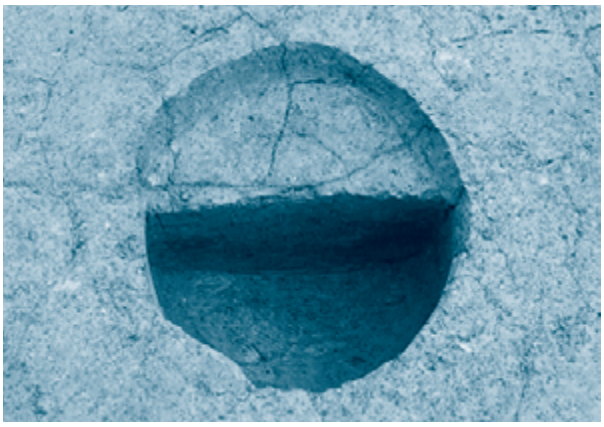


5. E-3区掘立柱建物SH325柱穴SP9565

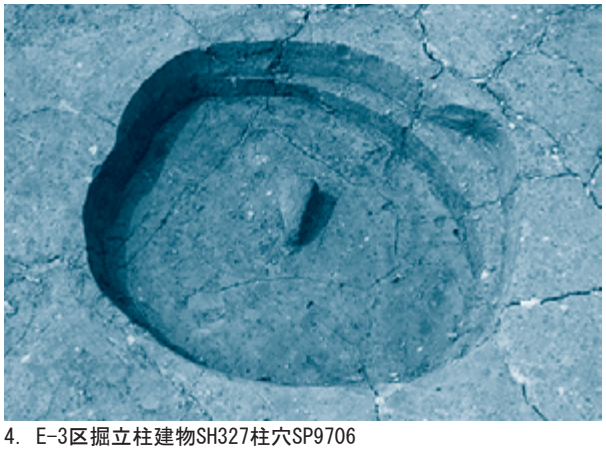
1. E-3区掘立柱建物SH327全景（西から）



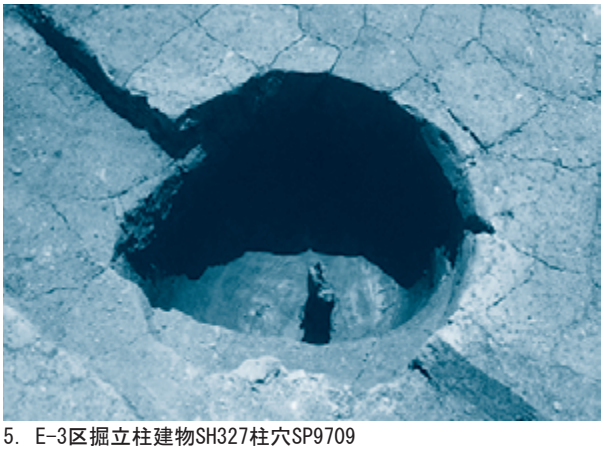
2. E-3区掘立柱建物SH327柱穴SP9705



3. E-3区掘立柱建物SH327柱穴SP9689

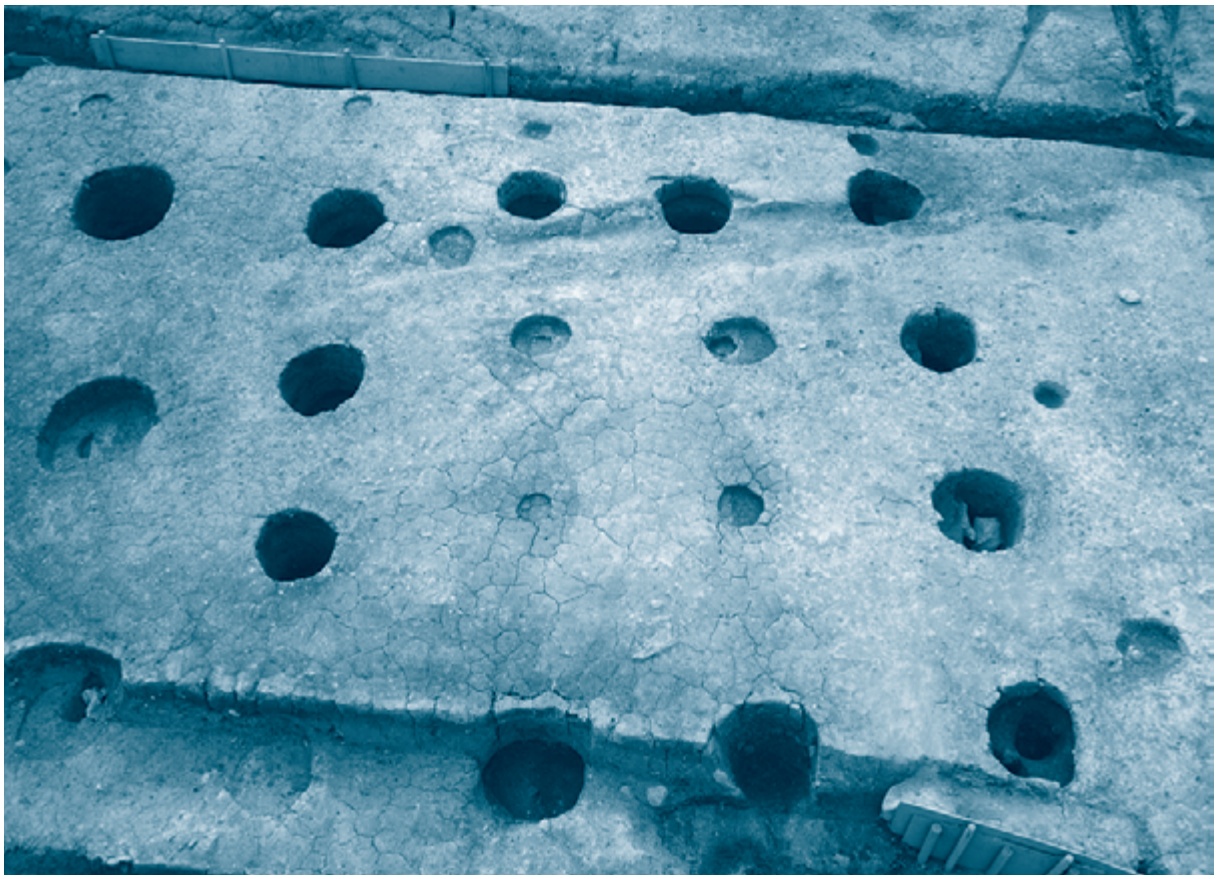


4. E-3区掘立柱建物SH327柱穴SP9706

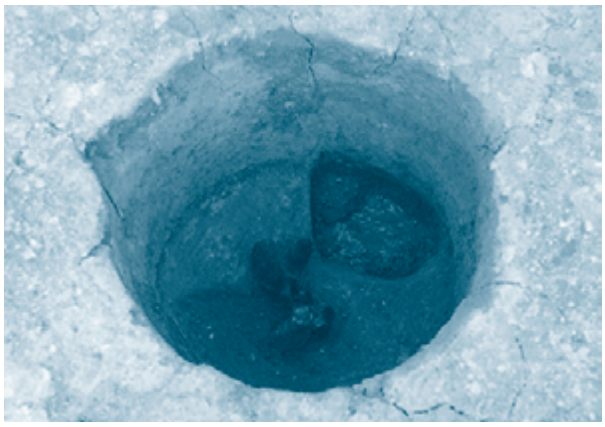


5. E-3区掘立柱建物SH327柱穴SP9709

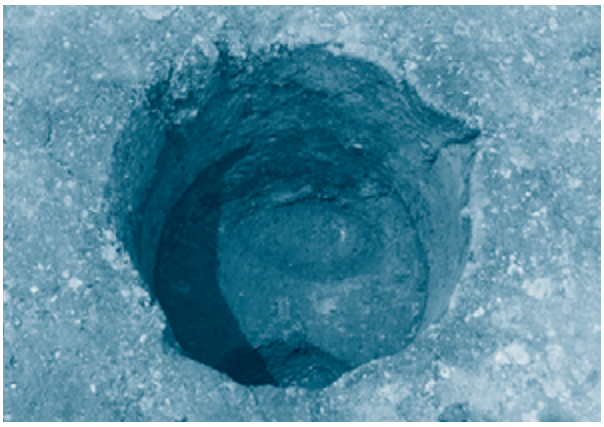
図版32



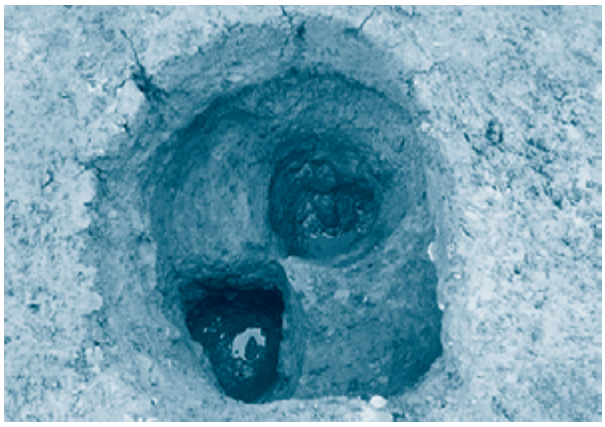
1. E-3区掘立柱建物SH328全景（東から）



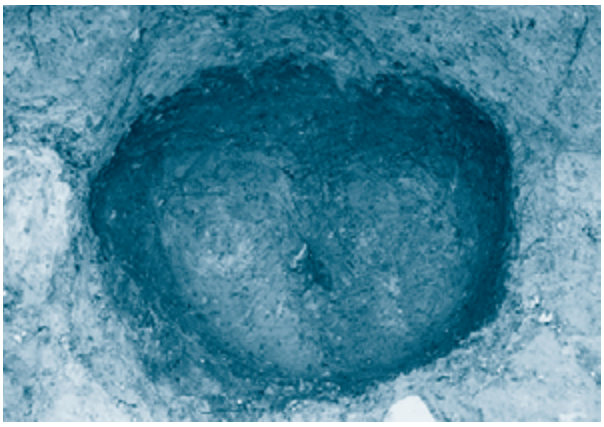
2. E-3区掘立柱建物SH328柱穴SP9659柱根



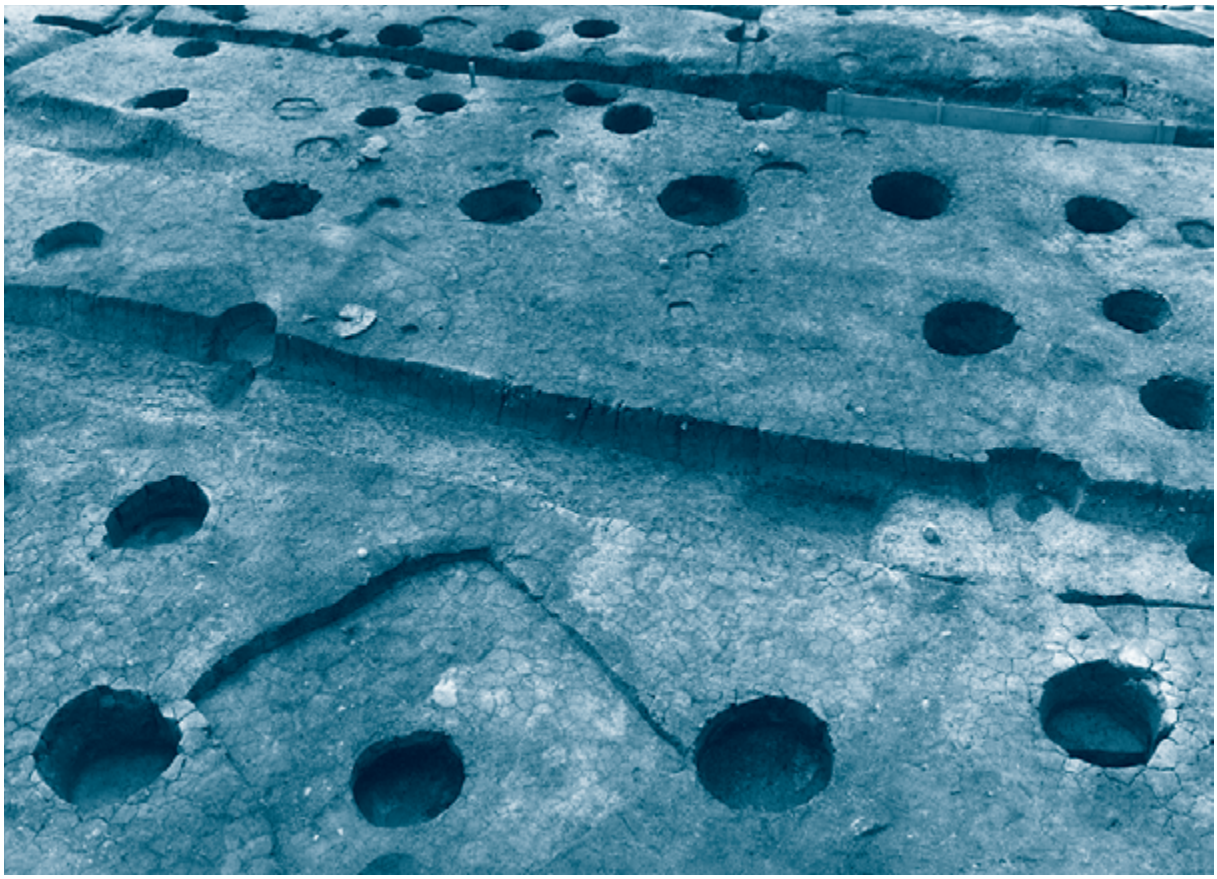
3. E-3区掘立柱建物SH328柱穴SP9659



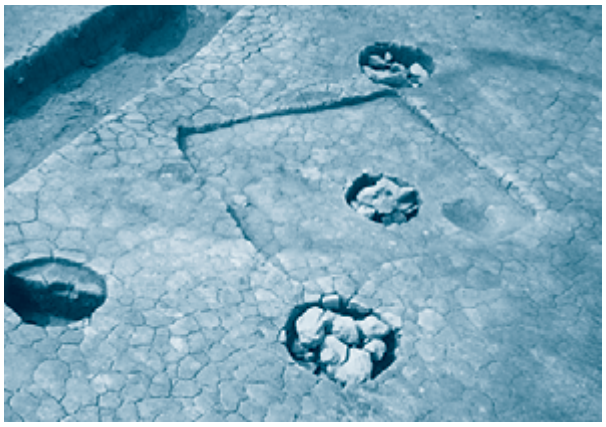
4. E-3区掘立柱建物SH328柱穴SP9664



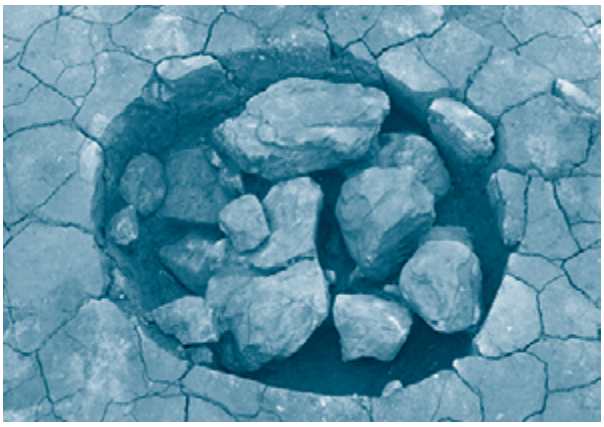
5. E-3区掘立柱建物SH328柱穴SP9379



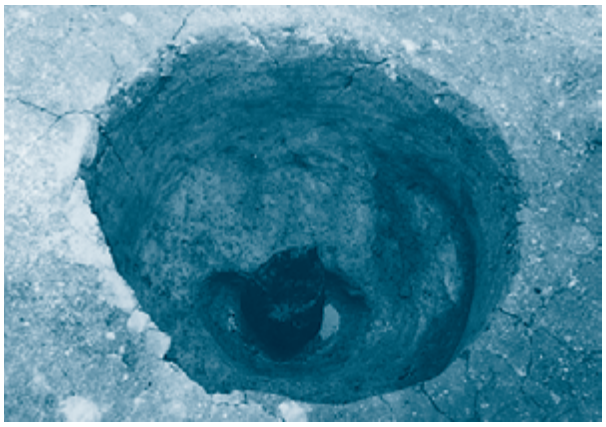
1. E-3区掘立柱建物SH329全景（東から）



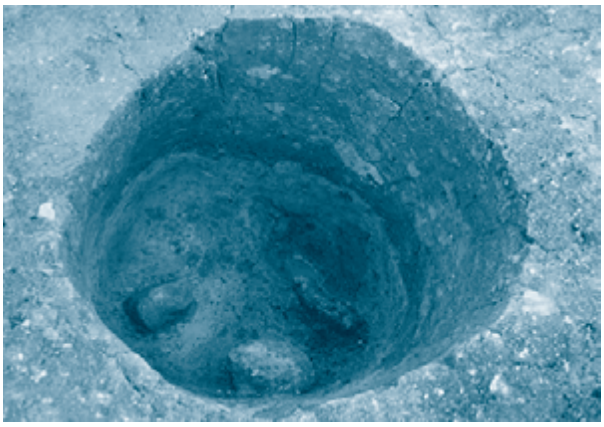
2. E-3区掘立柱建物SH329東側柱穴群（南から）



3. E-3区掘立柱建物SH329柱穴SP9301



4. E-3区掘立柱建物SH329柱穴SP9319

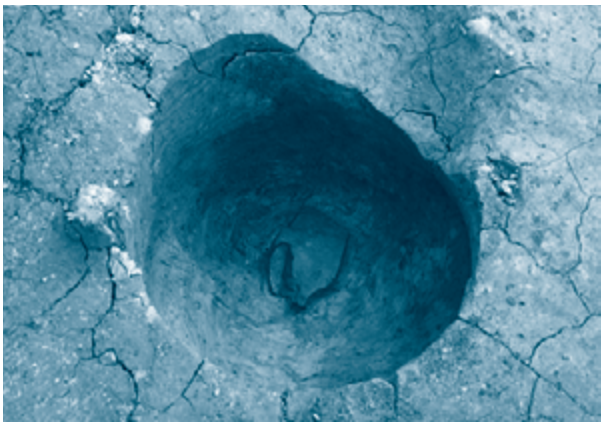


5. E-3区掘立柱建物SH329柱穴SP9293

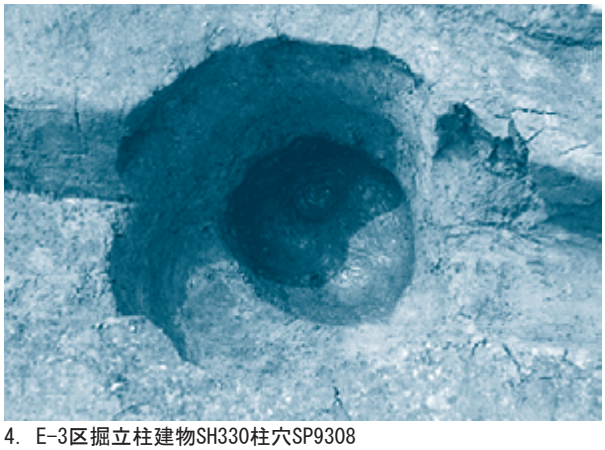
図版34

1. E-3区掘立柱建物SH330全景（南から）

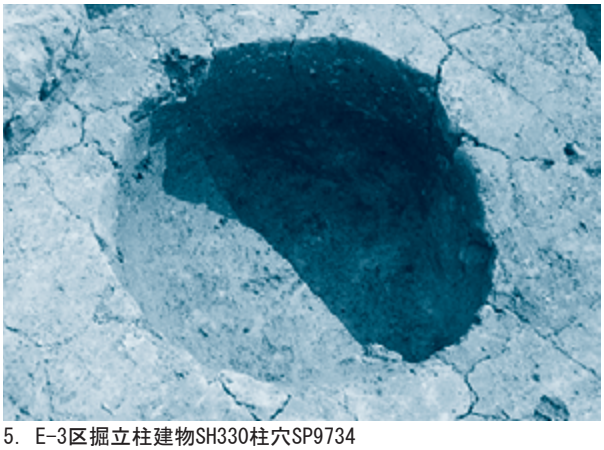
2. E-3区掘立柱建物SH330柱穴SP9311柱根



3. E-3区掘立柱建物SH330柱穴SP9311



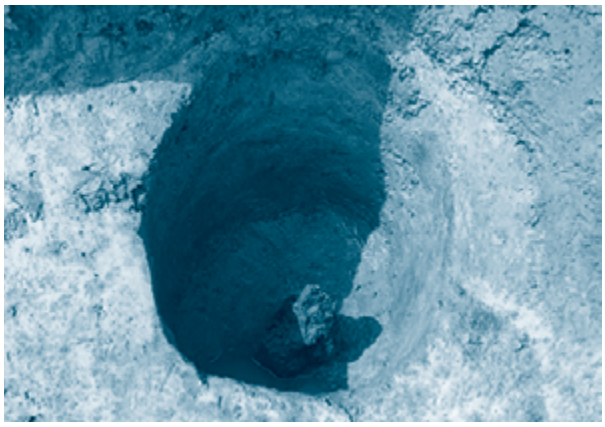
4. E-3区掘立柱建物SH330柱穴SP9308



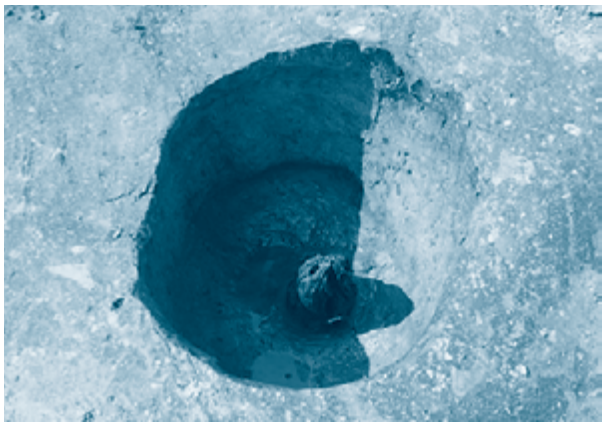
5. E-3区掘立柱建物SH330柱穴SP9734

1. E-3区掘立柱建物SH331全景（南から）

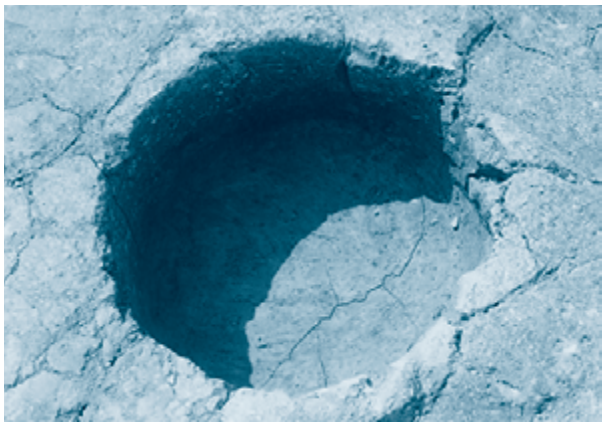
2. E-3区掘立柱建物SH331柱穴SP9748



3. E-3区掘立柱建物SH331柱穴SP10480

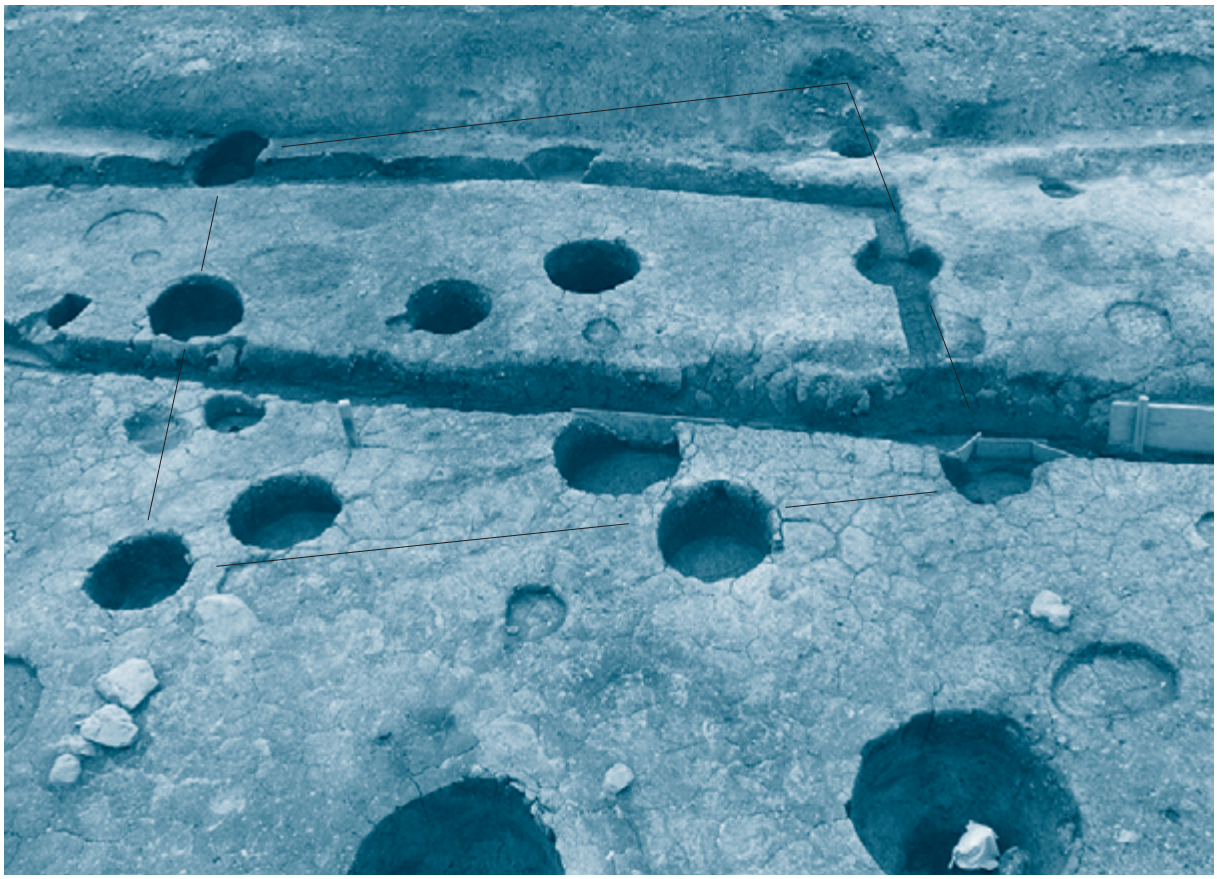


4. E-3区掘立柱建物SH331柱穴SP10478

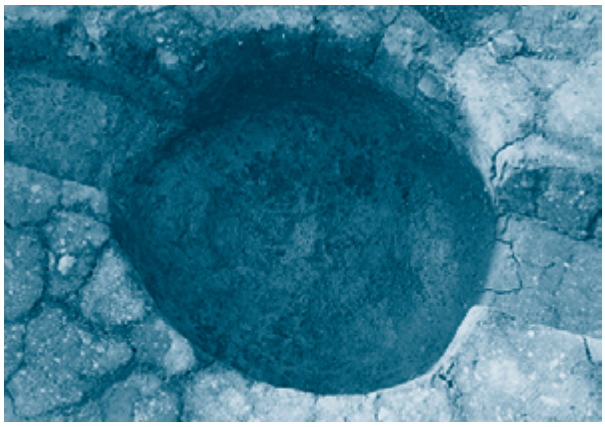


5. E-3区掘立柱建物SH331柱穴SP9317

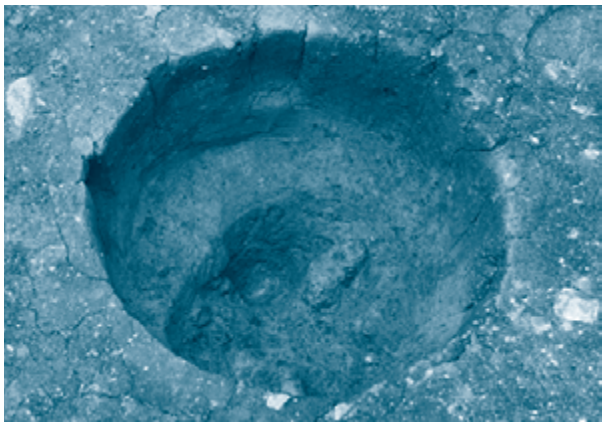
図版36



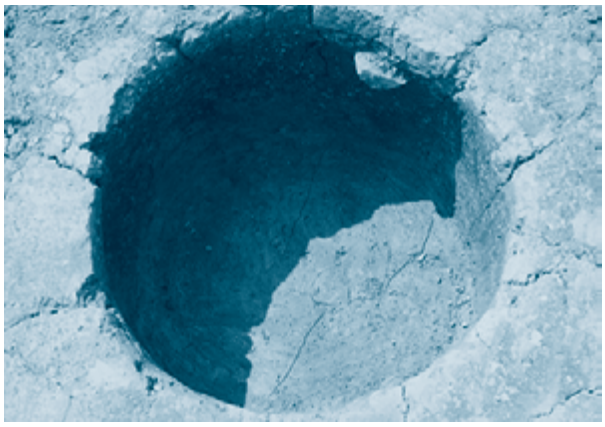
1. E-3区掘立柱建物SH332全景（東から）



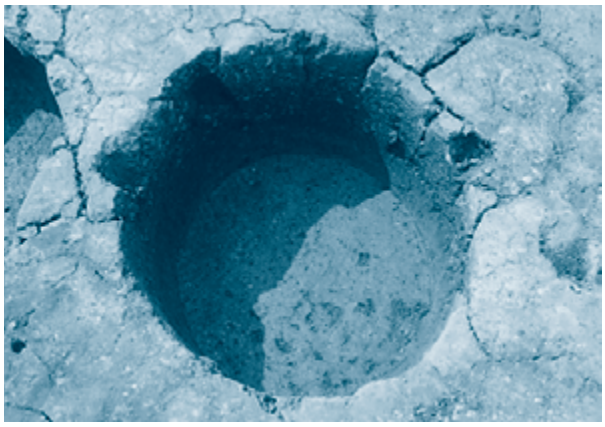
2. E-3区掘立柱建物SH332柱穴SP9760



3. E-3区掘立柱建物SH332柱穴SP9295

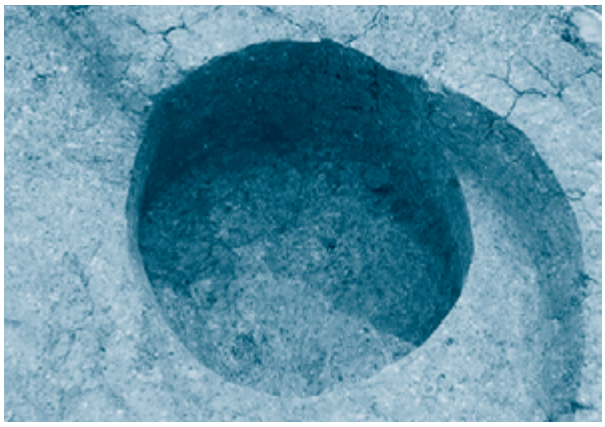


4. E-3区掘立柱建物SH332柱穴SP9316

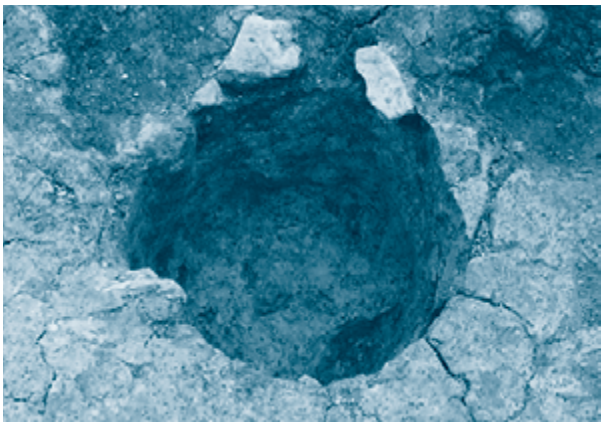


5. E-3区掘立柱建物SH332柱穴SP9321

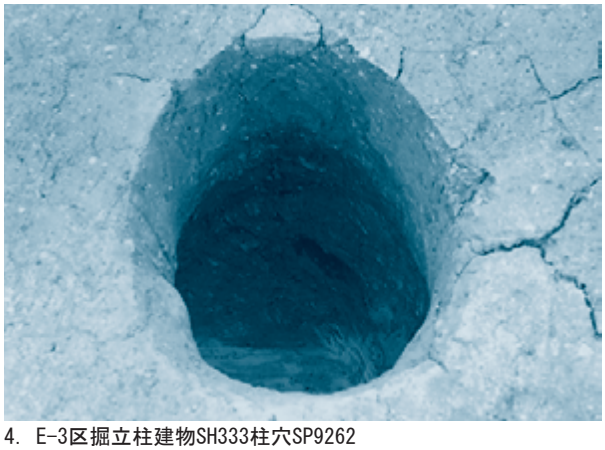
1. E-3区掘立柱建物SH333全景（南から）



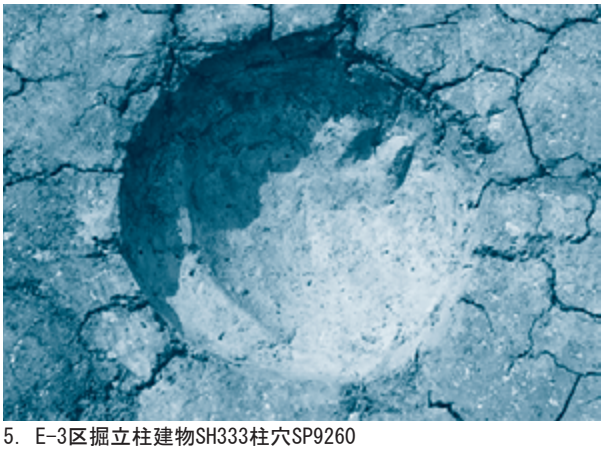
2. E-3区掘立柱建物SH333柱穴SP9816



3. E-3区掘立柱建物SH333柱穴SP9788



4. E-3区掘立柱建物SH333柱穴SP9262

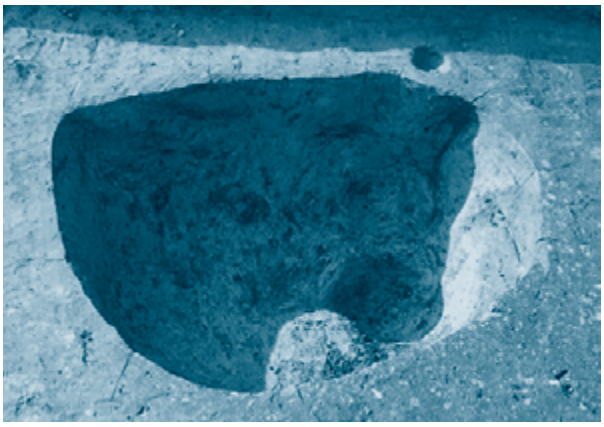


5. E-3区掘立柱建物SH333柱穴SP9260

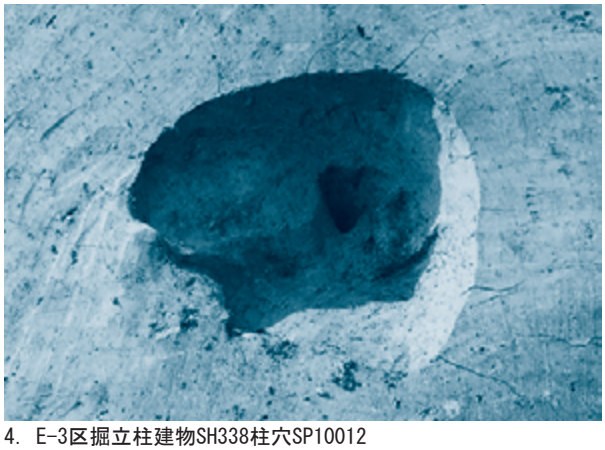
図版38

1. E-3区掘立柱建物SH338全景（東から）

2. E-3区掘立柱建物SH337全景（南東から）



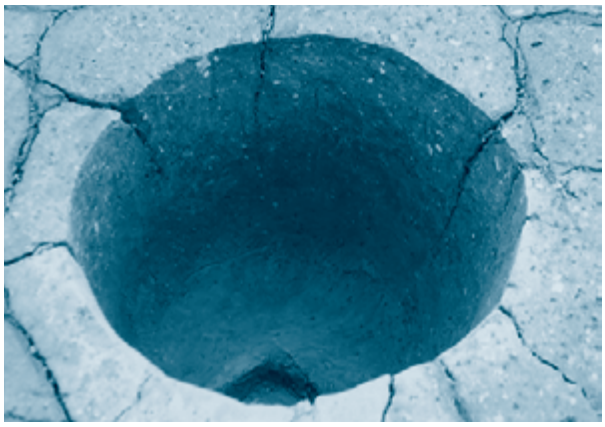
3. E-3区掘立柱建物SH338柱穴SP10023



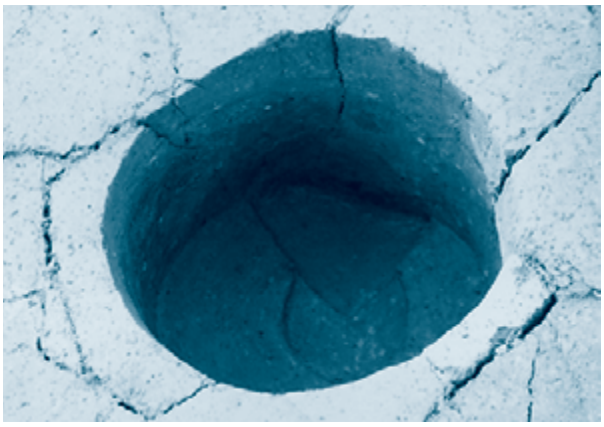
4. E-3区掘立柱建物SH338柱穴SP10012

5. E-3区掘立柱建物SH338柱穴SP10016

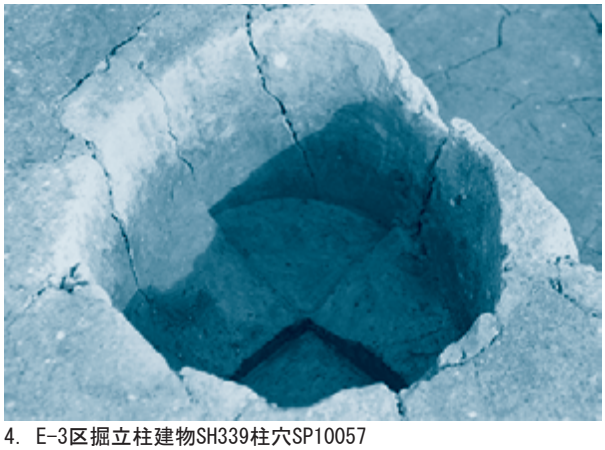
1. E-3区掘立柱建物SH339全景（南東から）



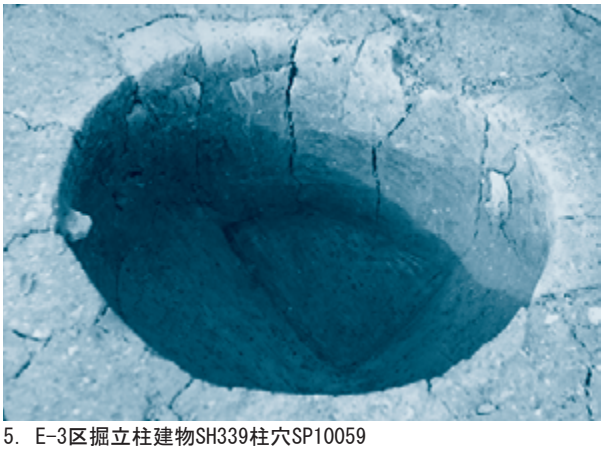
2. E-3区掘立柱建物SH339柱穴SP10055



3. E-3区掘立柱建物SH339柱穴SP10061



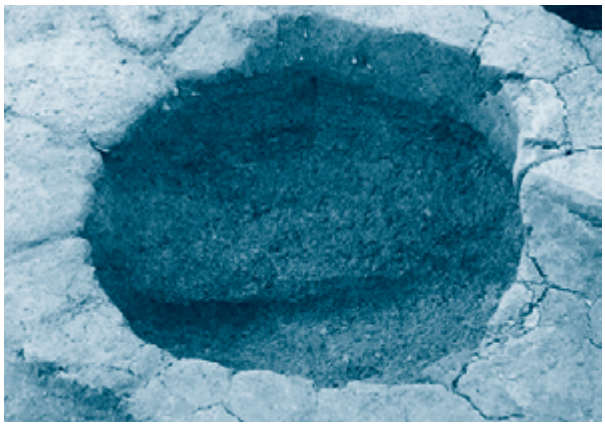
4. E-3区掘立柱建物SH339柱穴SP10057



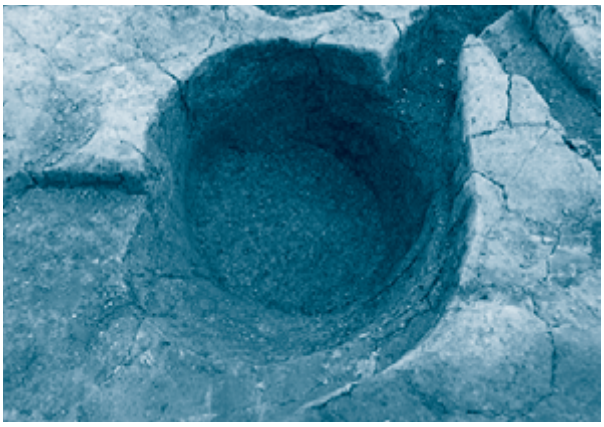
5. E-3区掘立柱建物SH339柱穴SP10059

図版40

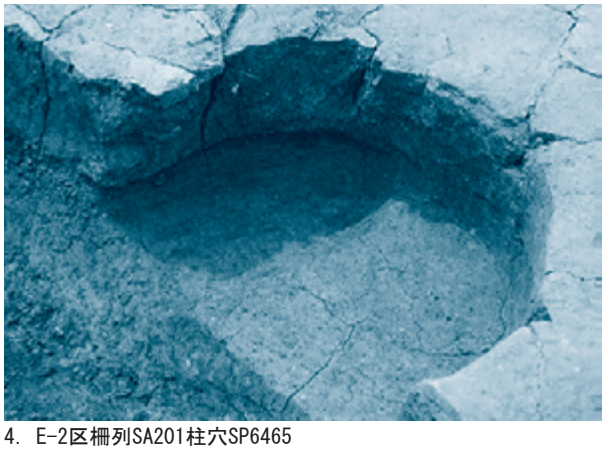
1. E-2区柵列SA201全景



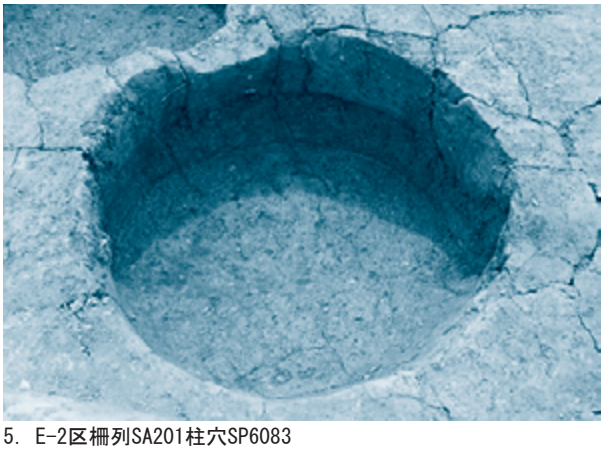
2. E-2区柵列SA201柱穴SP6077



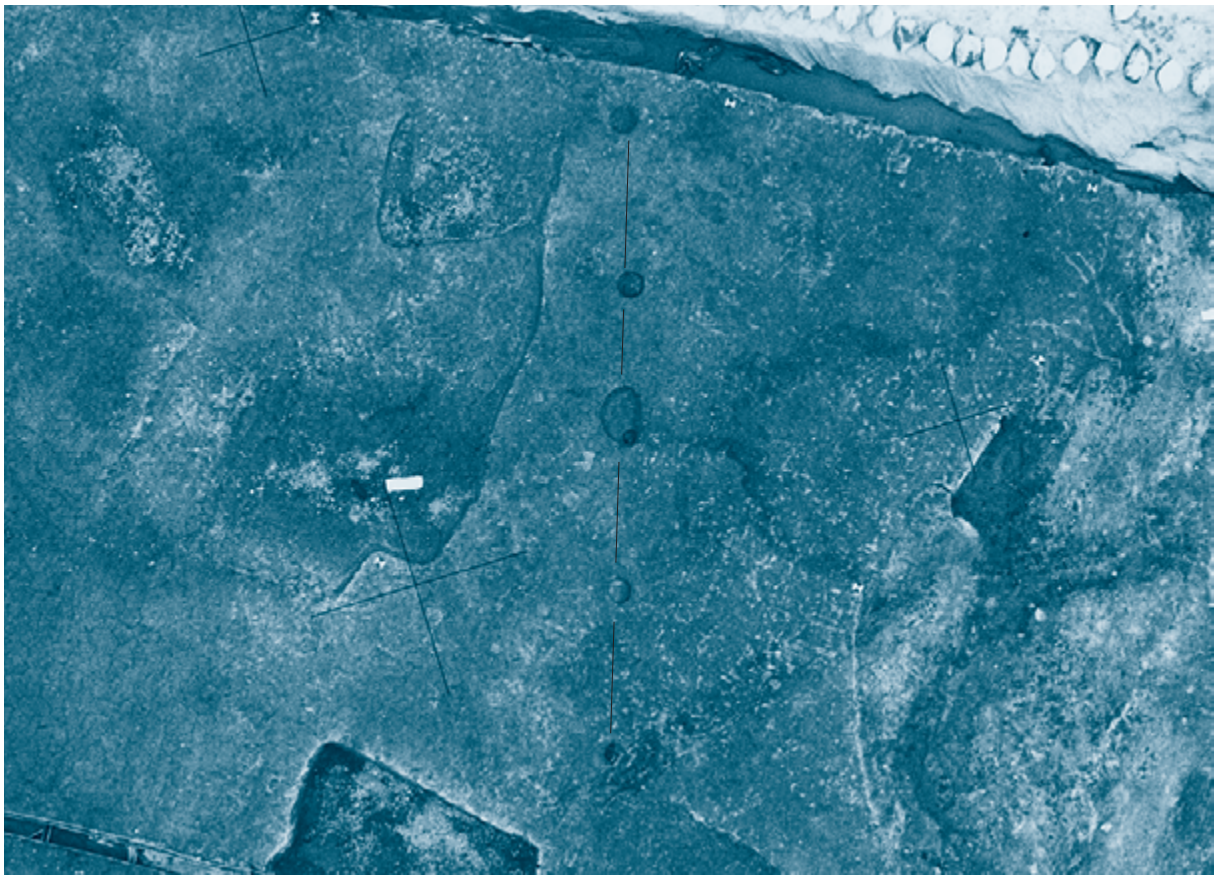
3. E-2区柵列SA201柱穴SP6238



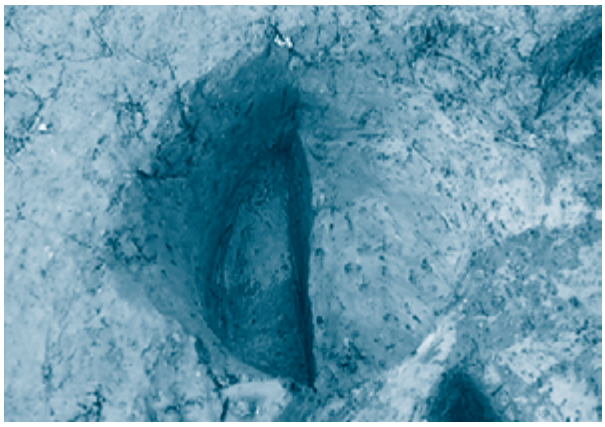
4. E-2区柵列SA201柱穴SP6465



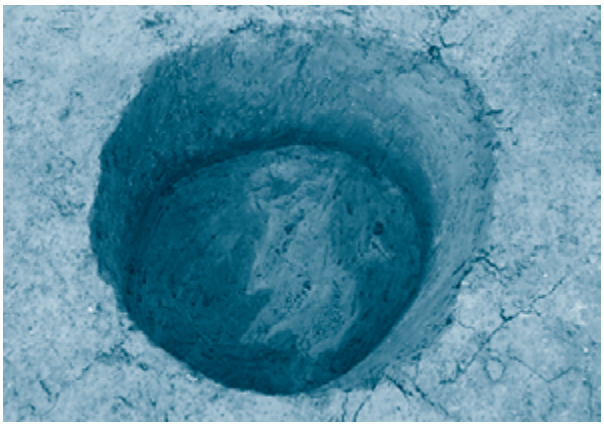
5. E-2区柵列SA201柱穴SP6083



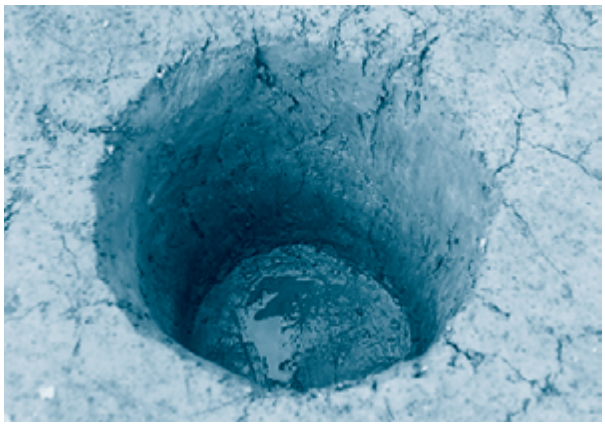
1. E-2・3区柵列SA202全景



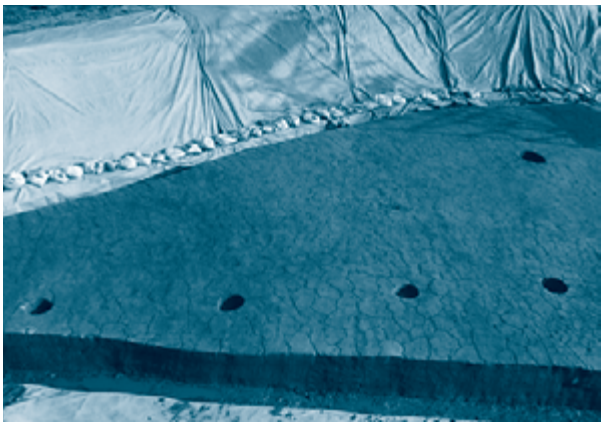
2. E-2・3区柵列SA202柱穴SP9600



3. E-2・3区柵列SA202柱穴SP9588

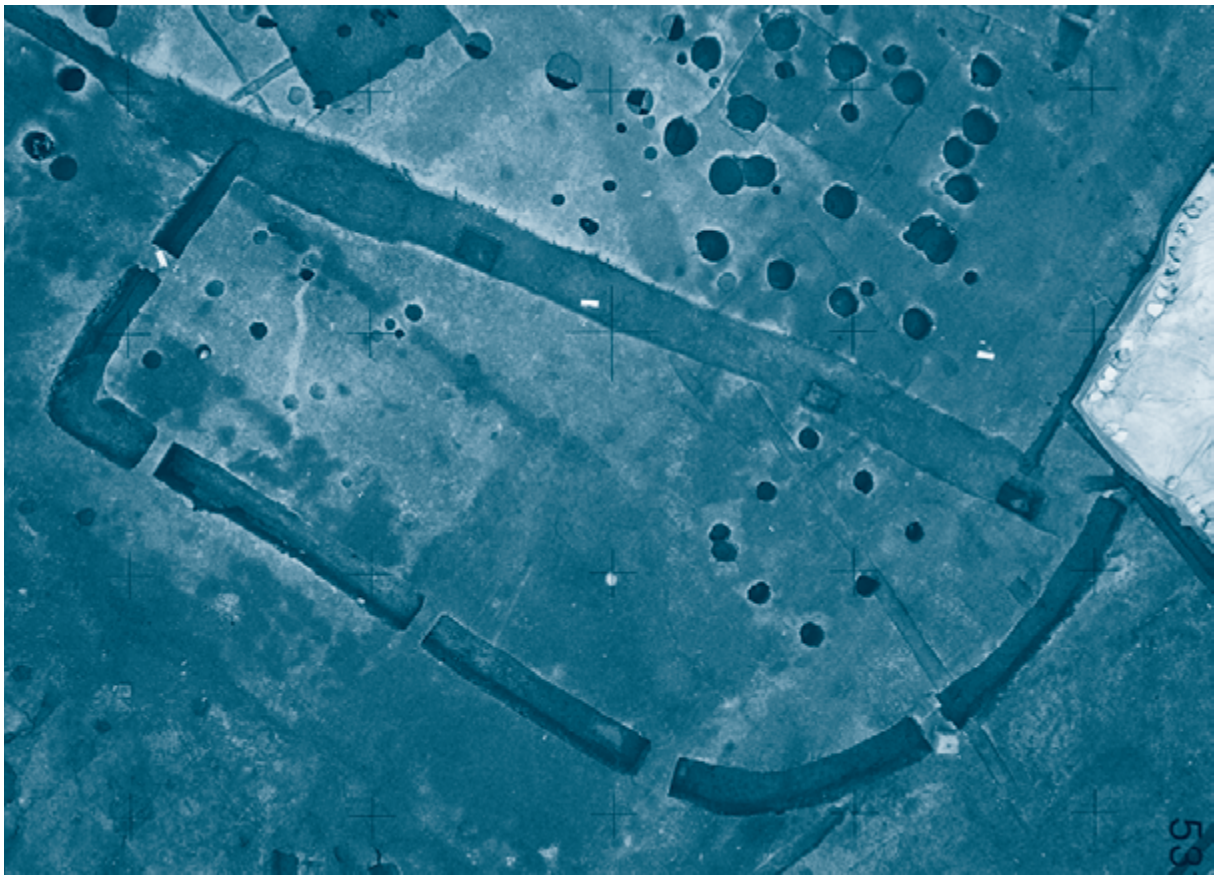


4. E-2・3区柵列SA202柱穴SP9592

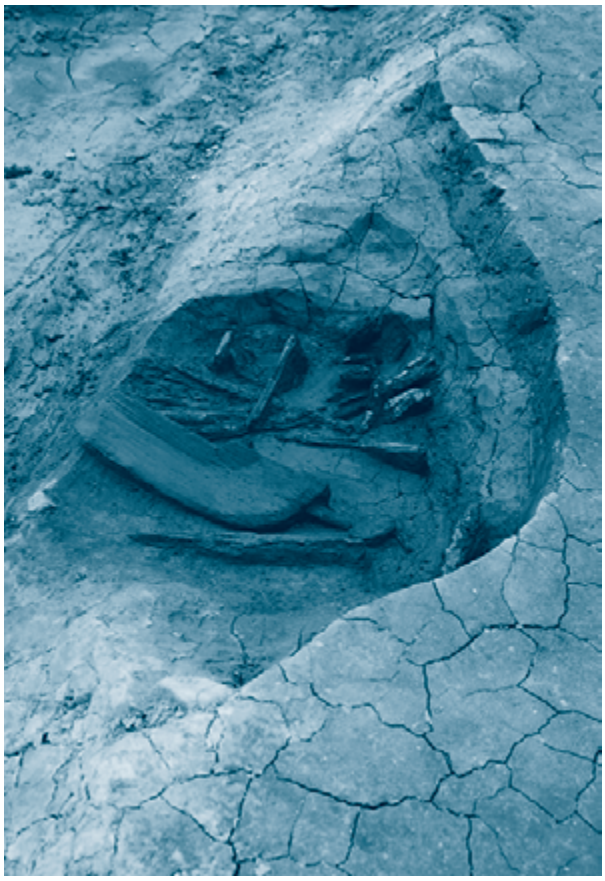


5. E-3区柵列SA301全景（北西から）

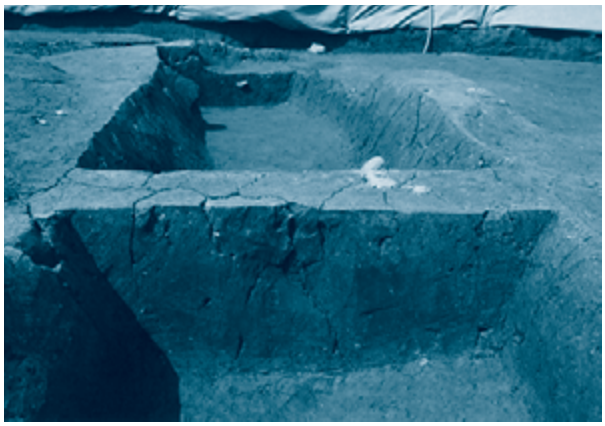
図版42



1. E-2・3区溝SD9500全景

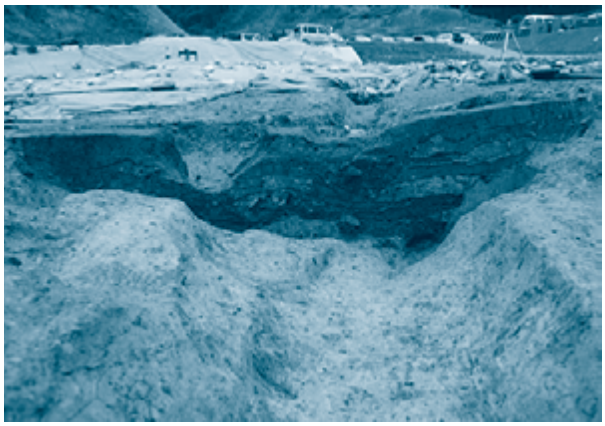


2. E-2・3区溝SD9500遺物出土状況（東から）

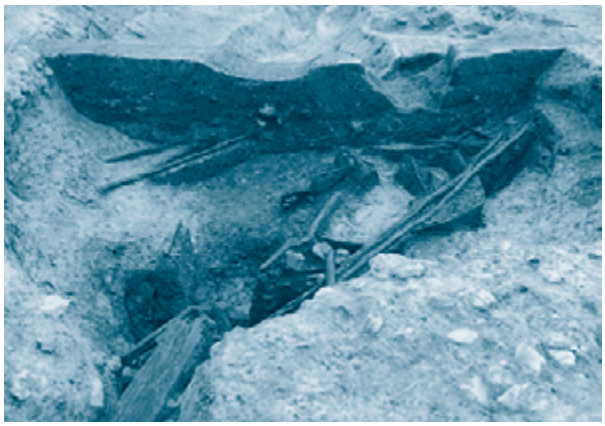


3. E-2・3区溝SD9500土層堆積状況 1（南から）

4. E-2・3区溝SD9500土層堆積状況 2（北東から）



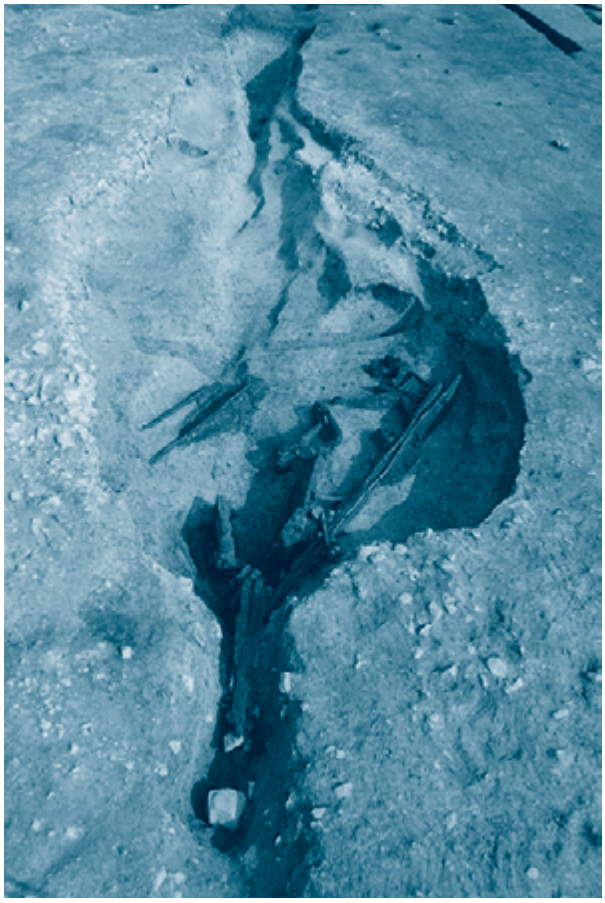
1. E-3区自然流路SR9526土層堆積状況 1（東から）



2. E-3区自然流路SR9526土層堆積状況 2（北西から）

3. E-3区自然流路SR9526遺物出土状況 1（南東から）

4. E-3区自然流路SR9526遺物出土状況 2（北西から）

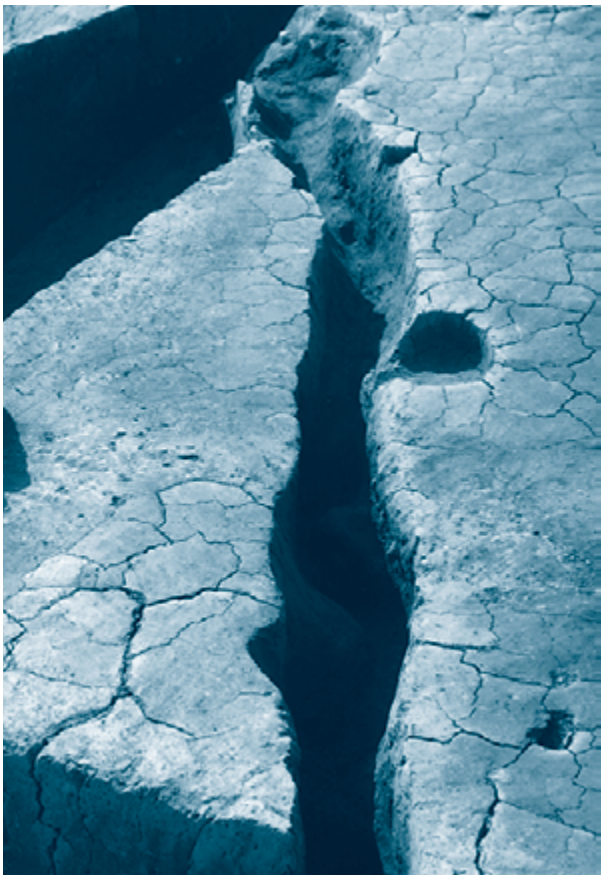


5. E-3区自然流路SR9526遺物出土状況 3（北西から）

6. E-3区自然流路SR9526完掘状況（北西から）

図版44

1. E-2区溝SD6290遺物出土状況 1（東から）



2. E-2区溝SD6290完掘状況（東から）

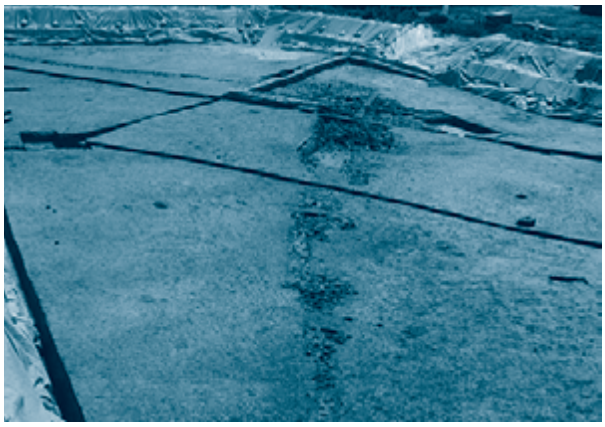
3. E-2区溝SD6290遺物出土状況 2（北から）

4. E-2区溝SD6405土層堆積状況（南から）

5. E-2区溝SD6289土層堆積状況（南東から）

6. E-2区溝SD6405完掘状況（北から）

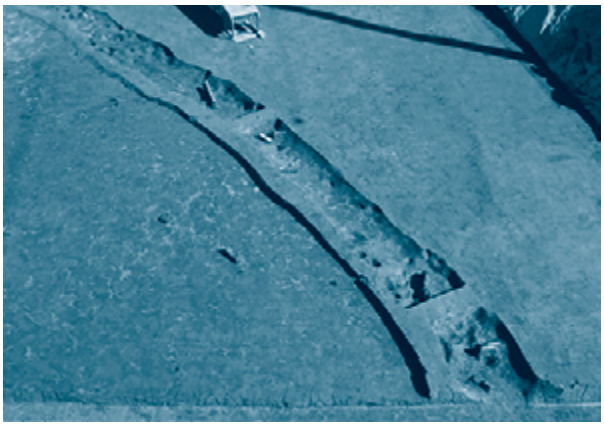
1. E-1区畔SK419・SD420全景（北から）



2. E-1区溝SD421検出状況（北東から）

3. E-1区溝SD421遺物出土状況

4. E-5区畔SK5010・SK422検出状況（南西から）



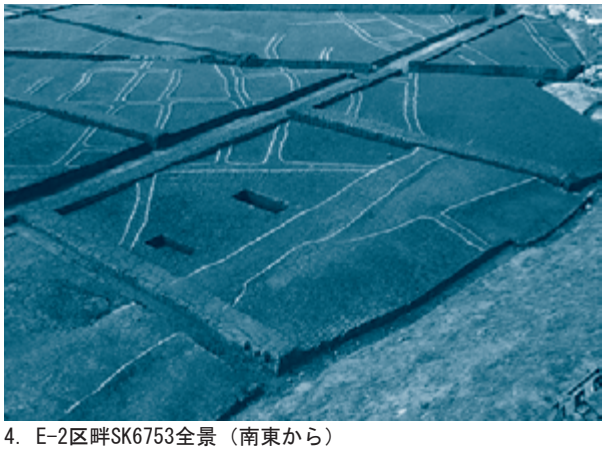
5. E-5区溝SD10457検出状況（南から）

図版46

1. E-3区畔SK9653全景（南東から）

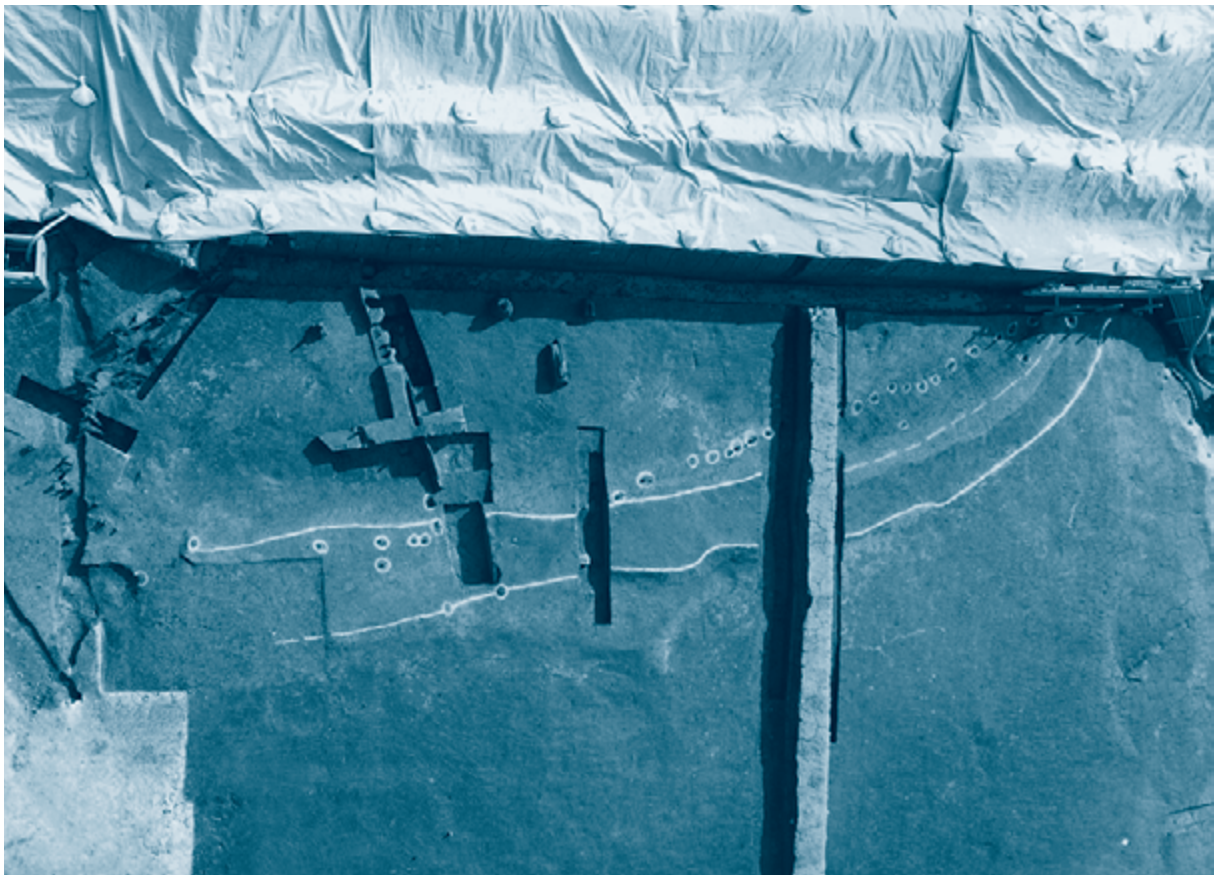
2. E-3区畔SK9653検出状況（南西から）

3. E-2区畔SK6754全景（北から）



4. E-2区畔SK6753全景（南東から）

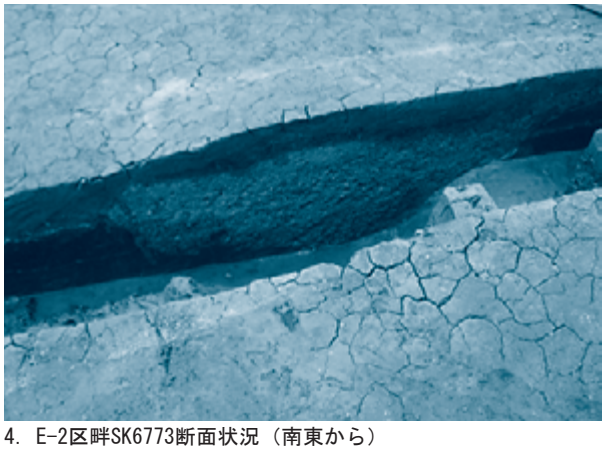
5. E-2区畔SK6754完掘状況（南東から）



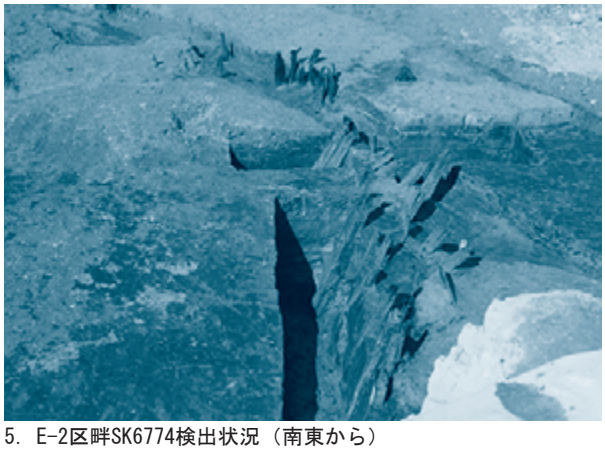
1. E-2区畔SK6773・SK6774・SK6662全景（西から）

2. E-2区畔SK6662検出状況（東から）

3. E-2区畔SK6662検出状況（東から）

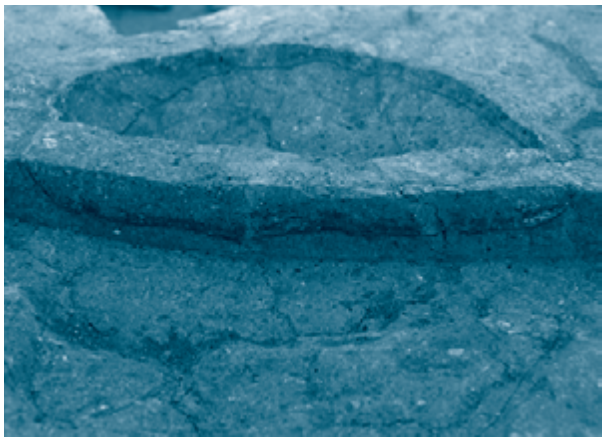


4. E-2区畔SK6773断面状況（南東から）

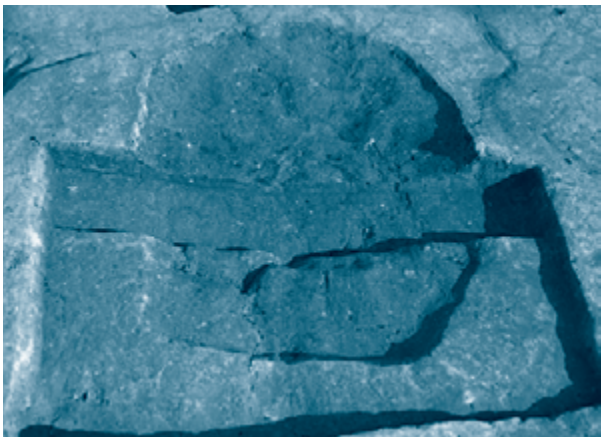


5. E-2区畔SK6774検出状況（南東から）

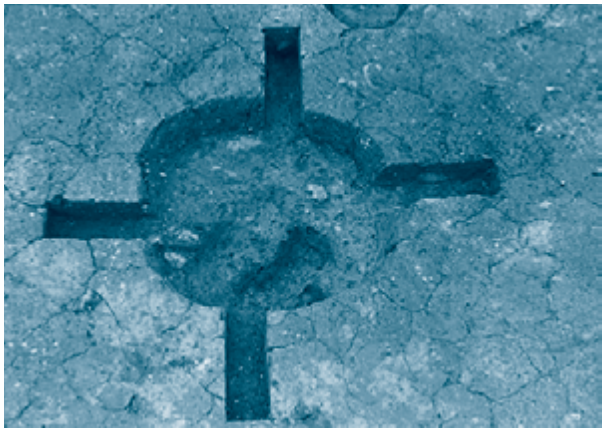
図版48



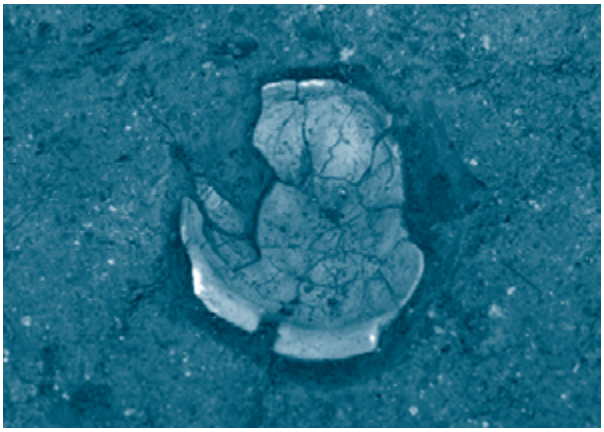
1. E-3区土坑SF9607土層堆積状況（南東から）



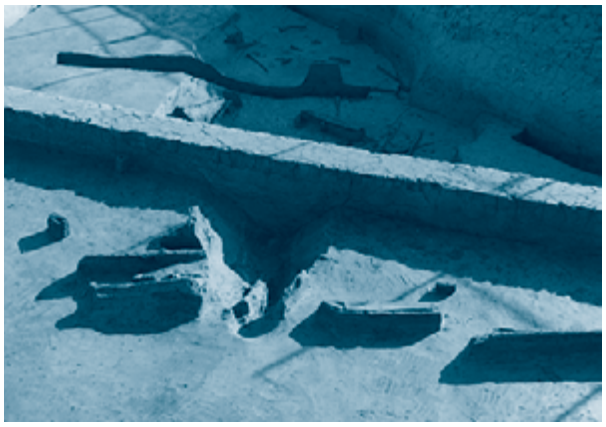
2. E-3区土坑SF9607完掘状況（南東から）



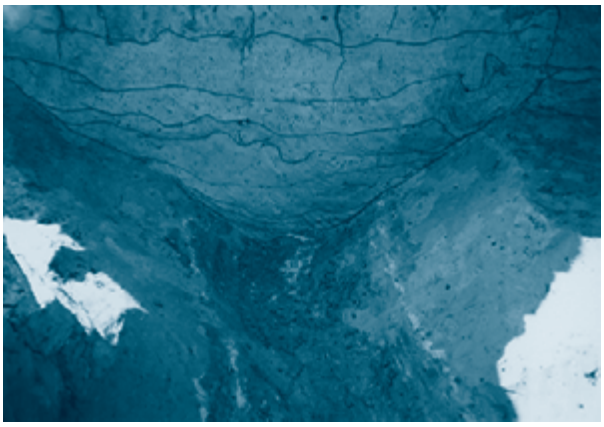
3. E-3区土坑SF9305完掘状況（東から）



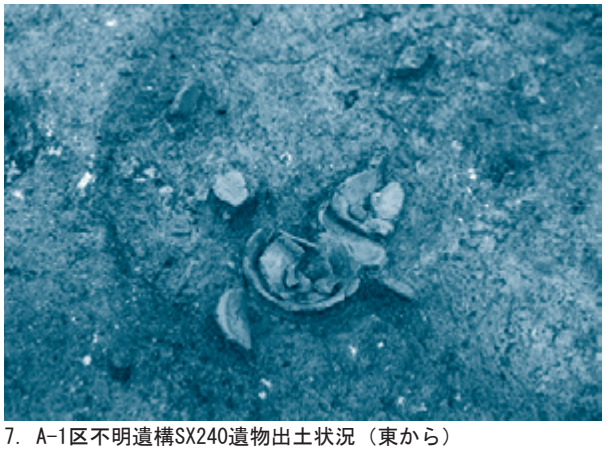
4. E-2区土坑SF2595遺物出土状況



5. A-2区不明遺構SX605土層堆積状況（北から）



6. A-2区不明遺構SX605土層堆積状況（北から）



7. A-1区不明遺構SX240遺物出土状況（東から）

8. A-1区不明遺構SX541遺物出土状況（東から）

2

4

5

13

39

38

37

45

SB204・SB217・SB302・SH324・SD9790・SD6171 出土土器

図版50

48

54

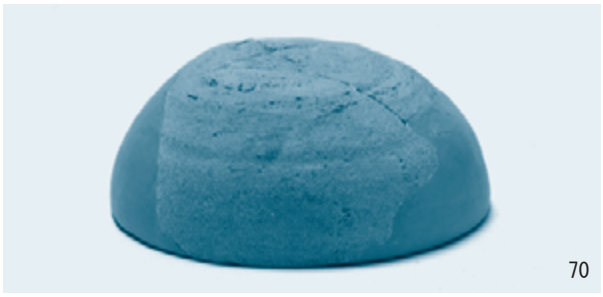
58

51

78

629

68

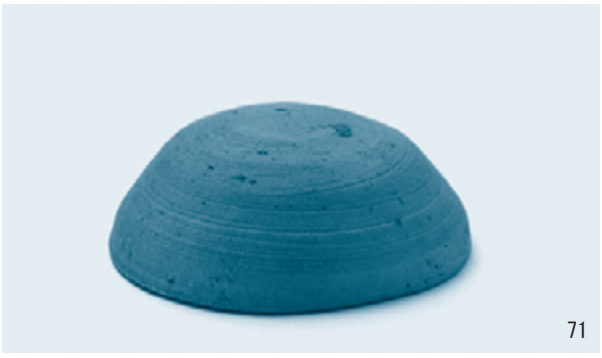

70

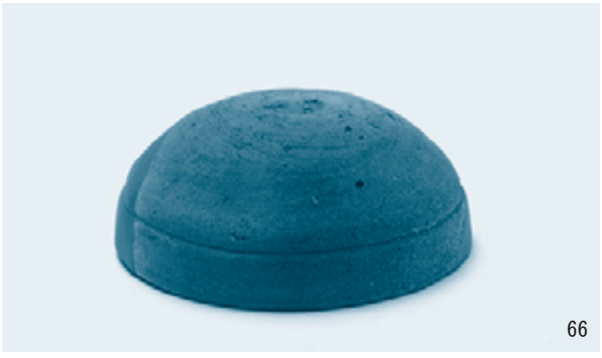
99

144

SD9500・SD6290・SR8680・SR9526 出土土器

69

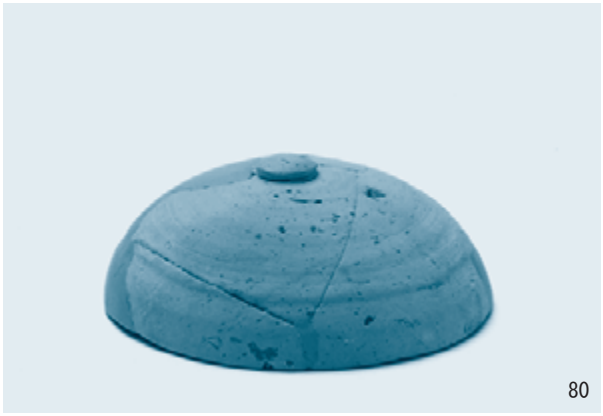

71


66

76

77

81


80

89

120

SR9526 出土土器 1

図版52

91

107

96

116

97

117

98

118

100

119

SR9526 出土土器 2

121

136

139

143

141

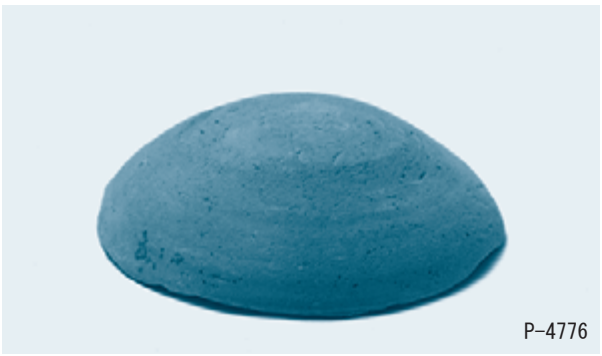
148

151

149

SR9526 出土土器 3

図版54


P-4776

157

167

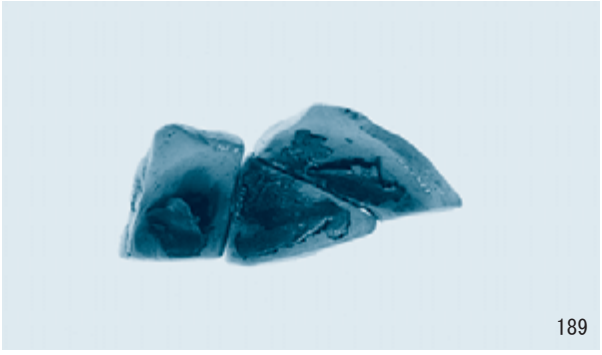
161

168

162

191

163


189

573

SP6213・SP6530・SK419・SD421・SX541・SX605 出土土器

203

217

204

225

208

229

209

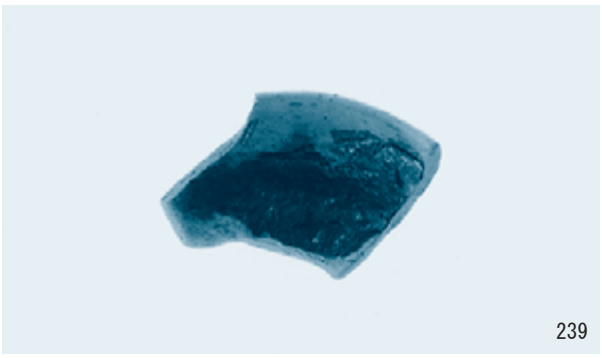
220

211

231

包含層出土土師器 1

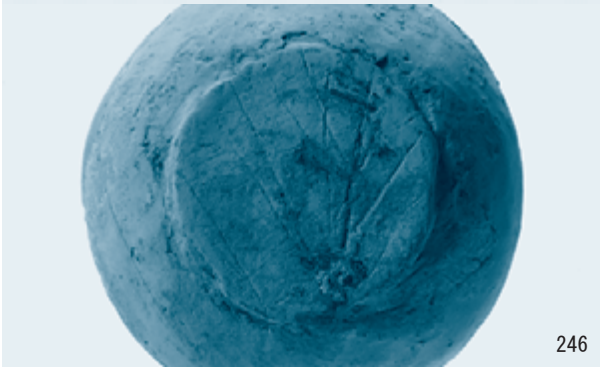
図版56


239

249

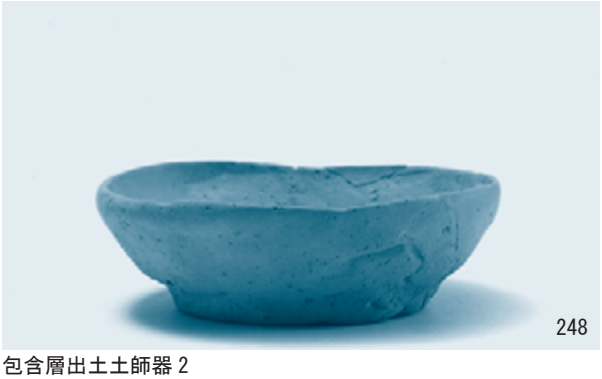
245

252


246

253

254


248

258

包含層出土土師器 2

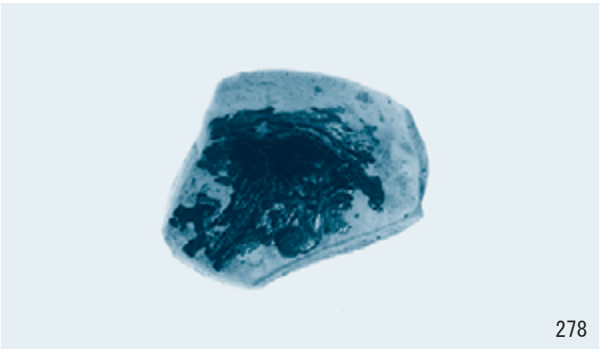
259

267

260

272

261


278

263

281

264

284

包含層出土土師器 3

図版58

294

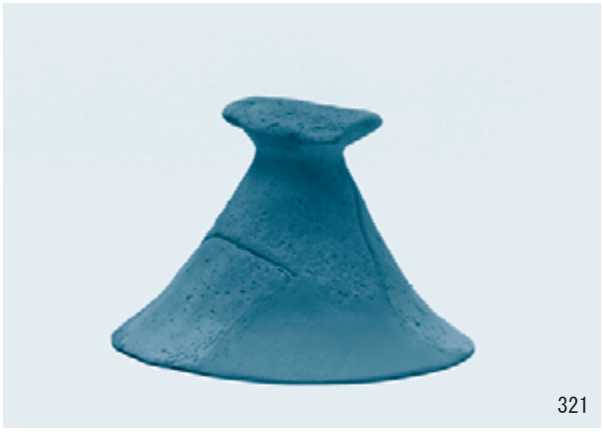
296

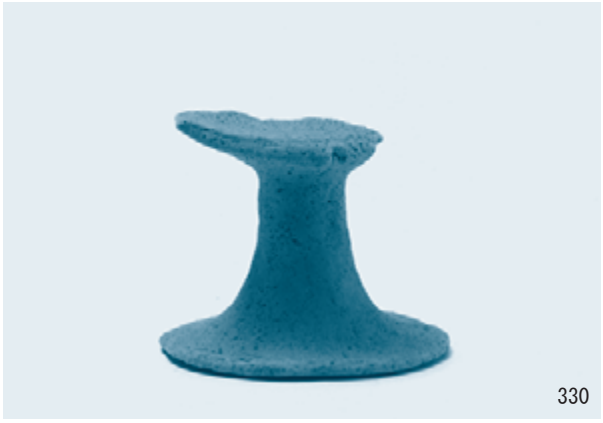
297

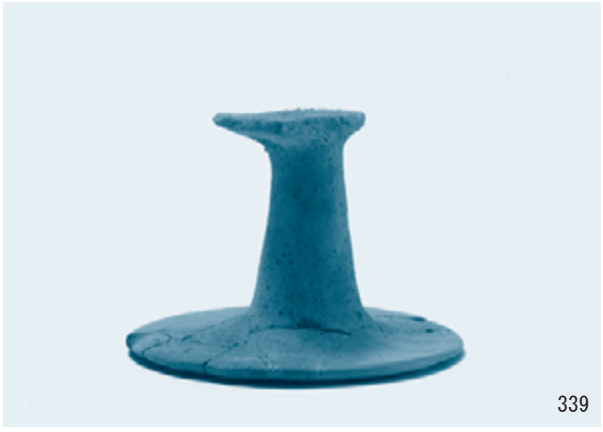
286

306

332


321


330


339

包含層出土土師器 4

327

347

328

350

344

349

346

352

345

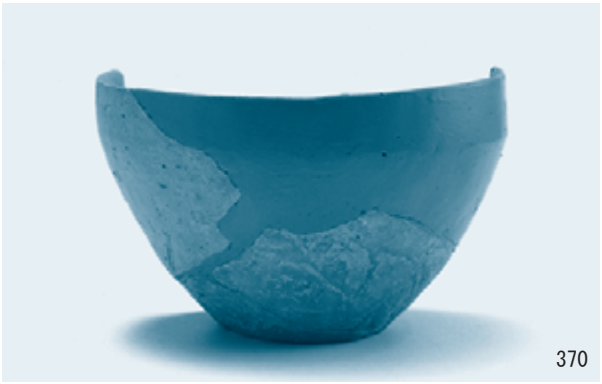
358

包含層出土土師器 5

図版60

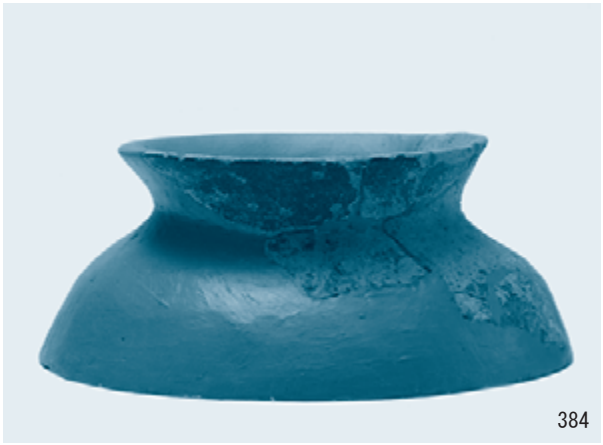
353

361


370

359

357


384

389

390

包含層出土土師器 6

394

391

398

422

424

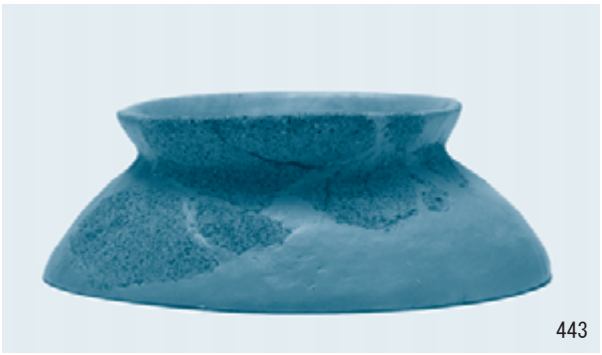
412

413

包含層出土土師器 7

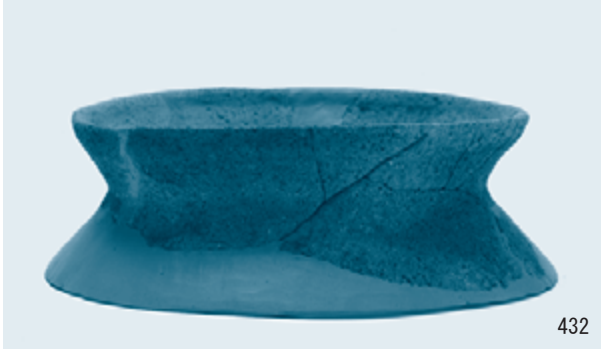
図版62

380


443

458

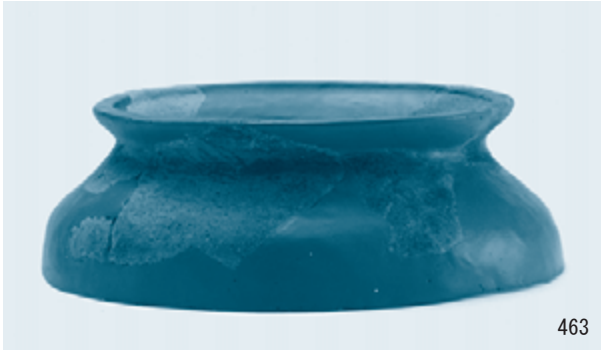
451


432

445

420

462

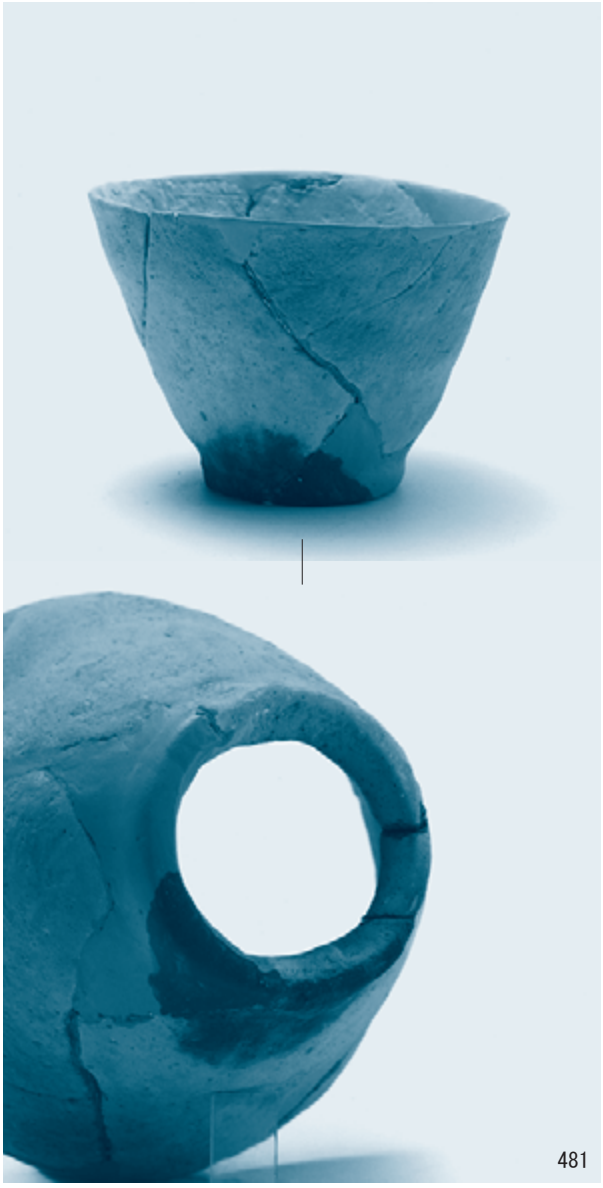

463

包含層出土土師器 8

426

464

466


481

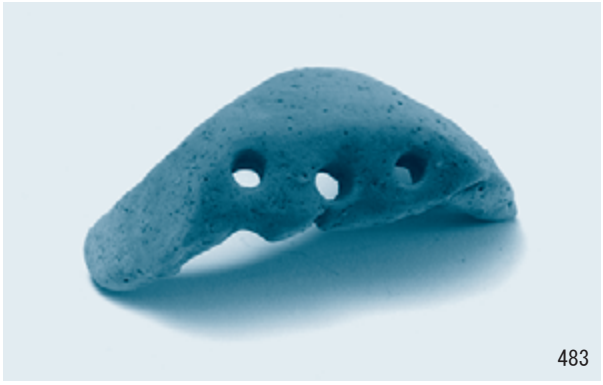
472

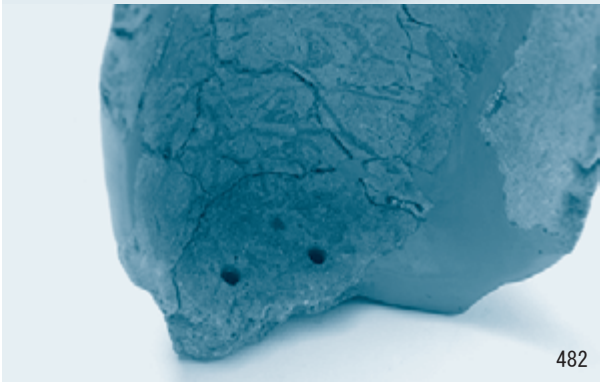
包含層出土土師器 9

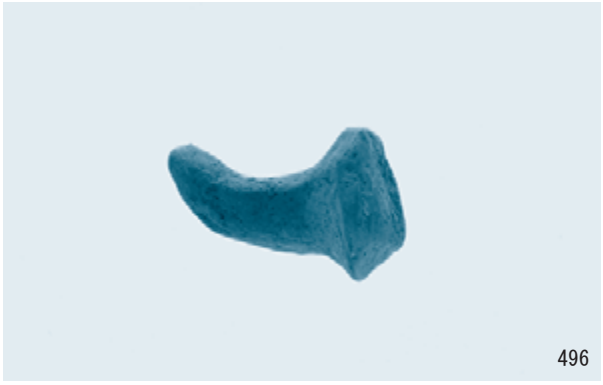
図版64

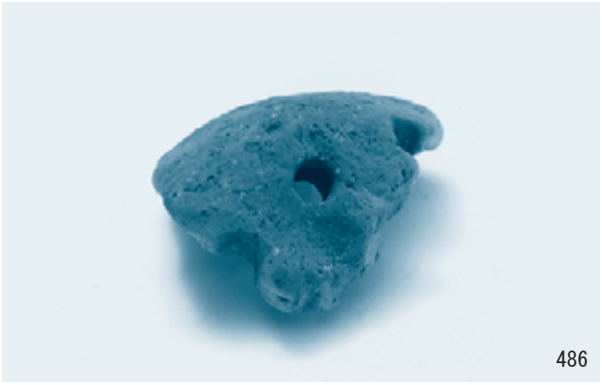
474

473


483


482


496


486

488

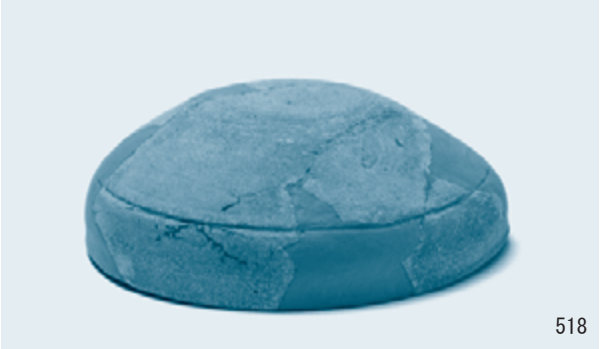
包含層出土土師器 10

出土駿東甕集合

包含層出土土師器 11

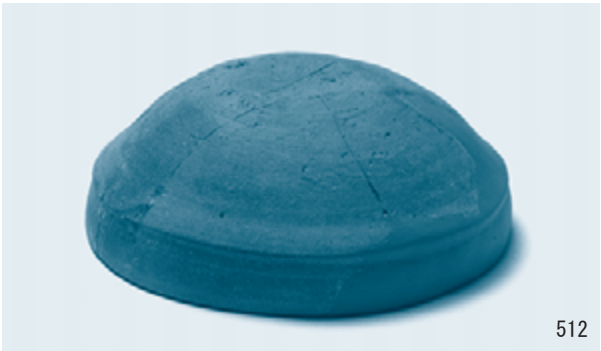
図版66

509


518

510

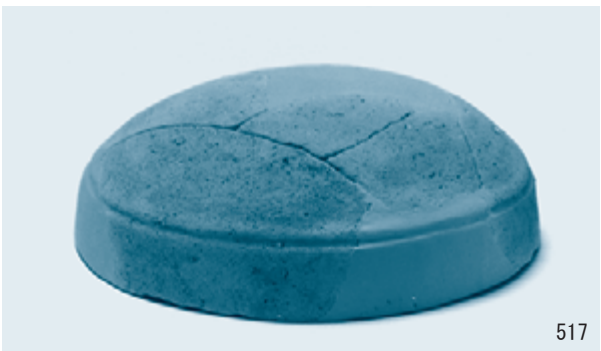
520


512

524

514

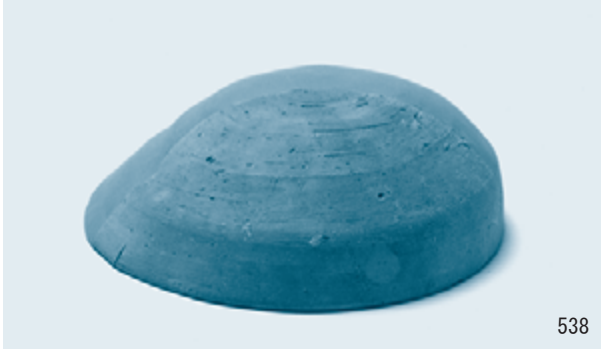
528


517

529

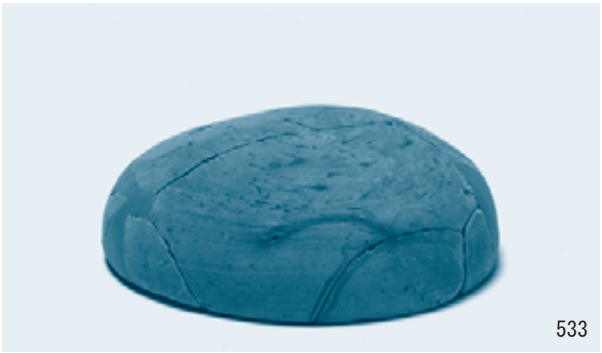
包含層出土須恵器 1

530


538

532

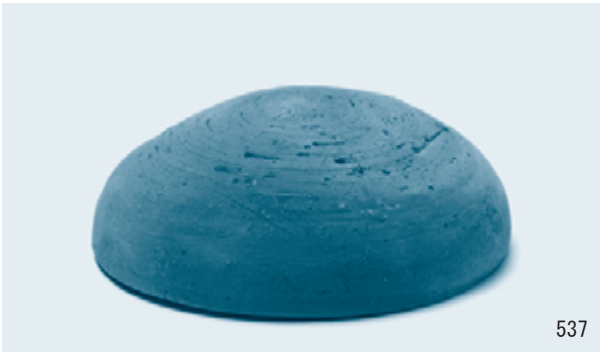
543

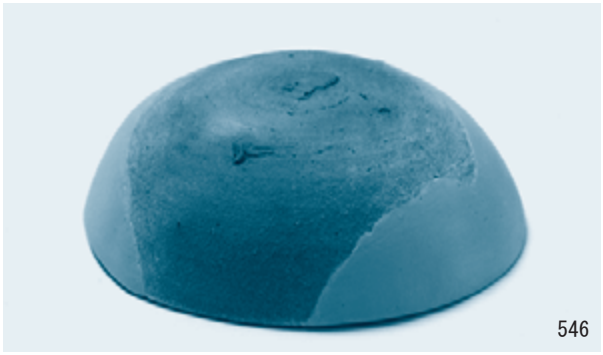

533

544

534

545


537


546

包含層出土須恵器 2

図版68

550

565

553

569

554

570

556

578

557

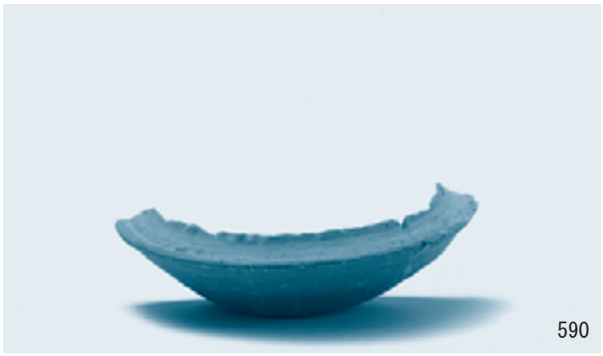
580

包含層出土須恵器 3

582

589

584

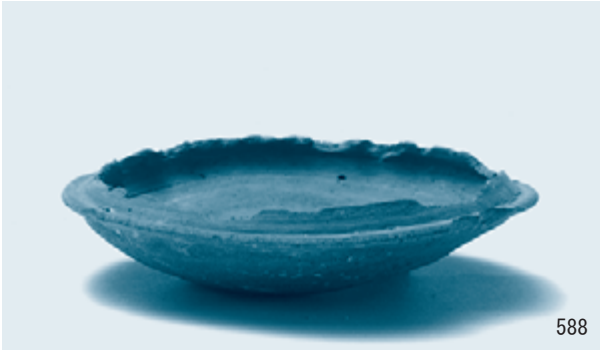

590

585

595

587

596


588

598

包含層出土須恵器 4

図版70

599

608

600

610

602

612

603

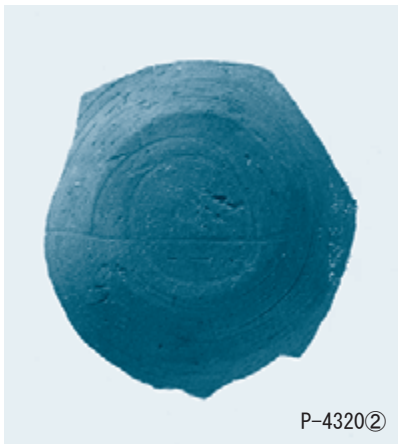
613

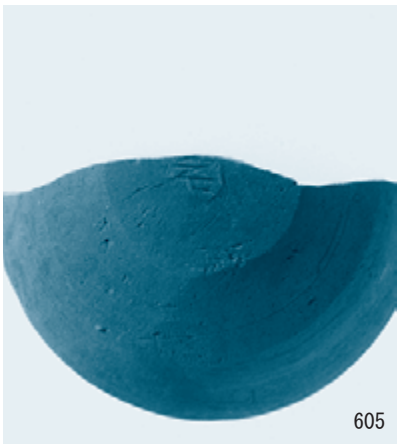
605

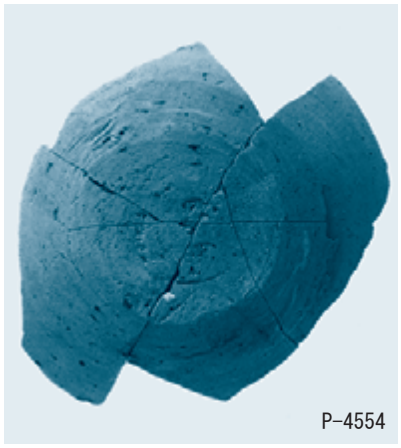
154

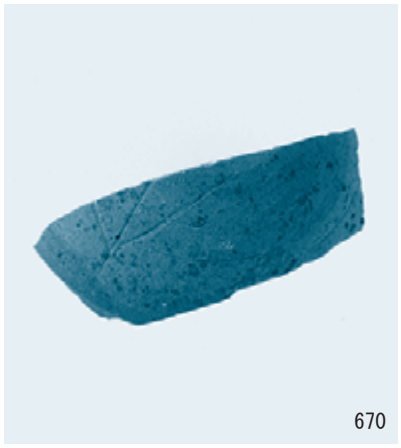
包含層出土須恵器 5

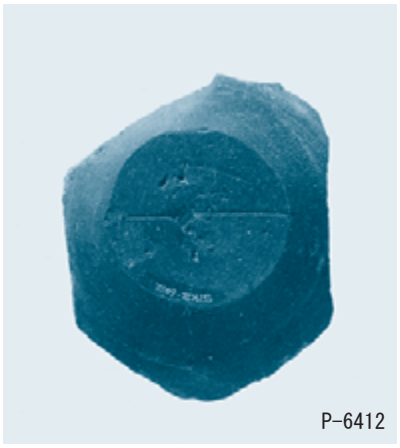
510

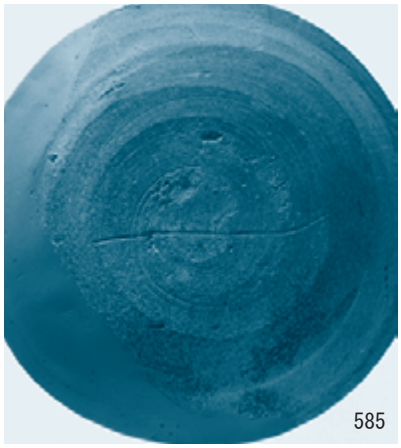

P-4320②


605

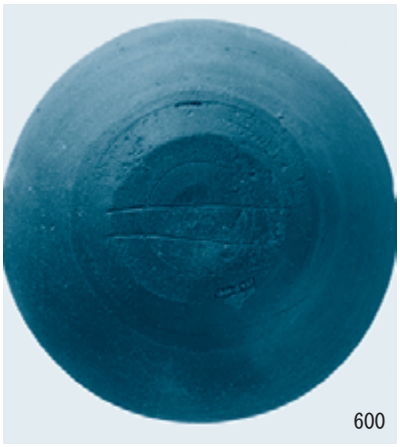

P-4554

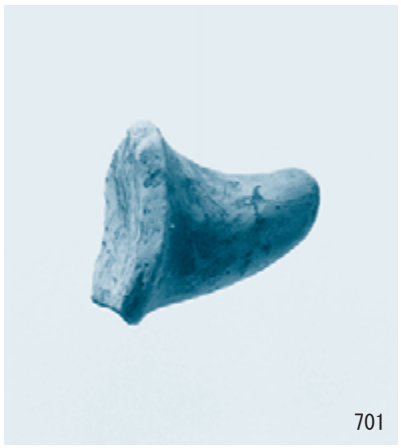

670

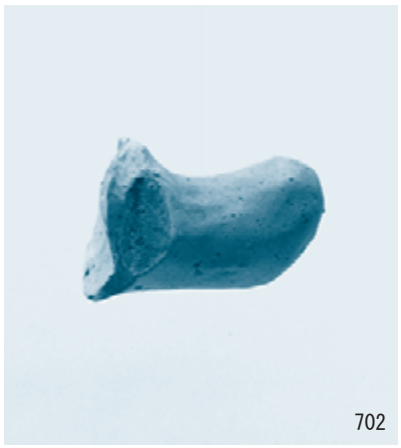

P-6412

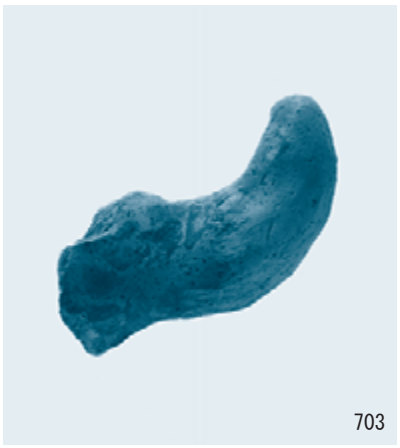

585

580


600


701


702

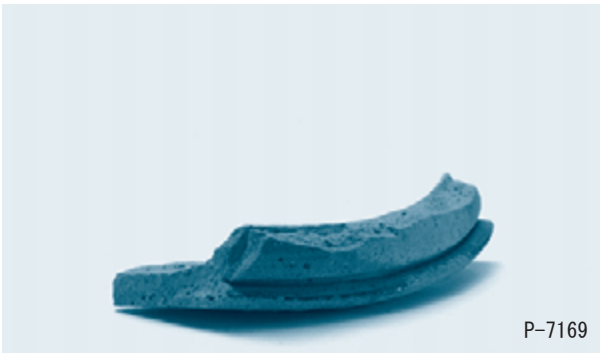

703

包含層出土須恵器 6

図版72

705

547


P-7169

549

616

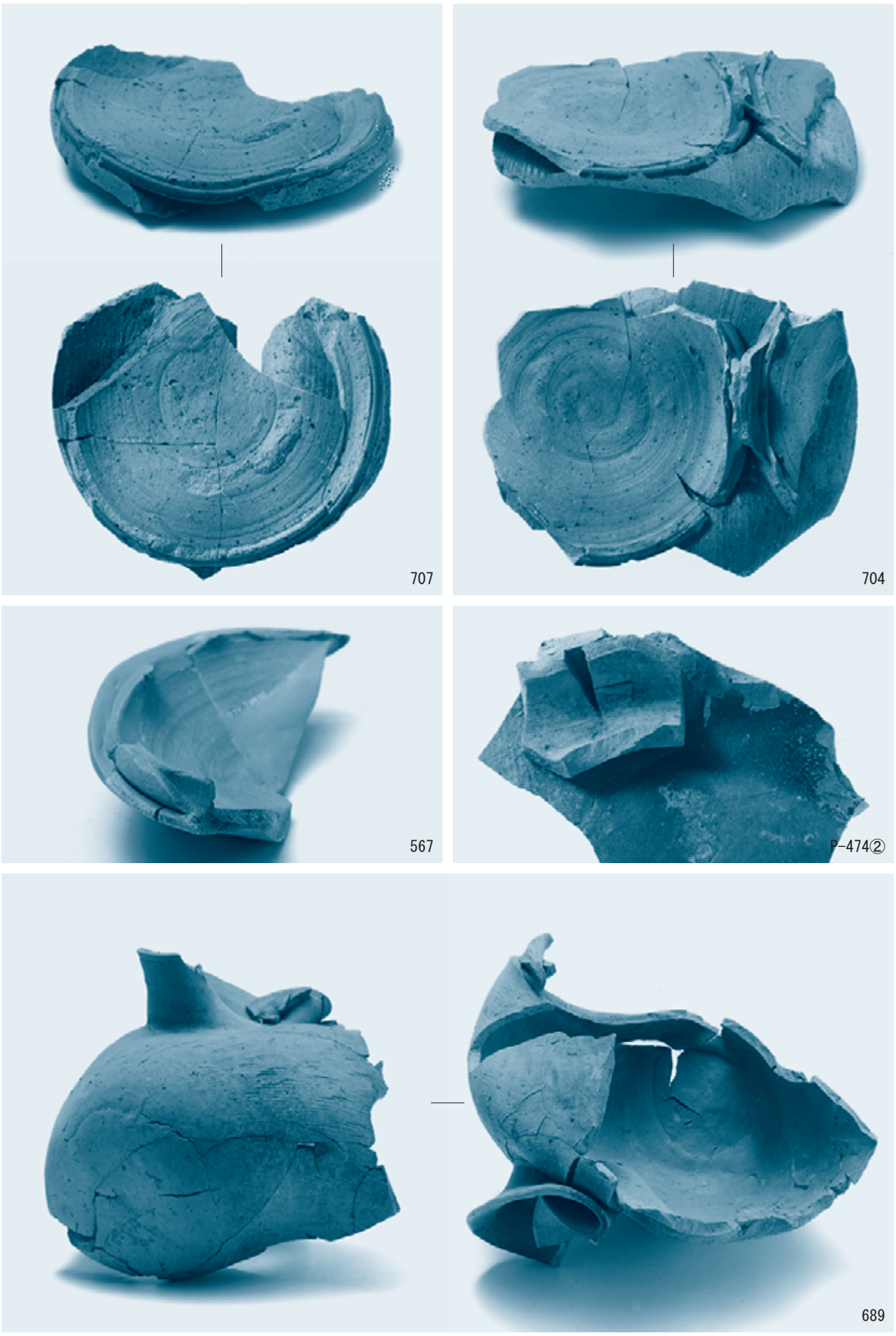
153

P-895

30

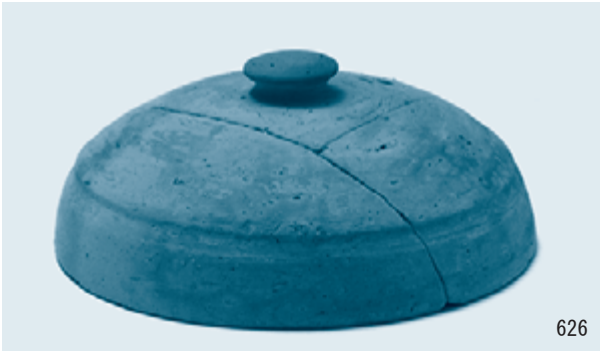
706

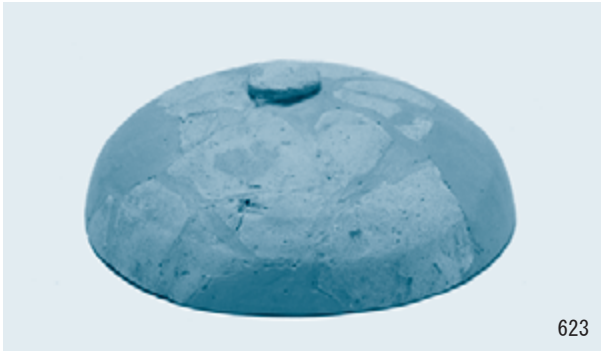
包含層出土須恵器 7



包含層出土須恵器 8

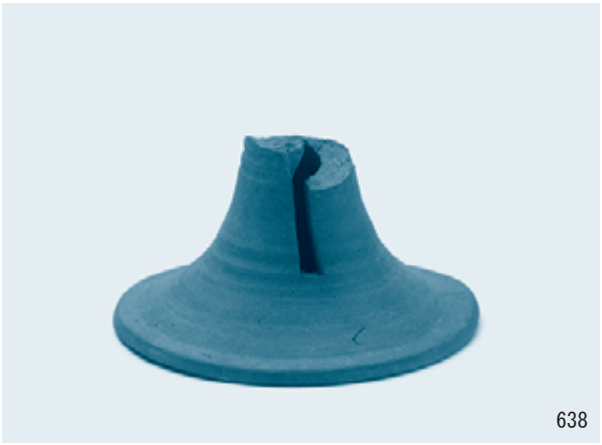
図版74


626


623

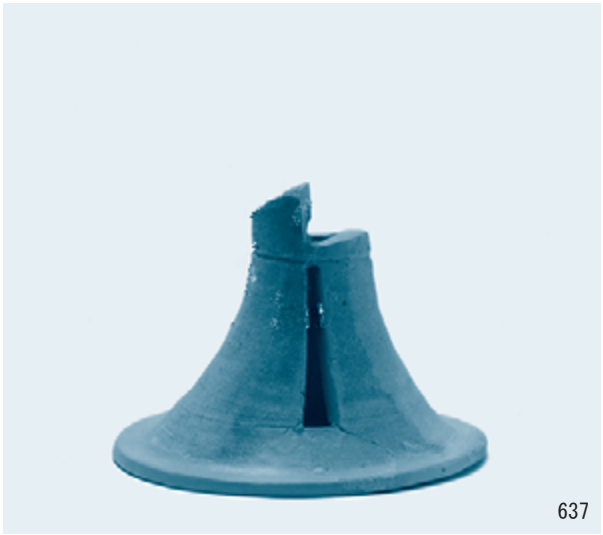
624

631


638

634

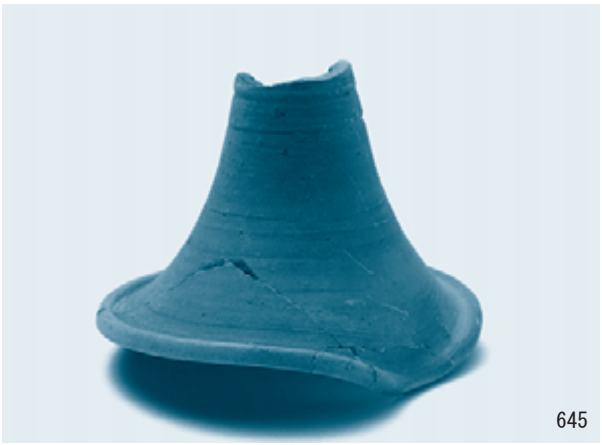
639

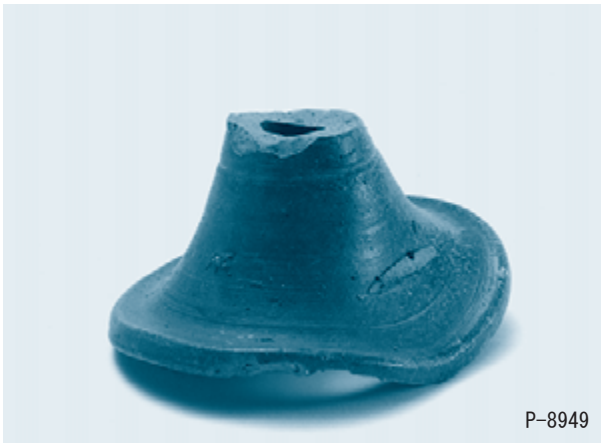

637

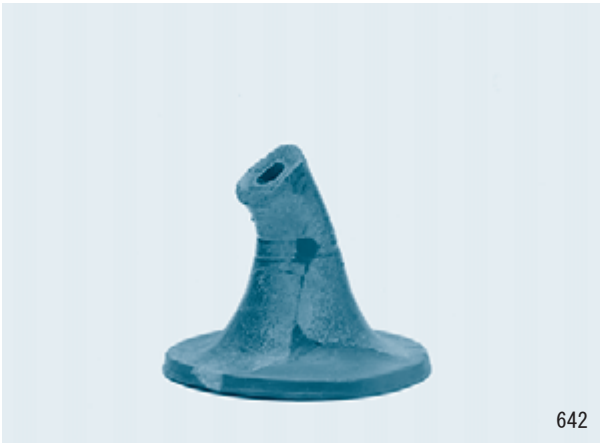
包含層出土須恵器 9

649

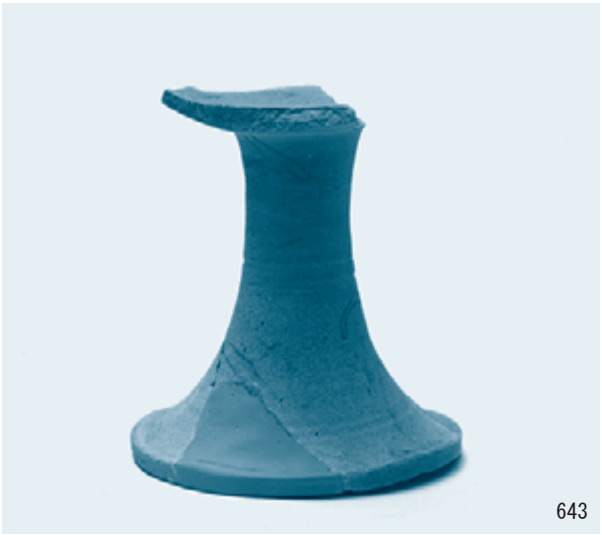
646


645


P-8949


642

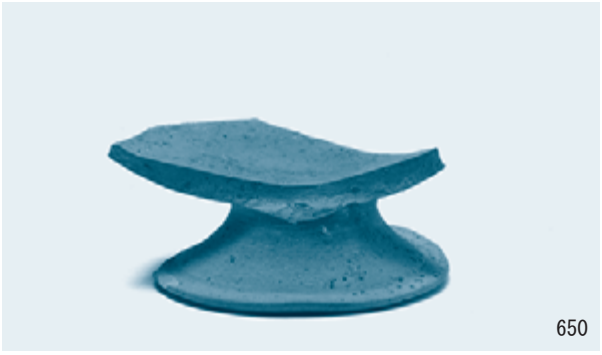
648


643

661

包含層出土須恵器 10

図版76


650

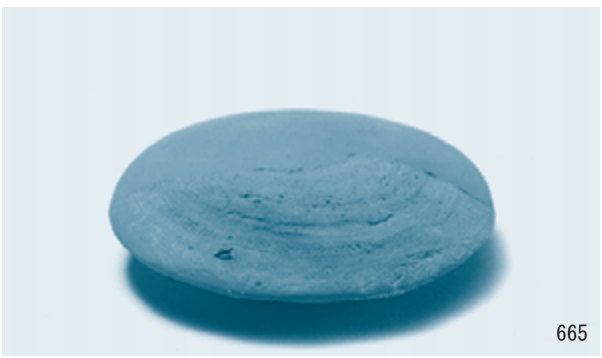
654

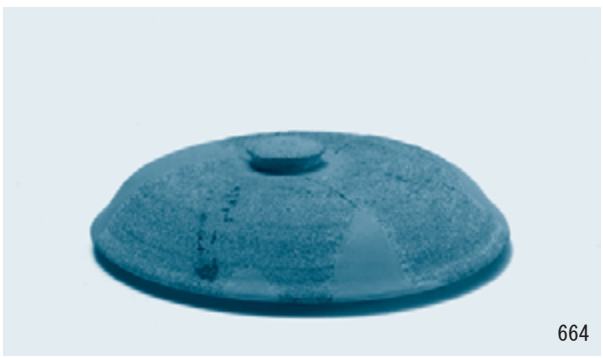
657

653

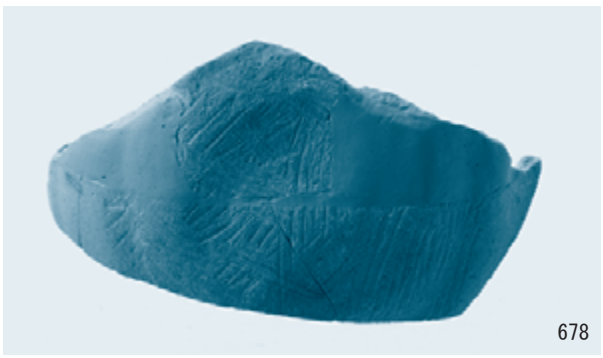
655

668


665


664

680


678

包含層出土須恵器 11

674

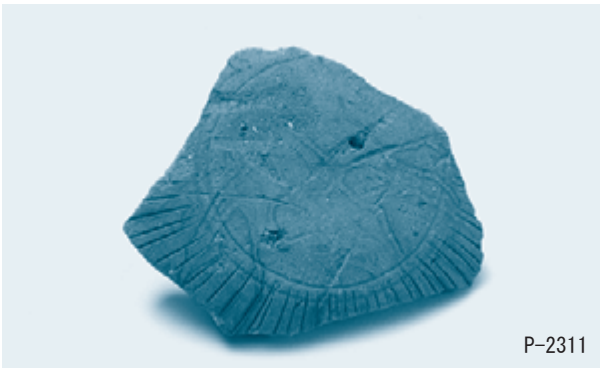
652

686

685

681

682


P-2311

659

包含層出土須恵器 12

図版78

693

672

673

679

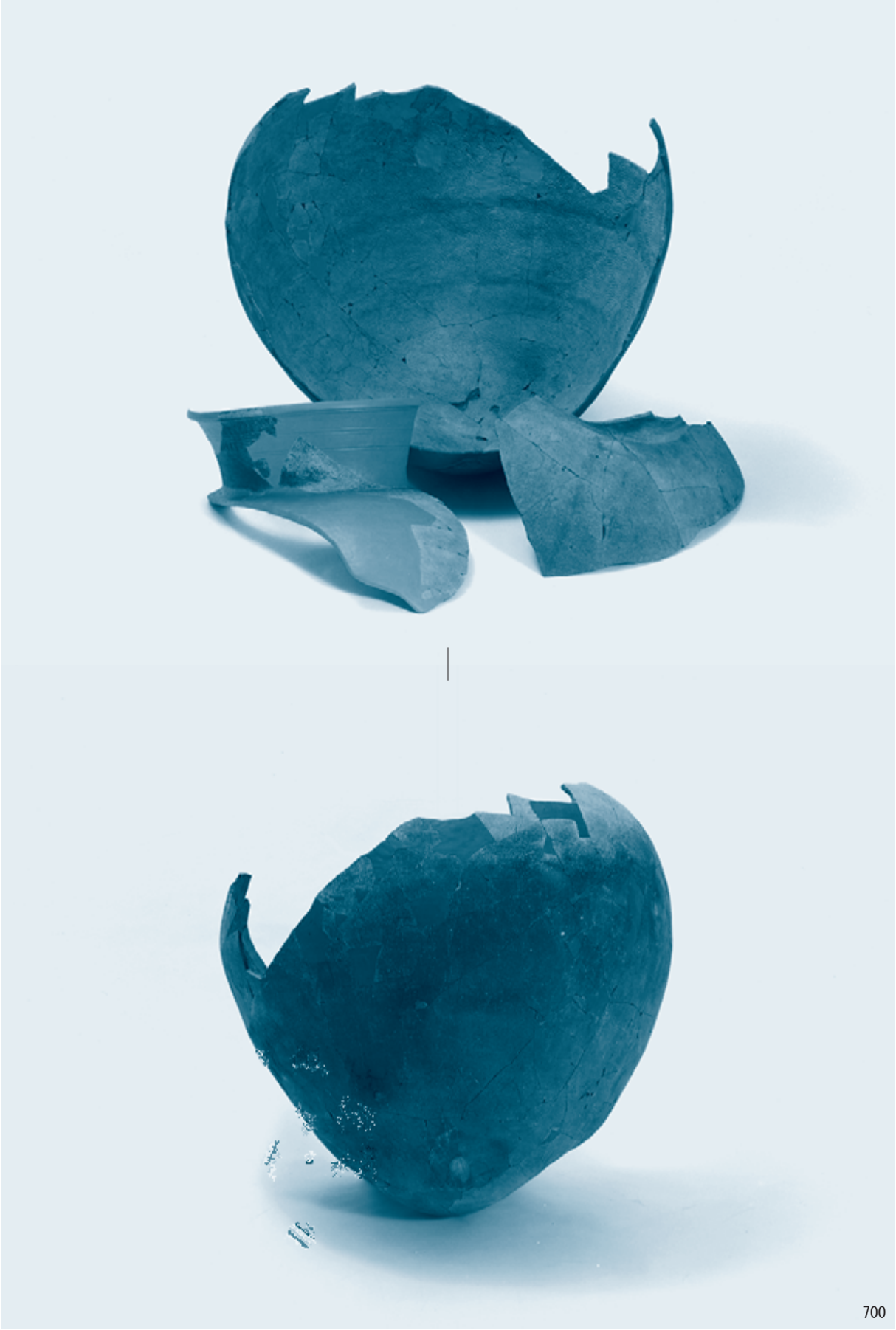
包含層出土須恵器 13

690

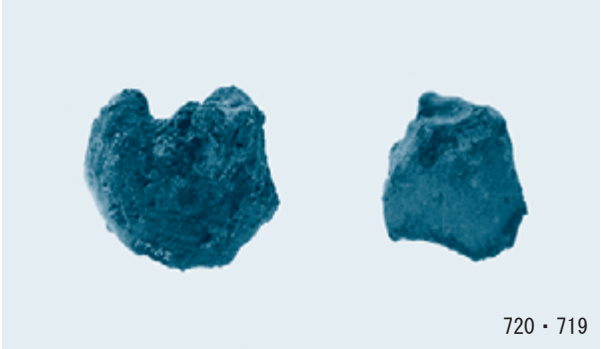
691

包含層出土須恵器 14

図版80



包含層出土須恵器 15


720・719

716

714

PT-71

710

717

715・718

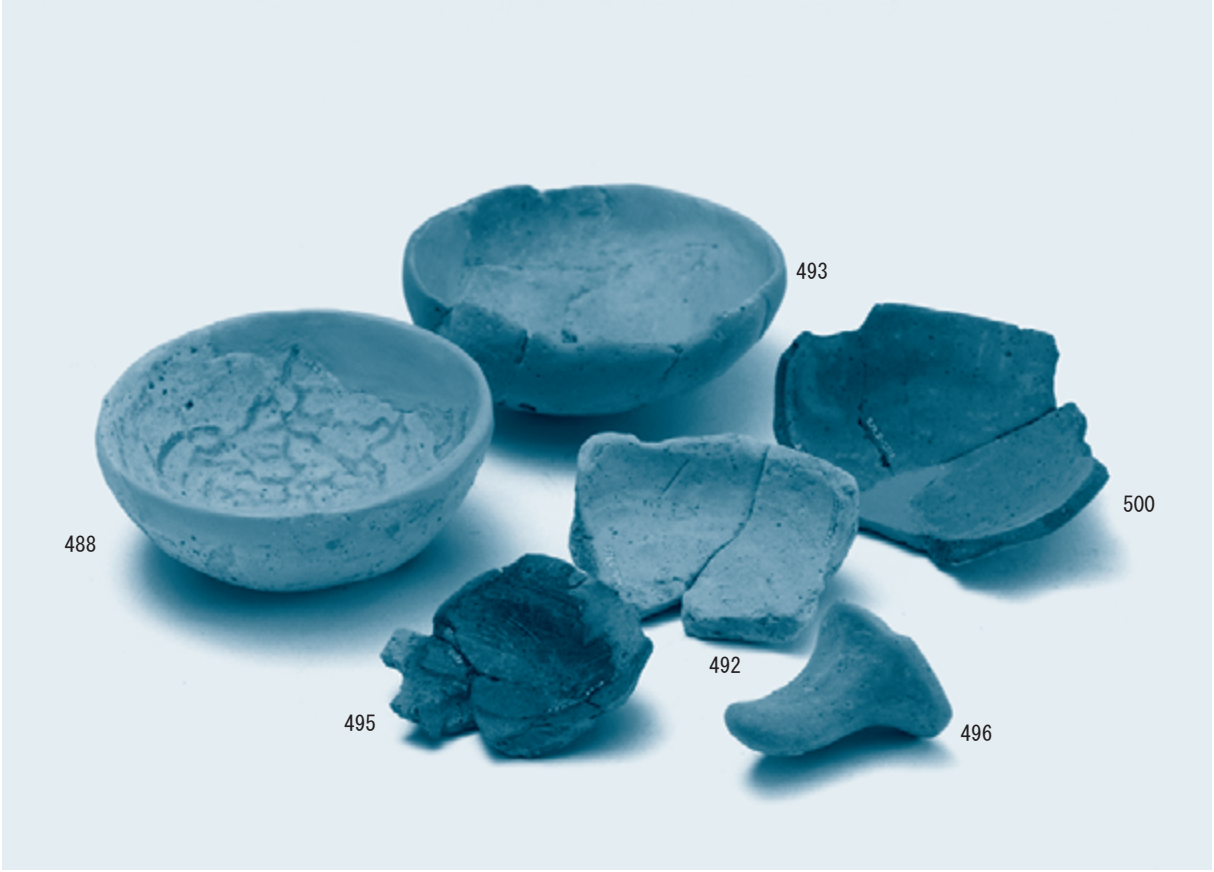
721

715

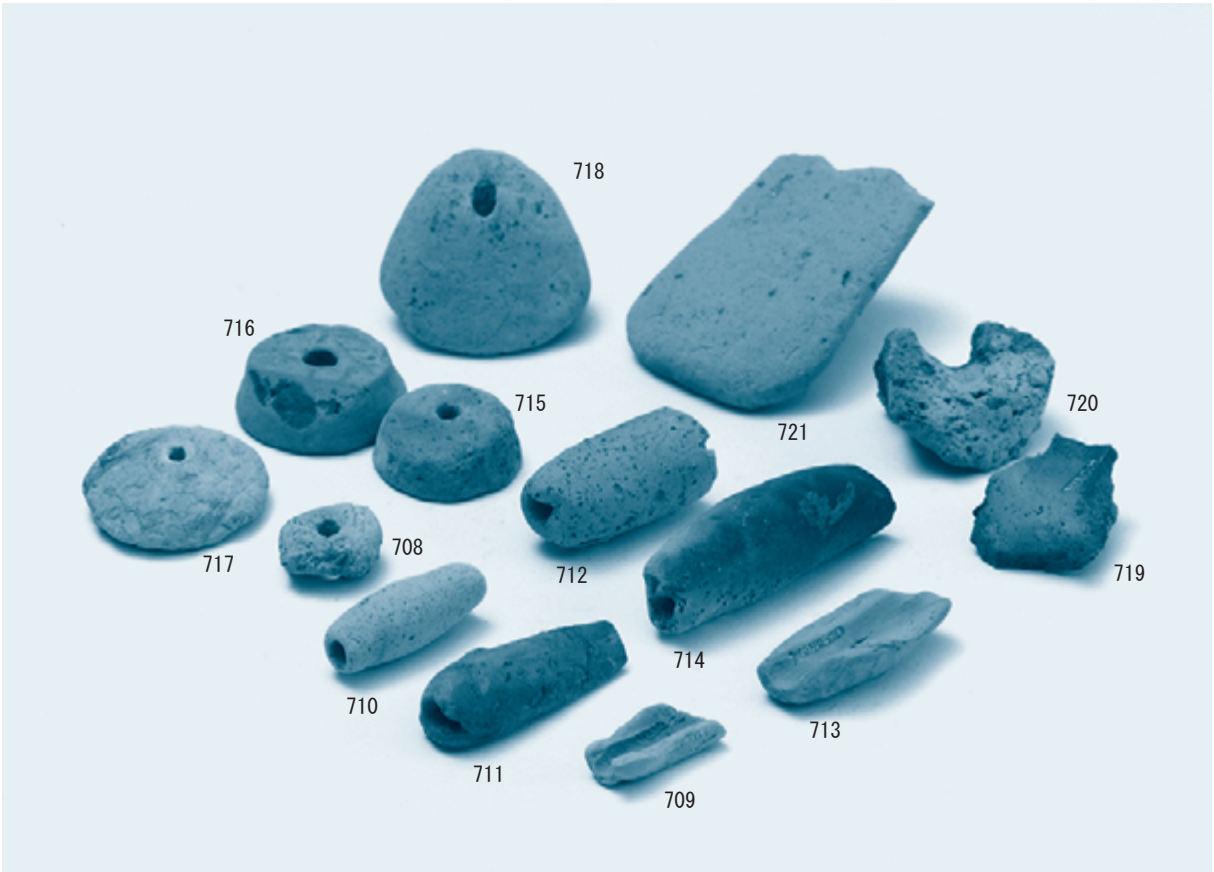
722

出土羽口・土錘・紡錘車・板状土製品・碁石

図版82



1. 出土ミニチュア土器集合



2. 出土土製品集合

報 告 書 抄 録

ふりがな	じけまえいせきさん　だいにとうめいなんばーはちじゅういちちてん　こふんじだいこうきへん
書名	寺家前遺跡Ⅲ　第二東名№.81 地点　古墳時代後期編
副書名	第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財センター調査報告
シリーズ番号	第 43 集
編著者名	中川律子　平野吾郎　福島志野　鈴木三男他
編集機関	静岡県埋蔵文化財センター
所在地	〒 422-8002　静岡県静岡市駿河区谷田 23 番 20 号　　TEL　054 － 262 － 4261（代）
発行年月日	2014 年 3 月 31 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地 市町	コード 遺跡番号		北緯	東経	発掘期間	発掘面積　㎡	発掘原因
寺家前遺跡 確認調査その１	静岡県藤枝市中ノ合 642-1 外	22214		34°　53’55”	138°　14’51”	20000612 ～ 20000929	1,006	確認調査
寺家前遺跡 確認調査その２	静岡県藤枝市中ノ合 642-1 外	22214		34°　53’55”	138°　14’51”	20030929 ～ 20040325	1,665	確認調査
寺家前遺跡 本調査Ⅰ期	静岡県藤枝市中ノ合 642-1 外	22214		34°　53’55”	138°　14’51”	20001114 ～ 20010329	21,800	記録保存調査
寺家前遺跡 本調査Ⅱ・Ⅲ期	静岡県藤枝市中ノ合 642-1 外	22214		34°　53’55”	138°　14’51”	20030926 ～ 20070331	33,255	記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
寺家前遺跡	集落	弥生時代、古墳時代、中世、近世	竪穴住居、掘立柱建物、溝、井戸、柵列、土坑、流路	弥生土器、土師器、須恵器、灰釉陶器、山茶碗、陶磁器、陶馬、土錘、瓦、転用硯、磨製石斧、砥石、石鏃、五輪塔、硯、銅釧、銅環、鉄鏃、鉄斧、銭貨、釘	
	水田	弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代、中世、近世	杭列大畔	鍬、鋤、鎌、臼、四穴田下駄、大足、建築材、杭、矢板	条里制地割をもつ水田を検出した。
	墓	中世、近世	土坑墓	かわらけ、銭貨、釘	

要約

当地の西側には市史跡である衣原古墳群が隣接し、烏帽子形山から派生する丘陵上には寺家山古墳群の存在が知られていた。また周辺には今川氏に関連する屋敷跡の存在が想定され、北西の丘陵には「花倉の乱」の舞台となった花倉城もある。調査以前から付近に集落跡が存在することが想定されていた。しかしこれまで葉梨地域では大規模な発掘調査をする機会がなく、実態は不明であった。今回の調査では、弥生時代後期後半に初めてこの地に人の手が入り、集落と水田を開発した痕跡が見つかった。集落域では竪穴住居や掘立柱建物を検出した。水田域では低地一面に続く畔が見つかり、当時の土器や石器、建築材などの木製品が大量に出土した。水脈は集落の東側に流れる葉梨川や背後の丘陵からの水流が豊富であったと考えられる。その後、集落は一端途絶え、古墳時代後期になると再び居住域となった。奈良～平安時代の遺構はごく僅かであったが、水田域では条里制地割を持つ水田と大畔が検出された。条里水田は葉梨中流域では初めての発見となった。やや時期をあけて、11 世紀末になると再び居住域となり、溝や柵列等で区画された屋敷地が 3 箇所見つかった。屋敷地群は 12 ～ 13 世紀代に最盛期であったようで、山茶碗を始めとする土器が数多く出土した。なかでも「花押」のある墨書土器は葉梨荘領主を表す可能性のあるものとして注目される。出土する陶磁器の年代から、屋敷群は 14 世紀以後も規模は縮小するものの存続していたと想定される。建武 4 年（1437）、足利尊氏が今川範国に恩賞として「葉梨の荘」を与えて以降、14 世紀半ばには当地も大きな転換期となったであろう。近世以降は、小規模な集落と墓群が存在している。

静岡県埋蔵文化財センター調査報告　第 43 集
寺家前遺跡Ⅲ
第二東名№81 地点
第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財調査報告書
藤枝市－ 7
古墳時代後期編

平成 26 年 3 月 31 日発行

編集・発行　静岡県埋蔵文化財センター
〒422-8002　静岡県静岡市駿河区谷田 23-20
TEL　054-262-4261（代）
FAX　054-262-4266
印　刷　所　松本印刷株式会社
〒421-0303　静岡県榛原郡吉田町片岡 2210
TEL　0548-32-0851（代）